

# 遥の花 咲く

朽身揺齒（くちみゆるは）

## 遥の花 一話

---

深夜の街を一人の男を背負った、裸の女が歩く。

雨が降りしきる人通りの絶えた街。

よろよろと倒れそうになりながらも歩き続ける。柔らかな部屋の中でしか歩いたことのなかった女の足は既に血だらけとなり、それでも、歯を食いしばり耐え続ける。

濡れた髪が女の顔を隠す、しかし、微かに覗くその口元には荒れる息と共に笑みがあった。

息が出来ない、心臓がどくどくする。

ああ、私は生きているんだ。

私に生命を分けてくれた人、この恩、いま返します、これが私の約束。

「この部屋か・・・」

男はマンションのとある部屋の前で立ち止まった。

表札はない、本来、このマンションは入り口で居住者の部屋番号を押し、中からドアの鍵を解除してもらわねば入ることができない。居住者だろう、暗証番号を押し入るのをそのまま続いて入ったのだ。

人の世の無関心はありがたい。

背広の下、腰に隠した小刀を服の上から押える。

なんとかなるか。

三世代、父、祖父と、長い年月をかけ、一つの仕事を成し遂げようとしてきた。

それが男の代で成し終える、男の表情にはそんな緊張感があった。

ブザーはない。軽くドアを叩いてみる。

ひとりでに、ドアが開きだした。

「どうぞ、入ってくださーい」

女の声、いや、子供の声にも思える。

廊下、贅をこらした金細工、壁、天井、床下まで、臙脂色のカーペットが敷き詰められ、時代的なシャンデリアの光りになにやらアラビア風の金文字が鈍く輝いている。

意味があるのか、それとも装飾的なものなのか。廊下の先は薄く朱を差した薄絹で隠され、その向こうは見えない。

声はその薄絹の向こうからした。

「靴はどうしたらいいのかな」

「そのまま大丈夫ですよ、どうぞ」

典型的庶民の男には、カーペットの上を土足で歩くことをためられたが、さぼど、靴底が汚れていないのを確認し、奥の部屋へ向かう。

薄絹の前へ立ち、もう一度、立ち止まった。

「いいですか」

「どうぞ、お入りください」

薄絹をたくしあげ、部屋の中に入る。二十畳は充分ある。臙脂が部屋全体を包み込み、天井にはきらびやかなシャンデリア、贅をこらしたマホガニーの調度品の中央にダブルベッドが設えられ、上半身をベッドから起こした女性が笑みを浮かべていた。

胸を掛け布で隠しているが肩の線、肌が白く見えている。

十代か、大人になりきっていない顔。

「ようこそ。桜倶楽部へ」

くすぐったそうに、笑顔を浮かべ言う。

男は戸惑ったように、ど、どうもと口の中で答えた。

「どうぞ、靴を脱いでベッドに入ってくださいな。お服は斉女（ときめ）が脱がしてあげますね」

「あ、いっ、いや、その・・・」

男はベッドの隣りにある木製の椅子を見つけると、その椅子を引き寄せた。

「おじさんね、ちょっと、そういうの、得意じゃなくてね、椅子でもいいかな」

「おじさま、なんだか、可愛い」

男は恥ずかしそうに笑うと、椅子に腰を降ろした。

「おじさまは桜倶楽部のシステムはご存じ」

「癒しの空間、そう聞いて来ただけ」

女はにっと笑顔を浮かべると、男に顔を寄せた。

「おじさまはお疲れ」

「え、あ、うん」

「そんな、おじさまを癒すのが斉女（ときめ）のお役目」

「それって」

「援助交際や愛人なんかとは違うんだよ、お金は目的じゃない」

「それはお金儲けではなく、本当に男性を癒すことが目的っていうこと」

女はその姿勢のまま頷いた。

「たくさんの疲れた人達がいる、そんな人達が少しでも心癒されればそれでいい、足つぼマッサージとかあるでしょう、私的にはそんな感じの発展形かな」

女は姿勢を戻すと、男を静かに見つめた。

男は少し戸惑いながらも椅子を少しベッドに寄せ女を見つめた。

「君をどうこうしようというのは、おじさんの道德観がどうしても許さない。それに多分、おじさんは君と話が出来れば、君みたいな素敵な娘と少し会話とでもいうのかな、そんなやり取りが出来ればとても楽しい、だから、しばらくの間、話し相手になってくれるかな」

「おじさま、良い人だね」

女は少し小首をかしげ、笑みを浮かべた。

「おじさんに、ここを紹介してくれたお爺さんは、とってもお金持ちで、とっても権力を持っていて、その二つを足しても補えない孤独な人だった。十日前に来た、お爺さんのこと、覚えてないかな」

「良く覚えている、心に一杯傷を持っていた人」

男は頷くと所在無げに両手を組み、そしてまた、手を離した。

「二日前に亡くなった。不思議な亡くなり方だった、君は・・・」

女は笑顔を浮かべたまま、涙を流していた。

「どうしてかなあ」

女が囁く。

「おじさまみたいにとても紳士な人で思いやりのある人だった、最初は恐かったけど、本当はとっても優しい人だった」

女は膝に顔を埋め泣き出した。透き通る白い背中、細いうなじ、肩が震える。男は意を決したように、手を伸ばし、少しぎこちない手つきで、女の頭をなでる。

「本当に泣いたのは君だけだろう、きっと、喜んでいるよ」

男は手を戻し、話し続けた。

「ただ、変な亡くなり方をしたんだ、おっちゃんも、直接見たわけではないけど、お手伝いさんや家族が何人も居る中でそれが起こったんだ、お爺さんが氷が溶けるようにして消えたんだ、人がまるで溶けるように」

涙の跡を残したまま、きょとんと男を見た。

「溶けるように」

「そう、話によると、氷が溶けるようにして消えてしまって、骨一つ、残らなかったらしい。おじさんは何があったのか、はっきりさせたくて、この一カ月分のお爺さんの足取りを追っている。それで、いつだったか、こういうところがあるらしい、君も行ってみるかって、桜倶楽部のことだけれど、聞かされていたのを思い出したんだ、そして、調べると、どうやら、十日前に実際にお爺さんが行ったらしいということがわかってね、今日、ここへ来たんだ」

「ここでは名前を聞かない、聞けばその人が気掛かりになって、私の心が保てません、だから、本当のことを言うと、たくさんの人達のこと、あまり覚えていない。でも、あのお爺さんはおじさまと同じように椅子に座っているいろんな話を聞かせてくれました。私はそのお話を聞いているだけで、時々、ちょっと相槌を打つだけだったんだけど、それでも、とても嬉しそうに笑ってくれていた」

女は膝に顔をうずめた。

「家の人達は大変、なんせ、消えてしまったわけだから、亡くなったことを証明できない。遺産相続にもめている、何というのかな、本当に嘆いてくれる人が一人でもいてくれたこと、友人として嬉しい」

男はそう言うと女の頭をなでる、それが男の精一杯の表現だった。

「お願い、手を握っていてくれませんか」

女が右手を差し出す、男は少し戸惑いながらも、その手を握った。柔らかい手だった。

「ごめんなさい、そうじゃないと、私、何処かに流れてしまいそうなの」

女は口をつぐみ、少し顔を上げ天井を見上げる。男は本当にそのままベッドが舟になって女が黒い海をあてどなく流れ出して行くような気がした、両手でしっかりと女の手を握る。

「自分を見失ってははいけません」

男は女の耳元へ顔を寄せ、囁いた。

「この両手はどんな闇に君が流されて行ったとしても放すことはありません、君が現世（うつしよ）に戻るための道筋となるでしょう」

女はほっと息をつくのと、男に向き直った。

「闇の中、おじさまの声、聞こえた。ありがとう」

男は少し笑顔を浮かべると手を放しかけたが、くっと女が男の左手を握り返した。

「約束です」

女はにっと笑みを浮かべた。

「おじさまは普通の人じゃない気がする」

「普通の人ですよ、零細個人自営業者 税理士です、他人のお金を計算をしています」

「本当にそれだけ」

「あとは休みの日に人探しをやっていたり」

「探偵さん」

男は顔を横に振り、少し困ったように笑った。

手を重ねたまま、男は背もたれに背中を預けると、一つ、小さく吐息をついた。

「たいして面白くもない話ですが、聴いてくれますか」

「喜んで」

「おっちゃんのおじいさんは呪い師でした、占いや行方不明の人を見つけることで生計をたてていた。特に行方不明の人を見つけることに関しては一番の得意、明治初めの頃の、価値観が急激に変わった時代、社会も大きく変化して行く。そんな時代には人がいなくなってしまうというのは特に珍しいものではなかった」

「おじさまは、映画や小説に出てくる陰陽師という人達なの」

女は不思議な笑みを浮かべた。

「やっていることは似たようなもの、全くの別系統だけどね」

「おじいさんは唯一、一人の行方不明者を除いて全ての人達を見つけだした。もちろん、それは生きて見つかった場合もあればそうでなかったこともある、ただ、とにかく三日と開けず捜し当てた。問題はその見つからなかった一人」

「唯一の汚点ということ」

「汚点というか、心残りだったんだろうね、家族にその人を返せなかったことが。それで、長男だった、おっちゃんの父親に残した遺言が、お前がその一人を見つけだしてくれということ。ただ、父親も見つけれなくてね、話がおっちゃんに回ってきたわけ。ただ、仕事もあるからね

、休みの日に探しに回っているだけだけど」

「あの」

「ん」

「明治時代からなら十分に百年以上経っていると思うけど」

「普通に考えれば既に生きているわけではないってこと」

女は男の言葉に頷いた

「普通ならね。ただ、親子三代かけて探そうというのは彼女がまだ生きているから」

「彼女、女の人」

「そう、例えば、君とか。陰陽師、辺りから少し君の気配が変わってきていた」

「私、そんな齡じゃないですよ」

女がくすぐったそうに笑う。

「祖父、父と、時代を経るごとに、この身にある呪の力は弱まってしまったけど、今のおっちゃんなら、まだ、君を救い出すことができる、どうする」

「要らぬこと」

低く軋みのような声が女の口から漏れる。

「噂には聞いたことがある。呪文を唱えぬ呪い師がいること」

掛け布に隠れた女の下半身が足の形から膨らみだし、一抱えもありそうな丸太のように膨れ上がる。

男は右手で掛布を捲り上げた。

まるで肉食動物の舌のようだ、男は声に出せず、口の中で呟いた。

ベッドはまるで分厚い肉感のある赤黒い舌に変じ、女の上半身がその中から生えていた。

「なるほど、女性を餌として、そして、自身の発声器官として利用しているわけですか」

「脂ぎった男は堅いが旨い、噛めば噛むほど味が出る、年寄りじゃぶって精気だけ吸い取り帰してやるがな」

床に壁、天井までが蠢き出した。

「なるほど、既に口の中か」

「我らの存在を知る者は、いずれ阻害要因となる、骨も残さず食ろうてやろう」

女の手が放れ、これは蛇の舌、舌先がちょろちょろ動くように女の体そのものが上へ下へと動き出す。

「しかし、まあ、現実には、こういう事態に自分自身が在るというのは驚き」

女は宙に浮いたまま男の前に顔を寄せた。

「お前の落ち着いた顔には反吐が出る」

「いけません、女の子がそんな言葉遣いをしては」

男は笑みを浮かべると、とんと女の額に人差し指で触れた。

女の顔が元の表情に戻り、自我を取り戻した。

「おじさま、ごめんなさい」

「早く逃げて、入り口へ・・・」

男は瞬間、身を伏せると、腰から短刀を抜き、女の足先をかき切った。

落ちてくる女を抱きとめる。抱きとめたまま、ドアへ向かって駆け抜ける。蠕動する壁を天井をかき切り、ドアを蹴破った。

振り返る、半開きになったドアの向こうで赤黒い肉の塊が所狭しと動いていた。

ドアが閉まっていく。女の足に絡み付いていた肉の塊も消えてしまった。

「ここを去ったということか」

男は女を抱え直すと、仰向けにし、胸に耳を当てた。

心臓の音はしない。

「ごめんなさい、私はすでに人ではありません」

女は少し疲れたように笑みを浮かべた。

「ほら、指先も」

女の指先の色が薄れていく。

まるで消えて行くようだ。

「君はこのまま消えて行くのか」

「はい。罪を償うこともなしに」

「君に罪はない」

「いいえ、あのおじいさんを始め、たくさんの人達の顔が浮かびます、たくさんの人生を狂わせてしまいました」

「君がそれを言うなら、俺の命、半分やろう。生きて、しっかり考えなさい」

いきなり、男は自分の左手小指を小刀で切り落とした。

男の顔に一瞬、苦痛が走る。しかし、すぐに笑みを浮かべると小指を女の臍の上に載せ、流れる血をその上に垂らした。

「小指は約束の指、君に生命を与えましょう。そして、おっちゃんの血と肉と元気（がんき）を受け入れなさい。生きることを選べなさい」

男の小指が女のへその上で溶け、血と共に女の体に溶け込んでいく。

女は痛みにくっと唇を噛んだ。

「熱いですか、痛いですか」

「いいえ・・・」

「これから君の体の内部で、全ての細胞が人の体の細胞に入れ替わっていきます。それは体を燃やす痛みと熱さを上回るでしょう。歯を食いしばって我慢しなさい。苦痛を乗り越え、こちら側へ帰ってきなさい。おじさんは君を待っていますよ」

情けないことに俺は意識を失い、三日間寝込んだらしい。それは元気（がんき）を減らしたせいかも知れない。

男は左手を、小指のない左手を見た。これでもかと包帯を巻き付けてある、あの娘が泣きながら

震える指先で巻いてくれていた。

指を切る、こんなに痛いものだったと初めて知った。

男は布団から立ち上がり、テーブルにつく。少しふらつくがすぐ元に戻るだろう。

「しかし、記憶までとは」

男の記憶の一部が血と共に女に入り、家への道筋を女に教えた。女は男を背負って、よろよろと家まで帰り着いたのだった。

「夜とはいえ……。そうだな、これは、逆に助けて貰ったのかも知れない」

「おとうさん、まだ寝ている方がいいよ」

女が男のシャツを着、テーブルの横に立っていた。心配そうに男の顔をのぞき込む。

一緒に暮らすなら、年齢的にも父娘でいいでしょうと、男が提案したのだった。

「もう大丈夫ですよ、少し動くくらいの方がいい。それに」

「え」

男は笑みを浮かべた。

「服を買いに行こう、その服装はさすがにね、ちょっと、あれだ」

女も笑みを浮かべた。

「ありがとう、おとうさん」



異形二話

「うわぁっ、お父さん、お父さん、お父さん」

女の悲鳴に男が駆けつけた。男の税理士事務所兼自宅の一室での出来事だった。

女はぶるぶると震え、部屋の片隅にうずくまっていた。

「大丈夫、もう大丈夫」

男は女を抱き締めた。

「お父さん、お父さん、お父さん、どこ」

「ここにいる、ここにいるよ」

女の荒い息が少しずつ収まり、震えが止まる。泣き濡れた眼差しで男を見上げた。

「ごめんなさい、また、私、おかしくなってしまうって・・・」

「大丈夫、安心しなさい」

あれから、一カ月が経った。記憶の一部が流れ込んだせいもあるだろう、日常生活に当たり前のように対応する、いや、仕事まで手伝うことができるのだから、それは驚くほどだ。しかし、これで三度目だろうか、急に叫びだし、うずくまる。

百年以上の心の傷が、一カ月やそこらで癒えるはずはない、いや、完全に無くなることはないかもしれない、日曜日の朝に限ってこうなるのは、平日の人の出入りの慌ただしさに必死に自分を抑え込んで耐えているのかもしれない。

男は床に座ると女に笑い掛けた。

「ここは君の家です。ほら、ここからでいい、窓の外を眺めてごらん。秋、今日は少し暖かな小春日和。窓を開ければ、梢を通り抜けた穏やかな風が流れ込んでくる。これは、今までも、今も、これから先も、君のもの。ゆっくりと受け入れていきなさい、これを自分自身の宝物と認めていきなさい」

「お父さん、私なんかが、そんなに幸せになってもいいのかな」

「君は幸せになっていいんだ、そして、君が幸せになることが父さんの一番嬉しいことなんだからね」

男は女を仰向けにだきかかえ立ち上がった。女がぎゅっと男の首にしがみつく。

「お父さんと一緒にいると嬉しい」

「それは光栄なこと」

男はそのまま、窓により、外を見る、青い空、秋の遠い空だ。

「窓を開けてごらん」

女が、そっと手を伸ばし、窓を開ける。途端、やわらかな風が流れ込んできた。

「今日は暖かそうだね」

女がすううっと息を吸い込んだ。そして、ゆっくりと吐く。

「少し甘い」

「これは老梅の香りだな。時ずらしの結界の所為で少し花の時期が狂ってしまうんだ」

男は少し笑うと、抱きかかえたまま、台所へ。女をテーブルにつかせると、冷蔵庫から牛乳を取り出した。

「マグカップ、二つ、戸棚から出してくれます」

「う、うん」

女が立ち上がり戸棚を開けている間に、小さな片手鍋を男は取り出した。

「これに牛乳、マグカップ二杯分とちょっとを入れて、火に掛けてくれる」

「わかった」

女がいそいそと小鍋に牛乳を入れ火に掛ける間に、男は紅茶の缶と砂糖とシナモンを取り出した。

テーブルに二人つき、チャイを飲む。日曜の朝一番、ほっと一息。

女は両手でマグカップを持ち、少し啜る。

「お父さん、こんな私のこと、嫌いにならない」

「ん、そんなことない、好きですよ」

「私もお父さんのこと大好き」

女はにっと笑顔を浮かべると、少し恥ずかしげに俯いた。

男はこういう状況になるとは想像していなかったが、生命を分けたあの瞬間、自分はこの子を守り続ける責任が生じたのかもしれないと考えた。これは親という者の気持ちに近いのかもしれない。長く一人で生きて来たこともあり、戸惑うこともあるが、確かに楽しい。しかしと男は考えた。

自分が何かで死んだ時、この子は一人で生きて行かねばならない。金銭的に困らせるようなことはしない、ただ、ああいった魔物は大勢いる、いつかは自分自身で対処して行く必要があるだろう。

「今日は出掛けましょう」

「うん、何処へ」

「今までのこと、お墓へ報告に。それで、ひとつ、けじめをつけましょう。それから、君に武術と呪術を教えていきましょう」

「武術と呪術」

女は表情を引き締めた、男の思いが伝わったのだろう。

「今度は私がお父さんを守りたい」

男は少し笑うと、女の頭をなでる。

「良い子に育ちました」

山の中程にある集落、その外れにある墓地、最初に出かけた墓は、女の両親や先祖の眠る墓だ

った、女は桶に入れた水を柄杓に取り、墓石に流しかける。そして小さなタワシで洗い始めた。山の斜面に作られたこの墓地は、今の時間、ちょうど日差しが差して暖かい。見下ろせば遠くに町が見える。

明治の頃なら、本当にここは山奥の村だったのだろう。ここで君はどんな風景を見ていたんだ、そう心の中で問うてみる。それはなんて、罪な問いかけだろうか。

「足りるかな、水を汲んで来ましょうか」

「ううん、大丈夫」

女は振り返り、笑顔を浮かべた。

「それに一人になるのが怖い」

「そうだね」

掃除を済ませると、女は黙ったまま手を合わせる。

どれほどの思いが込められているのだろう、身じろぎひとつせず、両手を合わせている。

男も女の後ろで手を合わせた。

「お父さん」

女が振り向く。

「どうしました」

「教えて欲しいことがある」

「どんなこと」

「本当のことという、私、何も思い出せない、誰も思い出せない。なんて、私、酷い奴なんだろう」

「君は」

「両親のことも兄妹のことも友達のこと何も思い出せないよ・・・」

女の手が震えていた。ぎゅっと唇をかみしめ涙の流れるのを抑え込もうと俯く。

男は女を抱き締めた。

「君が悪いわけじゃない、辛くて、哀しいことだけれど、それは決して君が悪いことではない。自分を責めないで」

男は女を座らせると、その横に座る、墓を背にし、青い空の下、遠く町並みが見える。

「思い出せないのは君の中で君自身が思い出させないようにしているからだろう」

「どうして」

「心が壊れてしまわないため」

男は女の手をしっかりと握った。

「その時のこと、両親のこと、思い出せば君は正気を保てない」

「どうしてそう言い切れるの」

「それは父さんがその情景を見て、経験して苦しんだから」

「え・・・」

「あのとき、君の中に父さんの記憶が少し流れ込んだらう」

「うん」

「あれは予想外のことだったけど、血の継承で記憶をね、引き継ぐことができる。祖父が自分の代では君を見つけることができないと観念した時、父にね、君に関する記憶すべてを継承させた、そして、父さんはさ、父からその記憶を継承した、それはまさしく、自分自身が体験するようなものだった」

「お願い、教えて欲しい」

「今は無理、教えられない、君が一人の人間として自立できるようになるまで待つて欲しい」

「お父さん、泣いているの」

男は唇をかみしめ、その眼から涙が流れだしていた。

「まさか、この齢になって泣いてしまうとはね、情けないな」

「ごめんなさい。私、自分のことばかり」

女は呟くと、努めて笑顔を浮かべた。

「私にはこうしてさ、大事なお父さんがいてくれるから、もうそれ以上は何もいらぬよ」

男はそっと女を抱き締めた。

君は真実を知った時、本当に正気を保つことができるだろうか、もう一度、笑顔でこの地にやって来ることができるだろうか。

それから、二人は男の父親と祖父の眠る墓へと向かう。男はようやく女を見つけたこと、そして、彼女を娘にしたことを伝えるつもりだった。

二つの墓を回り、その帰り、街のオープンテラスのレストランで早目の昼食をとる。たくさんの行き交う人達、賑やかなひとときだ。

「お父さん、あのね」

「どうしました」

「私の名前だけど」

あ、と男は気づいた。男はいつも、女を「君」と呼んでいた。何やら、気恥ずかしく、どうしても、「君」と呼んでしまっているのだった。

「お父さん、私に名前を付けてほしい」

「名前を」

「私はまだ情けないくらい不安定だ。お父さんという今も、こうしている今も、ひょっとして夢なんじゃないか、私はまだあそこにて・・・、そう思うと胸の奥がきゅっと痛くなる、そして、息が出来なくなる」

「そうか・・・、気づいてやれずにごめんね」

「違う、違うよ。お父さんは悪くない、私が私が・・・。ごめんなさい」

「今日一日、ごめんなさいは禁止。いい」

「うん」

男は笑顔を浮かべると、一口、珈琲を飲む。

名前を付けるのは難しい、特に呪術の世界に片足突っ込んでいる人間にとって、名前を付ける、

名前を告げるは危険と隣り合わせだ。しかし、名前を付けること、それは存在する証しともなり得るものだ。彼女には今、彼女自身が安寧でいるためにも名前を必要としているのかもしれない。

「わかりました。二つの名前をあげましょう」

「二つの」

「そう、一つは本当の名前、もう一つは普段の名前。こっちにおいて」

女は立ち上がると男の前に立った。男は椅子に座ったまま、女を見上げる。

「両手をこちらに」

男も両手を出すと、女の手首をしっかりと握った。

「少しかがんで、額を出して」

男は女の額に自分の額を重ねた。

「私達の技は呪を唱えません。ただ、強く意念を用いるのみ」

男が息を吐く、瞬間、女の体が吹き飛ばされるように浮かんだ。男が手を握っていなければ女は確実に飛ばされていただろう。

「いま、君の心の奥底に本当の名前を刻印した、わかるかな」

「うん、わかる、不思議な名前、名前そのものがなにか力を持っているような気がする」

「もちろん、持っていますよ。ただ、この名前は口にははいけません、これは絶対の約束、いいかな」

「約束する」

男は手を放し、ほっとしたように女に笑い掛けた。

「さてと。何か希望はあるかな、普段の名前」

「お父さんの付けてくれる名前が私の希望の名前だよ」

「ええっと、それは責任重大だ。うーん」

男は女を見上げ、呟くように言った。

「一番の願いは君が幸せであること、今様のかっこいい名前もいいのかしれないけれど、名前に、幸せであれと、この願いを託したい」

「お父さん」

「幸福の幸の字をいただいて幸子、ゆきこ。でいいかな。さちこって呼ぶとなんだか演歌の人みたいだし」

女が男に抱き着く。男の両手が戸惑ったように空を掴んだ。

「ありがとう、お父さん」

女は男の耳に口を寄せ囁いた。

「名前を付けてもらったこと、これでね、今日は、私が生まれた日になったんだと思う」

「そういう考え方も楽しいね」

「うん」

女は体をずらすと、自然なそぶりで男に口づけをした。

そして、口づけをしたまま、男をしっかりと抱き締めた。男はいきなりすることに戸惑いを隠せず

にいたが、観念したように、目を閉じた。

「お父さんの唇、少し苦かった、珈琲、ブラック。私の唇はどんな味がした」

「甘い・・・」

「それはショートケーキだ、苺の」

女がくすぐったそうに笑った。

少々というか、いや、多々、回りの視線が突き刺さる。

女は男の横に椅子を据え、隣りに座った。

「私、お父さんと同じ時代に生きている、そして、同じ方向を見ている、それがとても嬉しい」

「そうだね、そう思うと普段の風景も違うように見えて来る」

「ね、お昼から用事あるの」

「特にはないよ」

「それじゃ、夕方まで、散歩しよう。同じものを見て回ろう」

「そういうのも面白いかもしれないね。財布渡すから、レジで会計してくれる、ちょっとね、レジへ行く勇気ない」

「なんだか、私、お父さんに頼まれたら元気百倍、なんでもできそうな気がする」

女は男の財布を受け取ってレジへ向かった。

ここがオープン・テラスで良かった、男は一人呟くと立ち上がった。世間体を気にするほどではないが、とってあまり人前で、いや、人前でなくても父娘では。

「お父さん、おいしそうなサンドイッチがあったからテイクアウト、お腹が減ったら一緒に公園で食べよう」

ふっと女は真顔になり男の目を見つめた。

「私はお父さんにとって必要な存在になれるかな」

男はそっと囁いた。

「自分を認めてくれる人の存在はとても大切。それは生きる理由と同義だ。幸が父さんをそう認めてくれているのはとても嬉しいし、父さんが生きている理由でもある。ありがとう」

女は男の胸に顔を埋め、静かに、静かに泣きだした。

「もっと肩の力を抜いていいよ。そして泣きなさい」

男は不思議に感じた。会って一カ月、それなのに、まるでこの子が生まれた時からずっと一緒に暮らして来たように思えてくる。

そして、そんな気持ちを正直に受け入れてしまおうと自然に思うことができる。

小指は約束の証。一生に一度だけの約束。

男はもう一度囁いた。

「ありがとう」

異形三話

「お父さん、もう寝た」

そっと呟く。

枕を抱え、幸はそうると、男の部屋の襖を開けた。もう一緒の部屋に寝るのは卒業しなさいと男は幸に隣りの部屋をあてがったのだった。

男は心配していた。幸は既に呪術についても、武術についても男の能力を超えていた。

男はそれを素直に喜んだのだが、一つの問題が残ったのだ。幸は変わらず、極度に父親への依存を残していた。慕ってくれる娘はとても可愛い、だが、考えるのは、あの魔物は幸を拘束し、自らの道具として扱った。自分自身はどうなのだ、幸を独立し自我を確立させた一人の人間として育てるべきではないか。今のままでは、俺はあの魔物と対して変わらぬ扱いを幸に為しているのではないか。

幸は男の布団に忍び寄ると、男の顔をそっとのぞき込んだ。さらさらと流れる髪を男の顔にかからぬようたくしあげる。

「お父さんが私のこと、しっかり一人でも生きて行くことができるようにと思ってくれているのはとっても嬉しい。でも、私、お父さんのこと、大好きなもの、いつも、一緒にいたいんだもの」

女は寝間着を脱ぐと、下着も外し、男の布団にもぐりこんだ。男の左に横になり、両腕で男の左腕でを抱き抱えた。

「私はお父さんの左手の小指だよ、だから、ここが一番、私だけの場所なんだ」

朝方、男はいつもより早くに目覚めた。窓のカーテンを閉めたつもりだったが開いている、部屋の明るさに目覚めたようだ。男は上半身を布団から起こすと、時計を見る。もう一寝入りするか、いや、それとも朝刊でも。

ああ、左腕だ。いつ頃からだろうか、どうも朝、起きると左腕が重い。まさか、これが四十とか五十とかの名が付く肩こり。年齢を単に数として数えなきゃならないのは仕方がない、しかし、体の状態としてそれが現れるのは厳しい。

「お父さん、お父さん、朝だよ」

幸はばんっと襖を開けると、男の太ももの上にどんっと乗った。

「おはよう、お父さん」

幸は男の両肩に手をやり、男に口づけをする。そして、幸の両腕に力が入った。

男は瞬間、数センチ、下に擦り抜け、位置を替えると、幸の両太ももから体を抜き出し、跳ね起

きた。

「朝から、運動させないように」

「ちょっとした、お目覚めのキスだよ」

「舌を入れるな」

「これは流れていうか、勢いみたいものだね」

えへへと幸は笑うと、ぱんぱんと布団を叩く。

「もう一度、ここ座って。お願い」

男は呆れたように、ひとつ、溜息をつく、幸の前に座った。

「はい、チラシです。今日のカニ食いまくり一泊バスツアー、ついでに、ちょっとした観光もありますが、目的はカニです。カニ様ですっ」

「ええっと、今日は土曜日お仕事です、平日です」

「仕事は昨日のうちにすべて済ましておきました、月曜日、書類をそのまま鞆に入れてクライアントに持って行くことができます」

「どうして・・・」

「忘れたの、今日はお父さんの誕生日だよ。お祝いのカニ旅行さ」

そう言えばと、男は幸に誕生日を問われたことを思い出した。男は自分の誕生日を知らない、だから、あの日を誕生日代わりに答えていた。それで、印象が薄かったのだろう。

「覚えていてくれたのか」

「忘れるわけないもの」

男はそっと右手で幸の頬を触れた。

「ありがとう、幸」

「・・・お父さん」

幸が微かに俯き、そして、瞳を閉ざしたまま、少し、顔を上げる。

「ありがとね」

男は立ち上がると押し入れを開けた。

「布団をしまわなきゃ」

「もおっ、お父さん。言葉だけじゃだめ」

「お父さんは恥ずかしがり屋さんです、ていう以前に父娘でござんす。でも」

「え・・・」

「幸の表情や言葉、とても豊かになったね。それがとても嬉しい」

「あ、ありがと・・・、私が片付けるよ。お父さん、顔洗って来て」

観光を終え、やっとホテルの部屋にたどり着いた。

「ええっ、一緒じゃないんですか」

「はあ、男湯は十一階、女湯は地下一階となっております」

幸は仲居の言葉に、そのまま宿のテーブルにうつ伏せた。



「お嬢様、大丈夫ですよ」

「え」

「お時間で男湯と女湯を交替致します、ですから両方の御風呂をお楽しみいただけますよ」

「そうじゃなくて、あっ、それじゃ、この家族風呂はどうですか」

「こちらはご予約制でございます、フロントにてお承りいたしますが、ただ、ご家族の場合でもお子様は小学生までとさせていただきます」

「え、あっ、私、妻です。ねえ、あなた、そうですね。せっかくだし、一緒にお風呂入りましょうよ。背中、流してあげるわよ」

「娘が何か申してますけど、また、分からないことがありましたら、フロントに問い合わせしますので」

「そ、それでは」

そそくさと、ホテルの仲居が部屋を出て行った。

「ええっ、どうして。テレビの旅番組、混浴だったよ」

「そういうのは珍しい、普通は別々」

「そうだったんだ」

幸が溜息をつく。男はおかしくて笑った。

「幸、必死だった」

「だって」

男は湯飲みにお茶を入れると、幸に差し出した。

「だってさ」

男は少し笑うと、自分の湯飲みにお茶を注ぐ。

「幸はこんなおっさんを大切に思ってくれる、それは嬉しい」

「こんなじゃないもの、お父さん、世界で一番かっこいいよ」

「それは極々少数意見だな、多分、幸くらいだろう、そう思ってくれるのは。ありがとう」

「さて」

男は立ち上がるとホテルのタオルを取り出した。

「夕食まで御風呂入ってくるよ。幸もせっかくだ、御風呂に入って来なさい」

「ううっ、うーん」

「さあ、立って準備して」

「お父さん」

「ん」

「浮気しちゃだめだよ、絶対」

「男湯で浮気は困難だ。それに、父さん、幸のこと、大好きだから、浮気はしないよ」

ガラス戸を開ける、幸はこんな広い大浴場に入るのは初めてだった。

掛け湯をして入る、そして、タオルは頭の上、タオルで髪をまとめてみる。

うん、これで御風呂の作法は良いはずだ。

見渡してみる、大浴場、ドアの向こうは岩風呂らしいけれど、そこまで行くのは、なんだか恥ずかしい。

ここにいるのは十人くらいかなと何気なしに数えてみる。

小さな女の子が、母親にだろう、頭を洗ってもらっている、でも、あまり女の子は得意ではないようだ、ちょっと痛そうな顔をしている。

女の子は幸が自分を見ているのに気づき、にっと笑う。幸も少し手を振り、笑い返した。

ゆっくりと母親が女の子の頭からお湯を掛ける。

幸はなんて幸せな情景なのだろうと思った。

「子供か……。いいな、こういうの」

とにかく、と幸は考えた。

父娘というのは便宜上のものというか、見た目がそうだからってだけだ。幼な妻なんて言葉もある。お父さんは、とっても奥手なわけで、生真面目なわけで、私がしっかり誘導してあげれば、きっとお父さんだって。

「幸、本当にいいのかい」

「うん、だって私……。お父さんのこと、愛しているもの」

「うわあ、愛している。きゃー」

幸は妄想が声に出ているのに気づき、あたふた、お湯の中へ潜り込んでしまった。

恥ずかしい、誰かに聞かれたらどうか、少し顔を出し辺りを眺めたがこちらを見ている人はいなかった。

そうだ、とにかく、夕食はビールを注いで、ほろ酔い気分になせよう。

もう、しょうがないなあ、飲み過ぎだよお、私が肩貸してあげるよ

えっと、そうすると私がお父さんの左側にこう立つわけだから、そうだ、ちょっとよろけて、すぐにたち直すんだけど、その時、お父さんの左手が私の胸に触れて、私が小さく、「あっ」って叫んで、そうしたら、お父さんがごめんて言うから、ううん、お父さんなら、いいの、だって、私……。って言いながら、少し顔を赤らめて見上げる。

よし、今日はしっかり体を洗って、私、頑張る。

湯船から幸が立ち上がった瞬間、幸は手を伸ばし、何か黒いものを掴んでいた。

すうっと鋭い目付きでそれを見る。それは小さな鼠だった。

なんでこんなところにいるんだ。

顔を寄せ、じっくりと鼠を見つめる。

この鼠、人の眼をしている、なんなんだ、これは。そうか、術者だ、術者が心をこいつに入れて偵察しているんだ。

幸はふっと鼠に息を吹きかけた。

「あんた、この鼠が死ぬまで、その中で鼠として暮らしたな」

幸は鋭いまなざしのまま笑うと、鼠を軽く放り投げた、着地する前に鼠は消えてしまった。

でも、と幸は考えた。

どうしてこんなのがいるんだ、術者なんて数も少ないし、それが偵察をして何かをしようとして

いる。

まさか、お父さんを。そうだ、お父さん言っていた、呪文を唱えないこうした呪法は外法とさげすまされ忌み嫌われている、だから、普段は術者としての気配は消しておきなさいって。

まさか、お父さんが危ない。ううん、大丈夫だ、お父さん、強いもの。どんな奴が束になって襲ってきても、お父さんならふふんって鼻歌唄いながら、けちらしてしまうもの。

でも・・・、お父さん、左腕がおかしいって言ってた、あれ、私のせいだ。毎晩、私が抱いていたせいだ。もしも、お父さんが怪我をしたら、私のせいだ。ごめんなさい、ごめんなさい、お父さん。

お父さん、今、助けに行く。

幸の右手に刀が現れた、長物、ゆうに2メートルはある。

それを軽々と片手に持つ。

幸は体の後ろに刀を隠すよう構えると、入り口の扉を睨みつけた。弾かれたように扉が開く。

大丈夫だよ、お父さん。いま、行く。

「お風呂直すかなあ」

男はつぶやき、悠々と足を伸ばす。なんといっても、足を伸ばしきれるのがいい。

思い切って、お風呂を大きく直そうか、しかし、財布の紐をしっかりと幸に握られているいま、贅沢だと叱られるかもしれないな、まっ、こういうのも、たまにだからいいのかもしれない。

・・・お父さん・・・

幸の声がしたような気がした、その瞬間、ばんっと扉が開き、怒涛の風が流れ込んだ、湯が洪水のように弾け飛ぶ。

「お父さん、大丈夫」

「ああ、1秒前まではね」

男は回りを見渡す。桶が散乱しているのはもちろんのこと、辺りは水浸し、5人、倒れている、一人足りないな、逃げたか。

「みんな、意識を失っているだけだ、お父さんは大丈夫だよ」

幸はこの惨状に初めて気づき狼狽えた。

「お父さん、これ、どうしよう」

「まずは刀を消してくれる」

「は、はい」

かき消すように刀が消えた。

「何があったか、訊くのは後回しだな。脱衣所、入り口一番近くのかご、十一番が父さんの使っていたかごだから、浴衣と帯をして、女湯に戻りなさいな。その間、誰にも会わないよう、誘導してあげるよ」

「ごめんなさい、お父さん。後で浴衣と帯を返すからね」

「それ、早く行け」

「はいっ」

幸が男湯を飛び出した。

男は目を瞑り、小さく小さく呟く。

「立派なモノをお持ちですな、羨ましい」

男が薄目を開ける、太った老人が男の前にいた。一人、足りないと言った男が判断した老人だった、まるで、大きな酒樽のような姿だ。

男は、かまわず、そのままの表情で呟き続ける、やがて、幸が女湯に辿り着いたのだろう。男は老人の目を睨め付けた。

「申しわけありませんが、下（しも）のお話は得意ではありませんので」

「いやいや、先ほどの人形（ひとがた）、護法童子のことです。あれほどのモノを作られるとは名のある術師とお見受けいたしました」

「あれは私の娘です。娘をモノに喩えられるのは不快です。次は命がありませんよ、後ろの方にも、そのようによろしくお伝えくださいな」

「何もかもお見通しのようで、あな恐ろしい」

老人は奇妙な笑い方をするとそのまま立ち去った。

まずは、気絶した人達を起こすか・・・。

「ああ、もう最悪だよお」

テーブル式の宴会場、幸にとっては今回の最大の目的、カニ食べ放題の会場だった。

テーブル、幸は男の前の椅子に座り、皿一杯のカニを前にしても、ぶつぶつと繰り返す言葉を呟いていた。

「ごめんね、お父さん。変なツアーになってしまって」

「ん・・・、父さんは嬉しいけどね、だって、幸が計画してくれた旅行だからさ。どうしたら、父さんが喜ぶか、考えてくれたんだろう」

「うん、そうだけど」

「なら、こんな嬉しいことはないよ。良い娘を持ちました、たまに暴走するけどね」

「だって、あれは・・・」

「鼠を使う奴らは、そうだな、たまにはいる。確かに何かあるかもしれない。とにかく、判断材料が少ない今、考えても仕方がない。なら、喰いましょう、カニ様を」

「私、食欲ないよ」

「ん、幸はカニは初めてだったかな」

男は器用に蟹の身を取ると幸のお皿に載せた。

「まずは、ささっ、喰うてみなさい」

「いいけど・・・」

渋々といったふうに幸は自分の口に蟹の身を運ぶ、そっと食べる。

「うわっ、美味しい。ええっ、どうして」

「それはカニさまだからです」

男は笑って、次々と蟹の身を取り出すと幸のお皿に載せていった。

「お父さんも、お父さんも食べて」

「こういうところで食べるカニは、スーパーとは違うな」

「お父さん、私、機嫌直った」

「それは良かった。カニ鍋に焼きカニ、豪勢なものだな」

「幸、その小さな七輪、網にカニの足を載せなさいな」

「うん、わっ、香ばしい匂いだ」

「御同席お願いできませんかな」

男の前、幸の後に風呂場での老人とその妻だろうか、品の良い女性が立っていた。

「他に席がないのでしたら、どうぞと申し上げますが、まだ、いくつも空いたテーブルがあります、そちらにお願いできませんか。親子団欒の最中ですので」

「もう、あなたったら。失礼ですわよ」

後の婦人に促され、二人は一つ置いたテーブルについた。

「お父さん」

幸は声をひそめ、男に話しかけた。

「背中が冷たかった」

「そうだろうな、あれ、空洞だからな」

「どういうこと」

「うーん、幸は間違いなく、お父さんよりも呪術も武術も上回ったけど、経験はもう少しだな。世の中、遍くいろんな存在がある。でも、あとでね、カニを食べなきゃ」

ふと、幸はビールのことを思い出した。

「ね、ね、お父さん、たまにはビールとか、た、頼んだらどうかな。折角の旅行なんだし」

「どうしたの、いきなり。父さん、あまり、アルコールとか得意じゃないし」

「だだ、大丈夫だよ。少しくらい」

「なら、一本だけもらおうかな」

「それじゃ、私、もらってくる」

幸は立ち上がると、ウェイターに声を掛けに行った。

男は、一つ吐息をもらすと、辺りを見渡した。いくつか、そう、いくつかの人外ものがある、密度が濃すぎる。これは縁というものなのか、しかし、幸には、こんなのじゃなくて、本当に普通の、何処にでもあるような平凡な生活を送らせてやりたい。あの子はもっと幸せになるべきだ。

呪術を教えたことは間違いだったか、いや、特別な力がなければ、自身を守ることは出来ない、なんてことだろうな、矛盾した話だ。一度、足を踏み込んでしまうと、もう、抜け出せないのだろうか。

「お、お父さん、どうぞ」

幸は男の横に立ち、ビール瓶を差し出した。

「それじゃ、ちょっとだけ。半分、注いでくれればいいよ」

「は、はい」

「どうしたの、妙に緊張している」

「そ、そうかなあ」

男は幸にビールを注いでもらおうと、美味しそうに一口飲んだ。

「幸も、さあ、食べなさい、残したらもったいない」

「そうだよ、もととらなきゃ」

「太り過ぎない程度にどうぞ」

「私は太らないよ、だって、お父さん、細身の女性が好きなんだもの」

「別にそういうわけでもないのだけど」

「ね、横に座ってもいいかな」

「どうぞ」

幸は男の横に座り、今度はカニ雑炊を食べ始めたが、ふと向こうのテーブルに気づいた。

「お父さん、あの女の子だ」

それは、幸が風呂場で手を振った女の子だった。

「バスは3台出ていたから他のバスに乗っていたんだらうな」

「お父さん、なんだか、おかしい。女の子、じっと座っているだけだ」

男は女の子の両親だろう、お互い視線を虚ろにしたままカニを食べている夫婦の姿に疑念を抱いた、どこかに操る奴がいる。

「おせっかいしますか」

「うん、気になる、何か悪いことが起こりそうな気がする」

男は自分の髪の毛を一本抜くと、女の子に向けてふっと吹き飛ばした。瞬間、幸の姿が薄くなったかと思うと、女の子を自分の膝に乗せていた。そして、女の子は変わらず向こうのテーブルにもいた。

「髪の毛、一本だけど如才なく対応するでしょう」

男は呟くと、女の子を見つめた。

「ちょっとだけ時間いいかな、カニ、お姉ちゃんが一緒に食べようって」

女の子は驚いたふうに見張っていた、一瞬にして、知らない女性の膝に自分が座っているのだ。しかし、幸の自分を見つめるまなざしに、不思議なほどの安堵感を覚えた。

「だめなの、あたし、水しか飲んじゃいけないの」

「それは、おっちゃんもお姉ちゃんもとっても哀しい」

「お母さんにそう言われたのかな」

幸は、そっと女の子に頬を寄せ語りかけた。

「今日は神様になる日だから」

「神様って・・・」

男は笑顔でそっと囁いた。

「そっか、でもね、お腹減ってたら、動けないし、哀しいし、そんな君を見たら、お母さんも哀しいかもしれない」

「お母さんが」

「そうだよ。ね、君の名前は」

幸が言葉を継ぐ。

「あかね」

「あかねちゃん、良い名前だね。お姉ちゃんは幸っていうの」

「幸お姉ちゃん」

「うん、そうだよ。今晚、あかねちゃんはとっても困ったり、哀しかったり、怖かったりするかもしれない。その時は幸お姉ちゃんの名前呼んでくれる」

「うん」

「お姉ちゃんは、ほんとはとっても凄い魔法使いなんだ。だから、呼んでくれたらすぐに助けに行くからね」

初めてその女の子は笑顔を浮かべた。いったい、どれほどの苦悩をその身に隠していたのだろう。

「ね、カニを食べよう」

「ううん、我慢する」

「そっか。それじゃ、お守りをあげよう」

幸は髪を一本抜くと、女の子の手首に括った。すぐに髪は手首の中に消えてしまった。

「幸お姉ちゃん」

「ん・・・」

「また、お母さんやお父さん、笑ってくれるかな」

「大丈夫だよ」

女の子が笑顔を浮かべた。

幸の姿が一瞬消え、再び現した時、膝に女の子の姿は見え、一本の髪の毛だけを持っていた。

「幸、人はどうして学習しないんだろうな、また、愚かなことを繰り返そうとしている」

「お父さん、神様って」

「言葉どおりのことだよ、外神という異なる次元に住む神、邪悪な力の集合体だ」

「世代が代わり、不安定な時代が来ると、決まってあんなのにすがるという奴らが現れる」

食事の後、二人はお土産コーナーを覗く、ある意味、どこにでもあるまんじゅうだとか、ちょっとした特産品が並ぶ。

「お父さん、羊羹の詰め合わせがあるよ、おいしそう、買っていいかな」

「そうだね」

男は少し沈んだように答えた。幸は、心配げに男の顔を見つめていたが、男の腕にしがみつくようにして、見上げた。

「部屋に戻ろう、ね、お父さん」

部屋に戻ると男は椅子に腰掛け、窓から夜の海を眺める、十階からの眺望だ、眼下には温泉街、車のヘッドライトだろうか、賑やかに明滅している。

そんな男を気にして、幸はぼおっとテレビのニュースをつけたまま、俯いている。

男はひとつ吐息を漏らすと、ゆっくりと立ち上がった。

「テレビ、消してくれる」

「う、うん」

幸がテレビを消すと、男は入り口の横にある室内灯のスイッチを消した。

外からの明かりが辛うじて二人の姿を映す。

男が部屋の中央に座る、幸は自然と男の前に座った。

「あまり顔が見えないね」

「うん、うっすらとお父さんの顔が見えるだけ」

「父さんも幸の顔、はっきりと見えないな。でも、この方が話しやすい」

闇の中、男は見えない笑顔を浮かべた。

「幸、父さんは新米だ。何十年もお父さんをやっているわけじゃない。でも、幸のこと、一番大事に思っている、それだけは自信ある」

「ありがとう、お父さん、私もお父さんのこと、一番大事だよ」

「ありがとう。ただ、父さんはわからないんだ、幸には幸せになってほしい、でも、父さんは幸せというものが分からない。平凡に生きて欲しい、普通の、どこにでもいる女の子のように生きて欲しいと思うこともある。いや、それが一番いいんだと信じたい。でも、父さんは術師であり、その血と肉と骨を幸に与えて、幸まで、父さんと同じ世界に引き入れてしまった」

「違うよ、お父さん。私は普通の女の子じゃなかった、お父さんに会うまでからさ。だから、心を入れ替えました、これから普通に生きて行きますなんてなるわけないよ」

幸はそっと笑顔を浮かべ、男に囁いた。

「ね、お父さん、本当は私、とても悪い人間なんだ、心も体も汚れていて、人の命くらい平気で奪うことができるんだ。でも、お父さんといると、お父さんのこと考えていると、良い娘になりたい、優しくて思いやりのある、そんな、お父さんに好かれる娘になりたい、そう思えるんだ」

「ね、お父さん、お願いだよ。幸を良い娘のままいさせてよ、お父さん」

男は黙って幸を抱き締めた。

「愛している、お父さん」

「お父さんも幸を愛しているよ」

「お父さん、私の浴衣の帯を解いて。もっと、お父さんの近くに行きたい」

男は黙って幸の帯を解く、そして、幸の両肩に手を触れ、ゆっくりと浴衣を脱がした。

「お父さん、恥ずかしいよ」

そっと俯く。

「恥ずかしくなんかないよ、幸はとっても綺麗だ」

「・・・お父さん」



男はそっと幸の胸の膨らみに触れた。

「とってもやわらかい」

「なんだか恥ずかしいけど、嬉しい」

一瞬、幸の体が硬直した。

「うわあああっ、お父さん、体中が痛いよ、体がちぎれてしまいそうだよ」

闇の中、男は素早く幸を仰向けに寝かせ付け、幸の体に両手をかざした。

「幸、目を瞑ってなさい」

幸がぎゅっと唇を噛み、目を瞑る。

男の両手が薄青く光り出し、幸の体を照らし出した。

体中が乾いた土塊のようにひび割れだし、そのひび割れから血が滲みだしていた。少し押せばもろく崩れてしまいそうだ。

男はぐっとにらみつけると無言のまま、両掌を天へとかざし、手を下ろすと右手を幸の臍に置き、左手をその上に重ね、強く息を吐いた。

幸の体に清水が染み渡るように拡がり、ひび割れは消え、柔らかな体に戻る。

「目を開けてごらん、まだ、何処か痛いかな」

「痛くない。お父さん、ありがとう・・・」

「どういたしまして」

男は笑顔を浮かべると、幸の背中を支え、体を起こした。

「浴衣、着なさいな」

・・・お姉ちゃん、幸お姉ちゃん・・・

「あかねちゃんだ・・・」

「幸、浴衣やめて服を着なさい」

男が鋭く言った。

「はい」

室内灯が点く、一瞬で二人は浴衣を脱ぎ、着替える、そして、男は腰の後ろに小刀を差した。

「幸は覚えていないだろう、幸もあかねちゃんと同じだったんだ、祖父は幸を助け切れなかった」

「ええっ、そ、そんなの聞いていないよ」

「父さん、いま、初めて言った」

「行くぞ、幸」

「は、はい、行きます」

部屋のドアを開け、二人は駆け出した。

「幸、位置を特定できるか」

二人、加速し、まるで、階段を落ちていくように駆け抜ける。

「この距離だと地下のお風呂場です」

「水を媒体にしたか」

階下に降りるほど、ホテルはまるで廃墟の様子を呈しだしていた。

「時間をずらして壁を作ろうとしている、新手だな」

「お父さん、地下への階段がない」

空気を劈き、二人も停止する。目の前、階段があるはずの場所は鉛の色をした壁になっていた。

「幸、刀を出しなさい」

「はい」

幸の右手に2メートルはあろう長刀が現れた。

「まやかしの呪符がある、中央を切り裂け」

「はいっ」

袈裟懸けにいっせん、溶けるように壁が消え、地下への階段が現れた。

・・・幸おねえちゃん・・・

「聞こえる、あかねちゃんの声だ」

男は地下へと一気に飛び込んだ。

地下の大浴場、だった、はずだ。湖、鉛かと思まごうような凧いだ湖が広がる。バス3台分の人間達、浅瀬だろう、膝辺りまでびちゃびちゃと音を立て無表情に踊っている。

「あれか」

緑色の小さな光球が空中に浮かび、二人の人間が光に捧げるようあかねを高く差し出していた。よく見れば、光球の表面が時折脈動している、外神の本体が出現しようとしている。

「じいさん、あの時と同じだ。今度は失敗しないよ、憑依させてたまるか」

「呪は唱えない、この身この心、既に呪と化したモノ、強く意念を用いれば、それ、すなわち、呪なり」

「いやだー」

あかねの声が空気を切り裂いた、瞬間、男の姿が消え、あかねを抱いたまま、足下の人間を蹴り飛ばした。水面を駆け、陸地へ戻る。

「ああっ、おねえちゃんが」

男が振り返る、幸が光球を見つめ茫然と立ちつくしていた。

「うわあああっ」

幸の叫び声が空気を震わせる。

「みんな死んでしまえ、どうして、あたしだけが、あたしだけが」

2メートルもの長刀が空気を切り裂き、刃の殻と化す、

「死んでしまえ、なにもかも、消えてなくなれ」

「おっと、これは参ったな。思いだしてしまったか・・・」

男は茫然としていたが、あかねを地面に降ろし、幸と緑の光球を交互に見る。

「言霊にすらなり得ない喚き声には力はない、しかし、外神、押し返すの手伝って貰らうつもりだったけれど、これでは無理だ」

幸に近づこうとするあかねを男は押しとどめた。

「おねえちゃんに近づいたらだめ。遠くから見守ってやって」

男はそっと語りかけると、光球を見つめた。憑依する体を無くして、制限が効かなくなったのだろう、じわじわと大きくなっていく。

「個人零細自営業者、人を雇いたくても給料払えませんってやつでね、一人でなんとかしなきゃならない」

男は腰から小刀を抜くと、光球に対して半身に構え、刃先を光球に構えた。

「帰れ、闇の空間へ、光なき遠き宇宙へ」

男が静かに息を吐き出す、男の足が地面に食い込みだした。男と光球の間、空気が重く密度を増す、まるで鋼のように空気は固まり、じりじりと光球が後退しだした。

男が呟く。

「親父、俺がまだ小さな頃、さらって来たんだってな、必ずしも実子が才能を受け継ぐとは限らない、才能があるとかで、俺にとっては、そんな勝手な理由で、さらってきたんだってな。俺はその運命を受け入れた、小さな子供がどうやって、逃げ出すことが出来る。その反感か、俺はこの力を俺の代で終わらせるつもりだった。親父、爺さん、良かったな。間に合ったよ。しかし、次にこいつが来たときは知らないぜ。今日は俺がさらわれた記念日だ」

「闇に帰れ」

光球の後がじわりじわりと消えだした。半球となる、あがなおうとするのか、表面の脈動は大きくなり、それがまるで触手のように動き出す。

「帰れ」

光球がふっと消えた。

男は刀を構えたまま、消えたその先を睨み続けた。

踊っていた人間がばたばたと倒れていく、操り糸が切れてしまったように。

「まだ、一つ仕事が残っている、こっちの方がやっかいで、俺にとっては大切な仕事だ」

そっと振り返る。

状況は変わらず、いや、より酷くなっている。刀が見えない、目で追える動きを越えたということか。

「うわああ、何もかも死んでしまえ」

男はほっと溜息を漏らし、小刀を腰に戻した。

「あかねちゃん、お姉ちゃんはね、友達がいなくてね、寂しがり屋なんだ。お姉ちゃんが正気に戻ったらさ、いい子にするよう言い聞かせるから、友達になってやってくれないかな」

「お姉ちゃんが優しいこと、私もう知っている、友達だよ」

「ありがと」

男はあかねの頭を軽くなでると、手を離し、幸に近づいた。

幸の動きにはまだ癖が多い。見えない以上、運を天に任し、感でと経験で動くしかないか。

男は呟くと、何事もないよう、普通に歩き出した。男の足跡が消えていく。体の重さが消える。風を読め。

男はふわっと幸の後に現れると反転し、右腕で背中を押さえ、体を落とした。幸の体が地面に落ちる。長刀が柄の辺りまで地面を貫いていた。

「みんな死ね、消えてなくなれ」

涙を流しながら、幸は呻いた。

「あの頃の幸のこと、知っているよ。沢山の人に裏切られたこと、傷つけられたこと。人身御供にされたこともね」

「なら、どうして、どうして」

「許すのは無理だろう、ただ、幸、お父さんは本当に幸のこと、愛している。大切に思っている」

男は手を離すと、幸を抱き起こし、しっかりと抱きしめた。

「まずはお父さんを斬ってくれないか。お父さん、幸の怖い顔、見たくないんだ、怒った顔、見たくないんだ。だから、最初に殺してくれないか」

「いやだよお、お父さん、お父さん。うわあぁっ、私、良い娘になるよ」

幸は男にしがみつくと、静かに静かに泣きだした。

踊っていた人間達を元の世界に戻し、正気を取り戻させることくらい、幸には容易いことだった。彼らを脱衣所に仰向けに寝かせ付ける。

「あかねちゃん、恥ずかしいところ、見せちゃったね」

「でも、お姉ちゃん、来てくれた、嬉しかった」

「役に立たなかったけどね」

幸は恥ずかしそうに笑うと、男の後に隠れた。

「すぐに、みんな意識を取り戻すよ。あかねちゃんのお父さんもお母さんもね」

男は笑顔を浮かべるとあかねに話しかけた。

「みんな、2、3日、記憶を失っている。どうして、こんなところにいるんだと驚くと思う。あかねちゃんも同じように、わからないって言うこと。いいかな」

あかねは肯くと、両親の横に座った。

「幸お姉ちゃん、また、会えるかな」

「きっとね」

幸はあかねに笑いかけ、男と二人、脱衣所を出た。

「幸」

「え・・・」

「魔法使いは大変だ、守らなきゃならない人、一人出来てしまったな」

「二人守らなきゃ、お父さんも守らなきゃだし」

「そうだな、お父さん、へとへとだ。でもね、もう一つ、仕事が残っていた。ホテルの外」

「お父さん、私が片づけておくよ」

「ん・・・、お父さんが行く、幸、手加減できないからね」

「返す言葉ない」

男は笑うと、ホテルの一階に戻る。深夜のごく普通のホテルに戻っていた。位相をずらした奴らが外にいる。

男と幸は外に出た。

一歩出ると、外は薄闇の荒野と変わり果てていた。振り返るとホテルはない。

「残念でしたね、でも、外神などと付き合わない方が良く、喰われてしまいますよ」

あの酒樽のような男が薄闇の中から溶け出すように現れた。その婦人が、一歩、退いて控えている。

「他にもたくさんの人達がいらっしゃるそうですね」

男の声に呼応するかのよう、顔を隠したたくさんの男達が二人を囲んだ。

酒樽が言う。

「折角の外神、この腹に入れて世界を変える力を得るつもりだったのですが、とんだことでしたな。残念です」

「いや、その程度の防壁では無理です」

男がぎっとにらみつける。酒樽が粉々に弾け飛んだ。

「あらあら、また、作りなおさなきゃ」

酒樽の後にいた女が平気な顔をして呟いた。

「こういう人形を創り出すとは、かなり大きな組織のようで」

「いささか」

女は笑顔を浮かべたまま、一歩、踏み出した。

「労せず、外神を横から奪い去ろうという計画だったのでしょよね、たくさんの人達が迷惑を被った」

「あとでお詫び申し上げておきますわ」

男はふんと笑みを浮かべる。

「提案です。この件から手を引き、ここはひとつ、素直にお帰り願えませんか」

「で、こちらの益は」

「あなた方の命ということで。無事にお帰りいただけますよ、いまなら」

「夫が潰されたいま、しょうがございませんね。お暇いたします、では、これにて」

女の姿がかき消えた、同じく覆面の男達が次々と消えていく。

「あいつ、腹で何考えているかわからない奴だ」

「だろうな、正体すら見せようとしな。ただ、実はお父さん、立っているのがいっぱいね。

ホテル、帰って、一寝入りするよ」

幸は男をしっかりと支えた。

「ごめんなさい、お父さん」

「どういたしまして」

老女の仮面を剥ぎ取った女が、部下を怒鳴りつけていた。

「おい、あの規格外の奴らはいったい何者なんだ」

「不明です、ただ・・・」

「ただ、なんだ」

「本部から・・・」

「はっきり言え」

「あの二人には一切触れるべからず。直ちに帰投せよとの厳命です」

「何言っている、本部の腑抜け連中が。外神（そとかみ）を手中に出来なかったのは残念だが、その外神を追い返してしまうほどの術者がいるんだぞ。捕獲しないでどうする」

女は周囲にいる部下の無事を確認すると、唇をゆがめ、笑った。

「楽しいなあ、おい、わくわくしてこないか」

「そんなに楽しいかなあ」

俯いた幸が肩が触れるほど女の横に体を寄せる。そして、落とした腕には長刀が握られており、その刃が女の首元に触れていた。

「ね、そこのおじさん、動くとおんたの上司の首、落ちてしまうよ。他の人達にもさ、動かないよう指示してくれないかな」

「わ、わかった。待機、待機せよ」

ざわついた空気が沈黙に変わる。

「ありがとね、おじさま」

つううっと刃先から赤い血が滴り落ちた。

「お姉さん。首、動かしちゃいけないぜ。ほら、浅く切れちゃったじゃないか」

「いったい、お前達は何者なんだ」

悲鳴にも似た叫び声を女が上げた。

「それは秘密さ。ただね、さっき約束したろう、帰るってさ。あれ、嘘だったのかい。ね、嘘じゃないだろう、本当だろう。本当だと言ってくれよ」

「ああ、本当だ。一切関わらない、約束する」

女は震える声で答えた

「あたしとお父さんはさ、普通に、平凡にさ、暮らしたいんだよ。わかるかい、つまんないさ、退屈な平和ってのを続けていきたいのさ、そういうの、わからないかなあ。ね、そこのおじさんはどう思う」

「こういう、斬ったはったは好きかい。こんな寒い夜中に突っ立っているよりさ、夜はさ、暖かい布団の中、寝てはいたくないかい」

じろっと睨む幸の眼差しに、引きつった笑いを浮かべながらこくこくと肯いた。

「よくわかってるじゃないか。ね、おじさん、あんたの上司は、そこんどこさ、ちゃんとわかっ

ていると思うかい」

「わ、わかっている、わかっている」

「本当かなあ、わかってんのかなあ。あたしはか弱い女の子だから人を斬ったりなんて出来ないけどさ、それを承知でいい加減なこと言っているだけじゃないかなあ」

「ね、お姉さん、ちょっと俯いてさ、あたしの顔を見てみなよ、な、そんな乱暴するような女の子じゃないだろう」

おそろおそろ俯き、女と幸と目が合う、鋭い目付きで、口元だけが笑う幸がいた。

「うわああっ」

女が悲鳴を上げる、逃げだそうとするが、体が固まってしまったように動けずにいる。

「なんだよ、人の顔見て悲鳴上げるなよ。自分で言うのもなんだけどさ、あたし、かなり美人のはずだぜ」

「ねえ、お姉さん、あたし、美人だろう、可愛いだろう、な、そう言ってくれよ」

「助けてくれ、もう、あんた達には一切関わらない」

「なんだよ、可愛いつて言ってくれないのかい、ショックだなあ」

幸はにいいっと嗤う、そして、すうっと長刀が消えた。

刀が消えた瞬間、男達が幸を襲おうとした。

「動くなよ、な」

呟く幸の声に、男達は凍り付いたようにその場に固まってしまった。

幸は、動けずにいる女の目をじっと見つめた。

「瞳って名前か。綺麗な名前だね、夫がいて、幼稚園の男の子がいる、おい、あんた、小さな子供がいるくせに、こんなやくざな仕事してるのかよ」

「どうして、それを」

「あんたの目から記憶を読んだ、それだけ」

慌てて、女が目を瞑る。

「夫の名前は直行さん、息子は、隆君か、良い名前じゃないか。こういうのを二重生活っていうんだっけ。そうだ、思いついた、あたし、今度、瞳さんのお宅にお邪魔するよ、ご主人と隆君のいるときにさ、次の日曜日なんかどうだい、ホームパーティしよう、楽しいぜ」

「お願い、許して」

「どういう意味だよ。あたし、素敵なお姉さんやってやるよ。隆君の好きなさ、プリンをお土産に持って行ってあげるよ。そして、可愛いつて隆君の頭なでてやるよ。でもさ、私、子供の頭つてなでたことがないから大丈夫かなあ、緊張してさ、ちょっと力入れすぎて、ぼきって折れたらどうしよう。子供って、ぼきって首が折れたら死ぬのかい」

「勘弁してください、お願いします」

「ふうん、良い提案だと思ったんだけどなあ、お互い、守りたい家庭があるってことだ。しょうがない、それじゃあ、帰るよ。あんた、約束忘れるなよ」

ついつと幸の姿が消えた。

「一切触れるべからず」

女が喘ぎながら呟いた。

「なんて奴だ」

女が呟いた瞬間、怒号が轟いた。

女の目の前、幸の持っていた長刀が投げつけたように地面に突き刺さっていた。

突き立った刀の上に幸がふわりと舞い降りる。

「夜中だぜ、早く帰りなよ。徹夜は、お肌の大敵だ」

声を上げて幸は嗤うと、刀と共にその姿を消した。

「帰る、今すぐ帰ります」

女は怯えてそう呟いた。

「お父さん」

「幸、何処に行っていたの」

座椅子に座ったまま、男は振り向いて幸に声を掛けた。幸は後から男に抱きつくのと、くすぐったそうに笑った。

「秘密。乙女にはさ、殿方には秘密にしなきゃならないこと、百はあるのさ」

「ああ、トイレか」

「違うよ、もお」

男は微かに笑うと、少し掠れた声で話しかけた。

「幸、隣に座ってくれないか」

「え、うん」

幸は男の左隣りに座ると、男の顔を覗き込んだ。

男は目を瞑っていた。

「父さんの手、握ってくれないか」

幸は心配そうに男の手を両手で包み込む。

「お父さん、疲れたの。ゆっくりするといいよ」

「ちよとね、ばてたかな。でも、幸に手を握ってもらっていると、不思議だ。こんな小さくてきゃしゃな手なのに、柔らかくて暖かくて安心する」

「幸は可愛いなあ。父さん、一人で生きて来たけど、今はもう、幸がいてくれないと、だめだな」

「お父さん、どうしたの、そんな急に」

ふと、幸は男の手が少しづつ冷えて来ていることに気づいた。

「そんな……。そんなのってないよ。お父さん」

「お父さん、嫌だよ、そんなの、嫌だ」

幸が叫んだ。

「暴走娘がいるのに、まだ、死ねないよ」

男は少し目を開け笑った。



「消耗が激しいからさ、呼吸法で仮死状態に入る。幸が手を握ってしてくれるなら、安心だ。朝には起きるさ」

幸が震える声で答える、

「絶対の、絶対だよ」

「ああ、絶対だ」

男の体温が少しずつ下がり、心臓の鼓動が鈍くなる。

お父さん、明日は、ツアーやめてさ、二人っきりで歩こう。あちこち、食べ歩きしよう。腕組んでさ、歩きながら食べよう。きっと、楽しいぜ、ねえ、お父さん、お父さんったら・・・

幸はぎゅっと男の手を握り締めた。

愛しているよ、お父さん・・・。

異形四話

闇の中、男は頭を抱え悩んでいた。

一体なんてことを、俺はしたのか。

それは旅行の夜だった、自分の前に幸を座らせ、その幸の浴衣を脱がしてしまった、滑らかな肌、その時の甘い感触が指に残る、もちろん、父親としてそれは許される行為ではない、ましてや、幸がいてくれないと生きていけないなどと、幸の心を縛ってしまうようなことを言ってしまった。そうだ、もしも、幸に異変が起こらなければ、間違いなく、幸を最後まで……。

心が不安定だった、それは確かだ、しかし、それは醜い言い訳だ。

幸はどれほど傷ついたらろう、幻滅したらろう。

「おーい、お父さん、一緒に晩御飯作ろお」

襖が開き、幸が男の部屋を覗き込んだ。

「お父さん、部屋が暗いよ、どうしたの」

男は慌てて表情を隠し、普段通りに返事をする。

「ん、いや、そうだね、少し考えごと。晩御飯、作ろうか」

「うん」

幸はにっと笑うと、男の手を両手で引っ張った。

二人して流しの前に立つ。

「お父さんは白色のエプロンです、真ん中にキリンさんがいます。幸のは赤と白のストライプ。赤一色は随分と色が濃かったの、ストライプ、真ん中にはウサギさんです」

「買ってきたの」

「えへへ、晩御飯の用意と一緒に買ってきた」

幸はにっと笑い、ジャガイモやタマネギを取り出した。

「今晚は美味しい美味しいミネストローネです。お父さんはジャガイモの皮剥きをしてください。」

「美味しいを強調しましたね、それは先日のトマト風味ジャガイモの煮っころがしからの反省でしょうか」

「その通りです」

幸は笑うと袋から人参やベーコンも取り出した。

「幸はひとつ賢くなったよ」

「と、いうと」

「ひたすらレシピに忠実であること。素人が工夫をしてはいけない。これとっても大事」

男は器用にジャガイモを包丁で剥きながら笑った。

「工夫はもっとうまくなってからか……。でも、ジャガイモの煮っ転がし、幸が作ってくれたから美味しかったな」

「そう言ってくれるお父さん、大好き。なんかね、そう言われるとさ、今度はもっと頑張らなきゃ、って思うんだ。そう思えることって嬉しいよ、とっても」

幸がタマネギを切りながら答える、タマネギを八等分したものをボールに入れ、ああそうだと、トマトとハーブも取り出した。

「お父さん」

「ん」

「ハーブって不思議だね、こんなのただの葉っぱだよ、ローリエとか特にそうだよ。でも、入れるとお肉の臭みがなくなったり、これって凄いよ」

「そうだね。ん……。暖かくなったら、庭にハーブを植えてみるのもいいかな」

「それいいなあ、藤のバスケット片手にね、ハーブを摘んでお茶にしたり。そうだ、緩やかな白のワンピースに幅広の白い帽子もいるな」

「なんか、映画で見たような情景だけど、着替えるほどご大層な庭ではございません」

「楽しむための雰囲気作りさ、二昔前の御令嬢。お父さんが執事でね、お嬢様、お茶のご用意ができましたって言う。そうすると、幸はふっと指先を止めて振り返る、ありがとう、セバスチャン」

「セバスチャンですか」

「そうだよ、そして、お嬢様、お手をと言ってお父さんが手を差し出して、幸は言うの、今日は素敵なティーパーティなりそうかわって」

「お嬢様、お手を」

男の言葉に一瞬、幸は戸惑ったが、

「えっ、あ……。人参かあ」

幸に人参を男から受け取り、四つ切りにしたジャガイモをボールに入れた。

「お父さん」

「ん」

「畑も作ろう、野菜、高くなってた」

「色々と野菜を植えてみるかな」

「種を買ってきてさ、植えよう。そういえば、大根の種って袋に入っているやつ、いっぱい入っているよ、全部、植えたら、そこいらじゅう大根だらけだ」

「全部は育たないよ」

「そっか……。大根も生存競争、大変だ」

「まあね。さてと、焼いて煮込むのは幸がやりますか」

「うん、幸がやるよ」

幸が空の鍋を火にかけ、油を敷く。

「火の通りにくいジャガイモから炒めていきます。ね、お父さん、やっぱり晩ご飯は二人で作るのが良いね」

「そっか、最初は交代で作っていたもんな」

「そうだよ、あれはだめだ。一人で作るのは寂しいし、一人でご飯が出来るのを待っているのはもっと寂しい。お父さんとお喋りしながら作るのが一番だよ」

「二人で作っている割には時間かかるけどね」

「それは仕方ない、父娘の大切なコミュニケーションの時間が入っているからさ」

不意に幸は男の背中に頭をごしごし擦りつけた。

「どうしたの」

「コミュニケーション。お父さんに幸の匂いを付けてる、お父さんは幸のなわばりだから、誰も手を出さなくていいよ」

「ちょっと。お父さん、包丁持っているんだから危ない」

幸は笑うと、後ろから男を抱き締めた。

「いっぱい付いたよ」

男は包丁を離し、鍋のジャガイモを菜箸でひっくり返す。幸い、焦げずにすんだ。

「誰も寄って来ないよ、お父さんを好きだって言ってくれる女性は幸だけだから」

男は、切ったタマネギ、人参、ベーコンを入れ軽く炒める。

「それが不思議だ、こんなに素敵なのに」

「お父さんは自分の何処が素敵なのか全然分からないな」

「なら、幸が一日たっぷりかけて教えてあげるよ」

「幸が素敵だと言ってくれるなら、それで充分、それ以上は必要ないよ。さてと、この辺で水を入れれば良いのかな」

「はい、水とハーブを入れてください。後はじっくり煮込んでいくのですよ。よろしいですね」

「わかりました」

男が少し笑って答えた。

堀炬燵の横に鍋と炊いたばかりの御飯が入ったおひつを置く。幸は、炬燵の上にお皿やお箸を並べた、ふと、幸は大きな窓から外を眺めた。すっかり闇に閉ざされており、虚空に細い月が浮かんでいた。

「どうしました」

男が後ろから声をかけた。

「夜の空を見上げてても、泣かなくてすむようになったなあって」

硝子窓に写る幸の表情はとても穏やかに虚空を眺めている、男は少し笑みを浮かべると、寒そうに炬燵にもぐりこんだ。

「お父さんも夜の空を睨みつけなくてすむようになったよ」

幸は、男の横に座ると足を延ばす。

「堀炬燵は足が延ばせていいね」

「だけど、隣に座らなくていいよ、三方、残ってるんだから」

「微妙にお父さんの顔が見えにくいのが難題だ」

幸は一度立ち上がると、左に男が見えるよう炬燵に入り直した。

「これならお父さんの顔も見れるし、お父さんと同じ方向を見ることができるよ」

「窓の外、真っ暗な天蓋に細長い月」

男は答えると、おひつから、御飯をお茶碗によそい出した。

「だめだよ。幸がやる、ほとんど、お父さんが料理を作ったんだから、あとは幸がやるよお」

男は少し笑うと、幸にしゃもじを渡した。

「美味しいね」

「そうだね、幸の美味しそうに食べる顔を見てるとなんかな、楽しい」

「そう言ってくれと、幸はとても嬉しい」

幸はくすぐったそうに笑う、ふと、思い出したように葉書を取り出した

「そうだ、これ」

「葉書・・・」

幸が取り出した葉書を、男が受け取る。

「あかねちゃんか。そういえば、次の日、住所を訊いていたね、表書きはお父さんかお母さんが書いてくれたんだな」

「ありがとうって」

幸がくすぐったそうに笑った。

「幸には初めての手紙かな」

「うん、でも、お父さん、いいのかな」

「いいのかって」

「あかねちゃんに迷惑かからないかな。私と縁が出来て、なにか危険なことに巻き込まれたりしないかな」

「難しいところだな、ただね、あかねちゃんが外神の依代に選ばれたのは、先天的にああいったのを受け入れる感受性が高かったからだよ。今後、新手に巻き込まれることもあり得るから、いくらかね、縁は繋いでおく方が良くもしいかな」

「それじゃ、返事を書こう。あ、この住所、電車で一時間くらいかな。会ったりもできるね」

「初めての友達だ」

「なんだか、『初めてのお使い』みたいで緊張するな」

「私さ、また、会おうねって書くよ」

「それがいいだろうね」

男が葉書を返すと、幸は大事そうにポケットの中にし舞い込んだ。

「お父さん、幸は満腹です。お行儀悪いけど少しだけ横になっても良いですか」

「どうぞ」

幸はにっと笑うと駆け出して、掛布をとって返し、男の膝を枕に寝転がってしまった。

「な、なるほど、そういうことか・・・」

「特等席だ」

「幸はいろんなこと、考えるなあ」

幸はくすぐったそうに笑うと、右手で男の顎に触れた。

「お髭、きちんと剃っているね、お父さんに髭は似合わない。だって、キスする時、幸の唇が痛くなってしまうもの」

「前後二つの文が繋がらない」

「いいのさ、だってキスするの邪魔だからお髭はやめてって言いにくいもの。お父さん、あのね」

幸はにっと笑うと、ふっと右手、人差し指で男の唇に触れた。

「ん」

「幸はお父さんのこと、ずっと考えている、思っている、幸はお父さんの専門家だからね。お父さんのことなんでもわかるよ。お父さん、幸のことで悩んでいるでしょう」

「幸」

男はかすれた声で呟いた。

「あれは幸がお願いしたことだし、幸は百年以上、汚く生きてきたんだ、心も体も、すっかり汚れてしまっているよ、どんなに洗ったって落ちやしない。だから、今更いいんだ」

「それは絶対に良くない、お父さんは幸がどんなふう生きてきたか、全てを知る由はないけれど、幸はね、お父さんが幸のこと、とっても大切に思っていることわかるだろう」

「うん・・・」

「それは、幸がお父さんにとって、とっても綺麗な女の子で、とっても綺麗な体で、とっても綺麗な心を持っていて、そしてなにより、お父さんのこと、大切に思ってくれているからだよ。幸、もっと自分自身を認めてあげなさいな」

「なんだか、幸は幸せすぎるよ」

幸は目を瞑り、唇をかんだ。

声がした。

・・・我が主より文有りき、御届け候・・・

地響きのような低い声だ。

「ああ、どうしてこういう時に限ってなんだろう。お父さん」

「いつかさ、二人っきりで旅をしよう。そうしたら、嫌なのが寄ってきても逃げだせる」

「愛の逃避行だね」

「安っぽいドラマの見過ぎだよ、それは」

・・・我が主より文有りき、御届け候・・・

先程よりも低く声が響く、炬燵の上で食器がかたかたと揺れた。

「音で结界を破ろうとしている、この重い力は鬼だな。父さん、行ってくるよ」

男は起き上がると、幸を炬燵に座らせた。

「幸はここから離れないこと、いいかな」

「でも」

「大丈夫、お父さん、強いからね。それに、外は寒い、幸が風邪をひいたら大変だ」

男はそっと幸の唇に人差し指で触れると、少し笑った。

「本当に、父さんは幸が大切だよ」

「お父さん」

男は幸を残して玄関口へ向かった。

戸を開け、門の前まで出る。男は門の前で見上げた。まるで怪獣映画だ。日本画から抜け出したような鬼が仁王立ちに立っていた。

男の背丈は鬼の膝ほどにしかないだろう。

「無茶なことを」

男が呟く。どれほどの犠牲を供物に鬼などを呼び出したのか。

「主殿か」

「私がこの家の主です」

「文を言付かって来た」

「それは読みたくありません」

「何ゆえ」

予想をしていなかった男の返答に鬼は目を剥き唸った。

「私はこの地で静かな日常を営む者、日々の暮らしの中で笑ったり泣いたりしながら、今の生活を楽しみ生きています。その文を読み、拘わりを持たば私の大切とする生活が適わなくなるでしょう。ですから、読みたくありません。そのこと、貴方の使役者にお伝えいただき、このまま、お帰りください」

鬼は男を瞬きせず睨んでいたが、不意にじわりと笑みを浮かべた。

「もう一つ、この旨、受けられぬ時は、殺してしまえと仰せつかった」

鬼は一気に右手を振り落とし、男をその巨大な爪でまっふたつに切り裂いた。声をあげる暇もなく、男は両断され地面に倒れて行った。

「なんとひ弱な主殿よのう」

「うおおおっ」

一瞬の雄叫びとともに光が走る、鬼の片腕が地面に落ち、虚空には長刀を手に髪を振り乱した幸が浮かんでいた。

「お前、何をした」

幸が目を真ん丸に見開き、歯を震わせ鬼に声をあげた。

鬼は絶句した。いきなりの状況に判断がつかずにいた。

「お前、あたしのお父さんを殺したな、殺したんだな、あははっ、ようし、お前を一寸刻みに切り刻んでやろう」

幸の眼からは涙が溢れ、狂ったように笑う口元からは涎が垂れ流れていた。

「お父さん、こいつを潰したらあたしも行くよ」

「幸、待ちなさい」

男が叫んだ、男は何事もなかったように門の前に立っていた。

「今のはただの幻術だ」

「あ、あ……。見ちゃやだあっ」

幸は両手で顔を隠すと、地面へと落ちて行く、男は駆け出すと、すんでのところで幸を受け止めた。

既に鬼は逃げだし、その腕だけが丸太のように横たわっていた。

「お願い、幸の汚い顔、見ないで」

男は幸を抱きかかえたまま、家に戻ると、そのまま器用にタンスからやわらかなタオルを取り出し、幸を炬燵に座らせた。

「さあ、顔から手を離しなさいな」

「やだやだ、お父さんにあんな顔を見られてしまったよ」

「気を静めなさい、肩の力を抜きなさいな。お父さんは幸のこと、とっても大切なんだからさ」  
幸が目を瞑ったまま、そっと両手を顔から離した。

「ほら、涙に鼻水、涎。これは大変だ」

男は笑うと、タオルでそっと幸の涙を拭った。

「鼻、ちーんとしな」

んーっと幸がタオルに鼻を付ける、男はタオルを二つに折ると、幸の涎を拭いた。

「ほら、美人に戻ったよ。さっ、お風呂沸かそう、温まってきなさいな」

幸をお風呂に入れた後、男は窓から外をじっと睨んでいた。月は消え、茫漠たる闇が、硝子窓の外に広がっていた。

どんな、闇の中でも、たとえ、自分の身を犠牲にしても、守りたくて仕方がないものがある。

「お、お父さん……」

幸の声に、男は笑みを浮かべ振り返った。

「暖まりましたか」

「うん。ね、お父さん、本当にごめんなさい」

「え……。ああ、そうか。お父さんこそ、幸に心配かけてしまったな、ごめんね。そしてさ、助けてくれてありがとう」



男はそっと笑みを浮かべた。

「お父さんね、疲れた。片づけは明日にして、もう寝よう」

「ね、お父さん」

「どうしました」

「幸、お父さんのお部屋で寝たい」

「なんだか、幸、子供に戻ってしまったな。今日はしょうがない、布団、運んであげるよ」

男は笑うと、優しく、幸の頭をなでた。

男は暗がりの中、幸の寝息を確かめると、そっと布団から起きだし、部屋を出た。静かに襖を閉める。

手早く、普段着に着替え、腰の後、小刀を差した。

奴らは俺を敵対するものと見なしただろう、ならば、潰しておかなければ禍となる。

「お父さんってのは大変だな」

男が呟く、

「大丈夫さ、幸がついているよ」

振り返ると、幸も寝間着から普段着に着替え、「必勝」と書いた鉢巻きを締めていた。

「あああっと・・・、ええっと、うーん。参ったな」

男はどう言いつくろったものかと考え倦ねたが、ふと、瞬きもせず、自分を見つめる幸の眼を見て何も言えなくなってしまった。

「お父さん、幸はとっても幸せだ。幸せすぎるくらいだよ。幸はさ、自分自身でこの幸せを守ることさ、この幸せに値するようになるんだ」

男は幸の決意に驚いた。もう、立派な大人だ。

「怪我するなよ、気合い入れていけ」

「大丈夫、幸、かなり気合い入っているからさ、とっても強いよ」

「必勝・・・、なんだか、受験生みたいだ」

男はくすぐったそうに笑うと、幸の頭をなでた。

「行くぜ、幸」

「ああ、お父さん」

### 異形五話

ふうっっ、深呼吸をする。

笑顔、笑顔、口元、そう、頬の上辺りを引き上げるようにして、そうすれば極上の笑みになる。

さあ、行くぞ。

商店街の入り口、幸はぐっと握り拳を作ると商店街の中へと向かった。

「ええっ、スーパーの方が良いよ、買いやすいもの」

「だめ、幸はね、一人ででも色んな人と会ってお喋りしたり、自分の意志を伝えたり、そういう訓練しなきゃね、いつまでも、お父さんの後に隠れて買い物するわけにもいかないでしょう」

「でも、商店街っていちいち声を掛けなきゃならないし、スーパーなら何も喋らずに買い物ができるし」

「つまりはお喋りしなさいってこと、いいね」

男に言い含められ、幸は初めて一人で買い物にでかけたのだった。

幸はポケットからメモを取り出すと、じっと見つめた。

魚屋さん、八百屋さん、服屋さんに寄って、帰りがけに、たこ焼きを買って帰る、以上だ。大丈夫、なんてことない、よし

男は落ち着かず部屋の中をうろうろとしていた。一人で買い物を行かせたのはいいが、時間が経つほどに気掛かりになっていくのだ。うずくまってしまっていないか、いや、逆に何かしでかしていないか。

幸は内弁慶なところがあり、外へ買い物に行くと少し俯いて男の上着の裾を千切れるかと握り締める、よほど緊張しているのだろう。それを思い出すほどに男は不安になるのだ。

男は溜息を大きく一つつくとうつと電話に向かった。

「ひやあ・・・、お父さん、ごめんなさい、幸にはまだ無理ですよお・・・」

幸は魚屋の前でしゃがみこんでしまった。

人通りの中、いらしゃい、いらしゃいという亭主の大声、店の前で品定めをする女達、げらげらと大きな笑い声。

店女の二つなら負けとくよ、というかん高い声が響き渡った。

「ごめんなさい。これは上級者用です、幸は落第でいいです。人が声を張り上げていて恐いです

、入っていきません」

狭い通路をたくさんの買い物客たちが通り過ぎる。店の人達もそんな客たちを引き留めようと大声を張り上げる。

「幸ちゃん、幸ちゃんだろう」

幸が自分を呼ぶ声に顔をあげると、先程の店の女がにかっと笑って幸の前に立っていた。

「うひゃあ、美人さんだねえ。いま、センセイから電話があったよ、娘は買い物に来たでしょうかってね」

「お父さんが」

女は笑顔を浮かべ頷いた。

「さあ、そんなところでしゃがんでないで立ちな」

幸がよろよろと立ち上がると、女はぱんっと幸のお尻をたたく。

「しっかりしなよ」

「は、はい」

「何年も病院に入院していてさ、やっところさ、家に帰れたんだ、これからはその分を取りもどさなきゃね」

「そ、そうですよね」

お父さん、そういう設定は始めに幸に言ってくれよと思いながらも、なんだかほっとしたのだろう、幸は安心して笑みを浮かべた。

女は幸を店の前まで連れて来た。

「何がいるんだい」

「あの、えっと・・・」

「おおっ、何処のお嬢さんだい」

店主が気づき、女に声をかけた。

「税理士のセンセイとこのさ、お嬢さんだよ」

「ほおー、女優さんみたいだ。センセイにこんな別嬪の娘さんがいたとはなあ。こりゃ、センセイも心配だ。俺だったら、絶対に一人で買い物になんぞやんねえ、虫がついたら大変だ、一日中見張ってるぞ」

「いらぬこと言っていないで、ほら、お客さん、待っているじゃないか」

女は店主を向こうに押しやると、幸に笑いかけた。

「だめな亭主でさ」

幸も笑顔を浮かべ、メモを取り出した。

「あの、お姉さん、鮭の切り身を、ください」

「え、お姉さんか、うん、そりゃお姉さんだ」

「なら、俺はお兄さんだな」

「何言ってるんだよ、おっさんが。女同士の話に入って来るんじゃないよ」

女は店主を蹴り飛ばすと、幸に言った。

「悪いねえ、男ってのはどうしようもないよ。そうだ、メモ、貸してごらん」

「は、はい」

「シメジにタマネギ、モヤシ、これなら、鮭の包み焼きかい」

「はい、そうです。お父さん、好きだから・・・」

女はふっと涙目になり、前掛けで鼻をかんだ。

「かー、うちのガキどもにも聞かせてやりたいね。これからも親孝行してやりなよ」

女は手早く鮭の切り身を包むと幸に手渡した。

「新鮮だ、美味しいよ」

「あの、おいくら」

「いいさ、持って帰りな」

「でも」

「なんかもう、あれなんだよ。これからもさ、女同士じゃないと相談できないことはあたしに言いな、相談に乗るよ、まかしときな」

「お姉さん、ありがとう。でも、私、少しずつでも社会復帰して、お父さんに安心して欲しい、だから、お父さんにも、ちゃんとお金、払って来たよって言いたいから」

女は幸をがしっと抱き締めた。

「良い娘だよ、なんて出来た子だい。それじゃ、五百円だけもらっておくよ」

女は手を放すと、涙交じりに言った。

付いてやってやりたいけど、忙しい時間でね、と断りを言う女に頭を下げ、幸はその先にある八百屋へ向かった。

野菜って結構多いな、二人暮らしには。

幸は五個入りのタマネギの袋を見ながら考えた。

でも、日持ちするなら、次の日の料理に使えばいいし、それなら。

幸は先程のやり取りで少しは買い物に慣れたのか、落ち着いて考えていた。

「あんたがセンセイとこの娘さんかい」

「は、はい」

店番をしていたおばあさんが幸に話しかけて来た。

「いま、魚弦の佳奈ちゃんから電話があつてね。センセイのお嬢さんが来るから声をかけてやってくれってさ」

「あ、ありがとうございます」

「あんたは生まれてからずっと入院していたのかい」

「は、はい」

「大変だったねえ、ちょっと、手を出してごらん」

「えっ」

「手相見が趣味なのさ、見せてごらん」

幸がそっと手を伸ばすと、おばあさんが拡大鏡を片手に幸の手相を見た。しかし、首を振り、どうも見当が付かないといったふうに顔をしかめる。

「ん……。ごめんよ、どう読んだもんか分からないねえ、こんなこたあ初めてだ。過去が見えてこない」

「私の過去、秘密ですから」

幸は笑うと、そっとおばあさんを抱き締め、その耳元で囁いた。

偽者は好きに占えば良い、でも、あんたみたいな本物はだめだ。うっかりすりゃ、相手の魂を傷物にしてしまう、気をつけなよ、な。

幸は姿勢を戻し、タマネギとしめじとモヤシを取ると、硬直したままのおばあさんに声をかけた。

「これ、くださいな」

少し脅し過ぎてしまったろうかと、幸は反省しつつ、洋服店へ向かった。

通路ぎりぎりまで女物のブラウスなどが吊り下げられている。年齢層の高い品揃えだ。

幸はそっと覗き込むと女がいた、電話をしている言葉から店主だろうとわかる。電話が終わったのを見計らい、声をかけた。

「あ、あの……」

「いらっしゃい」

「あの、取り寄せてもらっていた……」

「電話あったよ、センセイとこのお嬢さんだね。この前、来てくれた時はセンセイの後ろにへばり付いて顔が見えなかったけど、今日は一人だ」

にかっと笑う、店主の口の悪さを思い出した。でも、裏がない快活な話し方で、却って好感を持つことが出来る。

「一人で行ってきなさいって……」

「センセイも大変だ、今頃、心配して、いてもたってもいられないだろうさ」

幸がくすぐったそうに笑うのを見て、店主が満足そうに頷いた。

「お入りな、お茶をしよう。この時間、うちは暇でね」

店の奥にある三畳程の小さな部屋、ちょっとした食器棚と小さな丸いテーブルと古びたラジオがあり、衣類など、商品は置いていない。

店主は幸をテーブルに座らせ、インスタントコーヒーの瓶を出す。手慣れた手つきで珈琲を二つ用意すると、一つを幸の前に置いた。

「砂糖とクリームは適当にね」

「はい」

幸は少しクリームを入れ、一口飲む。

「美味くもなんともないだろう」

「あの、いいえ」

「まずいなあ、って思いながら、癖だね、あたしも飲んでるのさ」

店主は幸の前に座ると興味深そうに幸を見つめた。

「名前はなんて言うんだい」

「幸、幸です。幸福の、幸という字です」

「親の愛情の詰まった名前だねえ」

店主は笑うと、一口、珈琲を啜る。

「あのセンセイ、あれでロマンティストだからさあ。でも、なんていうんだい、センセイも随分変わった、丸くなったよ。幸ちゃんのおかげさ」

「お父さん、以前は」

「ああ、そうか。何年も入院していたわけだし、そうだねえ。うちはセンセイに帳簿お願いしているわけだけどね、正確できっちりした仕事をしてきているんだけど、愛想がなかった、ほんと。えらそうにしているんじゃない。ただ、本当に愛想の「あ」の字もなかったのが、この前の二人で来てくれたときさ、少年みたいな真っ赤な顔して照れ臭そうに、娘の下着や服を一式揃えていただけませんか、ってもう、あたしゃ、吹き出して笑いそうになるの、こらえるの大変だったよ。ほんと、幸ちゃん、大切にされているんだねえ」

幸は恥ずかしそうに笑みを浮かべると俯いてしまった。

「やっと帰ってこれたんだ、幸ちゃんもこれから親孝行しなよ」

「はい、私もお父さんが好きだから」

幸がそっと珈琲カップを両手で包み込む。

「いいねえ、うちの娘や息子も幸ちゃんみたいに素直だったらね、いいんだけどさ。うん・・・」

「幸ちゃんは水仕事もしているのかい、洗濯とかさ」

「お父さんと交替でしています。本当は私の仕事だけど」

「うーん、手が少し荒れているじゃないか、寝る前にハンドクリームとか付けないのかい」

「え・・・」

「ああ、男親一人じゃしょうがないねえ」

店主は戸棚を開け、ハンドクリームを一つ取り出した。

「まだ、使っていないからさ、あげるよ」

「あ、でも」

「こんな別嬪さんなのに手荒れなんてもったいないよ。寝る前にね、クリーム、ちょっと取って、まんべんなく手に擦り込んで、そしたら手荒れしないですむよ」

「あ、ありがとうございます」

「いいよ、なんでも相談にきな、金のこと以外なら、話聴いてやるよ」

店主は笑うと珈琲を飲み干した。

「なんか、甘い物なかったかねえ」

「私、そろそろ。お父さん、心配してそうだし」

「あ、そうだね、それじゃ、あの紙袋に下着や靴下、普段着みたいなもの入ってるからね、袋、

二重にしておいたから破れないだろう」

「ありがとうございます」

「いいよ、今回はあたしの見繕いだけど、幸ちゃんも、この生活に慣れたら、自分の好きなもの選ぶと良いよ」

幸は笑みを浮かべると、会釈をし、店を出た。

「ちょ、ちょいと」

声を掛けられ、幸が振り返ると、八百屋のおばあさんが幸を手まねいていた。

「さっきはごめんなさい」

にと幸が笑う。

「あ、あんた・・・」

幸に駆け寄り、おばあさんが言った。

「あんた、神様かい」

「私に手を合わせていただいても、何の御利益もありませんよ」

幸は笑みを浮かべ離れる、後ろでおばあさんがありがたいありがたいと手を合わせていた。

幸は魚屋の佳奈を見つけると、たたと駆け寄った。佳奈もパイプ椅子に座り、一息ついたところだった。

「やあ、どうだった」

佳奈は幸を見つけると笑い掛けた。

「ありがとうございます、電話していただいて。皆さんに優しくしていただきました」

「そりゃ良かった」

幸は座る佳奈の前に立つと、そっと佳奈の手を取って笑顔を浮かべた。

そして顔を寄せ、耳元に囁く。

佳奈さん、悩まなくてもいいよ。人の考えてることが、自分のと同じようにわかるんだろう  
びくんと加奈が震えた。

父さんは電話で娘がと言った、あたしの名前言ってなかったろう。幸という名前は、あたしが表に置いている記憶が見えてしまったからだろう。ねえ、あたしの心、奥底まで見えるかい、見えないだろう、お父さん以外には見せないと決めているからさ、似たもの同士、きっと、あたし達、良い友達になること、できるよ

幸が佳奈から顔を離す、佳奈はぎゅっと幸の手を握った。

「寂しかった」

佳奈が掠れる声で囁いた。

「今はどう」

幸が囁いた。

「心の底から元気が出ている、一人じゃないのは嬉しいもんだね」

「私もずっと一人だった、でも、お父さんと出会えて、今はとっても幸せ、幸せすぎるくらい

です。それに、今日は佳奈さんにも出会うことが出来た、とっても嬉しい」  
はははっと佳奈は快活に笑うと、いつものように元気を取り戻した。

「いつでも遊びにおいで。わるがき、二人いるけどね」

幸はにっと満遍の笑みを浮かべた。

「それじゃ、お父さん、家で心配しているから帰ります」

「いや、あれ・・・」

佳奈の指さす商店街の入り口辺りを男が行きつ戻りつしていた。

「お父さんだ」

「気づかれていないと思ってるんだろねえ」

「お父さん、可愛いなあ」

「え、あれがかい」

幸はもちろんと頷くと、男へと掛けて行った。

男はここまで来たことを悔いていた。

大丈夫だ、佳奈さんは姐御肌で面白い能力も持っているから幸のこと、気遣ってくれるだろう、こんなところで幸に見つかったら、親としての威厳というか、なんというか。とにかく、家に戻って、平気な顔をしていないと。

幸がいきなり男を後ろから抱き締めた。

「不審者発見、不審者発見、至急、応援請う」

「あ、幸」

「あはは、お父さん、どうしたの、こんなところで、動物園の熊さんみたいに、うろうろしてた」

「いや、ちょっと買い物に」

「本当のこと、言いなさい」

「ん・・・、幸が心配でじっとしてられなかった」

「よく正直に言った、解放してあげよう」

幸は男の前に立つと、にっと笑った、

「メモの通り買ったよ、タコ焼きは買うのやめたけど」

「え、どうして」

「ほら、お父さん、見てごらんよ。たくさんの方が歩いている」

「まだ、そうだな。人どおりが多い」

「こんな中で一時間、生き別れになっていた親子がやっと出会えたんだよ、途中の喫茶店で巡り会えたこと、ケーキで祝福するのもありだよ、そして、心くばりの出来る幸は喫茶店に匂いの強いタコ焼きを持って入るのは悪いかなと思うのですよ、お父様」

「なんだか、しっかりしたなあ」



「えへへ・・・。照れますう」

「もう一人で買い物も大丈夫か」

「それはだめ、幸はお父さんと離れると悪い女の子になってしまう、幸はお父さんと一緒じゃないとね、素敵な女の子でられないのさ」

「なんかそれ、いろいろ、しでかしたのではと気になるけれど、まあ、そうだな、立ち話より喫茶店で聞けばいいか」

男は溜息混じりに幸から荷物を受け取る。幸は当たり前のように、男の腕に自分の腕をからめた。

「楽しかったよ、お父さん」

異形六話

この温泉街の中でも一番の高級ホテル。廊下には、プレートを掲げた重厚な扉が並ぶ。ふと、幸は、何か用事を済ませた後だろう、少し先を歩く仲居に気づき、音をさせず走り寄ると、後ろから抱き締めた。

「あはは、だ一れ、だ」

「お、お客様、困ります」

低い声で幸が囁いた。

「なんだよ、寂しいなあ。あたしの声、忘れたのかよ」

「うっ、うわああ」

仲居は腰を抜かし、尻餅をついてしまった。幸は仲居の前に回り込み、にっと笑った。

「やっぱり、あの時の瞳さんだ。元気にした」

「は、はい。おかげさまで・・・」

幸もぺたんと廊下に座ると、目を逸らそうとする瞳をじっと見つめた。

「転職じゃねえな、まだ、穢れた気配がある。ここで、何かあるのか」

「あ、あの、それは・・・」

「あたしさあ、十日間、父さんと旅をしてきたんだよ、湯治場で、できるだけ安上がりでさ。で、最後の日は思いっきり贅沢をしようてんで、このホテルに泊まってんだよな。あたしと父さん、いい気分て明日、チェックアウトできるかい。変なことにさ、巻き込まれたりしないかねえ」  
瞳は困ったように俯いてしまった。

「参ったなあ、そうなのかよ、しょうがねえな。うん、ところで、なんで、あんたなんだ」

「え・・・」

瞳がげげんそうに顔を上げた。

「あんた、実動部隊の指図する役だろう。指図されてんじゃねえのか」

一瞬、唇を噛み、瞳は俯いてしまった。

幸は無造作に瞳の顎を右手でくっと上げると、その目をにらみつけた。

「あんときの失敗で降格、平になって、二番手だったおっさんが今ではあんたの上司か。なんか、あたしのせいみたいじゃねえか、寝覚め悪りいな」

「いいえ、決してそうではなく・・・」

階段を上がってきたのか、足音がした。

「お姉ちゃん、やっと会えたね」

幸は笑みを浮かべ、瞳に抱きついた。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん、もう何処にも行っちゃ嫌だよ」

ぱたぱたと足音が寄って来る。

「お客様、なにか、従業員が粗相でも」

仲居が一人、あたふたと近寄ってきた。

幸は泣き濡れた眼差しで、近づいてきた仲居を見つめた。

「ごめんなさい、やっとお姉さんに会えたのが嬉しくて・・・」

「え、それは・・・」

仲居はとっさに状況が把握できずにいた、幸は立ち上がると、そっと仲居の手を両手で包み、その目を見つめた。

「名字は違うけど、生き別れていた私のお姉さんなんです。ずっと、探していて、やっとこのホテルに勤めているってわかって・・・」

幸はぼろぼろと涙をこぼすと、その仲居に抱きついた。

「やっと会えたのが嬉しくて。ごめんなさい、お仕事のお邪魔をして」

「そ、そうなの。良かったわねえ」

仲居は思わず心を揺さぶられ、貰い泣きをしていた。

「お母さん、ありがとう。あ、ごめんなさい、お母さんなんて言ってしまって、私、どうかしている」

幸は仲居の目を見つめ、涙を流したまま、そっと笑みを浮かべた。

「お母さんか・・・、久しぶりだねえ。くにのこと、思い出してしまうよ」

「お母さんにも娘がいるの」

「もう、長いこと、会ってないけど、どうしているだろうねえ」

「連絡取ってないの」

「嫌われているから・・・」

「そんなの、そんなの、絶対ないよ」

幸は仲居の目を見つめ、ぎゅっと手を握り締めた。

「色んな事情はあると思う、でも、心の底から嫌ったりなんか出来ないよ、ただ、素直になれないだけだよ」

幸は仲居の胸に頭を押し付け囁いた。

「葉書だけでも出してあげて。意地を張って返事は返ってこないかもしれない、でも、諦めなかったらきっと仲直り出来るよ」

「そうする、そうするよ」

仲居は嗚咽しながら、やっとのことで、そう答えた。

幸は振り返ると、瞳に寄りそい話しかけた。

「ね、お姉ちゃん、一緒に帰ろう、お父さんも悔やんでいるんだ。これからもう一度、三人で暮らそうよ」

「で、でも、仕事が・・・」

「何言っているんだい、妹さんがこんなにも・・・」

最後は言葉にならず、仲居は、泣き出してしまった。

「お姉ちゃん、908号室に泊まっているから、仕事が終わったら、とにかく来て。お願い、お願いだよ」

諦めたように瞳が小さく呟いた。

「戦線離脱か・・・」

「その方がいいんだよ、あんたにはさ」

幸がにいと笑った。

冒険に行ってきたと言いつつ、部屋を出て行った幸が気掛かりで、男は部屋をうろうろと歩き回っていた。海が大きく望める和室の上質な部屋だ。それが却って男を落ち着かせずにいた。全くの貧乏性である。

「お父さん、ただいま」

ドアを開け、幸が戻って来た。

「ああ、お帰り。充実した冒険ができましたか」

「もう大変、人命救助はもちろんのこと、吟遊詩人になって、愛を詠ってきたよ」

「なるほど、充実した冒険だったわけだ」

男は笑うと、窓辺に設えられたソファに座った。幸は男の横に座ると男の肩にもたれかかる。

「もうちょっとで大航海に出るところだったけど、お父さんの顔を思い出して帰って来た」

「それは良かった、幸がいなくなったら父さん、泣いてたかも」

「どんなふうに」

「子供みたいに大きな声で泣いていたかもね」

「幸は船の上でも、お父さんの泣いているの、聞こえたら、空飛んで帰って来るよ」

男はくすぐったそうに笑うと、急須からお茶を二つ入れ、一つを飲む。

「十日間、本当に賑やかだった」

「ね、色んな人に会った。また、いつか会いたいな」

幸が男のいれたお茶を飲む。

「お父さん、湯治場での自炊生活は新鮮だった。あ、こういう生活もあるんだなあって思った」

「共同生活みたいなものだからね。御味噌の貸し借りとか、お醤油分けたり」

「みんなの住所、聞いておいたから、また、葉書を出そう」

「幸は人気あったからね。なんていうのかな、父さんはね、色んな人と会って、幸の世界を広げて欲しいと思っている」

「うーん。幸はお父さんとこうして喋っているのが一番嬉しい。だから、本当はお父さんさえ居てくれれば狭くてもいいんだ。でも、お父さんの望むことしたいし、うまく出来て、お父さんが喜んでくれたら、とっても嬉しい」

「それはなかなか複雑なこと」

「乙女心は複雑怪奇なのです」

幸は眩気に笑うと、両足を男の太ももの上に投げ出した。

「幸はただいま充電中です」

ふと男は真顔になり幸を見つめた。

「ごめんなさい、これはやり過ぎだった」

「幸、父さんの膝の上に座ってくれるか」

「え・・・、あ、うん」

幸は男の膝に横座りになると、そっと男の顔を見上げた。そのまま、男は幸を抱き締めると、幸の耳元で囁く。

「今日で幸に名前をつけて一年が経つ、誕生日おめでとう。この一言をね、旅の間、ずっと言いたかったんだけどね、面と向かっては恥ずかしい、でも、幸の出来るだけ近くでそう言いたかった」

「ありがと・・・、お父さん」

「幸は一年でとっても成長した。とっても聡明で素敵な女性に成長したよ」

言い終えて、男は手を放した。

「もう、降りていいよ、ありがとう」

幸はそのままの姿勢で男を見つめる。

「お父さんもしっかり、幸のお父さんになってくれたよ」

「ありがと、その言葉、とっても、父さん、嬉しいよ」

幸は男の胸に顔を埋め囁いた。

「幸はお父さんを食べてしまいたいくらい好き。ほんとにもう、食べちゃうぞ」

男は幸の頭を優しくなでながら笑いかけた。

「父さん、食べられちゃうと、幸とお喋りできなくなってしまうよ」

「それじゃ、食べないで我慢してあげる」

幸は両手をのばし、男を抱き締めると、静かに静かに泣きだした。

男はホテルのロビーにある喫茶店で珈琲を注文した。たくさんの人達が行き交う。席も七割がた埋まっていた。

人を辞めた奴らが多い、心臓の代わりに仕込んでいるのは、呪宝具。呪いのかかった宝石、神木の破片、古代の指輪、倉庫屋ということか・・・

「お父さん、やっと見つけた」

「ん、幸、おはよう」

幸は男の横に座ると、少し拗ねたように男をにらんだ。

「ソファで一人寝ていた。起こしてくれればいいのに。お父さん、捜し回ったんだよ」

「起こすのは無理、だって、泣きながら眠ってさ、あんな可愛い寝顔、起こすのはもったいない」

「お父さんったら、もう。そういうのは平気で言えるくせに」

幸が照れながら言う、男がそっと笑った、

「何か頼みなさいな」

「お父さんと同じ珈琲にするよ、カウンターで注文してくる」

男を置いて、幸はカウンターへ向かった。男はしばらく幸の後ろ姿を眺めていたが、不意に俯くと、腰の後ろに手をやった。

良い運動になるか・・・

「お父さん、ケーキも二つ頼んで来た、ショコラ、美味しそうだったよ」

「珈琲にはちょうど良いね」

幸は男の横に座り、話しかけた。

「なんか、お父さん、変」

「可愛い娘に変と言われてしまうとはとっても哀しい・・・」

男は少し笑うと幸に囁いた。

「左目、瞑りなさい」

「うん」

男は幸の左目をそっと指先で触れ、そして、離れた。

「目を開けて、辺り、見渡してごらん」

幸の左目に男が見ている情景が映る、半数ぐらいになるだろうか、心臓の無い人間たちが、笑顔浮かべ行き交っていた。

「なんなんだ、これ」

幸は小声で呻いた。

「人には欲望がある、金持ちになりたいとか、有名になりたい、他人から称賛を浴びたい。色々な欲望がね」

「それがどうして」

「魔術師や術師は彼らの願いを叶えてあげようと囁く、ただし、心臓を預らせてほしい、そして、数年の間、その抜け穴に呪宝具を保管させてくれと言う。時間が経てば元どおり心臓を返すからと言ってね。ただ、多くの呪具宝は人の魂を食らう」

「だますってこと」

「確かに金持ちにもなるし彼ら、心臓を渡した奴らは喜ぶよ、でも、数年経てば、彼らの魂は消滅し、ただの人形として魔術師たちの道具になってしまう。つまりは思いっきり騙しているわけだ」

男は俯くと、そっと目を閉じた。

「お父さん、泣いているの」

「人は・・・、弱くて仕方がない。もっと賢明であればいいのにな」

幸はぎゅっと男の手を握った。

男はしばらくして顔をあげると、幸に囁いた。

「今夜は部屋に結界を敷いてしまおう」

「何があるの」

「呪宝具のオークションが開催されるだろうと思う。たくさんの呪宝具が一同に集まる。その影響で頭痛くらいで済むかどうかわからないからね」

ふと、幸はロビーを横切る仲居の姿を見つけた。幸がお母さんと呼んだ仲居だった。しかし、先程とは違い随分苦しそうに歩いている。良く見ると、頭や肩に黒い埃のようなものが被さっていた。

「お父さん」

「いいよ、行ってあげなさい。縁が出来たのだろう」

男は少し笑顔を浮かべると、珈琲を啜った。

「お父さんはどんな奴からも幸を守るから安心しなさい。さ、行きな」

幸は頷くと、その仲居に走り寄った。

「お母さん、大丈夫」

幸は仲居の前に立つと、心配そうに声をかけた。

「さっきの妹さんだね。今夜ね、葉書を書くよ」

苦しうにしながらも笑顔を浮かべる。

「苦しうだよ、どうしたの」

「はは、どうしたもんかねえ、疲れが急に出了たみたいでね」

幸は仲居をロビーの陰にやると、そっと後ろに回り、仲居の頭と肩を払う。幸の手を避けるように黒い埃が落ちて消えて行く。そして、最後にそっと背中をさすった。

「どう、少しは楽になった」

「あれ、どうしたんだい。平気になってしまったよ」

「良かった、お母さん、あまり無理しちゃだめだよ」

幸は仲居の前に立ち、そっと笑いかけた。

「誰かに背中をさすってもらうと体も心も楽になる。今ね、私は本当のお母さんだと思って背中をさすったんだ。だからね、お母さんの本当の娘が背中をさすってくれたら、もっと素敵だと思うよ」

幸は髪の毛を一本抜くと、仲居の手首に巻き付けた。

「お守りあげる」

「ありがとうね、本当にありがとう。今日はなんて良い日なんだ」

「それじゃね」

幸は小さく手を振ると、男のところへ戻って行った。

男はそっと幸の頭を撫でた。

「とっても幸は良い子です」

「お父さん、また、泣いている」

「だめだな、一度泣くと癖になってしまう」

「素直に泣けるお父さん、好きだよ」

「それ以上言うな、顔上げられなくなってしまうよ」

「お父さんは感激屋さんだ」

幸は幸せそうに男を見つめると、男の手にそっと手を重ねた。

男はひとつ大きく息をすると顔を上げた。幸がそっと男の目許をハンカチで拭った。

「ああ、父さん、なんか格好悪いな」

男は一口、コーヒーを飲み、少し笑った。

「もう大丈夫だ」

「お父さん、商店街の人達に言われてるよ」

「なんて」

「明るくなって付き合いやすくなったって」

「そうかもしれないな、以前より、感情が表にでやすい。多分、それは父さんが幸せだからだろうな」

「それは幸がいるからなの」

「そうだよ」

「それはとっても嬉しい。幸がお父さんの隣にいてもいいってことだから」

幸はにっと笑うと男の肩に体を預けた。

「お客様、こちらの方が御同席をご希望されているのですが」

「あ、瞳さんだ」

その声に、幸は顔を上げた、しかし、一瞬、目を見開くと跳ね上がるように立ち上がった。

「あんた、それ、どうしたんだ」

あわてて、幸は自分の口を押さえた。

「幸、言葉遣いは丁寧だね」

「ごめんなさい」

男はくすぐったそうに笑うと、瞳の隣りにいる初老の紳士を見上げた。

「これは懐かしい、私が子供の頃、親父の元で修行していた時以来ですね」

男は笑顔で立ち上がると、紳士に前の座席を勧めた。

二人は席に着くと笑顔で会釈をする。

「幸、その女性の手をしっかり握っておきなさい」

「はい・・・」

「しかし、驚きです。私はこんなおっさんになってしまったのに、神崎さんは私が子供の頃そのままですよ」

「健康には気をつけておりますのでな」

「なるほど」

男は含み笑いを浮かべると、じっと紳士を見つめた。

「それで、御用件は」

男が囁くように言うと、紳士は笑顔のまま答えた。

「今日は一晩、ゆっくりとしていただきたいと思いますな」

男は辺りを見渡す、いくつかの目が、魔術師達だろう、男の一挙手一投足に意識を集中していた。

「準備万端のようですね」



「私、臆病でしてな、準備は十二分にしておきたいのですよ、特に貴方のような方にお目にかかる時には」

「私は娘に災いがなされない限りは、旅行客としてゆっくりするつもりです」

「娘・・・、こちらの方はお嬢さんでしたか、また、なんとお美しい」

「私には過ぎた娘です」

「して、お名前は」

「娘の名前は秘密です、私、娘を溺愛しておりますので、男性には娘の名すら言いたくないのですよ、愚かな親とお笑ください」

「いやいや、これ程の美しいお嬢さんならそれも致し方ないこと、失礼致しましたな。つい懐かしい顔を見かけたものですから」

紳士はゆっくりと席を立ち上がる、男は紳士が立ち上がり切ったところで話しかけた。

「こちらの仲居さんはどうも神崎さんの部下のようですね」

「そのようなものですな。いや、以前はこれも優れた弟子だったのですが、不意に意気地をなくしてしまいよりまして」

紳士は否定もせず、世間話のように答えた。

「ただけませんか、彼女を。娘が執心しておりますので」

「こんなものでよければどうぞ」

紳士は厄介払ができたとでもいうように笑った。

「もちろんのこと、彼女の心臓も返していただきたい」

「代わりに何をいただけますかな」

「何が欲しいとおっしゃいます」

「ですな、無難なところでお腰の刀などいただけるとありがたい」

「これは私が数年前に買い求めたもので、なんのいわくもない刀ですがそれでよろしいのですか」

「いや、貴方がこの刀を使うのは多くのモノが知っております。面白いではありませんか、ある日、貴方の心臓にその刀が突き刺さっていけば」

男は愉快に笑うと、腰から刀を鞘ぐち抜き、紳士に手渡した。

「それはとても楽しいお話を聴かせていただきました。ありがとうございます」

「それでは」

紳士の体が薄れ消えて行った。

男は女性の胸で心臓が鼓動しているのを確認し、ほっと一息ついた。

「お父さん、今からでもあいつ殺しに行くよ」

幸が紳士の消えた後を睨みながら囁いた。

「奴はとても臆病だから、死ぬとでもなったら、たくさんの人達を平気で道連れにする。今はまだやめておいた方が良い」

「わかった」

「それより、瞳さんだったかな、部屋へ連れて行こう。まだ、しなければならぬことがある

でしょう」

幸も立ち上がると瞳に笑いかけた。

「お姉さん、一緒に行こう」

「もう、何がなんだか・・・」

蹲りそうになる瞳を幸は支えると、くすぐったそうに笑った。

「お姉さんの生命は幸が預かった、諦めな」

部屋に戻ると幸は瞳をベッドに寝かせつけた。ベッドルームもあるのだが、幸はベッドに寝ることができずにいたため、部屋をそのままにしていたのだった。

「幸、彼女の家族は」

「夫と子供、男の子が一人」

「どうか、お願いします。家族には危害を加えないでください」

男は柔らかな笑みを浮かべると、瞳に語りかけた。

「もともと、貴方はこちらの世界の住人ではないのでしょう。少し時間はかかりますが、私は貴方を居てしかるべきところに帰そうと思っています」

「幸、まずは彼女の家族を保護しなさい、二人を捕捉できますか」

幸は瞳の額に手を触れ、その目を透かすように見つめた。

「いま夫は会社、子供は保育園にいる」

男は両の手のひらを上に向け、ふっと息を吐く。そうすると、まるで始めからあったように、硝子細工の鈴が二つ現れた。

「この鈴を二人の魂に繋ぎなさい、そうすれば万が一危機に瀕しても音がそれを伝えてくれる」

幸は男から鈴を受け取ると、まるで水に手をいれるように瞳の顔に手を入れて行く。

「あ、ああっ」

「大丈夫だよ、瞳さん、痛くもなんともないでしょう」

「は、はい。変な感じですが、痛くはないです」

「お父さん、繋いだよ」

「それじゃ、次は、彼女を裸にしなさい」

そう言うと男は背を向けた。

「とにかく、瞳さん、自発的に脱いでください。幸、手伝いしなさい」

「お父さん、どうしてあっち向くの」

「父さん、男だからな。女性の裸を見るのはよくない」

「お医者さんは女の人裸も見よ」

「お父さんは医者じゃないし、それに幸以外の女性の裸は見ないように・・・、いや、そうじゃなく、なんていうか」

「お父さんのそういう少年みたいなところ大好き。後で、部屋付の露天風呂、一緒に入ろう」

「父親をからかうな」

幸は嬉しそうに笑うと、瞳を立たせた。帯をほどき、着物を脱がせて行く。瞳は幸がするのを逆

らわず裸になっていった。

「裸にしたよ」

「なら、ベッドに寝かせなさい」

幸は頷くと瞳をもう一度、ベッドに仰向けに寝かせつけた。

「これから、私はどうなるのでしょうか」

「教えない」

にっといたずらっぽく幸が笑う。

「幸、こういう状況で不安にさせないように」

男は相変わらず壁を見つめたまま幸を叱る。

「ごめんなさい」

「瞳さん、申し訳ありませんね。この子はまだ子供で。幸」

「はい」

「つま先から、頭、指先もちろん精査して、埋め込まれた異物をすべて取り出しなさい」

「わかった。さあ、瞳さん、痛くないからね」

幸はまるで水に手を入れるように、瞳の体に、その両手を入れ、揺らめかせる。

「両足に二つ、お腹にひとつ、心臓の裏には二つも小さな爆薬が埋め込まれている」

幸は、一つ一つつまみ上げるように瞳の体からそれらを取り出して行った。

「首の後ろ、これはホルモンを分泌している、あと、これは脳の最深部に入っている。電気信号を遠隔で操作できるようになっているよ」

「感情を操っているんだらうな」

男が答えた。

「でも回りの細胞が少し破壊されていて、今は機能していないよ」

「実験だったんだらう。うまくすれば忠実なロボットになる」

「お父さん、全部取ったよ」

「後はお風呂で穢れを流し落として来なさいな」

「お父さん、瞳さんの着替え、幸のでもいいかな」

「そうしてくれるかな」

「うん」

幸が素直に瞳を促し、露天風呂へと向かった。

男は先程の紳士が今回の呪宝具オークションの主催者だろうと考えていた。奴は何を企んでいる。何を得ようとしている。

幸は瞳の体をシャワーで流しつつ丹念に洗う。

「ま、前はいいです、自分で」

「ああ、なんか、幸、えっちな気分になって来た。ああん、お姉様あ」

「ごめんなさい、勘弁してください」

幸はくすぐったそうに笑うと、瞳の言葉に関係なく彼女の全身を洗って行く。

「頭痛も肩凝りも消えて行くだろう」

「は、はい。とても体が軽くなって来ます」

「その軽さがあんた本来の体の重さだ。随分と穢れが体の中まで染み付いている。大方は取るけど、後はあんた次第だな」

そして、瞳を湯船につからせると、幸も入った、十人程度は充分に入ることができるこの岩風呂からは、海に沈む夕日が独り占めできた。

「贅沢だねえ、旅の予算のかなりがこのホテルの宿泊代だ」

「あ、あの」

「ん、どうした」

「どうして、私を助けてくれて・・・」

「ああ、あんたが真面目すぎるからだ」

「真面目って」

「真面目な奴は、真面目に深みにはまり込んで行く、ちょっとやめておこうかななんて浮気せずにひたすら真面目に落ち込んで行く。そういうのが歯痒くてね。それがきっかけかな」

「私は真面目過ぎますか。そうかもしれない」

「過ぎるのは良くない。それに二度会うのも縁があったってことだろう。あんまり難しく考えるな、あたしもそんな考えて行動しているわけじゃない」

「それからな」

ふっと幸は思い出したように呟いた。夕日は半ば以上、海に沈み込み、天蓋はそれでも紅蓮に燃えていた。

「あんたがさっきの野郎に命令されて、秘密を探りに来たことなんざ百も承知だ、父さんもあたしもな」

瞳は、一瞬、目を見開き、脅えたように俯いた。

「今日最初に会ったのは偶然かもしれない、ただ、それをあんたは野郎に報告をする、そしてらさ、今の状況は必然になる。なあ、あたしはあんたの家族を守ってやる、あんた自身の体も異物を取り除き、命も安泰だ。他に何が必要だ。あんたがあ野郎と決別するにはさ」

瞳は唇をかみしめ、俯き続ける。

「勇気を持ちな。悔いのないようにさ」

男は困惑していた。瞳が男の前で土下座していたのだ。

「お願いですから、顔を上げてください」

男は瞳の前に正座すると、少し引きつった笑顔を浮かべた。

「まずは顔を上げてください、それからお話を承りましょう」

男は他人に頭を下げるのは嫌いだが、それ以上にこういう状況を苦手としていた。

幸も困ったように見つめていたが、しょうがないと吐息を漏らすと、瞳に話しかけた。

「姉さん、顔を上げてさ、気楽にね、そうじゃないと話が進まない」

瞳はやっと顔上げると、おずおずと話した。

「救っていただきありがとうございます。この御恩は」

「あの、そういうのいいですから」

男は困ったように手をぱたぱた振ると、しばらく考え込んだが、

「私は正義の味方でもなければ、善人でもありません。ただのお節介ですから、特に気にしていただく必要はありません。それと、瞳さんでしたね、先程から、以前何処かでお目にかかったような気がするのですけど」

「ごめんなさい、お父さん。まだ、言ってなかったけど」

幸が困ったように男に言った。

「あの時の、ほら、外神の時のおばあさんに変装していた・・・」

「あ・・・、あの時の人か・・・」

「申し訳ありません」

瞳が畳に額を擦り付ける、

「いや、あの、いいですから。貴方の立場もあったことでしょうし。ですから、顔を上げてください」

幸がくすぐったそうに笑った。

「本当に、お父さん、こういうの苦手だね」

「幸、傍観者づらしないように」

幸は笑うと、瞳の横に座った。

「瞳さん、ちょっとお茶飲も」

幸はお茶を入れると瞳に差し出した。

瞳はお茶を飲むと、やっと顔を上げた。

「まっ、瞳さん。十日間ほど、一緒に暮らしていただきます。その間に、体と精神を普通の人程度まで浄化しましょう。それと、今後、ご家族で生活して行かれる中で、呪的干渉を受けないよう工夫します。それで、きっぱり、この世界から縁を切れればいいでしょう」

「ありがとうございます。本当にありがとうございます」

「いいえ、どう致しまして」

男はほっと一息つくと自分でお茶を入れ、一口飲む。

「幸、昼間の奴はさ、父さんの親父のライバルだったんだ。当時、親父は先を越されたと悔しがっていたよ」

「因縁があるの」

「っていうかね、親父は権勢欲が強くてね、一大流派を作ろうとしていたんだ、自衛隊にね。閉鎖的で上意下達がしっかりしている組織だとやりよいからさ」

「そういう意味か・・・。それじゃ、瞳さんも」

「最初は直属の上司に奨められてでした」

瞳が、ぽつりと呟くように言った。

「精神修養によいと聞かされて・・・」

「そんなところだろうな。いずれは斬ることになるかな」

「お父さん、かなり怒っている」

男はふっと笑うと肯定も否定もせず立ち上がった。

「お父さんね、せっかくだし、露天風呂だけ入っておくよ」

「それじゃ、幸はフロントに事情を説明してくる。行こう、姉さん」

「あの、何を・・・」

「今から帰る準備。まだ、この時間なら帰りの列車もあるだろうし」

幸は当たり前のことのようにして答えた。

「瞳さんも荷物があるでしょうし、幸と一緒に行ってください。今夜はオークションがあるの  
でしょう、呪宝具の。奴がそれを主催する」

「は、はい」

「あれだけの呪宝具が集まる、これは奴にも幾分荷が重すぎるかもしれない。その上、私と幸が  
泊まっていたら、奴は監視と抑制用に半数は手下をこちらに回してしまう。呪宝具が暴走すれば  
この辺りが焦土と化してしまうかも知れませんが、それを抑える余力を奴に残しておくためにも、  
私達はここにいない方がいいのですよ」

そう言い残して、男は露天風呂へ向かいかけたが、はっと気づき幸に声をかけた。

「幸、絶対に」

「え、なに」

「泊まらずに帰るんだから宿代負けてとか言わないようにね。そういうの、恥ずかしい」

「はは、言うつもりだった。わかった、お父さんに恥ずかしい思いはさせないよ」

男は溜息を漏らすと部屋付の露天風呂に向かった。

漁船の灯火だろうか、

男は露天風呂に肩まで浸かりながら、夜の海を眺めた。そして、天蓋は満天の星空。

ああ・・・、思わず溜息が出てしまう。

その空に一瞬、一筋の光がきらめいた。

男が左手をその光に向ける。

男の左手には、刃先を心臓に向けた男の小刀が握られていた。

「本当に突き立てようとしたとはな」

男は呟くと、小刀を横に置き湯船で顔を洗う。

「急かせなくても帰るさ」

男は呟くと、もう一度空を見上げた。

静かだ・・・。なあ、親父、あんた、先越されて良かったと思うよ。さすがにさ、あんなふうには  
なあって欲しくないからな。

「ここは部屋風呂、大浴場の方へお願いできませんか」

男が振り返ると、十人はいるだろう、覆面で顔を隠した男たちがナイフ片手にして男に今にもと

びかからんと構えていた。

「風呂上がったら帰ります。ですから見逃していただけませんか」

「女の縛りを解かれた以上、今後、貴様は障害になる、早めに潰しておくのが得策と仰せつかって来た」

男の一人が答えた。

「神崎さんも相変わらず腹が小さい」

男は呟くと、声を発した男を見上げた。

「私を殺すつもりなのですが、それは無理ですよ。貴方の足は棒になってしまったから動かない、腕もほら、関節が固まってしまったでしょう。他の皆さんもそうですよ、体が固まって動けなくなってしまった」

男は湯船から上がると、何事もなかったように体を拭き服を着ると部屋へ戻った。

部屋に入ると、瞳が腰が抜けたように座り込んで震えていた。

「どうしました、彼らなら殺してはいません。半時間もすれば暗示が解けますから、それまでに帰りましょう。ん、幸は」

「あ、あの・・・」

ふと、男は入り口のドアが袈裟懸けに両断されているのを見た。

「ええっと、これは困ったな。瞳さん、オークション会場はどちらです」

「さ、最上階のホールです」

「では、行きますか」

男は瞳に肩を貸し立ち上がった。

男は幸の片手を、両腕、体全身の力で受け止めた。

なんて力だ・・・。

幸の剣先は仰向けに倒れた神崎の首、寸前にある、

「お父さん、こいつの首を刎ねる」

鋭い目付き、唇を結んだ幸の顔は神々しく思えるほど美しかった。

たくさんの参加者たちは幸の気配に弾かれ、後ろの壁にへばり付くようにして震えている。

「神崎さん、次はもう俺では抑え切れない、もちろん、この子を制止できる奴なんて何処にもいない、わかるだろう」

「わ、わかる、わかる」

神崎は脅え、後退りしながら喚いた。

「なら、今後、一切、かかわるな。あんたが手出さなければ、こちらからもかかわらない。」

「わかった、もう、一切、手は出さない」

「もしも、約束を破ったら・・・、これは言うまでもないな」

男は一瞬、腕を引くと、力の流れを変え、幸の懐に入り込むと右肩を幸の腹部に合わせ、力の向きをずらしながら立ち上がった。

男は幸を右肩にかつぎ上げる。

「さあ、帰るよ、幸」

「でも、でも」

「父さん、幸が人を殺して、幸の魂に傷が付くのいやだ」

「あたしはもう数え切れないほど人を殺している、今更、一人くらい増えてもかわらないよ」

「だめ、幸は生まれ変わって父さんの娘になった、とっても大切な娘にね」

男はばしっと幸のお尻を叩いた。

「痛いよお」

男はくすぐったそうに笑った。

「いい音がした」

「お父さんのえっち」

男は嬉しそうに笑うと歩きだす、そして蹲ったままの瞳の横を一步行き過ぎ立ち止まった。

「瞳姉さん、手え出せ」

幸は男の担がれたまま、瞳に笑いかけると、思いっきり両手を瞳に差し出した。

瞳はぎゅっと唇を噛むと両手を幸に差し出した。

しっかりと幸が瞳の両手を握り締める。

「一緒に帰ろう」

幸はにっと瞳に笑いかけた。

「お父さん、移動するよ」

「ああ、頼む」

一瞬で三人の姿が消えた。

夜の列車の中、幸は窓側に座る、その向かいには瞳がいた。男は幸の隣りでお茶を飲んでいる。

「私は変わることができるでしょうか」

男は眠り込んでいる幸の顔を覗き込む。

「瞳さん」

「はい」

「心配しなくても大丈夫、無理やりにも幸に変えさせられてしまいますよ」

「そうですね」

少し困り顔で瞳が頷いた。

「幸も家族が増えたようで嬉しいのでしょうか。縁とは不思議なものですね」

「本当に」

「短い間かも知れませんが、幸の姉になってやってください」

瞳は初めて安心したように笑顔を浮かべた。

「瞳姉さん」

少し寝ぼけ眼で幸は瞳を見つめた。

「瞳姉さん、お父さん、とっちゃやだよ。お父さんは幸のだからさ」

「取らないよ、もっとカッコ良ければわからないけど」



「うーん。ほんと、お父さん、幸以外、誰もお父さんがかっこいいの、わかってくれないよ。困ったな」

「お父さん、もてたらどうする」

「ん・・・、ライバルがない方がいいのかな。それじゃ、今でいいや」

男はくすぐったそうに笑うと幸の頭を優しくなでる。

「不思議なものだと思いますよ」

男はそう言って列車の窓を見る。窓には三人の顔が映っている。

本当に不思議なものだと男は思った。

## 遥の花 七話

---

### 異形七話

窓からの月明かり、瞳はそっと幸の寝顔を見つめた。

幸と瞳はこの十日間、一つの部屋に布団を二つ並べ寝ていたのだ。

明日が、ちょうど、十日目、明日の昼には幸に付き添われ自宅へと戻る予定だった。

瞳は上半身を起こし、そっと幸の顔を覗き込む。

月明かりに照らされた幸の、なんて神々しく美しい、それは人の域を遥かに越えた美だった。

「キスはやめてくれよ。あたしは父さん、一途なんだからさ」

幸は目を開けるとにっと笑った。

「ごめんなさい、起こしてしまって」

「いいさ、こんな綺麗な月を見ずに寝るのはもったいない」

窓からの月は冴え冴えと部屋の中を照らし出す、十分な明るさだった。

幸は立ち上がると、瞳に待ってなと言い残し、台所へ。そして、お盆にマグカップを二つ載せ戻ってきた。

「カルアミルク。アルコール入っているから、その内、寝てしまうだろう」

瞳はありがとうございますと言い、一口、カルアミルクを飲む。

「瞳お姉ちゃん、ここでの生活、楽しめたかな」

幸があどけなく瞳に囁く。

瞳がくすぐったそうに笑った。

「どっちが本当なの」

「え、何が」

幸があどけなく笑みを浮かべる。

「伝法な啖呵口調と可愛い女の子的なそれと」

「どっちも本当だよ。でも、お父さんにはとってもとっても可愛い娘でいたいから、必ず可愛くお喋りする。お父さん以外はその時の気分かな、たまに使い分けてもいるけどね」

幸は笑顔を浮かべるとカルアミルクを一口飲む。

「面白えだろ、そういうのさ」

にいと幸が笑う。

「幸ちゃん、それ怖すぎる」

「ごめんなさい、瞳お姉ちゃん」

くすぐったそうに二人が笑う。

ほっと溜息をこぼすと、幸はマグカップをお盆に置いた。

「出会って面白いもんだなあって思うよ」

ふっと幸が呟いた。窓からの月がそんな幸の横顔を玲瓏と映し出す。

「敵だった私なのに、本当に幸ちゃんや先生には助けてもらって、ありがとうございます」

「別に親切や善意で助けたわけじゃない。そんな気持ちで人を助けようと思ったら、限がなくてさ、こっちが参ってしまう。だから、たまたま偶然、助けただけだということにしている。だからさ、瞳姉さんも私やお父さんに感謝する必要はないんだ」

「難しいね」

「まあね、世界を牛耳る力があっても、そういうのは大変だし、柄じゃない。だから、お父さんも私も、基本、引き籠もりくらいがちょうど良い」

窓から月を見る。普段よりもその月は大きく、まるでその鼻面のクレーターまで見せようとするかに思える。

「瞳姉さんはこれからどうするの。自衛隊も退職したんでしょう」

瞳は少し目を伏せ考える、やがて顔を上げた。

「専業主婦をすることにした。隆も母さんに、実の母さんにね、面倒見てもらえばなしただし、随分と負担かけてしまった。贅沢しなければ、隆行さんの稼ぎで食べて行けるから。それでいいなと思う」

「なんだか、一年前からでは想像できないな」

幸がくすぐったそうに笑った。

「結果としては幸ちゃんにあれだけ脅されて良かったんだと思う。脳に設置されていた機械の周りが壊死していたっていうの、間違いなく幸ちゃんに脅された時に壊死したんだと思うよ」

瞳はそういうと少し笑った。

「駄目押しが効いたかな。あの時、お父さんが大変だったし、思いっきりかましとかなきゃ、反撃されると思ったから」

「それで私も正気に戻ったんだと思うよ。正気に戻ったら、私なんでこんなことやってんだろうと思ったけど、逃げ出す勇気がなかった。毎日、びくびくして暮らしていた」

「心臓が破裂したら終わりだものね」

瞳はただ頷いた、一瞬、その恐怖が蘇り、言葉を発することができなかつたのだ、なんて異様な世界にいたのだと改めて思う。

「人の生命があまりにも安易に扱われている。他の生命がとても軽いものとして見られている、その観念はいまそこいら中に広まってきている。難儀だねえと思うよ。いや、そうじゃないな、少なくともこの国の人間は、随分と昔から、他人の生命を軽く見積もってきた」

「幸ちゃんって、いったいなにもものなの。まるで人ではない、妖精とか神様のように思えることがある。商店街のおばあさんは神棚に幸ちゃんの写真供えて拝んでいるし、私にまで、ありがたありがたって合掌された」

幸は小さく笑うと、困ったように俯いた。

「あれは失敗だったな、少しばかり脅し過ぎた」

「いたずら、したってこと」

「おばあさん、手相占いが趣味のようだけど、あんたはたやすく人を占っちゃいけないよってのを、少しね、低い声で言った」

「あ・・・、それ、おばあさんの気持ち、手に取るように分かる」

「あれは反省している。機会見つけてゆっくり話をしてみるよ」

瞳がくすぐったそうに笑った。

「ただ・・・」

瞳が少し不安げに呟いた。

「ん・・・」

「明日からうまくやって行けるのかって思うと不安になる」

幸は呆れたように瞳を見つめた。

「うまくいくわけないよ」

「そんなはっきりと・・・」

「瞳姉さんの意思はともかく、一年近く、姉さんは家庭を捨ててしまっていたんだよ。亭主はもう離婚してしまおうかと思いつつも、息子のこと、そして姉さんの実の母親のさ、娘は必ず心を入れ替えて帰ってくるからって懇願でもってさ、なんとか、その日を過ごしているわけだ。亭主はともかく、母親は怒ってわめきたてるぜ」

「そ、そんな・・・」

「地べた、頭擦り付けてもさ、謝りなよ。まったくの他人じゃない、追い出されはしないよ」

「はい・・・」

「追い出されなきゃさ、時間をかけて、努めて家族を四人で創っていけばいい。瞳姉さんなら大丈夫だよ」

幸はそっと笑顔を瞳に浮かべると、瞳の手を両手で握った。

「大丈夫だよ」

「やっぱり、幸ちゃんは神様ですよ。私も神棚に写真供えよう」

「それだけ言えれば大丈夫だよ、瞳姉さん」

幸はカルアミルクを飲み干しお盆に戻す。

「姉さんち、隆君の壁に描いたいたずら書きやたまったゴミで大変だ、母親もへたばっている。今なら居場所があるよ、ここで散々、掃除や日常の細々としたことやったろう、役に立つよ」

「箒で床を掃いたり、雑巾で柱を拭いたり、へとへとになったけど、あれは」

「別に予行練習のためにやったんじゃない、結果として役に立つだけのこと。穢れを落として行くには、転換させるには、なにもさ、特別な呪文もなにもいらないんだ。ただただ、一所懸命、掃除すれば勝手に落ちて行く、それだけのことだよ」

「そうだったの」

「潔癖症にはなっちゃいけない、ただ、掃除という形で、芥を払っていけば、それで良い」

「ありがとう、でも、なんだか」

「ん・・・」

「年下の幸ちゃんの方がずっと年上で経験豊富に思えてきた」

「私もお父さんの娘になるまで色々あったからさ」

「それはいま尋ねてもいいこと・・・」

「私的にはかまわないけど、姉さんはそれを問うたこと、悔いと思うよ」

「それは多分、尋ねてはならないことなんだろうね、それじゃ訊かない」

「ありがと。やっぱり、瞳姉さんは分別のある良い人だね。お父さんから瞳姉さんに武術だけは教えなさいって言われて、どうかなと思ったけど教えて間違いなかった」

「え」

「姉さんの性根が真っすぐだったこと」

「武術ってのは体と精神を一つにするための技術。精神が体に寄り添うための手法でもある。瞳姉さんはこれから、自分自身と家族を護らなきゃならない、これは抽象的な意味でもあるし、具象的でもある。そのためにはさ、挫けない強さが必要になる、武術はそれを教えてくれるよ」

「なんだか、どう言えばいいんだろう。一から体の動かし方、歩き方、お箸の持ち方まで覚え直した気がする」

「瞳姉さんに教えた武術は私がお父さんに教えてもらったものに加えて、女性の動きに適した工夫を加えている。役に立つよ。まだ、途中だから週一くらいで教えに行くかな」

「来てくれるの」

「行くよ。っていうか、もう何度かお邪魔しているけどね。そうじゃなきゃ、さすがにあたしでも瞳姉さんちのことわからないよ」

「え・・・」

「いじめが原因で不登校になった高校生、でも、しっかりしなきゃって、健気にも学校に行こうとしている女の子、ふと、重そうに荷物を運んでいるお婆さんの鞆を持ってあげたことから心の交流が始まる。泣ける話さ」

「私のお母さんがそのお婆さんなの」

「明日は先に私が瞳姉さんちに行くから、その後から来てくれればいい、少しは、敷居を下げておくよ」

ふと瞳が溜息をついた。

「とても私には恩返しできそうにないよ」

「そんなものは破片ほどもいない。あたしはさ、父さんに初めて会った時、その父さんを殺そうとした。そんなあたしを父さんは娘として受け入れてくれて、不自由なくここで一緒に暮らしてくれている。武術や呪術はもちろん、生活の中での立ち居振る舞い、日常生活、料理の仕方まで教えてくれた、料理失敗しても美味しいって食べてくれる・・・、あたしはもう、父さんに申し訳ないやら、嬉しいやらで一杯だ・・・。だからさ、あたしは父さんにだけはとびきりの良い娘でいたいし、瞳姉さんや、手を重ねた人には幸せになって欲しいと願っている。それだけのことさ」

幸は涙声になり、そのまま俯く。

「お父さん、幸はお父さんが好きです。とっても・・・、とっても、愛しています。とっても、大切です。いつまでも、いつまでも、一緒にいてください。お願いします。お父さん」

そのまま、ごろんと幸は横になってしまった。

「月の夜はだめだ、饒舌になってしまう。ああ、お父さん・・・」

幸は小さく小さく泣き出した。

「幸ちゃん」

瞳はどう言えばいいのか分からず、布団にくるまってしまった幸に戸惑ってしまった。

幸がいきなり布団から立ち上がる。

「限界だ。ちょっとさ、お父さんの寝顔見て来る」

「え、あ・・・、うん」

男はふと目を覚まし、台所で明かりを消したまま、お茶を飲んでいて。月明かりが台所内を仄かに照らし、さほどの不自由はない。月見の季節ではないが、団子のひとつでも買ってあげれば良かったと思う。

「お父さん、ここにいたの」

「ん、幸、どうしました」

「だって、部屋にいないし、どうしたのかって」

「ちょっとね、2、3分かな、お茶飲んでた。なんか、ありましたか」

「え、ううん、なんでもない」

「幸、おいで」

男は少し笑みを浮かべると幸を手まねいた。

男の隣りに座る。男は幸の目許を人差し指で拭った。

「泣いていたな、瞳さん、帰っちゃうの寂しいのか」

「そんなんじゃないよ。寝ぼけただけだよ」

「幸は泣き虫さんだ」

男が小さく笑う。

幸はそっと男の肩にもたれ掛かった。

そして、男の湯飲みを取ると一口飲む。

「ちょっと薄い」

「濃いとね、眠れなくなりそうだからさ」

「お父さんは寂しくない。明日、幸、夕方までいないよ」

「寂しいなあ。でもね」

「ん」

「幸が計画したこと、それを頑張ろうとするのが、なんかね、嬉しくて、誇らしいからさ。父さん、寂しくても大丈夫さ。そうだ、写真、飾って、うまいくようにって拝んでおくよ」

「そういうのはいいよ、もお。八百屋のおばあさんにもしっか言わなくちゃ」

男はくすぐったそうに笑うと、幸の頭をなでる。

「さあ、もう寝なさい、父さんももうすぐ寝るからね」

幸は立ち上がると男の後ろに立ち、男の頭をなでた。

「幸はお父さんに頭をなでられるのが好き、とっても気持ちがいい。お父さん、頭、なでられる感想は」

「初めて頭なでられた。なるほど、いい気分、なんか、気持ちが優しくなって来る」

幸はにっと笑うと、男の肩に体を寄せ、少し回り込んで口付けをする。

「おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

幸はそっと自分の部屋に戻った。

男は考える、もしも、二十代、せめて、半ばまでに見つけ出せていれば、俺は幸を娘としてではなく、妻として向かえることが出来たのではないか。いや、しかし、俺の二十代は、まさしく鬼と呼ばれた時代、何も考えず、幸ごと切り刻んでいたかもしれない、そう、なにもかも。

思うだけでも恐ろしいことだ、この歳で出会えて良かったのかもしれない。

「幸ちゃん、御機嫌」

「え、そうかな、そんなことないよ」

「顔が笑ってる」

「そうかなあ、ふふっ」

「心配して損した」

瞳は嬉しそうに布団に潜り込む幸を見て楽しそうに笑った。

異形八話

「お父さん、好きな人ができたの。結婚を前提にお付き合いしていて・・・」  
深刻な顔をした幸の唇から言葉がこぼれて行く。夢ではない、現実には俺の前に幸が立っている。  
昼過ぎ、台所で珈琲を飲んだ後のことだ。椅子から立ち上がろうとしたところに、幸の告白。  
いつの間に・・・、いや、いまはそんなことを考えている場合じゃない、俺はどう答えればいい。  
何か言わなきゃならない。なんて言うんだ。

まさか、こんな言葉が幸の口から出るなんて思いもしなかった。俺は、俺は・・・。  
俺は幸の父親だ。そう、幸の父親なんだ。

「その相手の人は普通の人」

「え・・・、あ、うん」

「そっか、良かったね」

「お父さん、幸、いなくなってしまうよ、寂しくない」

男は努めて笑顔を浮かべ、優しく言った。

「とっても寂しくて哀しい。でもね、これは娘を持つ父親が通らなきゃならない道だ。それに幸は普通の道を歩いて行く方がいいんだよ、その方が幸せだよ」

男はふらつきそうになるのを堪え、立ち上がった。

「ごめん、ちょっとね、部屋に戻るよ」

「お父さん」

「心配しなくていい、ちょっとびっくりしただけだから。音楽でも聴けばね、すぐに落ち着くからさ」

男は少しふらつきながら、部屋へと戻った。

静かな音楽をかけ、仰向けに寝転がる。

結婚なんてだめだ、幸はずっと父さんと一緒にいるんだ、本当はそう言いたい。ああ、なんて醜いことを俺は思うのだろう、情けない。

自分の手を見ても、冴えない中年男の手だ。こんな俺が幸に懸想してどうする。ましてや、自分の娘にだぞ。落ち着け、俺の一番大切なのは何だ、幸が一番大切だ。幸がこんな世界から抜け出すためにも、普通の人と普通に暮らして行くのが一番良いんだ。

そうだ、これが一番良いんだ。

男はうつ伏せになると、低く低く声を押し殺して泣く。蹲るようにして、泣き続けた。

少し辺りが薄暗くなったころ、幸が部屋の外から声をかけた。

「お父さん、晩ごはん作る、ね」



男は幸の声に気づくと、努めて落ち着いたように答えた。

「なんだか寝てたよ。すぐ行くからさ、台所で待っていてくれるか」

「うん・・・」

足音が離れて行く、男は部屋の灯りをつけ、窓に映った自分の顔を見つめた。目が腫れてる、泣き過ぎだ、みっともないな。男は襖を開け、洗面所に向かった。

晩ごはんを食べ終え、幸はそのまま編みかけのマフラーを取り出すと、俯いたまま編み始めた。今はもう春、1月には仕上がるはずだったのだが、模様を浮き出させるのが難しいらしい。作っては解き、手間を掛けている。

「良い色だね、柔らかいクリーム色だ」

「うん、でも、難しいよ」

「そうだな、根気がいるね」

俺はなんてつまらないことを言っているんだ。男は自身に絶望を感じつつ、ふと窓から外を見つめた。

白い月が虚空に輝いていた。

そうだ、教えておかないと大変なことになる。

「幸、庭にいいかな」

幸は手を止めると、マフラーを下ろした。

二人は裏庭に出た、梅の森だ。臘梅をはじめ、幾種類もの梅が無数に森を成し、競うようにその花を咲かせていた。裏庭は男とその父親が作り出した異界に繋がり、無限に広がる森を形成していたのだ。

見上げれば真っ白な月が天蓋に浮かぶ。

「幸、父さんの前に立ちなさい」

「はい」

男の前に幸が立つ。

「両方の手を上げて、その手のひらを月に向けなさい」

幸は男の言うままに両手を月に向けた。

「月の光を体に取り込む」

男は幸の後ろに立つと、幸の両肘を両手で支えた。男が静かに息を吸い込む、男の手が白く光り出した。それは月の光と同じ、ひそやかな色だった。

「光の通路を作るよ」

幸の腕が手のひらから肘まで、白く光り出した。

「どんな感じがする」

「腕の中をさらさらと水が流れていく」

男は頷くと、両手を放し、一步、退いた。

「今度はその感覚を肩まで伸ばしなさい」

男の言葉に幸の腕全体が白く輝きだした。男は自分自身が半年近くかけて身につけたこの修法が一度で幸がこなしてしまったことに驚嘆を憶えた。

「自分の両手を見てごらん」

「なんだか、白く輝いて、腕が蛍光灯になった感じ」

「蛍光灯ですか・・・」

男は少し笑うと、幸の前に回り込んだ。

「両手を重ねて、お臍の上に置く、お腹の中に光が入っていくように」

指先を通して幸のお腹の中に光が入っていく、そして、光が消えた。

「それでいいよ。あのな、父さん、ね。外神、あかねちゃんの時のホテルでさ、幸にえっちなことした、謝ってなかった、ごめんな」

「あれは幸が・・・」

「父さん、とつてもさ、えっちな気持ちになってたんだ。幸、体が千切れるように痛かっただろう」

「うん・・・」

「あれはね、父さんのえっちな気持ちが伝わって、意識外のところで幸が恐怖を感じたせいだ。長い間の苦痛がそうさせるんだろう」

幸は驚いて目を見開いた。

「幸、月の光は、少なくとも体だけはさ、その痛みや傷を防いでくれる、お腹の中に蓄えておきなさい。そうすれば、幸もお母さんになれるからね」

男は幸から離れると、梅の木に背を預けた。

「部屋に戻りなさい、まだ夜は寒い」

「お父さん、あの、あのね」

「ごめん、幸。今日の父さんはとつてもだめな奴だ。でも、明日には普通に戻るから、それまでね、一人でいたいんだ、ごめんね」

「お父さん、幸はそんなつもりじゃなくて」

「大丈夫だよ、明日にはけろっとしているさ。それに幸が普通の女の子になったら、お父さんは忙しくなる、幸や幸の家族をこちら側からの干渉から守らなきゃな。父さん、とつても強いからな、安心しなさい」

幸はぼろぼろ泣きながら呟いた。

「字は「無」。その姿を捉えたもの、いまだなし。ただ、一陣の風止みし時、切り裂かれた魔物、地に落つる。それ、お父さんでしょう。幸、知ってるよ」

男は手を梅の幹に重ね、息を吐く。閃光が走り、月の光が爆発した、白い輝きが梅の森を駆け巡り、森が一瞬、真昼になる。

「ああ、懐かしい名前だな。幸のためなら、父さんはとつても強くなるよ」

光が消え、森は夜に戻ったが、男が背を預けた梅の木だけが、やわらかな燐光を残り火のように放っていた。

「でも、今晚だけは怠けさせてくれ」

男はずるずると梅の木に背を預けたまま座り込んでしまった。

「明日になれば祝福するからさ」

幸はぼろぼろと涙を流しながら、男の元へ歩き寄る。

「お父さん、お願い、幸を捨てないで」

「何言ってるんだか。幸が父さんのとってもね、大切な娘であることは変わらないさ」

「お父さん、あれ嘘だよお、幸の好きな人はお父さんだけだよ。結婚なんか、しちゃだめって言うってくれるかなあって思っただけだよ。お父さん、幸から離れないでよ」

男はその言葉に目を見開いたまま、幸をじっと見つめた。

「そっか・・・、良かった」

「お父さん、ごめんなさい」

男はふっと笑顔を浮かべた。

「今からでも良いかな」

「え・・・」

「幸は結婚しちゃだめ。だって、父さん、幸と二人っきりで、ずっと一緒にいたいからさ」

男はふふっと笑うと、左手を幸に向けて伸ばした。

「おいで、幸」

幸は駆け寄ると、男に思いっきり抱きついた。

「痛ったた・・・。頭の後ろ、梅の幹にぶつけてしまったよ」

「えへへ、ごめんなさい」

「泣いた女の子が、もう笑った・・・。なんだか、幸は笑ってくれている方がいいな。泣いている幸も可愛いけどね」

「もう、幸、お父さんには嘘つかないよ」

「いいよ、嘘ついてもね。全て、信じてあげるさ」

男はふっと力を抜くと、梅の梢を見上げた。

「桜も良いんだけどね、はらはらと花びらが落ちていくのがね、少し寂しい。梅の方が好きだな。頑張るさ、花を落とさずにいようとしてくれるからね」

男はそっと幸の頭をなでる。

「幸は華奢な女の子だけど、父さんの心の中の、ほとんどを占めているよ。ああ、見上げればおぼろに光を放つ、満天の梅の花、父さんの心の中と同じだな」

「お父さん、もう少し、こうしていようよ」

「風邪ひくぞ」

「大丈夫だよ、お父さんはとっても暖かいから。とっても暖かいよ」

「父さんは幸専用の湯たんぽだな」

男は指に幸の髪を絡めると、ほっとしたように笑顔を浮かべた。

異形十話 最終話

花見と言っても、桜の花を愛でるといような風情はない。所狭しと屋台の並んだ先、公園を一步入れば、満開の桜が青い空をその無数の花びらで見事に遮ってしまう。

しかし、一度、視線を落とせば、ビニールシートの青が辺り一面、賑やかな花見客が持参する小さな空にあちらこちらと埋め尽くされている、まるで、空にいるようなものだ。

男はビニールシートの端に座り、缶ビールを少しずつ飲んでいて。商店街の花見、幸がしばらく前から、週に一度、魚弦で1時間ほどだが、手伝うようになり、そのよしみで男も商店街の花見に参加したのだった。

「先生が来てくれるなんてびっくりだよ」

洋品店の女店主が男の前で笑った。しばらく前に膝を痛め、折り畳みの座椅子にすわっているのだが、それが正座する男の背の高さにあい、ちょうどいい話し相手になっていた。

「私も、こう賑やかなところは初めてですね」

男は笑顔を浮かべると、缶ビールを横に置いた。

「昼下がりの暖かな日です、見上げれば桜色の空」

「いいねえ、贅沢だ」

女店主は笑うと重箱に詰めた巻き寿司を一つ食べる。柔らかな日差しが心地よい。

「幸ちゃんもすっかり元気になったねえ」

「幸はしっかり働いていますか」

「佳奈ちゃんの横で声張り上げているよ」

「良かった」

「先生は幸ちゃんのことになると、ほんと、うぶな少年みたいな顔になるねえ」

「この齢で少年と言われても褒められた気にはなりません」

「褒めちゃいないってことさ」

女店主は声を出して笑うと、重箱を男に差し出した。

「今年はあたしじゃなくて、娘が作ったからさ、少し甘すぎるけど食べてみなよ」

「ひとつ、いただきます」

男が一つ巻き寿司を食べる。

「美味しいですよ、娘さんというと、お姉さんの方ですか。確か、妹さんは、どちらでしたっけ、嫁ぎ先が遠かったような」

「妹の方は結婚して正月くらいに、ちょっと顔を見せるくらいさ。姉は結婚もせずぐずぐずしているからさ、巻き寿司でも作りなって言ってやったんだよ」

男は笑って頷くと、もう一ついただきますと巻き寿司を食べる。

「先生さ」

「はい」

「姉の方の涼子をさ、嫁にもらってくれないかねえ」

男は笑いながら、首を横に振った。

「この齢で結婚は勘弁してください。もう元気もありませんし、幸との二人暮らしが板に付いてしまいました。今は二人でちょうどなんですよ」

「でも、幸ちゃんもずっと先生と一緒にというわけにいかないだろう、その内、好きな男連れてくるじゃないかい」

「どうなんでしょうね、来たらどうしましょう。虚勢を張って物分かりのいい親父を演じるか、それとも、聞きたくないと逃げ出すかな」

男がほんの少し溜息を付く。

「先生、幸ちゃんに惚れてるんじゃないかい」

「そうかもしれませんね」

女主人が呆れて笑った。

「相思相愛だねえ」

「え」

「昨日、幸ちゃんと珈琲飲みながらさ、言ってたよ。自分がお父さんのお嫁さんになるってさ」

「それは、なんて嬉しいこと」

男が笑う。女主人も釣られて笑った。

ふと女主人は真面目な顔になって男に言った。

「幸ちゃんからあの話は聴いたかい」

「ああ、商店街のイメージガールとかいうのですよね」

男は笑みを消し、缶ビールを一口飲む。

「幸は絶対嫌だ」

女主人の肩を揉みながら、幸が言い切った。

「わっ、びっくりした。幸ちゃん、いつの間に」

幸はにっと笑うと、それには答えず男に言った。

「お父さんも嫌だよ」

「そうだな、あまり目立ち過ぎるのは良くない。週一で店を手伝わせてもらうくらいでちょうどいい」

幸はほっと安堵の表情を浮かべる。

「母さん、幸にも色々ね、事情があるのさ」

幸は女主人に笑いかけると、今度は首の後ろ辺りを柔らかく揉み出した。

「母さん、気持ちいいかな」

「なんだか、背中が軽くなっていくようだねえ」

「母さんは少し猫背、もっと胸を張ってえらそうにしてください。お喋りはとってもえらそうな

んだから」

「はは、幸ちゃんに叱られた」

女主人が気持ち良さそうに笑う。

「ね、お父さん、デートしよう。せっかくの桜だもの、恋人同士は桜の下で愛を語らなきゃ」

「父さんは愛よりも食い気だな、屋台が気になってしょうがない」

男はすっと立ち上がるとブルーシートから降り、靴を履く。

「母さん、行ってくるよ」

「ああ、いっといで」

幸は女主人に笑顔を浮かべると、男を追って走りだした。

二人が出掛けた後、ふっと佳奈が女主人のところにやって来た、商店街の大所帯、人が多く、二つに別れて花見をしていた、男どもが騒いでいるのは一つ向こうのブルーシートだった。そして、佳奈は男共の酒の世話をしていたのだった。

「おつかれさん。なんだか、向こうは賑やかだねえ」

佳奈はお茶を一口飲むとほっと一息ついた。

「男は女を召使いか何かぐらいにしか思っていないんですよ」

「男なんてそんなもんさ、昔、亭主もそうだったねえ。大酒飲んで、女房こき使うのが、男の甲斐性のように言ってたもんだ」

佳奈は頷くと、一つ、巻き寿司を食べた。

「美味しいです」

「涼子に作らせたのさ。まあまあって感じだね」

「涼子ちゃん、もう随分、見ていないですよ。確か、学校の先生でしたよね」

「教師もこの頃は忙しいらしいよ。あたしですら、たまにしか顔を見ていないんだ」

女主人は一つ溜息を付き、ビールを開けた。

「さっき先生にね、涼子を嫁に貰ってくれって言った」

「うわっ、それで・・・」

「躊躇なく断られてしまった」

「そりゃそうですよ。先生、幸ちゃんに恋愛してますもん、で、先生、生真面目だから、そんな自分を許せないというか、感情を抑え込んでいますから」

女主人がにやっと笑った。

「純な男は少しばかり苛めたくなるねえ」

「人が悪いなあ。でも、面白いですけどね、そういのは」

「ただ、問題は親子だってことだ。最近世の中が変になってか、親子ほどの年齢の差の夫婦も珍しくはないけど、でも、本当の親子ではねえ」

「大丈夫ですよ、だって、本当の親子じゃ・・・。うっ」

女主人が驚いたように目を見開いて佳奈を見つめた。

「それじゃ・・・、男共の様子を見て来ます」

立ち上がりかけた佳奈の裾を女主人がしっかりと捉えた。

「待ちな。そういう面白い話は最後までしておくれ」

「うわあ、佳奈さん、喋っちゃった」

「どうしました」

男は隣りを歩く幸に話しかけた。

「あのね・・・、前にね、佳奈姉さんに買い物付き合っただけで、ちょっと喋っちゃった」

「なんて」

「あの、あのね。お父さんは本当のお父さんじゃない、だから、幸はお父さんを一人の男として愛することができるって。・・・ごめんなさい」

「それを、いま、佳奈さんが洋品店の叔母さんに喋ってしまったってことか」

男はくすぐったそうに笑った。

「戻ったら、どんな顔して出迎えてくれるかな」

「お父さん、怒らない」

「どうして」

「だって」

男は少し笑うと立ち止まった。

「ちょっとビールでね、父さん、酔ってしまっているのかもしれない。だからかな、それが楽しく思える、不思議だな」

「お父さんは酔っ払いだ」

幸は笑って男の腕を抱きかかえた。

ただ、心配です、あなたのことが

私のことですか

はい、あなたの日常を崩してしまうやもしれません

私の日常は

私がいることで商店街の皆様とあなたの中に諍いが生じれば大変なことになります、ただ、私が皆様の希望をお受けすれば、きっと、たくさんの人達に私の存在が知られ、良くないモノ達が現れるようになります

さて、まず、何から申し上げますでしょうか

はい

私の日常、それは君が私の隣りに居てくれること、それが私の大切な日常なのです。それ以外の日常は私にはあり得ません。そして、君がたくさんの人達に祭り上げられるのは、昔、君が人身御供になったことと、私には重なるのです。だから、私はどうしてもそれを認めることができないのです。

君が思う以上に、私には君が必要なのですよ、君がとても大切なのです。

あなたは本当に私を大切にしてくださいます、私はあなたにどれほどのものをお返しできるでしょうか。

もしも、かなうなら。

はい

いつまでも君の隣りにいさせてください。それだけが私の願いです。

わたしのようなもので良ければ、必ず。

「そうだ、お父さんにいわなきゃ、って思っていたことがあるんだ」

幸は見上げると、にっと笑った。

「何をです」

「幸は一杯勉強しているよ、昨日、DNAの本を読んだんだ」

「遺伝子とかだったかな」

「幸はお父さんから体をいただいた、つまり、お父さんと幸のDNAは同じってことだよ、一卵性双生児みたいに、普通の兄妹や親子よりも、ずっとずっと近い存在なんだ。これは幸にとって、とっても嬉しいことなんだ、お父さん、手を出してみて」

幸は男の左手を取ると、自分の掌の指紋と見比べる。

「あ・・・、指紋は違うなあ」

「指紋まで一緒というなら同じ人になってしまうよ、幸は幸という個性なんだからね」

男は笑顔を浮かべると幸の手をそっと握った。

「幸の手は柔らかくて優しい感じがするよ」

男は手を離すと、自分自身の掌を見つめた。

「父さんの手はざらざらだ」

男は笑うと後ろ手に両手を組む。

「それがお父さんの個性なのです。幸は好きだよ」

「つまりはだよ、先生は幸ちゃんが商店街のイメージガールにならないほうがいいと言ってる、で、幸ちゃんも絶対嫌だと言っている」

「本当の親子じゃないってことは秘密ですよ、誰にも言わないでくださいよ」

「大丈夫さ、あたしゃ、佳奈ちゃんよりずっと口が堅いさ」

女主人は笑うと、腕組みをして考える。

「そうか、駆け落ちだな。これは」

「変なこと考えないでくださいよ」

「いやいや、つまりはだ。先生と幸ちゃんは相思相愛、惚れあっている。しかし、親子ほどの年齢の差、幸ちゃんの本物の親が認めるはずがない、で、二人、駆け落ちをした。しかし、ここで、商店街のイメージガールなんてことで盛大に顔を出したら・・・。うん、面白い、なんかわくわくするね。先生も人畜無害な顔してるくせにやることはやるもんだ」



佳奈はどう収めれば良いのか、思い浮かばずうろたえていた。

「よし、あたしゃ、応援するよ。二人を添い遂げさせてやろうじゃないか。一肌も二肌も脱いでやるよ」

「あ、あの、おばさん」

「ん」

「あの、えっと、あの二人は、多分、ですけど、こういうどっちともつかずの状態を楽しんでいる、と思うんですよ」

「そりゃ、どういいことだい」

「恋愛中というか、そういう、なんていうのかなあ、甘酸っぱい時代を楽しんでいるとか」

「しかし、先生もいい齢だよ、ってというか、いい齢なんかとっくに過ぎちまってるよ」

「でも、幸ちゃんにとっては、今のこの関係が」

女主人は、うーんと唸り考え込んだ。

「そうだねえ、なにも女が男に合わせなきゃならないわけじゃない。幸ちゃんには、まだまだ、楽しむ時間が必要なのもかもしれないね」

「そうですよ、幸ちゃんもあの齢で主婦やらせるのは可哀想ですよ」

「しょうがない、当分、見守ってやるだけにするかねえ。うん、ほら、噂をすればだ」

佳奈が振り返るとタコ焼きの包みを両手に幸が駆け寄って来た。男はお好み焼きの袋を持っていた。

どうしよう・・・、佳奈は一人呟いた。

「母さん、佳奈姉さん、ただいま。タコ焼き、食べよう。お好み焼きもあるよ、リンゴ飴も」  
男もブルーシートの荷物を置くと、

「それじゃ、ちょっと」

「あれ、先生、どこに」

「あちらで、ちょっとお喋りして来ます。佳奈さん、幸の相手してくれないかな」

「あ、あの。先生」

男はにっと佳奈に笑いかけると、もう一つの宴会場へと向かった。

「どうしたの、佳奈姉さん。顔色悪いよ」

げげんな顔をして、幸は佳奈に尋ねた。

「あ、あの・・・、喋っちゃった」

「なにを」

「えっと、あの」

幸は笑みを浮かべると、すっと人差し指で佳奈の唇に触れた。

「言わなくていいよ。幸は佳奈姉さんが好きなんだからさ」

手を離し、幸は女主人に話しかけた。

「母さんは歩くとき、膝を突き出すように歩く、だから膝を痛める」

幸は女主人の前に座ると、両手を女主人の膝に重ねた。

「母さん、膝全体が暖かくなってきましたでしょう」

「なんか、膝の中が柔らかくなっていくようだ」

幸は手を離すと、立ち上がり、女主人の両脇に手を差し入れ立たせた。

「手を離すよ」

幸が手を離す、女主人は信じられないと自分の膝に触った。

「ぜんぜん痛くないよ、いや、以前より調子が良いくらいだ」

「でも、今までと同じ歩き方をしたら、また、膝を痛めることになる。ゆっくりとね、ちょっと、膝を伸ばし加減にして、足の裏、全体で地面に着くように歩くといいよ」

幸は笑うと、タコ焼きとお好み焼きの袋を開けた。

「いっぱい買ってきた、みんなで食べよう」

「大将、俺は感謝しているよ。幸が魚絃さんにお世話になってからさ、人見知りもなくなってね、本当にありがたいと思っている、でも、それだけは勘弁してくれないかな」

「先生、なにもたいしたことじゃなくてさ、商店街で作るポスターのまんなか、幸ちゃんに大きく笑顔で写ってくれればいいんだだけなんだ」

男は困ったように笑顔を浮かべた。

「少しばかり事情があってね、幸を写真とかにね、写されたくないんだよ」

魚絃は腹を括ったように男を睨んだ。

「それは先生のエゴってもんじゃないかい」

「いや、事情があるんだよ、簡単に話せるような理由ならいいんだけど、詳しいこと、言うわけにいかないんだよ」

「みんな言ってるぜ」

「何をかな」

「先生が幸ちゃんを溺愛して、無理やり、そのなんだ、男と女の間隙を作って、幸ちゃんを苦しめているってな」

「ん・・・、それは誤解だ。確かに大切な娘だからさ、愛しているって言っても間違いじゃないけどね。それは噂や妄想が一人歩きしているだけだよ。幸が働いていてさ、そんな陰があるかい、無理強いされてそうに見えるかな」

「それは・・・」

「頭下げるよ、今回の話はなかったことにしてくれよ。頼むからさ」

「こっちこそ頼むよ、先生。俺ら、もう決めたんだ、これで行こうってな」

いつの間にか、商店街の男たちが男と魚絃を中心に車座にすわっていた。

「息子が大学へ行くんだ」

魚絃の隣り、金物屋。

「大学のな、入学金があるんだ、もうけなきゃならないんだよ。あの子が商店街に来てから売上があがってんだ。なんとか、ここでどんと儲けたいんだよ」

後ろからパン屋。

「近くにできたスーパーから客を取り戻すんだ、そのためにはポスター作って、幸ちゃんに商店街のテーマソングを歌ってもらうんだ」

男は小さく溜息をつく。

魚絃が駄目押しに、男に言った。

「商店街で先生に帳簿つけてもらっているのは、俺んちも含めて半分以上だ。それがなくなったら先生も辛いんじゃないかい」

男は寂しそうに笑うと立ち上がった。

「ここは引き下がらせてもらうよ」

男はブルーシートから出、靴を履いた。

「先生、わかってくれたのか」

魚絃が大声で言った。

「いや、明日にでもね、預かっていた書類、全部返すよ。俺は娘が最優先なんだ」

「馬鹿野郎」

罵声に、男は哀しそうな笑顔を浮かべ背を向けた。

「お父さん、どうだった」

幸が齒にアオノリを付けたまま、戻って来た男に話しかけた。

「予想どおりだった」

「そっか……。ごめんね、お父さん」

「あの、うちの亭主、先生に失礼なこと言ってなかったかな」

「ん、大丈夫だよ、佳奈さん。なんだかな、幸も佳奈さんも齒にアオノリがついている」

男はくすぐったそうに笑った。

「や、やだっ」

あわてて幸はお茶を飲んだ。

「先生、まあ座りなよ」

「いえ、今日はこれでお暇します、急ぎの用事ができたものですから。幸、膝はどうだった」

「膝の半月板修正と軟骨の増強、母さん、普通に歩けるよ」

「それは上々」

男は笑うと背を向けた。幸はあたふたと靴を履き、男にしたがった。

「それじゃね、佳奈姉さん、後片付けお願い。母さんも気を付けてね」

幸はにっと笑いかけると、男を追って駆け出した。

二人の姿が人込みに紛れ消えて行く。

「先生って何者なんだい」

女主人が呟いた。

「え……」

「まるで普通の人間じゃないように見えた」

「へんなこと言わないでくださいよ」

「初めてだ、先生の後ろ姿が透けて見えたような気がしたんだ」

「そんなことあるわけじゃないですか」

「そ、そうだね」

女主人は落ち着こうと、お茶を飲む。

「は、あれ、あたしゃ惚けちまったのかい」

女主人が叫んだ。

「佳奈ちゃん、先生の名前、名字はなんていったっけ」

「え、それは、それは・・・」

佳奈は自分も男の名が思い浮かばずにいるのに気が付いた。何だったろう、事務所の看板を思い出してみる、封筒に印刷された名前を思い出そうとする、下の会計事務所は思い出せるのに、どうしてだろう、始めから知らなかったかのように、男の名字が思い出せない。

「叔母さん、先生のところ、行って来ます」

「なんだか変だ、頼んだよ」

「はいっ」

佳奈はあたふたと靴を履くと駆け出した。公園を飛び出す、公園の入り口には何件もの屋台が並んでいる。

辺りを見渡す、たくさんの人だ。

とにかく、先生ちへ行こう。

しかし、佳奈は立ちすくんでしまった。そして、力が抜けたように、膝をついて、しゃがみこんでしまったのだった。

「先生ち、何処だったろう」

呟いた。なんで、先生のところ、思い出せないんだ、今まで、幸ちゃんと先生ちでお茶を飲んだり、それから書類の控えを持って行ったりしていた、道が分からないなんて、そんなことあるはずがないのに。

佳奈は人目もはばからず叫んだ。

「先生、幸ちゃん」

「どうしたの、佳奈姉さん」

振り返ると、幸が両手に屋台で買ったお好み焼きの袋を持って立っていた。

「あ、あの、あのね」

「あ、姉さん、涙出てるよ、もう、しょうがないなあ。お父さんは徹夜で書類を仕上げなきゃって帰っちゃったし、幸はさ、晩ごはん用にお好み焼き買ってたんだ。」

幸は少しかがむと、佳奈の目許を袖で拭った。

「佳奈姉さんは大人なのに迷子だ」

幸は笑顔を浮かべると、佳奈を立たせた。

「先生の家が分からなくなった」

「それはしょうがない。お父さんは幸を守るために、商店街の人達との十年間の縁とこれから先を切ってしまった、幸は、まだ佳奈姉さんや母さんと縁が繋がっているから、こうして会えるし

、お喋りもできる」

幸は寂しそうに笑みを浮かべた。

「佳奈姉さん、お父さんの家を思い出そうとするのじゃなく、幸の家を、幸の家の場所を思い出そうとしてごらん」

佳奈がほっとした顔をする。

「思い出せたみたいだね。しばらくはあの家にいるから、佳奈姉さん、遊びに来て。楽しみにしているから」

幸が歩きだそうとするのを、佳奈は両手でしっかりと止どめた。

「お願い、幸ちゃん。これじゃ、納得できないよ」

「困った・・・」

幸は背を向けたまま呟いた。

「場所を替えよう」

そう幸が呟いた途端、人の姿がすべて消え、全くの無音となる。取り残されたように屋台だけが立ち並ぶ。

「ここは」

「違う次元の世界、この世界には佳奈姉さんと幸の二人っきりだ。誰も聞き耳を立てる奴はいないから安心なんだ」

幸は屋台に設えられた丸椅子に座る、両手の袋を屋台の軒先に置いた。

「佳奈姉さん、お喋りしよう、隣り、どうぞ」

幸が優しく笑みを浮かべる、佳奈はほっとしたように幸の隣りに座った。

「すべて話すかな、でも何から話せば良いのかな」

幸は少しうつむいた。

「そうだね、幸のこと、そして、幸とお父さんの関係から話ししてみるか」

「幸ちゃんのこと」

「うん、正直に話すよ」

「ありがと」

佳奈が呟いた。

「佳奈さんは人の心を聞く。例えばね、誰もいないのに、いないはずなのに声が聞こえたことはないかな」

「今はほとんど無いけど、子供の頃は多かった」

「手を見せてみて」

幸は囁くと、佳奈の手を取り、手首を見る。

「守髪（もりがみ）が入っている。これはお父さんの父親の髪だ、縁があるのかな」

幸は自分の髪を一本抜くと、佳奈の手首に巻く。その髪は手首の中に融けるようにして消えてしまった。

「覚えているかな、子供の頃、男の人にこんなふう到手首に髪を巻いてもらったこと」

「そうだ・・・、思い出した、小学生の頃、法螺貝持ったしゅけんじゃ。いきなり目の前にやっ

て来て、自分の髪の毛を抜いて、あたしの手首に巻いた」

佳奈はそっと笑みを浮かべた。

「もう大丈夫だよって言って、そのまま去って行ったんだ」

「佳奈姉さん、良かったね。幸はさ、出会えなかったんだ、そういう人に」

幸は笑みを浮かべると、視線を外し少し俯いた。

「声の主は、妖怪、あやかし、魔物、或いは祟り神と呼ばれている奴らだ。声を聞いてしまえば引かれて食われてしまうよ」

「本当にいるの、そういうの」

「いる、でも、佳奈姉さんは大丈夫だ。幸の守髪はそんな奴らを微塵も寄せ付けない」  
にと笑うと幸は佳奈の手を握った。

「あたしのいたところは・・・、ううん、幸のいたところは迷信深いところでね、祟り神を畏れ敬っていた。幸は霊媒体質で、心の声も聞く、ついでに随分と美人だ、きっと神様もご満足いただけるだろうと人身御供、生け贄にされたんだ。」

「そんなことが今でも・・・」

「百年以上昔の話さ。あたしは祟り神の腹の中で百年、生きていた、つまりもう人間じゃなくなっていた。あたしは祟り神に使役されていた、男を女の魅力で引き込んで、そいつを祟り神に食わせる、餌みたいなものだ」

幸は佳奈から手を離すと、空をぎゅっと睨みつけた。

「そんなことが本当にあるの」

「現実を一步踏み違えて、穴に落ち込んだら、そういう奴らが口を開けて待っているのさ」  
幸はふっと息を漏らすと佳奈に笑いかけた。

「信じてくれる、佳奈姉さん」

「信じるよ、第一、こんなさっきまでたくさんの人達がいたはずの桜の公園が、本当に今、幸ちゃんと二人っきりになっているんだから」

「ありがと」

幸は小さくふふっと笑うと嬉しそうに言った。

「お父さんに会ったのは、およそ二年前。いつものように男を引き込み、体売って、祟り神に食わせる餌になって、そう、いつものように・・・」

「お父さん、違ったんだ。あたしが裸でベッドにいるんだぜ、どんな男でも理性なくしてむしゃぶりついてきた。でも、お父さんは世間話をするんだ。そして、祟り神が正体を現わした時、あっけないくらいあっさりと、奴を退治して、あたしを助け出してくれたんだ」

「でもね、あたしは既に人間じゃない、奴と一心同体みたいなものだった、だから、あたしも死んでいくしかなかったんだ」

「そのとき、お父さん、こう言ってくれたんだ。生きることを選びなさい、私の命を半分あげようってね」

幸は呟くように言うと、自分の手のひらを見つめた。

「この体も血も命も、お父さんに半分分けていただいたもの。この体にはお父さんと同じ血が流

れているんだ」

「だから、幸ちゃんはお父さんが好きなの」

「それもある、でも、本当に女としてあの人に惚れたんだ。もう、あたしには親も姉弟もいなかった、救い出してもらっても行くところなんかなかった。あの人はそのなら私のところに来なさい。年齢的にも親娘でいいでしょうって言ってくれた。あたし、今なら妻にしてくださいって言ってたかもしれない」

「一緒に暮らすようになってね、幸せになりなさいという思いを込めて、お父さんはあたしに幸という名前をくれたんだ」

「普段の先生からは想像がつかないよ」

「そうだよ、お父さん、もっとかっこいいところ、外に出したらいいのに。地味で正直が一番楽って言ってるんだから」

幸は少し声を出して笑う、とても幸せそうな声だった。

「ただ、お父さんにはとても迷惑かけた。佳奈姉さんに初めて声をかけてもらった時」

「背中向けてうずくまってたね」

「大きな声がとても怖かったんだ、だから、佳奈姉さんに声をかけてもらってとても嬉しかった」

佳奈が照れ臭そうに笑う、まるで少女のような幼い笑みだった。

「お父さんのところに来た頃、いつもはね、人が怖くてね、おとなしくしているけど、たまに、なんだか不安で一杯になって、もうわけ分からなくなると、大声あげて意味の分からないこと喚き出したり、障子やふすまを破ったり、硝子割ったりもした。もう、自分自身がどうしようもなくなるんだ、そして最後には部屋の隅でうずくまってぶるぶる震える」

「お父さん、一度も怒ったことないんだ、抱き締めてくれて一緒に泣いてくれるんだ、もう大丈夫だよ、ここは幸の場所だ、安心していいんだよって、繰り返し言ってくれる。そして、こんなこと言うんだよ。棚がつぶれたりして大変だなあって思うけど、板買って来て、こう、鋸で切る、その時、幸が板の片方をしっかり押さえてくれているのを見ると、親子っぽくっていいなあなんて」

「そう、嬉しそうに言ってくれる、幸の心はとろとろになる。ああ、もう、お父さん、大好きって思ってしまうんだ」

「ただ・・・」

幸は微かに視線を落とした。

「お父さんは自分が死んだ後のことを考える、幸が一人でも生きて行けるように考える、お父さんは凄い武術使いで、映画に出て来るような魔法使いだ。お父さんは全ての術を幸に教えてくれた。どんな敵にも勝てるように。そして、たくさんの友達が出きるようにも考えてくれた、佳奈姉さんにこうしてお喋り出きるのもそうだし、いろんな友達や知り合いもできた、幸一人じゃ、到底できなかった」

幸はふっと顔を上げ佳奈に言った。

「幸はとても美人だろう、性格はともかく」

「うん、見れば見るほど完璧な美人だと思う、性格は・・・、だけど」

「微妙な言い回し、ありがと。でもね、結局は、美人ってのが問題なんだ。この美人ということで、神様が喜ぶだろうと生け贄にされた、そして、今は商店街の男達が売り上げ向上を狙って幸を御輿に載せようとする」

「亭主もその話になると眼の色変わっていた。何考えているんだ、こいつって思ったよ」

「幸は一度魔物にさらわれた身だ、魔物を引き込みやすい体質になってしまっている、その上、そんな思いが膨れあがっていくと、いろんな妖しい奴らが近づいてくる。いろんな面倒ごと、不可思議なことが増えていく、その内、みんな頭が固まってしまって、もう助かるにはこれしかないって幸は妙な神様に捧げられてしまうのさ」

幸は沈んだ表情になると少し猫背になり頬杖をつく。そして、ひたすら前方を見つめた。

「顔に傷をつければ、こんなことはなくなるだろう。ざっくりと頬にでも切り傷をつければいい」

佳奈は幸の沈んだ声に驚いた、幸の表情を長い髪が隠している。

「でも、この体はお父さんにいただいたもの、この体には絶対に傷をつけない」

ふっと幸は背伸びをすると大きく深呼吸をした。

幸は佳奈に笑顔を向けた。

「佳奈姉さんにはとっても大切にしてもらった、幸のこと、気にかけていただいた。だから、幸のこと正直に話したんだ」

「どう、答えればいいのかわからないよ。話が重すぎて」

佳奈はひとつ溜息をつく、幸を見つめた。

「お姉さん、幸ちゃんの頭、なでて上げるよ」

「うん、ありがと」

佳奈が幸の頭をなでる。

「幸ちゃんはえらいよ、がんばった」

「うふふ。頭、撫でられるの好き」

そして、幸は立ち上がると佳奈の後ろに立ち、そっと佳奈の頭を撫でる。

「気持ちいいでしょ」

「いいね、気持ち良い」

「佳奈姉さん、今回のことで、大将たち男を怒っちゃだめだよ」

「殴ってやろうかと思う」

「それはだめ。もともと男なんてガキで我が儘な種族なのさ」

「先生も」

「お父さんは別、だって、幸のお父さんだもの」

佳奈は愉快に笑った。

「あ、お父さん、引き返して来た。元の世界に戻るよ」



その一言で、二人の回りにはたくさんの人達が行き交う公園入り口の前に世界は姿を替えた。

「お父さーん」

幸が男に声をかける、男は笑顔で手を振った。

「遅いからどうしたのかと思った」

「幸が襲われたと思った、誘拐されたって思った」

「いや、幸が誰かを襲ってんじゃないかとひやひやした」

「わっ、ひどいな、それ。幸は優しい女の子なのにさ」

幸が佳奈に同意を求める。

「幸ちゃんはかわいい、かわいい」

「感情がこもってないよ」

佳奈が愉快に笑う。

「ほんと、良い子だ」

男がすまなそうに笑った。

「佳奈さんには迷惑かけて申し訳ない」

「本当に男ってのはどうしようもないバカタレだよ」

「はは、返す言葉がないよ」

「先生、聞きたいんだけどさ」

「なんだい」

「あたしらは友達かい」

「ああ、共通の特技を持つ友達だ」

「これからもかい」

男は柔らかく笑顔を浮かべた。

「もちろん、これからもね」

「安心した、これが一番の安心だよ。先生は嘘だけはつかないからさ」

男がくすぐったそうに笑う。

「いい人だよ、佳奈さんは」

男がそっと幸の頭に手をやる。

「佳奈さん。幸は佳奈さんを本当に自分の姉のように慕っている、これも縁というやつなのかな。我が儘なところもあるだろうけど、これからもよろしく頼むよ」

「ええっ、幸は我が儘じゃないよ。自分の意見を優先するだけさ」

「楽しい妹だ。飽きないねえ」

「それじゃ、佳奈さん、帰るよ」

「母さんも一緒に来てね、仲間はずれにすると叱られちゃうよ」

「ああ、そうするよ」

佳奈は小さく溜息をつき笑顔を浮かべた。

男が少し会釈をする、背を向けようとしたとき、佳奈は思いだしたように言った。

「先生」

「ん・・・」

「あのさ、言いにくいんだけどさ・・・、怒らないでよ。先生の名字や名前なんだっけ」

「うわ、ひどいなあ。十年以上のつきあいだよってね」

男はポケットから名刺入れを取り出し、ペンで名前を書き込んだ。

幸がその名刺を取ると、佳奈に手渡した。

「由緒のありそうな名字に名前だ、似合わないね」

「ああ、だから、誰にも教えなかったのさ。初めて人に教えたよ」

「えっ・・・」

佳奈が顔を上げた瞬間、男の姿がふいっと薄れそのまま消えてしまった。

「本当にお父さん、魔法使いでしょう。恥ずかしがり屋のね」

「うわあ、面白いねえ」

「それじゃあね、必ずだよ」

「ああ、明日にでも行くよ」

「楽しみにしてる」

幸は一瞬、寂しそうな表情を浮かべたが、にっと笑うと手を振り駆けだした。

幸の姿が人影に消えるまで佳奈はそのまま見送る。

ふいに佳奈はしゃがみこむと、小さく溜息を漏らした。

先生や幸ちゃんで行くのもありなのかなあ、そんなふうにも思う。

でも、子供の顔を思い浮かべると、あいつらをしっかり育てなきゃって思うし、蹴っ飛ばしてやろうかという亭主だけど、あれでいいところもある。

あ・・・、泣いているのかなあ、涙出ていないのに。

「どうだったい、佳奈ちゃん」

「あ、おばさん」

女主人が駆け寄って来た。

「遅いからどうしたんだと思ってね」

佳奈は立ち上がると、少し笑った。

「幸ちゃんが明日、遊びに来てって言ってましたよ」

「そうか、会えたかい。良かった」

「本当に膝、大丈夫になったんですね」

「前より調子いいくらいさ。ん・・・」

女主人が佳奈の顔をのぞき込む。

「泣いてんのかい」

佳奈はなんにも言わず、女主人にしがみつくと小さく小さく泣きだした。

おとうさん

ん、どうしました

幸はなんだか割り切れない複雑な気持ちだ、こんな変な気持ち初めてだよ

哀しいとか、楽しいとかね、人の気持ちってのは、そんな単純に表すことはできない  
哀しくて楽しかったり、相反する気持ちがいろいろ混ざり合って人は苦しむ  
つまりは、幸が一人の人として成長したってことだ  
人になるっていいことばかりじゃないね  
そうさ、でも……。本当に嬉しいなあってこともあるからさ、たまにはね。

終わり

## 遙の花 流堰迷子は天へと落ちていく 一話

---

異形 流堰迷子は天へと落ちていく 一話

短編幻想小説『異形』の続編です

月曜日 18 7月 2011 at 12:42 pm.

潇洒なホテルのラウンジ、碧のドレスを見に纏った女が一人、カウンターにいた。深い海の色をしたカクテルを前に、物憂げに頬杖をついている。

若い男が一人、何げない仕草で女の隣に座った。

「君の瞳はどうして虚ろなんだい」

女はふっと顔を男に向けた。

赤くひいた唇が妖艶な気配を漂わせる美しい女だった。

「好きな男が席を外している、それだけのこと」

「君みたいな素敵な女の子を独りにしておくなんて信じられないな」

女は吐息を漏らすと、男を軽く睨んだ。

「そこさ、あたしの待ち人の席なんだ。外してくれないかな」

「どう、俺と夜を楽しまないかい」

女は初めてにっと笑った。

「我が儘な奴だなあ」

「男は永遠に少年なのさ、欲しいものはどうしても欲しい」

女は引き込むように笑みを浮かべると囁いた。

「そんな我儘ばかり言っていると、君を食べちゃうぞ」

にいいいと、女は笑う、八重歯が白く輝いた。

瞬間、魂が抜けたように若い男が固まってしまった。

「少子化に拍車をかけてしまいました」

「いいのさ、お父さん。こういう女の敵は去勢しておかなきゃね」

幸は平気な顔して、戻ってきた男に笑いかけた。

男は幸の隣に座る若い男の頭を軽くぽんぽんと叩き、話しかけた。

「ここでのことはすべて忘れなさい。そして、ドアを開けて出て行きなさいな」

若い男は無表情のまま、操り人形のように立ち上がるとすたすたと歩いて出て行った。

「ふっ、命冥加な奴」

「何言ってるんだか、思いっきり悪役の台詞だよ」

男は椅子に座ると、幸のカクテルを見つめた。

「素敵な色だね、海の奥底から空を見上げればこんな色なのかもしれないな」

「お父さんの気障は許してあげます、天然だから」

「思ったことを言っただけのこと」

幸はにっと笑うと顔を寄せた。

「何飲む」

「こういうところで烏龍茶とかいうと叱られるのかな」

「大丈夫じゃないかな」

幸はバーテンに声をかけた。

「烏龍茶をお願いします」

バーテンは表情を変える事なく、烏龍茶の小瓶を取り出すと、グラスに継ぎ、男の前に置いた。

男が一口飲む。

「お茶は美味しいな」

幸はくすぐったそうに笑うとカクテルを飲む。

「なんだか、幸はとても御機嫌だな」

「そりゃそうだよ。贅沢晩ご飯だよ、一カ月分の食費を一晩で食べるなんて信じられないよ」

「いいじゃないか、一年が13カ月あると思えば良いだけのこと」

「なるほど。今晚だけはその考え方に賛成します、でも、残りの30日はお水だけです、ふふっ。とにかく、旅の最後の晩、最後くらいは贅沢と思ったけど、男の人の金銭感覚はだめだ、明日から幸がしっかり儉約を教えてあげるよ。このドレスだって、ハイヒールだって、値札一桁間違えているのかと思ったよ」

「でも、幸に似合っているよ。その唇もとても素敵だ」

幸が恥ずかしそうに笑う、まるで子供のようなあどけない笑みを浮かべる。

「冒険して思いっきり赤いのにしたんだ。ね、お父さん」

「ん」

「幸、この一年で背が伸びたよ。ハイヒール履いたら目の高さ、お父さんと同じなもの」

「そういえば、顔付きもちょっと大人びた感じがする」

「幸はいい女になりましたか」

「とってもいい女になりました」

幸は足をばたつかせながら、にひひっと笑う。

「そういうところは子供だ」

「だって嬉しいんだもの」

男は笑うと、立ち上がり、支払いを済ませた。

「そろそろ行こうか」

「うん」

立ち上がった途端、幸はバランスを崩し男にしがみつく。

「酔ったかな」

「うん、足がなんだか軽い。でも、ハイヒールって初めてだからそれもあるよ」  
男は笑うと、幸の腰に手を回し、そのまま、ずっと2センチほど、腕全体をあげる。  
「これでいいかな」  
「えへへ。体が浮いて、楽ちんです」  
男は少し笑うと、もう片方の手でドアを開けた。

男は夜の住宅街を幸を背負って歩いていた。慣れないハイヒールに幸が音を上げたからだった。  
「ごめんなさい、お父さん」  
「ん、いいよ。父さん、気づいてやれずにごめんな、足、痛かったろうに」  
幸は両手を男の首に廻すと、そっと頬を寄せた。  
「お父さんは幸のためにいっぱい頑張ってくれる、幸はそんなお父さんに一体どれほどのものを返せば良いんだろう」  
「そうだなあ、多分、父さんは幸が居てくれないと、何もせずにそのまま部屋の隅で衰弱死してミイラになってしまいます、だから、父さんを捨てないでください」  
男はくすぐったそうに笑った。  
「幸もお父さんが居なくなったら、狂ってしまうよ。そして全世界を破滅に導いてしまうと思う」  
「世界平和のために一緒にいなきゃな」  
「うん」  
幸が幸せそうに笑った。  
「お父さんは、酔うと子供みたいにかわいくなるなあ」  
「そして、酔いが醒めると年甲斐もないことを喋ってしまったと考え込んでしまう」  
男は言葉を繋ぐと少し息を漏らす。  
「父さんの個性とと思ってください。父さんさ、最初、頑張っけて幸をしっかり育てなきゃって思ったけど、ああ、ちょっと違うんだって気づいたな」  
「どう違うの」  
「幸は事の善し悪しをしっかりと自分で考えることができる。父さんが頑張っけて幸を立派な人間に育てようなんて思わなくても、ちゃんと育てられている、父さんが幸に育てられているくらいだ」  
「それはお父さんがいてくれるからだよ」  
「娘にそんなふうに言ってもらえるなんて、父さんは幸せだ。・・・ん、ちょっと饒舌になっけてる、まだ、食前酒が残っているのかな」  
「酔ってるお父さんも好きだよ」  
「ありがと」  
男はそっと笑顔を浮かべた。  
あの角を曲がれば、家が見えてくる。一年間、留守にした家だ。

「お父さん」

「ん」

「家なかったらどうしよう」

「それは困るな」

「ね、もう一度、旅に出ようか」

「タコ焼き屋さんとクレープやりながらか」

「うん。車の中はとっても狭かったけど、ぴたっとお父さんに引っ付いていて楽しかった」

「そうだな、車屋さんから、車を返してもらって、貸倉庫に入れた荷物を出して」

「今度は南へ行こうか、お父さん」

「次は日本を出てみたいな」

「何処行く」

「スペインに行ってみたいな、夕日に染まる宮殿を見たい」

「それじゃ、幸はスペイン語勉強するよ」

「楽しみだ。でも、本当は」

「ほんとは」

「居間で大の字になって寝そべりたい気分である」

幸は男の背中で笑うときゅっと頬を寄せた。

「その気持ち、とっても分かるよ、お父さん」

漆黒の闇の中、二人の家が一年ぶりの男と幸を出迎えていた。

「あったね、でも、他人の家みたいだ」

「家は生きている、いまは仮死状態みたいなものだよ」

男は幸を背負ったまま、門を入ると配電盤のブレーカーを戻す。門柱のあかりが灯った。

そして、幸が男の背中から手を伸ばし、鍵を解錠した、玄関の戸を開く。

一步、足を踏み入れあかりを灯した。静かに家は息を吹き返し、二人はやっと自宅に戻って来たと感じることができた。

「降ろすよ」

「うん」

幸はやっと男の背中から降りると玄関の廊下に立った。廊下が一面、白い粉を被ったようになっていた。

「うひゃあ、埃だらけだよ」

「一年ってすごいな」

幸はぱたぱたと台所へ駆け込むと、絞ったぞうきんを持って来た。そして廊下を拭いて行く。

「お父さん、拭いたところを歩いて」

「ありがとう」

男が靴を脱ぎ、廊下を歩く。

「お父さん、今晚は廊下と居間だけでも掃除をするよ。お父さんは座ってて」

「大丈夫、箒で掃いて行くよ。それより、幸、ドレスは脱ぎなさい、碧が灰色になってしまおうぞ」

「うわっ、大変だ」

幸は男に背を向ける、男は背中の中のチャックを降ろした。

「ありがと」

幸がその場でドレスを脱ぎ出す、その姿は少し大人びた、非のうちどころのない理想的な体型だった。

男が慌てて、目を瞑り背中を向けた。

「お父さん、意識した」

ドレスを脱ぎ、下着になった幸が笑う。

「ガーターに網タイツがとっても蠱惑的だよ、それにこの赤い唇、お父さんに赤い印をつけてあげよう。」

「早く何か着なさい」

男が背を向けたまま言う。

幸は男の背中に体を寄せると、耳元で囁く。

「お父様、幸、とっても体が熱いの、お父様の体で冷やして欲しいよ」

そっと幸が左手で男の胸を、右の手のひらで男の臍を服の上から押さえる。

「熱いのなら風邪薬を飲んで寝なさい」

「風邪薬じゃ、この体の火照りは収まらない、お父様が抱いてくれなきゃ」

幸の右手の爪先がそっと下へ向く。

「お父様だって、ほら、首筋汗が出て来ているよ、ね、お父様」

「ええっと。早く着替えてきなさいっ」

「はあい」

幸が笑いながら、箒筒へ服を取りに行く、男は疲れたように、そのまま座り込んでしまった。

絶対の信頼を幸は俺に抱いてくれている、その信頼を損なうことは俺にはできない。

硝子戸を開ける、隣りの塀が視界を遮っていた。

しかし、外からの風が心地いい。

「お父さん・・・」

男が振り返ると、普段着に着替え、化粧を落とした幸が青い顔をして立ちすくんでいた。

「それじゃ、箒で埃を外に、ん、どうしました」

「幸はえっちじゃないよ、えっちじゃない。ごめんなさい、お父さん」

「さっきのことか」

「洗面所で化粧を落としたら、恥ずかしくなったんだ、おとうさん、幸を嫌いにならないで」

男は柔らかに笑みを浮かべる。

「色んな幸がいて、父さんはどきどきしたり、わくわくしたり、あたまかかえたりで大変だ。

でも、それはとっても楽しいこと。楽しいと思えるのは幸が大好きだからだよ」



男が手を差しだした。

幸が男の胸に飛び込んだ。

「ごほっ」

幸が咳き込む。男がそっと幸の背中をさすった。

「埃だらけのところに走りだすんだから」

「だって」

「さ、立ちなさい、この部屋、掃除しなきゃ寝るところがない」

男は幸を立たせると、箒を持って部屋を掃きだした。

「お父さん、庭がない」

幸が叫んだ。庭には幸が畑を作り、その向こうには梅林が続いていたはずが、すぐそこに隣りのブロック塀が見えていた。

「幸、気づくのが遅すぎるよ」

「まさか、思いもしなかったんだもの」

「一晩過ぎれば元に戻るさ。この家とあの空間は父さんの存在が鍵になって繋がっていた、一年の間にそれが切れてしまっただけ。戻って来たから、また、繋がるよ。幸の畑がどんなふうになっているかはわからないけどね」

「良かった・・・」

ほっとした顔で幸は、男の掃いた後から、固く絞った雑巾で畳を拭いて行く。

一通り部屋の掃除を済ませると箒を片付ける。幸はお茶を沸かしに台所へと行った。

久しぶりだな、親父。隣りの塀が見えるなんて。ここへ二人で来た頃のことを思い出すよ。

男が小さく呟く。十代半ばの頃のこと、男は目を瞑り思い出していた。

親父や祖父さんは幸の力をみずち家に取り込もうと捜していた。善意じゃない、幸と子供を為すことで、巨大な才能を持った後継者を得ようとしたからだ。でもさ、人の世にそんな力を持った存在はいらない、危険なだけだよ。

「お父さん、お茶入ったよ」

「ん、ありがとう」

男は湯飲みを取ると一口飲んだ。

「幸のお茶はとっても美味しいです」

「普通に入れているだけだよ」

幸が照れくさそうに笑った。

「ね、お父さん」

「ん」

「唐突だけどね」

「なにかな」

「鶏を飼おう、それと、山羊も。本当は牛だけど、なんだか大きくて大変そうだから山羊」

「いきなり・・・。さすがにびっくりした」

男は笑うと湯飲みをお盆に戻した

「新鮮な卵を食べることができそうだね」

「あのね、幸は自給自足がしたいんだ、旅の中でずっと思っていた。色んな人達と旅の中で関わって楽しかったけど。だけど・・・、ちょっと疲れた」

「自給自足か、そういうのもありかもしれないね」

「でも、仕事しなきゃだし、どうしよう。もう一度、会計事務所を始める」

「お客さん、譲ってしまったからね。譲った友人の会計事務所にアルバイトでって話はしていたけど、どうかな、一年も経つからさ」

「ね、ここでお総菜と喫茶店をやろう、事務所にテーブルと椅子をおいて。中古なら安くであるよ」

「でも、幸は人と会うのが」

「幸は牛乳と卵と野菜をお店に納品する業者さんになります。新鮮な卵や野菜を取り揃えてますよ」

男はくすぐったそうに笑った。

「楽しいだろうね。でも、それじゃ、父さんが喫茶店のオーナーになるのか。接客業できるかな」

「大丈夫だよ、この一年間でお父さん、随分、愛想笑いができるようになりました」

「ん・・・、父さんの的には悩みどころだ。でも、面白いかもしれないな」

幸は立ち上がると、昨年のカレンダー、四月を切り取り、裏向けて畳の上に広げる、そして、俯せに寝転んだ。

「お父さん、横」

「え、ああ、うん」

男も横に寝そべると、カレンダーの裏、白い紙を眺める。

「ここは、住宅街だからね、近所の人達をお客様にしなければなりません」

幸が鉛筆で「住宅街」と書き、丸で囲む。

「そしてこの辺りの人達は佳奈姉さんのいる商店街か、その隣のスーパーへ買い物に行きます。幸い、ほとんどの人が自転車か歩いて行きます」

「そうだね、車で行く人は少ないな、大きな買い物をする時くらいかな」

「そう、だから、歩いて帰る人達に、ちょっと寄り道してもらえるようなお店にするのです」

幸はにっと笑うと、お店を正面から見た絵を書きだした。

「何を売ろうかな」

「商店街やスーパーに売っているのと同じものは買ってくれないだろうな」

「そうだよ、今はたいていのもの、売っているからなあ」

男は真剣に考えている幸の表情が見ているだけで楽しく思えたがふと呟いた。

「専門店を考えたら」

「専門店、そうだ、オーガニックとか自然派とか、あんまりうさん臭くない程度で」

「そういえばハーブが随分育ったね」

「お父さん、ハーブティーを喫茶店に出そう、そして、ハーブティーのブレンドも販売する。」

「なら、お総菜も無農薬とかの路線かな」

「うん、幸、頑張って無農薬で野菜を作るよ。えっと、献立はどうしよう」

「たくさんの献立を毎回考えるのは大変だな」

「それじゃローテーション。季節ごとに」

「なら、半月で回転させる、つまり十五品、これと季節で、六十品目を回して行こうか、それくらいならなんとかなりそうだな。ただ、位置付けだな」

「位置づけて」

「いくつかあるおかずの一つになるか、これひとつでおかずになるか」

「うーん、値段帯をスーパーのと同じにするなら」

「お総菜は一種類だけ、量は一回の食事分、この住宅街はお年寄りの二人暮らしが多いからね、それを念頭に置く。売れ残ったら、それ食べなきゃならないから、あんまりたくさんは作れない」

「お総菜は三百円までにしよう、お父さん、パックとかさ、入れ物っていくらくらいするんだろう」

「まとめて買えば、随分安いと思うよ。ただ、自然派を言うなら、量り売り、蓋のできる容器か、深目のお皿持ってきてくださいかな、パックも販売はしますけど、って姿勢になると思うよ」

「うん、なんだか説得力があるよ、その方が」

幸は絵の横にお総菜三百円（量り売り）と書き、その下にハーブティーと書き添えた。

「喫茶メニューはどうしよう、ハーブティーも何種類か用意しようかな」

「ハーブティーは種類が必要だな。食事は軌道に乗ってからかな。そうだ、最初はハーブティーにスコーンとかビスケットとか添えるくらいでいいかもしれないね」

「お父さん」

「ん」

「もう、明日から喫茶店できそうだよ」

「はは、それはちょっとね。保健所とか、お手洗いの設備とか、もっと煮詰めなきゃな」

幸はごろんと仰向けになると嬉しそうに笑った。

「なんだか、とっても楽しいよ、わくわくする」

男はふっと顔をあげ、窓から外を眺めた。

「幸、外を見てみなさい」

「あ、塀が無くなった」

「幸の作った畑はどうだ」

「うわあ、随分と草が生えているよ。そうだ、お父さん、あの草は鶏の餌にしよう」

「そうだね、そして、浅蜷のおすましをいただいた翌日は」

「貝殻も砕いて、鶏の餌にする」

「よくできました」

男は笑うと体を起こした。

「もう遅いな。布団出そう」

「うん」

幸は素早く立ち上がると押し入れから布団を取り出す。

大きなナイロン袋に圧縮した布団。

「掃除機で、空気吸い込んでさ、お布団が薄くなったけど、重さは一緒なんだよね、なんか、不思議だ」

幸が袋から布団を出して行く。

「そういえばね、体積が小さくなると、なんとなく軽くなったような気がするんだけどね」

幸が布団を取りだし、敷いていく、二組の布団を寄せて敷いて行く。

「幸、ちょっと引っ付け過ぎ、もう少し離しなさい」

「だめだよ、お父さん。布団は夢を渡る舟、離してしまえば、夜の闇に離れ離れになってしまうよ」

「幸、その台詞、ずっと考えていたな」

「うふふ、妙に説得力があるでしょう、お願い、今晚だけはさ」

「まっ、いいよ。少しお酒が残っているのかな、眠たくて仕方が無い」

男は隣の部屋で寝間着に着替えると、部屋に戻って布団にもぐりこむ。

幸は布団の上でパジャマに着替えた。

「お父さんは幸が着替えるとき、目を瞑ってしまいます、どうしてですか」

幸も布団に潜り込み、にっと笑って男の顔をのぞき込む。

「これが父さんの幸への礼儀。幸は父さんにとって、とっても大事な人だから、大切にする、そのための礼儀」

「お父さんが、そう言ってくれるの、とっても嬉しい。だから、何度も訊ねてしまう」

「今度から、テープに吹き込んでおくから、それを聴いてください」

男が少し笑う。幸も楽しそうに笑った。

「お父さん、あかり消すよ」

「ああ、お休み」

「お休みなさい」

幸は明かりを消し、布団に戻る。

闇の中、幸は男の顔をじっと見つめている、その瞳に一筋の涙が流れた。

「お父さん、ありがとう」

明け方近く、男は目を覚ました。まだ、辺りは暗い。

男はぐっすりと幸が寝ているのを見て、硝子戸を開けた。

朝の冷たい風が流れ込む、男は素早く部屋を出ると、硝子戸を閉め、縁台に座る。

梅林の遥かに向こう、ほんの少し空が白み始めていた。

梅林の修行場が、畑になり、今度は鶏を飼うと言う。なあ、親父、なんだか想像つかないな、命を削ったこの修行場が、とっても和やかになる。でもな、俺はそれがとても嬉しいんだ。武術や呪術は本家が伝承を続けて行けばいい。こんな力は幸の代で最後になるよ、本家もその方がありがたいだろう。

朝から、大掃除、そして、鶏小屋を考えなきゃならない、俺にとっても、その作業はとても楽しいことだ。

ふと、幸が目を覚ました。布団に男がいないことに気づき、慌てて立ち上がりかけたが、硝子戸の向こうに男の姿を見つけ、ほっと吐息を漏らす。

足を崩し、幸は掛け布団を抱き締め、男の背中を通して、男と同じ方向を見る、それだけのことが幸にはとても嬉しいことだった。男が幸の視線に気づき振り返る。

「寝ていなさい、まだ、早いからさ」

幸は笑みを浮かべ、人差し指で自分を指さし、そして、男の横を指さした。

男が笑って頷くのをみると、幸はかけ布団を抱き締め、外に出た。そして男の横に座ると、掛け布団の端を男にかけ、もう片方を自分の背中にかける、包まるようにして男に寄り添う。

「お父さん、おはよう。今日、これが一番最初の幸の言葉」

「おはよう、幸。起こしてしまったかな」

「ううん。ね、お父さん、こうしていると野宿しているみたいだね」

「そうだな。ん、ほら、空の端、随分白くなってきた」

「一日が始まるね。お父さん、今日は大掃除の一日だ」

「大掃除か、大変だ」

「大丈夫、幸が全部するからさ」

「父さんも頑張るよ、旅でもそうだったけど、幸はなんだか頑張り過ぎ、体を壊さないか心配だ」

「幸はお父さんにいっぱい迷惑をかけている、お父さんの仕事もだめにしてしまった、そして、こうしてさ、お父さんの独りの時間も潰してしまっている」

「そうじゃないよ」

男は幸の頭をそっと撫でる。

「父さんは自分が幸せな方を選んだだけ、それだけのこと」

空全体が闇から薄青く移り変わり、遠く連なる梅林もその姿を現し始めた。

「さて、急いで大掃除をして、それから、鶏小屋を作ろう、基本は放し飼いの方がいいだろうけど、あっちこちで卵を産んだら探すの大変だ」

「大きいのがいいな」

「そうだな、いいのを作ろう、そうだ、幸は佳奈さんに帰ってきたこと連絡しておきなさい」

「そうするよ、また、楽しい日が始まる気がする」

幸は柔らかに笑みを浮かべた。

異形 流堰迷子は天へと落ちていく 二話

あかねの思いは

月曜日 18 7月 2011 at 2:49 pm.

「母さんにも困ったもんだなあ」

幸は笑うと、洋品店の女主人を布団から助け起こした。

旅から帰ったことを佳奈に報告した、その時、幸は佳奈から洋品店の女主人が寝込んでいると聞き、シャッターの裏側、店の奥の寝室へ女主人を見舞いに来たのだった。

幸は女主人を布団に座らせると、頭からゆっくりとマッサージを始めた。

「母さん、ちょっと痩せたね。礼子さんに心配させちゃだめだよ」

「あの子ども学校が忙しいからね、あたしのことなんざ、気にもかけちゃいないよ」

娘が二人、次女は結婚して家を出たが、長女の礼子は、未婚で、女主人と一緒に暮らしているのだった、しかし、勤めている高校が忙しく、ほとんど、家にいることができずにいた。

「なるほど、子の心、親知らずってやつだ」

幸が、肩から背中へと摩っていく。

「どう、母さん」

「不思議だねえ、幸ちゃんの触ってくれるところから、なんだか、元気になっていくようだよ」

「母さんはとくに病気でもなんでもない、まっ、流行りの鬱から体を動かさなくなって、筋肉が衰えて、って悪循環を起こしている。幸がいなくなって寂しかったの」

「幸ちゃんの憎まれ口聞けないのは確かに寂しかったね」

女主人がやっと笑った。

「笑ったね」

「ああ、笑った」

「笑うのが一番だよ」

幸はほっと笑みを浮かべると、女主人をうつ伏せに寝かせ腰に触れる。

「母さん」

「なんだい」

「明日から一時間、母さんの時間をちょうだい」

「え・・・」

「散歩をしよう、一週間も歩けば、一年前のようになる。商売もできるようになるよ。自営業者は死ぬまでずっと働くのさ。ふふっ」

「難儀だねえ。奴隷みたいなもんだ」

「人間、働いてなんぼ、これ、母さんが幸に教えてくれたんだよ。幸、珈琲をいれてくるよ」  
幸は女主人を座椅子に座らせ、勝手知ったる台所へと向かった。

男は佳奈からの電話を受けていた。

「そうですね。私自身は関わることはできないけれど、幸の意志は一番に尊重する、いま、私に言えるのはそこまでかな。ええ、それでは」

男は電話を切ると溜息一つをつく。

そして呟く。あまり、お勧めではないな、と。

幸は裏口から商店街を抜け出すと、ほっと吐息を漏らした。幸は佳奈と女主人以外にはできるだけ会いたくなかったのだ。

一年前の事件の責、これの一因に自身の存在があったことを幸は認識していた。

幸は下水の上に並べられたセメントの蓋の上をとんとんと小走りに進む。

・・・お姉ちゃん・・・

ふと、幸は誰かに呼ばれた気がして振り返った。

「え、あかねちゃん」

振り返ると、あかねが笑顔で幸の後ろに立っていた。

「お姉ちゃん、さよなら」

「えっ」

幸があかねに手を伸ばしかけた瞬間、その姿がかき消すように消えてしまった。

「なに、これって・・・。ま、まさか・・・。うわあああっ」

幸は叫び声を上げた、そして、空を睨みつけると、その姿を消した。

マンションの一室、あかねは血を流し倒れていた、そして、その前には、血まみれの、大きな硝子の灰皿を掴んだあかねの父親が息荒く立っていた。

「悪魔め」

そう呟くと硝子の灰皿を両手で掴み直し、振り上げた。

「滅びろ」

マンションのドアが轟音と共に破裂した、

「でああああっ」

幸が灰皿を蹴り上げる、空中でガラスが弾け粉微塵になった、一転し、あかねの元に駆け寄る。

「なんてことを」

幸はひざまずくと、両手であかねの頭を抱えた。

「お姉ちゃんが助けてあげるよ」

幸の両手があかねの頭に溶け込んで行く。

「お前も悪魔だな、ここから出て行け」

あかねの父親が転がっていた金属バッドを拾い、振り上げた。

幸が叫んだ。

「お父さんっ」

「ん、ここにいるよ」

男はあかねの父親を床にうつ伏せに押し倒していた。

「目に見える距離の瞬間移動は何度かやったこともあるけど、電車で一時間の距離を一瞬で跳ぶのは初めてだ、結構、きついな」

「ごめんなさい、お父さん」

「それよりあかねちゃんは」

「なんとかする、死なせない」

男は頷くと、改めて部屋を見渡した。

壁も床も血で赤く染まっている、そして、ごみ箱、押し潰したカップラーメンが山になっている。洗濯物も散らかっている、女物は見あたない。

「お父さん、大丈夫、修復出来た」

「意識はありますか」

「あかねちゃん」

幸があかねに語りかける。

あかねは微かに笑みを浮かべると小さく呟いた。

「お姉ちゃん」

大切な宝物のように、幸があかねを抱き締めた。

男はその様子を確認すると、幸に声をかけた。

「あかねちゃんを連れて帰りなさい」

「お父さんは」

「ちょっとね、お喋りしてから帰るよ。あとは任せなさい」

幸は頷くと、あかねを抱きかかえ立ち上がった。

「お父さん、お願いします」

男は笑みを浮かべ、頷いた。幸とあかねの姿がふっと消えた。

男は手を離し、テーブルの椅子に腰掛ける。

「さて、君の言い分をお聞きしましょうか、ゆっくり聴いてやるよ」

「服を脱がせるよ」

幸はそっと笑みを浮かべると、あかねの服を脱がせ、布団に寝かせつけた。あかねの体は至る所で赤黒く内出血をしていた、足の骨も折れている。どんなに痛かっただろう、辛かっただろうと思うと、大声で叫びたくなる、しかし、幸は笑みを浮かべたまま、両手をあかねの体の中へと踊



らせて行く、骨を繋ぎ、切れた筋肉や血管も繋いで行く。

しばらくして、幸は両手を戻すと、額の汗を拭い、ほっと溜息をついた。

「あかねちゃん、痛いところ、あるかな」

「うん、お姉ちゃん、ありがとう」

幸は笑みを浮かべ、あかねの頬をそっと触れる、そして、幸はあかねの手首を両手でそっと掴んだ。手首には幸が紡いだ守り髪が間違いなくある、あかねが幸に助けを呼べば、どんなに離れていても、幸に声が届くはずだった。あかねちゃんは助けを呼ばなかったのか、と幸はいぶかしむ。

「だって、あかねは悪魔だから滅びた方がいいんだもの」

「え……。あかねちゃん、お姉ちゃんの考えたことが分かるの」

「うん。お父さんは私は悪魔になったから滅ばなければならぬって言うから」

「何言ってるの、あかねちゃんは人間だよ、心を読むくらい、ちょっと特技がある、それだけのことなんだよ、他の友達より、勉強が出来たり、走るのが速かったり、そんなのと同じことなんだよ」

幸はあかねの手を両手でしっかりと握った。

「君の言い分を一通り聴かせていただいた上で言うなら、君はどんなことがあっても娘の側に立つべきだったということかな」

「あんたら、いったい、何者なんだよ」

「うーん、君には言いたくないな。それよりね、そこの流しにタオルがあったろう、それ水で洗ってさ、堅く絞って、今から拭き掃除だ。俺がしっかり見守ってやるよ。君がその手で傷つけた君の娘の血を、同じその手で拭き取れ。でなきゃ、俺は君を殺すぜ」

笑みを浮かべたままの男の言葉は、その表情とは裏腹に、怒りがはちきれそうになっていた。

辺りが薄暗くなったころ、男は改札を出、家路へとついた。ふと、商店街入り口のタコ焼き屋に目が向く。

買って帰れば喜ぶかなとのぞき込んだ。

「いらっしゃい、いくつにします」

「そうだ、タコ焼きより、回転焼きの方がいいかな、回転焼きを6個で」

「へい、お待ちを。あれ、お客さん、あんた……」

「なんです」

「いや……。よく知っている人のように思えたんだけどなあ」

「なかなか、商売上手ですね、昨日、越して来たばかりですよ、楽しいおやじさんだ、また、買いに来ますよ」

店のおやじは照れ笑いをし、そそくさと回転焼きを箱に積めた。男はお金を支払い、回転焼きを受け取ると、歩き出す。

そして呟いた。

俺も随分丸くなってしまったな、と。

「お父さん、お帰り」

「ただいま」

玄関口で幸がにと笑った。男は玄関口に腰をかけると、紙袋を置く。

「あかねちゃんの着替え」

「あかねちゃんのお父さん、出してくれたの」

「当分、お嬢さんは私が預かりますってね、出してくれたっていうより、出させたって感じかな」

「詳しいことは後で話すよ、とにかく、当分の間、あかねちゃんはここで暮らします、幸、あんまり、いじめないようにね」

「ん・・・、多分、大丈夫だよ。基本は幸、優しい女の子だからさ、ん、お父さん、これ何」

「回転焼き、商店街の入り口で買った」

男は幸に回転焼きの包みを渡した。

「六個入ってる、ということは、あかねちゃんは小さいから二つ、幸は四つだな」

「え、父さんの分は」

「しょうがないなあ、それじゃ幸の、半分、お父さんにあげるよお。ちゃんちゃん」

男はくすぐったそうに笑みを浮かべると、幸の頭をなでる。

「ありがと」

男が居間に入ると、布団にあかねが横になって寝ていた。男は枕元に座ると、あかねの顔をじっと見つめた。

「体の傷は直したよ」

「そうか・・・。ぐっすり眠っている」

「安心したみたい」

「晩ご飯まで寝かせてあげよう」

男は立ち上がると、硝子戸を開け、庭を見る。少し薄暗い。

「お父さん、なんだか、一日があっという間だった。昨日まで旅を続けていたのが夢のようだよ」

男が振り返る。

「本当にそうだな。佳奈さんやおばさんは元気にしてたかな」

「佳奈姉さんは元気、でも、母さんが寝込んでた。ちょっと鬱になって、体動かさなかったみたい。それでね」

「ん」

「幸、一週間、毎日一時間ね、母さんと散歩しようと思う、そう約束したんだ」

「そうだね、それが良いと、父さんも思うよ、ただ、気をつけなさい。佳奈さんとおばさん以外には姿を見せないようにね」

幸が寂しそうに笑みを浮かべると、小さく吐息を漏らした。

「男はどうして侵略しようってするんだろう。少しでも多くを得ようと企むんだろう、これくらいで良いかなって謙虚さがないんだろう」

「さあね、ただ、男は行き着くところまで突き進んで、壁にぶつかるまで、考えたり、我が身を振り返ったりできないようにできあがってしまっているんだろうね」

「お父さんもそうだった」

「父さんは・・・」

男は少し考える。

「簡単に人を殺せる力を身につけた、それからは謙虚っていうかな、意識して強く自制するようになったかな。それまでは・・・、秘密」

「ん・・・、男がお父さんみたいに優しい人ばかりになれば、世界は平和になるのかな」

男はくすぐったそうに笑った。

「父さん、幸には優しいかもしれないけど、他の人にはかなり冷酷かも」

「幸は特別ってこと」

「愛している人にはただただ優しくなってしまう、それだけの単純なこと。さて、晩ご飯の用意をするかな」

「お父さん、お願い、もう一度言って」

「晩ご飯の用意を」

「その前だよ、もお」

「冷酷かも、だったかな」

「ううっ、お父さんってば」

「大声出すと、あかねちゃん、起こしてしまうぞ」

男は笑うと、台所へと向かった。

炬燵布団を外した掘り炬燵にオムライスを並べた。幸はそっとあかねを起こすと、掘り炬燵に座らせる。

そして、にっと笑みを浮かべると、あかねの横に座った。

「一緒に食べよう」

あかねはそっと笑みを浮かべると、小さく、うんと呟いて頷いた。

夕食を終え、男の先にお風呂に入りなさいという言葉に、幸はあかねと風呂へ入る。男は後片付けをしながら、結局、あかねちゃんは、ほとんど喋らなかったなと思いかえした。今も彼女自身、自身のことに対して随分戸惑っているのだろう。

また、明日、考えよう。

朝、久しぶりに男は一人の部屋で起き、着替えていた。幸は、目立たないよう朝の早いうちに女

主人のところへ出掛けたのだが、あかねはここに居たいと留守番になったのだった。

男が着替えて、居間に入ると、あかねは掘り炬燵に座り、開け放った硝子戸から外の風景を眺めていた。

「あかねちゃん、朝ごはんは食べましたか」

あかねは振り返ると、笑顔で頷いた。

「そっか、おじさんはだめでね、朝は珈琲しか飲まない、幸には体に悪いと叱られているんだけどね。横、いいかな」

あかねが頷くのを、男はあかねの斜め向かいに座った。

「お喋りしていいかな。昨日のことやこれからのこと」

あかねが少し表情を引き締め頷いた。

「まず、あかねちゃんのお父さんとあれからお話した。そしてね、当分、お嬢さんは私が預かりますっておじさん言ったんだ。お父さんは随分落ち着いていた、そして、後悔していたけど、自分自身がまた同じようなことしてしまうかも知れないと言ってた。自分を抑え切れならしいね」

「お父さんは心の病気だと思う。おじさんの友達には、こういう病気のね、専門のお医者さんがいるから、頼んでおいたよ」

あかねが瞬きもせず、じっと男の目を見つめる。

「お母さんの連絡先はおじさん、今日、調べて連絡するよ」

男は父親の話で、あかねの母親が疾走したのを知った、半年前のことだったらしい、あかねがおかしく思えるようになったのはそれからすぐだったということらしい。

「そして、あかねちゃんのこと。あかねちゃん、ここで生活をしてください、幸にね、人との接し方を教わりなさい。そうすれば、戸惑うことなく生きていけるようになるよ」

「ありがとう」

初めて、あかねは小さく囁いた。そして、俯く。

男が言った。

「あかねちゃん、それとも、あかねさんって言った方が良いかな」

あかねが驚いて男を見つめた。

「精神年齢が急に上がって、戸惑っているんだろう、いつからかな」

あかねはぎゅっと俯いたが、やがて決心をし、男をしっかりと見つめた。

「半年前です。いつも見ていたテレビアニメが急に子供っぽく思えて飽きてしまったのが最初でした」

まるで、十代後半、いや、二十代のしっかりとした物言いであかねが話始めた。

「小学校でも、どうして、私はこんな子供たちと生活をしているのだと疑問に思えて仕方がなかったのです、そのうち、ひきこもりと称して部屋から出るのをやめてしまいました」

男はなだめるようにそっと笑顔を浮かべる。

「他人の心が見えてきたのもその頃からですか」

「最初は母でした。母の前に立った時、母は何を独り言を喋っているんだろう、そう思ったのですが、母の口は動いていませんでした」

男はしばらく俯いて目をつぶる、そして、顔を上げるとあかねに言った。

「あかねさんのね、病気や怪我ならいくらでも直すことができる、でもこれは病気でも怪我でもない、君の変化なんだ。だから、元に戻すこともできないんだよ」

「はい・・・」

「あのときの外神との接触で、少しずつ、君の潜在能力が顕在化したのだろう」

男は一つ吐息を漏らしたが、励ますように笑顔を浮かべた。

「幸は、ある意味、君の大先輩だ、心を二つ持って気持ちのやり繰りをしている、あかねさん、幸と一緒に暮らさなさい、そして、幸を参考にゆっくりと落ち着き方を探して行きなさいな」

あかねがほっとしたように笑みを浮かべた。

「おじさん、優しい人ですね、幸さんが夢中になるの、わかります」

「面と向かって言われてしまうと、なんだか照れるな。ただ、あの子の笑顔を見るのが好きだからね。それは、ん、本当はあかねさんのお父さんも同じなんだよ、それだけは心のどこかに置いて、忘れないようにね」

「はい」

「いい返事です、そうだ、そろそろ、幸、帰って来るかな」

「ただいま」

玄関口で幸の声が聞こえた。

とたとたと幸は居間に入ると、男の向かいに座った。

「お帰り」

「幸お姉ちゃん、お帰りなさい」

「あかねちゃん、ただいま」

「なんだか、二回、ただいまって言うの新鮮だなあ」

幸は笑うと、袋を男に見せた。

「鰺、かあさんが買ってくれた。あ、幸、一度は遠慮したよ」

男は笑うと袋を覗き込んだ。三匹の鰺が袋に入っていた。

「美味しそうだね」

「お父さん、鰺を二枚に開いて」

「ん、どうするの」

「天日干しにします。塩を振って干すのです、とっても美味しいと思う」

「なんだが、幸はどんどん自給自足へと向かって行くなあ」

「いまはね、お父さんとあかねちゃんと佳奈姉さんと母さん。四人とだけ喋ることができれば良いんだ、幸はぷち引きこもりなのです」

「瞳さん、忘れてるよ」

「瞳さんか……。本当に普通の主婦になっているからさ、あまり、ちょっかいかけない方がいいと思うんだ」

「そういう生活が一番だろうね」

男は少し寂しそうに笑った。

「お父さん、昼からどうする」

「父さん、さ。会計事務所の友人のところと、それから、あかねちゃんのお母さんに会いに行ってみようと思うよ」

「居場所わかるの」

「実家の住所は確認した、まずはそこから当たってみるかな。幸はあかねちゃんと留守番、いいかな」

「ん……。それじゃ、留守番しているよ。あ、お父さん、庭に川は流れていないのかな」

「今度は釣りをする気ですか」

「これからは動物蛋白質も必要だ」

男は笑うと、立ち上がって袋を持ち上げた。

「練習場所と反対方向に行けば、川があるよ。昔、親父が魚を放流していた。どうなったかは知らないけれどね」

「それじゃ、あかねちゃんと冒険しているよ」

幸はにっといたずらっぽく笑った。

「ほどほどにね」

男は呟くと、背広に着替えるために部屋を出た。

男が出掛けた後、幸はあかねを連れて庭に出た。

「畑の隣りに鶏小屋を作ります。材料揃えなきゃな。でも、まずは設計図をつくらなきゃね」

あかねは俯き、じっと足元を見つめていた。

「どうしたの、あかねちゃん」

「なんでもない……」

「変だよ、あかねちゃん。そうか、お母さんが恋しいのかな。きっと見つかるよ。大丈夫だよ」

「幸お姉ちゃん」

あかねが泣き出しそうになりながら、幸を見上げた。

「怖い……」

「怖いって、大丈夫さ。お姉ちゃん、とっても強いぞ、あかねちゃん、どんな奴からでも護ってあげるさ」

「おじさんが、おじさんがとっても怖い」

「おじさんって、幸のお父さんのこと」

あかねが小さく頷いた。

「うーん、本当は、お父さん。とっても冷酷で鋭い人だったと思う、でも、今は優しいし、幸を大切に思ってくれる、あかねちゃんのこと、とっても心配しているよ」

あかねがじっと幸の目を見つめた。

「幸には絶対に言うな、裸になれって……。裸になったあたしの両足を掴んで、おじさんが……」

「そ、そんなこと、そんなことないよ。お父さんがそんなこと……」

幸は驚きのあまり、力が抜けたように座り込んでしまった。

肩を落とし、俯いたまま、幸が呟く。

「お父さんは、お父さんは……」

あかねがにいと笑みを浮かべた。

「幸お姉ちゃん、ごめんなさい。でも、もう、怖くて」

俯いたまま幸が、囁くようにあかねに話しかけた。

「あかねちゃん。それが本当なら」

「幸お姉ちゃん、ここから逃がして」

「あはは、あのね、あかねちゃん、幸はさ、あかねちゃんの大先輩なんだ、その意味、わかるかなあ」

「えっ……」

幸がゆっくりと顔をあげる。

幸は愉快そうに笑みを浮かべていた。

「甘いなあ、あかねちゃん、嘘はもっと巧くついてくれないと面白くないよ」

「幸お姉ちゃん」

「あかねちゃん、潰すのが楽しいんだろう、破壊することが、もう、ぞくぞくするくらい快感なんでしょう」

不意にあかねは背後に気配を感じた。

幸が笑っていた。

「いいよね、楽しいよね。人が泣いたり苦しんだりしたら、もう、最高だよね」

「お姉ちゃんが二人」

「違うよ」

あかねの耳元で幸が囁いた。

三人目の幸があかねの耳をそっと噛む。

あかねが悲鳴をあげて飛びのいた。

4人、5人と次々と幸の数が増えて行く。

「楽しいね、あかねちゃん。わくわくするよね」

10人、11人、笑う幸が次々とあかねを取り囲んで行く。

あかねが尻餅をついたまま後ずさる。

「うふふ、あかねちゃん」

「うわああっ」

あかねの腕に、幸の顔が浮かんでいた。

「ごめんなさい、幸お姉ちゃんごめんなさい」

「謝る必要なんてないんだよ」

あかねの頬に小さな幸の顔が浮かび上がる。

「そうだ、あかねちゃんに、ほんのちょっとだけお姉ちゃんの闇を見せてあげるよ」

目の前にいた幸がじわっとあかねの腕を掴む。

「楽しいぜ、でも、あんまり見ると、あかねちゃんが発狂してしまうから、ほんのちょっとだけにしておくよ」

「あ、ああっ、ご、ごめんなさい」

手を掴んだまま、幸の頭がぽろんと落ち、転がると、あかねの足元でにたっと笑った。

「楽しんでもらえると嬉しいなあ」

無数の幸があかねを幾層にも覆い囲んで行く。

「あかねちゃん、特別だよ」

にたっと笑う幸の頭が、ぼとぼと落ちて行く。幾つも幾つも、幸の頭が転げ落ち、あかねの足元に転がって行く。

「ごめんなさい。おじさんのこと、嘘です、ごめんなさい」

「怒ってないよ、全然、怒ってないよ」

ぼろぼろと幾つもの幸の頭が落ちてくる、あかねは茫然と目を見開き、喘いでいる。あかねが、幸の転がる頭に押し潰されていく。

「楽しいな、見せてあげるよ」

「みせてあげる、特別だよ」

「あはは、楽しいな、あかねちゃん、大好き」

ふっとあかねの力が抜け、そのまま、気絶し仰向けに倒れ込んでしまった。

すべての幸の姿が消えた。

そして、一人になった幸があかねの隣りに現れ、その顔を覗き込んだ。

「案外、もろいな」

幸は鋭い表情であかねを見つめると、そっと指先をあかねの額に沿えた。かすかに、指先があかねの額に潜り込む。

「戻ったな。親が最後まで愛していれば、こんなふうにはならなかったのに」

幸は笑顔を作ると、あかねの枕元に座り、声をかける。

「おおい、あかねちゃん。起きて、起きて」

幸の声にあかねは意識を取り戻し、ゆっくりと目を開けた。

「あかねちゃん、1年ぶり、大変だったね」

「ごめんなさい、お姉ちゃん、ごめんなさい」

幸がぎゅっとあかねを抱き締める。

「あかねちゃんの心の中には邪悪がある、でも、それもあかねちゃんなんだ。だから、消してしまうことはできない、押さえ込んだだけ。幸姉ちゃんは、ずっとあかねちゃんの味方だ、これからもずっと。だから、もう一人の自分の操り方、教えてあげるよ。もう、怖くないよ」



あかねは幸の腕の中で静かにすすり泣く。

男はとある田舎の築二百年以上は経つだろう、大きな屋敷にいた。座敷に案内され、向かいに座る老人を微かな笑顔を浮かべ見つめた。

この屋の主であり、あかねの母方の祖父にあたるこの老人はぐっと男を睨みつけていた。

「君が孫のあかねを預かっているというのは本当か」

「はい、ただ、勘違いしないでいただきたいのは、拉致だとか誘拐だとかそんな物騒なものではなく、単にあかねちゃんが私の娘の友達であること、そして、こちらのお嬢さんがあかねちゃんを残したまま放逐し、また、御亭主も精神科の医師にかからなければならない状況になりまして、結果、お預かりした次第。それを、こちらのお嬢さん、つまり、あかねちゃんのお母さんにご連絡したく伺った次第です。お嬢さんはご在宅でしょうか。例えば私の後ろ、襖の向こうですか」

「君は何者だ」

「と、申しますと」

「女がまるで君を何十年もの知古のように、座敷に招いた。本来ならば」

「名前も知らぬような男は玄関先で話を聴くものだとおっしゃりたい」

男は笑顔を浮かべたまま、主の言葉を継いだ。

主が目を逸らさずに頷く。

「私も名乗る前のちょっとした雑談だけで、ここに座らせていただき、自己紹介をする機会を逸しまして、少々戸惑っています」

男は笑顔を浮かべたまま答えた。

「ただ、思い出しました。随分、昔、依頼を受けた父親とこちらへ伺ったことがあります」

「なんだと」

「代変わりしました、名無し、無です」

主の顔が一瞬青ざめた。

「儂を殺しに来たのか」

「いいえ、そういう仕事からはすっかり足を洗っております。娘が出来たのを機にやめました。不思議な縁とでも申しましょうか、本当に先程申しました通り、あかねちゃんの件で伺ったのです」

主は男を値踏みするようにねめつけた。

「君のこの屋へ来た目的を説明してもらおう」

「貴方のお孫さん、あかねちゃんを元の普通の女の子に戻し、両親と暮らせるようにすること。私の娘がそれを強く望んでおりまして、娘の希望を叶えてやりたいと、こちらまで伺った次第、それのみです」

「それを信じろというわけだな」

「もちろん」

男は笑顔で答えた。

「なるほど、女共が君をすぐに屋敷に上げた理由が分かる。わかった、君を信じよう」

「ありがとうございます」

男は会釈をすると、出されていたお茶を飲む。

「薬物には耐性があります」

男は小さく呟いた。

「さて、貴方はこの国の、裏の大立者です。支配者階級と言ってもいい」

「昔の話だ。既に息子に跡目を譲り、儂は引退しておる」

主は表情も変えず答えた。

「その孫が外神に魅入られてしまったというのも、何かしらの因縁があるのやもしれませんね」

「外神だと……。あかねが外神に」

「外神のことはご存じのようですね」

「ああ、知っている。見たことはないがな。邪悪の根源であり、無限の力を持つと聞いている」

「外神がこの世界に存在し続けるには依り代となる人間が必要です。あかねちゃんは素質があったのか、呼び出した組織に外神の依り代とされかかったのです。幸い、それは寸前に防がれたのですが、あかねちゃんは外神の影響を受けてしまい、人の心を読む力と邪悪な心を内に増大させてしまった。それからは、貴方のお嬢さんにお聴きになる方が良いでしょう」

主は目を伏せ、急に意気地を無くしてしまったように肩を落とした。

「君はあかねを元の素直な子供に戻すことができるというのかね」

「先程、娘が元に戻したようです。ただ、邪悪な心を持つあかねちゃんも、また、あかねちゃんであり、完全に消し去ることはできません。ですから、あかねちゃんが自分の心を抑制できるように教育しなければならない。一週間、いただいたらこちらに連れて来ましょう」

「すまない」

「余程、あかねちゃんが可愛いようですね」

「跡を取った息子にも子供がいるが、娘の子、駆け落ちするような出来の悪い娘だが、その子供は利発で可愛いのだ」

男は、そういうことかと呟いた。

「それでは、用件も済みましたので帰ります、一週間後に、また、お邪魔致します」

「よろしく頼む」

男はうなずくと立ち上がり部屋を出る。何事も無く、玄関口で靴を履いた時、女が近寄り、男の声をかけた。

「あ、あの」

「ああ、あかねちゃんのお母さんですね」

「は、はい。あかねは元に戻るのでしょうか。また、三人で暮らせるのでしょうか」

「あかねちゃんは大丈夫です。ご主人も私の友人の精神科医に診てもらっているのですが、大丈夫だと思いますよ」

男は笑みを浮かべ会釈をすると屋敷を辞した。

男は駅のプラットホームに居た。屋敷を辞し、半時間ほど歩いたところにある小さな駅だ。夕暮れ時、まだ、さほどは暗くない。

ベンチに座る、あと、30分は列車は来ない。ちょっとした時間つぶしくらいにはなるだろう。男を取り囲むように黒い影が五体、影はゆっくりと黒服を着た男達の姿に変わる。

「乱破、時代劇でいう忍者の方々そうですね。私に何か御用ですか」

この時代になっても、セキュリティ要員として、昔のいう、忍者が、新たに組織化され重要人物の身辺擁護にあたっていた。

「貴様には死んで頂く」

「もう少し待っていただけませんか、少しばかり数十年程。例えば、私が百歳になる頃まで」

「笑止。貴様は己を無と名乗ったが、俺が噂に聴いた無とは随分違うな」

「噂は一人歩きをするものですし、私自身、娘が出来てから随分変わったなあと思いますよ。ところで、貴方方を雇っているのは、あのお祖父さんの跡目を継いだ息子の方ですね」

「貴様に答えるいわれは無い」

「つまらない跡目騒動みたいなものですね。息子は、父親の溺愛する妹の孫が煩わしくて仕方がない。外神をちょうどいいと、その孫を依代に仕立て上げたのは、まっ、そこまで言うのは野暮というものか。皆さんの顔付きが変わりましたね。怖いなあ」

「貴様の無駄な一言が確実な死をもたらしたようだな」

「万事休すということか」

男は呟くと微かに俯く。

「さて、どうしようかな」

男は顔を上げ、ゆっくりと立ち上がる。

「ひの、心の、みと・・・、五人いらっしゃるようで。あまり目立つことはしたくないのですが、少しばかりストレス発散のため、運動してみましようか」

男が右足を半歩出す。

黒服たちが一瞬、後ろへ引き間合いを開けた。

「あくまでもストレス発散なので、死なないように手加減してあげますよ」

黒服達が、男を瞬きせず睨みつける。

男の姿が消えた、その瞬間、男は正面にいた黒服の背後に立つ、その左手は既に黒服の顎を捕らえていた。

男は半歩下がり、同時に左を地面に落とす。

瞬間、男は宙を飛び上がり、隣にいた黒服の後頭部をなぎ払うように蹴る。数メートル先まで黒服は弾き飛ばされた。

黒服達はその間、全く動けなかった、全く異質の速さに対応出来なかったのだ。

「世の中、便利になると、人は体の動かし方を忘れてしまうのかもしれないね」

男は立ちつくしたままの黒服の肩を軽く叩いた。

「君はそうは思いませんか」

「うっ、うわああ。殺さないでくれ」

その叫び声を引き金に、残った二人が血相を変えて逃げ出した。

男は肩を叩いた黒服の首に腕を回すと、逃げられないよう押さえ込んだ。

「君には仕事があります。意識失ったこの二人を連れて帰りなさい。せつかく、手加減したのにこのままほって置いたら大変だからさ。わかりましたか」

「わ、わかりました」

「本当にわかったのかい。このまま、逃げ出したりしたら、君だけ殺すぜ。本当に二人を病院まで連れて行くかい」

男は黒服の耳元で囁いた。

黒服が息もたえだえにひたすら頷く。

「素直さは大切だ」

男が力を緩める、

黒服は転げるように前に進むと倒れ込んでしまった、男は倒れていた二人を軽く蹴る。二人とも意識を取り戻し目を開けた。

そして、男は何事もなかったようにベンチに座った。

しばらくして列車が来る、男はそのまま、立ち上がり列車に乗った。

幸とあかねは縁台に座り、ほおと梅林に沈む夕日を眺めていた。

「幸はさ、お父さんがいると真面目で心配りの出来る人になる、でも、いないとき、だめ人間なんだよ。ああ、早く帰って来ないかな。あ、でも、晩御飯の用意もしなきゃだし」

「幸さん」

「ん・・・」

「私にはとても目まぐるしい一日でした。いま、やっと落ち着いた気分です。だから、この時間がとてもいとおしく思えるんです」

幸はにと笑うと、あかねの肩に腕を回し、頬を寄せた。

「もうしばらく、夕日を眺めていよう。沈んだら、晩御飯の用意をしよう。そうだ、あかねちゃん」

「はい」

「やっぱり、幸のこと、お姉ちゃんって呼んで欲しいな」

「お姉ちゃん」

「おお、我が妹よ」

幸は嬉しそうに笑った。

男は商店街入り口のタコ焼き屋の前にいた。

「回転焼き六個と、そうだな、八個入りのタコ焼き、三舟お願いします」

「はいよ」

店主が手際よく、タコ焼きをひっくりかえす。

「景気はどうです」

「ん、だめだ、参ったよ」

「まあ、景気のいいところなんて、ほんの一握りですからね」

「この商店街も良かったんだけどさ、ほら、近くに業販スーパーや安売りの店が増えちまって、随分、客を取られちまってね」

「商売敵ってやつですか。ただ、商店街の良さをもっと前面に出した上で、協力して商品を組み合わせる、お客さんをもっと能動的に組み込んでみるのが一番かなと思いますよ」

「ほおお、お客さん、ちょっと、詳しく聴かせてもらえないかい」

かんてき、いわゆる七輪である、を二つ。

一つにはご飯を炊き、もう一つは網を乗せ鰻を焼いていた。

「あかねちゃん、鍋の中でゴトゴト言い出したら、声かけてね」

「は、はいっ」

あかねは幸が鍋でご飯を炊くことに目を丸くしていた。幸はパタパタと団扇で空気を送り、鰻を焼いている。

「あの、お姉ちゃん、炊飯器あったけど」

「あるんだけどさ。これの方が美味しい。それにね、旅している間、ずっとこうやってご飯を炊いていたんだ」

幸がくすぐったそうに笑った。

「ここは梅の枯れ枝もたくさんあるし、落ち葉もね、濡れた新聞紙と混ぜて、ぎゅっと重しで押さえ込めば、いい感じの薪になる。そうだ、竹を植えよう、成長早いから薪にちょうどいいや」

「これって、すっかりアウトドアですよお」

あかねが呆れたように溜息をついた。

不意に幸が振り向いた。

「あ、お父さん、帰ってきた」

幸はまだ焼けていない鰻を皿に戻すとあかねに言った。

「あかねちゃん、音がしたらね、鍋を降ろして、そこの新聞紙の束でぎゅっと鍋を包んでくれる。保温調理になるからさ。幸はお父さん、迎えに行ってくる」

幸はぱたぱたと庭を走り、玄関へと走って行った。

「ご飯炊いたら、お魚、焼き直そう。可愛いお姉ちゃんだ・・・」

あかねが幸せそうに笑みを浮かべた。

「お父さん、お父さん、お父さん、お帰りっ」

「ただいま」

「おおっ、お土産ありだ」

「タコ焼きと回転焼き。幸、タコ焼き食い飽きているのなら」

「食べる、食べるよ。タコ焼き飽きるなんて関西人にあるまじき所業だ」

「幸、関西人なの」

「タコ焼き食べている時は関西人なのです。さいでっか、ほな、おおきに」  
にひひっと笑うと、幸は男の手を引っ張る、つられて男が上がり口に上がると、幸は脱いだ男の靴の向きを直した。

「幸はあかねちゃんを苛めてませんか」

幸は男からお土産を受け取ると、少しばつが悪そうに笑った。

「ちょっと苛めちゃった、こんな感じ」

ぽろっと幸の頭が落ちる。

うわあっ、と、男が驚き、幸の頭を抱きとめた。

「幻術か・・・」

男の腕の中には何もなかった。

「親をびっくりさせるな」

「ね、お父さん。泣きそうになった」

「泣き過ぎて乾燥して、ミイラになるところだった」

「そしたら、幸がお父さんにホースでじゃぶじゃぶ、水をかけてあげるよ」

男は少し吐息を漏らすと、幸の頭を撫でる。そして、少し笑顔を浮かべる。

「居てくれるだけで嬉しい。ありがとう」

「どう致しまして、お父様」

ばふっと幸は男にしがみつく。

「お父さんも幸をぎゅっとして」

男は戸惑いながら、幸を抱きしめた。

そして、男はまるで子供のように顔を赤らめると少し笑った、そして手を離す。

「お父さん、今度は裸で抱き合おう」

「ごめん、それは無理」

男が着替える間、幸が庭へ戻ると、あかねが鰯を焼き直していた。

「ありがと、あかねちゃん」

「お姉ちゃん、美味しく焼けました」

「いい匂い。それに三人で晩御飯、なんか楽しいなあ。あかねちゃん、テーブルにお皿並べてくれる、幸はおすましをつくるよ」

食卓にご飯、鍋からおひつに移し、焼き魚とおすまし、それに少しお漬け物。

三人はいただきますと手を合わせ、晩ご飯を食べる。

「鰯は、ちょうど塩味も効いていて美味しいね」

男が言うと、幸がにひひと笑った。

「少しコツがわかってきたよ。今度はイカも干してみるかな」

「するめとか作って、炙って食べたら美味しいだろうね」

「あ・・・、するめ食べ出したら、幸は一日中、何もしないでするめを嚙っているかもしれない」

「お姉ちゃんなら、本当にそうしているかもしれません」

あかねが会話に入ろうと思いついて声を出す。

幸はそれを受けて、まんべんの笑みであかねの頭をなでた。

「安心して、あかねちゃんにも半分、分けてあげるよ。かんできでするめ、炙りながらさ。日本酒があればもう最高だ」

「幸、あかねちゃんにお酒はだめだよ」

「それじゃ、濃いめの番茶かな。お父さんは珈琲、珈琲は無理があるなあ」

「さすがに父さん、珈琲が好きでもするめとは一緒に飲まないよ」

男は少し笑うと、漬物をご飯に載せた。

ふと、思い出したように男は少し笑うとあかねに話しかけた。

「あかねちゃん、最初に言うべきだったけど、お母さんに会ったよ。元気そうでした」

「お母さん、おじいちゃんのところに」

「そう、で、少し喋って来た。また、あかねちゃんとお父さんと三人で暮らしたいって話してくれた」

「お母さんが・・・」

急にあかねは俯くと涙を流した。

幸がそっとあかねの背中をさすった。

「お母さんにもお父さんにも、とっても酷いことをしました」

あかねはお茶碗を置くと、ぎゅっと拳を握り締めた。

「崩壊して行く家庭がとても嬉しかったんです」

男は小さく吐息を漏らした。

「あかねちゃんが悪いわけじゃない、あかねちゃんの心を悪くした奴が一番悪いってこと」

男がそっと笑みを浮かべた。

「一週間したら、お母さんの所へ行こう、それまでに、幸」

男は幸に向き直ると言った。

「あかねちゃんに線を一本、作ること。いいかな」

幸は男をじっと見つめ、そしてしっかりと頷いた。

「さあ、あかねちゃん、食べよう。せっかくのおすましも冷めちゃうからね」

幸はあかねにそっと笑いかけた。

男が流しで洗い物をしている間、幸はあかねに数学を教えていた。今晚中に微積分の概念まで教え込むつもりらしい。テーブルに参考書を広げながら教える幸の言葉に男はあかねちゃんも大変だなと少し笑った。

ものの善し悪しを見極めるためには、まずは基準となる線を一本、作り出さなければならない、そして、その線は細くて鋭いほど、善し悪しを見極めることができるようになる。

数学をしっかり理解させることで、幸はあかねの判断能力を高めようと考えているのだろう。幸も成長したなと、手を止め、男は振り返り幸を見る。ふと、幸は男の視線に気づくと、立ち上がり、男の前に頭を差し出した。

「え・・・」

「頭、撫でて」

男は少しと惑いながらも幸の頭を撫でる。

「幸は立派ですか」

「うん、立派、成長したなあって感心した」

「えへへ」

幸はまんべんの笑顔を浮かべるとテーブルに戻った。



朝、男は目を覚ますと、着替えを済まし、居間に入った。

あかねがテーブルに一人、取り残され、ぼおっと外を眺めていた。男は幸が洋品店のおばさんの散歩に付き合っているのだなと気づいた。

「おはよう、ひょっとして、その姿、あかねちゃん、徹夜したのかな」

「どうしてお姉ちゃんはあるに元気なんだろう」

ふと、あかねは男に気づき、慌てて笑顔を浮かべた。

「おじさん、おはようございます」

男は笑みを浮かべると、お湯を沸かす。

「お疲れさま、部屋で寝て来なさいな、カーテン締めたら、日差しも避けることができるから」

「でも、寝てしまうと詰め込んだものが消えてしまいそうで」

男はマグカップにインスタント珈琲をいれる。

「公式なんか忘れてもいいよ、忘れたら公式を自分で組み立てればいいだけのこと。それに寝る方が脳を休めることができるからね」

男は適当にお湯を入れかきまぜる。以前はしっかりと珈琲豆から準備していたのだが、旅の最中、手抜きインスタント珈琲にすっかり慣れてしまっていたのだった。

男は立ったまま珈琲をすすると、いたずらっぽく笑った。

「幸と付き合うなら、休める時は休んでおきなさい。体がもたなくなるよ」

あかねは、昨晚の切れ間なく自分に教え込む幸の姿を思い出して、やはり寝ておこうと立ち上がった。しかし、あかねは一瞬、唇を噛むと、決心して男の前に立った。

緊張した面持ちで男を見つめる。

「ん、どうしました」

「ごめんなさい」

「え・・・」

「昨日、おじさんのこと、お姉ちゃんに悪く言いました」

「あの、足を、足を・・・」

男は珈琲を、一口、すすると少し笑った。

「知ってるよ。でも、その時のあかねちゃんと、今のあかねちゃんは別人だってことも知ってる。さあ、休みなさいな」

男は笑顔を浮かべたまま、あかねの頭をそっと撫でる。

あかねはほっとしたのか、笑みを浮かべた。

あかねが寝付いてしばらくした頃に、幸が戻って来た。

「ただいま、お父さん」

「おかえり、どうだった」

「歩くのはもう大丈夫だよ。歩きながら、ずっとかあさんの愚痴の聞き手になってた」

「それはお疲れさま」

男と幸はテーブルに着く、ふと、幸は辺りを見回した。

「おとうさん、あかねちゃんは」

「ついさっき寝たところ。一時間くらい寝かせてあげなさいな」

「そうだね、ちょっと張り切り過ぎた。今晚は復習と、複素数をちょっとだけ教えよう」

「幸は寝なくて大丈夫かな」

「あかねちゃん、起きるまで寝ていようかな、お父さんは」

「昨日、事務所から書類を預かって来たからさ、それを処理するよ」

「今日はお出掛けしなくてもいいの」

「そうだな、とくに出掛ける用事は無いな」

「お父さん、左手、いい」

「いいよ」

幸は男の左手をそっと握ると、横になり、もう片方の手を添え、枕にしようとしたが、高さが合わなかったのだろう、仰向けになり、お腹の上へ手を載せる。

「いま九時過ぎ。お父さん、十時になったら起こして」

「わかったよ。ぐっすり寝なさい」

「うん、お休みなさい」

「おやすみ」

男は右手だけで、器用に鞆から書類を取り出すと、テーブルに並べる。そして、書類の確認を始めた。

しばらくして、ふと、男は顔をあげると、玄関口の方向を見つめた。

「佳奈さんか」

ベルが鳴った、しかし、音が小さい、修理しなきゃなと男は・・・、幸が左手をしっかりと握っていて動けない、男は玄関口に向かって声をかけた。

「佳奈さん、どうぞ、入ってください」

佳奈は遠慮がちに開き戸を開けると、中へと声をかける。

「いいかな、先生」

「動けないんだ、どうぞ、上がってください」

佳奈が部屋に入ると、

「なるほど、これは動けないやね」

男の左に幸が寝そべり、男の左手を両手で包み込んでいる。

「うーん、凄いえっちだ」

「え、父娘で手を握ってと言われると、あれだけどさ、でも単純に手を重ねているだけだよ」

佳奈は笑うと、幸の横に座った。

「先生は朴念仁だからしょうがないな。裸で抱き合うより凄いよ」

「え、そういうものなのか」

男は少し狼狽えたが、手を解くこともできずに顔を赤らめた。

「相変わらず、先生は幸ちゃんのことになると、少年になるねえ」

「いい年こいたおっさんが少年と言われてもな、恥ずかしいだけだよ」

男は少し笑うと、テーブルの上の書類を一つに纏めた。

「先生はもう会計事務所、開かないのかい」

「幸とね、過ごす時間を増やしたい。まだまだ初心者家族だからね。自分で事業を始めるとなかなかそんな時間が作れないよ」

「これだけ美人の娘だもの、父親でもとち狂ってしまうのしょうがないな」

佳奈が笑った。

「幸はそんなに美人なのか。幸はぜんぜん、自分なんか美人じゃないってね、言ってるけど」  
一瞬、佳奈は息を飲み、男の顔をまじまじと見つめた。

「幸せな人だ、先生は」

佳奈が溜息をついた。

「先生、イカの新しいの、買ったから持って来たよ。冷蔵庫に入れておくよ」

「佳奈さん、ありがと」

佳奈は立ち上がり、勝手知ったる台所の冷蔵庫へとイカを仕舞う。

ふと、視線を上げたとき、佳奈はあかねを見つけた。

「先生、悪いことしてないかい」

「テレビに出て来そうな可愛い女の子じゃないか」

あたふたと佳奈が戻って来た。

「幸の友達だよ、妹みたいなものかな。そうだ、佳奈さん、急いでいるかい」

「いや、いいけど」

「十時まであと五分、待っててくれるかな」

「いいよ、あたしも先生にお礼いわなきゃならないし」

「なんかしたっけ」

「タコ焼き屋の良さんに教えてくれたろう、商店街活性化の方法」

「あれね、いや、佳奈さん電話してくれたからさ、ちょっと考えていたんだ。タコ焼き買うついでに喋ったんだけど、まずかったかな」

「ありがたいけど、良さん、集まりでね、自分が考えたように言うんだ、あたしゃ、それに腹が立ってさ」

「アイデア料出せって言うなら、考えものだけど。彼もそうは言わないだろう」

「そりゃ、そうだけどさ。良さん、次の商店街の会長選挙、もう自分が会長になった気でいるよ」

男は幸を起こさないよう、でも、愉快そうに笑った。

「男は齢をとると名誉が欲しくなるもんだよ」

「そういう先生はどうなんだよ」

「私はそういうのとは無縁だ。それに今はね、幸にさ、恥ずかしい父親だと思われたいようにするので一杯だな」

「ちゃんと髭も剃って身だしなみを気をつけていますってね」

佳奈がからかうように言う、男がくすぐったそうに笑った。

「本当にそうだよ。ん、十時だな」

男は幸を見つめ、声をかけた。

「幸、十時だよ、起きなさい」

幸が、うん・・・、と唸りながら、寝ぼけ眼で体を起こした。

「もう少し、寝るか」

「ううん、お昼まで、あかねちゃんと掃除しなきゃ」

幸はやっと男の手を離した、ふと、幸は佳奈がいることに気づいた。

「佳奈姉さん、おはよう」

「おはよう、洋品店のおばさんから幸ちゃん、イカが欲しいって聞いたから持ってきたよ、冷蔵庫の中」

幸は嬉しそうに笑うと、佳奈に向き直った。

「ありがと。そうだ、佳奈姉さん、あかねちゃんを紹介するよ、待ってて」

幸は立ち上がるとあかねを呼びに行った。

「そうだ、先生」

「ん」

「ほら、親戚の瞳さん、先生や幸ちゃんのこと心配していたよ、旅のこと、話してなかったのかい」

「話してなかったな。瞳さん、たまに買い物に来るのかい」

「瞳さんち、遠いけどさ、それでも月に一度くらいは買い物に来てくれるんだ」

「そうだね、後で連絡をいれておくよ」

瞳がここで生活していた頃、親戚ということで佳奈に紹介していたのを男は思い出した。

「佳奈姉さん」

幸はあかねの横で、にっと笑顔を浮かべた。

幸の声に佳奈が笑みを浮かべ向き直った瞬間、佳奈の頭の中に、初めまして、という声が響いた。

「これは・・・、驚いた」

佳奈はあかねに向けて、こんにちわと、言葉を送った。

あかねが、少し驚いたように目を見開いた。

「本当にお姉さん、心を読むことが出来るんですね」

あかねはぺたんとして佳奈の前に正座をすると、恥ずかしそうに笑った。

「幸ちゃん、これはどういうことなんだい」

「あかねちゃん、半年前から、心を読むことが出来るようになってね、幸が普通に日常生活を送

ることが出来るよう指導しているのです」

「ほお・・・、なんていうか、いや、もうびっくりだよ。幸ちゃんが指導しているなんて」

「ええっ、びっくりはそっちなの」

「だってさ、初めて幸ちゃんに会った時の」

「ああっ、だめ。それは秘密だよお」

「いいじゃないか、可愛かったよ」

佳奈はしょうがないなと笑う、

佳奈は、一年、見ないうちに幸がしっかりとしたのを驚きつつも、嬉しく見守っていた。不思議な出会いだとつくづく思う。

佳奈が帰った後、幸とあかねは家の掃除を始める。男も書類の整理、そして、事務仕事を始めた。時々、幸があかねに掃除の手順と要領を教える声が聞こえる。男は自分がなんて幸せなのだろうと思う。そして、願わくば、自身が死んだ後も、幸が幸せに暮らしてくれればと願う。

昼を過ぎ、男が瞳の話をする、幸が眉を曇らせた。

「瞳さん、なんかあったのかなあ」

「あとで、父さん、行ってみるよ」

幸は少し俯き考えていたが、男をじっと見つめた。

「ううん、幸が行くよ。おばさんにも会いたいし」

「瞳さんのお母さんだったかな」

「うん、幸は更生した親切な不良少女なのです」

そっと幸が笑みを浮かべた。

「幸はやさしいな」

「そりゃそうだよ」

「え」

「お父さんは幸にとってもやさしくしてくれる、だから、幸はやさしくされることがとっても嬉しいことを知ってる。そうするとね、なんだか、嬉しいなという気持ちを伝えたくなるんだ」

思わず、男は幸を抱き締めたが、慌てて手を離した。

「ごめん」

「どうして謝るの。お父さんに抱き締められるのは幸の一番嬉しいことなのにさ」

「いや、まっ・・・」

「うふふ、お父さんも随分成長しました。でも、もう少し積極的でないといけませんね」

男は照れて、恥ずかしそうに笑ったが、落ち着きを取り戻し言った。

「幸、あかねちゃんはどうする、連れて行くか」

「社会勉強にはいいけど、瞳さんとあかねちゃんはお互いを知らないから、ん・・・、あかねちゃんが瞳さんの素性を知ったらどうなるかな」

「瞳さんはあかねちゃんを見ればあの時の娘だってすぐにわかると思うよ。それに、あかねちゃ

んは聡いし心を読むこともできるからね、お互いが知ることになるかもしれない」

「そっか・・・、どうしよう」

「そうだな。あかねちゃんを連れていきなさい、そして、万が一の時は父さんを呼びな、駆けつけるからさ」

幸が笑みを浮かべる。

「お父さんが駆けつけてくれるなら、幸は元気一杯。もう、鬼の大軍にだって、勝負かけるよ」

「それはやめてください。幸が刀片手に大笑いしているのが目に浮かんでしまう」

男はくすぐったそう

に笑った。

幸は地味なTシャツにゆったりとした黒のカンフーズボン、それに帽子を目深にかぶっていた。髪は後ろで柔らかく結わえている。

「お姉ちゃんはどうしてそんなかっこうするの、とっても綺麗なのに」

「これが一番動きやすい、それに、幸は美人すぎるからさ、男の視線が煩わしくてね。いや、お父さん以外の男には見られたくもないんだ。男は大嫌いだ」

「ね、おじさんがお姉ちゃんのこと、美人だっていったらどう答える」

「ううん、幸なんか、ぜんぜん、美人じゃないよ、普通だよお、ってね」

幸はにいと笑うと、あかねの頭をぽんぽんと叩く。

「惚れた人には素直で無邪気な良い娘に思われたいのさ」

幸とあかねは家からしばらく離れたスーパーマーケットの前に立っていた。

「ここで友人と会う。腐れ縁という奴かな」

瞳は買い物カゴを持ったまま、スーパーの中を歩いていた。気になることがあるらしく、心ここにあらずの様子を見せていた。

でも、たまにはハンバーグくらい作ってやらないと・・・、ふと、ミンチ肉に瞳の手が伸びた。

「あと二分待ちな、店員が三割引のシールを貼ってくれるぜ」

真横で声が聞こえた。驚いて瞳が振り向いた。

「幸さん・・・」

「久しぶり。ん、元気そうじゃないな、どうした」

「あの、あの・・・」

何から喋れば良いのか、整理がつかず、瞳は苦しそうに蹲ってしまった。幸は仕方無さそうに笑みを帽子の影で浮かべると、そっと顔を近づけた。

「出来ないことは出来ない、でも、出来ることならしてやる」

幸の声に元気づけられたのか、瞳はやっとのことで立ち上がると、思い切って幸に言う。

「母を、お願いします、母を助けてください」

一瞬、幸の眼差しが鋭く瞳を貫いた。

「おばさん、どうかしたのか。場所を変えよう」

幸が瞳の手を取った。

あかねが慌てて、三割引のミンチ肉をカゴの中に入れて。

「あかねちゃん、これで清算して入り口で待ち合わせ、いいかな」

幸があかねに財布を渡す。

あかねは頷くとレジへと駆けて行った。

スーパーマーケットの出口近く、少し人どおりの少ない場所で瞳は幸につかえながら話す。

「母は病気で、病気で、あと一カ月って・・・」

「瞳さん、あんたの心、読んで良いか」

「は、はい」

幸は瞳の顔をじっと見つめた。全身転移、がん、瞳はどうしてもこの言葉を口にできなかった。口にすることが恐怖で仕方なかったのだった。

「他の病院は当たって見たのか」

「はい、でも、何処も手遅れだと」

幸は瞳の頭の中に浮かぶ病院の数が五十を超えることを確認した。

幸は瞳が家族に溶け込みやすいよう、瞳の母親に会い、不登校の少女として話をしていた。思いつく、本当に、ただただ、良い人だった。子を心底心配し、孫を目に入れてもいたくないという、ごく普通の人であった、良い人だ。

「ここで返事はできない。行ってから考える、瞳さん、車で来たんだろう、病院まであたしとあかねちゃんを連れて行ってくれ」

「あかねちゃん・・・、あ、それは」

「余計なことは考えるな」

あかねが買い物袋と財布をもち駆け寄って来た。

「これ。たくさん、ドライアイスを入れてもらいました」

「そうだね、すぐに冷蔵庫に入れられそうにないからちょうど良いかな」

あかねが、幸に財布を返す。そして、買い物袋を瞳に差し出した。

「どうぞ」

「あ、ありがとう・・・、本当にごめんなさい」

瞳の運転で幸とあかねは病院へ向かった。

「なんだか変な気がします、落ち着かないような」

あかねが幸にそう呟いた。幸とあかねは後部座席に座っていた。

「ルームミラーから後ろの車を覗いてごらん」

幸の言葉にあかねは少し背を伸ばし、ルームミラーから後ろを覗く。黒い車が三台、後ろに張り

付いていた。

「あれは」

「あかねちゃんが、外に出るのを待っていたんだらう。しかし、これは恣意行為、実力行使に出るつもりだな、なめられたもんだ」

「撒きます、しっかり掴まってください」

瞳が鋭く囁いた。

幸があかねの肩をしっかりと抱き寄せた。

交差点、赤、瞳はアクセルを踏み込む。何台もの車をすり抜けるように右へ曲がった。アクセルは戻さない。

怒号、クラクションのつんざめく音が遙か後方へと消えていく。ハンドルをいきなり切る、軋みながら立てる車、車一台やっとの一方通行をアクセルべた踏みで駆け抜ける。

交差するとおりの向こうに病院の入り口が見える。

瞳はううっと低く唸ると、赤信号の交差点を飛び出した。

あかねの手を取り、幸は瞳に聞いた病室へと向かう。

がくがくとあかねの脚が震えてた。

「無茶です、あれは、あの運転は無茶です、違反ですっ」

「運が良いとしか言いようがないな、横から車が来ていたら終わりだ」

幸が平気な顔して笑った。

固まっている瞳を後から来いと幸は言い残して病室へ向かっていた。あれだ、327号室、一番の端の部屋だ。

一瞬、幸の脚が固まった、心電計の不規則な音が聞こえる。

幸は一つ深呼吸をすると、病室に入った。

個室だ、酸素吸入器が取り付けられ、はっきりと見えるのは目元だけだが、確かに瞳の母親だった。あかねの手を離し、幸は茫然とその姿を見る。窓からの青い空が、あまりにも不似合いで美しすぎる。

帽子を取り、幸はベッドに駆け寄った。そして、母親の耳元に語りかける。

「幸です、憶えていてくれますか、いっぱい、お喋りしましたね、遅くなってしまっておめんなさい」

微睡みかけた意識の中で、何かが繋がったのだらう、微かに顔を向け、そっと笑みを浮かべた。何か、話したげにしているのだが、声を出す力も残っていないようだ。幸は耳元で優しく囁いた。

「幸は言いましたね、本当のことという、幸は神様なのです。瞳さんが帰ってきたのも幸のおかげです、そして、お母さんが、お母さんの病気が治って元気になるのも幸のおかげなのですよ」哀しげに笑みを浮かべる。幸は瞳の母親の手をぎゅっと両手で握ると、額をそっとそっと重ねた。



「お父さん、ごめんなさい・・・」

ゆっくりと瞳の母親は目を閉じ、眠り込んだ。

幸は、顔を上げ、天井をにらみつける。

そして、振り返った。瞳が息を切らし、部屋に入ってきた。

「瞳さん」

「は、はいっ」

「一度だけだ、助けてやる。あんたの母親には世話になったからな。だけど、完全に腫瘍を取り除くことは出来ない、こいつらも、元はあんたの母親の体だからだ。普通に生活できるようになっても、再発するかもしれない。つまんねえ鮫だとか、わけのわからない薬もどきを飲ませるなよ。もっとしっかりした病院で確実な治療をさせろ、いいか、わかったな」

「はい、わかりました」

にらみ付ける幸に、瞳は弾かれたように答えた。

「あたしが良いと言うまで、ドアの外で待ってろ。しっかりドアを閉めて、誰も入れるな、医者や看護婦、一切の例外無しだ。わかったら、部屋を出ろ、ドアの前、踏ん張って誰も入れるな、いいな」

慌てて、瞳はうなずき、部屋を出るとドアの前、かばうように立つ。

幸は一つ、溜息をつくと、力無くあかねに笑いかけた。

「あかねちゃん」

「は、はい・・・」

「怪我ならさ、どんな酷い怪我でも直すことが出来る。でも、病気は別なんだよ。変質していく体も、また、その人自身なんだ。だから、あかねちゃんの怪我を治したようには行かない。ね、あかねちゃんはさ、幸がお父さんをあんなにも好きなのが不思議だろう」

「は、はい」

「幸はさ、とっくに死んでいたんだ。それを、お父さんが自分の生命を削って幸を生き返らせてくれたんだ。この体全て、髪の毛一本に至るまで、お父さんのおかげでここにある、それを少しでも傷つけるなんて、それを選ぶなんて、幸にとってそれは絶対に許せないことなんだ」

いきなり、幸は左手小指を噛み千切った。

あかねが息を呑み、蹲った。

幸は噛み千切った小指を右手で持つと、あかねに言った。

「しっかり、睨んで見ておきなさい」

あかねが幸の気迫に飛び上がるようにして立ち上がった。

幸は、瞳の母親のお臍に千切った小指を載せると、両手をそのまま母親の腹部へと溶け込ませていった。

「体力が無くなっている分、しっかり支えてあげるよ」

幸は涙を流しながら笑みを浮かべた。

ドア越しに瞳には幸の声が聞こえていた。

涙を流さないように歯を食いしばる。

看護婦が点滴を用意しやって来た、ごく日常の表情だ。

「お嬢さんですね、点滴の準備をしますから」

「ごめんなさい、いまは誰もお入れすることは出来ません」

「はい・・・。あの、おっしゃっている意味が分からないのですが」

「ごめんなさい、どうしても、このドアを開けることは出来ません」

「なにをおっしゃっているんですか、こんなことは初めてです」

「見つけたぞ」

男のわめき声が轟いた。

先程の車を運転していた男たちだ。三人、四人、五人だ、がなりたてながらやって来た。

「ここは病院です、静かにしてください」

看護婦が叫ぶ。

「邪魔だ」

先頭の黒服の男が看護婦を払いのけた。

「鬼紙家の孫娘はここだな。ドアを開けろ」

「だめです、絶対に開けません」

「なんだと」

黒服が瞳の胸倉を掴みかけた瞬間、飛び上がり、黒服の内蔵を鋭く、右足の爪先で突き刺した、くの字になって弾き飛ばされる黒服。これは以前、幸から教わった武術の動きだった。

四人の男たちが瞳に向かって一斉に拳銃の銃口を向けた。

「おもしろいことをやってくれるな。だが、ここまでだ。俺達は孫娘さえ、生きて連れ帰れば良い、他の奴らは死んでいてもいいのさ、跡処理屋にまかせておけば綺麗に片付けてくれるからな」

「いやいや、自分の始末は自分でつけなさい、大人なんだからね」

男は瞳の前に立つと、くすぐったそうに笑った。

「先生」

瞳が叫んだ。

「先生ってほどじゃない。俺は、いや、私は瞳さんには何も教えていないからね、ただ、幸の教えたあの蹴りは見事だ。練習、欠かさなかったようだね」

「どっから現れたんだ、こいつは」

黒服が脅え叫んだ。

「君の右手側、歩いて来たんだけど気づかなかったかい」

「なんだと」

「ほら、それが証拠にその拳銃持つ右手、妙に痛くはないか」

黒服が初めて気づいた。肩口から血があふれ出している。

「うわああつ」

「ここが病院で良かった、早く繋いでもらいなさいな、皮一枚でつながっているその腕、落ちてしまうよ」

黒服たちが拳銃を持っていることも忘れ逃げ出した。

男はドアの横、壁に背を預けると一つ、吐息を漏らした。

「さて、どうしたものかな」

「申し訳ありません、大事な幸さんに大変なことを」

「いや、これは幸が選んだことだ。瞳さんが私にどうこう言う必要は何もない。ただ、私は新米の父親だからさ、幸を叱るべきか、それとも、褒めるべきなのか。判断かつかずにいる、なんだか、情けないよ」

半時間も経っただろうか、ドアが開き、あかねが顔を出す。

「入ってください」

瞳がおそろおそろ部屋へと入る。

ベッドには酸素マスクを外した瞳の母親が、先程とは別人のように寝息をたて、気持ち良さそうに寝ていた。

しかし、ベッドの足元、幸が頭を抱え、震えながら蹲っていた。

「おじさん、お姉ちゃんがお父さんに申し訳ないって・・・」

男は哀しそうに笑みを浮かべ、あかねの頭を撫でると、病室に入る、そして、幸の横、病室の床に座った。そして、ポケットから包帯を取り出す。

「自分の体に傷つけるとは何事だと叱るべきかと考えた、それとも、身を犠牲にして人の生命を救った娘を褒めたたえるべきかと考えた。なんかね、ごめんね。父さんにはどっちも無理だ」  
止血をし、男は幸の左手に包帯をしっかりと巻いて行く。

「お父さん、ごめんなさい」

男は何も言わず幸を抱き締めた、そして、静かに静かに泣いた。

「何も言えずに泣くだけの父親ってかっこ悪いな。ごめんね、幸」

男はそう呟いて静かに泣き続ける。

そして、どれほど経っただろう、男は幸をだきかかえ、あかねを促し、静かに病室を出て行った。

家に帰ると、居間に幸を寝かせ、男はその枕元に座る。

「おじさん、お姉ちゃんは」

「回復力が随分と強い、夜には目を覚ますと思うよ」

「それじゃ、晩ご飯作ります」

「ありがとう」

あかねはほっとしたように笑みを浮かべると、台所へ向かった。

「幸、なんだかさ、お揃いになってしまったな」

男は幸の左手を両手で包み込む。

「痛かったか、苦しかったか、恐かったか。でもな、大きな決断を自分で決めたこと、父として、家族として、誇らしいよ。でも、ほんというと、父さん、こんなに狼狽えたのは初めてだ」硝子戸からの外の景色、夕刻、西日が差し込み始めた。炭の焼ける匂い、あかねがご飯を炊き出したのだろう。

不思議なほど静かだ。

男は幸の左手を包み込んだまま、幸の寝顔を見つめる。

自分は本当に幸が大切なのだなと改めて思う。

こんなにも大切な人と、こうしてここに一緒に居ることができるということが、なんて幸せであるのかを、幸に感謝した。

どれほどの時間が経ったろう、日は沈みきり、外は仄暗く、辺りを闇が漂いだした。

「お父さん、ごめんなさい」

「ん、気が付いたか」

「お父さんにいただいた大切な体を傷つけてしまいました」

「父さんはさ、とてもつらいんだ。でもね、それは、幸がどんなに痛かっただろう、苦しかっただろう、それを代わってやれなかった自分が情けないなってね、それだけが、ただただ辛いんだ。でも、こうやって、幸とお喋りしてほっとしているよ」

「お父さん、ずっと手を握ってくれていたの」

「だってね、幸が何処かに行ってしまうのか、とっても、寂しかったからさ」

「幸はずっとここにいるよ、いてもいいよね」

「ああ、いていいよ。ずっとね」

「お父さんもいるよね」

「ああ、いるよ」

「うふふ」

幸が小さく笑った。

「なんだ、泣いていた女の子が、もう笑った」

「だって、嬉しいもの」

「幸が嬉しいなら、父さんはもっと嬉しいよ」

「ああ、くんくん」

「どうしました」

「香ばしい匂いがする、これは」

「あかねちゃんがイカを焼いているんだろう、晩ご飯のおかずだね」

「おなか減ったよう、ぺこぺこだあ」

「幸、起き上がれるか」

「ん・・・」

幸は男の首に右腕を回す、男は両腕で幸を抱き起こした。

そして男があかりをつける、幸は少しふらつきながら立ち上がった。

「大丈夫か」

「うん、大丈夫」

ふと、幸は自分の左手を見る。

「お父さんと一緒だ」

「困ったところばかり似るなあ」

「えへへ、できの良い娘ですから」

「本当に良い娘です」

男はわしわしと幸の頭を撫でた。

「幸」

「ん・・・」

「父さん、人はさ、本当に愛することのできる人、そんな人と巡り会えるのはとても幸せなことだと思う、そして、その人が隣りにいてくれる、これ以上の幸せはないなと思うよ」

「お父さん、それ、幸のこと」

「そうかもな」

「お父さん、ありがとう」

「どういたしまして」

「うわああっ」

幸が湯船の中で悲鳴を上げた。

夕食を終え、あかねと二人、御風呂に入っている最中だった。

洗い場で体を洗っていたあかねが驚いて振り返った。

「お姉ちゃん。左手大丈夫」

幸は左手をスーパーの買い物袋で包み込み、輪ゴムでしっかりと留めていた。

「失敗したよお」

幸が涙目になって呟いた。

「あのおばさんの治療ですか」

「ううん、さっきお父さんがさ」

幸はあかねに、起き上がった時の男の言葉を繰り返した。

「うわあ、それでお姉ちゃん、どう返事したの」

「ありがと・・・」

あかねは溜息を漏らすとなだめるように笑顔を浮かべた。

「いつか、また、おじさん、告白してくれますよ、多分・・・。合掌」

そっとあかねが両手を合わせ合掌する。

「あかねちゃんの何もかも分かったような顔、むかつきますう」

「だって、いつものお姉ちゃんらしくないんだもの」

「だって、だって。本当にお腹が減ってたんだよう」

「食気優先ですね、案外、お姉ちゃんっぽいかも」

「ううう」

幸は湯船で唸ると、いきなり立ち上がり、あかねを後ろから抱き締めた。

「あかねちゃんをいじめてやる」

「あ、あの。へんなとこ、触っちゃやだ」

「大丈夫だよ、とっても気持ちいいんだからさあ。大人の秘め事をじっくり教えてあげるよ」

「あかねはまだ子供です、そんなの知らなくていいんです」

あかねが叫ぶ。幸は余計に面白がってあかねの首筋をじっとりと嘗めた。

「ひいやああ」

振り返ったあかねが幸の顔を引っ掻いた。

男は愉快に笑うと、二人を見た。

あかねが幸の顔に絆創膏を貼っていた。

「なんだか、本当に仲の良い姉妹だ」

「ちょっとした冗談だったのにさ」

幸が拗ねたように言う。

「身の危険を感じました」

あかねは怒りながらも、まるで保護者のように幸の頬に絆創膏を貼る。

お風呂上がり、男はそんな二人の姿を見て笑う。

本当に幸せな時間だと、そう思った。

「でも・・・、こういうの、初めてです」

ふと、あかねが呟いた。

「え、初めてって」

幸が問い返す。

「我慢せずに感情を出してしまうことが」

「そっか。それは楽しいかな」

「とても楽しいです、思いっきり深呼吸している気持ちです」

幸はにっと笑うとくしゃくしゃとあかねの頭を撫でる。

「あかねちゃんは幸の大切な妹だ」

「でも、幸。来週はあかねちゃん、お母さんのところに帰るんだから、寂しいって泣くなよ」

「あ・・・、泣くかも」

ふと、幸が溜息をついた。

「うわっ、本当に泣くかもしれない、どうしょ」

「私は泣かないけど、お姉ちゃんは泣くかもしれない」

あかねが幸を覗き込んで言う。

「なんだよお、一緒にわんわん泣こうよ」

男がくすぐったそうに笑う。

「あかねちゃんには自分の身を守るために武術を身につける方が良いかもしれない、幸、教えてあげなさいな」

「そしたら、一週間に一度くらいは会えるね。そういえば、車で追いかけて来た奴らって」

「忍者だ」

男はインスタント珈琲の蓋を開けながら事もなげに言う。

「映画で出てくるような」

「元はね。彼らは明治からこっち、政治家や財界人のボディガードから暗殺まで、主に裏の仕事に従事している。時代劇に出てくるような黒装束はしてないけどね」

適当にお湯を容れる。

「あかねちゃんの母方のおじいさんは大金持ちで、この国を実質支配している人達の一人なのさ。いや、元はと言う方が正確だ。跡目は長男に譲って隠居しているからね」

「そんなあかねちゃんがどうして」

「あかねちゃんのお母さんの兄、これが、随分な人だからね。多分、あかねちゃんに自分の立場が揺るがされるのではと脅えているのだろうな」

「でも、あかねちゃんって、まだ子供だよ」

「そうなんだけどね」

男はそっと笑みを浮かべると口をつぐんだ。

幸はそれ以上追求せず、あかねを促し、昨晚の続き、数学の復習を始めた。

男は台所で食器を洗う。

男は考えた、あかねの祖父宅にて、次に来る日を伝えていたその日より、一日早く行く方が良いかもしれない、護り髪は残しておいたが、用心に越したことはない。

朝、男が目を覚まし、居間に入ると、幸とあかねが、火のない堀炬燵に足を入れたまま、居眠りしていた。

時計を見る、少し早く起きすぎたのか。二人に掛け布を被せる。

気持ち良さそうに眠っている。

朝ごはんを作ってやるかなと男は台所へ向かった。

男は手早く、玉葱とワカメでお味噌汁を作る、お櫃を覗いて、ふと思いつき、おむすびを作った。あとは、玉子でも焼くかなと、

「お父さん、おはよ・・・」

「ん、おはよう。まだ早いから寝てなさい、遅くまで起きていたんだらう。無理するな」

「ん・・・、お腹減った」

幸は男に抱き着くと、そのまま手を伸ばし、お皿からおむすびをひとつ取る。

「お父さん、食べていい」

「いいよ」

笑顔を浮かべ食べる。

「お父さんのおむすびは美味しい、目が覚めた。これは梅干しだ」

「冷蔵庫の中、有り合わせだけだな」

「美味しいよ、あ、お味噌汁だ。うーん、食べたいけど、母さんの散歩に付き合ってからにするよ」

「そっか、気をつけな」

「うん、行って来る」

男は幸を見送った

卵焼きを焼く、そして、二つに分け、皿に盛った。

そして、男はお湯を沸かし、インスタント珈琲を作る。男の朝食だ。

居間に戻ると、男は硝子戸から外を眺める。鶏小屋を作るの、手伝うかな。いや、それは幸に任した方がいい。ふと、男は気づき、カーテンを締めた、眩しいだろう。

男が居間を出ようとした時、

「おじさん、おはようございます」

「ん、おはよう」

振り返り、男は笑みを浮かべた。

「もっと寝ておいた方が良いよ、無理し過ぎて体を壊しては意味がない」

あかねが柱時計を見て言った。

「三時間は寝ましたから、大丈夫です。それに、数学は分かり出すと、なんだか、わくわくして面白いんです」

「そうだね、数学は楽しくて美しい」

男は珈琲をすすると、少し笑った。

「数学と哲学は、自分が迷った時に助けてくれる大きな力になると思うよ。あまり時間がないから、哲学は教えられないかもしれないけどね」

「あの、おじさん」

あかねが思い切ったように言った。

「どうしました」

「私は叔父の地位には関心ありません」

「大金持ちになれるよ、欲しいものは手に入るし、人を自由に動かすこともできる」

「多分、私はそういうものに嫌悪しています」

「多分・・・」

「ごめんなさい、曖昧な言い方で」

「いや、はっきり言い切れる方が教条的で却って不安になる、正直な表現だと思いますよ」

男は笑みを浮かべ、珈琲を啜る。

「いまはどう考えますか、これからの人生を」

「勝手なことを言ってもいいでしょうか」



「どうぞ」

男は珈琲を堀炬燵の上に置き、あかねの向かい側に座った。

「高校までは行きたいと思っています」

「いま、あかねちゃんは小学四年生だったかな」

「はい、今後、クラスに馴染むことが出来るかどうかはわかりませんが、違和感があります。でも、高校まで続けて、社会のことや人のことを知り、肯定できるかどうかは別にして、馴染んでおきたいと思います」

「あかねちゃんは人の心を読むことが出来る、ただ、今後は幸のように、いろんなね、力が使えてしまうようになるかもしれない。それは、この社会では却って生きづらくなってしまふ。幸は意識しているかどうかはわからないけれど、商店街の人を姉さん、母さんと呼ぶ、それは家族というものに憧れているのと同時に、他人と馴染むことが出来るようにしたいという気持ちの表れだと思っているんだ。他人にない力をたくさん持ってしまふと、普通に生きていくことが難しくなる。でも、馴染む努力を捨てるのは間違いだと思う。だから、あかねちゃんの考え方でいいと思うよ」

「ありがとうございます。それで・・・」

あかねが少し言いよどんだ。

「いいよ、言いなさいな」

「一週間のうち、一晩だけでも、ここで生活をしたい。お姉ちゃんと一緒に畑を作ったり、鶏の世話をしたいんです。そして、高校を卒業したら、ここで生活したい」

男は、瞬きもせず言い切ったあかねの言葉を聞いて、少し視線をずらし、硝子戸から梅林を眺めた。梅の精が二人、ここで生活をしていくことになるということか、シェルター、この地は社会からの避難場所みたいなものかもしれない。俺はその時もこうして生きているかな。

男はやわらかく笑みを浮かべた。

「考えてもいなかったよ」

「ごめんなさい」

「あかねちゃん」

「はい」

「良い考えだと思うよ。もちろん、あかねちゃんのお母さんやお父さんの考え方がある、それは尊重する。また、幸もどう答えるかは私にはわからない。でも、私はあかねちゃんにとっても、幸にとっても、それは良い考えだと思うな」

男は珈琲を一口飲み、にっと笑った。

「幸がどんな反応をするか楽しみだ」

男は珈琲を飲み干すと、硝子戸から外を眺める。

「幸は、畑とたんぼまで作ってしまうかもしれないな。そして鶏を飼って、そういえば、山羊も飼いたいとか。多分、幸、一人では手が回らない、あかねちゃんが居てくれたら助かるだろうな」

「楽しいだろうなと思います」

「そうだね、梅の木が多いから、梅干しは作ることができるけれど、それだけでは寂しいかもしれない、桃とか、いろんな果樹を植えるのもいいな」

「頑張ります」

男はあかねの言葉に少し笑うと、うなずいた。

「幸をよろしく」

「お父さん、お父さんっ」

幸があたふたと戻ってくると、掘り炬燵に滑り込んだ。

「定位置に着陸」

「どうしました、お腹減ったか」

「見張っているやつらが居る、きっと忍者だ」

「うちをか」

幸が頷く。

「ね、忍び込んでくるかな」

「ごめんなさい、私のせいです」

あかねが脅えたように呟いた。

「うん、なんだか、わくわくするよ。あかねちゃんのおかげだ」

幸は笑うと、宙から刀を取り出す。かなりの長刀を右手で軽く水平に構える。

「あ、でも、掃除が大変だ。やっぱり、外で斬っておくかな」

男は呆れたように吐息を漏らした。

「家には結界が張ってあるから、招かれざる客は入ってこれない。幸、はっきりと相手が攻撃の意志を見せない限りは手を出さないようにね。父さん、幸が笑いながら人を斬って行くの想像したら、なんだか、幸の育て方、間違えたかなあって悩んでしまうよ」

「大丈夫、幸はお父さんの思いどおりの娘に成長しているよ。自己申告だけど」

「わかった、とっても安心した」

男は仕方無さそうに笑みを浮かべ、立ち上がった。

「幸も、幸も行くよ」

幸は刀を消し、立ち上がったが、不意にあかねを背中から抱き締めると、耳元で囁いた。

「幸も楽しみにしているよ」

男は、風景に同化したとしか思えないほど、気配を消した黒服の忍者の横に立った。

「仲間は何人いますか」

その忍者は男の家を見つめながら答えた。

「八人、俺を入れて九人だ」

「何故、見張っているんです」

「鬼紙老の孫娘を奪取する。依頼を受けた」

「何方からの依頼ですか」

「鬼紙家当主直々だ」

「なるほど、伴の依頼ですか。なら、孫娘は無事にはすまなさそうですね」

「そんなことは俺の知ったことではない」

「それはそうでしょうね」

男は頷くとブロック塀にもたれ掛かった。

「どうして突入しないのです」

「名無しだ。あの家には名無しがいる。稀代の魔人 名無しがいるんだ」

「名無し、聞いたことがあります」

「名無しとの接触は避けたい、奴が家を出て、奴の娘と鬼紙老の孫娘だけになるのを待つ」

「なるほどね。いま、名無しは家におりませんよ」

「なんだと」

忍者が驚いて男に振り返った。

「待てっ、俺は一体、誰とこんな話をしているんだ……」

男は何事もなかったように言った。

「私が貴方の前にこうして居ります以上、あの家には名無しは居りません」

刀を肩に、幸がふわっと宙から現れた。

「お父さん、八人でいいかな、一応、言われた通り、峰打ちで済ました、骨が欠けているかもしれないけど」

「九人ということだから、数は合ってるね」

「ああ、でも、なんだか、峰打ちなんて欲求不満だよ。ね、あの首、すとんって、落としてもいいかな」

「どうしようかな。まだ、お喋りの途中だからね」

幸が忍者ににっと笑いかけた、その瞬間、彼の喉元に刀の切っ先が触れていた。刀を振う様子もなく、一瞬にしてその切っ先が喉元にあったのだった。

「おじさん、安心していいよ。苦しむ間もなく、頭、落ちるからね」

「だけど、頭が落ちる前に、君の知っていることをいくつか、話、してくれるかな」

「話せば助けてくれるのか」

喘ぎながら黒服が答えた。

「君を生かしておいて実害が無ければ、そういう選択も、ひょっとしたらありかもしれない。君は無害かい」

「あんたの恐ろしさは知っている、あんたには手を出すつもりは無い」

男は黒服を睨む。男の眼に、黒服は腰が抜け、地面に座り込んでしまった。

「そうか、あの時の残党か。思い出したよ」

男は幸にそっと笑顔を浮かべた。

「刀、戻しなさい」

幸が素直に刀を降ろした。そして、興味深そうに黒服を見る。

「五年前、何人か、生き残ったのは知っていたんだけどね、さて、どうするかな……。他の奴

ら同様、一度くらいは機会を提供してみるのもいいかな」

男はしゃがむと黒服と同じ目の高さで話しかけた。

「この娘は私の娘だ、とても大切な娘でね。君の標的、孫娘ってのは、娘の友人なんだよ。いや、娘にとっては妹のようなものなんだ。だからさ、君らが任務を遂行すると、私の大切な娘が嘆くわけだよ。私は親として、嘆く娘にどう話しかければいいと思う」

「それは・・・」

黒服が口ごもる。

「難しいよね。それに頼りない父親だなんて思われたら辛いよ」

「放棄する、俺はこの依頼から降りる」

「いい提案だ。ただ、残念なことに、君の言葉が真実であり続けるか、私にはわからない。とりあえず、この急場をなんとかやり過ごそうってだけかもしれない」

「本当だ、約束する」

「言葉だけではなあ、困ったねえ。だって、君が一抜けたといってもさ、鬼紙家の倅は、はいそうですかとは、君を解放しないだろう、いろんなこと、君は知っているわけだからさ」

「五年前の事件に居合わせた者であんたに逆らえる奴はいない」

「娘の前でその話はするな」

冷たく男は黒服を睨んだ。

あかねは考えていた。二人が外に出、一人になった自分が何をすればいいのか、いま、この瞬間に自分がここに存在する理由は何なのか。

あかねは元気良く立ち上がると、台所にあった幸と自分の朝ごはんを居間の掘炬燵の上に並べる。

そして、もう一度、台所に戻ると、おひつを開け、中を覗く。まだ、ご飯が残っている。冷蔵庫を開けると鮭の切り身が残っていた。

「おじさんにおむすびを作ろう、朝ごはんは大切だし、三人で食べる方が楽しい」

慣れない手つきであかねがおむすびを二つ作り、皿に載せた時、幸が戻ってきた。男もすぐに戻ってき、玄関を施錠する。本当に朝刊を取りに行行って戻って来ただけというほどのものだ。

「え、あかねちゃん、その大きいおむすびは」

「おじさんにとって思っ」

「ありがとう。お父さん、幸が作っても朝は食べないけど、あかねちゃんが作ったのなら気を使って食べるかもしれない」

にと幸が笑う。振り向いて男に言った。

「三人で朝ごはんを食べよう」

「えっ、ああと、父さんは」

幸がぐっとあかねの作ったおむすびを差し出す。

「健気な小学四年生が小さな手で握り締めたおむすび、一緒に食べようと結んだおむすび、まさか、食べないなんて言わないよね、お父さん」

「・・・ありがたくいただきます」

男は仕方なさそうに笑った。

掘り炬燵を囲んで朝ごはんを食べる。

「朝、食べるのは、ここに住んで初めてかもしれない」

「朝は食べる方がいいんだよ」

「そうなんだけどね。そういう和やかさとか、落ち着きみたいなもののと縁がない家だったからさ」

幸が興味深そうに男の顔をのぞき込んだ。

「ん、どうしました」

「お父さん、正直に言いなさい、五年前、何をしたんですか」

「えっとさ、ん・・・、あれ、思い出せないや、しょうがないな、もう、父さん、齢だからなあ」

「五年前」

あかねが呟いた。

「見張っていた人、五年前に、お父さんに会ったことがあるらしくてね、お父さんのこと、随分と脅えていたんだ」

幸があかねに言う、しかし、これは男に聞こえよがしに言ったものだった。

「でも、おじさんはとってもいい人だから、相手の人がとっても悪い人だったのかもしれない」

「あ、ちょっと思い出した。彼はとっても悪い人だった、うん、そうだ、そうだった」

「お父さん。いまの、とっても苦しいです」

「ごめん」

男が少し俯く。

「父さん、以前は悪い人だったからさ、そういうの、幸に知られたくないんだ」

「合格、百点満点です」

幸が笑った。

「合格できましたか」

「はい、おめでとうございます」

「安心した」

「お父さんの過去は聞かないよ。今のお父さんが幸の大好きなお父さんだから。それに、幸の過去も人に言えるようなもんじゃないし」

「お姉ちゃんって」

「お父さんに助けてもらうまでは、最悪だったんだ」

幸は俯くとじっとテーブルを睨みつける。

涙がひとつ零れる。

「こうして安心して三食いただくことができる。暖かい布団にも寝ることができるし、お父さんはとても大切にしてくれる、私が儘言っても怒らずにいてくれる」

幸の瞳からつらつらと涙が流れる。

「とっても、とっても、毎日が楽しい、楽しすぎるくらいなんだ。うわぁ、涙止まらない、顔、洗ってくる」

幸は立ち上がると、あたふた、洗面所へ走っていた。

「お姉ちゃん」

あかねが小さく呟いく、そして思い切ったように男に話しかけた。

「おじさん、聞いてもいいですか」

「どうぞ」

「おじさんはお姉ちゃんが美人だから好きなんですか」

「おじさんはね、美醜が良く分からないんだ。普通の生活を送ってなかったからね」

男は仕方なように笑う。

「そうだね、親が子供を大切に思うことに理由付をするのは案外難しい。ただ、敢えて言うなら、幸はおじさんのことをとっても大切に思ってくれている。大切に思ってくれている人を好きになることはたいして不思議じゃない、そうじゃないかな」

「それは恋人としてでしょうか」

「否定しづらいな。おじさんがもっと若くて、ずっと良い人間だったら・・・、親子じゃなく、夫婦を選んだかもしれない。あかねちゃん」

「はい」

「人はその場に存在するにはそれなりの理由がある。おじさんと幸と一緒に生活するのも、お互いの足りない分を補っているんだと思う。それは、いまの、あかねちゃんにも言えることだ」

「それが私のここにいる理由」

「そうだね、おじさんはあかねちゃんが尋ねることに素直に答えた。それは、そうするのがいいと思ったからだ」

「お姉ちゃん、見てきます」

あかねの言葉に男はそっと笑みを浮かべた。

あかねは立ちすくんでいた。洗面所の前、大の字になって、幸が仰向けになって寝転がっていた。顔には白いタオルを被せて。

「お姉ちゃん・・・、お姉ちゃん」

あかねが大声で叫んだ。

「もう大丈夫だよお」

タオルの下から、幸が答える。

あかねは幸の横にひざまずくと、そっとタオルを取り去った。涙を流したままの幸がいた。

「昔のことを思い出すと発作が起こるんだ、でも、前ほどじゃない」

「お姉ちゃん、涙が止まらないの」

「涙流せるってのはいいな。人に戻って良かった」

幸が小さく呟く。

「前はさ、もっとひどかったんだ、大暴れだよ。大声で喚きながら、硝子や雨戸は割るし、お父さんに椅子や包丁まで投げ付けたんだ。でも、お父さんは怒らないんだ。それに避けないんだよ、椅子も包丁もテーブルも。どうしてかわかるかな」

「わからないよ」

「こうやって投げてるのも、それは幸の言葉だから、避けたりせずにちゃんと、受け入れるよ、なんて言うんだ。もう、参ったよ。そんなこと、言うなんてさ」

幸が右手をあかねに伸ばした、あかねはそれを両手でしっかり掴むと、ぐっと引っ張り上げた。そのまま、幸は上半身を起こすと、あかねをしっかり抱き締める。

「幸はあかねちゃんのお母さんじゃないけど、そんな気分で抱き締めてあげよう。人のぬくもり、大事にしよう」

三人は朝ごはんを終えると、男は部屋に戻り仕事の続きを、幸とあかねは庭に出て、鶏小屋の相談を始めた。

ふと、黒服が目を覚ました。地面に座り込みブロック塀にもたれ掛かっている自分に気づく。あまりの恐怖に意識を失ったのだった、五年前の惨劇が目の前によみがえる。黒服は男の言葉を思い出した。

慌てて、左腕の袖めくりあげる。「無」と一文字、痣が浮かんでいた。

一年過ぎた後、その痣はお前の体を蝕み腐らせて行くだろう。だから、ちょうど一年後、俺の目の前に現れる。その時のお前次第で、痣を消すかどうか、考えてやる。

たんとんと金づちで釘を打つ音が聞こえる。

男は部屋で事務仕事をこなしながら、聞くとともにしにその音を聞いていた。先程まで、止まり木を上から吊るすか、下から支えを用意するかで悩んでいたようだが、どちらかに決めたのだろう。

板を鋸で切る音がした、長すぎたのかな。

金網を買いに行かねばならないだろう、昼までに仕事を片付ければ買いに行くことができるなど、男は思う。

俺に足りないものはたくさんある、これを幸が補ってくれているのだなど、男はつくづく思った。

「お姉ちゃん、これ、大きすぎないかな」

あかねが戸惑いながら言った。

「設計図と随分違うけど」

幸は両腕を組み、うーん、と唸る。

「設計図は希望的観測、ただ半分くらいで良かったかな」

およそ、床は十畳、高さは二メートルはある。まだ、骨組みと筋交いだけで、これから壁や屋根

を張ろうとしていた。

「予定より鶏を増やそう、そうだ、アイガモと一緒に飼おうかな、でも一緒だと喧嘩するかも」  
幸は気楽に言う嬉しくてたまらないと笑顔を浮かべた。

「ところであかねちゃん」

「はい」

「鶏って何処で売っているか知らないかな」

「え、調べて・・・」

「うん、まだ」

幸が笑顔で答える。

「調べておきます」

あかねは溜息ひとつ、つくと答えた。幸がにっと笑うとあかねの頭をなでる。

「ありがと。頼りになります」

あかねが祖父宅へと戻る朝、三人は掘り炬燵に座っていた。もちろん、冬ではないので炬燵布団は使っていない。

男があかねに説明をした。

「もうすぐ、あかねちゃん。お父さんがここに来る。そうしたら、四人でおじいさんの所へ行こう。向こうにお母さんが待っているから、しばらくは、おじいさん宅で三人暮らすことになるだろうと思う」

「お父さん、あかねちゃんのおじさんて奴、どうしよう、すばっと斬っちゃおうか」

男は困ったように笑みを浮かべると、幸の頭をこつんと小突く。

「さらっと、日常会話の中に斬るとか入れないように」

「はあい」

男は幸の頭を軽く撫でる。

「あかねちゃんが高校を卒業したらって話はしたろう」

「うん、それ、楽しみなんだ」

「お姉ちゃん、ありがとう」

幸が、にひひと笑う。

「叔父さんがなくなったら、あかねちゃんにその跡をってなるから面倒なことになる。叔父さんには元気に生きてもらおう方がいいってこと」

「面倒臭い話だ」

幸が小さく溜息を漏らした。

男がふっと後ろを向く。

「通りを曲がって、あと三分ってとこだ」

男はあかねの父親がやって来るのを感じた。

「あかねちゃんのお父さんの後ろ、五人、お客様がいるよ。幸が挨拶に出てもいい」

「父さんも行くよ、あかねちゃんもこれからのことを考えると見ておいた方がいい」



「それじゃ、お父さんはあかねちゃんの護衛役」

「そういうことだな」

幸が引き込むようににいいっと笑った。

「止めちゃだめだよ。ね、お父さん」

## 遥の花 流堰迷子は天へと落ちていく 三話

---

### 異形 流堰迷子は天へと落ちていく 三話

鬼紙老とあかね

「お父さんは、あかねちゃんの父親を連れてきて。幸はちょっと遊んでくるよ」  
門柱の手前に男と幸とあかねが立っていた。通りの向こうからやってくるのはあかねの父親、大きめの旅行鞆を転がしやって来る、治療が功を奏したのか、血色も良いようだ。  
ただ、あかねの父親の後ろには。

「あれって、気づいていないのかなあ」  
幸が愉快で仕方ないと低く笑う。

「気づかないし、彼は先天的に影響を受けにくい人なんだよ」  
百鬼夜行、あかねの父親の後ろを異形のモノたちがふわりふわりとやって来る。まさしくの鬼、首から上だけが人の犬。半魚人や、あれは蛇だろうか、それとも小竜だろうか、伝説の妖怪たちが百以上、ゆらゆらとやって来る。

「病院には結界を張っておいたから、この道中、待ち構えていたんだろうな」

「あれも叔父さんのせいでしょうか」  
あかねが呟くように言った。

「取り殺そうというのだろうけれど、あんまり、本気ではないようだ。やっつけ仕事だな」  
男が応える。

「そっか、あかねちゃんにも見えるのか。なら、幸の活躍をじっくり見ていてね」  
にいいと幸が笑う。

男は困ったように笑みを浮かべると、あかねに言った。

「多分ね、叔父さんの差し金だろう。数は多いけれど、骨のあるのは四体の鬼と四神を象った奴だけだな」

男は門柱の裏に立て掛けていた木の棒を取る。一メートルと少しの細長い棒だ。

「良い機会かもしれないな」

男はひとつ、吐息を漏らすと門柱の外、結界を出た。

幸がその後を追う。

男が何げなく歩く。しかし、その足取りは軽く、いや、ほんの数ミリ、男は地面から浮いていた。

「父さん、あかねちゃんのお父さんを結界の中に連れて行くよ」

「それじゃ、幸は後ろの奴ら、みんな斬っちゃう、なんだか、嬉しいなあ」

「幸、理性を保て、幸は強すぎる」

「うるさい、しっかり楽しませてもらう」

男は溜息を小さくつく、その瞬間、男の姿が消えた。

男はあかねの父親の横に現れると、すぐ後ろに陣取っていた鬼を、中段、棒で突く。鬼が一瞬、倒れかけた。男はあかねの父親を片手に抱えると姿を消した。

一瞬の後、男はあかねの横に気絶した父親を寝かせる。

「移動の速さに耐えられなくて、ちょっと意識を失っているだけだからね。すぐに起きてくれるよ」

「ありがとうございます、でも、お姉ちゃんが」

男が振り返る。

二匹の鬼を両断した幸がの笑い声がかここからでもはっきりと聞こえる。片手に長刀を軽々と持つ幸の姿は絶対的確信の元に勝利を示していた。

「狂気の壁を越えて、向こう側へ入り込んでしまったということだ」

「おじさん、それがわかっていて・・・」

「一度は向こう側に行かないとね、自身の力がどれほど強く恐ろしいものかはわからない。いまなら、おじさんの力でなんとか連れ戻すことができると思う。今、以上、幸が強くなったらおじさんでも無理。いい機会なのさ」

男が寂しそうに笑った。

「ごめんなさい、おじさん」

男はいたずらっぽくにと笑う。

「幸には普通の平凡な生活を送って欲しい、親なら誰でも思うこと。ただ、ちょっとね、強すぎるんだ、幸は。もちろん、そう育てたのはおじさんなんだけどね、なんだかさ、反省しているよ」

男はあかねに言うと、立ち上がった。

「あかねちゃん、お父さんが意識を取り戻したら、居間にお通ししなさい」

「おじさんは」

「幸と後から戻る。ただ、幸だけが戻ってきたら」

「お姉ちゃんだけが」

「そのときはごめん、おじさんはもう死んでるから、無責任なこと言うけど、なんとか逃げてくれ」

幸が三匹目の鬼を片手袈裟掛けに斬る、瞬間、男は鬼を横から蹴り倒した。刀が空を斬る。

「邪魔をするなと言ったろうが」

幸が男を睨みつけた。

「幸、理性を取り戻しなさい。その刀は本当に、永劫、この世との繋がりを断ってしまう。それは、幸、自分自身の心を傷つけていくのと同じことだよ」

「わけのわからない説教に聞く耳は持たない。お前が殺されたくないのなら、ここから消えてし

まえ」

男は仕方なように笑みを浮かべた。

「そうはいかない、これでも父親だからさ」

男は棒をおよそ三分の一の位置に、右手で持ち、先を幸に向ける。

「杖は相手の動きを制する武器、剣とは異なる性格を持つ武器だ。これで幸の動きを制してあげよう」

表情を変える事なく幸が男の首を掴んだ、一瞬、腰を落とした男が剣筋を避け、幸の首に杖の先端を添えた。

幸は杖の先端を嫌い、半歩下がったが、男がゆるやかに歩み寄る、先端は幸の目の前に移動した。

「絶対的速度は幸の方が遥かに上だな」

男が小さく呟く。

幸が姿勢を思いっきり落とし、剣を下から跳ね上げた。男はその動きを読んでいたように、左に半歩躲し、浮かび上がった幸の両腕を杖で下からすりあげる。円を描くように、幸の腕を押え込みかけたが、するりと幸は流れから逃れると、打突、剣を男の心臓に向けて突いた。

男は交差させるように剣に向かって突く、杖の厚み分、剣が逸れた。

「面白いなあ、それ」

幸がにたりと笑う。

「変化が速い」

「それが杖の本質だ、よく見抜いたな」

男が答えた。

「剣はその構造上、平面の動きを連続させることで立体的な動きを作り出す。杖は最初から立体的な動きができる分、有利なのさ」

幸の姿が一瞬、後ろに流れ、入れ替わるように剣先が男の目の前に現れた。男が半歩前、杖で制しながら前が出る。

「早速、剣の動きに取り入れたか。ほれほれする」

「もう、教えてもらえないのは寂しいな、それとも、まだ、引出し、何か残ってる」

「いや、引出しに残ってるのは、黴びた匂いと埃だけ」

「それじゃ、さよなら」

幸は笑みを消すと、手首を返す、横になぎ払う、膝を抜き、男が背を落とす。男の髪の上を剣が擦り抜けた。

とんとんと男は二歩下がると後ろ手に杖を構える、幸の位置からは杖が見えない。

「幸、これから父さんが壁の向こうから救い出して上げよう」

「こんな楽しいことはないよ、ここはとってもいこごちが良いんだ。ね、父さん」

「ん・・・」

「父さんより強い奴っているのかな」

「そうだな。人では、あんまりいないんじゃないかな。人外ではいるだろうけどね」

「そうか、なら、まだこれからも楽しめそうだ」

男は答えず、微かに身を落とした。

「行くよ」

「今までありがとう」

男の姿が幸の左に現れ、その脇を打つ、幸が剣をすりと下げ、その腹で杖を流した。そのまま、平面に回転させ、男の首を引き斬る。男は杖をかつぎ、半歩前に剣を避ける。

振り向き様に中段へ突き込んだ。

二人の動きはあまりにも美しく恐ろしいものだった。

幸は迷いなく男を殺そうとしていた、しかし、男は幸に杖の動きを教え込もうというかのように見える。

百鬼夜行の魑魅魍魎たちが消えて行く。

二人の動きに気圧され、恐怖が、操っているであろう術者の影響力を遥かに越え始めたからだ。

一瞬、間合いが広がった。男の使う杖の間合いは短く、剣の間合いは遠い。男はそれを意識して、間合いを詰めていたのだが、幸に絶対的な速さにて引き離されたのだった。

どうする、右腕一本、諦めるか・・・

振り下ろす幸の剣が、男の右手を斬り落とした。

その瞬間、幸に隙が生まれた。

男は間合いを詰めると、左手で幸の頭をこつんと小突く。

「え・・・」

幸の動きが止まった、剣を地面に落とす。

男は幸の頭をくしゃくしゃとなでた。

「幸、優しい娘に戻りなさい。こちらに帰ってきなさいな」

「え、お父さん・・・。お父さん、うわああっ」

幸は男の右腕が斬り落とされ、血が吹き出しているのを見た。

「ん、大丈夫だ。意識で右腕への血管を収縮させるから」

幸は自分の服を引きちぎり、肩先を縛り付ける。

「お父さん、お父さん」

悲鳴のように男を呼ぶ。男は左手で、幸をしっかり抱き締めた。

「幸、日常と狂気の境目がわかったか」

幸が男の胸の中でこくこくと頷く。

「越えないようにな。常に日常にいること、いいね」

「わ、わかった・・・」

「幸はとってもいい娘だ」

男は手を離し、座り込む。

幸は呆然と突っ立ち男を見下ろしていた。

「幸」

「はい・・・」

「父さんもな、親父の腕を斬り落とした。力を持つとどうしようもない衝動が湧いてくる、衝動の後、それがどれだけの影響を与えてしまうかわからなくなる。だから、これでいいんだよ、そうじゃないと、本家みたいになってしまうぞ」

男は少し笑う。

「お父さん、嫌だよ、こんなの嫌だよ」

ぼろぼろと幸が泣きじゃくる。

「本当にね」

男は少し頷く。

「でも、幸と関わりを持って、一緒に暮らすのは、父さん、とっても楽しいんだ。幸は嫌かな」

「お父さん、幸が嫌だって言ったら、そうか、しょうがないなあって言うでしょう」

にと男が笑った。

「幸に約束するよ。言わないようにする、だって、父さん、幸と一緒にが一番良いからな」

一瞬、黒い影が走った。あわてて幸が振り返る、男の切り離された腕を抱えた黒服が逃げ去って行く。

「追うな、幸」

「だって、あれは」

「あの片腕は、これからも幸と楽しく暮らせるようにと、その対価にした腕だ。だから、あの腕はもう父さんの腕じゃない」

男は小さく溜息をついた。

「せっかく、まっとうに生きられるようにしてやったのに」

空気が揺れた、神崎が空気の扉をかき分けるようにして現れた。

「やあ、神崎さん。魍魎を操っていたのはあんたか、だろうな。鬼紙家息子の依頼か」

「先生に嘘を言うところの方が危ない。おっしゃるとおりだ」

幸がぎろっと神崎を睨みつけた。

「おおっと、睨まないでくれ。竦み上がってしまう。当世の義理があつてさ、断れないんだよ」脅えながらも、にやけた笑いを浮かべる。

「ところで先生、あの腕はどうする」

「私がどうこうするって代物じゃない、私の腕じゃなくなったんだからね」

「そうか。めったにない宝物だ、ありがたくいただくよ」

「奴から奪うのか」

「ああ、名無しの右腕だ。こんな研究材料はまたとない」

「私の知ったことではないけれど、奴と話す機会があるなら伝えてくれ」

「なんと伝えればいい」

「残念だったと」

「承知」

空気の中に溶け込むようにして、神崎の姿が消えた。

男はゆっくりと立ち上がった。

「お父さん」

「ん」

幸は男に添うと額を男の胸に重ねた。

「幸はごめんなさいとは言いません。ずっと、この気持ちを、気持ちを・・・」

幸は男にしがみつくと、大声で泣き出した。

「お父さん、ごめん、ごめんなさい。もう、悪いことしないよ、優しい良い子でいるよお。ごめんなさい」

男はゆっくりと左手で幸の頭をなでる。

「父さんは今の幸も大好きだし、とっってもかっこいい幸も好きだ。台所できょろきょろとお菓子つまみ食いしている幸も好きだし、あかねちゃんのお姉さんになっている幸も好きだし、にかっとなりて満面に笑顔を浮かべている幸も大好きだ。本当に幸と一緒にいて楽しい。これからもよろしく」

幸は息切れするように、ぜいぜいと息を弾ませいたが、ぐっと息を飲んで見上げる。

「お父さん、これからもよろしくお願いします」

あかねとその父親を居間に残し、あたふたと幸は男を風呂場へと連れて行く。

幸は男の上半身を脱がせるとシャワーで右肩を洗った。

肩と肘、ちょうど中間辺りに鋭い断面を見せていた。

「いいよ、あとは父さんがやるから」

「だめだよ、これは幸の仕事だ」

幸が斬り口に両手を添える。ほの白く、幸の掌が光を放つ、これは月の明かりだ。

そっと幸が手を放す、皮膚が広がり、傷口を包み込んでいた。

「お父さん、これからは幸がいつも横にいるよ。ご飯も幸が食べさせてあげるし、御風呂やお手洗いだって、幸が手伝うよ」

「いや、お願いだから勘弁してくれ、恥ずかしい」

「でも」

男は幸の真面目な表情に困り切ったように笑みを浮かべた。

「父さん、両利きだし、本当に必要と思ったら、義手をつくるよ、日常生活に不便のないくらいのをさ」

「お父さん」

「ん」

「本当にごめんなさい、幸はお父さんの仕事もだめにしちゃったし、片腕にもしてしまった」

「でもさ」

男はそっと笑みを浮かべた。

「幸が父さんの前に、こうしていてくれる。それはなにものにも代え難い父さんの幸せなのさ」

「お父さん・・・」

「幸が幸せになるようになって、名前を付けたけど、なんだか、父さんの方が幸せになったみたいだな」

男はそっと、左手で幸の頬に触れた。

「もっと、幸が幸せになりますように。幸が楽しい日々を送ることができますように」

男はふっと顔を寄せ、口づけしかけたが、思い止どまると、そっと笑った。

「なんか、父さん、上半身裸だと変になってしまう、セクハラだな。服、着てくるよ。幸も服破いてしまって、着替えて来なさいな。これから出掛けるからね」

男が立ち上がりかける、幸が男の左手を掴んだ。

「ん、どうした」

「責任取って」

幸が俯き呟いた。

「え」

幸は男を見上げると睨むようにして見つめた。

「幸はお父さんが好きです、一人の男性として愛しています。この気持ち、責任取ってください」

男は困ったように笑みを浮かべたが、少し、吐息を漏らすと、手首を返し、幸の指先をほどく。

そっと、幸の頬に手を添えた。

少しぎこちない口づけを初めて男からする。

「ごめんね、いま、恥ずかしがり屋の父さんができるのは、これで精一杯なのです。ちょっとは責任、とれましたか」

「父さんからキスしてくれたのは初めて、初めてだ」

にひひっとほがらかに幸が笑った。

「泣いてた女の子がもう笑った」

「ありがとう、お父さん」

二人は血のついた服を着替え、居間に戻った。

あかねが男の姿に何か言いたげだったが、口をつぐむ。

男は座ると、あかねの父に話しかけた。

「どうです、体の調子や気分は」

父親は落ち着いた笑顔を浮かべた。

「随分良くなりました、貴方のおかげです」



「それは良かった、これから当分、貴方とあかねちゃん、奥さんの三人、鬼紙家で暮らすことになるでしょう。鬼紙家のことはご存じでしょうね」

あかねの父親が頷く。

「駆け落ちをするまでは、私は議員の秘書をしておりました。鬼紙老と議員の連絡を取り持っておりました。ですから、表のことも裏のこともいくらかなりと存じております」

「なるほど。知っていて駆け落ちをするとは、豪気な人だ」

男は笑うと、立ち上がる。

「私と娘もご一緒致します。役に立つと思いますよ」

四人が鬼紙家近くの鄙びた駅に着いた頃には、辺りは薄暗くなっていた。

「駅の回りは森ばかり」

濃いサングラスをした幸が呆れたように呟いた。

「鬼紙家専用の駅みたいなものだな」

「森を通して半時間ほど歩くと大きな門がある。もっとも、この駅舎だって鬼紙家の敷地内だけだね」

「それって、大金持ちってこと」

「お金と土地と裏の権力を持っている」

「よくご存じですね」

あかねの父親の言葉に男は微かに笑みを浮かべた。

「随分、昔、親父が鬼紙家からの依頼を受け仕事をしました、私は見習いとして親父に従っていたのですよ」

「あかねちゃん」

幸が急にあかねに話しかけた。

「お金に目がくらんじゃだめだよ」

あかねがくすぐったそうに笑う。

「大丈夫です」

男が笑った。

「幸は大金持ちになったらどうする」

「うーん、お取り寄せとかの、カロリーが高くって、美味しいのを吐くくらい食べる。それくらいかなあ、思いつくのは。そうだ、お父さんに車を買ってあげよう」

「車はいらないよ、電車やバスで充分」

「なら、電車とバスを買ってあげるよ」

「父さん、電車なんて運転出来ないぞ」

「なら、運転手を雇って」

「それなら、始めから乗車券買って乗るのと変わらないよ」

「それもそうだ。つまりは今で充分、お父さんも欲が無いなあ」

「過ぎた欲は身を滅ぼす。父さんは幸と一緒に暮らしたいという欲がある、これでもう充分だ」  
「もお、そういうことなら、平気で言えるくせに」  
幸が照れたように小さく呟いた。

幸を先頭に歩く。舗装はされていないが、バスでも充分行き交うことの出来るような幅広い道だ。

男が、あかねと父親を挟むように、最後尾を歩く。

それでも、夕刻、両端をうっそうとした木々が生い茂るため、少し薄暗く、不思議と道幅が狭く感じられる。

「どうも、変なのですが」

あかねの父親が言う。

「どうしました」

男が答えた。

「先程から、どうも、見られているような、そんな気がしてならないのです」

あかねの父親の問いにどう答えるかなと男は考えた。

実のところ、両端の木立には偵察だろうか、何人もの人間が息を潜め、四人を監視している。

さて、これが鬼紙老の差し向けた者か、それとも、息子、現当主敬一郎の放った者かによって、対応は変わるのだが。

実際に、尋ねればいかと、男は左の茂みに身を寄せると、左手を鋭く茂みに差し込んだ。男の腕がすっと下に落ちる、影が弾かれたように、一転し、男の前に落ちた。

狐の顔をした人間が仰向けに倒れ気絶していた。

「ん、これは息子の側だな」

幸は男に駆け寄ると、狐の顔をじっと見つめる。

「お父さん、以前と同じだ」

「狐人間・・・」

あかねの父親が唸った。

「なんなんですか、これは。これ、人ですよ」

幸はしゃがむと、狐の顔を掴む。

「幸、取れるかな」

「簡単だよ」

幸は少しひねりながら、狐の顔を剥ぎ取る、下から普通の女の顔が現れた。

「狐を模した精巧な面です、付けられた人間が自分の顔と間違えるくらいですよ、前面に触覚センサーが取り付けられていて、それが脳に信号を送る。当人は自分の顔だと錯覚します」

男はあかねの父親に説明すると、女の頬を軽くたたき、女が気づいた。

「み、見るなあ」

女が両手で顔を隠し背を丸める。

「どっちをです。狐の顔、それとも、あなた本来の顔ですか」

「え・・・」

女は惚けたように手を下ろした。

「あたしの顔」

「狐の面はこっち」

幸はそう言うと、女に面を見せる。

「お面だったの・・・」

男が女の目をじっと見つめる。

「まだ、人を殺してはいないようだね、それなら」

男は笑みを浮かべると、女に話しかけた。

「いま、君には二つの道がある。このままの生活を送るか、それとも、ごく普通の生活を送るか。君はまだ二十代半ば、やり直したいというなら、ここから救い出して上げよう、どうする」

女はぼおっと男を見つめていたが、いきなり、足をそろえ正座すると、男に頭を下げた。

「お願いします、普通の生活がしたいんです」

「良い選択だと思いますよ、立ちなさい」

弾けるように、女が立ち上がった。

「君、鬼紙老は何処にいます」

「地下牢です、昨日から」

「ありがとう」

男がそっと笑った。

幸はにっと笑うと、狐面を引きちぎり、投げ捨てる。そして、自分の髪を一本、抜くと、女の手首に巻いた。

「坂村恵子、二十三歳。大学卒業後、鬼紙家の所有する持ち株管理会社に入社」

幸が濃いサングラス越しに女の間を見ながら呟いた。

「どうしてそれを」

「秘密だ。でも、恵子さん、少なくとも、ここを離れる一時間程の間、私達を完全に信じ切ってくれ。信じてくれさえすれば、元の世界に返してやる」

「は、はいっ」

幸の凜とした表情に圧倒され、女は声を上ずらせて返事した。

「あたしの名前は幸」

幸はサングラスを下に少しずらすと、鋭く坂村の眼を見つめた。そして、ほっと力を抜いたように笑みを浮かべた。

「大丈夫だよ、よろしくな」

幸はサングラスを戻すと、歩き出す。

幸を先頭に五人は玄関のたたきに立っていた。

五人の周辺には二十数人の狐面が、あるものは仰向けに、またあるものは弾き飛ばされ、玄関の

扉に突き刺さっていた。

ほんの一秒にも満たない一瞬に、攻撃しようとした狐面達を幸は打ち倒していた。

男以外には幸が動いたことすら見えなかっただろう。目の前に立つ、あかねの叔父、啓一郎ですら。

「あんた・・・、名前は」

幸が啓一郎にぶっきらぼうに尋ねた。

「私は・・・」

普段なら怒鳴りつけていただろう、しかし、目の前に立つ幸の気配に、畏怖を感じ、言葉を続けることができなかった。

男は器用に倒れている狐面達を踏まぬよう、幸の隣りへと出た。

そして、啓一郎の背広のボタンを一つ取ると後ろへ放り投げる。

「隠しカメラとそれから」

男は気楽に呟くと、左手で啓一郎の左のこめかみを軽く打つ。小さく、軋む音がした。

「本部から指示を得るための骨伝導イヤホンはこれで使いものにならない」

「お父さん、こいつ、本物じゃないの」

「東京の本部にいる啓一郎の影武者の一人だ、奴は危ないところに行くのが好きではない人なんだろう」

幸が啓一郎の影武者をじっとりと睨みつける。

「案内しな、地下牢へ」

「な、なんのことだか、わからないな」

上ずった声で答える。

幸はにいいと口元を歪め、笑みを浮かべた。

「このまま、首の骨を折られて死ぬか、それとも、地下牢へ案内してから死ぬか、二つに一つだ。でも、地下牢を選べば、あたしの気分が途中で変わって、あんたは死なずに済む可能性もなくなる。いま、どちらを選ぶか、決めな」

啓一郎の影武者は膝を震わせ、尻餅をつく。口元が恐怖で震えていた。

「選べないなら、あたしの楽しい方、選んでやるぜ」

男は溜息をつくのと、こつんと幸の頭を小突く。

「お父さん、痛いよお」

「幸、ほどほどにね」

「ごめんなさい」

男は笑みを浮かべて、幸の頭を撫でると、靴を脱ぎ、玄関を上がる。

「案内も何も、場所わかっているんだから行くよ」

「はあい」

幸も靴を脱ぐと玄関を上がった、そして、振り返る。

「あかねちゃん、行くよ」

「は、はいっ」

あかねは坂村の背中を押し、言った。

「良かったですね、先におじさんに出会っていい」

「私もこうなっていたの・・・」

坂村が倒れている同僚を見渡す。

「はい。ただ、これでも、斬られて、体二つになっていないだけです」

難無く隠し扉を開けた男の後ろを四人が追う、階下を降りると、時代劇で見るような太い木の格子で固められた牢屋が続く。

「あまり好きな匂いじゃない」

幸が小さく呟いた。

かすかな異臭は人のものではなく、また、獣の匂いでもない。

「鬼紙家は、その名のごとく鬼を研究していた。より、うまく使役するためにね。昔、父さんと親父がここに来た、それは支配を断ち切った鬼を制することだった。それ以降、ここには鬼はいなくなったんだ」

かすかに女のすすり泣く声が聞こえた。

「お母さん」

あかねが叫んだ。

あかねが走りだす、幸があわててそれを追った。

地下牢には鬼紙老と従者十人が正座をし、眼を瞑っていた。一人、あかねの母親が脚を崩し泣いていたのだった。

「おお、あかねか。ならば、あの男もいるのだな」

鬼紙老が静かに呟く。

幸はふいっと格子を擦り抜け、十二人の体に触れる。幸の手には小さな機械が載っていた。ふっと息を吹きかけると、跡形もなく消えた、その瞬間、遠くに爆発音がこだました。

「動けば爆発。自分の親や妹にこういうことをするのか」

幸が小さく呟いた。

「狂っているんだろうね」

男は旧式の錠を左手でなんなく壊し、扉を開けた。

「牢屋に入る趣味はありません。どうぞ、出てくださいな」

深く息を吐き出すと、鬼紙老は目を開け、男に頭を下げた。

「助けてもらったな」

「どういたしまして」

あかねの父親が鬼紙老に肩を貸し外へ連れ出す。あかねと幸が、泣き崩れるあかねの母親をなだめ、外へ連れ出した。従者も十人、這うように出ると、ほっと息をつき、脚を延ばす。

やがて、脚の痺れも取れ、階上へと階段を上る。全員を先に上がらせ、男は地下への隠し扉を元に戻した。

ふと、男が玄関に向かって声をかけた。

「神崎さん、わざわざどうされました」

誰もいない玄関口、しかし、ふわっと杖を片手に一人の紳士が現れた。次の瞬間、幸が刀の先を神崎の喉元に向ける。

「お父さんの右手はどうした」

「先生の右腕は手に入れた、ただ今、分析中さ」

「この野郎……。ここで、いま、あんたをまっふたつに斬ってから、お父さんの腕、取りに行く」

「先生、なんとか言ってくれ」

想像以上の幸の怒りに神崎はまともに脅えた。表情に余裕が消えている。

「取りに行くことはありませんが、それは別として。随分と、神崎さん、お腹が豊かになられたようですし、ちょっと、幸に斬ってもらったらいかがです、お腹の辺り、上からすんと」

「お願いだから冗談は止してくれ。先生の一言に私の命がかかっているんだ」

男は少し笑うと、幸に刀を収めさせた。

幸は戻ると、男の背中にぎゅっとしがみついた。

「ごめんなさい、お父さん」

「いいよ、ありがとう」

鬼紙老が気づき、部屋から玄関口に戻って来た。

「神崎君か、どうした」

「お久しぶりです、鬼紙老。残念ですが、悪いご報告を致さねばなりません」

「息子のことか」

「はい、啓一郎様が鬼と融合し、こちらへと向かわれております、あと、半時ほどで来襲なさるであろうと思われます」

「そうか……。あれには荷が重すぎたか」

力無く倒れそうになるのを、男が左手で支える。

そして、ゆっくりと鬼紙老を床に座らせた。あかねの父親がそれに気づき、あわてて、座椅子に鬼紙老を座らせた。

男は幸を連れ、部屋へと戻った。

「お父さん、どういうことなの」

「ん、さっきの話か」

「人が鬼を支配しようとして、逆に支配された、その結果、人の知識と思考能力を得た鬼がここへ攻めてくるという話だ。神崎さんの見せ場が始まるのさ」

男は興味無さそうに言う。部屋を見渡した。時代劇のお城にあるような大広間の一角、あかねが

母親に寄り添っていた。

そして、坂村が一人ぼつんと所在無げに座り込んでいた。

男が坂村の前に正座する、幸がその横に座った。

「も、申し訳ありません。私、何をどうしたらいいか、整理がつかなくて」

「いえ、いいですよ、こんな特殊な状況に対応できる方が不思議なんですから。さて一通り用事は済みました。このまま、貴方を連れて帰るつもりだったのですが、少し待ってもらえますか、一時間程」

「お父さん、鬼と闘うの」

「その必要はないだろう、なんて言ったって、折角の神崎さんの見せ場だ、今後のスポンサー拡充のためにも、彼にとってはちょうど良い機会。関わる気はないし、あんまり、目立つと幸と静かに暮らせなくなってしまう。それは大問題だからな」

男が笑みを浮かべた。

「お父さんったら、もお」

幸が照れたように俯く。

男は自然と幸の頭を撫でると、立ち上がった。

「他の人達の様子を見てくるよ、幸はここで三人を見ていなさい」

「お父さん」

「ん、どうしました」

「一人で危ないことしちゃ嫌だよ、だって、幸はお父さんの右腕なんだもの」

「大丈夫だよ、幸は心配屋さんだ」

男が部屋を出ると、幸はほおっと呟いた。

「お父さん、可愛いなあ・・・」

「優しい人ですね」

ふっと坂村が一人呟いた。

「嬉しいなあ、わかるかい」

幸が坂村に話しかけた。

「は、はい」

「ほんとにさ、とっても良いお父さんなんだ、こんな、あたしなんか、お父さんって呼ばせてもらえる・・・、ああ、だめだ、泣いてしまいそうになる」

幸は俯くと、涙を一つ零した。

いつのまにか、あかねが幸のそばに来ていた。

「お姉ちゃん、おじさんの右腕は」

「あたしが斬った」

幸はゆっくり顔を上げる、凍りついた表情だ。

「お父さんはどんな奴が襲って来ても大丈夫なように、武術と呪術をあたしに教えてくれた」

「あたしは教えてもらったその術で本当にお父さんを殺そうとした、まっふたつに斬るつもりだった」

「そんなあたしに、優しい幸に戻れって頭撫でてくれるんだ。全然怒らずに、痛そうな顔一つせずに」

幸は俯き、歯を食いしばった。

あかねは両手をそっと幸の手に重ね囁いた。

「お姉ちゃん、幸お姉ちゃん、幸ちゃん。あたしじゃない、幸だよ」

幸は深く息を吐き出すと、ようやく力を抜く。

「ありがと・・・」

男は調理場にて分けてもらった楊枝をいくつか手にし、屋敷を歩く。至る所に階段があるのは、山一つが屋敷になっているからだろう。まるで迷路にも思える。

男は時々立ち止まり、楊枝を角に刺していく、刺された楊枝はふっとその姿を消してしまう。

「先生、面白いことをやっているじゃないか」

いつの間にだろう、神崎が男の横を歩いていた。

「弱った結界に芯を刺して修繕しているのですよ」

「いいのかい、他所の者に己の技を見せても」

男は気にする風もなく歩く。

「いいんじゃないですか。一目見て悟られるような技ならたいして隠す値打ちもない。逆に仕組みが悟られないのなら、隠れてやろうが目の前でやろうが変わらないでしょう。それより、準備はできているのですか」

「ああ、賑やかに花火を打ち上げるつもりだ」

「神崎さんも元気だ、引退されるおつもりはないんですか」

「死ぬまで現役さ」

「なるほど、下の者は随分と迷惑がっているでしょうに」

男は立ち止まると、くすぐったそうに笑った。

「先生こそ、闇の仕事はもうしないのかい」

「しませんよ、だって、娘に、お父さん怖い、なんて思われたら大変です」

「先生の価値観はすべて、娘を中心にしているということか。まさしく、傾城の美女ですな」

「ええ、自分が大物政治家や大会社の社長でなくて良かったと思います」

男は答えると、最後の楊枝を角に刺した。

「これで、障壁は随分しっかりしました。さて、私は部屋に戻ります」

「先生、最後にひとつ、聞きたいことがある」

「なんですか」

「いつまでままごとをしているつもりだ」

語気を強めて神崎が言った。

男は寂しそうに言った。

「私を殺したいと思う者は多い、それは当然の報いとして受け入れる、私はいつか殺されるでしょう。ただ、死んでも、私はあの子の父親であり、父親でありたいのですよ」



瞬間、神崎が隠していた銃を男に向けて撃つ。男は何もかもわかっていたようにその弾道を避けていた。

「先生、あんた、あの女の剣を避けることができたのじゃないかい」

「あの子はまだ心が弱い、私は父親です。しっかり、心も育ててやらねばなりません、私がいなくなっても元気で生きて行けるようにね、そのためには、右腕一本、惜しくはない」

男が部屋に戻ると鬼紙老を前に、あかねの両親がかしこまって正座していた。あかねは坂村と幸の間に座り、ぎゅっと幸の手を握っていた。

男は静かに鬼紙老の隣りに座る。

「鬼紙老、随分と難しい顔されていますね。御息のことについては、心からお察し致します」

「君には随分世話になった」

「いいえ、御老のお役に、少しでも立てれば望外の喜びです。では、最初の取り決めのよう、落ち着くまで、家族三人、ここで生活するということにかまわないですね」

「そうするつもりだ。お前達、いいな」

少し脅えたようにあかねの父親が頷く。

「御老、つかぬことをお伺いしますが、跡目はどうされます」

「外に三人の息子がいる、どれかに継がせるつもりだ」

ふと、驚いたように鬼紙老は男を見た。

「君ほど危険な奴はいないな、まるっきりに警戒心が生まれん。いらぬお喋りをしてしまった」

男は静かに笑みを浮かべると、微かに頭を下げた。

あかねちゃん・・・、ふっと男が心の中で呟いた、不意にあかねが寄ってくると鬼紙老の前に座ったのだった。

「おじいさま、いっぱい、いっぱい、ごめんなさい」

必死になって涙をこらえている思い詰めた表情。これは・・・、微かに違和感を感じる、男はそっと幸に向き直ると、にっと笑みを浮かべる幸。

なるほど、演技指導済みということか。

戸惑うように鬼紙老の手が空を掴む。

あかねはしっかりと鬼紙老の手を両手で握ると、ぎゅっと力を加え、そのまま額を拳に重ねた。

「お父さんとお母さん、駆け落ちしたことを許してあげてください」

あざといが、靦面の効果があった。鬼紙老の、まさに鬼の目に涙だ。

「おじいさんと呼んでくれるのか」

あかねは顔を上げると、じっと鬼紙老の目を見つめた、そして柔らかく笑みを浮かべる。

「運動会にも来てくれたよね、学芸会も。ありがとう、おじいちゃん」

鬼紙老が嗚咽し、涙を流す姿、珍しいものを見た男は思う、それにしても、そうか、あかねちゃんは鬼紙老の記憶の中に運動会や学芸会の記憶を見つけて、そう言ったのか。

男が振り返り、幸を見る。少し睨んでみる、幸はにっと笑みを浮かべると、ばつが悪そうに少し舌を出した。

丸く収まればそれでいいかと、男は立ち上がる、瞬間。

「幸、坂村さん連れてこちらに来なさい」

幸は坂村を抱えると、一瞬にして男の元に現れた。

「神崎、やはり芯を抜いたな」

男が呟く。

外から聞こえ出した爆発音、雷の音、一瞬、閃光に部屋が青く染まる。

男は左手を肩の高さに上げ、人差し指を横に走らせる。空間が切れる、水だ、溢れるような滝の流れが現れ、足元に届く寸前に消える、まるで、滝の流れを一部切り取ったようだ。どうしてだか、これだけの水量なのに音が聞こえない。

男が前方に鋭く左手を延ばす、一瞬にして、滝は透明な壁になり、部屋を二つに分断した。

「お父さん、来たよ」

幸が小さく呟いた。

轟音と共に水壁の向こうだけが地震のように崩れ、夜空を穿つ、屋根が吹っ飛び、独りの男が、闇の空からゆらりと落ちて来た。

「見せ場を作る気か、迷惑な」

男が呟く。

「社長」

顔を上げた男の顔を見て、坂村が叫んだ。

鬼と化した啓一郎だった。

啓一郎は坂村の言葉を無視し、鬼紙老を見つめる。

「親父、俺の異母兄弟は何処だ」

「なんのことだか、わからんな。しかし、情けない、鬼紙家の当主が鬼に征服されてしまうとは」

啓一郎はにたりと笑うと、鬼紙老に一步近づく、慌てて、あかねが鬼紙老の前に、両手を広げ立ち塞がった。

「ほおう、あかねか。しっかりしたもんだ。しかし、どうも、お前はかんに触る、どいてろ」

「どかない、おじいちゃんを守る」

啓一郎は大声で笑い出した。

「愉快だなあ、お前が守ってくれるのか、親父をさ。異母兄弟も煩わしいが三人のうち二人は殺して来た。後一人、殺せば、俺の地位は安泰なんだが、どうも、あかねが憎たらしい。今のうちにこいつも殺しておくかな」

啓一郎が牙のある口を大きく開ける、いや、開けるどころか、顎の関節が外れ、下顎が真下に落ちた、炎だ、青い炎が啓一郎の口から大きく吹き出した。

ぎゅっとあかねが目をつぶる。

「あかね、逃げろ」

思わず、鬼紙老が叫んだ。

水の透明な壁が容易く炎を遮る。

「感動の場面、申し訳ないけど、私の水の結界はそんなやわじゃないんだよ」

男は少し寂しそうに笑みを浮かべた。

「随分、小物の鬼に体を取られてしまったんだね、啓一郎君。今更、言ってもしょうがないけれど、向いてなかったんだな」

男が闇夜を見上げた。

光が落ちて来た。

啓一郎の腕に鎖が絡まり、引きちぎれるほど、両端に引っ張られた。

神崎の部下が二人、両端で鎖を強く曳いていたのだった。

神崎が闇の中からするりと現れた。

「鬼紙老、申し訳ありません。鬼は千体を超え、一匹、こちらに取り逃してしまいました。鬼紙老とお孫様を危険に晒してしまったこと慚愧に耐えません」

「いや、神崎君、よくやってくれた。君に任せれば安心だな」

鬼紙老が答えた。

「ありがたいお言葉にございます、今より、本社に残った鬼共を一掃して参ります」

「うむ、頼むぞ」

「はっ」

慇懃に神崎が頭を下げる。

「おい、神崎」

幸が大声で喚いた。

「おや、先生のお嬢さん」

「あたしはお父さんがないがしろにされるのを許さない。お前、これからは安心して寝れねえぞ。いつ、あたしがお前の首、落としに行くかわからねえからな。毎日、首、洗っとけ」  
睨みつける幸に神崎はその恐ろしさを思い出し脅えたが、顔には出さず愛想笑いを浮かべた。

「同じ人間同士、話し合えばわかる、今度、先生と一緒に話し合おう、な、なっ」

すっと神崎が消える。部下と啓一郎も消えてしまった。

「なんというじゃじゃ馬娘だ、あかねがこんな女といたとは」

鬼紙老がため息をつき、呟いた。

幸が鬼紙老を睨みつける。

「じゃじゃ馬娘結構、じいさん、あかねちゃんはしっかり教育してやるよ。そのうち、じいさんに、なあ、じいよお、小遣いくれよ、今月ピンチなんだよおって言えるようにさ」

「な、なっ」

鬼紙老が顔を真っ赤にした。

「あ、あの、大丈夫ですから。言いませんから」

あかねが困り切ったように鬼紙老に呟いた。

「じいさん、今度の土曜日、遊びに来るからな、御馳走用意して待ってろよ」

「ばっ、馬鹿も一ん」

鬼紙老が大声で叫んだ。

幸は振り返ることもなく、すたすたと部屋を出て行った。

男は愉快そうに笑みを浮かべ、少し会釈をすると、坂村を促し、部屋を出た。

屋敷を出、駅へと歩く。

不意に幸は立ち止まり、男の裾を握って呟いた。

「お父さん、ごめんなさい」

「え、いいよ、面白かった。本当に幸はえらそうにしている人が嫌いだな」

「えらそうにしている奴と金持ちは嫌い」

「なるほど、両方を満たしているもんな」

男はくすぐったそうに笑った。

幸が坂村の顔を見る。

「あ、あの、私はお金持ちではないので」

坂村が慌てたように言った。

幸は笑みを浮かべると、顔を横に振った。

「これから、電車に乗って帰るには、その格好はちょっと厳しいなと思っただけ」

「あ・・・」

坂村が呟いた、首から下は黒の全身タイツだ。機動性は良いが、町中で着るものではない。

「幸、坂村さんと先に帰っていなさい。女性同士の方がいいだろう」

「それじゃ、お父さん。晩ごはんのおかずをお願いします」

「駅前のスーパーで買って帰るよ」

幸はポケットから財布を取り出すと二千元、男に渡した。

「今晚はお客様がいるから奮発。お父さん、鍋にするよ、お魚とお豆腐と野菜と卵は冷蔵庫にあるからね」

男はふと笑みを浮かべると幸の頭をなでる。

「えへへ、どうしたの。お父さん」

「なんだか、とっても、幸せな気分になった、ありがとう」

「どういたしまして」

幸は左手で坂村の右手をしっかりと握った。

ふっと二人の姿が消えた。

男は駅へと歩く。この時間だ、列車は空いているだろう、途中まではのんびりするかな。

幸と坂村は家の前にいた。

「ここは・・・」

「幸んち、家に着いた」

「さ、さっきまで、駅へ戻る途中で」

「幸にはあまり距離は関係ない、歩いたり、列車に乗るのは、人としての意識を失わないため」  
ふあさっと幸の右手に大きなシートが現れた。

「家には幾重にも結界が張ってある。そのボディスーツは呪で筋力を増加する仕組みだ、それをぬがなきゃ家に入れない」

「ここですか・・・」

「大丈夫、人通りはない、さあ、なんなら、手伝おうか」

「え、あ、あの」

幸はにっと笑うと坂村のお腹に右の手のひらを添えた。

火花を散らしながら、一瞬でボディスーツが燃え尽きた。幸は持っていたシートを坂村に被せると、家の中へと連れて入った。

幸は坂村の手を握ったまま、明かりを付ける、落ち着いたように息を漏らすと、坂村を掘り炬燵に座らせる。

「いま、お風呂の用意をするよ。下着は使ってないのがあるからそれを使ってくれ。服は幸のちょっとゆったりしたのを選ぶよ。仕方ないことだけど、坂村さん、腰回りも筋肉付き過ぎだからな」

平気な顔をして、幸は言う、てきぱきとお風呂に水を入れ沸かす。途中、お米を研ぎ土鍋に入れ、水を張った。手慣れたふう家事を続けた。

「十五分くらいで炊けるからお父さん、帰ってきてから火にかけよう」

眩き、湯船を覗く。もう少しだ、タンスから、袋に入ったままの新しい下着と、これでいいかなと、ベトナムの民族衣装、あおざいとセットになったパンツを取り出した。

「坂村さん、これで我慢して」

「あ、ありがとうございます」

坂村は受け取ると、ほっと吐息を漏らした。シートだけでは頼りなかったろう。

「とにかく、しっかり、体を洗ってくれ。体中の傷や打ち身を擦り落とすくらいにさ」

「はい・・・」

坂村が裸になった一瞬、幸はその体が傷だらけなどを認めていた。

「鞭でできたようなみみず腫れもあったな、辛い扱い受けていたのか」

「事務で就職したはずが、こんなことに」

「穴に落ちてしまったのは不運としかいいようがない。これからのことを考えな。これも縁だ、助けてやれる範囲で助けてやるよ」

ぶっきらぼうな言い方だが、少し寂しくも聞こえる、幸は自身の経験を少し坂村の現状に重ねていたのかもしれない。

男は途中、数人の男に列車から連れ出され、駅舎の奥の一室へと監禁されていた。

テーブルを挟んで、男の前には一人の美女がにこやかに笑みを浮かべ座っていた。二人の回りを屈強な男たちが十人、囲むようにして立ってさえいなければ、案外、快適な環境と言えるかもしれ

れない。

男はゆっくりと背もたれに背中を預け、少し俯く。静かな表情だ。

「貴方の数値が解析不能と表示されたため、こちらにお連れ致しました」

女が丁寧な口調で男に言った。

「数値と申しますと」

男が尋ねる。

「人はそれぞれ多少なりとも霊的能力、また、超能力と呼べるものを持っています。私達は監視カメラにとらえた人達の数値を測定し、一定以上の方達をスカウトしているのです」

男はゆっくりと顔を上げると微かに笑みを浮かべた。

「なんだか、SFの映画やドラマのお話のようですね。ただ、どちらかと云えば、子供向けかな」

女は一瞬、睨んだがすぐに笑みを浮かべた。

「ぜひ、貴方をスカウトしたいのですがいかがでしょう。もし、少しでも関心をいただけるなら」

「関心ありません、全くありません。ですから、解放していただけませんか。早く帰らないと娘が心配するのですよ」

「これは国家的プロジェクトです、貴方が秀れた能力を持つ以上、国民としてプロジェクトに参加する義務と権利があるのです」

「話の前後、少し矛盾していらっしゃいますが、権利は放棄、義務は税金だけで勘弁していただけませんかね」

男は背を預けたまま、俯き目を瞑る。

「ここで、映画とかなら、秘密を知った以上、ただでは帰れなくなったりするわけですが」

男は目を瞑ったまま呟いたが、ゆっくりと顔を上げた。

「今の今、すぐに解放していただけませんか、恵さん」

女が目を見張った。

「心が読めるの」

「高村恵、ご住所と電話、携帯電話の番号も申しませうか。それに、ご両親のお名前やご住所も。そして、ご両親の娘に対する悩み。娘は一人住まい、商社に就職したはずなのに、どうも最近、変だ、なにやら、怪しげな連中が出入りしているらしいと心配されていますよ。ついでに言うと、三日前が久しぶりの休日、洗濯物をまとめてコインランドリーに行ったのがお昼過ぎ、隣りで洗濯物をしている男に少女のような気持ちでひかれる、なんだか、恥ずかしくて声がかげられない、そのまま、何事もなく別れたけれど、また、会えるかなと思っている、今度は思い切ってお茶に誘おう、でもでもと逡巡中」

「や、やめろ」

女が叫んだ。

「彼の名前は吉村慶樹。二十六歳、半年前に彼女と別れフリーです。ただ、ちょっと気になる女性がいる。それは三日前のコインランドリーでのこと、山のように洗濯物を抱えた女性がやって

きた。随分と疲れている様子だ、手伝いましょうかと声をかけようとしたが、ここで何をどう手伝うというんだと考え直す、彼もまた、声をかけたく思いながらも」

「た、頼むからやめてくれ」

男はくすぐったそうに笑った。

「ちょっと勇気を出せばいいんですよ」

女は唸るように言った。

「今すぐにでも帰ってもらいたいのが本心だ。でも、これだけの逸材を・・・」

「貴方の上司、中村にこう言いなさい、自らを無と名乗る男に遭遇したと」

男は立ち上がった。

「それでは」

端に立っていた屈強な男二人が立ち上がった男を羽交い締めにした。

「まだ、話は終わっていない」

「いいえ、話は終わりました」

一瞬、男が膝を曲げた、その瞬間、羽交い締めしていたはずの屈強な男が部屋の向こうへと弾け飛んだ。

男は何事もなかったようにドアを開け出て行った。

幸は坂村の下着と着替えを持ち、坂村を庭へと促す。風呂上がり、坂村の髪はまだ少し濡れていた。シーツを身に纏い、戸惑いながらも庭に出た。

「どうして」

虚空には満月、手前の畑の向こうには、限がないような梅林が続いていた。

「ここ町中ですよ、隣りの家もなにもない」

「そこに縁台があるだろう、シーツを敷いてうつ伏せに寝な」

「は、はい」

坂村が慌てて返事をする、戸惑いながらも、シーツを縁台に敷き、そっと幸を振り返る。

「女同士、付いているものは同じだ、珍しくもないよ。さあ、うつ伏せになりな」

言われるままに坂村は縁台の上、うつ伏せに寝転がった、不安に目を瞑る。

幸は縁台の前で、膝を地面につき、手のひらを月に向けた。幸の手のひらが白く輝いた。幸は手のひらを坂村に近づけ、頭から首筋、踵まで、月の光を当てて行く、たくさんの傷が消えて行き、柔らかな白い肌へと戻って行く。

「次は仰向けだ」

「は、はいっ」

坂村はぎゅっと目を瞑ったまま、仰向けに向き直る。

同じく、幸が月の光を照らしたところから、傷が消えて行った。

「目を開けな」

おそろおそろ坂村が目を開ける。

幸は下着を坂村に渡した。坂村は起き上がると下着を、

「傷が無くなっている」

驚いて坂村が叫んだ。

「風邪ひくぞ、早く服を着なさい」

戸惑いながらも下着を着け、服を着た。

月光の下、二人、ベンチに座る。

「今晚は泊まってくれ、明日の朝、送って行く」

「ありがとうございます」

「ん、腹、減ったか」

「あ、いえ、あの・・・、ちょっと」

幸はくすぐったそうに声を出して笑った。

「お父さんは一仕事しなきゃだし、帰るのにまだかかりそうだ。なんか、軽いもの、おやつ代わりに作るよ」

幸はそう言うと立ち上がり家へと戻る、坂村はぼおっと満月を眺める。

なんて、穏やかなんだ

男は坂村の家、その玄関口に立った。

母親と妹との三人暮らし。

窓からあかりが見える、二人は在宅中。男は空から、左手をやわらかく招くように動かす、その手には二つの、硝子の風鈴が現れた。男がふっと息を吹きかける、二つの風鈴は空中を滑るように流れて行き、ドアを擦り抜け消えてしまった。

「宣言しておくかな」

男は右手を出そうとしたが、その腕が無いことに気づく。

「気をつけないとな」

男は呟くと、左の人差し指で表札をなぞった。

関わるべからず 無

男は次に空中から硝子の球を取り出すと闇へと放り投げる。

屋根の上で硝子の球が音もなく弾けた、無数の硝子の粉がぶわっと広がり落ちて行く。

「間に合ったか」

男が小さく呟いた。

振り返る、七人の男たちが立っていた、軽い普段着だが、顔付きはプロの顔だった。

先頭の男が低く唸るように言った。

「誰だ、お前は」

彼がリーダーだろう、値踏みするように男を睨みつける。

「この家と住人を保護する者です。もしも、あなた方がなんらかの危害を加えることを目的でここにいらっしゃったのなら、排除します」



「排除してもらおうか、出来るなら」

先頭の男がにたりと笑う。

男は対して気にするふうもなく、気楽に言う。

「裏の世界を抜けようとするれば、どうなるか、その制裁ですね。ま、見せしめってやつですな。つまらん話だ」

男はゆっくりと極端な左半身をとる。

相手の男達がナイフを構えた。

「面倒臭いのでちゃっちゃとかかかってきてください」

何も言わず先頭の男が腰にナイフを構え、突っ込んできた。

男は寸前で、左に微かに避け、相手の首筋に手のひらを添える、瞬間、突っ込んだ男の脳天が地面に激突した。

「割れたかな、左は加減が難しい」

男が小さく呟く。

男は微かに笑みを浮かべたまま六人に向き直った。

「次は誰ですか、それとも全員でかかってきますか」

男達はお互いの顔を見合わせる、

「では、私から参りましょう」

男は微かに姿勢を落とす、そして歩きだす、全く左右にぶれる事なく、そして、微かに足裏が地面から浮かぶ。相手が満足に反応出来ないのは、男の動きに振れがなく、距離感が全くつかめなくなるからだ。

男は次々と打ち倒す。あっけないほど男たちが静かに倒れて行く。

「うわああっ」

男の後ろで悲鳴が聞こえた。

振り返ると、男はにっと笑った。この笑い方は幸が時折、見せる笑いだ。

別動隊が家の反対側から侵入しようとしたのだ、硝子の無数の破片が渦巻き、侵入者達の体を引き裂いていた。

男は闇の中へ向かって声をかけた。

「出てきなさいな、今はまだ、君達に危害を加えるつもりはない」

男達が三人現れた。一人が術師、後の二人はボディガードだなど男は見抜く。

「この世界は早い者勝ち、それを引っ繰り返したいのなら力で返せ。それでよろしいですか」

男は愉快そうに言った。

「何者だ、お前は」

「縁あってこの家とその家族の保護者になりました」

「名はなんという」

「名前はありません、ただ、字は「無」」

術師が明らかに動揺した。

「あんたほどの者がどうしてここにいるんだ」

「私にとって、目に入れても痛くないほど可愛い娘の友人宅なのです、娘からどうして助けられなかったのなんて責められでもしたら家庭崩壊してしまう、父親は大変なのですよ」

男は引き込むように笑みを浮かべた。

そして呟く。

「どうします、やりますか・・・」

相手の術師は大袈裟なほど首を横に振る。

「帰るよ。あんたとやるなんて、命がいくつあっても足りない、依頼者もこの世界の間人だ、類が自分自身まで及ぶことくらいすぐにわかるさ」

術師はあっさりと背を向けると、姿を消した。

「賢明です」

しかし、術師を守っていたはずの男二人が残る。

「どうぞ、お帰りください」

男が軽く声をかける。

二人の男がゆっくりと近づいてきた。

「俺は、「無」という字を持ち、忌み嫌われるその男がどれほどの者が試してみたい」

「しょうがないガキだな、間違った選択をしてくれるとは」

男はくすぐったそうに笑う。

「しかし、せっかくだ、武術だけで相手させていただきますよう」

二人の男が変身した。狼男、まさしく、体が二倍は膨れ上がったろう、剛毛に身を覆われた狼の顔を持つ男が二人。

「なるほど、どこにそんな自信があるのかと思いましたが、とうに人間をやめていたということか、それは楽しいね」

いつの間にか男の左手には抜き身の小刀があった。

一気に間合いを詰める、つかみ掛かってきた狼男の腕を一瞬に斬り上げる。

間合いを開け、男が振り返ると、腕の切り口から肉が盛り上がり、見る間に腕が再生してしまった。

「狼男の特性は備えているようだ。早めに済ますかな」

男は普通に歩くように狼男へと歩いて行く。牽制するように二頭の狼男が唸りを上げた。

「発声器官が人のものとは随分変わってしまっているようだけど、君達は元の姿に戻ることが出来るのかな、いや、今から、息をしなくなるんだから、関係ないか。変身のためのエネルギーの核、それを潰してみよう」

一頭が背を落とし、四本足で飛んでくる、もう一頭は少し軌跡をそらし男に向かった。背を落とした方が両腕で男の膝をすくい上げ、男の脇を咬み千切ろうとした、一瞬、男の動きが加速する。狼男の後頭部に拳を落とす、首の後ろが閃光を発生し、その首が吹き飛ぶ。もう一頭が男の顔面へ右の回し蹴りを放った。

男はそれを左手の甲でなでるように流す、狼男が蹴り足を軸に一転し、地面に頭が激突した。

首が完全に九十度を超える。男が素早く、狼男の胸を差すように爪先で蹴る。閃光が走り、狼男が崩れた。

「雑な作りだな」

男は呟くと、もといた門柱に戻る。

・・・まだ、お客さんがあるかもしれない。もうしばらく、こうしているか・・・

「うまいか」

「は、はい。美味しいです、体も暖まります」

「そっか」

幸がにとっ笑った。二人、炬燵に入り、坂村は幸が有り合わせで作ったじゃがいものお味噌汁を飲んでいて。

「なんか、なんだか・・・」

坂村が不意に泣きだした。

「良かった、生きてて良かったです」

幸は仕方なさそうに笑みを浮かべた。

「別に後に出てきたやつらも殺すまではしてないからな」

「あ、いえ、そういう意味では」

幸がくすぐったそうに笑った。

「これからは真っ当に生きて行けばいい、しなくてもいい経験をして、少し、時間を無駄にしたけどな。坂村さんはこれからどうするつもりだ」

「怖いです、人が怖い。出来るなら自分の部屋にずっと閉じこもっていたい」

お味噌汁を見つめながら、坂村が答えた。

幸は吐息を漏らすと、小さく呟いた。

「まっ、人のこと言えないけどな・・・」

「坂村さん、あんたにはかなりの退職金が、口止め料込みで入ってくる、ばあさんになるまで閉じこもってられるよ。ただ、そういう生活はあまりお勧めじゃないし、かといって、また、変な会社に紛れ込んでしまったら大変だ」

幸は坂村の目をじっと見つめた。

「給料でないけど、週に一度、ここに来て働く気はないか」

「え・・・」

「庭でね、畑をつくっているんだ。いずれ、たんぼも作って、お米も作りたいなと思っている。坂村さんが次にしたいことを見つけるまでの間、手伝ってくれると嬉しい、給料は出せないけど、現物支給ならできるかなと思う」

坂村が目を輝かせた。炬燵から出ると、幸に向かって正座をする。

「やります、お願いします」

「そこまで反応されるとは思わなかったよ」

幸は少し当惑気に笑うと、ほんの少し小首をかしげる。

「ありがと、こちらこそ、よろしく」

ふと、幸は玄関口を見つめた。

「あ、お父さん、帰って来た。出迎えに行ってくる、これから鍋するからさ、思いっきり食ってくれ」

男は玄関の手前、門の前で考え込んでいた。幸が狂暴になったのは俺の血のせいだ、狼男を二人殺した、最初の奴らは殺すまではしていない、いや、硝子球の結界で一人殺した。殺すことになんの戸惑いもない。こんな俺は幸の父親失格ではないのか。

ばんと扉が開き、幸がとびだして来た。

「お父さん、お帰りなさい」

「あ、ああ。ただいま」

「どうしたの、暗い表情だよ」

幸がそっと男の顔をのぞき込んだ。

「いや、大丈夫だよ」

男はそっと笑った。幸はいきなり、男に抱き着くと、ぎゅっと男を抱き締め、顔を上げる、じっと男の顔を見つめた。

「幸はなんでも出来るお父さんが好き。でも、どうしようって悩んでいるお父さんの方がもっと好き、だって、幸が助けてあげられるかもしれないもの」

「幸・・・」

幸がにっと笑う。

「だから今のお父さんはとっても好き」

幸は引き込むように笑みを浮かべると、囁いた。

「狼男は強かったですか」

男は仕方なく笑みを浮かべる。

「随分と弱かった、びっくりした」

ふふっ、と幸が小さく声を出して笑う。

「幸はお父さんの味方です。いついかなる時も、味方し、お父さんを肯定します。だから、力強く生きなさい」

「なんだか、結婚式の言葉みたいだ」

男が少し笑った。

「お父さん」

「ん・・・」

「とっても濃いキスしようか」

「父娘だからだめ」

男が久しぶりに少し声にして笑った。

坂村は緊張していた。幸に対しては、少し気持ちも柔らかくなったが、男にはいくばくかの恐怖を感じていた。炬燵から出て、正座して待つ。

幸が男の上着の裾、引っ張るようにして戻って来た。

「あれ、どうしたの。恵子さん、正座して」

先程と、話し方も声の高さも変っている幸に少し驚きながらも、

「改めてお礼とご挨拶を」

「いえ、そういうのは無しで」

男が笑顔で答えた。

「それは、あおざいですね、綺麗です、似合っていますよ。うっ・・・」

いきなり、幸が男の頬をつねった。

「お父さん、あかねちゃんは可愛いねと言っても許します、子供だから。でも、恵さんはだめ、だって、幸、嫉妬してしまうもの」

男は頬さすりながら笑った。

「こんな、おっさんを好きだと思ってくれる変わり者は幸くらいだよ。さあ、ご飯の用意をしよう、父さん、手を洗ってくるよ」

「私もお手伝いします」

慌てて、坂村が立ち上がった。

「恵子さん。それじゃ、冷蔵庫の中にお豆腐とか鍋の具が入っているから、切っておいてください。幸はお父さんと一緒に手を洗ってきますから」

「え、手くらい一人で洗えるよ」

「だめだよ、幸はお父さんの右手代わりなんだから」

男は幸に急き立たされ、洗面所に行く。

ふと、坂村は、十年になるだろうか、離婚した父親の顔を思い浮かべた。再婚したらしいけれど、元気にしているだろうか。

「ほら、お父さんの左手と幸の右手で、ちょうど一人分だよ」

幸は男の背中に左手を回し、右手で石鹸を擦る。そして、男の指を右手で洗って行く。

「や、やっぱり、父さん、自分で洗うよ」

「どうして」

「なんだかあれだ、恥ずかしいっていうか、なんか、とつてもえっちだ、これは・・・」

幸はそっと男の頬に顔を寄せる、そして囁いた。

「幸はお父さんがとても大切です、愛しています。お父さんにはたくさん迷惑をかけたし、これからも、ごめんなさい、迷惑をかけてしまうと思います、でも、お願いします。どうか、幸を隣りにいさせてください」

「同じ言葉を返していいかな」

「え・・・」

「父さんは幸がとても大切に、愛しています。ただ、自分に自信がないから戸惑ったり、右往左往してしまう。でも、父さんを幸の隣りにいさせてください」

くすぐったそうに二人が笑った。

そして、二人、一緒に囁く。

「隣りにいること、許して上げます」

## 遥の花 流堰迷子は天へと落ちていく 四話

---

### 異形 流堰迷子は天へと落ちていく 四話

男、死ぬ

「幸は世界で一番幸せな女の子だと思うよ」

幸は男の膝を枕に横になる、晩秋の小春日和、お昼前。

縁台に座る男の膝に頭を預け、広がる畑を眺めた。畑の向こうに時々白い影が動く、子山羊が三匹、草をはんでいるのだ。

秋野菜、緑色が広がる収穫前の一時。

「頑張って世話をしてたからね、幸は」

「ううん、今の幸せは、幸がお父さんにひざ枕をしてもらっているってということ、そして、お父さんも世界で一番幸せなお父さんなのです」

「父さんもか」

「そう、可愛い娘のひざ枕ができるなんて、こんな幸せなことはないよ」

男はくすぐったそうに笑った。

「幸、父さんを幸せにしてくれてありがとう」

「どういたしまして」

幸はにひひと子供っぽく笑うと、ぱたぱたと足を振る。

「幸はちっちゃな子供だな、あかねちゃんや恵子さんの前ではしっかりしているのに」

「今の幸が本当の幸なのです、だから、正直にお父さんに甘えるのです。そうだ。ね、お父さん、恵子さんには驚いたなあ」

「ん・・・、あの人は頑張り屋さんだな」

あれからもう一年近くが経つ、男は右腕を無くした時のこと、鬼紙老の屋敷にあかねちゃんを送り届けたこと、坂村恵子にたまたま、情けをかけたこと、そんなことを思い出した。

「恵子さんはあと三十分くらいで来ます、それまで、ね。ひざ枕良いかな、それとも、今度は幸がひざ枕してあげようか」

「大事な娘だからさ、ひざ枕してあげるよ。それから、仕事再開だ」

「今日は恵子さんに畑任せて、幸、お父さんの仕事、手伝おうか」

「どうしたの、幸。この三日くらいかな、幸は父さんにとってもひつつき虫だ」

「なんだか、甘えたい、そんな気分」

「お風呂とお手洗い以外はずっと幸がひつついている」

「ね、お父さん」

「ん」

「お風呂、一緒に入ろうか。背中、流しっこしよう」

男は笑うと、こつんと幸の頭を小突く。

「それはだめ。でも、そう言ってくれることは自体は嬉しいよ」

男は吐息を漏らすと、眼前に広がる畑を眺めた。

普通に歩いて五分くらいは畑だ、その向こうに梅林が連なる。

縁台から、梅林も見えるようにと、ちょうど、畑の切れ目、畦道が梅林へとつながる。

「援農、だったっけ」

男が呟いた。

「恵子さん、うちに二日間、それから外の田舎へも農業を三日間手伝いに行って、あとの二日をスーパーでレジ打っている」

「たくさん退職金、出たんじゃないのか」

「高校生の妹が大学に行くそのお金に退職金を使いたって、恵子さん、その退職金には手をつけていない。大学四年間、五十回くらい繰り返せるくらいのお金だけど、使いかけるとずるずると使ってしまうかもしれないから、今は使わないって言った」

「しっかりしているね」

「恵子さん、いまは畑仕事が一番楽しいって、喜んでいてくれるよ」

「人が喜んでくれると嬉しいものだな」

「そうだね、ただ、問題はあかねちゃんだ」

幸が少し顔を曇らせ呟く。

「やっていることは正しいと思うけどね」

あかねはこの一月ほどここには来ていなかった。

矛盾を正したい、それが自分の使命なのではと語るあかねちゃんの真摯な表情に幸は何も言えなくなってしまうのだった。

「格差社会、貧富の差が開いて行くこの時代を変えて、誰もが慎ましやかに、そして幸せな日常を送ることが出来るようにしたい。確かにそうなんだけど」

「幸が心配なのはわかるけどね、今はあかねちゃんの思うようにさせてあげなさい。ただ、そうだな。あかねちゃんの武術の進歩は」

「かなりのものになったと思う」

「読心能力は」

「充分だと思う」

「護り髪は」

「しっかり・・・」

男は幸の頭を優しく撫でた。

「あかねちゃんは幸の大切な妹だ。それはかわらないよ、必要な時は助けてあげなさい」

「うん、そうする」

幸は静かにそう答えた。

「ね、お父さん」

「どうしました」



「お父さんはずっとずっと、幸と一緒にいてよ。絶対だよ」

幸は微かに震えていた。

男は幸の頭を軽くぽんぽんと叩く。

「お風呂とお手洗い以外は一緒にいるかな」

男が小さく笑う。

幸は急に起き上がると男にしがみついた。

「幸がお父さんを護るよ、どんな奴からもお父さんを護るからね」

「どうしました、ゆっくり話してごらん」

男は軽く幸の背中をなだめるように叩き、幸の言葉を待つ。

「お父さんがお父さんが死んじゃう」

呻くように幸は言葉を呟く。

「それは大変だな」

男は小さく笑った。

「お父さん、幸、夢をみたの。母さんちへお喋りに行って、帰ってきたら、部屋中、血で真っ赤で、お父さんが部屋の真ん中で、真ん中で・・・」

幸が苦しそうに咳き込む。男は幸の背中を柔らかく撫でる。少し幸が落ち着いたのを見て、男は話した。

「夢のようになるんじゃないか、予知夢じゃないかと幸は心配しているわけだ」

幸がそっとうなずいた。

「心配屋さんだ、幸は」

男はそっと笑みを浮かべる。

「父さん、とっても強いよ、幸のためならとっても強くなる。でも、上には上がいるからな、うわっ、ピンチかもって思ったら、幸に助けてって叫ぶことにするよ」

男はそっと笑みを浮かべる。

「それに、ここは何重もの結界で固めてある、だから、ここに入ることができるのは、あかねちゃんと恵子さん、瞳さんと佳奈さんだけかな。それに幸と父さんだけだ。怖い奴らは入れないよ」

男はそっと笑みを浮かべ、幸の頭を撫でる。

心配で一杯になっている、男は幸からこんなにも大切に思われていることを素直に嬉しいと思う。何度、ありがとうと言っても言い足りないくらいだと思う。いや、自分自身がそれほどに、思ってもらえる存在なのかとすら思ってしまうのだ。

ただ、男は幸がどうしてそんな夢を見たのだろうと思う。

声を押し殺して泣きじゃくる幸の姿、俺に気の利いた言葉の一つもあればと、そっと左手で幸の頭を撫でる。

「手があったか・・・」

一瞬、男は神経を研ぎ済ませた。違和感を探す、後方、なるほど・・・

「幸、顔をあげなさい」

男が呟くように言う。

泣き腫らした幸がそっと顔をあげた。

「人の心を読むというのは、自分と相手の心を繋げることだ。だから、人の心が見えてくる。そして、もう一つ、心を繋げば、その相手の心に感情を植え付けることができる」

「うん」

「試してみせようか、相手の心に不安や焦りをいっぱい植え付けてみよう」

男がにっと笑った。

「うおおおっ」

家の中から、雄叫びが轟いた。

「幸、杖、右手」

「はいっ」

幸が空から取り出した杖の中ほどを男が左手に持つ、その下端を幸が右手で持った。

男の頭上に振り落とされた刃、杖で受けた一瞬、微かに幸が杖を手元に引く、刃筋が流れ、相手の姿勢が崩れる、男が杖の先端を大きな円を一部取り切ったように落とすと、刀を持ったまま相手が庭に投げ落とされた。

「なるほど、自分の右手を切り落として、元の私の腕を繋いだということか。肩のところに丸い輪っかが付いているね、それが血液型の違いなどを吸収しているようだ、神崎さんの仕業だな」

男は溜息を付くと、幸に杖を返した。

「君は確か一年前の人だったね、私が呪いを施して、一年、まっとうに働いたらやって来い、呪いを解いてやるよといった」

黒服はゆっくりと立ち上がると、男に刃を向けた。

「人の数倍は体力を持つ君だ、引っ越し屋さんなんていいんじゃないかって言った記憶があるのだけどね、あんまり、そんな風には見えないな」

「俺の生きる道にそんな選択肢はない、それに、何よりもお前を殺さなければ俺のプライドはずたずたに引きちぎれたままだ」

「で、君はその右腕を鍵にしてこの結界の中に入り込んでいたわけだ、隙あらばとね。どうだい、その腕は、良い感じかい」

男は気楽に笑う。むっとしたように黒服は男を睨んだがふっと笑みを浮かべた。

「この一年、神崎のデータ収集に付き合っ、かなりの魔を斬ってきた、俺は確実に強くなった、あんたの腕は最高だ」

「お褒めいただきありがとうございます」

幸が我慢ならないと杖を黒服に向けた。

「お父さん、こいつは幸にまかせて」

「いや、これは父さんの責任だ、幸はここで見ていなさい」

男は縁台を降り、つっかけを履き前に出る。黒服との距離が縮まった。

「私の呪いは既に解除されているようだね、神崎はしないだろう、まともに私を敵に回すことになるからな。なら、誰だ」

男が黒服の目を微かに睨む。

「ああ、あの破戒坊主か、あいつは後先を考えないからな」

男は小さく呟くと口元に笑みを浮かべた。

男は一步踏み出す、気圧されて黒服が退いた。

「君は後悔していないかい、だってさ、ここに来なければ、好きにできたわけだ、呪いも解除されているんだからさ」

男は笑みを浮かべたまま、ゆるやかに黒服に歩み寄る。

「どうしました、後ろに下がるだけでは君の立場は余計に悪くなるよ」

黒服は震えていた、

「あんたはどこまで強いんだ」

男は答えず、左手を黒服に向け、人差し指を上から下へと向ける。瞬間、黒服の右腕が引きちぎれた。燃える、右腕が灼熱の炎を吹き出し、燃え尽きた。

「その腕の輪が君の流血を抑えている。殺しはしないさ、それほど、私は親切じゃない」

男がそう言い終えた瞬間、黒服が消えた。

「結界に排除されたか。元の世界で彼なりに生きて行けばいいさ」

男が振り返ると、幸が茫然とした面持ちで男を見つめていた。

「ん、どうした」

「お父さん、ごめんなさい。幸がお父さんの腕を斬らなければ、お父さん、自分の腕を燃やさなくても良かったのに。幸は、幸はどんどん、お父さんを不幸にってしまうよお」

男はそっと笑みを浮かべると、幸を左手でぎゅっと抱き締めた。

「幸、父さんを両手で抱き締めてくれないか」

幸が力一杯男を抱き締める。

「父さん、抱き締められるってことが、こんなにも幸せで暖かいことを幸に教えてもらって、とっても幸せになった」

「そして、幸」

「うん」

「幸は、父さんのこと、大切に思ってくれる、それがとても嬉しい。父さんはとっても、とってもね、幸せになった。今が、父さん、生まれて来てから、一番幸せなんだ。幸、ありがとう」

男は柔らかに笑みを浮かべる、

「父さんは幸を幸せにできているかな」

「幸も幸せです」

男は手を離すと、幸の横に座った。

男が少年のような幼い笑みを浮かべた。

「これからもずっとよろしく」

幸は男の左手を、両手でぎゅっと握り締め、泣き濡れたまま、男に微笑んだ。

男は長い間一人で生きて来たが、もう一人では生きて行けないなと思う。それは、なんて幸いなことだろうと強く思った。

「おはようございます」

玄関口から坂村恵子の声が響いた。

「幸、鍵をあけて来なさいな」

「はい」

幸は縁側から家に入ると、戸を開け恵子を招き入れた。

以前より血色も良く、朗らかになった恵子が男のところにやって来た。

「おはようございます」

「恵子さん、おはよう。ん、また、恵子さん、体格良くなってないかい」

「ひどいなあ、私も年頃の女の子ですよ」

恵子が嬉しそうに笑う、

「そうだよ、お父さん、恵子さんに失礼だよ。ね、体重計出してくるから、変わってないの証明しよう」

「あはは・・・、それはちょっと・・・。ごめんなさい」

恵子は袋から瓶詰を取り出すと、幸に手渡した。

「大根で作った千枚漬けです、漬け汁にちょっと工夫あります」

幸は受け取ると、蓋を取り、少し匂いを嗅ぐ。

「美味しそうだよ、お昼ごはんに食べてみよう」

「それも物産展の商品か」

男が尋ねた。庭の畑では幸が中心になって、野菜をつくっていたが、食べきれない分を佳奈を通じて、商店街の八百屋に卸していた。その縁で、前回、近所で開催された物産展に出展し、評判は上々、そして、二回目の参加となったのだった。

「加工した方が利益がいいのです。今度は、お父さんも来て」

「売り子しなくてもいいなら、見に行くよ」

幸がくすぐったそうに笑う。

「先に言われちゃった。それじゃ、お父さんは幸の頭を撫でる係、幸はお父さんに頭を撫でられるととても元気になるのです」

「あんまり撫でて、幸の頭が禿げたら大変だ」

「禿げるくらい撫でてほしいかも」

幸はくすぐったそうに笑みを浮かべると、テーブルに恵子が持って来た瓶詰を置いた。

「そうだ、お父さん、今晚は鍋にしよう。ね、恵子さん、今晚用事ある」

「私は大丈夫ですけど」

「お父さん、いいかな」

「いいよ」

幸はにっと笑うと恵子に言う。

「鍋、一緒に食べよう。あ、恵子さんのお母さんや物産展覗きに来てくれた妹の、礼子ちゃんはどうかな」

「妹は幸さんの大ファンですから、何があっても来ますよ」

幸がげげんな顔をした。

「幸は礼子ちゃんと挨拶しかしてないよ」

「妹は、幸さんが、脅しに来たやくざを殴り倒して、足で踏んでいるのを」

「ああ、その話はもういいです。恵子さん、畑にどうぞ」

慌てて、幸は恵子を畑へと送り出した。

戻って来た幸がぼつの悪そうな顔をして男を見る。

「父さん、初耳でした」

「ごめんなさい、だって」

「幸に怪我がなければいいよ」

仕方なさそうに男が笑う。

幸はほっと吐息を漏らすと男の後ろ、背中に被さるように体を預け、男の肩から顔を出す。

「幸はえらそうにしている奴や、むちゃを言う奴が嫌いなんだもの」

「父さん、幸にえらそうにしないよう気をつけなきゃ」

「お父さんは幸にえらそうにしてもいい人なのです」

「でも、倒れたところを踏まれるのはなあ」

「お父さんにはそんなことしないよお。もお・・・」

幸はそっと男に頬を添えると囁いた。

「貴方は私との日々を楽しんでくださってますか」

「楽しんでいますが、本当にありがとうございます。君はどうですか」

「寝てしまうのが惜しいくらい、朝になるのが待ち遠しいくらいに楽しんでいますが、娘にしてくださってありがとうございます」

「君に言いたい」

「はい」

「父親にしてくれてありがとうございます」

そっと幸は、そのまま体を預け目を閉じる。

そして呟いた。

「幸せです」

ふっと幸が目を開ける。

「お父さん、次は喫茶店だ。ここで開店するよ」

「え、ああ、忘れてた。ハーブティーの専門店とか話していたな」

「お父さんがマスターなんだからね」

「父さん、恥ずかしがり屋だからなあ」

「ね、マスター、なんだか、あたし、疲れちゃった」

「お嬢さん、それなら、カモミールを中心にした当店オリジナルのハーブティーがお勧めですよ、リラックス効果抜群です、ゆっくりしてくださいな」

幸がにひひと笑う。

「お父さん、合格です」

「本当にこんな歯の浮くようなこと言うのか」

「そおだよお。ね、お父さんはどんな服が似合うかなあ。少し固めの方がいいかな」

「まっ、それは考えておいてくれ。そうだ、父さん、午前中に仕事を済ましたら、ちょっと出掛けてくるよ」

「幸もついて行っていい」

「どうかなあ、幸の教育に悪そうなやつだからな」

「なら、行かなきゃ。だって、幸はお父さんのボディガードだからね」

「うーん、まあ、これもまた勉強かな。それじゃ、父さん、ピンチになったら、助けてって叫ぶことにするよ」

幸は満面に笑みを浮かべると後ろから男をぎゅっと抱き締めた。

「お父さんは幸にとっても甘いです、あまあまですよ」

そして、唇で男の耳をくわえる。

「はぐはぐ」

「やめなさい、父さんは汚いから」

幸は口を離すと囁いた。

「汚くありません、それに、なんてお父さんは幸に甘いんだろ。そうだ、お父さんはお砂糖で出来ているのです、珈琲に入れたらきっと溶けてしまいます。もう、食べちゃうぞ」

「ええっと、幸さん、お取り込み中、申し訳ありませんが・・・」

困り切った顔をして恵子が二人の前に立っていた。

「ごめん、恵子さん、夢中になってた・・・」

男は立ち上がると幸の頭を撫でる。

「父さん、仕事に戻るよ」

「うん、お父さん。ね、お出掛け、一人で行っちゃ嫌だよ」

男は笑みを浮かべ、頷くと部屋へ戻った。

まだ、ぼおっとしている幸の目の前で坂村が手を振る。

「まだ、余韻に浸ってますか」

幸は笑みを浮かべると、頭を振った。

「ごめん、恵子さん。えっとなんだっけ、まだ、頭が働かない」

「出荷の時間です」

「ああ、そうだった」

幸は縁台から降りると靴を履き、畑を歩く。長靴は絶対に拒否という姿勢だ。

鶏が雑草を食んでいる。

幸は秋茄子やホウレン草を見て回り、出荷に頃合いのものを竹で編んだ籠に入れて行く。

「一度聴いてみたいと思っていたんですけど」

坂村が幸に尋ねた。

「ん・・・」

「無造作に採っているようにしか見えないのに、ちょうど良い状態の野菜を選んでいますよね、どうやっているんですか」

「声を聴いているだけだよ」

幸が手を止めずに言う。

「幸ちゃん、幸ちゃん。ボク、食べ頃だよ、採って、採ってってね。野菜の音が聞こえてくるんだ」

「で、本当は」

坂村が促した。

「少なくともこの一週間の状態を全部暗記している、何処にどれくらいのがあるかってね。それぞれ、時間軸を元に、変化を微分化して、その加速度を求める、それが主な判断材料かな。もちろんパラメーターは複数あるけどね。な、可愛くないだろう」

「可愛くありません」

「ボク食べ頃だよ、幸ちゃん。これの方が受けが良いよね」

幸は笑いながらも手を休めずに収穫して行く。

「恵子さんは勉強熱心だな。農家に嫁げ、引く手あまただぜ」

「それは、親戚の叔父さんの発想、散々言われてますよ」

幸は声を出して笑うと、籠を坂村に渡し、新しい籠に収穫を始めた。

「あれから一年、スーパーでのバイト以外はすっかり百姓だ。恵子さんはこれからどうしていきたいんだ」

手を休める間もなく、幸が坂村に尋ねた。

「そんな難しいこと、聞かないでくださいよ。ただ、なんだか、社会から一抜けたって言いたい気分です」

「以前、あかねちゃんがお父さんに言ってたんだ、大学を卒業したらここで暮らしたいってね。ここは、ある意味、シェルターみたいなものなのかもしれない」

「かも知れませんがね、ここに来るとほっとします」

ふと、幸は手を止めた。

「あかねちゃん、どうなるんだろう。もろいところがあるからなあ」

幸は溜息をつく、満杯になった籠を置いた。

「次は恵子さんの番」

幸は新しい籠を坂村に渡すと、満杯になった籠二つを縁台にまで運ぶ。

「恵子さん、幸はお昼の用意をしてくれます」

坂村に声をかける。

「お願いしまーす」

坂村が陽気に答えた。幸が家に戻って行くのを見終えると、収穫に戻る。坂村は本当に今が幸せだと思う。

坂村は手を止めると、秋の遠い空に向かって言う。

「幸せだあ」

あまり大きな声では言わない、叫んでみても良いのだが、幸に聞かれて笑われでもしたらと思うと、声が小さくなってしまふ。

「おおい、恵子ちゃん」

振り返ると、縁側から、佳奈がやってきた。

「ごめんなさい、まだ、収穫が」

「いいよ、あたしも早く来たからさ、手伝うよ」

佳奈は恵子のところにやって来ると、言った。

「この辺のを採っていけばいいのかい」

「はい、あまり小さいの以外で」

佳奈も見よう見まねで採っては籠に入れる。

「恵子ちゃんも明るくなったねえ」

坂村が初めて佳奈にあったのは、ここへ来てすぐのこと。随分と幸に脅かされていたのだった。

「そりゃ、幸さんからとっても怖い人だって聞いてましたもん」

「こんな優しいお姉さんを恐いだなんて、冗談にも程があるね」

佳奈が笑う。

「でも、読心能力、心を読まれてしまうって云うのにはびっくりしました」

「そうだね、意識を向ければね、目の前で喋っているみたいにさ、わかるよ。それって怖いかな」

「いまは全然。って言うか、言わなくてもわかってもらえるし、楽かもしれない。よくよく考えてみれば、私は考えていることと喋っていること同じですから」

「誰もがそんなふうに思ってくれるなら、あたしも嬉しいんだけどね。以前は悩んだ、自分は何者なんだって悩んだ」

ふと、坂村は笑みを浮かべると、佳奈を見つめた。

「佳奈姉さん、悩んでますね、それに少し怒っている」

「え、どうして」

「私は心を読む能力は無いけど、推理は出来ます。会話の内容、声質、誰か悩みを聞いてくれないかなあって思っている」

「驚いた、その通りだ」

佳奈は素直に驚くと、恥ずかしそうに笑った。

「佳奈姉さん、私には解決出来る力はないけれど、聴くだけでもいいなら話してください」



「恵子さん、齡幾つだい」

「ええっと、もうすぐ二十五かも・・・」

「うちのガキと三歳違いか、しっかりしているなあ」

佳奈は溜息をつく、手を止める。

座って空を見上げた。

「どういう仕組みになってんだろうね、ここは」

今日の収穫は終わったと、坂村も手を止める。

「この畑を越えたらひたすら梅林です、でも、その向こうに川があって魚釣りが出来るとか、幸さん、言っていましたよ」

「おっかないよ、迷子になったら大変だ」

佳奈は笑う。落ち着いた笑みだ。

「あのさ」

「はい」

「親子喧嘩と夫婦喧嘩をして、ついでに亭主の親とも喧嘩してきた」

「四面楚歌、大変ですね」

坂村が笑う、つられてか、佳奈も笑った。

「ああ、大変だ」

「どうぞ、座ってください」

幸がテーブルに料理を並べる。

幸が男の向かいに、佳奈と坂村がテーブルにつく。

焼き飯の、ご飯よりも野菜が多い。

「本で読んだんだ、ご飯よりも野菜が多い、野菜炒めご飯」

「ちょっと中華風かな」

佳奈が言う。

坂村が少し食べて言った。

「和風ですね、胡麻油が入っているんですよ」

「美味しいかな」

少し不安げに幸が佳奈に尋ねた。

「とっても美味しいよ」

幸が男の向かいに、ほっとしたように笑みを浮かべる。

「と、云うことで、佳奈姉さん、恵子さん」

幸がにと笑った。

「幸はこれからお父さんとデートです。お昼からの出荷にはお手伝い出来ません。ごめんなさい」

幸が頭を深々と下げた。

「わかっているよ」

佳奈が笑った。

「もう、さっきから幸ちゃん、嬉しそうににやけているんだからさ。顔見ただけで見当つくさ」

「ほんと、佳奈さんの言う通り、機嫌いいし、そわそわしているし」

「申し訳ないね、暗くなるころには帰ってくるから。そうだ、佳奈さん、夜は無理かい」

男が言った。

「恵子さん達と鍋をしようって思うんだけどね」

「主婦ですけど、少しなら大丈夫ですよ」

「幸が美味しい鍋作るよ、恵子さんや、恵子さんの妹やお母さんも来るから賑やかだよ。楽しみだなあ。あ、幸の母さんは来れないかな」

「礼子さん次第だね。帰って来るの、遅いからなあ」

幸が男を見る、男が頷いた。

「それじゃ、学校まで、幸が迎えに行くよ。佳奈姉さん、母さんにそう伝えてください」

佳奈はうなづくと笑った。

「ああ、わかった。デート、楽しんでおいで」

「うん」

幸が答えた。

後を二人に託し、男と幸が出掛ける。

「佳奈さん。幸さん、幸せそうでしたね」

部屋に戻ると坂村が言った。

「だねえ、あれほど父親が好きな娘もいないだろうね」

「父親って言うより、まるで恋人ですよ。あたしは自分の父親にとって、もう、随分会っていませんけど、あんなには甘えられないな」

「ご両親、離婚したとか言ってたね」

「子供の頃です、中学生でした。先生は別居中なんですか」

「ん・・・」

佳奈が怪訝な顔をしたが吹き出した。

「ああ、違うよ洋品店の叔母さんを幸ちゃんが母さんって呼んでるだけさ」

「え、そうだったんですか。確かに顔が似てないって思ってたけど」

坂村が苦笑いをした。

「あの叔母さんから、あんな絶世の美女が生まれるわけないって、なんて言ったら叔母さんに叱られるな」

佳奈は笑うと縁側に座った。

佳奈が縁側に座りながら、日差しを浴び、ほっと吐息を漏らす。

「もうすぐ三年になるのかなあ、幸ちゃんに初めて会ってさ、話した時のことを思い出すよ」

「幸さんって、元気な女の子だったんでしょうね」

「いや・・・」

佳奈は硝子戸の端に背を預け、呟いた。

「臆病な女の子でさ、先生以外の人間を恐れていた」

「それって想像つかないですよ」

「だろうね、先生は、どうしてだか、自分がいつ殺されても仕方のない人間だと考えているんだ、だから、幸ちゃんが一人でも生きられるようにと、先生は必死にしっかりした女性に育てた、しっかり育て過ぎたかもしれないけどね」

佳奈は気持ちを入れ替えるように笑った。

坂村が佳奈の横に座った。

「先生、強く育て過ぎましたねえ」

坂村も笑う。

「余程、先生は幸ちゃんが可愛くて、心配なんだろうね」

「でも、幸さんは真っすぐですよ。格好いいです。あたしも好きですよ」

「わかるよ、あたしも幸ちゃんのファンだからさ」

坂村は初めて会った時のサングラスを降ろし、にっと笑う幸の笑顔を思い出した。迎え入れてもらったように思えた、本当に嬉しかった。

「さて、佳奈さん、仕事再開、いいですか」

「よし、頑張ろう」

佳奈は立ちがると、思いっきり背伸びをした。

男とサングラスを掛けた幸は、二人、路線バスに揺られていた。電車でおよそ三十分、その後、駅からの路線バスに乗る。

乗客は十人程度、幸は二人掛けの座席、通路側、その横に男が座っていた。

「幸、窓側に座らないのか、景色がそっちからじゃ見づらいだろう」

「だめだよ、幸はお父さんの右腕なんだからさ。悪い奴が右から襲って来た時には、幸がばしっとやっつけなきゃ」

男がくすぐったそうに笑った。

「父さんが悪い奴で正義の味方が退治に来たのならどうする」

「もちろん、ばしっとやっつける」

「なるほど、父さん、責任重大だ。悪いことしないようにしなきゃな」

男は寂しそうに笑みを浮かべると座席の背もたれに体を預けた。

「父さん、以前はとっても悪人でした。これから会おうというのはね、その頃の父さんを知っている悪人だ。友達じゃないけどね」

「どうして、そんな奴に会うの」

「あの忍者に施した呪いを解いたのがそいつだ。呪いを勝手に解くというのは敵対関係を選んだということだ、つまり、好んで父さんと敵対関係を選んだ奴の真意を知りたく、思ったんだ」

「知ってどうする」

「これからの生活にとくに問題がなければそそくさと帰る。問題があれば解消して帰る」

「幸的には、すかっと解消して帰りたい」

「困った娘です」

男がそっと笑う。

二人は終点のバス停で降りる、ほとんどの乗客も、途中のバス停では降りずに、終点のバス停で降りたが、燦々午後に姿を消して行った。

山の麓にある静かな山村だった、ふと幸は振り返りバス停を見る。

金魏護寺とある。

「そのお寺へ行く、もともと真言宗のお寺で現世利益の加持祈祷を主としている、もっとも今はどんなガイドブックにも載ってない」

幸は山の中腹を見上げた。

「お父さん、結界がある、こちらに関心を持つなという嫌意の結界だ」

「ああ、誰もがなんとなく無視してしまいたくなる気分になる。あの寺は暗殺者養成所で、政治家や秘書が自殺した場合のほとんどはあの寺の仕業だ、そんな場所だから招いた奴以外は関心を持つなということなんだろう」

「なんだか、お父さん。大暴れできそうだね」

「それは勘弁してください」

幸はそっと笑みを浮かべる男の上着、右袖を両手で掴む。微かに唇を噛んだ。

男は左手で優しく幸の頭をなでる、

「お父さん、軽々しいことを言ってごめんなさい」

「幸は父さんにとって、とっても良い子だ、それはかわらないよ、どんな時もね」

そっと男は左腕で幸を抱き締めた。

「これからも幸が幸せでありますように」

男が小さく呟いた。

幸と男は簡単に結界を擦り抜け、境内へと入った。微かに霧が辺りに漂うが、視界には問題ない。

たっとうがいくつも並ぶ広大な寺院だ。

「この霧、核が金属の粉だよ」

「侵入者探査システムだ、密度変化による電位差を測定している」

「お父さん、部分的に気圧を操作して、姿を消そうか」

「いや、それほど警戒する必要はないよ、ただ、幸はか弱い女の子、いいね」

幸がそっと頷いた。

「これは珍しい、名無し様ではありませんか」

「館長直々とは恐れ多い、お久しぶりです」

霧の中から独りの僧が現れ、男に声を掛けた。この寺の護人、僧兵の管理者でもある。

「ここ数年来、一度、鬼紙老の元に現れた他は、全く、噂も何も伝わって来ず、いったい、どうされたのかと思っておりました」

「事務仕事とたまに畑作業の手伝いという日々を続けております」

男が静かに答えた。

「うんうん、人は静かに生きるのが一番、良い生活を送っておられますな」

「ところで愚円さんはどちらに」

「あれは六角堂にあります。あの者ももう少し落ち着いてくれればと思うのですが」

「閉じ込めてあると」

僧は頷いた。

「食事を差し入れる以外は。しかし、名無し様にせっかくお越しいただいたのですから、扉は開けておきましょう」

男は一礼し、僧が指し示す方向へと歩きだそうと、

「おや、このお嬢様は」

「私の娘です」

不安げに幸は男の右袖をしっかりと握ったまま、僧を見上げた。

「初めまして」

男は微かに笑みを浮かべた。

「長く別れて暮らしていたのですが、数年前に引き取りまして、今は一緒に暮らしております」

「なるほど、それが理由ですな。良いことです」

「それでは」

男は僧に会釈をすると、幸を連れ歩きだした。

しばらく歩き、男と幸は夢殿を模した六角堂の前にやって来た。話どおり、扉が一つ、開け放たれている。

「お父さん、あの建物だよね」

幸が囁いた。

「頑丈な建物だな」

「大丈夫、幸がお父さんを護ります」

「うーん」

男が微かに笑みを浮かべる。

「父親としては娘に対して、かっこ良くいたいな」

「娘と致しましては、案外やれるじゃないかとお父さんに認めてほしい」

ふと、男が目頭を押さえた。

「どうしたの」

「ちょっと感動、齢を取るとだめだな、涙腺が弱くなってしまう」

「幸はお父さんのそういう少年っぽいところ、好きだな」

「幸・・・」

「ん・・・」

「これ以上、父さんを泣かさないでくれ」

二人が六角堂に入った途端、扉が勢いよく閉ざされた。二人は振り返ることもせず、中央を見る。僧が一人、座禅をした姿のまま、空中に浮かんでいた。ぼろぼろの衣に、生まれてから一度も風呂に入ったことがないのではないかと思えるような垢だらけの姿だ。

「愚円、最近、風呂に入ったのはいつだ」

男が呆れたように声をかけた。

「久方ぶりの親友の言葉がそれだとは寂しいものだな」

「大丈夫だ、俺はあんたと親友だった記憶はない」

僧は口元になやりと笑みを浮かべると足を伸ばし、床へと着地した。

「ところで無よ、なにをしに来た」

「俺の呪を解いた理由を問いに来た」

僧はふと思い出そうと空を睨んだが思い当たったらしく男を見る。

「魔人に呪いをかけられた哀れな男を救うたことがあった。これもまた修行」

「で、本当の理由はなんだ」

男が重ねて言う。僧は仕方がないなと笑うと、そのまま、床にあぐらをかいた。

「館長からのお達しだ、こいつの呪を解けば、世の縁を切り、姿をくらました無をおびき出し、捕獲できるだろう、あいつは自信家だから、必ずやって来るってな。で、のこのこやって来たわけだ、それも女連れとは驚いた」

大声で愚円が笑った。

男は愚円を睨んだが、気を取り直し言った。

「それだけ聞けば充分だ、帰ることにするよ」

「それは無理な話だ。この六角堂からはさすがのお前さんでも力不足だ」

「ああ、外からは入ることができても、中からは、簡単には出られない。面白い仕組みだな」

「ただひとつ、俺とお前さんが力を合わせれば出られないこともない」

愚円が男に語りかけた。

「どういうことだ」

「山を降り、世俗にまみれて楽しく暮らしたいってことだよ」

「残念だ、協力はできないよ、風呂に入って身綺麗にしていたら、考えなくもなかったがな」

「ゆっくり考えて結論を出してくれ、時間はたっぷりある。それに女もいる、楽しいぜ」

「奴らは何故、俺を捕獲する必要があるんだ」

「政権が変わったからさ。この寺は前政権と深い繋がりだ。だから、現政権が煙たがっている。そのうち、現政権側のやつらと戦うことになるだろう。手元にあんたがいれば利用価値は高い」

「それだけ教えてくれれば充分だ、帰るよ。俺は大事な娘を好色な目で見ると許せないんでな」

男は幸に笑みを浮かべると扉へ向かう、幸も男の後を追った。

男は扉を軽く叩く、外からの明かりに僧が二人立っている、その影が見える。

「用事は終わりました。扉を開けていただけませんか」

僧の一人が答えた。

「食事はこちらでご用意致しますので、御ゆるりと滞在くださいませ」

「今晚は約束があり、どうしても帰りたいのです」

「館長からの許しがながいかぎり、ここを開けるわけには参りません」

いきなり男が扉を蹴り、その男の足が扉の中に吸い込まれるように消えた。

「反対側を見な」

愚円が後ろから男に声をかける。そのままの姿勢で、男が後ろを見ると、六角、反対の扉から男の足が生えたように突き出していた。

「ほんの数ミリで空間を変換しているのか、たいした法力だな」

「俺を閉じ込めるような奴だからな」

愚円が近づこうと立ち上がったが、男がそれを制した。ゆっくりと足を戻す。

「それ以上近づくな、俺は娘の近くに好色な男がいるのを好まないんだ」

「相当な親ばかだな」

一瞬、幸が愚円を睨みつけた。

「くそぼうず、だまってろ」

鋭く怒鳴りつけた幸の言葉に愚円が硬直した。

「うーん、ちょっとびっくり」

男がくすぐったそうに笑った。

「ごめんなさい、だって、お父さんを馬鹿にされるのって許せないんだもの」

「だな、ありがと、庇ってくれて」

幸が恥ずかしそうに笑みを浮かべる、

「父さんではここを破るのは無理だ、助けてくれるか」

幸がにっと笑う。

「お父さんの役に立つのは嬉しい」

そして、空中から刀を取り出すと、静かに構えた。刀を右手、後ろへと流れるように持つ。いや、落ちないように柔らかく支えているだけだ。

瞬間、幸が間合いを詰め、すくい上げるように横一文字に壁を切り裂く、男の目が捉えたのはそこまでだ、気が付けば、四方、人が通り抜けられる程の四角い穴が穿たれていた。

幸は刀を消すと、男から譲り受けた杖を取り出した。杖を左に持ち、右手で男の左手を握る。促すようにして外へ出た。

外では茫然と館長を先頭に僧兵の姿をした僧達数十人が二人を見つめていた。

幸は男の手をしっかりと握ったまま、館長の前へ出た。

「ここではあんたが一番偉いだろう」

返事ができず、館長はただ頷いた。

「お父さんとあたしは静かに地味に暮らしている、それで充分幸せだからだ。政争も、切ったは

ったも嫌いだ」

「あ、ああ」

「今後、お父さんとあたしの生活に一切かかわらないと約束しろ、そうすればこのまま帰ってやる。もしも、約束できないというなら、この山ひとつ、粉みじんにして平野にしてやる、すっきりするぜ。さあ、どうする」

館長は戸惑ったように男の顔を見た。

「いや、娘が心配で、悪い男に泣かされないよう強く育てたのですが、思っていたより随分と強く育ってしまいました」

男も困ったように笑った。

「そのように笑われても……。いや、お嬢さん、良く分かりました。一切、干渉致しません」

「ありがとう、その言葉、信じるよ」

幸は振り返ると男ににっと笑みを浮かべた。

「お父さん、帰りはお鍋の材料、買って帰ろう」

「そうだな」

男が笑った。

「なんだ、なんだ、お前ら、なににやけてんだ」

やっとのことで、愚円が六角堂から出てきた。

「愚円、出てきたのか。六角堂に戻っていなさい。出るのを許した覚えはないぞ」

「今出なきゃ、いつ、出られるかわからないからな」

「まあ、いい。なんだか、争うのがつまらなくなってしまった」

ふと、男が空の一角を睨んだ

「新手ですね」

なんらかの情報が入ったのだろう、ヘリコプターの爆音が近づいてきた。

「お父さん、あれは」

「ここの敵対組織だな。監視されてたのかな」

「人工衛星だ」

幸が天に指先を向けた。男と館長も幸の示す方向を睨む。

「さすがに見えないな、父さんには」

「破壊しておこうか。上から覗かれてるのは、なんかうっとおしいよ」

「……そうだな。でも、かなり高い」

「簡単だよ」

幸が指先を鳴らす、瞬間、小さな光が虚空に輝いた。

「粉微塵」

幸がにっと笑った。

館長は驚きのあまり、一步退いたが、平静を装い、幸に頭を下げる。

「ありがとうございます」

「どういたしまして」



その間にもヘリコプターは近づき、プロペラの生み出す突風が樹木を揺らす。

「お父さん、攻撃してもいいかな」

「殺さない程度にね」

「わかった、遊んでくるよ」

幸の姿が消えた。

「才能を十二分に恵まれた人間が、生命をかけた修行を一生続けても、あれだけの能力は身につきません、いったいどういうことなのでしょう」

館長が声を抑えて男に問う。

男は自分自身に語りかけるように呟いた。

「私はあのとき、あの子はもともと人であったと思っていたのですが、間違っていたのかもしれない、もともと、あの子は神だったのかもしれない」

「あのとき……」

男は寂しそうに笑みを浮かべると口をつぐんだ。

緑色の飛行船のようなヘリコプターが着地する。台風並の風が六角堂以外のたっちゅうを揺れざわめかせた。

幸はヘリコプターの手前に陣取り、仁王立ちに立つ、腕を組む、にいいっと唇を歪め笑みを浮かべた、長い髪が逆巻く。

僧兵達を後方に従え、自信に満ちたその姿はまさしく闘神。

ハッチが開き、完全武装を施した兵士だろう、十人駆け降り、幸と向かい合う。背中にはタンク、肩には大きな、火炎放射器だ。寺すべてを焼き払う予定でやってきたのだ。

ヘリコプターの回転翼の速度が次第に落ちる、それに合わせ風が収まり始めた。

「似たようなのが雁首揃えやがって、楽しいなあ。なあ、一等先に殺されたい奴、手え挙げてくれ」

十人が一斉に炎をはらんだ銃口を幸に向けた。

「なんだよお、可愛い女の子を焼き肉にする気かよ。しょうがねえな、そんな悪い子はお仕置きだ」

ふと、真ん中の頭ひとつ抜きん出た兵士が片手で他を制した。そして、火炎放射器とタンクを降ろすとヘルメットを外す。

まさしく人間よりひ熊に近いのではないかと言いたくなる男だった。

男は、にたあっと唇を歪めると、腰の後ろ、タガーナイフを抜き、幸に剣先に向けた。

「いいやつだなあ、あんた」

幸は嗤うと、右足を微かに前へと出す。

「女を切り刻むのが楽しいってことは、女の敵だ。遊びがいがあるよ」

幸は左のつま先を真左に向けた。

「来な」

幸が低く呟く、一瞬でひ熊男がナイフを片手に飛び込んで来た。右手に刃が輝く。幸は微かに体を真左に揺らす、刃が幸の体をすれ違い、その瞬間、幸の右手が男の顎に在った。

「回れや」

幸が呟く。

男がのけぞるように後ろへ回転、そのまま、幸は男の頭を地面に叩きつけた。

「頑丈だなあ、生きていないか」

幸は地面に頭を突き立てままの男の右手をぐしゃっと踏み付ける。念のためにと、もう片方の手も踏み潰した。

一歩踏み出す、瞬間、幸の姿が沈んだ、回し蹴り、独楽のように回転し、男を僧兵のところまでけり飛ばした。

幸が僧兵達を睨みつける。

「お前ら、そいつを六角堂にほうり込んでおけ」

「はいっ、直ちに」

あたふたと僧兵達が男に駆け寄る。

「いったい、あやつらは誰の指示にしたがっているのか」

館長が溜息交じりに呟いた。

「まあ、少々荒っぽいところもありますが、親思いの良い娘ですよ」

「少々ですか」

館長が溜息をつく。

「もし、お嬢さんに弱点があるとすれば、貴方自身ですね」

「ん、なるほど、そうかもしれませんね」

一瞬、館長の右手が消えた、男の首を針で刺す、しかし、男の手には小石が、石の先で男は針を受けていた。

「筒になっている針ですね、中に毒が仕込まれている」

「良くご存じですな」

「この世界、長いですからね」

ふっと館長が手を戻した。

「ここの責任者といたしまして、現政権の手土産になるかと思ってしまいました。迷いに憑かれてしまいました、申し訳ありません、それでではあります、なんとか、この刀、納めていただけませんか」

館長の額寸前のところに、幸の刀がその切っ先を向け、浮かんでいた。

「この霊刀も娘に与えてしまいまして、私にはどうしようも。しかし、見事な使いこなし。私が針を浮けていなければ、館長の額が風通し良くなっているところでした。娘を人殺しにせず済んで良かった」

九つの炎が幸を捉えた。しかし、炎が届くよりも早く幸の姿が消えていた。次々と幸は杖で兵士たちの腕を折り、指を潰して行く。しかし、最後の兵士だけ、首筋を軽く打ちすえ、気絶させるに止めた。

「こいつら、手当して六角堂に閉じ込めておけ。あとは館長の指示に従え。いいな」

「はいっ」

僧兵達が勢いよく返事を返した。

幸は気絶させた兵士が体型から女であると判断していた。幸は兵士の手首を掴むと、引きずり男の元に戻った。

「お父さん、誰も殺していないよ」

「お疲れさま」

「えへへ、どういたしまして」

幸が照れたように笑う。

「お嬢さん、この刀、なんとかしていただけないでしょうか」

「ん」

幸は初めて気づいたように刀を突き付けられた館長の額を見つめた。

「なんだ、そのまま、押し込んで欲しいのか」

「と、とんでもない」

幸は笑みを浮かべると、その刀を消した。

「なあ、館長。お父さんとあたしはふたりっきりの家族だ、どっちか一人欠けても家族じゃなくなってしまうんだよ。あんたも下の町に女房と息子を持つ身だ。息子が殺されたら嫌だろ、そこんところ、考えてくれな」

一瞬、館長の顔が青ざめる。

「まだまだ、修行が足りないな」

ふっと幸が笑う、しかし、もう関心がなくなったと、引きずって来た兵士を、少々荒っぽく仰向けに寝かせた。

そして、ヘルメットを脱がす。女の顔が現れる。ふと、男はその女の顔を見つめた。

「何処かで見たな、その顔。ああ、あの時のか」

「ええっ、浮気はだめだよっ」

男はくすぐったそうに笑った。

「こんなおっさん、誰も相手してくれないよ。以前、鬼紙老宅からの帰りに拉致されてね、尋問して来たのが彼女だ」

「お父さん、拉致って、それ初めて聞いた」

「うん、父さんも初めて言ったかな」

「もお、お父さんったら。万が一のことがあったら」

「大丈夫だよ、這ってでも帰ってくるさ。大事な娘を心配させるわけにはいかないからね」

幸がふっと恥ずかしそうに俯いた。

「お父さんったら、もお」

「しかし、こんな荒事のできる身体能力は無かったはずだが」

男は女の顔を睨んだ。

「男、まさか・・・」

男は女をうつ伏せにした。

「首筋から、腰まで、切ってくれるか」

「は、はい」

幸は刀を取り出すと、素早く、撫でるように服を切り裂いた。

男が女の項から腰までを脱がす。少し、治りかけた傷が首筋から、腰まで続いていた。女の髪を上げ、後頭部をまさぐる。

「頭蓋骨を切断した跡があるな」

「これは・・・」

館長が呟いた。

「なにか思い当たることでも」

男が問いかけた。

「三十九番の字を持つ殺人鬼」

館長が答える。

「三十九が女の体を手に入れたと、ある組織に潜入している者から報告を得ました」

「なるほど」

男は呟くと、女の後頭部を見つめる。

「確かに頭の中は三十九だ、こんな形で再会するとは」

「医療技術と魔術の融合ですな」

館長も小さく呟いた。

「お父さん、元の女の人はどうなったんだろう」

「奴の記憶の中に少し残っている。実験用に保存されているらしい」

「助けに行こう」

「でも、これは三カ月前の奴の記憶だ。いまはどうなっているか、わからないよ」

「でもでも、お父さん。あたし、こういうの、本当に許せないんだ」

男は幸の真剣な眼差しを見て思った。すべての情報を遮断された脳、これは闇の牢獄に閉じ込められたのも同じだ。幸は自身の過去と重ねているのだろう。

男は空中から硝子の球を取り出した。そして、三十九の体の上に軽く浮かべる、硝子の球は大きくなり、一人一人分の大きさになると三十九を飲み込んでしまった。そして、軽く男が指を振ると、滑るように硝子球が六角堂へと飛んで行った。

「捕虜をどう利用するかについては、私も娘も関わりません、御ずいに」

男は館長に呟いた。そして、幸の横に立つ。幸は両手で男の左手をしっかりと握ると、少し微笑んだ。そして二人の姿が消える。

館長が一人呟いた。

「無の技は、嘘か真か、神を統べる技と聞いたことがある。ならば神が神を統べる技を得た時、その神は」

「絶対神、他の神は位落ち、あの娘が唯一の神になる」

いつの間にか、愚円が館長の横で呟いた。

「神も仏もあったもんじゃねえな」

愚円が嘯いた。

「愚円、お前、阻止できるか」

「たかだか、人間様の出来ることなんざ、しれているさ。金輪際、あの娘には近づきたくないな、それは、館長、あんたもだろう」

「ああ、無には、世界平和のためにも仲の良い父娘でいてもらおう」

「館長、あんたから世界平和なんて言葉がでるとはな」

「愚円、つまらぬことを言っていると、六角堂にほうり込むぞ」

「いくらいい女でも頭の中が、がたいのでかい三十九ではやる気になれねえよ。昔、奴が妙に流し目してきやがると、うっ、気持ち悪え」

館長の苦虫を噛み潰した顔に、愚円はこれ以上喋っても、機嫌を損ねるだけだと、僧兵達のもとに戻った。

直径一メートルほどの円柱型水槽にそれは在った。

「お父さん、あれだ」

モノクロームの床がにび色にねめつける。少し光量を落とした研究室、幾人もの研究員が、それぞれの研究に没頭している。

脊髄を中心に神経の一つ一つには金属片、伝達される電気信号を増幅させるのだろう、いくつもの電子機器と繋がっている。

男は何げない動作で、一人、手持ち無沙汰に見える研究員に声をかけた。

「ここではどんな研究をしているのかな」

研究員はなんの戸惑いもなく答えた。

「これからは宇宙への進出です。ここでは、脳の基本データの抽出を主にしています。このデータを元に人間と機械の融合を促し、いずれは、宇宙服を必要としない機械の体を持った人間の誕生です、その他、宇宙ステーションを建造するための機械になった人間が、製造作業に従事すれば、今の効率を遥かに超え、精度の高い作業が可能になるでしょう。これは素晴らしいことですよ」

「なるほど、夢物語が現実になるということか、でも、実際はまだ先の話、私などが生きている間には見ることは出来ないのでしょうかね」

「いいえ、五年先にはプロトタイプの完成がほぼ確実です」

「五年ですか・・・、それなら、まだ、生きていられそうだ。ところで、この脳は一体誰の」

「脳は健康なものでなければなりません、これは、このプロジェクトの意義に賛同した」

幸は研究員の解説を途中で、生理液に浮かぶ脳を見つめ、意識を探った。

意識は闇の中にいた。

無、貴方ならきっと助けてくれる、お願い、早く、早く

幸は闇の中に浮かぶ意識と同化し、言葉を繋いだ。

君の名前は

わからない、確かに覚えていたはずなんだけど、忘れちゃった

君は無を知っているの

とっても強い人、あの人なら私を助けることができるはずなんだ、ここから出してくれるんだ

貴方は無なの

私は無じゃないけれど、無に一番近い存在。安心していいよ、私には力がある、まずは君に光を

あげよう

闇に白い小さな光が生まれた。光りは徐々に大きくなり、闇を白く染めた。

少女が丸く俯せになって、うずくまっていた。

幸は少女に近づくと、腰を下ろし、そっと少女の髪に触れた。

「目を開けてごらん」

「やだ、暗いのはもうやだ」

「大丈夫だよ」

「明るくしたからさ」

幸の言葉にそっと少女は顔を上げ幸を見つめた。

「ね、明るいでしょ。お姉ちゃんの顔、わかるかな」

「わかる、綺麗な人」

時間感覚が失われていく間に、退行現象が生じ、子供の意識になってしまったのだろう。

「お姉ちゃんがここから出して上げよう。お姉ちゃん、強いぞ、だって、無の娘だからね」

少女が安心したように笑みを浮かべた。

「ありがとう、お姉ちゃん」

幸は少女の頭を優しく撫で、囁いた。

「今度、目を覚ます時は、青い空の下だ。楽しみに眠っていなさい」

少女は少しうなずくと目をつぶった。

研究室では歓声が上がっていた。

「活性化したぞ、脳が目覚めたんだ」

男の前にいた研究員が悲鳴のような雄叫びを上げた。

激しくモニターが明滅する。各部に取り付けられたセンサーの信号が、グラフとなりプリンターから弾き出される。

ふと、幸は水槽の下、小さな落書きを見つけた。

めぐみちゃん、ごめんね。

「どうということ・・・」

幸が小さく呟いた。

「三十九という名の殺戮者の本名は誰も知らない。ただ、奴は女になりたがっていた、女そのものに。奴とここにいる彼らの組織と利害が一致したのだろうな、奴は女の体を手に入れた、追いつ出された女の脳と心は水槽の中だ。落書きは三十九が、その時の気分で書いてみたものだろう、記念に」

幸は俯き声を振り絞った。

「そういうの・・・、許せない」

「うわあああっ」

幸が悲鳴、いや、雄叫びを上げた。

まるで嵐だ、幸を中心に風が逆巻き、研究員達を壁に天井にと打ち付ける。男は硝子球を浮かび上がらせると、水槽に鋭く投げ付けた。割れるかと思いきや、硝子球は巨大化し、水槽もろとも脳を飲み込んでしまった。

「彼女の脳を破壊してしまったら本末転倒。さあ、幸、帰ろう」

「許せない、許せない。閉じ込められるのがどれほど苦しいか。絶対に許せない」

男は自分を見失った幸を見た、百年以上に渡る自分自身の苦痛がああ落書きをきっかけに顕在化したのだろう。

「幸、心を沈めなさい」

「うおおお、許せない」

俺の声も聞こえないか・・・

男は左手で幸をしっかり抱き締めた。

「幸。どれほど苦しかったか、辛かったか。ごめん、父さんには全てはわからない。でもね、いま、幸には新しい生活があり、たくさんの友達も増えた。それを大事にしてほしいんだ」  
幸の体から衝撃波が生まれ、男の内蔵をえぐる。喉から血が溢れる。

男はふと思った。誰にも殺されたくない、幸とずっと変わらぬ生活を続けたいと思った、でも、ああ、幸になら殺されてもいいかなと思う。幸は泣くかな、泣いてくれるかな。

泣いたら可哀想だな、でも、たくさん、友達も出来たから立ち直ってくれるかな。

考えてみれば、幸と出会うまでは、俺も殺人が日常生活のような男だった。そんな男が真面目な振りして、幸せな生活を送ることが出来た、もう・・・、これ以上は望むべきじゃないな・・・

幸、ありがとう

男の力が抜け、そのまま俯せに倒れて入った。

天井が軋み出す、壁がひび割れた。風は幸を中心にいよいよ激しくなり、

「こらっ、しっかりしなさい」

幸の前に透けて後ろが見える、もう一人の幸がいた。

「もう一人のあたし・・・」

次第に風が収まり、静寂と化して行く。

「空気中の粒子の有り合わせで体を作ったけど、密度が粗いなあ」

半透明の幸は自分の手のひらを見つめて呟いた。

「あたしが外にいる」

「幸という存在の構成は百のうち九九はあなた、私はひとつだけ。つまり、あなたがしっかりしなきゃいけないの。なのに、このざまはなんなの。もっと、自分の感情を操れるようになさい」

「ご、ごめんなさい・・・」

「ごめんなさいじゃありません。足元、ご覧なさい」

ふと、幸が足元を見る、俯せに、男が倒れていた。

「お、お父さん。うわあああつ。お父さん、お父さん」

慌てて幸はしゃがみこむと男を抱き上げた。

「お父さん」

「大恩あるお父様を殺してしまったのですよ」

「うわあああ」

涙に鼻水、ぼろぼろに泣く幸を、溜息交じりに半透明の幸は見つめていたが、ひざまずくと、幸の顔を覗き込んだ。

「泣くのはそれくらいにしなさい。私にはあなたを叱ることしかできません、この状況を変えることができるのはあなただけなのです」

「この状況を・・・」

半透明の幸は、幸を励ますように、にっと笑った。

「まだ、お父様の心臓が停まって四分。すぐに人工呼吸、神気を吹き込みなさい」

「は、はい」

幸は男を仰向けに寝かせると、口移しに息を男に吹き込む。

「同時に内蔵の修復。それが済んだら、直接、心臓を掴んでマッサージしなさい」

幸は男の背に左手を差し入れ、右手を腹部から中へと溶け込ませて行く。

半透明の幸は辺りを見渡した。倒れた人、コンピューターに挟まれた人、傾いた機械、見上げた。天井自体が光っている、LEDが内蔵され、最小限の影響に止まったため、こうして明るさが残ったのか。

ゆっくりと見下ろす、幸が放心したように口を開け、宙を見つめていた。

微かに男の心臓が動くのがわかる。

「間に合ったようね」

「はい、なんとか」

半透明の幸は嬉しそうに微笑むと幸の頭をそっと撫でた。

「よくできました。でも、お父様にも困ったものです。執着がないというか、とても恐ろしい冷酷なお方なのに、娘には驚くほど甘い。ご自分の命さえ差し出してしまおう、仕方ありませんね、お父様にもっと責任を担っていただきましょう、容易く死ねないように」

「責任を」

「そう、私達はお父様に娘にさせていただいたけれど、実のところ、娘よりも妻になりたいのが本心、違いますか」



「もちろん、それは。でも、お父さんは」

「現状はたいしてかわらないでしょうけど、お父様には、妻になってくれと言っています。ね、だから、邪魔しちゃだめよ」

二人の幸は庭の梅林へと戻ってきた。そして、男を仰向けに寝かせ、脳の入った球を空に浮かせる。半透明の幸は、幸に溶け込むようにして消えた。

幸は男の横に膝をつくと、そっと、呼びかけた。

「お父さん、お父さん」

男がゆっくりと目を覚ました。

「あれ・・・、地獄じゃないな。梅林、うちに帰って来たのか」

「お父さん、何処か、痛くない」

「ん、幸。幸は怪我していないか」

「幸は大丈夫だよ」

「そっか」

男は笑みを浮かべると、左に体をずらし、上半身を起こす、慌てて、幸が背中を支えた。そして囁く。

「ごめんなさい、幸はお父さんを殺してしまいました」

男は左手で自分のお腹に触ってみる。

「ちょっと腹囲が小さくなったかな、ちょっとだけ、かっこよくなったかもな。ありがとう」

「お父さん」

「ん・・・」

「お父さんは幸を叱らないね」

男は困ったように笑みを浮かべた。

「男親はだめだな、叱るという発想が希薄だ。今回のことも父さんがしっかり幸を育てていたらね、こんな、幸自身に辛い思いさせずに済んだのにな」

「お父さんはこのままでいてください。だって、こらあってお父さんに怒鳴られたら、幸、泣いてしまうよ」

「それは大変だ」

「幸は失敗したら喉が涸れても、ごめんなさいって言い続けるから」

男は左手で幸の頭を撫でる。

「幸はどう行動すればいいか、自分で考えることができる。ただ、今回は昔のことと重なって感情に流されてしまった。でも、そのこと、経験したからね、次は大丈夫だよ。自分自身を信頼してあげなさい」

「お父さん」

幸がそっと顔をあげる。

「幸にはたくさんの友達ができた。それも幸の大きな支えになるよ、きっと」

男は笑顔を浮かべた。

ふと、男は浮かんだままの硝子球に入った脳を見た。

「彼女をなんとかしなきゃな」

幸は振り返ると、硝子球を見る。

「幸が彼女の体を創るよ」

「三位全てがなくなってしまうている、難しいぞ。とって元の体はたくさんの人を殺してしま  
って穢れてしまっているから使えない、脳まで穢れに侵されてしまう」

「うん、でも、今の幸なら出来そうな気がするんだ」

幸はゆっくりと立ち上がると、硝子球に近づく。

幸が両手を伸ばし、硝子球に向ける。ゆっくりと硝子球が月の白い輝きを放ち出した。

男は驚いてそれを見つめた。次第に白い輝きは人の形を取り出し、その光が消える頃、あの時の  
彼女をほんの少し幼くした女性が立っていた。

男は驚いたようによろけながら立ち上がった。呪的に構成された体じゃない。あれは、全く、普  
通の人間だ。

ゼロから体を創ったのか。

「お父さん、彼女の精神が子供に退行していたから、体も少し幼くしてみたよ」

幸が男にそう話しかけた瞬間、ふわっと幸の体が浮かんだ、目を閉じ、幸がゆっくりと浮かび  
上がって行く。

男は駆け出すと、飛び上がり、左手で幸を抱き締める、しかし、幸の体を男の手は擦り抜けて  
しまった。

男は茫然と空に浮かぶ幸をぎょしした、全てを理解した。

声にならない音を男は幸に叫んだ。

幸の真の名前。そして、唯一の願いを叫ぶ。

「帰って来てくれ、幸」

幸の目が開き、男をぐっと睨みつける、そのまま、急降下、落ちてくる幸を男は抱きとめ、仰向  
けに倒れた。

幸は男の上ののしかかったまま、低く男に語りかけた。

「神に戻るはずの私はあなたさまの我欲により、その機会を失ってしまいました。私はもはや神  
に戻ることは出来ませぬ、私はあなたさまの娘という、あやふやな立場に閉じ込められてしま  
いました」

「君には申し訳ない、どうしても幸と別れたくなかったんだ」

「それがあなたさまの我欲。今となってはどうしようもありません。さあ、あなたさまの責任の  
著しを言の葉になさいませ」

男は決意して言った。

「私の妻になってくれ」

幸はふっと笑みを浮かべた。

「あなたさまの我欲により私は留まります、やっと、幸も私もあなたさまの妻になることができ  
たと嬉しくて仕方ありません。どうぞ、末長く、よろしくお願い致します」

言葉を終わると、幸が二人に別れた。薄い姿の幸が、男と幸の横に座る。

「幸、日中から、仰向けの殿方に馬乗りするとは、はしたないですよ」

薄い姿の幸が幸に笑った。

男は一つ溜息をつく、二人の幸を前にして語り出した。

「幸はもともとは神様だったのだろうと思う。武術や呪術が父さんの能力を遥かに越えたのも、神と人との基礎能力が遥かに違うからだ。その幸が、彼女の体を全くのゼロから創り出した。全くの無から有を産みだす、これこそが神の能力だ、この能力を使ったため、幸は自然に神へと、あまねく普遍の存在に変わって行こうとした」

薄い姿の幸が笑みを浮かべた。

「真実の名前を叫んで、留めていただかなければ大変なことになるところでしたわ」

「あまねく普遍の存在、それは」

男の言葉を薄い姿の幸が繋いだ。

「空気みたいなもの、こうして、お喋りも出来ません」

幸も男と同じ溜息を一つつく。

「貴方は無茶だよ。もしも」

「無茶ではありませんよ。留めてくださると確信しておりましたから」

ふと、気づいたように薄い姿の幸は男を見つめた。

「貴方か……。私は幸の別人格ではありますが、こうして体外に出、空気中の粒子を集めて、薄いながらも形どることが出来るようになりました。おまえさま、私にも名前をつけてくださいませ。おまえさまが幸に甘い分、私は、たまに幸から出でて、叱り付けなければなりません。そうだ、幸と似たような名前が良いですわ」

男は困ったが、あらがえずに言った。

「幸乃、にしましょう」

「ありがとうございます、素敵な名前ですわ」

幸乃は男に笑みを浮かべると、振り向き、幸に言った。

「疲れました、私は貴方の中に戻って当分の間、眠りますが、妻として、娘として、しっかり、お父様を支えるのですよ、わかりましたね」

「は、はいっ」

幸乃は、にっと笑うとそのまま、姿を消した。幸はそっと幸乃のいたところに、ふわふわと手を動かしてみる。

「うひい、大変だ」

緊張の解けた幸が叫んだ

「もう多重人格どころか、多重人間になってしまったよ」

「父さんの代わりに幸を叱ってくれる人が出来てしまったな」

男がくすぐったそうに笑った。足を投げ出し、幸も情けなさそうに笑う。

「あの人に、幸乃さんによろしいですねって言われると、反射的にはいって答えてしまう」

「父さんは、以前から、少しずつだけどね、喋っていたけれど、淑やかな、控えめな人に思っていた」

「それは猫かぶっていただけ。幸乃さんは強いよ、幸があんな世界で百年以上、狂わずにいることができたのも、今の幸乃さんという人格と暮らしていたからかもしれない」

幸はごく自然に男を抱き締めると、耳元で囁いた。

「ね、お父さん、今晚、えっちしようか」

「うっ・・・」

男は幸の言葉に固まってしまった。顔が真っ赤にほてり出す。

「夫婦だもの、妻として不思議じゃないよ。幸、とっても気持ち良くしてあげるよ」

「いや、あの、うーん」

男が口ごもる。

「むしゃむしゃ、お父さんを食べちゃうぞ」

「いや、そうだ、確かに父さんは妻になってくれと言った。そうだ、確かにそう言った・・・」

男は自分に納得させようと呟く。

幸は笑いながら、体を離れた。

「幸はね、お父さんに要求されたらすぐに受け入れる。だって、本当に愛しているもの。でも、なんていうかな、幸はお父さんにとって特別の存在でありたい。そう思うと、えっちをしない方がいいのかななんて思う。お父さんにもっと近づきたい、服のその厚みすら邪魔だと思うくらいなんだけどなあ」

「幸がこんなおっさんを愛していると言ってくれるのはとても嬉しい。ただ、父さんは暗殺者としてたくさんの人達を殺して来た過去がある。殺人鬼と忌み嫌われた時代もあった。すっかり穢れているんだ、父さんは」

幸はにっと笑うと男の左手を両手で包み込んだ。

「ならば、その穢れ。半分、幸が担いましょう」

「いや、大切な娘を汚すわけにはいかない」

「お父さんの頑固者」

「そうさ、父さんは頑固です」

「開き直ったな」

幸が楽しそうに笑った。

「お父さんは幸を妻にすると約束しました。ただ、幸も体を許してしまうと、夫は出来ても、お父さんがいなくなってしまうようでなんだか寂しい。ということで、本来なら、幸のやりたい放題ですが、幸は優しい娘です、妥協してあげましょう。御風呂を大きくして大人二人が寛げるように明日から工事します。完成後、裸のお付き合い、背中の中の流しっこもします。これ以上は譲れません。よろしいですか、よろしいですね」

「わ、わかった・・・」

幸は男に抱き着くと、くすぐったそうに笑った。

しかし、ふっと笑い声を止め、幸はぎゅっと男を強く抱き締めた。

「お父さんを殺してしまったって気づいた時、ああもうだめだ、幸はなんてことをしてしまったんだって思った。そして、頭が真っ白になって何をどうしたらいいのかもわからなくなったんだ」

「父さんは幸が立ち直ってくれるかな、啓子さんやあかねちゃんたちとしっかり生きていって欲しいと思いながら死んだ、それだけが気掛かりだった」

「お父さんは優しすぎるよ」

幸が唇をかむ。

「それは仕方ない、幸が大切なのは変わらないからさ」

「幸乃さんが初めて幸の前に現れたんだ、叱られて、それから、人工呼吸やお父さんの内蔵を修復するようになって教えてくれた。お父さん、ほんとうにごめんなさい」

「これは、父さんも幸乃さんに頭が上がらないな」

男は少し笑う。

「ね、お父さん、新しい右腕、作ってあげようか。今の幸なら出来るよ」

思い詰めた顔で幸は男の目を見つめた。

「右腕は幸とこれからも一緒に暮らすためになくしたものの、だから、右腕はなくていいよ」

「幸はお父さんに右腕があってもずっとお父さんというよ」

「ありがとう。でも、その時の思いに、今も誠実でありたいからさ。それとも、幸は、父さんに右腕がないの嫌か。辛いこと、思い出してしまうから嫌か」

「嫌じゃない。ただ、お父さんは幸にとっても甘いくせに、自分にはとっても厳しい」

「かっこつけているだけさ。だって、幸にかっこいい父親って思われたいからな」

男はそっと笑みを浮かべると、左手で幸の頭をなでた。

「今回のことで父さん、思った」

「何を」

「呪的な延命はしないけど、それでもね、長生きして幸とこれからも暮らし続けたいってね。死んだままにならなくて良かった」

「幸はこれからはね、負の感情に流されずにするよ。感情に溺れずにしっかりするよ」

男はくすぐったそうに笑った。

「よろしくお願いします。もう、父さんじゃ、幸の暴走を止められないからさ。さてと、幸。恵さんをなんとかしてくれ」

「うん」

幸はふと立ち上がると、眠ったままの恵を抱きかかえ、戻って来た。

「お父さん、ここで一緒に暮らすのがいいのかな」

「いずれは彼女も記憶が甦るだろう、それまでは心と体を養生させる必要があるだろうな。だから、彼女が戻りたいと思うまではここにいる方がいいだろう」

「そっか、そうだよ」

幸は恵を見つめると、彼女の耳元で声をかけた。

「おおい、目を覚ませ」

幸の呼びかけに恵がゆっくりと目を開ける。

「約束どおり、青空の下だ。見えるか」

「明るい、空が青いよお」

笑みを浮かべる恵の瞳が涙で潤む。

ふと、男は坂村が畑からこちらにやって来るのを見た。

「先生、そろそろ、鍋の準備しないと」

幸の膝に裸の女がいるのに気づく。

「まっ、大概のことには驚きませんが」

坂村が恵の顔を覗き込んだ。

「あれ、恵だ」

幸は見上げると坂村に尋ねた。

「知り合いなの」

「大学の時の、一つ下の後輩です、クラブが一緒で」

幸は男を見つめた。

「そうだな、人を闇に追いやる一連の仕組みが、その大学にあるのかもしれない」

幸は溜息をついた。

「お父さんと静かな生活を送りたいのに」

「父さん、幸に付き合うよ。でも、今は鍋のこと、考えさせてくれ。こんなにお腹が減っているのは初めてだからさ」

幸は男の内蔵を再生させた時、老廃物をすべて消したことを思い出した。

「うわっ、すぐに用意するよ。恵子さん、恵さんをお願い」

幸は坂村に恵を預けると、慌てて、家へと戻った。

「先生、何があったんです」

「そうか、まだ、数時間しか経ってないんだな、お昼食べてから」

男は笑うと、坂村に言った。

「大冒険活劇。それに幸が二人になった」

「幸さんが二人、それって、姉妹喧嘩で世界が滅びますよ」

「その時はあきらめてくれ」

男が笑った、坂村も情けなさそうに笑う。

「坂村さん、彼女に服を着させてくれないかな。服は幸に選んでもらってください」

坂村は頷くと恵を抱きかかえ家へと戻った。

「こんなに賑やかになるとは思いもしませんでした」

男がふっと呟く。その男の横には幸乃が座っていた。半透明で後ろが透けて見える姿はまるで幽霊のようにも思える。

「ただ、女性ばかりですわね」

「幸乃さんはその方がいいのでしょうか」

「ええ、おまえさま以外の男は嫌悪しています、幸も私も」

少し不機嫌そうに幸乃は答えた。

「男は性根が汚いのばかりです。一キロ以内に近づくなという気分」

「それは手厳しい」

「百数十年、男を食ってきた結論です」

ふっと幸乃は笑みを浮かべると男を見つめた。

「おまえさまは幸と情を交わされようとされませんね。御風呂で背中の中の流しっこ、まるで子供同士のよう。せっかく、背中を押して差し上げましたのに」

「多分、それは父と娘という関係を大切にしたいと考えているからかも知れません。何の計算も打算もなく、見返りも必要とせず、ただ、大切と思うことの出来る関係。この関係は現在進行で私を救ってくれています」

「そんな素直に返されてしまうとは……。でも約束は約束。おまえさま、浮気はご法度。幸と幸乃は娘でもあり、妻でもあること。お忘れなきように」

「ええ、大丈夫ですよ、幸乃さん」

幸乃はふと思案顔に俯いたが、すぐに顔を上げた。

「おまえさま、試しに幸乃と呼び捨てになさいまし」

「幸乃……、ですか」

幸乃は得心いったかのように笑みを浮かべた。

「私のことも幸乃と呼び捨てになさいまし。その方がうれしゅうございます」

ふっと顔を寄せると幸乃は男に囁いた。

「もお、幸乃だってお父さんの娘なんだよ。大事にしてくれなきゃ怒るぞ」

幸乃の笑顔が凍りつく、真っ赤な顔をして俯いた。

「あ、あの」

男が戸惑う。

「ああ、だめだ。恥ずかしい、今のは無しにしてくださいまし」

幸乃は自分自身に呆れたかのように声を出して笑った。

「私はおまえさまのことを、父としてより、夫として見ているようです」

「大事に思ってますよ」

幸乃は照れ笑いを浮かべると、家を見やった。

「幸にたたき起こされました。おじやを作りながら、お父さんが死んじゃうと泣いて、私に見に行ってくれと。随分、しっかりしたくせに、おまえさまのこととなると、頼りない子供になってしまう。ほんに面白いこと」

「大事に思ってくれる人が居てくれるのは嬉しいことです。ただ、私自身があまり大切には育ててもらっていないので経験がない。このままでいいのかなと思います」

「いいのですよ。今のまま、幸と幸乃を大事に育ててください。この御恩は存在と笑顔でお返し致しますわ」

家の中から坂村の叫び声が聞こえた。

「ん、どうしたのかな」

「ああ」

幸乃はいたずらげに笑った。

「物事に動じない坂村さんのこと、それならばと、あの方の目の前で、幸の背中から、蠢くよう  
におどろおどろしく登場致しました。硬直されていましたが、やっと意識を取り戻した様子」

男も仕方無さそうに笑う。

「考えて見れば、食卓がないと私は食べることができません、家に帰りましょう」

「そうですね、私も坂村さんとお喋り致しますわ」

男が歩く、幸乃もその横を歩いた。

男は思う、存在と笑顔、本当にそれだけで充分だ、願わくは、この関係が少しでも長く続きます  
ようにと心から願った。



## 遥の花 雨夜閑話 一話

---

### 異形 雨夜閑話 一話

幸、鬼を両断する

月曜日 18 7月 2011 at 5:30 pm.

### 異形 雨夜閑話 一話

男は落ちつかずにいた。

幸が一週間かけて造った風呂場、いや、浴場だ。大人、五、六人はゆっくり入ることができる。男は足を伸ばし、ゆっくりと湯船につかっちはいたのだが、それでも、落ちつけずにいた。それは幸との約束、一緒に風呂に入って背中の中の流し合いをするという約束に、わかったと答えつつも戸惑いをかくせずにいたからだった。幸との約束は必ず守る、しかし・・・。

「お父さん、入っていい」

後ろ、曇り硝子の向うから、はしゃぐ幸の声が響いた。

「どうぞ」

戸惑いながらも、男は背中越しに返事をする。

硝子戸を開けた幸は白く透き通るような肌を惜し気もなくさらず、その姿はまさに人の領域を越えた神々しさすらある。

幸はいきなり駆け出すと飛び上がり、男の前に飛び込んだ。男の視界を水しぶきが遮り、それが、収まった時、幸が面と向かい、男の太ももに馬乗りになって笑顔を浮かべていた。

「お父さんと一緒だ」

「幸、降りなさい」

幸が目を瞑り小さく喘いだ。

「あん、お父さんのが・・・」

「うわっ、幸、早く降りなさい」

幸はあやしげに笑みを浮かべ、男を見つめ囁いた、

「だめだよ」

幸は少し腰を浮かせると、男にしっかりと抱き着いた。幸が男に胸を押しつける、吸い付くような肌。そして、男の耳元で囁いた。

「お父さんの、入れちゃおうか」

「幸、だめだ、それは」

ふと、幸は男の耳元で哀しげに囁いた。

「お父さん、幸を妻にしてくれるって言ったよ。言ってくれたよ」

男は幸と暮らす上で、一切、幸には嘘をつかないと決めていた。

「そうだったね、ごめん、父さん、確かにそう言った」

俺はいいのか、幸を汚してしまう、幸は後悔しないか。男である俺は父親という立場で、幸と生活をしている。幸は今後、苦しまないだろうか、恐れないだろうか。安寧に暮らすことができるだろうか。

「うっ」

幸が男の耳を噛んだ。

「お父さんはあまあまですなあ。とつても、チョコレートです」

幸は笑みを浮かべ男から降りると、左に座り男の腕を両手で抱いた。

「ごめん、幸」

「お父さんは男だけど幸を本当にね、大切に思ってくれている、それがわかってるから、幸は大丈夫だよ」

幸は男の腕を両手で抱えたまま、目を瞑り、そっと呟いた。

「いつもありがとう、お父さん」

男は居間に設えた掘り炬燵に足を入れ、勿論、春の暖かさに炬燵布団は外していたが、ばて切ったように仰向けに寝転がってしまった。

何事もなく洗い場で背中を流し合い、先に男が風呂からあがる。すっかりのぼせてしまっていたのだ。

妙なことにはならず、いや、一緒に風呂に入ることそのものが、妙ではあるのだが、風呂を終え、男はほっとしていた。

俺は幸の父親だ。

男は幸と始めて会った時のことから、暮し始めて、まだ、幸が不安定な頃のことを思い出す。

俺は幸を絶対を守ると決めた。そして、それこそが俺の生きる理由になったんだ、守るべき幸を俺が汚してどうする。

「お父さん」

幸が襖を開け、男を覗き込んでいた。男は体を起こすと、ちょっと照れたふうに笑った。

「ごめん、父さん、とつてもかっこ悪かったな」

幸はかぶりを振ると、そっと男の前に正座した。

「ごめんなさい、幸、はしゃぎ過ぎて、とつてもえっちになってた。服を着たら、なんだか落ちついて、そうしたら、お父さんにとつても迷惑をかけたのに気づいて。」

男は少し笑みを浮かべ、幸の頭を撫でる。

「迷惑なんて思っていないよ、父さん、幸が大好きだからさ。ただ、父さんは、今、とつても臆病なんだ。この生活が、今の関係が壊れたらと思うとね、とつても、臆病になってしまう。かっこ悪いな」

「幸もお父さんが大好きだよ、この生活を絶対を守るよ」

「ありがとう。父さん、幸を束縛していないか、無理させていないか」

「お父さんは幸に生きていくためのもの、いっぱいくれたよ。だから、幸は一人でも生きて行けるかもしれないけど、幸は自分がいたいから、お父さんと一緒にいるんだよ」

「そっか、ありがとう、幸」

男は左手で幸をそっと抱き寄せると、自分に語りかけるように呟いた。

「父さん、心の中では嬉しくって、声を上げて泣いているよ。大人だからさ、大声で泣いたりしないけどね」

男は手を戻すと幸に、少し恥ずかしそうに笑みを浮かべた。

「お父さんは少年みたいだ、幸の心をとろとろのスープにしてしまう」

「こんなおっさんが少年なわけないよ。さ、晩御飯を作ろう、お腹、空いていないか」

幸は、足を崩し、ばたんと仰向けに寝そべってしまった、

「うわあ、お腹減ったよお。そうだ、とろとろのポタージュスープが食べたい」

「じゃがいもと玉葱、あったな。それじゃ、大事な幸が飢えてしまわないように作ってくるよ」

立ち上がった男に幸がしがみついた。

「幸も行きます、そして、味見をして差し上げましょう」

「幸は厳しいからなあ、美味しくないって言われたら、父さん、今度は悲しくって泣くかも」

「大丈夫。幸はお父さんには甘いからね。ね、立つのが面倒、お父さん、台所まで引っ張ってください」

「そんなことしたら、脚が擦りむけてしまうぞ」

男は左腕で軽く幸を抱え上げた。

幸は晩御飯を堀炬燵の上に並べた後、硝子戸を細目に開け、夜の外を覗く。

雨音と共に、遠く、蛙の鳴声が聞こえた。

男は左腕でお茶の沸いたやかんを持ってくる。掘り炬燵に入ると、幸に話しかけた。

「雨が降り出したのか、雨蛙だな」

幸は硝子戸を閉め、振り返ると頷いた。

「多様化して面白いことになったな」

幸も掘り炬燵に入ると、少し困ったように笑みを浮かべる。

「ごめんなさい、お父さん」

「謝ることはないよ、これが本来の姿だからね」

異界は異物の侵入に警戒するため、単純な生態にしていたのだが、畑を作ることでさまざまな動植物が増えてしまっていたのだった。

「幸の影響かな、父さんも農業に興味が出てきたよ」

「お父さん」

幸がそっと囁いた。

「ん、どうした」

「幸はたまにね、こう思うんだ。現実世界と異界との繋がりを閉ざしてしまって、お父さんと異

界で二人っきりで生活してみたいってね」

「疲れたかな」

「そうじゃないんだけど、ちょっとね」

ふと、男は幸の背中から首筋へと手をやった。そして、首筋を包み込む。

「なんだか、暖かい、気持ち良くて体が浮かんでしまいそう」

「澱のように疲れが溜まっている、ちょっと頑張り過ぎだな、幸は。どうだ、軽くなったか」

幸は頷くとそっと笑みを浮かべた。

「お父さんは頼もしいなあ」

「ありがと。な、幸」

「ん・・・」

「いずれは異界に生活の拠点を移動させる必要があるだろうと思う。それが多分、双方の幸せだ。それは父さんも思うよ」

幸はそっと頷いた。

それ以降は二人ともその話題には触れず、晩御飯を食べ始めた。

「お父さん、このポタージュスープ、美味しい、味見した時より美味しくなってる」

「工夫をひとつ足したからな。合格できたかな」

「合格です、お店にも出せるよ」

幸は、にひひと笑うと、嬉しそうにスープを飲む。

「最初はカウンターだけだったな」

「うん、基本は木目調、オークとかね、濃い目の色合いで統一。いい感じになると思うよ」

「楽しみだな」

幸は男の顔を見上げると眩しげに笑った。

「お父さんのお陰で幸はいろんなことができる、ありがとう」

「いや、幸が頑張りやさんだからさ、父さんはあたふた幸の後ろを追いかけているだけだよ。でもね、それがとても楽しい、ありがと」

幸は男の左手を両手でぎゅっと握る、そして、自分の額を重ねた。

「お父さん、幸を娘にしてくれてありがとうございます」

「父さんこそさ、幸が居てくれなかったら、悪人のままだった、救ってくれてありがとう」

不意に幸が顔を上げた。

「護理髪、礼子ちゃんだ」

「何かあったんだな、父さんも行くよ」

「幸、一人で行ってきなさいな」

「幸乃さん」

男は幸の横に、幸乃が座っているのに初めて気が付いた。

「いま、幸の体から出てきました。お父様には折り入ってお話ししたいこともあります。幸、一人で行ってきなさい」

「一人で行くのは大丈夫だけど、幸乃さん、お願いだから・・・」

幸乃がにいいと笑みを浮かべた。

「万事塞翁が馬、安心なさい」

「ああ、幸乃さんのそれが・・・、本当に変なことを言わないでください。幸は今の生活に満足していますから」

幸乃は笑みを浮かべたまま、幸を推す。

「早くしないと、礼子ちゃん、喰われてしまいますよ」

「お、お父さん」

「ん」

「幸は今の生活に満足しています、本当だからね」

「ありがと。そうだ、幸、これを持って行きなさい」

男は空から硝子球を取り出すと幸に手渡した。

幸の姿がかき消すように消えた。

「さてと」

幸乃は男を少し睨む。

「お前さまは幸の気持ちがわかっていません、たとえば、ほれ」

幸乃が男の右の肩口を指さした。

「これは・・・」

「お前さまにも理屈はございましょう、ようは、その御理屈と幸のどちらか大切か、天秤に掛けてござんなさいませ」

幸は妙に人気のない、夜の街に一人立っていた。かなりの繁華街のはずであるのに、誰ひとりいない。

ブランドを並べた、個性豊かな、いくつもの店が煌々と軒先を照らしている、しかし、物音ひとつしない。すべての音が消えていた。

捕獲者には音が邪魔なのだろう。

幸は幸乃が言うであろうことを理解していた、願わくは、あいまいにそれとなく、言って欲しい、いや、言わずにいてくれればそれが一番なのだ。

幸は男に、これ以上負担をかけたくなかった。

「早く済まそう」

幸が小さく呟いた時、遠く、足音が響いた。

足音二つ、思いっきり駆けている。

啓子の妹、礼子だった、同じくらいの背丈の女の子の手を引っ張るように走ってくる。

「幸さん。どうしてここに」

礼子は息せききって幸に駆け寄った。

「早く逃げてください、鬼が追ってきます」

「わかってる、だから来た」

幸はふと礼子が手を握っている女の子を見つめると、片手でその顎をくっと上を向けた。

「中原理絵子、礼子ちゃんの親友か。自分の親友を危険に晒すなよな」

「幸さん、早く」

礼子が叫んだ。

「大丈夫、ここで鬼共を始末する」

幸は片手で理絵子の腹を押さえた。

「鬼をはらまされたか。落としておくか」

「あたしの赤ちゃん・・・」

「馬鹿野郎、お前の中にいるのはただの鬼だ」

幸の手が理絵子の腹に入り込み、その手を抜いたとき、青く光る、角のある赤ん坊が、その瞬間、幸の手の中で紅蓮の炎に燃え、消えてしまった。

「あ、あの人の赤ちゃんが・・・」

幸は理絵子を睨みつけると、ぐっと顔を寄せた。

「あの男のことは忘れな、もう人じゃない。なあ、片思いでいいなら、既婚のあたしに惚れてみるか」

幸がにっと笑った。

「やっと見つけたよ、理絵子。急に走りだしてどうしたんだよ」

男が二人、やって来た。

「幸さん、あいつらが鬼です、今は人の姿をしているけれど。角が、牙が」

「礼子、理絵子を後ろから羽交い締めにしなさい」

「は、はい」

慌てて、礼子は理絵子の後ろに回ると両手でしっかり抱き締めた。幸が硝子球を二人の上に軽く放り投げる、硝子球は粉々になって二人の回りを回転しだした。

「礼子、動くなよ。その結界の中にさえいれば安全だ」

「は、はい」

男たちが近づいてくる、ほんの数メートルのところで、幸は男たちを制した。

「これ以上近づくな、あたしは男嫌いでね」

「うひゃあ、すげえ美人さんだ。な、理絵子、紹介してくれよ」

幸は空から抜き身の刀を取り出した。

「早く鬼に変態しな。人の姿では太刀打ちできないぜ」

男は本性を現したかのように幸を睨み付けた。

「お前、ただの女じゃないな」

「ああ、ただの女じゃない、すげえ美人さんだ」

幸はにいと口を歪め笑みを浮かべると、右手で刀を持ち刃先を男に向けた。男たちは表情を変えた。軋むような音が男達の体から響きだし、巨大化して行く、ほんの数秒のうちに、青く燐光のように光る鬼が二体、立っていた。

「礼子」

「はいっ」

「姉妹そろって運が悪いな」

一瞬、幸の姿が消えた。いや、あまりの速さに礼子の目では幸の動きを追うことができなかった、それは、鬼にとっても同じだった。二体の鬼の首を同時に刎ねる、その血しぶき浴びるよりも早く、幸は鬼の背中に移動すると、その原をなぎ払った。

幸が再び、礼子の前に現れた時、その背後にはいくつもの青い肉塊が転がっているだけだった。

「燃やしておくかな」

幸の呟きに呼応するかのように肉塊が燃え上がり、黒い消し炭となって消えてしまった。

ふいに幸は少し離れた街路樹に向かって声をかけた。

「そこの魔術師、出てこい。まさか、無事に帰れるなんて思っていないだろうな」

黒いマントを羽織った男が姿を現した。

怯えきった表情で幸を見る。

「せっかくだ、あんたも斬っておくか」

「そ、それだけは勘弁してくれ」

幸が魔術師を睨んだ。

「なるほど、人狩り。鬼の遊び、あんたは、その連絡係ということか。なんだよ、鬼の使いばっしりじゃねえか」

「均衡が崩れたんだ、鬼がどんどん強くなって来た」

「まさか、世情の乱れを責にするつもりじゃないだろうな」

幸は魔術師の言葉を冷たく返した。

「お前らが弱すぎるんだよ。ん、お前、あの暗殺寺の出身か」

幸はふと愉快そうに笑みを浮かべた。

「もう一度寺へ帰って修行をし直せや、絶世の美女にそう言われたって言えば、館長も受け入れてくれるぜ、もっとも、あんたが生きて寺へ辿りつけたらの話だけだな。早く行け」

魔術師はあたふたとうなづくと姿を消した。

「あれは鬼のところに戻るな」

幸は関心をなくしたように冷たく呟いた。

振り返ると幸は硝子の結界を消した。

「幸さん、ありがとうございます」

ほっとしたのか礼子はしゃがみこんでしまった。

「めったにない経験ができたわけだ、ただし、次は助けないぞ」

幸は怒ったように言うと、手を横に伸ばした、その手が消える、

「あ、うわあっ、な、何」

啓子が幸の手に背中を引っ張られ現れた。左手にお茶碗、右手にお箸を持ったまま。

「幸さん、無茶ですよ。晩御飯食べていたのに」

「悪いな、礼子ちゃんが鬼に襲われた」

「え・・・」

啓子はしゃがみこんでいる礼子を見つけると、慌てて抱き締めた。

「礼子、大丈夫。怪我は」

「大丈夫だよ、お姉ちゃん」

「あまり大丈夫じゃない」

幸が啓子の背中に話かけた。驚いたように、啓子が振り返る。

「礼子ちゃんと、その理絵子ちゃんは、一週間、預かる、ゆっくりと穢れを払ってやるよ」

「よろしくお願いします」

啓子が頭を下げた。

幸は三人を連れ帰ると、そっと玄関を開けた。

上がり口に笑みを浮かべた幸乃が立ち、四人を向かえていた。

「お疲れさま、御風呂わいていますわよ」

「幸乃さん、お父さんには・・・」

「迷った時は前進あるのみ。しっかりはっきり申し上げました、あとはよろしく」

幸乃は幸に近寄ると、ずっと幸に溶け込んでしまった。

幸は留守にしていた間の幸乃の記憶を確認して慌てふためいた。

「啓子さん、二人を御風呂に入れてください。そして、徹底的に体を洗わせるように」

「は、はい」

啓子の返事を聞く間もなく、幸は男がいるであろう御風呂の竈へと駆け出した。

新しい御風呂は薪で焚くようになっており、外に竈が設えられていた、もちろん、中からでも追いかけるくらいはできるようになっている。

男が竈で薪をくべていた。

「おかえり、体冷えたんじゃないか、もう一度、幸、風呂に入るか」

「お父さん」

「ん」

幸は男に駆け寄ると、しゃがんでいる男の前で跪いた。

「ごめんなさい。幸乃さんの話したことは」

男がくすぐったそうに笑った。

「幸乃さんのこと、怒らないようにね」

「でも」

「幸乃さんにとって幸はとても大切な妹なんだろう、だから、幸の幸せを一番に考えている、たとえ、自分の存在が消えても、幸が幸せであればってね」

「その辺、父さんも同じように幸が大切だ。幸の幸せが父さんの幸せだからさ」

男は手を伸ばすと、そっと幸の頬に触れた。

「幸が幸せでありますように」



幸が男をぎゅっと抱き締めた。

「お父さん、幸乃さん、ありがとうございます。幸はとっても幸せです」

幸は男の心臓の鼓動を楽しむかのように男に身を寄せていたが、ゆっくりと顔をあげた。

「右腕、作らせてください」

「ありがとう」

ふと、幸が玄関口の方向を見つめた。

男はくすぐったそうに笑った。

「幸、啓子さんを攫って来たんだろう、恵さんと啓子さんのお母さんだ」

恵は実家には戻らず、啓子の家で居候をしていた。食事時、啓子が目の前で消えるのを見て、男の元に慌てて相談に来たのだった。

「お父さんと二人っきりの生活が・・・」

「なんだか、当分、賑やかになりそうだな。玄関口へ二人を迎えに行きなさい」

幸はうなずくと、玄関口へと走って行く。

男が風呂場へと声をかける。

「啓子さん、湯加減どうだい」

「ありがとうございます、ちょうどいいです」

中から、啓子の声が聞こえた。

「幸も御風呂にはいるだろう、中から追い炊きできるから後は任せるよ」

「ありがとうございます」

男が居間に戻ると、幸が二人に謝っていた。男はくすぐったそうに笑みを浮かべると、お茶を沸かしに台所へ向かった。

とたたっと幸が男の元にやって来た。

「お父さん、ごめんなさい、二人も今晚泊まることになっちゃったよ」

「いまから夜道を帰るのも危ないだろう、もう一度、御飯を炊かなきゃな。野菜は畑にあるだろうし、冷蔵庫はどうかな」

冷蔵庫を開け、しゃがむ男の後ろから、幸がその背中におぶさり、男と一緒に覗き込む。

「お父さん、これは鍋だね。かしわとお豆腐」

「そうだな、野菜で水増しして。冷御飯は雑炊用、これから炊く御飯はおむすびにしておもう」

「なんだか、お父さん。民宿の亭主と女将は大変だ」

「大丈夫だろう、うちの女将さんはしっかりしているからな」

幸がにっと笑った。

「うちの亭主は気配り上手だし」

男は急須と湯飲みを二つ用意する。

「持って行きなさい、もうすぐお湯も沸くからさ。それと、啓子さんに御風呂の沸かし方を教えてあげなさい」

「うん、わかった」

幸は急須と湯飲みを持って、二人のいる居間へと行く、男はそっと笑みを浮かべた。  
賑やかなのはいいな、男は呟いた。

おわり

## 遥の花 雨夜閑話 二話

---

### 異形 雨夜閑話 二話

幸、ごめんなさいという

月曜日 18 7月 2011 at 5:40 pm.

### 雨夜閑話 二話

「眠れないのか」

幸は隣の布団に眠る啓子に声をかけた。男は自室にて、一人眠り、幸は啓子と礼子と理恵子の四人で寝ていた。

そして、啓子の母親と恵は、別の部屋に寝ていたのだった。

礼子と理恵子の二人は、喉が乾いたのか、二人して台所へと部屋を出、この部屋には幸と啓子の二人だけだった。

「啓子さん、鬼の鱗粉が見えるようになったのか」

布団の中から幸が問いかけた。

啓子は薄暗がりの中、幸を見つめてうなずいた。

「都会に住むことができなくなりました。あちこちに青い燐光のような靄が、ふわふわ浮んでいるのが見えるんです」

「鬼の穢れ、つまりはそこに鬼がいるか、もしくは少し前までいた。人に着くこともある、なんらかの理由で鬼に接触した、その影響だ」

「礼子は両手に、理恵子ちゃんは体全体、特にお腹が青い光る粉を振りかけられたように光っていました。あれは・・・」

「啓子さんの思う通りのことさ、ただ、先までの賑やかな宴会で。まさか、啓子さんのお母さん

があんなにはしゃぐとは思わなかったけどな」

幸は少し笑うと言葉を続けた。

「賑やかな宴会で、随分、鱈粉が消えただろう」

「はい」

「ここの空気を吸い、ここの水を飲み、ここで出来た野菜を食べれば穢れが浄化して行く」

「不思議ですよ、ここにいれば何があっても安心だって自然に思えてきます」

幸はくすぐったそうに笑った。

「ここは避難場所なのかもしれないな。ん、理恵子ちゃんが幸のこと、喋っている」

「なんて言っているんですか」

幸が小さく笑った。

「秘密だな、これは」

台所のテーブルにつき、礼子と理恵子は薄暗がりの中、水を飲み、話をしていた。

「ショックだったよね、理恵子の彼氏。あんなふうになってしまって」

「それが・・・」

「どうしたの、理恵子」

「今は不思議なほど、悲しくないんだ、確かにびっくりはしたけど・・・。ね、幸さんって既婚って言ってたよね。ご主人ってどんな人」

礼子はしばらく考えて答えた。

「姉さんは、幸さんはとても奇麗で魅力的な人だけど、あまり好きにならない方が良くって言った。あらゆる男がつまらなく見えてくるからって」

理恵子はひとつ吐息を漏らした。

「今、そんな気分。だって、とってもかっこよくって、それでいて、晩御飯の時には、とっても可愛くって。甲斐甲斐しく叔父さんの右手代わりにお世話しているのを見ると胸が熱くなって」

「恥ずかしそうに、幸さんのお父さん、自分で出来るからって困ってたね」

礼子がくすぐったそうに笑った。

「理恵子も幸さんにお世話されたいの」

少し理恵子が俯き呟いた。

「そんなんじゃないよ、ただ・・・、こういう娘がいるんだなあって記憶の何処かに残っていて欲しいっていうか、あの、えっと、なんだろう、なんて言ったらいいのかな」

理恵子が急に苦しそうにあえぎ出した。

「ど、どうしたの」

駆け寄ろうとする礼子を、飛び出してきた啓子が素早く押し止どめた。

「お姉ちゃん、放して」

抗議する妹を押さえ付けながら、青く光り出した理恵子の体を啓子は睨むように見つめていた。

幸は何事も無かったように冷蔵庫から堅く絞った冷やしタオルを理恵子の額に重ね、首の後ろを優しく撫でる。

「言祝ぎ申す。青き闇に蝕まれし、御身、御心、我が言葉の響きにて浄化せしめん」

幸が囁くように寿歌を呟くと、ゆっくりと青い光が消え、理恵子は力が抜けたように椅子の背もたれにもたれ掛かってしまった。

「脊髄にまで入り込んでいた鱗粉がかなり浄化出来たよ」

幸は笑みを浮かべると、軽くぽんぽんと理恵子の頭を叩いた。

「おい、気持ち、軽くなったか」

「は、はいっ」

理恵子が飛び上がるようにして答えた。

幸は小さく笑うと理恵子の両肩に手を置いた。

「もっと強くなれ、明日から、農作業で幸が鍛えてやるよ」

それから、幸は3人を部屋に戻し、男の部屋の前に立った。

「お父さん、いいかな」

「どうぞ」

襖の向から男が答えた。そっと、幸が襖を開けると男が布団の上で上半身を起こしていた。月明かりが微かに部屋の中を照らす。

幸は男の横に正座する。

「理恵子ちゃんは大丈夫だよ」

「うまく浄化出来たようだね」

男は笑みを浮かべると、立ち上がり、窓を細く開けた。涼しい風が微かに流れ込んで来る。

「上弦の月、真っ白な明かりだ」

「お父さん」

「ん・・・」

「啓子さんが鬼の鱗粉を見ることが出来るようになってしまったって」

「それは、父さんも気づかなかった。どうしたものかな」

男が幸の前に座る。

「昔の人にとって、鬼の気配を感じることは何も不思議なことじゃなかった。もちろん、視覚として見ることの出来る人は少なかったけど、嫌な匂いとして感じたり、なんとなく嫌だってね、感じる事が出来た。今はその能力を無くしてしまっって鬼の犠牲になる人が増えている、それに合わせて鬼の力が大きくなってきたんだけどな」

「どうなんだろう、教えた方がいいのかな」

男はしばらくの間、考え、答えた。

「教えていいよ。鬼が啓子さんのことを知れば、必ず殺しに来るだろう、自分の身を守るすべは持っているほうがいい」

「うん、それじゃ、啓子さんが望めば教えるようにするよ」

男はうなずくと、そっと幸の頭を撫でる。

「いろんな縁が出来て、幸も大変だな」

「でも楽しいよ。ただ、お父さん」

「ん・・・」

「幸はお父さんと二人っきりでもいいんだ」

そっと幸は男を抱きしめ呟く。

「異界にふたりっきりで生活するのもありかなと思う。ね、お父さん、今夜はこのまま一緒に寝ようよ」

男はそっと笑みを浮かべた。

「それはとても嬉しいな、ただ、父さんはさ、この頃、ひとつ、欲が出来たんだ」

「欲って」

幸がそっと男の顔を見つめる。

「幸はとっても良い娘だ、真面目で気立てが良くて、父さんのことも大切に思ってくれる。幸がとっても良い娘だってことをさ、幸を知る人にもわかって欲しいって欲だ。理恵子さん、幸に憧れているだろう、まだ、少し心が不安定だ、だから、横に居てあげなさい」

幸は両腕を男の首に回すと、顔を近づけ、軽く男の耳を噛む。

「お父さんはずるいなあ、でも、本当に幸のことを思ってそう言ってくれるから、やだって言えないよ」

「幸」

「ん・・・」

「ありがとうな、父さんのこと、思ってくれて」

「幸の方こそ、ありがとうございます」

男は幸の背中に左手をやると、小さく吐息を漏らす。

「幸が居てくれること、それはとっても父さんを幸せにしてくれる。幸の歩く音、お皿を置いたその音、どんな小さな音でさえ、ああ、幸がここに居るんだと気づかせてくれる、父さんはとても幸せになる。ありがとう」

幸が静かに静かに泣く。

「もう少しだけ、お父さん、このままで居させてください」

幸がぼおとした表情で歩く、男の部屋から出、暗い廊下、元の部屋へ戻る途中、啓子が暗がりの中、台所でテーブルに着き、水を飲んでいた。



「幸さん、いいですか」

啓子の声に、ぼおとした表情のまま、幸が振り向いた。

「ああ」

幸は頷くと、啓子の隣りに座った。

「啓子さん、ごめん、ちょっと待っててくれ」

幸はテーブルの上に上半身を投げ出すと、うふふっと笑い出す。

「どうしたんですか、怖いですよ」

「お父さん、優しくってさ、ああ、もお、とっても可愛いんだ」

幸は上半身を起こすと、啓子の飲みかけのコップに入った水を飲む。

「少し、落ち着いた。で、啓子さん、どうしたんだ」

「お願いしたいことがあります」

啓子が幸に向き直った。

「なんだ、改まってどうしたんだ。幸のお父さんはあげないぞ」

「いません」

「即答されてしまった」

幸は楽しそうに笑うと、啓子をじっと見つめた。

「幸さん」

「ん」

「私、鬼と闘えるようになりたいんです」

幸は目をそらすと、背もたれにもたれ、天井を眺めた。

「啓子さんは鬼の鱗粉を見ることができるようになった。だったら、それを避けて生きて行けば大丈夫だ、鬼に出くわす可能性は他の奴より随分少ない」

「でも、あの青い燐光を見かける機会が随分増えています」

「礼子ちゃんを守りたいのか」

幸はふと視線を啓子に向け、呟いた。

「は、はい」

「お姉ちゃんは妹離れが出来ていないな、まっ、幸も人のこと言えないけどな」

「母が離婚したのが私が中学生、礼子は小学生になったばかりでした。母は朝から晩まで仕事、だから、私が礼子をしっかり育てなきゃって、そんなふう生きてきました」

「礼子ちゃんは啓子さんに感謝しつつも、ちょっと煩わしく思っている、礼子ちゃんも、もう高校生だからな、彼女、しっかりしているぜ」

「ちょっと・・・、距離を置かれてしまっています」

仕方無さそうに啓子が笑った。

幸も困ったように笑みを浮かべ、啓子に向き直った。

「お父さんから、啓子さんに武術を教えるもいいって承諾は貰っている、ただし」

「はい」

「幸の武術はお父さんからいただいたもの、お父さんや幸の意に沿わない使い方を啓子さんがした場合は、啓子さんを殺しに行く。まっ、端的に言えば、己が楽しむためや快楽追求のために武術を使うなってことだ、約束出来るか」

「はい、約束します」

啓子は幸をしっかりと見つめ答えた。

「今から教える、いいか」

「はい、お願いします」

「外に出よう」

幸は啓子を促すと、畑の道を歩き、梅林へと入った。月明かりに、辺りが微かに見える。立ち止まり、幸が啓子に話しかけた。

「この武術の名はなみゆい。それは動きの基本、波の動きと結ぶという所作から来ている。そして、首から下、膝から上、胴体の変化が腕や脚の動きを促す、それだけは頭にたたき込んでおいてくれ」

緊張した面持ちで啓子が頷いた。

「教えるのは基礎と方向性、後は自分で再発見して理解を進めること」

幸は啓子の前に立つと、右腕を啓子に向けた。なんの戸惑いもなく、啓子の右腕が幸に向かう。

「勝手に手が動きます」

「いま、幸が啓子さんの体を操作している。人の理想的な動き、人に対しだけでなく、様々な形態の魔物に対応したなみゆいという動き方を自分自身の体を通して経験し、しっかり記憶しなさい」

幸はにいっと笑った。

「悲鳴上げるなよ」

二人の姿が消えた。いや、正確には目で追える速度を越えてしまった。風鳴りが響き、梅の枝が縦横無尽に揺れる。

朝、男が目を覚まし、台所へ入ると、幸がお味噌汁を作っていた。

「お父さん、おはようございます」

「おはよう、お味噌汁か、良い匂いだな」

「玉葱とワカメのお味噌汁。お味噌汁の基本です」

幸はにっと笑うと、小皿にお味噌汁を少し入れ男に手渡した。

「いつもと違うな」

「うん、啓子さんのお母さんに教えてもらった。最初に野菜を蒸す。これが大事なんだって、形がくずれなくて見た目もいいなあ」

男は人の気配が減っていることに気づいた。

「ん、佳奈姉さんと母さんは店の準備があるからって帰ったし、啓子さんのお母さんはお仕事、早出なんだって」

「高校生二人はまだ寝ているのか」

「明け方までお喋りしていたみたい」

「いろいろあったろうからな」

男は冷蔵庫からお茶をとりだし、一口飲むと幸に言った。

「なにか手伝おう」

「ね、お父さん、恵さんを迎えに行って」

「恵さんを・・・」

男は呟き、振り返ると、向こう、梅林の方向を眺めた。

「迷子か」

「恵さん、気楽に歩いているけど、折角だから、みんなで朝ごはんを食べようと思って」

「啓子さんは」

幸がいたずらっぽく笑った。

「夕方までは死んだように眠っていると思う」

「早速、練習したのか。啓子さんはひたむきなところがある、良くも悪くもね。人はそれぞれ、個性があって面白いな。それじゃ、迎えに行ってくるよ」

「お父さん、浮気しちゃだめだよ」

幸が男に声をかける。

「幸は父さんが浮気をしたら泣くかな」

「もう、わんわん泣くよ」

「幸を泣かせるわけにはいかないから浮気はしないよ、って、父さんなんか誰も相手しないよ」

男は笑うと、恵を迎えに梅林へと向かった。

男は梅林の中ほどに恵を見つけ声をかけた。

「おーい、恵さん」

振り返り、恵は男に気づくとあたふた男の元に駆け寄って来た。

「先生、助かりました。これから、どうやって暮らそうか途方に暮れましたよ」

「そのわりにはあまり深刻そうじゃないですね」

男は少し笑った。

「不思議です、ここにいると落ち着くって言うか、ちょっと幸せな気分になります」

「害意、敵意というのがないからね、ここは。さあ、戻りましょう」

男は恵を促すと帰路へとついた。道すがら、恵に尋ねる。

「恵さんは今も啓子さんと一緒に住んでいるんだね」

「啓子先輩に居候です。でも、そろそろ、社会復帰しなきゃって考えています、求人情報なんか読んでますけど、ただ、うーん」

「就職難ってやつかな」

「高望みしなければいろいろありますよ。ただ、先輩と同じで、変なところにまた入り込みはしないか、それが怖いです」

「二人ともそういう運命なのかな」

「わっ、ひどいなあ」

恵が気楽そうに笑う、

「実家には帰らないのかな」

「無理ですよ、いまは香港で働いていることになってます」

「御両親、心配しているんじゃないかな」

「電話は毎日のようにしてますから。ただ、姿が変わってしまったから」

「体を造る時、退行した精神状態に近づける方が良かったからって、十代後半の体にしたんだってな」

「私を見たら、母なんかびっくりしますよ、娘が子供に戻ってしまった。また、育てるのに金がかかるってね」

「幸に言えば、もう少し齢を取らせることが出来るんじゃないかな。帰ったら、話してみようか」

「だめです」

恵が思いっきり顔を横に振った。

「二十代前半、といってもギリギリですけど、そんな女が十代後半の肌を手にいれたんです。吸い付くような肌、はじける水、なんとしても維持しなければっ」

「女性は大変ですね」

男が気楽そうに笑った。

木立の中から、幸乃が現れ、軽く手を振った。

「幸乃さん、どうしたのかな」

「おまえさま、ちょっと」

幸乃が男に耳打ちをした。

「恵さん、急用が出来ました。幸乃さんに送ってもらってください、一足先に帰ります」

男の姿が消えた。

「先生、どうされたんですか」

「世界平和維持活動ってことですわ」

幸乃が面白そうに笑みを浮かべた。

「幸、泣いているのか」

テーブルにつき、打ちひしがれていた幸が驚いて顔を上げた。

「お、お父さん、お帰りなさい」

男は何も言わず、ハンカチでそっと幸の目許を拭った。

男が笑みを浮かべ、囁く。

「幸乃さんがね、幸が泣いているって教えてくれた」

男は幸の隣に座ると、柔らかな笑みを浮かべる。

「父さんに幸が泣いた理由を教えてくれないか、気づかずに幸を傷つけていたなら、父さん、あらためなきゃならない」

「お父さんは悪くない、幸の心が汚いから・・・」

唇を噛み締め、幸が俯く。

「幸はとっても心が綺麗な女の子だよ」

男の言葉に幸が頭を振った。

「恵さんにお父さんをとられるんじゃないかって、なんだか、そう思うと、勝手に涙が出て来て」

「どうして、恵さんが」

「だって、恵さん、お父さんのこと、好きなもの」

「なるほど、送り出してみたものの、不安が大きくなってしまったということか」

男はそっと左手で幸の頬に触れると、じっと幸の眼を見つめた。

「父さんは幸が大好きです、幸だけが好きなのです。どうか、信じてください」

幸が涙を流したまま、笑みを浮かべた。

「幸と幸乃さんだよ」



男は笑みを浮かべると、そっと手を離した。

「そうだな、幸乃さんを忘れると、後で叱られてしまうな」

ふと、男が振り返った。

「二人、畑のところまで戻って来たな。朝御飯、高校生を起こしてこよう。いや、父さんが行くのはまずいか。幸、起こしてきてくれるか」

「うん、起こしてくる」

幸は安心したように笑った。

五人で朝食をとった後、男は部屋に戻り、友人の会計事務所から預かった資料を整理する。昼過ぎには終えて、書類を運ばねばならない。

幸は三人を連れて、畑作業をしていた。

男は部屋で書類を片付けながら、ふと自分も普通に朝御飯を食べるようになったんだと気づいた、以前までの珈琲が朝御飯だった頃に比べて、体調も良い。これも、幸のおかげかと思う。男は部屋を出ると、台所へ向かう。珈琲をいれよう、少しくらいならいいか。

ふっと男は啓子の寝ている部屋の前で屈んだ。

襖を蹴破り、男の頭の上を啓子の蹴り足が空を斬っていた。

「元気だねえ」

男が呟くと同時に、目を瞑ったままの啓子が襖を破り男を襲う。瞬間、男は啓子の隣に入り込むと、左手で啓子の顎に触れた。すとんと男が下に落ちる、同時に啓子の体が跳ね上がり頭から落ちる。

男は左腕で啓子の頭を抱え、床に啓子が激突するのを制した。

「お父さん」

駆けつけた幸が、どうしたらいいのか分からず、突っ立ったまま、呆然とした表情で呟いた。

「どうして・・・」

「たいしたことじゃないよ。啓子さんの中には、父さんへのさ、恐怖心が残っている。それが発動したんだろう、意識を取り戻せばいつもの啓子さんに戻るさ」

寝息をたてた啓子を幸が両手で抱きかかえる、そして、元の布団に寝かせつけた。

「ごめんなさい、幸がしっかり見ていれば」

「ん・・・、いや、人の心の奥底はなかなか難しいものだ、それだけのことだよ。襖紙、同じのが残っていたらう、他の人に見つかる前に張り替えておくかな」

男は襖紙を取り出してくる、慌てて、幸は糊や道具を揃えて持ってきた。

幸が器用に敗れた襖紙をはがして行く、男が糊を刷毛で塗る。

「幸、懐かしいな」

幸はにっと笑うとうなずいた。

「襖に硝子窓、棚まで随分壊してしまいました」

「こっちの端、持ってくれ」

「うん、これくらいで良いかな」

「ちょうど良いよ」

「父さんの記憶には壊されたことより、こうして一緒に直している時の方が印象深いんだ、親子してるなあってね」

男は襖紙を張りながら、少し笑う。

「ありがとう、幸、一緒に居てくれて」

「こちらこそ、お父さん」

新しく貼り終える、男は満足そうに襖紙を眺めた。

「こんな単純なことなのに嬉しいなんて不思議だな」

「ね、お父さん、今度は何を漬そう」

男はコツンと指先で幸の額を叩く。

「当分は勘弁してください」

男がくすぐったそうに笑った。

幸はそのまま、部屋に入ると、啓子を寝かせつけ、その手を両手で握った。

男は畑に出、幸がしばらく部屋に戻って居ることを三人に伝え、その後、友人の会計事務所へと向かう。

「先生、かっこいいなあ」

恵が呟いた。

「恵さんは中年が好きなの」

驚いたように礼子が尋ねた。

「いい人だとは思うけど、かっこいいって云うのはなあ」

利恵子も口を揃えて言った。

「別に中年が好きってわけじゃないよ。ただ・・・、幸さんには大恩があるから先生に手を出さないけど、あ、でも、幸さんみたいに、先生が双子だったら、絶対、一人欲しいなあ」

礼子と利恵子は呆れたように笑った。

幸は啓子の手を両手でしっかり握りながら、思い出せる過去を脳裏に甦らせていた。牢獄の日々、餌でしかない存在。それが今では友人の手をしっかりと握っている。あかねちゃんを始め、佳奈姉さんや瞳さん、色んな顔が浮かんでくる。なんて幸せなのだろう、そしてとても大切な人がいる、とても大切に思ってくれる人がいる、とても幸せだ。そして思う。この手の人も幸せであれ、幸せは分けるものではない、伝わって広がって行くものだ。

「幸さん」

啓子が呟いた。

「ん、起きたか」

「ずっと、手を握ってくれていたんですか」

「いや、さっきまで畑に居た」

啓子が苦笑した。

「そういう時は、心配でずっと手を握っていたって言ってくれなきゃ」

「あいにく、正直者なんだ、悪いな」

幸はにっと笑うと啓子の背中を支え、上半身を起こした。

「体の具合はどうだ」

「大丈夫です、なんだか、体も軽いしいくらでも動けそうですよ」

幸は笑みを浮かべ言った。

「たとえ一晩でも理想的な体の動かし方を啓子さんは経験した、そして、どう練習して行けばいいかも教えたはず。あとは精進してくれ。具体的に教えることはもうない」

啓子がそっと頷く。

「ありがとうございます、あとは自分で見つけて行きます」

幸はほっと吐息を漏らすと、啓子に囁いた。

「試しだ、この状態から幸のこめかみを蹴ってみろ」

「はい」

啓子が呟いた。

両手を布団の上に添える。途端、啓子の体が微かに浮き、独楽のように啓子の右脚が幸のこめかみをなぎ払った。激しい勢いで幸の頭が首から千切れ壁にぶつかる、首から、血が吹き出した。

「う、うわあっ」

幸の血で真っ赤になった啓子が大声で。

一瞬の後、幸は何事もなかったように座っており、血の吹き出した様子もなかった。

「幻術だよ。ただ、普通の人間ならああなる。幸はね、啓子さん自身が、自分を、そして守りたいと思う人を守るために教えた。それを良く覚えておけよ」

幸は笑みを浮かべると部屋を出た。

そろそろ、晩ごはんのこと、考えよう。

夕刻、満員電車というほどでもない、男は友人の会計事務所からの帰り、電車の吊り革、左手で持ち、立っていた。競って椅子に座ることもない、立つことができるなら、立つべきだと考えて

いるだけだ。

ただ、男は、高校生だろうか、一人の女の子が自分に近づこうとするのに気が付いていた。

そして、大学生だろうか、二人の男。

男は小さく吐息を漏らす。

一瞬、女の子が男の背中に、自分の背中を当てた。

女の子の喉が大声を出そうと緊張する、男は素早く女の子の喉に手を触れると、耳元に囁いた。

「君の声は出ない」

ゆっくりと電車が速度を落とし停車する、ドアが開いた。

男は何事もなかったように列車を出た。

「お父さぁん」

「あれ、幸」

男はホームで待っている幸を見つけた。男は幸に近づくと、ほっとしたように笑みを浮かべた。

男の後ろで、ドアが閉まり、列車が発車していく。

「お迎えに来たよ」

「ありがとう、でも、幸、ちゃんと入場券買って入ったか」

男が笑う。幸はひらひらと切符を揺らすと笑った。

「改札の手前で待っているつもりだったんだけど」

幸は自然と右手を男の左手に絡める。

「幸を育てるためにしっかりと働いて来ましたか」

「もう、へとへとになるくらい働いた」

「今晚は大鍋一杯のナポリタンと、温野菜のサラダです。しっかり食べて、明日も労働に勤しんでくださいませ」

にひひといたずらげに幸が笑った。

「お父さん、帰りはナポリタン用に振りかけるチーズを買って帰ってください、幸は一つ用事を済ましてから帰るよ」

男が振り返る、呆然と突っ立ったままの女の子が一人、ホームに佇んでいた。

「そうだな、父さん、女性は苦手だから頼むかな。ごめんね」

「ああ、しょうがない、お父さんの頼みなら断れないよ。感謝していますか、お父さん」

「とっても感謝しています。幸、ありがとう」

幸は少し照れ笑いをすると、腕をほどく。

「そうだ、いつもの茶店で待ってくれていると、幸は途中からでもお父さんと一緒に帰ることができますので喜びます、でも、珈琲はあまり体に良くないのでお勧めしません」

「わかった、オレンジジュースを飲みながら、まだかなって待っているよ」

男は手を振ると、ホーム下へと階段を降りて行った。

お父さん、可愛いなあ、幸は小さく呟くと、気持ちを切り替えるように頭を振り、背後へと振り返った。

女の子が一人、途方に暮れ、小さくうずくまっていた。

幸は女の子の前に立つと、少し屈み、指先で女の子の顎をくっと上げた。

「基本、あたしは女性には優しいんだ、男嫌いの反動かな。立ちな、そこのベンチに座ろう」

幸は女の子を促すと、並んで、反対車線のベンチに座った。

幸は片手でほおづえをつくると、女の子の顔をのぞき込む。動揺したように、女の子はぎゅっと目を瞑った。

「倉澤早紀。高校三年生、塾についていけず、親に黙って塾を辞めてしまうが、それを言い出せず、街中を彷徨う。塾が終わる時間まで。そんなことを続ける間に、男二人に弱みを握られ、美人局の片棒をかつがされた」

早紀は驚いて幸を見つめた。

「あんたの頭の中、言葉にしかただ、たいしたことじゃない。あんたにとって運が良いのか、悪いのか。その第一号があたしの父さんなわけだ。殺されずにすんでよかったな。声も大事だろうけれど、死ぬよりかました」

幸はにいっと引き込むように笑うと、ゆっくり顔を上げた。

「ほら、もうすぐ列車が来るぜ。男二人、一つ先の駅から引き返して来たようだ」

びくんと早紀の体が震える。浮足だった早紀の手を、幸は指を絡めてしっかりと握る。

「やさは知られてんだ、逃げて意味はない。さて、あたしは父さんに甘えることができて機嫌がすこぶる良い。これも何かの縁だ、助けてやるよ」

列車到着のアナウンス、程なくして各駅の列車が到着し、ドアが開く。たくさんの人たちが降りて来る中、先程の男二人が飛び出すと、目の前に早紀を見つけ睨みつけた。

「逃げずに待っていたとは殊勝だな」

体育会系を体で表現した厳つい男達だった。

「足がすくんで動けなかったんじゃないか。うん、なんだ、隣の女は」

最初の男よりも頭一つ大柄な男、腰を曲げて幸をのぞき込んだ。



「うひょお、凄い美人だ」

幸はふっと顔を上げると、笑顔を浮かべた。

「なに改まって言ってんだよ、孝。幼なじみ相手にさ」

「えっ・・・」

幸が引き込むように笑みを浮かべた。

「いつも三人一緒だったの、忘れたの」

幸はもう一人の男を見上げると、柔らかく笑った。

「健史も相変わらず、上に横に成長しているなあ」

幸が愉快地笑った。

「しばらく見ないうちにお前も美人になったもんだなあ」

健史がなんの戸惑いもなく、言葉を返した。

「あたしが美人なのは昔からさ」

「そりゃそうだ」

孝がからかうように笑った。

「で、今日はどうしたんだ」

孝がふと真顔になって幸に尋ねた。

「あたし、結婚して上海に行く。旦那の転勤でね」

「お、おい。そんなの初耳だぞ」

健史が面食らったように大声を出した。

「一キロ先にいるんじゃないし、大声出さなくても聞こえるよ」

幸はふと寂しそうに笑みを浮かべ呟いた。

「かえってさ、言いづらいもんなんだよ。だからさ、お詫びに、教えて上げるよ」

「おい、俺達はお前が幸せになるんなら」

「ね、健史。あんた、孝を愛しているよね」

「お、お前。何言ってんだ」

「そして、孝は健史を愛している」

「え・・・」

健史は驚いたように孝を見つめた。

「お互い、相手を愛しているけど、うっかり告白なんかしたら、気色悪るがられるんじゃないか。そう思って言い出せなかったんでしょ。ごめん、それを言うと、あたしだけ、仲間外れになりそうで、わかってたけど、ずっと黙ってたんだ、本当にごめん」

「健史・・・」

孝は思わず呟いた。

「お前、本当に俺のこと」

「孝こそ、そうなのか」

健史が孝の目を見つめて呟いた。

幸が声を潜め囁く。

「人を愛するということに壁なんかないよ。ね、二人とも正直になろう。決して男同士が愛し合うことは悪いことじゃない。ただ、少数派だから、迫害されること、理解してもらえないこと、

たくさんあるかもしれない、でも、真実の愛は何よりも強い、ね、健史、孝、そうでしょう」

「そうだ、俺達なら」

健史が孝の目をじっと見つめ囁く。

「俺、健史を大切にする」

「お、俺だって、孝を大事にするさ」

「さあ、遠慮はいらない、二人、しっかり抱き合いなよ」

幸が駄目押しにと二人に語りかける。二人がしっかりと抱きしめ合う。ここが駅のホームであることも忘れ男同士、強く、強く、抱きしめ合う、そして、自然と唇を重ねた。

幸は早紀を促すと、何事もなかったようにベンチを後にした。抱き合う男二人を残して。

「いや、実際、あんながたいの男同士は気味悪いだらう。暗示をかけたのはあたしだけどさ」

改札を出、幸は早紀に笑いかけた。

「もう、あんたのことなんか、頭がないぜ。今、二人で住む新居の壁紙をどんな模様にするか、そんなことで夢中になっているよ」

早紀はこの数分のことが充分理解できずにいた。ただ、あの二人の男から解放してもらったことだけは、感情が理解していた。

早紀はありがとうございますと言おうとして、自分の声が出ないことを思い出した。呻くような音が喉から漏れる。

「それがあったな」

幸は答えると、微かに笑みを浮かべた。

「十一時まで、家には帰れないんだらう。うちに来な、お父さんに呪を解いてくれるよう頼んでやるよ」

「お嬢さん、少しお時間、よろしいでしょうか」

早紀の手を握った幸の目の前に男がやって来た。二十台後半、いや、三十台始めか。皺のない背広を着、笑顔を浮かべている、メガネをかけ、それでいてかなりの美形だ。

「どなたさま」

幸は愛くるしい表情で答える。

「ぜひ、あなたをスカウトさせていただきたいと思ひまして」

「うひゃ、早紀どうしよう。モデル、あたしにできるかなあ」

幸はうれしそうに早紀に微笑んだ。

幸は男に振り返るとおずおずと話しかけた。

「あ、あの。私、お父さんに相談しないとお受けするのは」

「いいえ、あなたのような逸材はまたとありません、男二人の心を自在に操り、記憶まで手を加えてしまう、第一種精神作用者。心を読む感應者はいくらかおりますが、相手の心まで操れる者はまたとありません」

「おっしゃっていること、わかんないです。おじさまがホームの柱の陰でスカウター付けて能力測定していたことも全然知らないですし、駅や百貨店、人どおりの多いところでおじさまのような人達が超能力者をスカウトしてることも知りませんよお」

「それだけ御存じであれば充分です」

男が片手を上げる。通りすがりの会社員、学生、子供連れの主婦、二十人ほどが三人を囲むように円を描き、背中を向けた。

微妙な角度で重なり、中を外から覗けないようにしている。

「君のお父さん、という人にもぜひ会ってみたいものだ」

「だめですよ。お父さん、とっても怖い人ですよ。でも、あたしにはとっても優しいんです、えへへ」

幸が幸せそうに笑う。

「それじゃ、帰ります。お父さんと待ち合わせているんです。早く帰らないと、お父さん、心配しちゃいます」

「帰れると思っていらしゃるのですか」

呆れたように言う男の言葉に、そっと幸は男を見上げ微笑んだ。

「たっぴがあれば自分が優位であると思い込む、お父さん以外の男ってのはガキだなあ」

幸の表情と言葉の差異に男は一瞬戸惑った。

「田中輝樹君、自分は訓練されているから、読心能力者にも心を読まれないとでも思っているのかい」

一瞬、男の表情に恐怖が現れた。

「俺の心が見えるのか」

幸はふふっと小さく笑うと、それには答えず、男のネクタイをぎゅっと力任せに締め上げた。男は咳き込んだまま、慌てて一歩引き下がり、ネクタイを緩める。

「まっとうな仕事を選んだ方がいいぜ。確かに給料一月手取り八十万円、スカウトに成功した場合は相手の能力につきボーナスが付く。読心能力者で百十万円。心を操れるほどの奴なら、三百万円か。笑いが止まらねえな」

「お、俺は」

「あんたの会社はスカウトと言えは聞こえがいいが、やっていることは人身売買だ。超能力者をスパイや傭兵に仕立ててのさ」

男が叫んだ。

「捕獲せよ」

その言葉に、壁のように囲んでいた人達が一斉に振り返る。

「ほお、久しぶりに見たな。心のない、心臓を提供してしまった人形達か」

「一体何者だ。何処まで知っているんだ」

男は怖じけたように後ずさりをする。

「輝樹君の知っていること、その百倍は知っているよ、裏の裏までな」

幸は倉澤の手を握ったまま、一步、進み出る。

「無駄だろうが、一応忠告しておいてやる。さっさとこの仕事辞めねえと、あんたも人形になってしまうぜ」

言い終えた瞬間、幸と倉澤の姿が消えた。

「第一種精神作用者、テレポートまで。なんてこった・・・」

尻餅をついたまま、呟いた

喫茶店のドアを開ける、からんころんと音が鳴り、幸は入り口で男を探した、すぐに見つけると、倉澤の手を握ったまま、男の前の椅子に座った。

そして、隣りに倉澤を座らせる。

「幸、何を飲む、倉澤さんもどうぞ」

男はすっとメニューを倉澤に差し出した。

メニューを受け取った後、自分の名前を知っていることに驚いて倉澤が男を見つめた。

「お父さん、倉澤さん、とっても可愛そうなんだよ。誰か、幸の知らない人に声を出せなくされたんだから」

男は困ったように笑みを浮かべた。

「父さんはどうしたら良いのかな」

「きっと、お父さんなら、倉澤さんの声を取り戻せると思うんだ、どうかな、お父さん」

「うーん、倉澤さんに父さん、謝ったほうが良いのかな」

にとっ笑みを浮かべ、幸が口を閉ざす。

「幸にはかなわないな」

男は笑みを浮かべると、すっと左手を倉澤の喉元にやり、埃を払うように指先を揺らめかせた。

「呪は解いたよ。倉澤さん、あー、って言ってごらん」

倉澤が声を出そうとする、息を吐き出す音が「あ」という音に変わった。

「もう、普通に喋れるよ」

「あ、ありがとうございます」

倉澤が男に言った。

「お父さんは頼りになるなあ」

「どうぞ、頼りにしてください。頑張ります」

男は少し笑うと倉澤を見つめた。

「ごめんね、怖い目に会わせてしまった」

「いいえ、わ、私こそ・・・」

ウエイトレスがお冷やを持ってやってきた。

「ホット珈琲をお願いします。倉澤さんは」

「え、あ、あの、えっと、同じで」

ウエイトレスが注文を復唱し戻った後、男は幸を軽くにらむ。

「ここの珈琲美味しいんだけどね。父さん、オレンジジュースを飲みましたけど」

「お父さんの、その素直にオレンジジュースを飲むのが、とっても可愛いなあ。幸の、半分あげるよ」

「ありがと」

男は仕方なさそうに笑った。

ふと思い出したように幸が言った。

「さっき、スカウトされた」

「え、女優とかモデルとかのスカウトか。そ、そういうのは、きっと悪い奴だから、絶対に」

「ううん、超能力とか言ってた」

「まっ、それならって・・・、ああ、そういえば反対車線のホームにいたな。幸、いじめたな」

「ちょっとね」

幸はちょっと舌を出して笑う、男がひとつ吐息を漏らす。

そして、男は窓から、外に行く人達を眺めた。

「科学が変な方向へと進んでいる、魔術と融合しようとしているようだな。そして、ほとんどの魔術は巨大な力を借りて発動する。借りれば返さなきゃならない、それに見合うもの。未来だ」

「いつか、この文明も廃墟になるのかな」

「多くの歴史がそれを教えている。未来を他者に差しだしてしまえば、自分の未来はなくなる、結果は廃墟だ」

ふと見ると、倉沢が泣いていた。

「どうしたの」

幸が倉沢の顔を覗き込んだ。

「変です、なんだか、急に悲しくなって」

男は小さく呟いた。

「幸、この娘は」

幸はそっと倉沢の頭をなでる。

「お父さんの感情に感化したんだ。お父さんと同じ質を持っているよ。こういうのも縁なのかな」

男は背もたれに凭れると呟いた。



「普通に暮らせるなら、普通に暮らすのが一番良い」

「大切なのは、自分の頭で考えて生きるってこと、お父さんの普通はそういう意味だけど、ほとんどの人の普通は流されて生きることだよ、それじゃ生きていないのとたいして変わらない」

「幸、頭を出しなさい」

素直に、幸が頭を差しだした、男が幸の頭をなでる。

「よくできました」

男はくすぐったそうに笑みを浮かべた。

珈琲が運ばれてくる。

「倉澤さん、砂糖はいくつ」

気軽に幸が倉澤に尋ねた。

「あの、二つで。・・・ご、ごめんなさい」

幸が面白そうに笑った。

「謝る理由はないよ、幸の前に砂糖があるんだからさ」

「お父さん、クリーム入れるよ」

「入れていいよ。なんだかね、インスタントに慣れてから、ブラックってこだわりがなくなってしまった」

「お父さん、それは良いことだよ。ブラックは胃腸に負担がかかるもの、なんたって、お父さんの肩には人類の未来がかかっているのです。大事にしてください」

「父さんの肩にか」

「そうだよ。お父さん、いなくなったら幸は狂って、人類大量虐殺してしまうかもしれないからさ」

「うーん、頑張って長生きします」

男は困ったように笑った。

「幸さん、お帰りなさい」

礼子がぱたぱたと玄関にて三人を迎えた。

「ただいま」

「そうだ、幸さん。お姉ちゃん、怒ってますよお」

礼子が悪戯げに笑みを浮かべた。男はすっと玄関を上がり、部屋へと向かう。

「刺激、強すぎたかなあ、謝ってこよう。早紀ちゃん、上がって。みんなで晩ご飯食べよう」

「は、はい」

二人が玄関で靴を脱ぎ、中に上がった時、ふと、礼子が呟いた。

「あれ、おじさんは・・・」

幸が小さく呟いた

「お父さんの行動を把握できるのは幸だけだなあ」

幸はにっと笑った。

「啓子さん、怒ってるのかなあ」

あかりを点けず、向こうを向いたままの啓子にそっと幸が声をかけた。

一呼吸おいて、啓子が答えた。

「全然、怒っていませんから。ですから、ほっといてください」

「それ、怒ってるよ」

幸が啓子の服の裾をくっと引っ張る。

「ごめんなさい、言い訳はしない、本当に驚かしてごめんなさい」

啓子が振り返る。

「驚いた、幸さんがごめんなさいって言うの初めて聞いた」

幸はぎゅっと啓子の手を握り締め、啓子の耳元で囁く。

「ごめんなさい、啓子さん。許してください」

ふっと啓子の肩の力が抜けた。

「意地張ってた、ごめん、幸さん」

幸はほっと吐息を漏らすと、気持ちを入れ替えるように笑みを浮かべた。

「ナポリタン、食べよう、美味しいよ」

テーブル二つ繋いで、それぞれのテーブルにナポリタンの大皿を置く。幸が嬉しそうに人数分の皿を並べていく。

反対側から、恵がお箸を並べて行く。

「やっぱ、日本人はナポリタンもお箸だよな」

幸が笑った。

「たいていのものはお箸で事足りますよ」

ふっと中程まで来て、恵が幸をじっと見つめた。

「恵さん、どうしたの」

「幸さん、私を避けていますね」

「え、そんなことはないよ」

「微妙に声が緊張していますよ」

幸が困ったように笑みを浮かべた。

「ごめん、嘘をつくのは得意じゃないんだ」

微かに吐息を漏らす。

恵はじっと幸を見つめたまま言った。

「私は幸さんに救っていただきました。体を引き剥がされていく恐怖、全くの闇、なにものにも触れずこともできず、音もなく、時間すらも意味のない全くの孤独から幸さんは私を救いだしていただきました。大恩ある幸さんの好まないこと、私はしません」

「ありがと、なんていうのかな。ほっとした」

幸が本当にほっとして笑った。恵も安心したように笑う。

「でも、もしも、先生が幸さんみたいに二人になったら、一人ください」

「それはだめ、どっちも幸のだ」

幸がくすぐったそうに笑った。

## 遥の花 雨夜閑話 三話

---

### 異形 雨夜閑話 三話

#### 三匹の猫

月曜日 18 7月 2011 at 5:55 pm.

### 異形雨夜閑話 3 話

「私、おじさんに罪を被せようと思いました、大声で痴漢って叫ぼうと思いました」  
全員が硬直した、男や幸までも。

全員がテーブルにつき、晩御飯を食べようとした瞬間だった。倉澤は突っ立ったまま、ぼろぼろに涙を流していた。

「えっと・・・」

啓子が呟いた。

「ここは先生が倉澤さんを泣かしたということで収めればいいのではないかと」

「そう・・・、だね。お父さん、倉澤さんに謝ろう」

幸も呟く。

「ごめんね、倉澤さん。だから、もう泣かないでくれるかな・・・」

男はどうしたものかと戸惑っていた。取り合えずというのは嫌いだが謝ってこの場が収まるのならそれでいい。

「ごめんなさい、私、おじさんや皆さんにこんなに優しくして貰って、なんだか、とても自分が悪く思えて、ううん、とっても悪い人間だから・・・」

幸は立ち上がると倉澤をぎゅっと抱き締め、そっと彼女を座らせた。

「そのことは許すよ。倉澤さん、男二人に脅されてのことだよ、男はとっても恐い野生動物だからね、仕方ないよ」

男以外のここに居る全員が、あんたは違うでしょという突っ込みをぐっと抑える。

「お父さんも怒ってないし、幸も怒ってないよ」

男は既にナポリタンを食べだしていた。それを見て、啓子も食べ出す、おおよその予想がつく、父親以外の男が如何に邪悪な存在か、幸の演説が始まる、話が終えるころにはすっかりナポリタンも温野菜も冷めてしまうだろう、

「啓子さん、トマト、美味しいですよ」

「今までのトマトって、偽物だったんじゃないかって思うよね」

恵の言葉に啓子が頷いた。

「それ、言えてる。あたしもここのトマトなら食べられるもの」

礼子が嬉しそうに言った。

幸は出先を挫かれて、ううっと唸っていたが、肩を落とし言った。

「倉澤さんも早く食べよ、暖かいうちに」

幸が男の横に戻る、男は幸の頭を撫でた。

「ちょっと成長したね」

「お父さんが一番最初に食べ出したよ」

幸が拗ねたように男を見つめた。

「お腹減ってたからね」

男が少し笑う。

「お腹減っている人達にまだ食べるなど言っている自分を想像してごらん、孤独な独裁者になってしまう、独りぼっちになってしまうぞ」

男はくすぐったそうに笑うと、手を戻し、サラダを食べる。

「幸の育てたトマトは美味しい」

幸は溜息をつく、ナポリタンを食べ出した。

「今日は啓子さんにも叱られたし、お父さんにも叱れたよ」

「つまりは今日だけで幸は随分と成長したわけだ。おめでとう」

「おめでとう、幸さん」

啓子が笑った。

「幸さん、おめでとうございます」

恵まで楽しそうに幸に声をかけた。

「あ、なんだか、嬉しい気分。ああ、幸は単純すぎるよお」

幸が俯いて頭を抱えた。

「おめでとうございまーす」

礼子と理恵子が声を合わせて言った。

「あ、あの、えっと、おめでとうございます」

分からないなりに、倉澤まで幸に声をかけた。

「自分で一人喋るより、いっぱい、声をかけて貰う方が楽しいだろう」

幸はそっと顔をあげると呟いた。

「うん、ありがと・・・」

皆が声を出して楽しそうに笑う。

二時間近く、お喋りをしながらの晩御飯は、幸にとってとても楽しいものだった、それは倉澤も同じで、こんなふうに自分の今までと変わってしまうのが信じられないくらいだった。

男は食べ終わると、食器を洗おうと立ちかけたが、ふと思いつき、幸に声をかけた。

「幸、倉澤さんに数学を教えてあげてくれるかな、それに恵さんにも頼んでくれないか、彼女に英語を教えてくれるように」

幸は恵が高校の英語教師になるつもりだったのを思い出した、もっとも、非合法組織のスカウト

にふらふら付いて行ってしまい、今に至るわけだが。

「それいいな、うん、頼んでみるよ」

男は頷くと、流しへと向かった。

恵はととと幸の横に来ると、興味深そうに幸の顔を覗き込んだ。

「幸さん、何をすれば良いですか」

「倉澤さんに英語、教えてくれないかな、何カ所か勘違いしているところ、直したら一気に理解が進むと思うんだ」

「幸さんの仰せなら、例え火の中、水の中」

「つまり冬は暖い炬燵の中、夏は冷たいプールの中ってことだ」

啓子が笑った。

「穿ってるなあ、啓子お姉ちゃんは」

「えっ・・・、お姉ちゃんって」

啓子が驚いて恵を見つめた。

恵は気にする風もなく、倉澤の隣りに座る。

「早紀お姉ちゃんって呼んでいい」

恵が屈託なく笑みを浮かべる。

「は、はい」

「私のことは恵って呼び捨てにしてください。これから早紀お姉ちゃんに英語を教えてあげます」

「恵ちゃんって、ひょっとして帰国子女なの」

恵は横に首を振ると、じっと倉澤を見つめた。

「ネイティブは自信ありません、でも、受験英語にはかなり自信有ります」

啓子が小声で囁いた。

「幸さん」

「ん・・・」

「恵・・・、ちゃん。のりのりだ・・・」

「凄いよね」

「おっきいお姉ちゃん達、なにか」

「いいえ、何も・・・」

幸と啓子の声が重なった。

男は部屋に戻ると、机に置いた茶封筒を掴んだ、珍しく郵便受けに入っていたものだ。ごみ箱に思ったが、気を取り直して開封する。

白紙の便箋が一枚。

「今頃、本家がどの面下げて、ってな話だが、白澤のおばさんには義理がある」

男は吐息を漏らすと、椅子に座ったまま目を瞑った。

男は子供の頃の、みずち家に囚われていた記憶を蘇らせる、殺されずに抜け出せたのは、白澤妙子の機転と勇気によるものが大きい。

幸と本家に乗り込んだ時、無理にでも連れ帰れば良かったのだろうか。一緒に帰りましょう、恩返しをさせてくださいと言った言葉に偽りは無い。

「お父さん、いい」

襖の向こうから幸が男に声をかけた。

「どうぞ」

幸は男の部屋に入るとにっと笑った。

「恵さん、凄いよ。教えるのが巧くて的確だ」

「そっか、人ってのは本当に面白いな」

「お父さん、一步、引くといろんなものが見えて来るし、現れて来るね」

「幸 おいで、そしてね、父さんに背中向けなさい」

「こうかな」

幸は椅子に腰掛けた男の前に立つと、男に背中を向けた。

男が、左手を摩るように幸の首の後ろから、肩、背中へと触れていく。

「滞ってたのが、綺麗に流れている」

男が手を戻すと同時に幸が振り返る。

「お父さん、ありがとう」

「父さんはちょっと方向を指さしただけ、実行したのは幸だよ。でもさ、ありがとうって言われると、嬉しいな。幸、ありがとうって言ってくれて、ありがとう」

幸は男をぎゅっと抱き締める、ふと、手紙を見つけた。

「お父さん、これは」

「招待状だ。観月の宴。もっとも、ホテルの中なんだから、月を愛でるのは目的じゃない」

幸は男にしな垂れかかったまま、右手で便箋を男から受け取った。

「白澤さんからの御指名かあ、幸は苦手だ、あのおばさん、喧嘩になっちゃう」

「向こうもそう思っているんじゃないか」

男が笑った。

「それに、お父さんを子供扱いするんだもの」

「まっ、年寄りには得てしてさ、そんなものだよ」

「あれ、お父さん、これ、今日だよ。もうすぐ、始まる」

「律義に最初から座っている必要はないさ」

「お父さんは行くつもり、それなら、幸がボディガードについて行くよ」

「それは安心。幸がいてくれれば百人力だ。でも、だめ。ここにいなさい」

「行く、行く、行くよ。幸にはお父さんを護る義務が有るもの」

「そんな義務はないよ」

男は笑みを浮かべると幸を立たせた。

「啓子さんも恵さんも言ってたけど、ここはシェルターみたいなものだ。そして、ここがその機

能を果たすには、鍵である父さんか、畑を作って地に深く縁が出来始めた幸のどちらかがいないといけない、昼間ならともかく、夜、長く二人がここを空けるのは良くないんだ」

「うん、・・・わかった」

幸が素直に頷く。幸の心に皆を護ろうという意識が芽生えたこと、男は少し寂しくもあったが、それ以上に嬉しく思う。

「娘の成長を見守ること、これは父さんにとってとても嬉しいこと。随分と成長したね」

「だって、お父さんを信頼していますから。でも、ピンチだって思ったら、お父さん、必ず、幸を呼ぶこと、一瞬で駆けつけます、抜き身の刀、担いで、いいですね」

「思いっきり叫ぶことにするよ」

男が笑う、幸は安心したように笑みを浮かべると、自分の髪を一本、抜く。

「幸の体はすべてお父さんからいただいたもの、髪の毛、一本、お返しします」

幸が男の右肩、ほんの数センチ、残った腕の後に髪の毛を巻く。

そして、目を瞑り、微かに言葉を呟く。

やがて、うっすらと男の右腕が現れ、実体化した。

「幸の育てたお父さんの右腕です。どうぞ、使ってください」

男は久しぶりに見る右手、その指先を少し動かして見る。まったく違和感がない。

「父さんは、この右手で、お箸を持ったり、ボールペンを持ったりすると思う。いや、ひょっとしたら、敵を殴っているかもしれない。でも、最初の仕事は」

そっと、男は幸の頬を右手で触れた。

「この右手に、幸の優しさ、やわらかさを覚えさせることだな。ありがとう」

男は少し恥ずかしげに笑みを浮かべると、部屋を出た。

幸はしばらくの間、ぼおっと余韻に浸っていたが、はっと気が付くと慌てて叫んだ。

「幸乃さん、幸乃さん」

「はあい」

幸乃が幸の前に現れた。

「お願いします、お父さんの後を追ってください」

「お父様を信頼していますって、聞いた記憶があるけど」

「でもでも。お父さん、ピンチになっても幸を呼ばないよ」

幸乃はいたずらげに笑みを浮かべた。

「幸を危険な目に合わすことはできないってお考えになるでしょうねえ」

「だから、幸乃さん」

幸が涙目になって幸乃に嘆願した。

「泣きなさんな。呼んだら、すぐに来るのですよ」

「はい、行きます」

幸乃は仕方無さそうに笑みを浮かべると、そっと幸の頭を撫でる。

「お父様以外のことでしたら、随分しっかりしましたのに。しょうのない子」

幸乃はそっと笑うと姿を消した。



「幸さーん」

啓子の呼ぶ声が聞こえた。

「ここです、お父さんの部屋、どうぞ」

幸が声をかける、ゆっくりと襖が開き、啓子がのぞき込んだ。

「幸さんに数学を。・・・泣いていたの」

幸の眼がまだ涙に濡れていた。

「お父さんが出掛けてしまって、なんだか寂しい」

微かな笑みを浮かべ呟く。

そして、先程の便箋を啓子に見せた。

「白紙ですけど・・・」

幸はゆっくりと立ち上がり、啓子の目頭を指先で触れる。

「あ・・・、書いてある。観月の宴。日付は今日だ」

「様々な呪術の組織が集まって、鬼への対策を協議するらしいよ。多分、警察や自衛隊からも参加がある、大きな集まりだね」

幸は啓子から便箋を受け取ると、封をし、机の上に置く。

「これで鬼が減れば暮らしやすくなりますね」

「人類と鬼達は表裏一体。ともに存在し続けるのが正常なのさ、でも、今は人の力が弱くなり過ぎて、吊り合わなくなってしまうている。それが問題の根本だ。ただ、お父さんは協力しないだろうなあ」

「先生はどうして」

「希代の術師 無は鬼も嫌いだけど、呪術師も同じように嫌いだからね。さて、二人に数学を教えてくるかな」

部屋を出かけた幸に啓子が声をかけた。

「幸さん、言葉がおとなしくなった」

幸が振り返ってにっと笑った。

「日々学習、ありがと、啓子お姉ちゃん」

男はとある名の通ったホテルの前にいた。入り口の自動ドアで、正装したドアボーイが案内してくれるといったホテルだ、普段着では入りにくいホテルだが、意を決して中に入る。

「千尋ちゃん、こっちよ、こっち」

仕立ての良い着物を着たおばあさんが笑顔で男を手招いていた。

男の通り名を知っているのは幸と佳奈。それに、本家の年寄り連中だけだ。

「名前を呼ぶのは勘弁してください」

男が困り切ったように笑った。

「ごめんなさいね、だって、懐かしかったのだから」

「しょうがないですね」

男は白澤に近寄ると会釈をした。

「白澤さんもお元気そうで何より」

「いいえ、あちらこちら、がたが来ていますわ。早くお迎えがこないかしら。おや、今日はあのこまっしゃくれたわるがきは付いて来てはいないようね」

「ええ、留守番をさせて」

「よお、ばあさん。無駄に元気そうだな」

幸乃が男のお腹から頭だけ出して、白澤に笑いかけた。

一瞬、白澤が笑みを浮かべたまま、硬直した。

「どうだ、びっくりして、その辺、お迎えが来てないかな」

幸乃は蠢くようにして、男のお腹から這い出ると、男と白澤の間に立つ。

「電話一本で、あたしが、お向かえ呼んでやるから、いつでも連絡くれよな」

男は驚いて、幸乃に声をかけた。

「どうしたの」

幸乃は振り返ると男に笑みを浮かべた。

「私はおまえ様の妻です。妻が夫の横にいて何の不思議がありません」

幸乃は男の右腕に自分の左腕をからめると、そっと男を見上げた。

「怒っていますか」

「相当、甘い父親のようで、逆にほっとしていますよ。あれ、腕が」

男は幸乃の左腕の柔らかな感触を感じた。

幸乃が初めて恥ずかしげに笑みを浮かべた。

「右腕だけですが……。妹のおかげです」

茫然としていた白澤は意識を取り戻すと呆れたように笑った。

「相変わらずね、貴方は」

「お褒めいただきありがとうございます」

幸乃は平然と答えると、辺りを見回した。

「ホテル全体が澱んでいますわね。上から澱が滴って来るようね」

「会場は八階、鳳凰の間ですわ。さあ、どうぞ」

男はふとエレベータを見たが、視線をそらすと、職員用階段を見つけ、そちらへ向かう。

幸乃が振り返り、白澤に言った。

「おばあさん、無理せずエレベータをお使いくださいね」

「エレベーターに食われるような、人生の終わり方はまっぴら」

嫌みたらたら白澤が答えた。

鳳凰の間の前では、記帳のための席が設えられ、対応のため、女性が二人、座っていた。

男はふと立ち止まり、幸乃に話しかけた。

「父さんの中に隠れていなさい、鬼も術師もたいした違いはない、部屋の中は障気で満ちているようだ」

幸乃はうなずくと、男の体に溶け込んだ。

「本当にお前の娘は人間ばなれしているねえ」

白澤がほとほと感心したように言った。

「ちょっとした個性というものですよ」

男は笑うと、そのまま、何事もなかったように部屋へと入って行った。

「記帳もせずに扉を開けるお前もなかなかのものです」

ふと、白澤は男の若い頃、まるで刃のような気配を漂わせ人を否定していた頃と今の和やかになった男を思い比べ、これも娘のおかげかと納得した。

少なくとも鬼ではない、しかし人間と言い切るのは躊躇われる、立食パーティーの様を言葉にすると、そんな表現になる。

老若男女、様々な年齢の少しばかり、人間ばなれした異形のものたち、呪術の多くは神だとか、悪魔、魔物の力を借りて発動させる、言わば、人の体は力の流れる通路のようなものだ、しかし流れるのは力だけでなく、呪術者の多くはその力借るモノたちに体も考え方も従属し始めてしまう。ふと足元に気配を感じる、見下ろすと、芋虫のように体を波打たせながら、若い女が通り過ぎて行った。

「旧支配者の流れか・・・」

男は呟くと辺りを見渡した。いくつもの円形のテーブルが並び、そこかしこで談笑が交わされている。この談笑の影で、鬼対策の会議が開かれているのだろう。

美しい女が、笑顔を浮かべ、接待だろう、ワインを注いだグラスを男に差し出した。

「赤ワイン、それとも白ワインがよろしいでしょうか」

男は少し寂しそうに笑みを浮かべると、手でそっと制した。

「アルコールは苦手なのです。体が受け付けられないので」

男はついつと女の持つグラスの載ったプレートを片手で支え、顔を寄せ囁いた。

「派遣会社からいらっしゃったのですね。君の名は田中さん、私の娘と同じくらいの年格好だ、ここは恐くないですか」

引きつったような声で女が呟いた。

「ごめんなさい・・・」

女が笑みを浮かべたまま、涙を流した。

「正直にどうぞ」

「恐くて仕方がありません」

男はプレートを受け取り、テーブルに置いた。

「エレベーターはいけません、喰われてしまいます。階段を思いっきり走りなさい、そして、このホテルから逃げ出さなさい。もしも、引き留められたときは・・・」

「引き留められたときは」

男が呟いた。

「我、無の眷属なり、我に触れるな。そう、叫びなさい」

男はふわっと女の後に廻ると背中に触れた。軽く押す。

「走れ」

男の言葉に女が駆けだした。

「こんなところに普通の人を入れるなんてな、餌にでもして楽しむ気か」

男は呟くと、もう興味をなくしたように辺りを見回す。

見つけた、あかねちゃんだ。

あかねがテーブルについていた、随分と顔色が悪い、疲れ切っているようで顔を上げているだけで精一杯のようだ。

男が駆け寄る、瞬間、二人の間を黒い影が遮った、ふわっと男は高跳びのように、身を翻し反転すると同時に影を蹴り上げる、影に当てる寸前、男は足を止めた。

「女の子、猫か・・・」

三人の女の子が身を守るように腕で顔を守り、うずくまっていた。

男は背を向けると、あかねに向き直った。いつの間にか、白澤があかねの横に座っていた。

「困った子、攻撃の早さと速さは相変わらずね」

白澤が溜息を漏らす。

男はあかねの横に座り、その手首を見つめる。あかねの手首には呪符が幾重にも巻かれていた。

「迷惑をかけないようにと、そうしたのだろうけれど、だめだよ。でも、頑張ったね」

男はそっとあかねの頭をなでる。そして、あかね越しに白澤を見つめた。

「助けてくださったのですか」

「ええ、お前が蹴り飛ばそうとした、私の曾孫三匹がね」

呆れたように、白澤が笑った。

とたたと三人の女の子が駆け寄ってきた、普通の女の子、しかし、瞳だけが、まさしく猫の眼だった。

「せっかく、交渉しようとしたのに」

「そうだよ、予定外だよ」

「おっさん、器用すぎるぞ」

口々に言う、猫女。

「がきが何か、いいえ、お嬢様がたが何やら交渉とか、おっしゃってますが」

「ちょっと、お前をお願いしたいことがあってね」

「こら、おっさん」

「無視するなよ」

「ああ、何様のつもりだ」

白澤がぎろっと猫女を睨み付けた。一瞬に三人とも小さく縮こまってしまう。

「お前の娘ほどではありませんが、どうも、今時の娘は口が悪すぎます」

「テレビの影響もあるのでしょうかね」

男がとぼけたように言う。

「ところで」

白澤は笑みを浮かべ男に言った。

「お前の娘が大層大事にしているこの子を囚われの身から解放しました。そのかわりにとってはなんですが、私の曾孫にそれぞれ一つずつ、お前の術を教えてやってくれませんか」

「本家の術が正当、私のは随分、我流が加わってしまってお教えするほどの価値はありませんよ。なにより、白澤さんなら、当主の義兄も嫌だとは言わないでしょう」

「もちろん、言わないでしょうけどねえ・・・」

白澤は思案げに顔を曇らせたが、意を決したように男を見つめた。

「本家は独自に鬼と闘う体制を整える予定です、連合には入りません。そのためには確実に鬼を仕留める術が必要です」

男が仕方なさそうに笑みを浮かべた。

「白澤さんの本意が、本家を守ること、一点に集中していること、余程、初代は魅力的な男だったのでしょうかね」

「例え、人の身ではない私でもね、丁度、お前と娘の関係のようなものですよ」

「上では、会議中、それぞれの派が警察と自衛隊の特殊部隊に、術と技を提供する方向で決まりつつあるようです、本家なら、指導的立場になれますよ」

「本家の術を流出させるわけにはいきません」

男は視線を戻し、俯き考える。やがて、顔を上げると、白澤に言った。

「一つだけ条件を呑んでください、そうすれば、教えましょう」

ほっとしたように白澤が笑った。

「条件とは」

「こいつら、三人とも避妊手術してありますか。猫も少しなら可愛いけれど、数が増えて、あちらこちらで、糞をされても困りますし、盛りがついて屋根で鳴かれたら眠れません」

「なに言ってんだ、このやろう」

「人権蹂躪だ」

「顔洗って出直せや」

男が愉快そうに笑った。

「避妊手術はしておりませんが、猫又は猫とは体の仕組みも違いますから増えることはありませんわ」

白澤が愉快に言った。

男はあかねを背負い、猫娘三人を引き連れ、階段を駆け下りていく。飛ぶように降りていく。

「なんで、人間があたし等より速いんだよ」

「スピード違反だぞ」

「女を大事にしない男は最低だ」

男は無視して駆け下りていく、一階ロビーに到着すると、速度を緩めないまま、閉まりかけた自動ドア、すり抜けホテルから飛び出した。

ふと、男はホテルから少し離れたところに先ほどの女がうずくまっているのを見つけた。

ふわっと、男の横に幸乃が現れた。

「あの子、ホムンクルスですわ」

幸乃が男に言った。

「人造人間・・・、でも、まったくの人間だ」

「ええ、なんの力も無い普通の人間仕様です」

男は幸乃と一緒に、女に駆け寄ると声をかけた。

「大丈夫ですか」

女は男を見つけると、ほっとしたように笑みを浮かべた。

「先ほどは助けていただきありがとうございます」

「どうしたのです」

困惑したように女が言った。

「私は何処へ行けばいいのでしょうか、何も思い出せない」

幸乃がじっと女を見つめる。

「景品として作られた、食用、愛玩用ですわ。簡単な記憶を設定しただけの」

男が小さく呟いた。

「術師も鬼もたいした違いはないな」

「おまえさま、右手で彼女の額を抑えなさいまし、そして、名前を。でないと、彼女は消えてしまいますわ」

男はそっと女に囁いた。

「生きていたいですか」

女が戸惑いながらもうなずいた。

男は女の額にそっと右手を触れると、小さく囁いた。

「私が君に名前を付けます」

男が言葉にならない音を呟いた。一瞬、女が吹っ飛びかけたが、猫娘三人、慌てて、後から女を支えた。

男がそのまま座り込んでしまった。

「幸乃、どうしようか。幸はびっくりするだろうな」

「あかねちゃんはともかく、四人も女性が増えてしまいましたわね」

幸乃が気楽そうに言った。

「まっ・・・、この方はお父さんが名前をつけたわけですから、姉妹として歓迎します、事情は幸乃さんに教えていただきました。でも、この猫娘三人は白澤九尾猫を思い出してしまって、幸はいじめてしまうかもしれませんよお」

あかねを寝かせつけた後、幸は男に泣きついた。

猫娘三人、直立不動で緊張していた、幸に一睨みされ、震え上がってしまったのだ。

「本当にいるんだ・・・」

啓子が興味深そうに猫娘を見つめた。恵や礼子、理恵子に倉澤は、襖の向こうから顔だけ出して、興味深そうに覗き込んでいた。

「質問いいかな」

「な、なんだよ」

手前の猫娘が答えた。

「二股になった尻尾はないの」

「人型に化身して、尻尾だけ残すような愚かなことはしない」

「でも、瞳はまるっきり猫だよ」

「眼は難しいんだ、でも、普通の人間からは、猫の目には見えてないはずだ」

緊張したまま、答える。

啓子はうなずくと、襖の向こうを手招きする、待ってましたと恵達がやって来た。

「猫の目に見える人」

啓子が声をかけると、恵と倉澤が手を上げた。

「早紀ちゃん、見えるの」

礼子が驚いたように言った。

「うちで飼っていた、たま三号と同じ目ですよお」

倉澤が答える。幸乃は礼子と理恵子の後ろに立つと言った。

「人差し指を脛の上に置いて、目を細くして、ちょっと睨むように見てごらんなさい」  
言われたように、目許に力を入れ、じっと見つめる。

「わっ、凄い。見えた」

二人、同時に声を上げた。

幸乃は少し笑うと、男に助け舟を出した。

「幸、この子達にお礼を言いなさい、あかねちゃんを助け出してくれたのですよ」

幸はううっと唸りつつも、顔を上げ、ひきったような笑みを浮かべた。

「ありがとう、とっても感謝しています」

「ご、ごめんなさい」

「どうして謝るの」

「雰囲気が怒った時の白澤のばあさんにそっくりで・・・」

うっ・・・、幸が息を飲んだ、一番、言われたくないこと。

ふと、男が思いついた。

「幸が三人に教えてやってくれないかな、術を」

幸は大きく深呼吸をすると、気持ちを入れ替えるように頭を振った。

「お父さんの命により、幸はこの子達に術を一つずつ教えます。ただ、厳しい修行になりますので、ひょっとして幸がいじめているように見えることもあるかもしれませんが。でも、それは誤解でありますこと、ここにあらかじめ宣言します。さて、貴方達、名前を教えなさい」

「ま、まだ、ないんだ」

幸の言葉に恐れつつ、一人が答えた。

「なら、左から、白、黒、三毛。名前決定。幸は貴方達の名付け親です。決して、逆らうことを許しません」

一気に言うと、幸はぱんと両手を叩いた。猫娘が瞬間、三匹の猫に戻ってしまった。左から、白、黒、三毛猫。おおっと礼子や理恵子が感嘆の声を上げた。

「お風呂、直行」

幸が声を上げた。

「黒、もーらい」

啓子が黒を抱き上げ風呂場へ向かう。

「お姉ちゃんずるい」

礼子が白を抱きかかえた。

恵是三毛の横にしゃがむと、尻尾を手で持ち上げた。

「根元は一本で、後ろ、半分位から二本に分かれているんだ。面白いなあ」

倉澤もしゃがむと、尻尾の断面を見る。

「分かれているところ、内側は平らですよ。本当に縦半分に割れた感じですねえ」

「時間が経つと、その平が丸くなっていくかもしれない、それで、いつから猫又になったかが分かるかもしれないよ」

恵が立ち上がる。

「お姉ちゃん、どうぞ。恵はあんまり、猫、得意じゃないから」

三人、猫を風呂場へと連れていった。

「シャンプーとトリートメントで、毛が無くなるくらい、がしごし洗ってくださーい」

幸が三人に声をかけた。

幸乃は男に少し手を振り、笑みを浮かべると、幸の体に戻って行った。

「賑やかにになりますねえ」

恵が笑った。

幸は、ほっとして、畳に座り込むと、少し笑った。

「面白いよね。そうだ、お父さん」

「ん」

「倉澤さん、今晚は泊まることになったよ」

「合宿気分で楽しそうだな」

幸はにっと笑うと、所在なげにしている女の手を握った。

「普段の名前をつけて上げてください」

男は女の眼をじっと見つめる、そして、笑みを浮かべた。

「あさぎ。で、いかがですか。これから成長して行く植物の色。これからたくさんのかげを覚えて行く君にちょうどいいかな」

「あ……、ありがとうございます」

「あさぎ姉さん、どうぞ、よろしく」

幸は笑みを浮かべると、しっかりとあさぎの手を握った。



皆が寝静まった後、男は起き出して、台所で水を飲む。テーブルにつき、グラスコップにいた水を眺める。

男はあかねのことを考えていた、詳しい状況は聞かない、でも、相当に苦しめられたことはわかる。酷な話だ。

男はふっと顔を上げると闇に声をかけた。

「シャンプーの香りが体中から発散してますよ」

男が笑みを浮かべると、闇の中から黒が現れた。

「どうぞ、座ってください」

男の言葉に、黒は警戒しながらも、テーブルの反対側に座った。

「眠れませんか」

「いや、人間のように夜に寝るという習慣がないだけだ、それに、啓子さんに押し潰されそうになって逃げてきた」

男が声をひそめて笑う。

「そこそこの鬼くらいだったら、啓子さんは素手で倒してしまいますよ。とぼっちり受けられないよう気をつけてください」

「あんたがあたしらに直接教えてくれないのは、術が惜しいからか」

黒は男を睨むようにして言う。

「白澤のばあさんの命令はあたしらには絶対だ。どんな強敵相手でも戦わなきゃならない。どうしても強くなりたいんだ」

男は困ったように笑みを浮かべた。

「私と幸では、遥かに幸が強く、また、教えるのもうまい。それに、幸は真直ぐですから、貴方が真剣に学びたいと思えば、それに誠実に答えるでしょう。私は本家とのわだかまりがあります。誠実に教える自信に欠けるのですよ」

「娘の方が強いというのか」

「なんていうのでしょうかね。大事な娘が男に泣かされては大変、しっかり強く育てなきゃと、ん・・・、強く育てすぎたかな」

男は小さく笑うと、黒に笑みを浮かべた。

「多分、白澤さんもあなた方のこと、思うばかりに、ある意味、敵対する私に自分の血族を委ねたのです。本家を名目だけでなく、実質的に再興させるためにという理由もありましょうけど、とにかく、私の術を身につければ、あなた方が殺されることはなかろうとね」

男は視線を少し上げる。

「幸、この子達は幸の娘でもあるわけだ。名付け親だからね」

黒の両肩に幸の手がそっと触れた。びくと黒が震え、硬直する。

「親としては娘三人の行く末が心配だ」

幸は黒に顔を寄せると声をひそめ囁いた。

「いつまでここにいられる」

「八日間だ」

「短いなあ、もっと楽しみたいのにな」

幸はふっと笑うと、黒の横に座った。

「黒が姉で、白と三毛は姉に従って、白澤のばあさんの言うことを聞いている、そんなとこだな。黒、八日間、寝ずに修行できるかな」

「で・・・、できる。もちろんだ」

「なら、今から修行、大丈夫、半日くらいは休まさせて上げるよ」

幸は男に向き直った。男が笑みを浮かべた。

「幸の仕事は、父さん、頑張るよ。啓子さんや恵さんもいるからさ、なんとかなるよ、それにあさぎもね。だから、しっかり教えなさい」

「ありがとう、お父さん」

幸はほっとしたように笑みを浮かべると、黒に向き直った。

「あなた達がどんなに大変な思いをして、危険の中、あかねちゃんを助けてくれたかということ、わかっている。本当にね、感謝しているよ」

幸は両手でしっかりと黒の手を握った。

「だから、覚悟してください。しっかり、教えます」

空は下弦の月、梅林の中、幸の前に三人の猫娘が立つ。

「あなた達の体は人の体よりも自在に動きます、でも、それでも遅い。ですから、全ての無駄を排した最速の形を教えます。最初は素手。そのあと、武器術を教えます。それが終われば、呪術を教えます。最後は武術と呪術の同時発動を教えます。いいですか」

「はい」

緊張した面もちで三人が答えた。

幸は微かに左足を半歩引いた。

合わせて三人の足が動く。

「勝手に足が動いた」

黒が呻いた。

「三人の体は幸が操作します。まずは逆らわずに受け入れなさい。そして、経験しなさい、最速という無限の瞬間を」

幸が動き出す。しかし、それは。

幸の両手がゆっくりと前へと繰り出されていく、一分、五分、十分、十五分、その動きは遅くこれだけの時間をかけても一センチと前に出ない。

道筋。最速最短の道筋を確実に身につけるため、その道筋を時間をかけて辿る。すべての勢いを否定し、すべての力みを消し、微かなバランスの変化だけで移動していく。

幸の左手が上がり、右手が下がっていく。同じように三人の体が動いていく。ゆっくりと右足が上がっていく。

体全体が、バランスを保ちつつ、常に変化する。

三人が苦しそうに喘ぎだした。黒はたったこれだけの動きですら、苦しむ自分を情けなく思う。しかし、同時に、まったく無駄のない軌道、ぶれのない正確さをはじめて経験した、それはまさしく歓喜だった。

男と恵はあかねの枕もとに座っていた。

幸とあかね、恵の三人と一緒に寝ていたのだが、いま、幸は猫娘の指導に梅林へと向かい、恵が硬い表情をしてあかねを見つめていた。

「先生、あかねちゃんは・・・」

「体の傷は癒える、でも、心の傷がね。それが難儀だな」

そっと男はあかねの額に触れる。

「そうだな・・・」

男が小さく呟いた。

男は恵を見つめた。

「恵さん、壁にもたれてでいいから、あかねちゃんをしっかりと抱きしめてやってくれませんか」

「私でよければ」

男はあかねの体を起こすと、恵にその体を預けた。そして、男は一步、離れるとけっかふぎに座り、意識を統一し始めた。

「私があかねちゃんの心の中に入り込み、彼女を浄化します。彼女はすべての人を拒絶してしまっている、うまく入り込まなきゃならない、少し、時間がかかると思う」

「はい、しっかりと抱きしめています」

男は微かに笑みを浮かべると、小さくうなづいた。

「お願いします」

啓子が布団から体を起こした。隣りには礼子と理恵子、倉澤とあさぎが安心しきったように寝ていた。

猫娘、三人とも戻ってこない、今頃、幸さんに稽古をつけてもらっているのだろう、そして先生は、あかねちゃんをあのままに寝ていられる人ではない。

啓子はぐっとお腹に力を入れた。しっかりしろと、自分に言う。

啓子は起き上がると家の玄関、上がり口に座り、陣を整えた。

この家を支えている二人が身動きできない以上、自分がこの家を、シェルターを守らなければ。

明け方近く、男は軽く啓子の肩を叩いた。

「啓子さん、ありがとう。お疲れさまだったね」

「先生」

啓子は振り返ると心配げに男を見る。

「悪い方向へは向かわないと思うよ、あとは諦めずに日数をかけて待つだけだね」

「先生はいい人ですね」

「本当はいい人じゃないんだけどね」

男は困ったように笑みを浮かべた。

「あかねちゃんは恵さんが抱いててくれる。啓子さんも一寝入りしなさいな」

「幸さんは・・・」

男は梅林の方角を眺めた。

「あれは、一つどころか、全部、教えようとしているな。私が幸に武術も呪術も教えたけど、再構成して、幸はすっかり自分のものに仕上げている。だから、幸が全部教えてしまおうというなら、それもいい。私がとやかく言うことじゃない。敵になればなったで、頑張ってるさ」

「黒は真面目でいい子ですよ」

「真面目すぎるのさ。啓子さんも真面目すぎるな、少し、頭の中、柔らかくしなさいな」

男は啓子の頭をくしゃくしゃと撫でる。

「それじゃ、私はしばらく寝るよ。啓子さんも布団に戻ってゆっくり寝なさい」

男は自分の部屋に戻っていった。

啓子は一つ、溜息をつき、男がくしゃくしゃにした髪を両手で押さえる。

「お父さんか・・・、いいなあ」

朝、男はテーブル二つを繋げて、並べた。人数を数えてみる、あかねちゃんを入れて十一人だ。テーブルを二つ繋げばなんとかなるだろう。

椅子は事務所で使っていたのもある。

「先生、おはようございます」

「おはよう」

啓子が少し眠たげに起き出してきた。

「何か手伝うことありませんか」

「それじゃ、納戸から椅子をあるだけ出してくれるかな」

「わかりました」

勝手知ったる他人の家、啓子が納戸へ向かう。あさぎと倉澤が起きてくる。

既に倉澤は制服に着替えていた。

「倉澤さんは家に寄ってから学校へ行くのかな」

「そうします。教科書も必要だし」

「これから朝ごはんを作るから食べてから行きなさい。あさぎ、恵さんとあかねちゃんの様子見て来てくれるかな」

「は、はい。見て来ます」

「ありがと」

男がそっと笑った。

「お父さん、お父さん」

幸が猫娘三人を引き連れ、あたふた、駆け戻って来た。

「ごめんなさい、朝ごはんを作るよ」

「無理するな。徹夜したんだろう」

男は幸の頭を軽くぽんぽんと叩くと少し笑った。

そして、猫娘三人を見る。体はかなり疲弊しているが、精神状態は良好のようだ。

啓子と倉澤が椅子を並べはじめた。

「黒、白、三毛だったかな。椅子に座りなさい、一つおきにね。朝ごはんを食べよう」

「あたし達が同席してもいいのか」

「みんなで一緒に食べる方が楽しいだろう。ご飯は多めに炊いている、しっかり食べておかないと体がもたないぞ」

「おはようございます」

礼子と理恵子が起き出してきた。

「礼子、朝ごはんを作るよ」

啓子が声をかけた。

「はあい。理恵子ちゃん、一緒に作ろう」

「うん」

三人が台所へと入って行く。

「お父さん、賑やかだね」

幸が改めて納得した。

「人が多いのも楽しいね」

「そうだな、こういうのもいいもんだな」

幸の表情が少し陰る。

「お父さん、あかねちゃんは・・・」

「あさぎと恵さんが肩を貸して連れて来てくれる、昨晚、あかねちゃんの心に入って来たよ」

「どうだった」

「日数をかければ、元のあかねちゃんに戻るよ。あきらめずに待ちなさい」

「お父さんがそう言ってくれるなら幸は安心だ」

幸は三毛の向かい、下座に座ると、台所に向かって声をかけた。

「啓子さあん、幸はお腹ぺこぺこで一步も動けませんよお」

全員、テーブルに着く。黒の隣りに啓子が座り、幸はあかねの隣りに座った。

ご飯にお味噌汁、漬物に卵焼き。

啓子が立ち上がった。

「ご飯、おかず、お味噌汁、お代わりはいっぱいあります。しっかり食べてください。それでは、いただきます」

口々にいただきますと言い、朝ごはんをいただく。

あかねは一切の表情が沈み、かろうじて目を開けているだけだったが、幸がお箸でご飯を少しず

つ食べさせると、嚙下する。ほっとしたように幸は笑みを浮かべた。

啓子は興味深そうに黒を見た。

「黒は好き嫌いとかあるの」

「食べれるものはなんでも食べるさ。啓子さんだって食ってしまうぜ」

礼子が身を乗り出した。

「だめだよ、黒ちゃん。お姉ちゃんなんか食べたら、お腹こわすよ」

「なるほど、お腹、こわして苦しむのはいやだな。それに」

黒がご飯にお味噌汁を掛ける。

「これの方が百倍、美味しい」

「かっこいいなあ」

理恵子が言った。黒は照れたのか、顔を背ける、そして、味噌汁ご飯を一気に飲み干した。

「お姉ちゃん、お代わり、いいかなあ」

自信無げに白が黒の顔を伺う。

黒が振り返り、礼子越しに白を睨みつけた。

しゅんとして、白が俯いてしまった。

「お代わりあるって言ってただろう」

黒が白に強く言う。

「ごめんなさい」

白が余計に俯いてしまった。

啓子が仕方無さそうにため息をつく。

「幸さん、どうしたものかなあ」

啓子が幸に話しかけた。

「黒はさ、妹たちをしっかりと守らなきゃって、思いが強くてね、それはいいんだけど。結果としてこういう態度になる」

「あ、あの。笑えばいいんじゃないでしょうか」

倉澤が思い切って声を上げた。

幸がうなずいた。

「それいいよね、うん」

幸はゆらっと立ち上がると、黒に笑い掛けた。

「黒、大声でさ、あははって笑ってごらん。楽しいよ」

「楽しくもないのに笑えるか」

「そうだよ。黒はそう言うだろうなあ。啓子さん、右お願い。幸は左」

幸が叫ぶ、啓子は立ち上がると、素早く黒の右手を取り、幸は黒の左腕を抱えた。

二人で黒を羽交い締めにする。

「倉澤さん、黒の喉、ごろごろってこそばせて」

幸の声に、倉澤は立ち上がると、あたふた、倉澤は走り寄り黒の喉を飼い猫にしていた要領で、指先、なでるようにこそばせる。

「そ、そんな、ことで、わ、笑う、か」

息を上げ、黒が叫ぶ。

「大丈夫だよ、力を抜いて素直になろうね。ほうら、喉が鳴ってきたよお」

倉澤が黒をあやすように言う。

男は隣りに座っていたあさぎの肩をとんとんと叩く。

「はいっ」

驚いたようにあさぎが振り返った。

「あさぎ、あははって声を出して笑ってごらん。黒は恥ずかしがり屋だ、皆が声を出して笑ったら、安心して笑うと思うよ。あさぎにとっても声を出して笑うのはいいことだと思う」

男の言葉にあさぎは思い切って笑い出す。それを見て、礼子や理恵子も笑い出した。幸や啓子も黒を抑えながら笑う。いつの間にやら、猫娘 白も三毛も笑い出した。

黒はのけぞりながら目をつぶっていたが、いきなりふっ切れたように笑い出した。

「あはははっ」

幸と啓子が腕の力を抜くと、黒は床に倒れ、そのまま、笑い続ける。苦しそうに息をしながら笑い続ける。

やがて声が収まり、倒れたまま、黒が呟いた。

「なんだか、自分の中の支えていたものが消えてしまった」

「それはさ」

幸は黒の横に正座し、膝に黒の頭を載せた。

「それは黒を支えていたものじゃない、コンクリートや鉛みたいに、黒を重く固めていたものだ。これから、もっと良い動きができるようになるよ」

「お姉ちゃん、ごめんなさい」

白と三毛が不安げに黒に寄り添っていた。

黒は笑みを浮かべると二人の頭を優しくなでる。

「ありがとう、白と三毛がいてくれて、姉ちゃん、とても幸せだ。これからもよろしくな」

「うわっ、時間だ」

急に倉澤が叫んだ。

「ごめんなさい、学校行きます」

「行ってらっしゃい」

幸が笑みを浮かべた。

「あの、また、帰って来て良いですか」

「いいよ、楽しみにしている。でも、泊まりはだめ、御両親、心配させてしまうからさ」

「はい、わかりました」

倉澤が元気に答えた。

八日目の朝、黒は男の前で頭を下げていた。

「先生、練習場所まで、私と付き合ってください」

男の部屋、書類の整理をしていた男は振り返り笑みを浮かべた。

「立ち方、歩き方からもわかるよ。幸にかなり仕込まれたようだな」

男は椅子から立ち上がると押し入れの中を引っ掻き回していたが、さらしで巻いた棒を一本取り出した。

「それじゃ、行くかな」

二人して、部屋を出、練習場所にしていた梅林へと向かう。

「黒はここに来て良かったか」

「はい、本当に良かったです。夢のような八日間でした」

「黒も白も三毛もね、幸の娘だからいつでもここに帰っておいで。というかさ、ここで暮らすつもりはないかい」

黒が驚いて顔を上げた。

男は笑った。

「いろいろあるのかもしれないけど、それも選択肢の一つに入れておいてくれ。幸も私もさ、大事な娘を戦場に送るような気がしてね、なんだか、辛いんだ」

唇をかみしめ、黒は俯いた。

三日前のことを、黒は思い出していた。

練習の後、必ず三十分の居眠りをする、脳に練習内容を強く焼き付けるためだ。木陰、幸が仰向けに寝転び、その両手をしっかりと白と三毛が握っている、黒は幸の頭辺りに寝転ぶ、いつのまにか、そう決まっていた。

「あの、母さん」

黒が幸に声をかける。

「ん、どうしたの」

幸は少し黒に顔を向け返事をする、幸は三人に母さんと呼ばせていたのだった。

「どうしてこんなに教えてくれるの、一つだけって約束だったのに」

「心配だから。黒達は鬼と戦うためにこうして学んでいる。親としては、あんまりね、行かしたくないんだ、鬼退治なんかにさ。でも、行かせなきゃならないのなら、万全の準備をさせて送り出してやりたい」

「たくさん教えてもらってとっても嬉しい、なんだか、本家で教わっていたのが遊びに思えてくる」

「それが、本家の今の實力だ。それを承知で白澤のばあさんは独自路線を選択した。厳しい話だな」

幸は二人を起こさないようにゆっくりと上半身を起こした。

背を向けたまま、黒に問う。

「ここで暮らすのは無理か。一緒に畑で野菜を作ったり、山羊や鶏を飼って。たまに、野菜の直売をやってみたり、もうすぐ始める喫茶店でお茶を運んでみたり、そんな、なんでもない日常を送りたくないか」

黒は幸の背中に額を押し付けて呟いた。



「白澤のおばあさんには生命を救ってもらった恩があるんだ、だから、戦わなきゃならないんだ」

幸は黒に背中を向けたまま呟いた。

「お父さんに猫又のときいたよ。猫又には二種類ある。白澤のように長い年月を生きて生命の理というものに気づいた猫が猫又になる、もう一つが、そういった猫又に血を分けてもらった猫が猫又になる、黒達は後者だろうと話してくれた」

「気づいた時、私はゴミ袋の中にいた、いろんな変な匂いのするゴミと一緒に。青いゴミ袋の向こう、いくつもの家が並んでいて、女達が立ち話をしていた。体を動かして逃げ出したいと思ったけど、とっても体が重くて、意識もうっすらとして来て、あれ、確かに母さんの横で寝ていたはずなのに、どうしてなんだ、上を向けば、固く固く袋が結ばれていて・・・、声を上げることも動くこともできない、とっても、寂しかった、とっても恐かった。声が出ていないの、わかってた、でも、何度も、何度も声を上げたよ、母さんって、母さんって。そんなとき・・・。白澤のおばあさんに会ったんだ。だから・・・」

「白澤のおばあさんより、先に会えていたら良かったのにな。でも、今はね、幸が黒や白や三毛の母さんだよ。それは忘れないでほしい」

黒は足を止めた。

「ん、どうしたかな」

男は振り返ると黒の顔をのぞき込んだ。

「本家では汚いもの、忌むべきものとして扱われてきました。もちろん、白澤のおばあさんの手前、表立っては・・・」

男はくすぐったそうに笑った。

「最初、会った時、ごめんな、黒。悪く言って」

「いいえ。ああやって言い合えたのは、なんていうんだろう、楽しかったんです」

「そっか、安心した。なあ、黒、これも出会いだ、出会う縁があったわけだ。この縁、大切にしたい」

男はそっと黒の頭をなでた。

練習場所、間合いを充分に開け、男と黒は向かい合った。幸は白や三毛と一緒に、少し離れた場所で見守る。

「お父さん、よろしくお願いします」

幸が緊張した面持ちで男に頭を下げた

「卒業試験みたいなものだな。幸にかっこの悪いところ見せられないからさ、頑張るよ」

黒の求めに応じ、男は今までの黒達の練習の成果を見極めるため、立ち会ったのだった。

男はさらしに巻いた棒を片手に黒に声を掛ける。

「まずは黒、自由に攻撃してきなさい。私を殺すつもりでね」

黒がぴくんと震えた。しかし、微かに背を落とすと、ふっと力を抜いた、その瞬間、間合いを一

瞬に詰め、両手を上段から打ち下ろした、その両手には幸の使う長刀が握られていた。男は斜め半歩前に進み、剣先ぎりぎりを避けた。

黒が男から一步離れ、中段から男の胸をなぎ払う。

男はその風圧に圧されるように退き、剣先が過ぎた瞬間、すいっと黒の背中に移動する。

「良い感じだ。大抵の鬼なら体が四つになっている」

一瞬、黒が沈んだ、次の瞬間、弾けるように剣が男の胸に突き出された。

男は柔らかくそれを擦り抜けると、黒の頭を軽くぼんぼんと叩いた。

「次は私も攻撃しよう」

「はいっ」

息を切らし、黒が答えた。男は無造作に、黒から離れると、さらしを解く。

四尺三寸、筒が現れた。断面が楕円形の筒だ。

男が筒を片手に振り返る。

「杖術はね、もともと、相手を傷つけずに制することを大事としている、だけど、これはね、攻撃のための杖だ。攻防の中で、使い方を良く見ておきなさい」

男は黒の間合いに入ると袈裟懸けに杖を打ちおろした、黒の剣とぶつかった瞬間、剣もろとも黒が吹き飛ばされた。黒は空中で姿勢を立て直し、啞然と男を見つめた。

「わかるか、黒。これが手の内だ、微かに緩めると掴むとで、相手の力を、そのままに跳ね返してしまう」

「はいっ」

黒が興奮したように声を上げた。

「お願いします」

男がうなずく。

今度は黒が肩の高さに水平に剣を構える。一步踏み出し、男の脇を斬る、男は剣の進行方向に杖を合わせた。剣が杖の上を走る、瞬間、男が沈み込み、黒を杖で突き刺す。黒に突き刺さる寸前、男は杖を微かに引く。

「刺して捻れば肉がえぐれる、上手が斬れば、剣と同じようにも切れる。なかなか、便利だろう」

既に男は黒に背中にいた。

「合格だ、黒」

黒が男に向き直った。

「充分、複数の鬼とも戦えるよ。でも、今後の精進を忘れないようにね」

「先生、ありがとうございます」

「どう致しまして。呪術は黒の眼を見ればわかるよ、きっちり出来ている。もともと才能があるのかな」

「先生、本当にありがとう。母さん、ずっと大好きだ。白、三毛」

いきなり黒が叫んだ、白と三毛がしがみつくように幸の手を抑えた。

「どうしたの」

幸が声を上げた。

「ありがとうございました」

黒が刃先を自分の首に当てた。

「やめてくれ、黒」

幸が悲鳴を上げた。男の姿が揺らめいた、男は黒の背中に現れ、剣を弾き飛ばした。そして、左手で黒を支え、右手小指側を黒の口に差し入れた。

「舌を嚙むなよ」

男は黒の耳元で低く囁いた。

「白澤のばあさんが俺の首を土産に持って帰れと言ったんだろう。代わりに自分の首を刎ねて、妹たちに持って帰らすつもりだった、ってとこだな。あの人も困った人だ」

黒の膝が崩れた。男が右手を離すと黒は倒れるように地面に手を着いた。白と三毛が黒に走りより、しっかりとしがみつく。

幸はどうしたら良いのかわからずに、涙を流したまま立ち尽くしていた。

「幸、抱き締めてあげなさい。それが一番だよ」

幸はよろよると歩き寄ると、三人を抱き締めた。そして、幸が一番に大声で泣き出した、まるで、小さな子供のように。

「あの人も黒の真っすぐさが読み切れなかったようだな。お互い、ひねくれてしまっていると、真っすぐなのは眩しすぎる」

男は呟くと、杖をさらしで巻いた。そして、泣き声がようやく落ち着いたころ、幸と三人に声をかけた。

「黒と白と三毛は、これからもここで生活すること」

驚いて、幸が男に振り返った。

「黒は叔父さんと一緒にこれから、本家に出向いて、叔父さんのところで暮らしたいと言いなさい。そうしたら、本家が何と言っても、叔父さんは黒を連れ帰って三人、ここで暮らせるようにするからさ」

黒が惚けたように男を見つめた。しかし、生き返ったように笑みを浮かべると、強く頷いた。

男は思う、本家には武術を使える呪術師が百人以上いる。そんな大人たちがいるくせに、子供三人に頼るなんて、恥ずかしいと思う奴はいないのか。

見上げる、白鷺城を参考に造成しただけあり、その姿は白く美しい、堀はなく、その前に大きく横たわる湖が、侵入者を制するための水堀の代わりになっていた。もっとも、これは異界にあり、侵入しようにもこの湖の手前に来ることすら難しい。

「黒は水の上、歩けるか」

「御風呂場でなら歩けるのですが」

「どうした、黒」

「えっ」

黒が戸惑ったように男を見上げた。

「黒、かなり緊張しているな」

男は笑みを浮かべた。

この城が本家であり、その当主が男の義理の兄であった。

「湖の上、できるだけふわっと乗ってごらん」

黒は恐る恐る水の上に足を載せる。ゆっくりと両足が乗った。しかし、小波のせいで、かなり不安定だ。男も湖の上に軽く乗ると黒の手をぎゅっと握った。黒の足元が定かになる。

「他對一や、空中に浮かぶ奴らと戦う時には大事な歩法だ。ちょうどいい練習だな」

男は黒の手を握ったまま歩きだした。

「浮いた足の方に重心を載せる感じだよ」

「まだ難しいです」

「だろうな、でも八日間でこれだけ出来ればたいしたものだよ」

男は少し黒に顔を寄せると小さく笑った。

「あの、聞いていいですか」

「ん」

「先生と本家ってどういう関係があるのですか」

「そういえば、そういうのって話してなかったな。白澤さんは教えてくれなかったのか」

歩きながら、黒が頷いた。

「黒は本家の当主に会ったことがあるか」

「いいえ、でも遠くからは見たことがあります」

「当主は私の義理の兄だ。私は小さい頃、本家につれ去られて来て、そのまま、養子になったんだ」

「ごめんなさい」

黒が唇を噛んだ。

「今となってはどうでもいい話さ。本家には十年ちょっといたかな、先代の妻に、私にとっては義理の母親に殺されそうになってね、逃げ出した。先代と白澤さんはその逃亡を助けてくれたのさ」

エンジンの音が響き出した。

城から水上バイクが三台、飛び出してきたのだ。

「波がきついな、黒、背中に乗りなさい」

男は手を貸すと、黒を背中におぶった。

拡声器だ、声が響く。

「そこの侵入者、直ちに停止しなさい」

太い男の音が響く。

男は素直に立ち止まると、水上バイクが到着するまで待つ。やがて、三台の水上バイクが取り囲んだ。

対魔物用の装備をした男たちだ。

「白澤さんと当主に会いたいんだけどね、折角だし、それ、乗せてくれるかな」

「白沢老から、あんたを見つければ無条件に抹殺せよとの命を受けている」  
二台の水上バイクが回り込み、一列になると一斉に機関放射、無数の銃弾が降り注いだ。  
黒を背負ったまま、男はその光景を城側の岸で眺めていた。

「ここを叔父さんが出た頃はさ、ほとんどの奴が船を使わずに湖の上を歩くことが出来ただけ  
どね。劣化したなあ。白澤さんもそうは思いませんか」

男が振り返る、白澤が苦り切った笑みを浮かべていた。

「便利になると体の使い方も術も落ちてしまうのよ。でも、彼らも兵として、武術呪術師として  
、この時代では上級の部類」

男も仕方無さそうに笑うと黒を下に降ろした。

「お前がここに居るということは、この子は失敗したようね。この子の両目に在った陰もすっかり  
消えて幸せそうな顔をしている。お前の娘の仕業ね」

「お願いします、母さんと一緒に暮らさせてください」

「母さん……」

男は笑った。

「娘が三人に自分を母さんと呼ばせているんです」

白澤がため息をついた。

「兵としては到底役に立たないわね。どうぞ、好きになさい」

白澤は黒に語りかけると、やおら、男を睨んだ。

「大切なひ孫と別れなければならない以上、私もこのまま、引き下がるわけにいかないわね。何  
かお出しなさい。見合うものを」

「困りましたね、今日は手土産もなく、手ぶらでやって来ましたよ」

白澤が悪戯げに笑った。

「お前の硝子球を寄越しなさい、あれは防御にも攻撃にも秀でたもの。あれが有れば、鬼とも対  
等に戦えるわ」

「使い方をしっかり理解すれば、対等どころか瞬時に倒すことが出来ますよ」

男は硝子球を取り出すと、白澤に手渡した。驚いて、白澤が男を見つめる。

「本当にくれるとはね」

「この子達には、なんというかな、私も情が移ってしましましてね。そうだ、娘が名付けました  
、この子が黒。後の二人が白と三毛です」

「見たままということね、センスのない娘だこと」

「白澤さん、言葉にしていただけませんか、そうしていただければ、一週間、通いで硝子球の使  
い方を教えましょう」

すっと白澤の体に硝子球が溶け込んだ。

「これからのこともあるわね。わかりました、黒、白、三毛を千尋、お前に預けます。これから  
、お前とお前の娘の手元で暮らすことを認めます」

黒が自然と笑みを浮かべた。

男は黒の頭をなで、白澤に言った。

「たまには遊びに来てください、ひ孫の顔も見れますよ」

「そうね、お前の娘と戦争も出来るわね」

「その辺はお手柔らかに」

男は笑みを浮かべ、湖を振り返る。幻を相手に死闘が空しく繰り広げられていた。

「そろそろ気づかないかな」

「ほっておけばいいわ。そのうち、ばてて動けなくなるでしょう」

白澤は吐息を漏らすと、空を見上げた、青く抜けるような空だ。

「早くあのお方のところへ行きたいけれど、今の様子ではねえ」

白澤は男を少し睨む。

「鬼と対等に闘える力を取り戻さなければ。千尋、精鋭十人を選んでおきます、硝子球の他にも教えなさい、そうだ、お前の得意にしていた筒があったでしょう」

男は緩やかに手を動かす、その手にさらしに巻いた杖が現れた。

白澤はそれも受け取ると、子供のようににっと笑った。

「他にはもうないかしら」

「これ以上は勘弁してください、身ぐるみはがされてしまいますよ」

男は笑うと、黒の手を握った。

「兄に会うつもりでしたが、また、明日にでもお目通りを願うことにしましょう、そろそろ、退散します」

「日が明けると同時に待っていますよ」

男は仕方なように笑みを浮かべると、軽く頭を下げる。そして、白澤に背を向けた。

「そうだ、まさか、あの中に明日の精鋭はいないでしょうね」

湖上の喧噪を眺め言う。

「彼らは不合格よ」

白澤の言葉に男は笑うと黒の手を握り、城を後にした。

ふと白澤が黒に声をかけた。

「黒」

驚いて、黒が振り返る。

「良い名前ね」

初めて、白澤は和やかに笑った。

異界を離れた後、二人は列車に乗り、最寄りの駅に着く。男と黒は帰り道を歩いていた。

「先生、ごめんなさい」

「ん、どうしたんだ」

「大事なものを、取られてしまいました」

「大事か……。でも、叔父さんはね、黒がいて、白や三毛がいて、幸がお母さんぶってえらそうにしているの面白いし、みんながさ、楽しく暮らしている。それの方がずっと、嬉しくて大事だからさ」

男はふと、商店街を少し離れた洋菓子店をのぞき込んだ。

「黒はケーキ、食べたことあるか」

「えっ、いいえまだ」

「それじゃ、食おう」

男と黒は洋菓子店に入ると、テーブルと椅子が設えてある、それに座った。

「あ、あの、いいんでしょうか」

「叔父さんは珈琲が飲みたいのです。幸は厳しいからさ」

男がいたずらげに笑った。

店員がメニューを持ってやって来た。

「私は珈琲で。黒、どのケーキにする」

「わかりません、なにがなんだか」

黒がメニューを睨んで困惑した。

「それじゃ、この子には苺のショートケーキをお願いします」

店員がメニューを抱え戻る、黒はほっと溜息をついた。

「緊張しているな」

「だって、奇麗で上品な音楽も流れているし、なんだか場違いなような」

「啓子さんは、黒は美人だって言ってたよ」

男が気楽に笑う。

「叔父さんは、美醜がわからないけれど、素敵女性になるんじゃないかな」

男が他意なく気楽に言う。

「あ、あのっ」

「ん、どうしました」

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

珈琲とケーキが運ばれてきた。黒の前に苺のショートケーキ、男の前には珈琲がある。

「一口目はそのまま、その後にクリームを入れよう」

男は呟くと、珈琲カップをつまみ上げる、

「黒、食べなさいな、美味しいよ」

「は、はいっ」

黒はしばらく、白と赤のコントラストを楽しんでいたが、ケーキの先をフォークで取ると、思い切って口に運んだ。

「美味しい、先生、美味しいです」

黒が飛び上がらんばかりに声を上げた。

「良かったな」

男が笑みを浮かべると、えへへと黒が笑った。しかし、黒はもうケーキには手を付けず、フォークを置いた。

「どうした、黒」

黒が嬉しそうに笑った。

「白と三毛に持って帰ってあげます、三人で食べたらもっと嬉しい」

男は優しく笑みを浮かべると黒に言った。

「黒、そのケーキは食べなさい。同じケーキ、お土産に買って帰るからね、帰ったら、晩御飯の後、みんなで食べよう」

黒が笑顔で男を見つめた。

そして、くすぐったそうに笑うと、フォークを手にした。

お皿に残ったクリームまでしっかりと食べたことは・・・



## 遥の花 雨夜閑話 四話

---

### 異形 雨夜閑話 四話

かぐやのなよたけの姫

月曜日 18 7月 2011 at 6:27 pm.

「先生、たーっち」

いきなり黒は男の背中を叩くと、あははっと笑って駆け出して行った。

「な、なんだ・・・」

男は居間で読んでいた書類を手から落とし呟いた。

本家への出張も終え、やっと落ち着いた次の日の朝のことだった。

「姉さん流の愛情表現ですよ」

白があかねを座らせた座椅子の横に座り、じっとあかねの手を両手で握っていた。

「実害はないので、どうぞ、よろしくお願いします」

白は笑うと、また、あかねを見つめ、その両手に力を入れる。

「なるほどね、まっ、好かれるというのはありがたいことだ、嫌われるよりずっといい」

「本家では大変だったみたいですね」

「そうだな、小学生に複素数解析を教える方が楽かもしれないな」

男は呟くと、書類を食卓に載せる、随分と書類が溜まっていた、一週間の予定が十日かかり、予定が狂ってしまったのだった。

幸はあさぎと三毛を連れ、商店街の洋品店へ出掛けていた。普段着を用意するためだ。

「白は随分と落ち着いたな」

「うーん、お姉ちゃんがあの通りですから。でも、怒鳴られずにすむし、相談もしてくれるから、今が一番楽しい。先生、ここに住まわせていただいで、本当にありがとうございます」

「私的に云えば、住んでくれてありがとうという気分だな、賑やかだし、幸も楽しそうだ。あとはあかねちゃんのことだな」

白は頷くと、男を見つめた。

「夢を見ました、あかねさんが窓硝子を叩いている、こちらに向かって気づいてくれと必死に窓を叩いている。なんとか窓を開けに行こうとするんだけど体がどうしても動かなくて」

「やっと気が満ちて来たかな」

男は呟くと、あかねの横に座った。

「白、あかねちゃんの手ひら、とんとんと指先で叩いてごらん。何度もね」

「はい」

素直に白はあかねの手首を支え、右手の人差し指でとんとんと叩き出す。

「ドアを叩く感じでしょうか」

「そう、気持ちが届きますようにってね」

男がそっと笑みを浮かべる。

幸は洋品店の叔母さんと向かい合って座っていた、いつものテーブル、今日は初めてあさぎと三毛もやって来、テーブルについていた。

「で、ちょっと、待ちなよ。幸ちゃんのお姉さんがあさぎちゃんで、娘がこの三毛ちゃんにあと二人、娘、がいるわけだ、こりゃ、賑やかだ」

「母さん、驚いた」

「なんていうかねえ、幸ちゃんが幸乃さんと一緒に来た時ほどじゃないけどさ」

店主は笑うと、マグカップを四つ食器棚から取り出し、いつものインスタント珈琲をいれる。

「幸乃さんが妹がお世話になってますって言った時にはさ、腰抜かしたけどね」

店主はあさぎと三毛に珈琲をすすめる、気負いも何もなく、古い知人のように扱った。

「幸ちゃんの姉ならあたしの娘みたいなもんだ、遠慮は無用だよ」

あさぎは安心したように笑みを浮かべると、微かに頭を下げた。

店主は笑みを浮かべると、三毛の珈琲に砂糖とクリームをたっぷり入れる。

「で、三毛ちゃんは娘。って、幸ちゃんが産んだわけじゃないよね。本当に産んだってなら、あたしゃ、先生に小言の一つも言わなきゃならないよ」

「血の繋がりはないけど、気持ちは繋がっているし、うん、いっぱい、繋がっている、だから、大切な娘です」

幸はそっと三毛の頭を撫でた。

ふと、三毛が幸を見上げた。

「お母さんの母さんなら、おばあちゃんって呼べばいいのかなあ」

「だめだめ」

店主があわてて否定した。

「まだまだ、誰にもおばあちゃんなんて言わせないよ。そうだね・・・、服屋のかあさんて呼びな」

「呼びにくいよお」

「いいや、最初が肝心。それ以外は受け付けないよ、わかったね」

「はあい」

三毛が頷いた、店主は愉快に笑う、その目は孫を慈しむ祖母の目にも近かった。

「幸ちゃん、家族が増えて賑やかになったねえ」

幸が幸せそうに頷いた。

幸の笑顔を見て、ふと、あさぎは昨晚のことを思い出した。

誰もが寝静まった頃、幸はあさぎの枕元に座ると、そっとあさぎを起こした。

「あさぎ姉さん、ちょっと、来て欲しい」

緊張しながらも、あさぎは頷くと、幸の後に従った。

家の外に出る、畑の手前、長椅子に二人座った。白く満月が輝き、辺りを白く染め上げていた。幸は右手であさぎの左手をしっかりと握り、笑みを向けた。

「あさぎ姉さんにはあたしのこと、知って欲しい。いいかな」

あさぎは幸が自身のことをあたしと呼ぶことに微かな驚きを感じたが、そっと、幸の言葉に頷いた。

「ここに来て、お父さんの娘になってもうすぐ四年になる。あたしは人を食う魔物に取込まれていた、救い出してくれたのが、お父さん、あの人だった。あたしは助けてもらったけど、もう親も知り合いもない、たった独りだった。あの方はここで暮らしなさいと言ってくれた、年齢的に、父と娘でいいでしょうって言ったんだ。いま、あの時のことを思い出すと、なんて、お父さんは簡単にあたしを受け入れてくれたんだらうって、呆れてしまうよ」

幸はそっと笑みを浮かべたが、そのまま、俯いてしまった。

「人の肉を食い、その血を飲んで喉の渇きを癒していた女だ、あたしは。お父さんはそれも承知で娘にしてくれたんだ。ここへ来てからも大変だった。時々、どうしようもなくなって、不安や恐怖でおかしくなってね、お父さんに椅子を投げ付けたり、包丁を投げたこともあった、窓硝子もいっぱい割ったよ。でも、お父さんは怒らずに、抱き締めてくれて、泣いてくれるんだ、一緒に泣いてくれるんだ」

あさぎがぎゅっと幸の手を握り締めた。

そっと幸が顔を上げ、あさぎを見つめた。

「あさぎ姉さんはいまとっても不安だと思う。孤独にさいなまされているかもしれない、でも、忘れないで欲しい、ここにあさぎ姉さんの妹が居て、あさぎ姉さんのことを大切に思っているってことをね」

あさぎが呟いた。

「ホテルの階段を転びそうになりながら駆け降りました。歩道に出て、すぐに家に帰ろうと思った時、家が何処にあるのか思い出せなかった、ううん、思い出せないんじゃないくて、全然、記憶がなかった、その内、自分の名前も思い出せなくなって・・・」

幸は両手でしっかりとあさぎの手を握った。

「ここがあさぎ姉さんの家だ。妹と父親がいて、妹には娘が三人もいて、とっても賑やかだ。一番下の妹はあかねちゃん、いまは意識不明だけれど必ず目を覚ます。啓子さんや恵さんは家族同然の人で、商店街の佳奈姉さんや母さんはとっても頼りになる素敵な人達だ」

あさぎは涙をこぼし、幸を抱き締めた。

「ありがとう」

「先生、もうすぐかな」

黒が男の後、肩の辺りから顔を出して、目を開けたまま眠っているあかねをのぞき込んだ。白は無心にあかねの手のひらを人差し指で叩いていた。

「白の頑張り、薄皮一枚のところまで意識が浮かび上がっている。あと、もう少しなんだけどな」

「もう少しなんだけど、届かない。指先が届きそうなのに」

白が呟いた。

「あとは母さんが帰って来てからかな」

男が呟く。

黒が男の横で笑った。

「だめだよ、先生が母さんって呼んじゃ」

「ん、叔父さん、そう言ったか」

「言ったよ」

「幸には秘密だぞ」

男が笑った。

「先生には世話になっているから黙っててあげるよ。白も喋っちゃだめだぞ」

「家庭円満のためにも黙ってますよ。あ、話は変わりますが、ケーキ、とっても美味しかったです」

にと白が男を見上げた。

男が困ったように笑った。

「あかねちゃんが目を覚ましたら、ケーキパーティでもするかな」

「うわーい」

黒が飛び上がって喚声をあげた。

「ケーキ、ケーキ」

黒が阿波踊りのように踊りだす。びっくりしたように白は黒を見つめたが、笑みを浮かべると、和やかに黒を見つめる。

「怒ってばかりの姉さんより、こっちの方がいい。その分、私が頑張ってしっかりします」

「それぞれ個性があっていいな」

ふと、白は指先を止め、呟いた。

「産まれたところも捨てられたところも違いますが、それでも私達は姉妹で三人で一人なんです。それがとっても嬉しいんです」

白が穏やかに一人頷いた。

「あ、母さんだ」

黒は叫ぶと、ばたばたと玄関口へ走り出した。

「ただいま」

幸を先頭にあさぎと三毛が帰って来た。

黒はばふっと幸の腰にしがみつき、見上げた。

「母さん、お帰り」

「ただいま、黒。賢くしてたかな」

「してた、とっでもしてた」

幸が黒の頭を撫でる。

「幸、あかねちゃんを呼んでくれ」

男が幸に声をかけた。黒はすっと幸の体を離すと、あさぎを護るように手を握った。

「あさぎ姉さん、危ないと思ったらうずくまって」

黒が鋭くあさぎに囁いた。

幸はあかねに駆け寄ると、大声で叫んだ。

「あかねちゃん、目を覚ませ」

一瞬、あかねの視線が一点に定まった。

「うわああっ」

あかねが浮かび上がり、悲鳴を上げる、爆風。

まるで台風のようにあかねを中心に風が発生し、椅子もテーブルも何もかもを吹き飛ばす。

あさぎが慌てて廊下にうずくまった。

幸が叫んだ。

「黒、白、三毛」

「はいっ」

三毛があかねの脚を、白がお腹、黒があかねの肩を取り押さえた。

狂ったようにあかねが大声で叫ぶ。

幸はしっかりと歩きだし、両手であかねを強く抱き締めた。

「あかねちゃん、幸はここにいるよ。もう、大丈夫だ」

不意にあかねの力が抜けた。

「お姉ちゃん」

「お帰り、あかねちゃん」

黒達三人は手を離すと、床に座り込んでしまった。男も掴んだテーブルと椅子を床に降ろしあさぎに声をかけた。

「起きて大丈夫だよ、あさぎ」

あさぎはぺたんと床に座り込むと呟いた。

「竜巻が発生しました」

男がくすぐったそうに笑った。

あさぎと三毛が少し遅めの昼御飯の用意、幸はあかねを抱きかかえて居間に行き、あかねを座椅子に座らせた。

「はい、どうぞ」

三毛がストローを差した黄色いジュースを幸に手渡した。

「あさぎ姉さんが作ってくれたよ、バナナジュース、消化しやすくって栄養があるからって」

「ありがとう」

笑みを浮かべ、幸は受け取ると、ストローの先をあかねに啜えさせた。

そのころ、男は黒と白を連れ、洋菓子店へと歩いていた。

「先生、何個買う、何個買う」

黒が男の裾を引っ張る。

「一人何個、食べるかだな」

「いっぱい食べるよ。食べ過ぎて、動けなくなって、ああ、幸せって言うくらい」

「お姉ちゃん、それじゃわかりませんよ」

男はふと立ち止まると、にっと笑って言った。

「まずは苺のショートケーキ」

黒が頷いた。

「そうだ、黒はチョコレートは食べたことあるかな」

「ある、非常食で食べた」

白もチョコレートの甘さを思い出したのか、舌なめずりをする。

「チョコレートでも色々あるぞ、中でもとっても美味しいベルギーチョコレート、とっても甘くて、でも、ほんのり苦い大人の味」

「大人の味」

白が繰り返した。

「そうだ、白。子供はまだ食べちゃいけません、大人だけのチョコレート、これがふわんとケーキを包み込んでいる、フォークを差すと、チョコレートがぱりんと割れて、ふんわり現れるちょっと茶色のスポンジ、ふんわりしたスポンジケーキにチョコレートが混ざっている、大人の味だ、チョコレートケーキだ」

「絶対、絶対、食べます」

白が答えた。

「よし。次はなんと言ってもチーズケーキ。この前のショートケーキのスポンジ、とっても柔らかかっただろう」

二人がうんうんと頷いた。

「チーズケーキはもっとすごいぞ。とってもなめらかできめ細やか。口の中ですうっと溶けてしまうくらいにさわさわって感じだ。口の中でケーキが行方不明になっちゃう」

「さわさわ、さわさわ」

二人が叫んだ。

「そうだ、タルトもいいな。黒と白はビスケット食べたことあるか」

黒と白、男の裾を握ってうんうんと頷いた。

「タルトの作り方を知りたいか」

「知りたい、教えて、教えて」

「まずは、たくさんビスケットを小さく砕きます。そして三十センチくらいの円筒形の型に厚さ一センチくらいに詰め込みます。黒、白、詰め込みましたか」

「詰め込んだ、詰め込んだよ」

「さて、その上にどさっと白い生クリーム、とっても甘い生クリームを載せて、木のへらで平らにします、そして薄く切った果物を載せていきましょう」

「苺を載せる」

黒が叫んだ。

「蜜柑も、蜜柑も」

白が目を輝かせて叫んだ。

男は柑橘系は大丈夫なのかと思いながら、

「もう、いっぱい果物を載せて、その上に甘いシロップふわぁっと、こう回すようにして掛けていくのです、まんべんなくね」

黒と白、興奮して口からはあはあ息をしていた。

「しばらく冷やした後、さあ、タルトを切りましょう。すううっ、さくっ。このさくっってのは、固まったビスケットが切れる音だ」

「すううっ、さくっ。すううっ、さくっ」

黒と白が嬉しそうに言葉を重ねる。

二人が男の手を握って駆け出した。

「先生、早く買いに行こう」

二人が男を引っ張り走り、風を切って駆ける。

鈴の音がした。

りーんと不思議なほど長く音が伸びる。

黒と白が恐怖に硬直した。そして、辺りを見回す。

「これは珍しい」

男は呟くと、二人に声を掛けた。

「これくらいのことで怖がっていたら幸に笑われるぞ。黒、白、三毛は幸の娘でもあり、正式な弟子でもある。この程度の奴らにびびってどうする」

男は笑うと、前方を眺める。行列が現れた。時代劇にある花魁道中のような行列だ。男はしっかりと二人の手を握り、二人を背中に隠した。

花魁道中は男を横切り、中ほどの花魁役の女がふと男を認め、声を掛けた。ずっと、動きが止まった。

「この辺りにあかねという子は居りませぬかえ」

「さあ、よくある名前ではありますが、私にはどうも」

男は笑みを浮かべると、首を横に傾げた。

ふと、女は男の背中で震えている黒と白を見つめた。

「はて、何処かで見かけたお子の様」

「これは私の娘です、多分、人違いでありましょう」

「そう・・・」

女は関心を無くしたかのように前を向く。再び、行列は動き出し、視界を去って行った。

「黒と白と三毛がうまく連携すれば勝てる相手だよ。そんなにびびってたら、勝てる奴にも勝てないぞ」

男が面白そうに笑った。

「だって、とってもおっかない奴だよ」

黒が震えながら言った。

「かぐやのなよ竹の姫、鬼の格ではかなり上だな」

「先生、帰りましょう。きっと、襲ってきます」

「だろうね、あかねちゃんが覚醒したことで場所の見当がついたんだろう。でも、これからケーキを買いに行きます」

「先生」

白が非難の声を上げた。

「叔父さんはケーキがとても好きというわけじゃない。でも、黒や白や三毛がさ、美味しそうに食べている姿を見るのは大好きなのさ。ケーキ屋さんまで、瞬間移動、二人とも叔父さんの手をしっかり握っているよ」

門前、幸が腕を組み、仁王立ちのようにがしっと立っていた。

男と黒と白がその隣りに現れる、二人、山のようにケーキの箱を抱えていた。

「冷蔵庫と、入らない分は涼しそうなところに置いてくれ」

「はいっ」

二人は返事をするやうに家の中に駆け込んだ。

「お父さん、今の全部ケーキなの」

「あれもこれもと選んでいたら、ああなった」

「もお」

ふっと幸が笑みを浮かべた。

「お父さんは以外と三人に甘いなあ」

「なんだかね、幸の小さな子供の頃を、どんなだったんだろうかと、あの子達を通して考える、それを楽しんでいるのかもな」

「だめだ、お父さんと喋っていると楽しくなってしまう」

幸は表情を堅くすると、道の先を睨んだ。

「迎撃つのか」

「もちろん」

「あかねちゃんをあんなにしたのを許せないということだな」

男はそう言うと、幸の肩を軽く叩く。

「父さんに任せなさい、今の幸はかなり怒っている、幸がまともにやったら、この辺りが焦土になってしまうぞ」

「でも」

「冷静になりなさい。あかねちゃんは鬼の住みかに潜入した、自分の意志でね。幸もあかねちゃんの心を読んだろう」

「うん」



「そして、その結果だ、今のあかねちゃんはね。一方的に相手を非難できるほどでもない。幸、愛情はとても大切だ、でも感情の揺れの言い訳にはするな」  
幸がうなづく、そして、男を抱き締めた。

鈴の音が辺りの空気を震わせる。

花魁道中の先頭が現れた。道中の先頭が二人の手前で止まり、女が列を離れ、二人に近づいてきた。先程の鬼の姫だった。

「こちらに、あかねという女の子が居るはず」

ふいに幸は顔を上げ、鬼姫を睨みつけた。その気迫に鬼姫が一瞬、身を引いた。

幸は何も言わず、家の中へ走り込んだ。

「あれは私の妻ですが、あかねちゃんを妹のように大切にしております、あのような無礼を致しました、どうぞ、察してくださいませ」

「驚きました、あのような人間が居りましょうとは」

鬼姫は憮然としたが、表情をしまうと男に言った。

「さて、あかねという娘をいただくことは、この国の支配者層の人間共も認めて居ります。早くお出しなさいませ」

すううっと鬼姫は目を細めた。

「それはだめです、妻が嘆き悲しみます」

「そなたが死ねば、それ以上に、先程の女は嘆きましように」

鬼姫が引き込むように唇を歪め笑みを浮かべた。

「貴方も物語のように月へお帰りになればよろしかったのに」

「ほお、私のことを知った、その上で渡さない」と

「はい、渡せません」

鬼姫が笑った。

「先程の女といい、数百年ぶりに面白い人間と出会いました。今日は楽しい日になりそうですわ」

鬼姫の纏う気配がざわっとうねりだした。

鋭く車のエンジン音が響いた。一台の高級車が飛び込んできた。

「おや、あれは」

寸前で車が停止すると鬼紙老が飛び出した。

「孫の仇、覚悟せい」

上下白袴、腰の刀に微かに手を添え、地面を低く滑るように突進する。

「馬庭念流の居合とは珍しい」

男が呟いた。

無音で抜き打ち、下段から鬼姫を斬り上げた。鬼姫の首に刀が食い込む、しかし、鬼姫は平気な顔をして、刀身の根元を掴むと、鬼紙老諸共放り投げた。

男は飛び上がると、鬼紙老を受け止め、着地した。

ふと、鬼姫は寂しそうな顔を向けて。

「気が逸れました。今日は帰りましょう、しかし、あきらめたわけではありません。また、お目にかかることになりましょうぞ」

鬼姫は背を向けると去って行った。

男は鬼紙老を座らせると、気楽に笑った。

「御老、あかねちゃんはお預かりしていますよ、元気ですとは言い難いですけど」

「な、なにっ」

「本家の白澤さんの孫娘三人が救い出して、こちらで預かっています」

「あの九尾猫か」

鬼紙老は慌てて立ち上がり掛けたが、うっと唸ると座り込んでしまった。

「無理するからです」

「くうっ、若ければあんな鬼など一刀両断にしたものを」

男は肩を貸すと、鬼紙老を家へと連れて入った。

「ごめんなさい、おじいさま」

あかねは立ち上がり掛けたが、足の力が弱まり、立ち上がることができなかった。

「なんだ、いたのか。儂は偶然、ここに来ただけだ、すぐに帰る」

「はい・・・」

あかねが呟いた。

「で、どうなんだ、体は」

鬼紙老が背を向けて言った。

「しばらくすれば」

「無理するな、ここで養生させてもらえ。だが、幸とかいったな、あんな女とは口をきくな。お前はあんなガラの悪い女になってはいかん」

あかねがくすぐったそうに笑った。

「偉そうに言うなよ、じいさん」

ふと、幸がお茶を持って来て言った。

「孫の仇って聞こえてたぜ、で、放り投げられてよ、大笑いするところだったよ」

「この女、減らず口を」

「まっ、命をかけてやって来たってのは認めてやるよ」

幸は湯飲みをテーブルに置くと、ぱんと鬼紙老の腰を叩いた。

「それで普通に歩けるだろう、世話のかかるじいさんだ」

「おーい、先生、来たよ」

啓子が恵とやって来た。勝手知ったる他人の家、普段どおりに上がると居間へとやって来た。

「私も来ました、啓子の付き人ですから」

恵は笑うと、ふと、鬼紙老を見た。うわっ、恵が啓子の背中を叩く。

「どうしたの」

恵が必死に指を差す。

「最近の若い者は礼儀がなくならん」

「うわっ、鬼紙のじいさん」

「なんだと」

「ご、ごめんなさい」

慌てて、二人は幸の後ろに隠れた。

「大丈夫だよ、啓子さんも恵さんも。ちゃんと、噛まないように仕付けてあるからさ」  
いと幸が鬼紙老に笑った。

「なんという無礼な女だ」

鬼沢老が怒って立ち上がりかける、

「こんにちわ」

どたどたと礼子に理英子、倉澤がやって来た。

「あかねちゃん回復ケーキパーティ、差し入れにジュースとお茶、買って来ました。ついでにチューハイとビールも」

礼子が元気に笑う、ふと、鬼紙老を見た。

「うわっ、幽霊」

「ばっかもーん」

男がこらえながらも笑った。

「御老、確かに白装束で、これでは幽霊ですよ」

「れ、礼子。こっち来い」

啓子が幸の後ろで必死に手招きした。

「どうしたの、お姉ちゃん」

「いいから、早く」

幸は笑うと、仕方なそうに言った。

「あかねちゃんのおじいさんだよ。ついでに言うと、啓子さんが以前勤めていた会社の社長の父親で、とっても気難しいおじいさん。でも、さびしがり屋の大金持ちだから、愛想しておいたら、別荘に招待してくれるかも」

「それじゃ、今日は仲良くなって、夏休みは別荘で避暑三昧」

三人が楽しそうに笑った。

ふうっと啓子がしゃがんでしまった。

「我が妹ながら知らないってのは強いなあ」

ふと、黒が玄関口を見た、気づいて白も三毛も玄関口を見つめる。

「千尋、千尋、招いてちょうだい。結界が強すぎて入れないわ」

門前からだろう、声が響いた。

幸が玄関口に向き直った。

「留守です、誰もいません、お引き取りくださあい」

黒が申し訳無さそうに幸の裾を引っ張る。

「もう、しょうがないな」

幸は玄関を開け、外に出た。

門の前に白澤がにこやかに笑みを浮かべ立っていた。

「ええっと、どちらさま、今日は留守で誰もいませんけど」

「まっ、小憎たらしい娘だこと。それより入れてちょうだい」

よほどに機嫌がいいのか、白澤は怒りもせずに言った。

「本日、一回限り、例え、忘れ物をしても、二度とこの家に入れませんが、一度だけお入りください」

むすっとした幸の言葉にも気にせず、白澤は家に入ると、玄関口に正座している孫娘に笑いかけた。

「元気そうね」

「はい、おかげさまで・・・」

代表し、黒が答えたが、かなりの緊張をしているようすだった。

とんとんと白澤は家に入ると、男のところへと向かった。

緊張がほどけたのか、黒を白も三毛も足を投げ出して、ほおっと溜息をついた、幸がその様子を見て、仕方無さそうに笑う。

「あら、鬼紙さん、こちらにいたのね。国のお偉方はかんかんよ。なよ竹姫から、今回の和平は延期と連絡があったって。鬼の中でも一大勢力のなよ竹姫を取り込みそこねたって、貴方の息子も怒っていたわ」

「大事な孫娘を鬼にくれてやるわけにはいかん」

白澤は気楽に笑う。

「稼ぎどきが続くから、私もその方がいいんだけどね。で、千尋、お願いがあるのだけれど」  
ふいに白澤が男に振り向いた。

「新たに精鋭を十人集めました。また、指導してちょうだい」

「ええっ」

「評判がいいのよ、それで、新たに増やそうということになって、私がお願いに上がったということ」

「白澤さん、そちらでなんとかしてくださいよ。私は人に教えるなんて柄ではないですから」

「何とかしようって思ったんだけどねえ、以前の精鋭はあちらこちらに派遣してね、教える時間がないのよ」

「それは単純に派遣されるのを控えて、指導に時間を割けばいいのではと思いますよ」

「まっ、冷たい。お願い、今回だけ、ね」

白澤が大袈裟に男を拝む。

「二回目の精鋭と言うことは、言い換えれば精鋭未満ということ」

幸は優しく笑みを浮かべると、白澤の前に正座した。

「それなら、おばあさま御自身が後進の指導を為されればいかか。無理を無さってぎっくり腰にならないよう、お気をつけあそばせ」

白澤のこめかみがひく付いたが、勤めて笑顔を浮かべる。

「どうやら、鬼紙老のお孫さんの回復祝いの様子。また、このお話は改めましょう」

幸は話は終わったと、立ち上がった。

「えー、皆さん。頭抱えたくなるほどのケーキがあります。最低、一人五個がノルマです。遠慮なく食べてくださいませ。ただ、今後、ここで喫茶店を始めます都合、それぞれのケーキについての感想をお願いいたします。順位三位までのケーキは、あさぎと幸が、そのケーキを参考に作り、お店に出す予定でございますので、しっかり、お食べくださいませ」

「ケーキ出してくるよ」

黒が冷蔵庫へ駆けだした。

「チョコレートケーキは私が一番最初に食べます」

白があたふた、黒の後を追う。

三毛は幸の背中に飛びつくと、幸の肩で囁いた。

「食い意地の張った姉さん達だなあ」

皆の笑い声が広がった、男は本当に幸せだと思った。

異形 月の竹 眠るモノ 一話

幸、白と旅する

月曜日 18 7月 2011 at 6:31 pm.

「あさぎ姉さん、お腹減ったよ」

黒がばたばたとあさぎのいる台所にやってきた。

「もうすぐ晩御飯だよ」

「お腹が減って待てないよお」

「しょうがないなあ」

あさぎが何げなく黒のお腹をとんと右手で押す。

「このお腹の柔らかさは脂肪ではありませんでしょうか。太り過ぎはだめだぞ」

「だ、大丈夫だよ。しっかり練習するよ。おもいきり動くよ」

あさぎは笑うと、戸棚を開けてみた、御煎餅があったはずだけれど。

「あれ、ないなあ、お煎餅」

「ごめんなさい、昨日食べちゃった」

黒が申し訳なさそうに言う、呆れたようにあさぎは笑みを浮かべたが、ふと、思い出して、床のバスケットを覗き込んだ。

「黒、幸が買い物のついでにこんなの、買って来てくれたよ」

あさぎが箱を取り出す。

「わっ、ホットケーキの素だ」

「ホットケーキを食べたい人」

「はい、はいっ」

黒が元気よく手を上げる。

「それじゃ、一枚だけ焼こうか」

「うん」

黒は思いっきりの笑顔で頷くと戸棚からお皿、冷蔵庫からメイプルシロップを取り出した。あさぎはノートを取り出すと、ホットケーキのページを繰り、粉と水の量を確認する、そして電子秤を取り出した。

あさぎは自分の作った料理をすべて控え、量や加熱の時間なども細かく記していた。

正確に粉の量を計る。

横で、黒がその様子を覗き込んだ。

「あさぎ姉さんはきっちりしているね」

「ん、だって、いつも美味しいのを食べて欲しいもの」

あさぎが黒に笑みを浮かべる。

「美味しいのを作りたい。折角、父さんや幸に御飯作るの任せてもらったんだから」

「でも、大変だね」

「そんなことはないよ、料理を考えるのはとっても楽しいし、洗い物はみんなですべてしてくれるんだから」

あさぎは片側焼けたホットケーキをフライパンの中で引っ繰り返した。

「もうすぐだよ」

あさぎの言葉に、慌てて、黒はお皿を差し出した。

「はい、出来上がり」

あさぎはホットケーキをすくい上げると、黒のお皿に置いた。

「ありがとう、あさぎ姉さん」

黒はテーブルにつくと、たっぷりとメープルシロップをホットケーキに掛け、食べ出した。

「美味しいよ、あさぎ姉さん」

「どういたしまして」

あさぎは笑みを浮かべると、夕食の準備を始めた。

鼻歌を歌いながらホットケーキを食べ終わると、黒があさぎの横でお皿を洗う。

「それじゃ晩御飯まで練習して来るよ」

「頑張ってるね」

「はい」

黒が元気よく返事し、駆け出して行った。

「そっか、お煎餅食べたの、黒だったのか。今度から、袋に名前を書いておかなきゃ」  
幸が笑みを浮かべ、テーブルについていた。

「幸、黒を叱らないでね」

「うん、食べ盛りだ、しょうがないよ。でも、黒は力み過ぎで無駄な力を出すから、余計にお腹が減るのかもしれない。そろそろ、力を抜いて動くことを教えようかな」

ふと、幸はあさぎを見つめた。

「あさぎ姉さん、頭痛や立ちくらみ、どうかな」

「大丈夫、幸の教えてくれた体操を練習するようになってから、とっても元気、嘘みたいに頭痛も消えちゃった」

「安心した。それじゃ、幸にもホットケーキを焼いてください。晩御飯まで待てないよ」

「幸もなんだか子供だ」

「母さん、ホットケーキを焼いてください」

「ホットケーキを焼くから、母さんは勘弁してください」

あさぎが幸せそうに笑った。

あさが幸のためにホットケーキを焼く、ふと、幸は白と三毛、二人の気配を感じた。

「はあい、出来たよ」

あさがお皿にホットケーキを載せ、お箸を添える。幸はスープ以外は箸を使っていた。

「あさぎ姉さんのホットケーキは特に美味しいよ」

照れ臭そうにあさが笑った。

「美味しそうな匂いがしますねえ」

ふっと、白が硝子戸を少し開け、中を覗き込んだ。

「母さん、ずるいよお」

三毛も同じく顔を突き出す。

「ん、うわっ、な、何を言うかな。これは白と三毛のためにあさぎ姉さんに焼いてもらったんだよ」

「ほんと、ですかあ」

白が笑いながら言った。

「もちろん。えっと、あさぎ姉さん、さっき言ったように、二人に取り分けるためのナイフをください」

「随分と説明的な台詞だ」

「何を言うかなあ、白、素直さは大切だよ。二人ともおいで」

二人はぱたぱたと台所にやってくると、ホットケーキを切る幸の手元を見つめた。

「母さん、ピザみたいに、六等分してください」

白はそう言い、幸の切った後からメイプルシロップをホットケーキにかける。

そして、そのうちの一つを摘まんで、

「母さん、あーん、して」

はぐっと一切れを幸が食べた。

「食べ物の恨みは怖いですから、特に母さんは」

白がにっと笑った。

「それじゃ、三毛はあさぎ姉さんにあげるよ」

慌てて、三毛は皿ごとあさぎに差し出した。

「それじゃ、ひとつ、いただきます」

あさがひとつ、摘まみ食べる。そして、笑みを浮かべた。

三毛もほっと笑みを浮かべると、お皿を白に差し出した。

「白姉ちゃん、どうぞ」

白もひとつ、取ると、三毛に言った。

「三毛もあーん、ってして」

三毛が素直に口を開ける、白が三毛に食べさせる。

「白姉ちゃん、美味しい」

三毛もひとつ取ると、白に差し出した。白もそれをくわえ食べる。



「こうして食べると美味しく楽しい」

白が笑みを浮かべた。

幸はそんな二人の姿を慈しむように眺めている。そして、そっと笑った。

ふと、幸は宙を見つめた。

「ん・・・、お父さん、電車に乗った。あさぎ姉さん、幸、駅までお父さんを迎えに行ってくるよ」

「帰って来る頃には晩御飯できてるよ」

「ありがとう、晩御飯、楽しみだ」

「あ、あのね。母さん」

思い詰めたように、三毛が幸に声をかけた。

「ね、一緒に行くの、だめ」

幸はその言葉に、三毛をじっと見つめた。いま、幸と男が二人でいられるのは、この男を迎えに行く時間くらいのものであり、その間は二人っきりにいってもらおうと暗黙の了解を得ていた。

幸はにっと笑うと右手を差し出した。

「今日だけだぞ」

「うん」

幸は立ち上がり、白に言った。

「白はあさぎ姉さんのお手伝い、それと、黒には御風呂の準備をするように伝えて」

「はい、わかりました」

白が立ち上がる。

「黒姉さんに声をかけて来ます」

白を見送ると、幸は三毛の手を取った。

「あさぎ姉さん、あとはお願いします」

「うん、ゆっくりしてきていいよ」

幸は三毛の手を握り、駅前、改札口で男を待っていた。

「この時間、男が多いな。こいつら全員、抹殺できたら気分いいだろうなあ、すっきりするぜ」

「母さん、だめだよ、他人に聞かれちゃうよ」

慌てる三毛を幸が愉快に見下ろした。

「末っ子の気遣い。姉さん、二人は個性が強くて大変だからな」

「でも、いまはとっても優しいよ」

「本当の姉妹になったってことだよ、それは、とっても素敵なことだ」

幸の言葉に三毛が頷いた。

男が改札から出て来た。

「お父さん、ここだよ、お父さん」

声が一瞬にして可愛く高くなり、幸が手を振って跳びはねた。男は笑みを浮かべると幸のところにやって来た。

「ありがとう。三毛も迎えに来てくれたんだ、ありがとう」

男が三毛に笑みを浮かべた。

「あ、あの、先生、朝はありがとうございます、まだ、ちゃんとお礼を言ってなかったから」

男は三毛の頭をなで、笑った。

「叔父さんはちょっとさ、三毛の背中を押したただけだよ」

そして男は幸を見て、小さく呟いた。

「いつもありがとうな、幸。父さん、とても幸せだ」

幸は思わずぎゅっと男の腕に自分の腕を絡めると、横に並んで肩を寄せた。

もう片方の手で、男は三毛の手を握ると歩きだす。

「そうだ、ケーキ屋さんに寄るよ。黒にケーキを頼まれたからさ」

「お父さんも甘いなあ」

「しょうがないよ。買って来てくれるに間違いはないって、確信の眼差しで見つめられたら、太るからだめって言いづらい」

男は少し声を出して笑った。

「最初の時の黒が、今では想像つかないな」

「いまはね、本当に楽しそうだよ」

「黒お姉ちゃんはとっても優しくて大切にしてくれます」

ふいと男は三毛から手を放すと、三毛の腰の後ろに手を添え、すくい上げるようにして、右肩に載せた。

「わっ、空気が違います」

三毛が楽しそうに呟いた。

「風が吹いていたんだ」

三毛の視界が広がり、夜へと移り変わる寸前の空が三毛の前に広がっていた。

「お父さんも」

「ん」

「家族してるね」

「そうだね、幸せだと思うよ。幸のおかげだな」

「雲、飛行機雲です」

二人が三毛の指さす方向を眺める。紫色の空を一条の筋が駆けて行く。

「空に一筆書きをしたようだな」

男がそっと呟いた。

幸が三毛に話しかけた。

「三毛、幸せか」

「とっても、幸せです」

男の肩に揺られながら三毛が答える。

「母さんもとっても幸せだ」

照れ臭そうに幸が笑った。

「こんなふうに静かに楽しく暮らし続けたいな」

幸が思いを込め呟いた。

「そうだな。本当にそうだ」

男がそっと頷いた。

「瞳さんが襲われている、護髪が反応した」

不意に幸が声をあげた。

「お父さん、行って来るよ」

「場所は何処だ」

「瞳さん宅の前」

「なら、父さんが行こう。幸は家に戻りなさい」

「でも」

「幸、父さんの今日の記憶を読みなさい」

「いいの」

男が頷いた。

幸が男をじっと見つめる。そして、頷いた。

「お父さん、お願いします」

ずっと幸の姿が消えた。

「母さんが消えた・・・」

「先に帰ったのさ。三毛、叔父さんの頭にしっかりと掴まっていなさい」

「は、はいっ」

男と三毛の姿も消えた。

「うひゃひゃやあつ」

三毛が大声で叫ぶ。

「左脇腹、打撃」

「はいっ」

男の声に三毛は着地すると、ずっと黒い服を着た男の脇腹に右手を添えた。一瞬、三毛の全身が写真のピンぼけのようにぶれる。黒服がすっと真下に落ちた。

瞳を拉致しようとした黒服は三人。一人は瞳自身が倒したが、後二人に瞳は苦戦していたのだった。

「顎、回し蹴り」

ずっと息を飲むと、三毛はふわりと浮かび上がり、瞬間高速回転、左脚で相手の顎を蹴る。棒立ちになり、そのまま、もう一人の黒服が崩れ落ちてしまった。

ほおっと三毛が息を吐いた。

「初めてでこれだけ動けば充分。お疲れさま」

三毛はしゃがみ込むと、そのまま、足を投げ出してアスファルトの上に座り込んでしまった。

「先生、ひどいですよ」

「ん、どうした」

「まさか、ここに現れた途端、相手に向かって、先生に投げ飛ばされるとは思いませんでした」

「ごめん、ごめん」

男が楽しそうに謝った。

「ただ・・・」

「ん」

「母さんなら、もっと強く投げ飛ばして、三毛は向こうの壁にぶつかっていたかもしれません。

それを思うと先生で良かったと思います」

男がくすぐったそうに笑った。

「否定・・・、できないな」

男は、道路の端に座り込んだままの瞳に向き直った。

「瞳さん、お疲れさま。少し、打ち身があるようだね、とんだ災難だったな」

「先生、ありがとうございます。でも、何がなんだか・・・」

「神崎さん、データーを盗まれたらしい。政権が変わって、この世界も新旧の勢力が随分と賑やかなことをしている。彼の対抗組織が個人情報を入力して、個別攻撃をし始めた、神崎さんも現役を守るのに手一杯らしいよ」

「そんな・・・」

瞳は俯き、唇を噛んだ。

「さて、三毛。どうだ、落ち着いたか」

「はい、大丈夫です」

「悪いけど、瞳さん宅で待っていてくれ」

「先生は」

「二度とこういうことが出来ないように、ぎゅうっとしてくるよ」

「先生、怒ってますね」

「うーん、ちょっとね」

男が普通に歩きだす、ふわりと闇に姿を消した。

三毛は立ち上がると、お尻の土を手でぱたぱたと払い、瞳の前に立った。

「初めまして、瞳さん。母さんから瞳さんのこと、伺っています」

「えっと、母さんって」

「私は先生の娘、幸の娘で三毛と申します」

一瞬、瞳が息を飲み込んだ。

「え、幸さんの」

「あ、母さんの名誉のために言いますが、貰われて来ました、えっと、養女です」

三毛は困ったように笑みを浮かべたが、少し離れたところに転がっている、瞳のだらう、スーパーの袋を拾い上げると、うれしそうに笑った。

「奇跡ですよ、瞳さん。たまご十個パック、一つも割れていません」

幸は家の道向かい、電信柱の天辺に腰掛けていた。

「戦争時の不発弾が見つかったということで、地域封鎖。警察や消防署も動いている。相手の後ろ盾は大きい方が楽しいねえ」

幸は呟くと、足元を見下ろした。

およそ五十人の黒い姿をした奴らが門扉に向かって構えていた。門扉の内側には白、数歩出て、黒が杖を構え、相手を睨みつけている。しかし、息が荒い。

倒れた男たちが十人はいるだろう、黒の体力も消耗が激しく、お互い、膠着状態だ。

「黒姉さん」

白が叫んだ。

「大丈夫だ、白。母さんや先生が帰って来るまで家を守り抜くんだ」

微かに黒の杖の先が震えている、緊張と体力の低下だ。男達は手に手にナイフや刀を持っていた。銃を使わないのは隠密行動のためか。

いきなり男達の後ろから悲鳴が上がった。次々と雪崩のように男達が倒れて行く。ふいと、幸が黒と睨み合っていた男の隣りに立つ。

「黒、白、お疲れさま」

幸はにいと笑うと、横に立つ男の脇腹に手を差し込んだ。男が恐怖に満ちた眼差しで、自分の脇腹を眺める。

「殺さない方が良く、自分の魂に傷がついてしまう。だから、殺すな。殺すと、母さんみたいになってしまうぞ。ただな、倒れた奴が起き上がって来たら面倒だろう。だから、半殺しにはしておけ」

幸が手を捻った、瞬間、男が叫び声をあげてのたうちまわった。幸は、男のあばら辺りの皮膚と骨の折れたのを無造作に投げ捨てると、倒れていた男の上着で手を拭く。

「白」

「はいっ」

「あさぎ姉さんが大変だ、介抱してきなさい」

「わ、わかりました」

あたふたと白が家に飛び込んだ。

「黒」

「は、はい」

「びびったか」

にいと幸が笑う。

「母さんにびびった」

呟くように黒が答えた。

「この野郎、正直すぎるぞ」

幸は黒の頭を撫でようとしたが、両手がまだ血で赤く染まっているのに気づいた。

「手を洗って来るよ、黒も家に戻って休みなさい」

「か、母さん、この人達は」

「人達ってか、ま、そこが黒の良いところかもしれないな。連絡係が一人いた、そいつには手を出していないからさ。回収に来るだろう、一時間も経たないうちに何事もなかったようになってるさ」

幸は気にすることもなく、庭へ回り込み、洗い場へと手を洗いに行く。

「母さんみたいに強くなりたい。しっかりと妹達を守りたい」

幸の後ろ姿を見送りながら、黒が小さく呟いた。

幸は外で手を洗うと台所へ向かう。白が倒れたあさぎを抱き抱えていた。

「あさぎ姉さん、あさぎ姉さん」

耳元で白が囁いていた。幸は白の向かいに座ると、あさぎの手を両手でしっかり握った。そして、あさぎの耳元で語り出した。

「あさぎ姉さん。妹の幸です、あさぎ姉さんは幸の真ん中のお姉さんです。一番上のお姉さんは幸乃さん、ちょっと怖いお姉さんで幸は逆らうことが出来ません、あさぎ姉さんは次女、とっても優しいお姉さんです。声をかけていたのは白、幸の娘です。幸には三人の娘がいます。長女は黒、真ん中が白、末っ子が三毛です。お父さんがいます、お父さんはとっても優しい人です、思い出しましたか、あさぎ姉さん」

ゆっくりとあさぎが目を開いた。

「ごめんなさい、幸さん。なんだか、急に自分が誰だかわからなくなって、頼りなくて、不安になってしまって、生きていいのかどうかもわからなくなってしまって・・・」

「それは、時間が解決してくれるよ。ね、あさぎ姉さん」

そっとあさぎが微笑んだ。

「ありがとう、幸。ごめんね」

あさぎは白に顔を向けると笑みを浮かべた。

「ありがとう、白。白の声が聴こえて、切れかけていた何かが繋がった気がしたよ。白、ありがとう」

「どういたしまして」

囁くように陰りのある笑顔で白が答えた。

「うわっ、どうしたの。あさぎ姉さん」

黒が驚いて声を上げた。

幸が微かに笑みを浮かべた。

「黒の食べ過ぎを心配して倒れたのかも」

「え、あっ。だ、大丈夫だよ。あさぎ姉さん、黒、太ってないよ。歯も磨いてるよ」  
あさぎがくすぐったそうに微笑んだ。

「それなら、安心だね」

玄関の戸が開く音。

「ただいま」

男の声が玄関口でした。

「黒姉ちゃん、お土産だよお」

三毛がぱたぱたと部屋に戻って来た。

「黒姉ちゃん、先生がケーキ買ってくれたよ」

三毛が黒に両腕に一杯に抱えたケーキの箱を差し出した。

「いやっほおー」

黒が喜色満面に喚声をあげた。

「黒の単純さは救いでもあり、毒でもあるな」

幸が笑った。

黒のケーキ踊りを眺めながら、白がくすぐったそうに笑う。

「黒姉さんはとっても真面目です。嘘やごまかしができないから、却って、感情に針が大きく振れてしまう。でも、それが、ちょっと、うらやましい」

「そういうのは一人で充分、勘弁してくれ」

幸も楽しそうに笑った。

「ケーキ踊りもなんだか定着したなあ」

男が黒と三毛、ケーキ踊りをする二人を眺めた。

「お父さん、お疲れさま」

幸が可愛らしく男に声をかけた。

「ん、ただいま」

「どうなった」

「無事済んだかな」

男がそっと笑みを浮かべた。

「あさぎ、どうかな」

「ごめんなさい、お父さん。なんだか、急に。でも、皆が戻って来てくれて、今は元気。さっきまでが嘘のようです」

「そっか、良かったね。ん・・・、白」

ふいと男は白を見つめた。

「はい・・・」

「極度の緊張が残っているな」

男は白に寄ると、その後ろ首筋に手のひらを何か払うように動かした。

「どうだ」

「体が暖かくなりました、どうしたんだろう」

「筋肉がぎゅっとしてしまって、流れが滞っていたのさ、指先や足先の冷たいのも、すぐに暖かくなるだろう。黒は・・・、あれは大丈夫か。あれだけはしゃいでいるなら」

ふと、あさがぎが呟いた。

「なんだか、とっても嬉しい」

「ほんと、そうだよ」

幸がしっかりと頷いた。

ここ最近の習慣、男が自室で一人で眠り、あさがぎと幸、黒達五人が広間で寝る。あさがぎと幸は両端で、その間を、三人がそれぞれ、好きなところで寝ていた。

「ね、母さん」

白が少し不安げに言った。

「母さんの横で、寝て良い」

「いいよ、白。おいで」

灯りを消し、眠りにつく。

白がぎゅっと幸の腕を抱き締め、小さく幸に囁いた。

「母さん、白は怖くて動けませんでしたが、あんなに教えていただいたのに。白は役立たずです、ごめんなさい、ごめんなさい、母さん」

幸は少し身を起こすと、もう片方の腕で白をしっかりと抱き締めた。

「心配することはないんだ、白は大切な母さんの娘だよ」

夜中、男は襖の向こうの気配に目を覚ました。

「いいよ、幸。入りなさい」

男が体を起こすと同時に襖が開く。幸が泣き出しそうな顔をして立っていた。

「おいで、幸」

幸は男の部屋に入ると、後ろ手に襖を閉める。

そして男の横にひざまづく、何も言わず男にしがみついた。

「白がごめんなさい、っていうの」

男はそっと幸の頭を撫でた。

「なるほどね。白も不甲斐ない自分自身に戸惑っていたんだな。それだけ、三人とも、しっかりと成長しているというわけだ」

「お父さん、どうしたらいいんだろう。どうしたら白に自信を持たせることができるのかな」

「そうだね」

男は笑みを浮かべると、軽く幸の肩をたたく。そっと幸が顔を上げた。

「今まで幸はね、三人の指導者として、これを覚えなさい、身につけなさいと教えて来た、つまり、一歩先から三人を引っ張って来たわけだ。ただ、彼女たちも成長して、個性というかな、人格がはっきりしていくようになってね、画一的なやり方が合わなくなったのかもしれないな。幸、白にはね、一度、同じ位置で寄り添ってみたらどうかな」

「寄り添う」

幸が男の言葉を重ねた。



「白がね、自信を持てるようにさ」

幸はそっと笑みを浮かべると、小さく頷いた。

「さあ、幸。白の横に戻ってあげなさい。幸がないのに気づいたら、白があわてるぞ」

幸はそっと男に口づけすると、笑顔を浮かべた。

「お父さん、起してごめんなさい」

「どう致しまして。幸の泣いたの、久しぶりに見たよ」

「もお・・・、お父さんったら」

「嫌です、白は何処にも行きません」

朝、白の大きな声に男が部屋を覗き込むと、白が部屋の柱にしがみついていた。黒と三毛はおろおろとしているし、幸は困り果てた顔をして座り込んでいる。

あさぎは、白の大きな声に頭痛だろう、うずくまっていた。

男はあさぎが普通に生活できるようになるまで、まだ、数カ月かかるだろうと冷静に判断をする。

男は白の横に座ると、にっと笑みを浮かべた。

「白は幸の娘で、大切な家族だ。だから、何処にも行っちゃだめだぞ」

「え・・・」

白が驚いたように男を見つめた。

「幸と一緒に旅に出ようって言ったのかな」

「は、はい」

「で、捨てられると思ったか」

白はその言葉が口に出せず、ただ、頷いた。

「白も黒も三毛もさ、随分成長した。それは、叔父さんも見ていて思うよ、しっかりしたなあってね。ただ、それぞれね、個性がはっきりしてきて、今までと同じ教え方ではだめだと幸は思ったんだろう。だから、幸は白と何日かさ、二人っきりで過ごすことで、何かを見いだしたいって思ってね、旅をしようって言ったと思うよ。もっとも、旅っていっても、二、三日のことだろうけどね」

ゆっくりと、白が柱から手を離した。

「しばらく幸をお願いするよ。幸はさびしがり屋だからな、泣き出したら叔父さんの代わりになぐさめてやってくれ」

男は白の頭を軽く撫でると、ふと思いついて言った。

「白、髪の毛、一本、くれるかな」

「はい・・・」

白は髪の毛、一本を抜くと、男に手渡した。男はその髪を鴨居に結び付ける、溶け込むように髪の毛が消えた。

「白がどんなに迷子になっても、時と距離を越えて、白にこの家への道筋を教えてくれるよ」  
初めて、白は安心したように笑みを浮かべた。

「幸、準備をしなさい」

「はい」

幸があわてて返事をした。

「白、せっかくだ、美味しいもの、たくさん、食べてきなさい」

急に黒が叫んだ。

「美味しいもの。ずるいよ、黒も美味しいもの食べたい」

男が笑った。

「あさぎの作ってくれるご飯、黒は美味しくないのか」

「もちろん、美味しいよ」

「なら、黒も毎日、美味しいものを食べているじゃないか」

「え。あ、そうか・・・」

一瞬、黒は納得しかけたが、あわてて声をあげた。

「その美味しいじゃないよ」

「うーん、黒もしっかりしたなあ、ごまかしが効かなくなってきた」

男は嬉しそうに笑うと、黒に言った。

「今から叔父さんが一から十まで数えます。黒は叔父さんが十まで数える間に、ちょっと贅沢で普段は食べないような晩御飯を言いなさい。一、二、三、四」

黒があたふた、考えを巡らせる、

「えっと、あの」

「早くしないと、普通の晩御飯になってしまうぞ、五、六」

「ぴ、ピザ、ピザが食べたい、空揚げやソーセージや、いっぱい載っているピザ」

男は頷くと、あさぎを見る、ほっとしたように、あさぎは顔を上げていた。男と黒の会話が空気を和ませ、あさぎの頭痛を取り除いたのだろう。

「あさぎ、ピザ、いいかな」

「はい、頑張って作ります」

あさぎがほっとしたように笑った。男がついとカレンダーを見る。カレンダーには印があった。

「啓子さんとあかねちゃんが来るのか。なら、黒」

「はい」

「ピザに載せるもの買いに、啓子さんと一緒に買い物に行ってください。それと、ピザの生地をこねるの大変だから、あさぎの手伝いをする、いいかな」

黒が満面の笑みを浮かべて頷いた。

「さてと、三毛にはまだ聞いていなかったな、何が食べたい」

「三毛は特には何も。ピザも大好きだし」

「三毛は控えめだな。でも、妹があまり控目だと、黒姉ちゃんは妹に気遣って、ピザいらなそうです、大根のお漬物だけでいいですっていうかもしれないぞ」

にと男が黒に笑いかけた。

黒が必死の顔をして、頭を横に振る。

「ないない、そんなことない」

緊張した声で黒が答えた。

慌てて、三毛が言った。

「手巻き寿司が食べたいです」

男は頷くと、黒に笑いかけた。

「今晚はピザ、明日の晩は手巻き寿司、良かったな。黒」

「もう、先生は意地悪だ」

黒がほっと安心して、足を投げ出して座った。

男が愉快地笑みを浮かべた。

「お父さん、それじゃ出掛けます」

幸の声に男が振り返ると、幸は黒のカンフー服、白はそれだけは嫌だと拒絶したのだろう。茶系統のチェックのワンピース。

「幸は相変わらずだな」

男が呆れて言った。

「白にも勧めたんだけどね、絶対嫌だって」

「母さんの趣向は理解できません。そんな格好でうろうろしたら、警官に職務質問されてしまいますよ」

「大丈夫だ、白。その警官は話の途中で意識を失い、倒れてしまうだろう」

にいと幸が笑みを浮かべる。

「白、幸を頼んだよ」

男は仕方なく笑った。

幸と白は列車、二人掛けの座席を隣り合って座っていた。白が窓際で流れる風景を眺めている。幸は通路をじっと見つめていた、

「来たっ」

車両のドアが開き、カーゴを押して売り子がやって来る。

「白、弁当を買おう、それにお菓子とお茶も」

「母さん、朝ごはんを食べてから一時間と経っていませんよ」

呆れたように、白が言った。

「何言うかな。法律で売り子さんが来たら弁当を買わなきゃならないって決まったの知らないかなあ」

「なるほど知りませんでした、日本以外の、何処の国で決まった法律ですか」

「幸王国、憲法八条三項にちゃんと書いてある」

幸は嬉しそうに笑うと、売り子を呼び止めた。

「お弁当とお茶、二つずつお願いします、それと、そのお煎餅も」

幸は両手で受け取ると、弁当一つを白の膝に置き、二人の前の座席の背中にあるテーブルを倒して、それぞれにお茶を置いた。

「なんだか、一気に旅気分、いいなあ」

「あの、母さん」

「ん」

「まだ教えてもらっていません、目的地とか」

幸はお弁当の紙包みを広げながら、思い出した。

「そういえば、旅に行こうってそれだけだったよね」

「先生は何か伝えようとする時、順を追って分かりやすく説明してくれます。母さんは大事な話を省略してしまいます」

「柱にしがみついている白、どうしようかって悩んだよ」

「恥ずかしいこと思い出させないでください、本当にあさぎ姉さんにも迷惑を掛けてしまいました」

「ごめんな、白。反省してる」

幸はふと手を止めると目をつぶった。

幸はふと手を止めると、俯き目をつぶった。白がふっと幸の手に自分の手を重ねる。

「ごめんなさい、白は黒姉さんみたいに陽気でもないし、三毛みたいに素直にもなれないんです。でも、母さんが大好き、とって」

不意に幸は片腕を白の肩にまわすとぐっと引き寄せた。

「ありがとう、白」

啓子は家続きの元事務所、事務机などは取り去られ、広々とした中で、うーんと唸りながら、立て掛けた、原木を縦に切ったままの分厚い板を見つめていた。

喫茶店のテーブルにする予定の板である。おおよその、乾燥は済んでいた。

啓子の隣りではあかねがしゃがんだまま、ぼおっとそれを眺めていた。

「思っていたより幅がありますね」

あかねが顔を上げ、啓子に言った。

啓子は頷くと、メジャーで横幅を測る。

「並んだ四人が、向かい合って、うん、八人ってとこだ」

「おじいさまも、もう少し小さいものを送ってくだされば」

板は鬼紙老が、孫が世話になっているからと送って寄越したたものだった。

「他の調度品を工夫すれば、大丈夫だよ。案外、名物になるよ、これだけの物を使っている店ってそうはないからね」

そう言って部屋を見渡す。

「あとは、壁をどうするか、和風にしてしまうのもありだし、無国籍風もいいかな」

「あさぎさんの希望が一番でしょうね」

あかねは笑みを浮かべると、ゆっくり立ち上がった。

「あさぎさんが料理を作って、あの娘達がウエイトレス。なんだか、私達も、忙しい時のアルバイト要員として数に入っているらしいですよ」

あかねが楽しそうに笑った。

「先生がウェイターって当初の計画よりかはずっといいよ」

「お客さん、怖がってしまうのでしょうか」

「うーん、ってより」

啓子はふと言葉を止めて考えた。

「多分ね、先生の存在に誰も気づかないと思う、そして、いきなり耳元で、囁くような、いらっしやいませって声が響いて、お客さん、飛び上がって驚くという」

「それって、啓子さん、話をおもしろくしようとしていませんか」

「ちょっとね」

いたずらげに啓子が笑った。

「啓子さん、あかねちゃん」

ぱたぱたと三毛が走り寄って来た。

「よう、三毛助、どうした」

啓子が嬉しそうに笑った。

「その呼び方はやめてください、もお」

「あはは、ごめん」

「啓さんはすぐからかうんだから」

啓子は嬉しくてたまらないと、三毛を抱き上げた。

「三毛は可愛いな。そうだ、三毛、ウエイトレスはエプロンドレスで、猫耳と尻尾を出してって、それいいよ、受けるぞ」

暴れるように三毛は啓子から脱出すると、ため息をひとつついて、座り込んだ。

「それはもう既に母さんに散々、試させられました。啓さんは母さんと一緒ですよ」

「で、結果は」

「耳も尻尾もリアルすぎるという結論で、不採用」

あかねも笑みを浮かべると、そっと三毛の頭を撫でた。

「お疲れさま、三毛ちゃん」

「はい」

三毛が疲れたように頷いた。

「メイドにしてしまうと、男性客ばかりになってしまうよね、考えてみれば」

ふと気づいたように啓子が言う。

「母さんも同じこと、言っていました、ゲロゲロだあって」

「おおい、早く来てよ。お腹減ったよ」

黒があたふたやって来た。

あっと三毛が二人を呼びに来た用事を思い出した。

「啓子さん、あかねちゃん。ごめんなさい、おやつです、あさぎお姉さん作ったケーキ。お店の

と同じですよ。とっても美味しいです」

「ここは」

白が小さく呟いた。

山の頂上近く、いくつもの墓石が並んでいた。青く抜ける空の下、来る人もないのだろう、背の高い墓石もつる草や雑木に埋もれかけている。

「限界集落と呼ばれている、もっとも、最後の住人が山を下りて1ヶ月ってとこだ、だから、正確には元集落だな」

幸は墓に背を向け、見下ろす。いくつもの山が重なり、その向こうには、青色、ほんの少しだけ海が見える。

そして振り返ると、一つの墓石の前に立ち、ぐいっと絡まった蔓草を引きちぎる。

「草生えたままにしておくと、お父さんに叱られてしまう」

「母さん、それじゃ、ここは」

「母さんが生まれたところ、全ての始まりの場所だった」

白が慌てて、幸を真似、草を抜いていく。

現れた墓石は風化が進み、角が欠け、彫られた文字も読みにくい。

「読んだってしょうがないよ、母さんは捨てられたんだからさ」

文字を覗き込む白に、幸がそっと笑みを浮かべた。

振り向く白に、青空を背景にした幸が笑みを浮かべる、白には幸が人を越えた、神や天女に見えた。

「まあしかし、それでお父さんとこうして暮らすことが出来て、それに良い娘も出来た。そういう意味では幸だったのかもしれないな」

「母さん、綺麗・・・」

ふともらした白の言葉に、にっと幸が笑った。

「娘に褒めてもらえるのは嬉しいものだ」

幸は、麓で買ったペットボトルの栓を取ると、水は墓石に掛けた。

「また、一年したら来るさ。さて、白、準備は良いか」

幸はペットボトルの栓をすると、墓石の横に置いた。

白は大きく深呼吸をすると、幸にうなずいた。

「何人いるか、わかるか」

「四人」

「離れている奴を合わせれば六人だな。ここへは単純に墓参りだけのつもりで来たんだけど、なかなか、楽しいことになった」

幸は空中から杖を取り出し、白に手渡した。

「襲われる理由はわからないけど、折角だ、練習相手になってもらおう」

「はい」

「相手の間合いは半歩前進で崩せ、以上」

幸がふわっと後ろに下がる、白は右半身上段に杖を構えた。雑木や墓石にその姿は見えないが、前に三人、後ろに一人。

ふいっと白が横目で、背後を眺めた。

黒装束、まるで映画から抜け出したような忍者が飛び込んで来る、片手に忍者刀、直刃の凶刃が背中から白の胸を貫く、白は反転し、杖で刃を流しつつ、相手の首に杖の先を差し出した、瞬間、身を沈め、敵の顎に杖の先を絡めつつ、その上半身を後頭部から地面に叩きつける。

白の眼の端で影が移動した。

影に杖を突き出す、三人の内、一人の太ももを貫いた。

「ごめんなさい」

白が思わず呟いた。残った二人の刃が頭上にきらめく。瞬間、白は二人の忍者に身を寄せた。なみゆいの特徴は接近戦にある、白は相手の胸に突き放った肘をそのまますりあげる、前のめりに一人が倒れた、ずっと白が姿勢を落とすと同時に、独楽のように回転し、蹴り足が相手の膝を粉碎した。

「お疲れさま」

幸がぎゅっと白の手首を握った、白の腕が微かに震えていた。

「母さん、白はなんだかとても怖いです」

幸がしっかりと白を抱き締めた。

「大丈夫だよ、白」

幸はゆっくりと体を離すと、笑みを浮かべた。

「今晚は温泉でゆっくりしよう、行きたいところがあるんだ」

「あ、あの、この人たちは」

幸は無造作に杖を相手の太ももから引き抜く、そして杖を消した。

「うーん。ただのさ、歴史や廃墟のマニアってのかな。白や母さんがそんなだったら、こっちが地面に倒れている側だ。それはわかるな」

「はい・・・」

「なら、このままほっといてもいいんじゃないか」

「たしかにそうなんだろうけど、でも」

戸惑う白に、幸は困ったように笑った。

「黒も似たようなこと、母さんに言ったよ。白と黒は甘いなあ、あんまり甘いこと言っていると寝首をかかれるぞ」

幸は呻いている忍者の太ももに触れた、見る間に流れていた血が止まる。

「そっちは首がずれたか、むちうちだな」

幸が足先でその忍者の背中をとんと軽く蹴る。

「あとの二人はほっといても眼を覚ますだろう。さて、指導役の二人もとうに逃げ出した。いくぞ、白」

「はい」

「なんだか白が急に元気になったな」

黒は一抱えもあるピザの生地を力いっぱい、こねていた。

「黒、大きいよ。三つくらいに分けた方がやりやすいよ」

あさぎが心配そうに言ったが、黒はにっと笑う。

「武術の練習にもなるから、大丈夫だよ。ね、あさぎ姉さん、おっきなピザ、できるかな」

「五十センチのピザが五枚は焼ける予定」

黒が心の底からの笑顔を浮かべた。

「本当に黒は食べるのが好きだね」

「なんか、食べるものがあるってだけで安心してしまうんだ。ここで暮らすようになってから、とても幸せで、安心でいられる。自分が居てもいいところがあるってというのがとっても素敵なんだ」

あさぎはふと手を止め呟いた。

「本当にそうだね」

「あさぎ姉さん、泣いてるの」

心配そうに、黒があさぎの顔を覗き込む、あさぎは手の甲で涙を拭くと笑みを浮かべた。

「助けてもらわなかったら、道でそのまま消えていたんだなって思うと、なんだかね」

「良かったね」

黒がにっと笑った。

「とっても良かった」

あさぎも笑った。

「黒姉ちゃん、あさぎ姉さん」

三毛が台所にやって来た。

「啓子さんが石釜に火をいれたよ。これから釜を温めて、一時間くらいでピザが焼けるようにするって」

「それじゃ、海老や帆立も下ごしらえしなきゃね」

あさぎが鍋を取り出す。三毛が買い物袋を覗き込んだ。

「黒姉ちゃん、いっぱい買ったね」

「おう、三毛もいっぱい食べるよ」

「うん」

嬉しそうに三毛が笑みを浮かべた。

「啓子さんもあかねちゃんもいっぱい食べるって」

「みんなが、お腹いっぱい食べるって楽しいなあ」

黒が心から嬉しそうに笑った。



釜の火を見つめながら啓子が言った。

「面白いなあってつくづく思うよ」

あかねは啓子の隣りでしゃがんでいる、少し、日が陰りだし、二人の顔を釜の火が赤く照らしていた。

「何がですか」

「人生」

啓子はそう言い切ると、少し恥ずかしげに笑った。

「啓子さん、人生を語るにはまだまだ早いですよ」

あかねも楽しそうに笑った。

「でもさ、大学出て、就職したはいいけど、その就職先が悪の組織だよ、それも、下っ端の戦闘員だけ、覆面に全身タイツ。それが、襲う相手の先生に投げ飛ばされて、今じゃ、農業の手伝いして回って、こうやってさ、先生宅でピザを焼こうとしているんだから、面白いっていうか、不思議だ」

「縁があったのでしょうか」

「運命論者じゃないけど、そうだね。偶然が単純に重なっただけって思うより、縁が在ったと思う方が嬉しいな」

そっとあかねが笑みを浮かべた。

「どうしたの、あかねちゃん」

「啓子さんって可愛いなって思いました」

啓子は気恥ずかしそうに笑うと、釜に薪をほうり込んだ。

「参った、中学生に負けた気分だ。あかねちゃんがまだ中学生っての、なんか反則だよ」

あかねが声を出して笑ったが、ふと、振り返った。

「先生、駅に着きました、幸さんの代わりに迎えに行ってきます」

「なら、黒か三毛と一緒にいった方がいいよ」

「ええ、頼んでみます」

男が紙袋を片手に、駅近くの商店街前を通り過ぎた時、あかねと黒があたふたと走り寄ってきた。

「おじさん、ごめんなさい。迎えに来るの、遅くなってしまいました」

あかねが息をはずませ言った。

「あかねちゃんに黒も、わるかったね。迎えに来てくれたのか」

「先生、ちゃんと手伝ったよ。帰ったら、ピザ、いっぱい食べよう」

「そっか、それは楽しみだな。なら、今日はケーキ屋さんに寄らなくてもいいかな」

「え・・・」

一瞬、黒が硬直した。

「そうだ、ケーキ。ケーキ忘れてた。ピザの後はみんなでケーキ」

「おじさん、余計なことを言ってしまいましたね」

あかねが笑った。

「ほんとだな。でも、黒の幸せいっぱいにケーキをほお張っている姿を見るのも楽しいからさ」  
三人は駅前の洋菓子店へ。店内には椅子とテーブルがあり、男は持ち帰り用にケーキを注文した後、テーブルについた、向かい側にあかね、その隣りに黒が座った。

「珈琲だけ飲ませてくれ」

男は笑みを浮かべると、珈琲を注文し、二人にはジュースを注文した。

「先生、それなに。おやつ」

黒の言葉に男は笑みを浮かべると、袋から箱を出した。

「食べないでくれよ。カメラ、デジカメだ」

「おじさんがデジカメを」

「まあね。今日、取引先の会社へ書類を届けてね、ふと、その会社の社長の机に家族の写真が写真立てに入っているのを見てさ。たまらなく、家族写真が取りたくなった。で、あたふたと電気屋さんでデジカメと小さな三脚を買って来たわけだよ」

「おじさんの写っている写真って貴重ですよ。その筋に売れば、ちょっとした家の一軒くらい建ちますよ、土地付きで」

男がくすぐったそうに笑った。

「悪いことをし過ぎたと、反省の日々だよ。まっ、幸と白が帰って来たら早速、写そう。あかねちゃんも入ってくれるかい」

「もちろんです」

あかねが笑みを浮かべた。

「先生、母さんと白は元気にしているかな」

「まだ、大丈夫じゃないかな」

男がそっと笑みを浮かべた。

「すごいホテルですよ」

白はぼおっとロビーを見渡した。高級老舗ホテルのカウンターでチェックイン。幸はサインをすると白に笑いかけた。

「な、だろう。前にお父さんと泊まった時は中の上だ。部屋に露天風呂まであったんだ、もっとも、今回は予算の都合で一番安い部屋だけだな」

白は幸に駆け寄ると、幸の服の裾をつつと引っ張った。

「ん」

「母さん、お金、ほんとに大丈夫」

「大丈夫、お父さんがいっぱい出してくれたんだ」

「相変わらず、先生は母さんに甘いですね」

「だって、可愛い愛娘ですもの、ふふ」

慌てて仲居が一人、カウンターへと小走りにやって来た。

幸と目が合った瞬間、立ち止まり、仲居が呟いた。

「幸ちゃん」

幸がにっと笑うと大きく手を振った。

「お母さん、久し振りです」

幸の声に走り寄ると、仲居がぎゅっと幸の手を握った。（異形六話御参照ください）

「わあ、本当に幸ちゃんだ。なんか、ちょっと大人っぽくなったよ」

「だって、三年ですよ、幸も少しは成長しますよ」

幸がくすぐったそうに笑う。

「気にしていたんだよ。だって、住所もわからないし、急に用事ができたって帰ってしまうしさ」

「あはは、ごめんなさい」

「瞳さんも元気にしているかい」

「しっかり主婦してますよ」

「お母さんこそ、手紙出した、お嬢さんに」

「もちろん。返事ももらったよ、出して良かったよ」

「気にしてたんだ、なんだか、安心した」

ほっとしたように幸は笑みを浮かべると、戸惑っている白を見つめた。

「母さんのお母さんだ、挨拶して」

「えっ、あ、あの。白と言います。えっと、娘です」

仲居が目を見張って驚いた。

「幸ちゃんにこんな大きな子が」

「いえ、あの、養女ですから。決して、母さんから産まれたわけじゃ」

「白は母さんの娘だ、誰から生まれようと関係ないよ」

幸は笑うと、仲居に言った。

「娘と旅行中なんです」

「いいねえ、そうかい。あ、あたしとしたことが、カウンター前で立ち話なんて。部屋まで案内しなきゃね」

「母さん、ゆかた、着ないの」

「ああ、男の眼が煩わしいからさ」

仲居が部屋を後にし、白はゆかたを前に、思案していた。

「白だけ、着るの、変かなあ」

幸は立ち上がると、白にゆかたを羽織らせ、正面に立つ。

「いい感じだ、可愛いよ」

はにかんだように、白が笑みを浮かべた。

「服脱いで、ゆかたを着な。風呂に行こう、それから、晩御飯だ」

「うん」

白が素直に返事する。

幸は白の、普段は見せない一面を見た気がした。

「なあ、白」

「はい」

「母さんが白や黒、三毛にさ、武術や呪術を教え続けたのは、自分自身の身を守ることが出来るようにというためだ。そして教えられることはほぼ教えたはずだ、後は教わったことを磨いて、再発見をすればいい」

白がそっとうなずく。

「白、活法を学んでみるか。怪我や病気を治す技だ」

すっと白の顔に表情が消え、じっと幸の眼を見つめた。

「お願いします、お母さん」

本来、夕食は階下での宴会場となるのだが、特別に同じ部屋での食事となった。幸がそうしたいと、仲居に頼んだからだ。

「お母さん、幸も料理、運ぶよ」

「だめだめ、幸ちゃんはお客さんなんだから」

仲居は笑みを浮かべると、てきぱきと食事の準備をして行く。

白は幸の仲居への優しい眼差しに、少し言葉を変えるだけで、こんなにも他人と良い関係になれるのだと学んだ、自分自身の今までの言葉を思い出し、反省しなきゃと思うが、母さんだって反省しなきゃなと思う。他人によって言葉遣いを変えるよりも、誰に対しても優しくありたい、少なくともあきらかな敵以外は。ふと、敵という言葉が浮かんだ時、黒姉の戦う姿を思い出した、黒姉さんに三毛、今頃、ピザをほおぼっているだろうか。

「白、御飯食べよう」

幸の声に白が顔を上げた。

「いただきます」

白はお膳につくと、幸と向かい合う。

「なんだか、変な感じ」

白が笑った。

「お膳を前に向かい合って食べるって、ちょっと、緊張するな」

幸は笑うと先付けを食べる。

「うん、美味しい。お母さん、これ、美味しいですよ」

振り返り、幸が仲居に笑いかけた。

「嬉しいね。ありがとう」

白はふと、今ならと思った。

「ね、母さん」

「うん」

幸が白に笑みを浮かべた。

「あ、あの。今まで、生意気なこと、いっぱい言ってごめんなさい。白はいい子になります」

「え」

幸は啞然と白を見つめたが、箸を落とすと、飛び上がり、白を抱き締めた。

「母さん、息が苦しいですよ」

「ごめん、ごめん」

幸は体を離すと、少し照れくさげに笑った。

「母さんも綺麗な言葉を使ってください」

「対象女性限定なら」

「一步前進ですね」

白がくすぐったそうに笑った。

幸は不意に仲居に振り返ると声をかけた。

「お母さん、マッサージしてあげます」

急な展開に、戸惑う仲居をあっさり幸は俯せに寝かせつけてしまった。

「座布団をこう抱えるようにしてね」

幸は座布団を二つに折り、中井の胸元と畳の間に差し込む、そして、白を手まねいた。

「は、はい」

白があたふと幸に近づくと、幸は白を仲居の横に座らせた。

幸は右手で白の右手を甲から掴むと、白の人差し指を仲居の首の後ろに添わせた。

そして、ゆっくりと背骨に沿って指先を移動させる。

「背骨が歪んでいるのがわかるかな、違和感みたいなものが見えたかな。手を重ねることで、母さんの見ているものが見えて来たと思う」

白が少し興奮してうなずいた。

「活法の基本だよ」

幸は白の右手を自分の右手で、同じように白の左手を自分の左手で掴むと、仲居の腰の左右に沿えた。

「しっかり見なさい」

幸は囁くと、ほんの一センチほど両手を左へ動かす。白はブロックがぴたっとはまり込んだように思えた。

「お母さん、どう」

「どうしたんだろう、急に体が軽くなった気がする」

「お母さんは立ち仕事が多いし、荷物も運ばなきゃで、体が傷んでいる。白にマッサージを教えがてら、治してあげますよ」

幸が幸せそうに笑った。

「お嬢さんの代わりに親孝行します」

(旅館に勤める女性全員、女将も含む、全員の整体を二人は済ますことになる。書くのが面倒臭いので、気が向いた時に書く 2011.03.02)

「母さん、白はだめです、くたくたです」

白は座布団を枕に俯せに臥せってしまった。

「気安く引き受けていたら、凄い特訓になった。全員だもんね」

幸は気楽に笑うと、女将手ずから握ったおむすびを一口食べる。

白は顔だけを幸に向け、言った。

「どうして、母さんは元気なんですか。同じだけ動いていたはずなのに」

「二つ理由がある」

幸はお茶を飲むと、白に言った。

「一つは無駄な動きをしない、必要充分なだけの動きで済みます。これは、この旅の間に、お父さんが黒に教えてくれると思う。もう一つが月の光を体に蓄える内観法。これは白に教えるつもり」

幸は両手の手のひらを互いに向け合う、幸の手が白くひかりだし、手と手の間に、白い光球が現れた。幸はふわっとそれを浮かび上がらせると、軽く白にほうり上げる。

光球はそのまま、ふわりと浮かび、白の元へ、そして、白の体に入ってしまった。

ゆっくりと白が起き上がる。

「えっ、疲れがなくなった。ううん、いつもより調子が良いくらいです」

「白、今のうちにしっかり食べておきなさい、今晚は忙しくなるから」

「忙しいって」

「昼間の関係者がこちらに向かっているのさ」

幸は皿に残っていたお造りを食べる。

「白、このマグロの赤み、美味しいよ。こっちの魚はなんていうんだろ」

「母さん、昼間の人達のこと、知っているんですか」

「ん、すぐに調べた。山を降りる途中の集落、人がいなくなったのを幸いに、国が借り上げて、黒服の育成施設にしているようだ、政権が妙になったからかな、やたらと増えているようだよ、まっ、そんなのの一つだ。そして、来るのはその提携している、この近場の奴ら」

「それなら、母さん。わけを話せば」

「え」

意外なことを聞いたとばかりに白を見つめた。

「白。わけを話した上で、お父さんの話をすれば、奴ら逃げ帰るだろう。ただ、それには大きな問題があるんだ」

「問題って。先生に迷惑がかかるとか」

「いや」

幸がにいと笑った。

「単純に暴れたいじゃないか」

ふううっと、白が脱力し大きく溜息をついた。

そして、仰向けになり、幸に言った。

「母さんの場合は単なるいじめです。母さん、強すぎるもの」

「なるほど、いじめか……。子供の教育に悪いな。白が不良になったら大変だ」

冗談とも本気ともいえないような口調で幸は答えたが、良いことを思いついたと笑みを浮かべた。

「やつら、随分、ホテルに近づいて来た。並が二十人、並の上が三人、特上が一人。並と並の上は母さん、手加減して潰すから、白、活法の練習をしなさい。その間、母さん、特上を楽しむよ」

幸はふわりと立ち上がると、窓を開け放ち、階下を見下ろした、五階、視界の端に海が少し見える、

「来た来た。あれで隠密行動とっているつもりか」

幸の嬉しそうな声に、白はあきらめて、ゆかたから、朝の服に着替えなおした。汚れなきゃ良いけど。

幸の隣りから同じように見下ろす。

「気配を消し切れていません。母さん、本当に殺したりしないでください。そういうの、辛いから・・・」

「良い子に育ったなあ。育て方、正解だったかな」

「母さんの言動を見て、色々、考えたんです」

「娘の言うことが一つ一つ嬉しい。成長したなあ」

ふいっと幸は白を右腕に抱えると、窓を飛び出た。

「行くぞ」

「うひやああ。白はまだ飛べませーん」

白の悲鳴が闇へ消えて行った。

「あ、白が」

不意に黒は目を開けたが、食べ過ぎて動けず仰向けに寝転がったままになっていた。

黒と啓子、部屋で大の字になって寝転がっている、ピザの早食い競争を二人でやった結果だ。

「どうした、黒」

男はしょうがないなと少し笑う。

「先生、白の悲鳴が聞こえたような気がしたんだ」

「なるほど。でも、そんなんじゃ、白も、それに三毛になにかあっても、助けに行けないぞ。啓子さんも黒も、本当に負けず嫌いだな」

男は視線を戻すとあかねを見つめた。

あかねの口が動いた、おはやおかえりを。

男は立ち上がると、おろおろしているあさぎに言った。

「二人は自業自得。あさぎ、ほっとけばいいよ」

男は笑いをこらえるように言った。

「先生」

啓子が仰向けのまま、男を見上げた。

「黒に勝ちました。なかなかのもんでしょ」

「お疲れさま、でも、あんまり無理しないようにね。年頃の女の子なんだから」

「ほーい」

男は静かに部屋を出た。

三毛は団扇を見つけて来ると黒の隣りに座り、扇いでやる。

「黒姉ちゃん、大丈夫」

「あんまり大丈夫じゃない」

黒が嬉しそうに笑った。

「反省してないね、体、壊すよ」

あかねも溜息をついて言った。

「啓子さんって、本当に子供っぽいなあ。普通、年下の黒ちゃんに勝ちを譲るでしょうに。むきになるんだから」

啓子はまんべんの笑みを浮かべ、黒の手を握った。

「なあ、黒。勝負は正々堂々としなきゃな」

「そうだよ、手加減なんかいらぬよ。今度は黒が勝つよ。あしたは手巻き寿司だ」

「うっ、今は食べ物のこと、考えたくない」

啓子は苦しそうに言うと、大きく深呼吸をした。

「あさぎさん、お水ください」

「確かに筋肉が肥大して、心臓の動きを押さえようとしているんだけど」

白は幸が次々と、まるでドミノ倒しのように倒して行った、その最後の一人を、ひざまずき、顔を寄せて見ていた。仰向けになり、息が荒く、それでいて、心臓の鼓動が鈍い。母さんとは、顔を上げると、幸の後ろ姿、特上と称した、年配の男に、間合いを開け、あれは、にいいっと笑みを浮かべているに違いない。

白が呟くように言った。

「早くしないと、この人、死んじゃいますよお。母さん」

「白、この人を俯せにきなさい」

男は倒れている黒服を見下ろし、白に声をかけた。

「は、はい」

慌てて、白は黒服の肩と腰に手を差し込み、そっと俯せにする。

「心臓の下、裏側の、ほら、ちょっと下に痣が出来ているだろう」

「はい」

「これを緩めればいいよ」

白が慌てて、痣に両手を合わせ摩る。黒服の息が穏やかになった。

「あ、先生、どうしてここに」

「ん・・・、黒がね、白の悲鳴が聞こえたっていうもんだからさ」

男は吐息を一つ漏らすと、幸を眺めた。

「幸がいじめられていたら、どんな相手であろうと、叔父さんは立ち向かって行くけれど、逆の場合はどうしたらいいんだろうって思うよ」



「あの、母さんは」

男はそっと笑みを浮かべると、少し寂しげに白に言った。

「幸には叔父さんの血が流れている、叔父さん、とっても、悪い奴だからさ、今の幸を見てみると、若かった頃の乱暴だった自分を思い出すよ。幸をああいう性格にしてしまったのは叔父さんの責任なんだよ」

「叔父さん……」

白は男の哀しい眼差しに口ごもってしまった。

「叔父さんは、あと数年しか生きていられない、その時は、白、幸を頼むよ」

男は立ち上がると、ゆっくり二人に向かって歩きだした。

幸の前に立つ黒服の総領は、幸の後ろに、一瞬、笑みを浮かべる男の姿を見た。

総領が驚いて言った。

「お前は無の縁者か」

「ん……。ああ、娘だ」

「そうか……」

総領は諦めたともいうように、両手を上にあげた。

「随分、昔の話だ。無と二度だけ、仕事をしたことがある。あいつには儂が束になって掛かって行っても、歯が立たない。全面降伏だ。ただ、すぐには殺さないでくれ、やり残した仕事があるんだ」

「殺すつもりはないよ」

感情を抑えて言う。

「後ろの娘に叱られてしまうからさ」

幸は背を向け、後ろの状況を確認した。

「全員、娘が助けたようだ」

幸はもう一度、総領に向き直り、言った。

「あんたに依頼した奴らにも伝えてくれ。あんたらに加担するつもりもなければ、鬼に味方するつもりもないってな。ましてや、国がどうなろうと一切、関わるつもりはないってな、ようはそういうことだろう」

「そうだ」

「なら、話は終わった。帰ってくれ、親子水入らずの旅の途中なんだ」

「委細、承知した」

総領の姿が消えた。

幸が振り返ると、倒れていた連中の姿も消えていた。

幸が背を向け、白を見る。白は立ち上がり、瞬きもせず、幸を見つめていた。

「お疲れさま、白。一つ、難しいのがあったけはずだけど、なんとかあったようだな」

幸がそっと笑みを浮かべる。

「先生が来てくださいました、背中を筋肉を緩めればいって教えてくださいました」

「え、お父さん、何処」

白が泣きそうになりながら叫んだ。

「先生は、幸が乱暴になってしまうのは、自分の責任だ。幸に申し訳ないっておっしゃいました」

幸は惚けたように、口を開け、膝から崩れた。

「お父さん・・・」

そして微かに呟く。

「ごめんなさい」

白は幸にかけよると、大声で泣いた。

「あの、先生、いいかな」

襖の向こうで、黒が男に声をかけた。

「どうぞ」

男が声をかけると、襖が開き、黒が男の部屋に入ってきた。

男は書いていた書類をまとめ、ファイルに綴じる。そして、棚に戻すと、椅子を回し、振り返った。

「お腹、大丈夫か。そうだ、体重を測っておけばよかったな」

男は笑みを浮かべたが、黒は真剣な眼差しで男を見つめていた。

「なんだ、しょうがないなあ。特別だぞ」

男は引き出しから即席麺を出す。

「あさぎに叱られないよう、隠れて食おう」

黒が目を輝かせた。

「いやっほう。先生、お湯を用意してくるよ」

黒は嬉しそうに声をあげたが、はっと気づいたように男に言った。

「そうじゃないよ、先生」

「え、違うのか」

男は黒に椅子を勧めると向かいあって座る。

「あの、先生・・・」

「言ってごらん、どうぞ」

黒はごくっと息を飲み込んだ。

「先生の武術を教えてください」

「うーん、黒はもう十分に強いぞ。この家を襲ってきた奴ら、十人くらい、黒が倒したんだろう。倒れているのを見たけど、かなり強そうな奴らだったよ」

「でも、母さんは五十人くらい、息も切らずに倒した、まるでドミノ倒しの波が来たみたいに敵が、次々と倒れて行ったんだ」

黒が男を見つめた。

「十人くらいで息を切らしていたらだめなんだ」

男は溜息を漏らすと、黒に言った。

「幸に聞いたか、どうやって五十人を倒したのかって」

「母さんは手を振って歩いていただけだって言った」

男は笑みを浮かべた。

「幸らしい言い方だな。感覚的にはそうなんだけどね」

男はしばらく黒を見つめていたが、やがて口を開いた。

「幸が旅に出る前、叔父さんにね、黒に教えてやって欲しいと言ったんだ、ある動きをさ。でもね、教えるには黒に約束をしてもらわなきゃならない」

「約束・・・」

「誰にも教えないということ、もちろん、白澤さんや白に三毛にもだ。約束を破ったら叔父さんは黒を殺すし、そうなれば、幸は苦しんで自分自身を殺すだろう。三毛も白も、みんなばらばらになってしまう。それでも、叔父さんは黒を殺すし、動きを知った者も殺しに行くよ」

黒は表情をなくし、男の眼をじっと見つめた。

「すぐに返事をしなくても良いよ、じっくり考えなさい」

男は笑みを浮かべた。

黒はしばらくの間、俯いていたが、すっと顔をあげ、笑みを浮かべた。

「黒は誰にも言わないって先生に約束します。だから、教えてください」

男は黒の笑みに、並ならぬ決意を見た。改めて、男は黒や白に三毛が、ここに来るまで、どんな生き方をして来たのか、どれほど、今を大切にしているかを思う。

男は深く溜息をついた。

「黒は叔父さんが無くしてしまったものを、しっかりと持っているのかもしれないな」

男は呟くと、左手を黒の額に添えた。一瞬、黒がうっと声を漏らす。しばらくして男は黒の額から手を戻して言った。

「最初から覚えようとしたら、十年は掛かる。だから、叔父さんが修行して来た分の記憶を黒に転写した。そして、記憶に障壁を作って、外からは見えないようにした」

「わかるかい、黒」

「わかります」

「なら、明日から練習しよう。記憶と体の動きを擦り合わせていかなきゃならない。今晚はもう寝なさい。発熱してしまうかもしれないからさ」

黒は頷くと、初めて、黒は自分から男の手を握った。

「ここで暮らすことができ、本当に幸せです。先生、ありがとう」

一瞬、男は驚いたが、すぐに笑みを浮かべ頷いた。

「こちらこそ、ありがとう。毎日がとっても楽しいよ」

黒はぎゅっと男の手を握り締め、そして、手を離す。

「お休み、黒」

「先生、お休みなさい」

「即席ラーメンはちゃんと、机の引き出しに残しておくよ」

黒がにと嬉しそうに笑った。

「待ってよ、白」

幸が白の袖を引っ張る。

朝まだき、人影のないこの時間。この角を曲がれば家が見える。幸は、必死になって白を止めていた。

「母さん、一週間ですよ、家を出て。早く家に帰って、白はくつろぎたいです」

「でも、でもさ」

幸はまだ、ホテルでの男に見られた自分の後ろ姿を気にしていた。

「気持ちの整理がな。だって、お父さんに見られてさ、きっと、悪い娘になってしまった、って思っているよ」

「なら、ごめんなさいと言えればいいと思います」

「うわあ、白、冷たいよ」

白が長い吐息を漏らす。

「本当に母さんは、先生のことになると、とっても子供なんだから」

「まっ、とにかく家に入りなさい。こんなところで騒いでいないでさ」

男はよいしょと幸を両手で抱きかかえた。

「うひゃあ、お父さん」

「幸は面白い娘だ」

男が笑った。

「白、お疲れさま。うん、ちょっと表情が大人っぽくなったな。活法が性にあったようだね」

「はい、ありがとうございます」

「黒や三毛も心配していたよ」

白がそっと嬉しそうに笑みを浮かべた。

三人は家に戻ると、男は幸を降ろした。

「うひゃあ、家だ」

幸が寝転がってばたばたと泳ぎ出す、そして、仰向けになると大の字になって寝転がってしまった。

「母さんはなあ・・・」

白が溜息をついた。

「白姉ちゃん」

三毛があたふたやってくると、白に抱きついた。

「お帰り、白姉ちゃん」

「ただいま、元気にしてた」

「うん」

三毛が笑顔でうなずいた。

「黒姉ちゃんは梅林で修行。啓子さんとあさぎ姉さんとあかねちゃんは、畑で収穫しているよ」

男はデジカメと三脚を持ってくると、幸に声をかけた。

「幸、起きなさい。写真を撮ろう」

「え、写真」

「ああ、家族写真だ、もうすぐ、佳奈さんと洋品店のおばさんも来るよ」

幸は跳ね上がって起きあがると、満面の笑みを浮かべた。

「びっくりした。いいの、お父さん」

「いいよ」

男がうなずいた。

「なんか、嬉しいなあ」

少し、幸が涙ぐんだ。

「ありがとう、お父さん」

「こちらこそ、ありがとう」

男は静かに笑みを浮かべた。

そして、思う。少しでもこの幸せが長く続きますようにと。

異形 月の竹 眠るモノ 二話

月曜日 18 7月 2011 at 6:41 pm.

朝まだき、空気がしんと静まり返っている。

男と黒は、朝の空気の中を梅林の奥深く、ゆっくりと歩いていた。男の片手には、新しいコピー用紙の束がある。

「黒、この辺でいいだろう」

男が立ち止まると、左手を上げ、手のひらを空に向ける。男の手の上に、水球が現れた、その水球はゆっくりと上昇しだし、弾けた。

「水の結界を張った。誰も近づけないようにね」

黒が驚いたように声を出した。

「先生も母さんも呪文唱えずにどうして出来るの」

「幸は説明してなかったかな」

黒が頷いた。

「呪文には二種類ある。幸が清めで詠う寿ぎ歌のように、特定の音の響きとリズム、それ自体が力を持つ呪文。もう一つは神とかのね、力を貸してくださいと依頼するための呪文だ」

「本家の術師達も普通に呪文を唱えていたよ」

「昔は本家にも呪文を唱えない術師がいたんだけどね」

男は地面にあぐらをかくと、紙の束を隣りに置いた。

「力を借りるのでもない、神に憑依されるのでもない、瞬間的に、自分が神様そのものになってしまえば、呪文を唱える必要がない。ただ、問題は人間の体には負担がかかりすぎるってことくらいだな」

「白が言ってた、先生は長く生きられないって言ってたって」

「若い頃、無茶し過ぎたのさ。さて」

男はコピー用紙を一枚取ると、右の手のひらに載せた。

「黒の頭の中には入っているはずだ」

男が黒に笑みを浮かべると同時に、その手のひらに載せた紙が半分に切れ、男の手のひらから落ちて行った。次に男は紙を頭に載せた。滑り落ちるように紙が二枚に別れ落ちて行った。

「呪術ではない、純粹に体術、体の微細な動かし方で、斬るという働きを生みだす。わかるだろう、誰もがこんなことができるようになったら大変だ、うっかり握手も出来ない」

男は笑うと、黒に紙を一枚手渡した。

黒は神妙に紙を受け取ると、そっと、手のひらに載せた。男は立ち上がると、その紙を上からのぞき込んだ。

「なかなかね、理屈はわかっていても難しいものだ」

「先生」

「ん・・・」

「先生、死なないでください。母さんが悲しみます、黒も悲しい、みんな、泣いてしまいます」  
男がふっと笑みを浮かべた。

「ありがと。黒に泣かれたら大変だ、おじさん、頑張るよ」

幸は白を部屋の真ん中に立たせると、じっと見つめながら白の回りを廻る。三毛も隣りで不思議そうに幸を眺めていた。

「母さん、何ですか。急に」

あかねがふとそんな様子に気づき、部屋に入って来た。

「ああ、ちょうどいいや。あかねちゃん、白は何年生に見える」

「え、白さんですか」

「うん、あかねちゃんと同じくらいかな」

「ですね。背丈、顔付き。白さんくらいの子、多いですよ」

「なら、中学二年生にしよう」

幸はぼおっと眺めていた三毛に近寄ると、

「三毛は小学六年。なら、黒は中学三年ってことにするかな」

「どうしたんですか、幸さん」

あかねが不思議そうに尋ねた。

「武術も一通り教えたいし、次は学校へ通わせようかってね、思ったんだ。それで、見た目の年齢に合わせて日本国籍を取らせようって思う、真っ当な方法じゃないけど」

幸はいたずらっぽく白に笑いかけた。

「白、大学の医学部に入って医者になってみるか」

「え・・・」

茫然とした表情で白は幸を見つめた。

「本当にいいの」

幸が柔らかく笑みを浮かべる。

「武術や呪術の練習は欠かしてはだめ、自分の身は自分で守れるようじゃないとね。その上で、勉強をして、生命を救う仕事をしたいというなら、それは有りだ」

幸は突っ立ったままの白の前で足を崩して座ると、顔を上げ、真っすぐに白を見つめた。

「武術や呪術を教えたのは、身を守るためだ。白や黒や三毛を、使って何かをしようなんてことは全く考えていない。家族だから、一緒に暮らしている、大切だから、こうして、一緒に生きて

いるんだ。わかるかな、白」

白は言葉が出ず、ただただ、うなずいた。幸は笑みを浮かべると、今度は三毛を見つめた。

「三毛はどうする」

「そんなの、思いつかないよ、母さん」

「思いつかない、それも有りだよ」

幸は立ち上がると、梅林の方向に目を向ける。

「黒はどうするのかなあ」

「先生、切れた、切れたよ」

黒が驚いた声で男に言った。

「なかなか優秀だな」

男は切れた紙の断面を睨んだ。

「少しざらついているけれど、でも、綺麗に切れている」

黒が嬉しそうに笑った。

次に男は小脇にコピー用紙の束を抱え、黒から三メートルほど離れた。

「紙を黒に向けて飛ばすからね、しっかり、切るように」

「はい」

黒が元気良く答えた。

男が紙を一枚取り出す、それをふわっと地面と平行に浮かせた。そして、とんと紙の後ろを指先で押す。すいっと紙が空を滑って行く。黒がそれに合わせて、右半身に構えた。右手で上段、左手で中段を守る。すっと紙が黒の右手の寸前で二つに切れ地面に落ちた。

「要領は飲み込めたようだね。なら、連続して攻撃するよ」

黒が頷くのを確認して、男は次々と、白い紙を繰り出す。そして、黒の寸前で、幾つもの裁断された紙が渦を成して行く。

黒に目に見える動きはない。しかし、黒の微細な動きに呼応して空気が小刻みに震える。

男は手元に残った紙が十枚、確認すると、まるで空中に書類棚があるかのように、すっすっと紙を上から下へと並べて行く。

「十枚同時に行くぞ」

「はいっ」

黒が鋭く答えた。

男が紙の後ろを手のひらで押した。

ぶわっと十枚の紙が黒の頭の上から、足元まで斬り込むように飛んで来る。黒がうっと声を漏らした。

紙が一枚、黒の目の前、一ミリにも満たない距離で停まっている。男が紙の後ろを掴まんで笑っていた。

男は紙を手に戻して言った。

「九割がた大丈夫。あとは移動しながらでも使えるようになればいいな。もともと、多人数相



手のものだからね」

「先生・・・」

黒が呟くように言った。

男がいたずらげに笑った。

「頭、斬られたら生きてないよな」

黒がそっと頷いた。

男は結界を解くと、涼しい風が流れ込んで来た。

「さてと」

男は呟くと、辺りに散らばった紙切れを拾い始めた。慌てて、黒も従う。

「あかねちゃんはね、真面目すぎるというか、潔癖症のところがあるからな。散らかっていたら叱られてしまうぞ」

「あかねちゃんが」

黒が男に聞き返した。

「あかねちゃんの気配が近づいているってことだよ」

男が笑った。

おおよそ、紙切れを二人がまとめ終わった頃、あかねが大きな紙袋を持ってやってきた。

「おじさん、黒さん。お昼ですよ」

あかねが男に紙袋を手渡した。

「幸お姉ちゃんからです」

「ありがとう」

男は紙袋を受け取ると、紙切れを仕舞い込んだ。

「当分、メモ用紙には不自由しないな」

あかねは笑みを浮かべると、黒に声をかけた。

「黒さん、強くなりましたか」

「え・・・」

黒は一瞬、質問の意図が掴めず、きょとんとしてしまった。

男は、腰を落とすと、あかねに話しかけた。

「黒に教えてくれないかな、含みと流し。おじさんでは身長が違いすぎて教えづらいんだ」

「いいですよ」

あかねはあっさりとは答え、黒の正面に立った。

「あかねちゃん、武術できるの」

黒が不思議そうに呟いた。あかねが楽しそうに、しかし、少し意地悪に笑みを浮かべた。

「黒さんたちには、鬼から助けていただいた恩があります。だから」

あかねが右足を数ミリ、前に送る。

「できるだけ手加減してあげます」

体中草だらけになる、息も絶え絶えとはこういうことを指すのか、黒は激しく息をし、ぎゅっと

あかねを見つめた。

「黒さん、いい眼ですよ」

あかねはふらっと突っ立っているだけだ。

黒は一気に間合いをせまめると、一閃、あかねの左側頭部に右回し蹴りをいれた、最短距離を疾る突きのような蹴りだ。一瞬、黒はにっと笑うあかねの顔が視界一杯に見えた気がした。

青い空、あかねの右手のひらが柔らかく黒の顎を捉え、黒が背中から落ちた、後頭部を打たないよう、あかねの左手は黒の首筋を支えている。

「これが流しです。そして、さっきの黒さんの突きを溶かしたのが含みです」

あかねは黒の手を取ると、すっと立ち上がらせた。

「黒さんの筋肉、随分、参ってますね。これくらいにしましょう」

「ま、まだ、大丈夫」

男が後ろからすっと黒を抱え上げた。

「気持ちが折れてなければ良し。あさぎに遅いって叱られるぞ」

「で、でも」

「黒はあかねちゃんの動きをしっかりと見たらう、あとは、どうすれば同じ動きができるかしっかり自分で考えなさい。おじさんの教えた動きとあかねちゃんのを合わせれば、どんな動きになるかわかるか」

黒がごくっと息を呑んだ。

「わ、わかるよ。かあさんと同じ動きになる」

男が笑みを浮かべた。

あかねが黒の顔を覗き込んだ

「黒さん、しっかりね」

「う、うん。あかねさん」

あかねがくすぐったそうに笑った。

「ちゃんていいですよ」？

## 遥の花 月の竹眠るモノ 三話

---

異形 月の竹 眠るモノ 三話

月曜日 18 7月 2011 at 6:46 pm.

「先生、見回りに行こうよ」

黒が夕食後、男に言った。

「でも、寒いし。行くのやだなあ」

男がくすぐったそうに笑う。

「もお。そんなことじゃ、町を守れないよ」

怒りだす黒が面白くて仕方ないと男が笑った。黒達三人がここに住むようになって一年が過ぎた。裏社会での術師と鬼の戦いは既に鬼の優勢となり、一般の人達には知らされていないが、術師の目を擦り抜けては鬼達が暗躍し、人々をさらってその血肉を食らっていた。ようやく、この頃になると、一般の人達も鬼を目撃することとなり、嘘か真かと戸惑いながらも、夜間の外出を控え、また、昼間でも一人で歩くことを避けるようになっていた。

男が台所を覗くと、白があさぎを手伝って洗い物をしている。幸はあかねに数学を教え、それを三毛が覗き込んでいた。

「本当にありがたいことだな」

男は小さく呟くと立ち上がった。

「よし、行くか、黒」

「うん、先生」

「黒姉ちゃん、三毛も行くよ」

三毛は立ち上がると、ぱたぱたと黒の元へ走って来た。

「おとうさん、危ないことしちゃだめだよ」

幸が心配げに立ち上がったが、男は手で制すると笑みを浮かべた。

「大丈夫さ。黒と三毛が居てくれたら安心だ」

夜九時を少し回った頃、以前ならたくさんの車が行き交い騒がしかった表通りも、まばらに車が通るだけとなり、人や自転車は皆無だ。

「黒。駅前の商店街まで行こうか」

「うん。先生は黒が守ってあげるよ」

「それは心強いな」

「先生、三毛も先生を守ります」

「そうか。三毛も強くなったものな」

「ええ、呪術も使えるようになりました」

「一人前だな」

男が三毛の頭を撫でると、嬉しそうに三毛が喉を鳴らした。

冬手前の夜風は冷たい。黒と三毛は男の両脇に並び、ぎゅっと両手で男の腕を抱えるように歩いて行く。

男は初めて気が付いた。

「なんだ、二人とも随分と背が伸びたなあ」

「三毛は一五〇センチ、黒は一六〇あるよ。白はね、ちょうど間の一五五センチ」

「そうか。初めて会った時はおじさんの腰くらいだったのになあ」

「成長の度合いが人とは違うみたいです」

三毛が男の顔を見上げた。

「そうか、なら、来年は三メートルくらいになっているかもな」

男が笑うと、黒も一緒になって笑った。

ふと、角を曲がった先に男は人影を見つけた。

微かな街灯の明りにOL姿、会社帰りの女性だということくらいはわかる。

「これは珍しいこともあるもんだ」

「先生。一人歩きは危ないから、声をかけてくるよ」

黒がそう言って走りだそうとする、それを男が止めた。

「黒、送って行きますとか絶対言っちゃだめだぞ。まずは、こんばんは、どうして一人で歩いているのですかって尋ねること。いいかい、わかったかな」

「先生がそう言うなら、そうするよ」

男の笑みを確認し、黒が女に向かって走りだした。

「先生、どうして、黒姉ちゃんに念を押したの」

「ん……。すぐにわかるよ」

いたずらげに、男は笑った。

「三毛、すべての存在はそれ固有の振動数を持っている。それを読み解くことができれば、顔を見なくても誰だか、簡単に解るのさ。つまりは送って行くには遠すぎるよ」

「うわああっ」

一瞬の悲鳴が聞こえた。

女の顔を見た黒は、悲鳴をあげた後、脚を震わせ今にも倒れそうになっている。

「しっかり。ぐっとお腹に力を入れなさい」

男は歩きながら、黒に声をかけた。

「左足、半歩前、相手の目の下辺りをぎゅっと睨みつける、気持ちで勝ちなさい」

三毛は何が起こったのかわからず、黒へと走り出しかけたが、それを男が止めた。

黒は歯を食いしばると、女を睨みつけた。

男は黒のすぐ隣りまで来ると、嬉しそうににっと笑った。

「かっこ良かったそ、黒。さっ、おじさんの後ろに隠れな」  
まさしく、脱兎の如く、黒は男の背中に隠れると息喘いだ。

「かぐやのなよたけの姫。鬼族の国は三つに分かれていると聞きますが、そのひとつの女王が何ゆえ、こちらに」

男がさしてかしまった風もなく、女に声をかけた。

「何処かで会ったかな」

「ええ、一度」

男は自分の首の前で、人差し指をすっと横に切った。

「まだ、少し、傷が残っているようですね」

いきなりなよたけの姫は男を睨みつけると、間合いを開け、数歩下がる、そして右腕を鋭く振った。空気が裂ける。刃、銀色の輝きが男の顔を貫く。

「先生」

黒が叫んだ。

男は左手の甲で刃が貫くのを制していた。

「斬る動作は同時に防御にもなる。黒、便利だろう」

男は笑うと、ぎゅっと目を瞑って縮こまっている三毛に声をかけた。

「三毛。おじさんの頑張っているところを見ておいてくれ」

はっと気づいたように三毛が顔を上げた。

長細い帯のような刃が、なよたけの姫の手を離れ、男の手を貫こうとしていた。

「自走式刃帯儀、元はただの絹の帯だ。こんな由緒ある技に出会うのは久しぶりだな」

いきなり、帯の反対側が繰り出し、螺旋に男の首へと、いや、ほんの数ミリ逸れ、夜陰を引き裂いた。

「黒、三毛。良く覚えておきなさい。全ての存在は特定の振動を持つ。その振動をフーリエ解析により、サイン波に分解する。それを利用して、擬似振動数を作るんだ、そうすれば対象を共鳴させ、こちらが充分強ければ、そいつを操ることが出来る。でも、弱ければ逆転されてしまうけどね」  
なよたけの姫が目を見開いた。雑音、意味不明の音がなよたけの姫の口から発せられる。

「これは中間言語による呪文の詠唱。人の言葉での呪文の詠唱は、どんなに頑張っても、本来の効果の七割程。でも、中間言語なら九割は期待出来る。今夜は良い勉強になるなあ」

男の解説に黒と三毛の二人は、恐怖も忘れ、耳を傾けた。

「でも、この辺りが焦土になっては大変だな」

ふっと男の姿が前方に倒れかけた瞬間、男はなよたけの姫の懐に入り、右手で首と頭の狭間を抑える、一瞬、なよたけの姫が気絶したところを、その膝の裏を払い、なよたけの姫に尻餅をつかせた。

「わしの負けだ、殺すなら殺せ」

すぐに意識を取り戻したなよたけの姫が男に悪態をついた。

「私は勝ったから殺す、負けたから殺されるというような、難儀な世界には生きておりませんので、困ったな」

その瞬間、ぐううとなよたけの姫のお腹が鳴った。恥じ入るように俯く。

「高貴な人は大変だ」

男はふっと商店街の方角を見つめ、そして黒と三毛の二人に声をかけた。

「いま、佳奈さんに連絡をとったよ。商店街の中華屋さんが、まだ、開いているらしい。ラーメンでも食おう」

「ほんと、いいの」

「餃子もいいですか」

「いいよ。でも、幸やあさぎには内緒だぞ」

「やっほお、ラーメン、ラーメン」

「と、言うことで、黒、三毛、二人でなよたけさんに肩を貸してやってくれ」

「ええっ」

踊っていた二人が硬直した。

極度に緊張した黒と三毛が、なよたけの姫に肩を貸し、左右並んで歩く。その後ろを男が歩いていた。

肩を預けたまま、なよたけの姫がにいと黒に笑いかけた。

「美味そうな子猫だのお。頭を半分に割って、脳みそを匙ですくうて食せば、どれほど美味だろう。滋養もあるであろうなあ」

「先生」

半泣きになりながら、黒が叫んだ。

「頑張れ、黒。根性を見せてみろ」

男は楽しそうに答えた。

「そちらの三毛猫は、腕と足を網で焼いてたれをつければ絶品じゃ。肉も柔らかそうじゃ」  
三毛が息を飲んだ。

「妹はだめ」

黒が叫んだ。

商店街に入り、中華店の前、佳奈が心配そうに三人を待っていた。

「先生、なんだよ。急にさ」

「悪いね、おもしろい人と会ってさ、一緒にご飯を食べようって話になってね」

佳奈は、二人に支えられているなよたけの姫に気づくと、男に言った。

「どうしたんだい、この人。具合悪いなら、うちの車で病院、連れて行こうか」

「腹一杯食えば元気になるさ」

男は笑った。

五人は連れだって中華店に入ると、テーブルについた。

「佳奈さん、この期時世だ、帰らないと、家の人、心配するだろう」

「大丈夫さ、明りのあるアーケードの下だし、それに先生なら鬼だってやっけてしまうだろう」

「勘弁してくれよ、争いは苦手だよ。それより、すぐにできるものから頼もうかな」

「まずはビールじゃ」

いきなりなよたけの姫が浮き浮きと声を上げた。

「亭主。まずはビール二本。それから、大至急、餃子を十人前、持って参れ」

「はい」

このところの鬼騒動で客足がさっぱりだったのだろう、久しぶりの上客に、亭主は笑顔を浮かべた。

「黒、三毛。好きなの、頼みなさい」

「ラーメン定食とからあげ」

黒が嬉しげに声を上げた。

「な、三毛はどうする」

黒が楽しそうに笑った。食べ物を前に、それまでの恐怖をすっかり忘れてしまったようだ。

「それじゃ、天津飯をお願いします。先生はどうしますか」

「そうだな。晩御飯を食べた後だし、みんなでつまめるものがないな」

ふと、男は入り口を眺めた。

「黒、任せたよ。適当に頼んでくれ。おじさん、ちょっと、外に出る、すぐに戻るからさ」

男が外に出ると、幸が少し俯いて立っていた。

「お父さん、お財布、持って来たよ」

「ごめん。小銭しか持ってなかったよ。父さん、だめだなあ」

幸が少し顔を上げる、涙を流していた。

いきなり、幸は男にしがみつき、ぎゅっと顔を男の胸に押し当てた。

「お父さん、力を使わないで、命を削ってしまわないで。幸はずっと、ずっと、お父さんと一緒にいたいよ」

「ありがとう、幸」

男は幸をそっと抱き締めた。

「幸は泣いている顔も可愛いけれど、父さん、幸の笑顔が一番好きだ。だって、笑顔は幸が幸せだってことだからさ」

男は幸をぎゅっと力強く抱き締めた。

「だから、ごめんね、幸。泣かせてしまって」

しばらくして男が中華店に戻ると、既にテーブルの上はビール瓶一ダースと料理で一杯になっていた。

「おや、佳奈さんも飲んでいいのかい、亭主殿に叱られるよ」

ごくりとなよたけの姫がビールを飲み干し笑った。

「お前の娘たちは未成年だからな、佳奈に相手をしてもらっておる。酒は一人で飲んでおってもつまらん」

「なんだか、なよたけさん。すっかり馴染んでおられるようで」

男が困り顔で言った。

「佳奈は気風のいい、姐御肌のいい女じゃ」

「何言ってますよ。なよたけさんだって。いい女ですよ」

酔っ払い二人がお互いを誉めあっている、男は溜息をつくと椅子に座った。

黒は食べてさえいれば幸せなのか、嬉々とラーメンを啜っていた。

「先生。黒姉ちゃんが先生の方で春巻きや春雨のサラダを頼んでいました」

「そうか。おじさんはあっさりしたのがいいから、ちょうどいいな。そうだ、お土産を持って帰らないと、白に叱られてしまうな」

「あとで持ち帰りを注文しましょう」

三毛はそう言うと、天津飯を美味しそうに食べ出した。しかし、ふと、男を見つめて小さく呟いた。

「ごめんなさい」

男は面白そうに、そっと笑みを浮かべた。

「三人とも、あかねちゃんを救い出すときに、なよたけの姫に散々脅されたようだな。まだ、鬼の中では、話のわかる人なんだけどね。なよたけの姫は角のない鬼だし」

「先生」

三毛が食べるのをやめて男に話しかけた。

「鬼っていったい何なんですか」

「それは難しい問題だな。人とは何なのか、人の定義と同じくらいめんどくさいな。ただ、昔話のように、鬼は人間と同じように二足歩行で、角があって、というのは、正確ではないし、また、鬼は一つの種でもない。あえて言うなら鬼の世界に住んでいる人達ってことかな」

三毛が頷いた。

「十メートルを超えるような大きな奴から、なよたけの姫のように人とまったく変わらない鬼もいる、ああ、でも、共通して鬼は性格が悪いけどね」

「ああ、何か言ったか」

なよたけの姫がビール瓶を片手に男に声をかけた。

「鬼の解説ですよ。なよたけの姫は性格が悪いと、この子に教えておきました」

「どうも、お前は正直すぎるな。そういう時は、言葉を濁しておけ」

男がくすぐったそうに笑った。

「性格が悪いのは否定なさらない」

「長く生きて、性格が良いままのわけあるか」

「月の人として、かぐや姫のまま、月にお帰りになればよかったのに。好いた相手が鬼であったとはね」



ふいに興味深そうに、なよたけの姫が男をじっと見据えた。

「ただのエキストラのような振りをしているが、お前、どこまで知っておる」

「わりと・・・」

にっといたずらけに男は笑った。

「ええっ、なよたけさんってかぐや姫なんですか」

いきなり、佳奈が声を上げた。

「そうじゃ。当時の帝もわしにぞっこんじゃった。懐かしいのお」

「なよたけさん、綺麗ですもんねえ」

「いやいや、佳奈も美人じゃ。これだけの美人はそうはおらんぞ」

「いやですよ、美人のなよたけさんにそんなこと言われたら照れてしまいますよお」

男は三毛に呟いた。

「酒は飲んじゃだめだぞ。大人になってもね」

「はい。必ず」

中華店のドアが開いた。

「先生、手伝いに来たよ」

恵子が店に入って来た。

「やあ、恵子さん。幸が頼んでくれたようだね」

恵子は三毛の隣に座った。

「酔っ払いと荷物で大変だろうからって」

「まっ、そうだね。佳奈さんは家に送って行って、なよたけさんにはうちに泊まってもらうかな」

「なよたけさん・・・」

えっと、息を飲み、恵子は酔っ払いの一人を見つめた。

「う、うわっ。あれ、かぐやのなよたけの姫じゃないですかっ」

椅子から飛び上がると、恵子は男の後ろに隠れた。

「特S級の鬼ですよ。どうして、ここに」

「さっき道であってさ、一緒に飯食いますかってことでね」

「先生」

「ん」

「友達を選んだ方がいいですよお」

男がくすぐったそうに笑った。

なよたけの姫は足元おぼつかなく立ち上がると、ゆらゆらと歩き、恵子に近寄って、その顔をのぞき込んだ。

「お前はわしのことを知っておるのか」

「は、はいっ」

「ふむ、その態度、確かにそうじゃろうな」

なよたけの姫はぱしっとテーブルを叩くと男を睨みつけた。

「わしのことを知っておる人間は普通、こういう態度をとるものじゃ、恐れおののいて命乞いをする。お前はなんじゃ。あまりにも平気な顔をしておるから、わしも、己がそう云う存在であることを見失っておったわ」

男はいたずらげに笑みを浮かべた。

「威嚇したり、相手を押さえ付けようという関係よりも、この方が楽しいでしょう」

一瞬、なよたけの姫は呆れたように男を眺めたが、

「まあ、そうではあるわな。しかし、調子が狂うのお」

小さく呟いた。

顔面蒼白の恵子の後ろを、両手に持ち帰りのギョウザや空揚げの袋をもち、浮き浮きと歩く黒。三毛は男の横を、その上着の裾を握って歩く。佳奈を自宅に送り届けた後、五人は夜道を家路へと歩いていた。

恵子が背負っているのはかぐやのなよたけの姫。決して重くはないのだが、大量の脂汗をかいていた。

「お前の肉は堅そうだのお」

「は、はい。食用には適しておりませんです」

「しかし、その耳たぶは柔らかくてうまそうじゃ」

なよたけの姫が意地悪く笑い、恵子に囁いた。

「どれ、ひとつ、食してやろうぞ」

「か、勘弁してくださいっ。先生」

恵子がたまらず叫んだ。

男は楽しそうに笑うと、少し歩を早め、なよたけの姫の後ろ頭を軽くこつんと叩いた。

「うちの大事な娘達に変なトラウマを刻まないでください」

なよたけの姫は頭に手をやると、小声で拗ねたように文句を言う。

「この一千年以上、頭を叩かれたのは初めてじゃ」

角を曲がり、家が見える。

幸と白が家の前で出迎えていた。

黒は駆け出すと白に声をかけた。

「白。お土産だよ。いっぱい、買ってもらったよ」

「お姉ちゃん、お帰り。あっ」

白が空を見上げた。

なよたけの姫が虚空に飛ぶ。標的は幸。幾十もの自走式刃帯儀が分厚い束になり闇を白くつんざいた。

待ち構えていたように、幸が唇の端を歪め笑う。

ふいっと幸の全身の力が抜け体が前に倒れる、地面に倒れる瞬間、爆発したかのような勢いで刀を

抜き、一閃、なよたけの姫が放つ全ての刃帯儀を粉微塵に切り裂いた。

幸の姿が消えた、着地したなよたけの姫の喉元に、既に幸は刃を重ねていた。

なよたけの姫がごくっと息を飲む。

「お客様、ご冗談はほどほどに」

嬉しくてたまらないと、幸はにいいっと笑った。

「わしの負けだ」

幸は笑みを浮かべたまま、ゆっくりと頭を横に振る。

「もっと可愛らしくどうぞ」

突き刺すように、なよたけの姫を見つめる。

「ご、ごめんなさい」

引き込むように、口元に幸は笑みを浮かべ、なよたけ姫の耳元に顔を近づけ囁いた。

「どういたしまして」

幸は刀を消すと、男に声をかけた。

「お父さん、お帰りなさい」

「ただいま。なんだ、幸はなよたけさんと案外気が合いそうだな」

ふんと鼻を鳴らすと、なよたけの姫は少し俯いた。

「やっかみ半分でお前の娘を攻撃したが、まさか、手も足も出んとは思わなかった」

「やっかみですか」

「お前の娘が幸なのだろう。あかねは、わしの後継ぎよりも、幸という女と暮らすのだと一歩も引かなかった」

「どうしたの、あかねちゃん」

あさぎが落ち着かずにいるあかねを心配して、声をかけた。

あかねには珍しく、狼狽して、台所と居間を行ったり来たりする。

「なんでもない・・・、というか、なんでもあるんですけど」

いきなり、あかねは納戸を開け入りかけたが、頭を振り、台所に戻ると、テーブルについた。

「はっきりさせなきゃ」

あかねは椅子に座ると大きく深呼吸した。

「はい、どうぞ」

あさぎはコップに水を入れ、あかねに差し出した。

「ありがとう、あさぎ姉さん」

「ただいま」

黒の元気な声が玄関口から響いた。たたと走る音。黒が台所へと飛び込んで来、テーブルに包みを置いた。

「先生が買ってくれたよ。ギョウザ、シュウマイ、空揚げも」

あさぎは困ったように笑みを浮かべると、黒に言った。

「今晚は遅いからだめだよ。明日、食べよう」

「ええっ」

黒が泣きそうな顔であさぎを見上げる。

「ちょっとだけ、お願い」

「うーん」

「あさぎ姉さあん」

甘えるように黒は囁くと、上目使いに、じっとあさぎを見つめた。食べ物がかかった、こういう時の黒は、必死で、それがとても可愛い。あさぎは溜息をひとつつくと、笑みを浮かべた。

「本当にちょっとだけだよ」

「うん、約束する」

黒が紙袋を開けていると、なよたけの姫が入って来た。

あかねは椅子から立ち上がると、じとなよたけに姫を見つめた。

「あかねちゃん、なよたけさんと御飯食べたよ。とっても、怖いけど友達になったよ」

「こいつは、一緒に飯を囲めば打ち解けたと思いきよ、単純な、しかし、羨ましい性格だな」  
なよたけの姫はテーブルを挟んであかねの前に立つと静かに頭を下げた。

「無理強いをしたこと、悪かったと思う。迷惑かけたな。すまなかった」

「なよたけの姫・・・」

「それを言って置きたかっただけじゃ」

なよたけの姫は踵を返すと、部屋を出ようとした。

「なよたけさん、一緒に風呂に入ろう」

幸は着替えを両手に抱え、顔を出した。

「なんだ、黒。まだ、食うのか。太るぞ」

「ちょっとだけ」

「困った娘だな」

幸は笑うと、なよたけの姫に言った。

「まだ降ろしていない下着だからいいだろう。風呂、沸いてるからさ。アルコール、抜いておかないと二日酔いになるぜ」

「湯は有り難いが、用事があるからな。帰る」

幸は着替えを椅子の上に置くと、なよたけの姫に言った。

「短時間だったから、あまり調べられなかった。なよたけさんの国、攻め落とされたんだらう。なら、ここで暮らそう。一緒に飯食って、一緒に働こう」

「なるほど、確かに親子だな」

なよたけの姫は呆れたように笑みを浮かべると、美味しそうに空揚げを食べる黒を眺めた。たっぷり空揚げにマヨネーズをかけている。

「こら、黒猫。本当に太るぞ」

なよたけの姫は軽く黒の頭をはたと、ひとつ大きく溜息をついた。

「絶望、命からがら逃げ出して、何もやる気がなくなって、気づけば、あかねの居る町に来て

いた。このまま、野垂れ死にもいいか、長く生き過ぎたなと思っていたところに、間抜けにもこいつが、声をかけて来おった」

なよたけの姫は黒の頭、はたいたところを撫でながら笑った。

「飯食って、酒飲んで、佳奈と喋り倒した。すっかり元気になってな、だから、これから敵討ちに行くことにしたんじゃ」

「敵討ちに・・・」

「ああ、名前も知らぬ下女の仇を討たねばならん」

男が両手に反物を抱えてやって来た。

「幸。これをなよたけさんに渡していいかな」

「お父さん、それは」

「納戸の奥の柳行李に入れたままにしていた絹の反物だ。昔、本家から逃げ出した時、当座の費用にと、勝手にいただいたまま忘れていたんだよ」

「絹。あ、そうか・・・。お父さん、ありがとう」

幸は気づくと、男から反物を預かった。

「なよたけさん、剣の代りに、これ使って」

幸の手渡す自然さに、思わずなよたけの姫は受け取ったが、改めて男と幸を見つめた。

「わしはこれを使って、お前達の類や、人を殺めるやしれんぞ。いいのか」

幸がにと笑った。

「しらふのなよたけさんと戦えるのは楽しみだ」

なよたけの姫は幸の自然な表情に思わず笑みを浮かべた。

「綺麗な色だ、ありがとうな」

まるで子供のような、なよたけの姫の笑顔。はっと気づき、慌てて、なよたけの姫は表情を消したが、目ざとく、にいいと幸が引き込むように笑みを浮かべた。

「白、三毛。なよたけさんを笑わせるぞ」

「はいっ」

元気良く、白と三毛が返事した。

最終列車、どうもこの路線は揺れが大きい。

会社帰りの男、コンパ帰りの学生、酔客。吊り革につかまる乗客はなく、座席の三分の二は詰まっている。

なよたけの姫の隣りに白、その隣りには幸が座っていた。

「あの女、啓子とかいう、別れ際にわしの肩を叩きおった、それじゃ、またね。などとほざきおって」

白は必死になって笑いをこらえていた。

「これほどの恥辱は初めてじゃ」

白は気持ちを落ち着かせると、両手でなよたけの姫の手を握った。

「いままでとても恐い方だと思っていました。ごめんなさい」

なよたけの姫は手を引きかけたが、その力を抜くと、ふんと鼻を鳴らした。

「わしは恐ろしい鬼じゃ。ただ、今夜は少しばかり調子が狂っただけじゃ。まずはあの男がいかん。あいつが元凶じゃ」

「今頃、先生、くしゃみをしているかもしれません」

「そもそも、あの男は何者じゃ。わしの攻撃を素手で止めおった」

幸が少し笑った。

「あたしの大切なお父さんであり、夫でもある。それ以外の修飾する言葉はないよ」

「ある程度の実力を持った術者の一覧は既に把握しておる、お前にしても、お前の父親にしても一覧には無かった」

「一覧に載せてもらえないってことは、実力が無いってことだろうな」

幸は笑うと、辺りをゆっくり見渡した。

「電車に乗ったのは正解だったなあ、余禄が付いてきた」

「花魁道中の儀が使えれば、方違えなどなしに、鬼の世界に戻れるが、もう供の者もおらんかな」

「なあ、なよたけさん、白とあたしの他に、人はこの電車に乗っているのかな」

嬉しそうに幸が呟いた。

「この電車には人は乗っておらぬようだ。お前達を含めてな」

「何言ってるんだよ。あたしも白も人だよ」

前方を眺めながら、幸が囁いた。

乗客全員だろう、次々に三人を取り囲んでくる。他の車両からも、乗客がこの車両に移り込んで来、幸達とは、ほんの一メートルほどの距離を開け、一つの巨大な壁にでもなろうかと、乗客達にやけた表情を浮かべブロックのように隙間なく固まって行く。

「お前達を巻き込んでしまったな。わしが何とかしよう」

「いや、心臓が無いとはいっても、元は人間たちだ。あたしにさせてくれ。白の勉強材料にちょうど良い」

白は何も答えない。既に恐怖と緊張で叫び出す寸前だった。なよたけの姫の手をぎゅうっと握り締めている。なよたけの姫はなだめるようにもう片方の手を白の両手に載せた。

「良く見ておけ、白。こういう戦い方もある」

幸はゆっくりと立ち上がり、微かに俯いた。

そして、ゆっくり幸が顔を上げた時、まさしく、天女、マリア、観音菩薩、慈愛に満ちた笑顔を幸は浮かべていた。醜く引きつった無数の顔顔、顔の壁に、清らかな笑みを浮かべる。

「子供達よ。心穏やかになさい。もう、苦しまなくて良いのですよ」

幸は中央の顔に焦点を向けた。

「子供達、とても疲れているのですね。心にいくつもの、とげが刺さっているのですね、母はわかります」

ゆっくりと中央の顔の表情が消え、その両方の眼から涙がこぼれて行く、まさしく、母と出会え

た幼子のように。

「母が降臨したいま、もう、子供達よ、辛いことはすべて消えました。何もかも忘れ、ゆっくりとお休みなさい。明日の朝日を夢見、ゆっくりとお休みなさい。すべては許されたのです」

幸が緩やかに両手を広げる、まるで、全ての者達を抱こうとするかのように。

ゆっくりと壁が崩れて行き、重なるようにして、眠る人達。どれも安らかな表情で寝息をたてている。

幸は振り返ると、にっと笑った。

「ま、明日がどうなのかなんて知らないんだけどな。はは、な、白、美人は得だろう。白も美人になるぞ」

啞然とする白となよたけの姫。

「さ、詐欺だ」

二人して叫んだ。

最終駅、列車はドアを開けたまま、明かりを消した。まるで、列車までが安らかに眠るように。

三人はホームに降りると、線路に下り、そのまま、線路を元来た方向へと歩き出した。

「このまま、二キロほど、この速さで戻れば、わしの国の入り口じゃ」

「なよたけさん、敵討ちって具体的に何をするつもりなんだ。大量殺戮、一気にかたをつけるかい」

幸がわくわくしたように言う。

「これでも、わしは鬼の側じゃ、そういうことを言うな。わしはお前の弱点もわかっておる。好き勝手にするなよ」

「あたしに弱点。んなもん、あるかよ」

幸はなよたけの姫に振り向くと、にいいっと笑った。

なよたけの姫は溜息を付くと、白に言った。

「愉快的な母親じゃのう」

白は困ったように笑みを浮かべた。

「いつもはとてもいい母さんなんです。でも、先生から離れると、ああいうふうに」

「己のことをあたしと言い出したら、叱ってやってくれとあった」

「え」

「反物に挟んであった手紙じゃ」

なよたけの姫は封筒をひとつ取り出すと、幸に言った。

「あやつは、真、お前を大切に想うておるようじゃのう。呆れるほど、お前の幸せだけを願っておる。お前が普通に楽しく幸せで生きられるよう、己が死んだ後も、お前が家族と共に普通の日常を送って行けるよう腐心しておる。ありがたいものなの」

「お父さん・・・」

すすり泣きだした幸に、なよたけの姫が言った。

「泣くな。泣けば、あやつの思いを涙で流してしまうぞ。すれば、また、この繰り返しじゃ。泣

くのを堪えて心に刻み込め」

幸は俯いたまま、うなずくと歯を食いしばった。

「手紙、読むか」

「いい」

幸が俯いたまま答えた。

「帰ってから読む、父さんに心配し過ぎだよって笑って言うから」

闇の中、淡く光を放つ白い霧が見える。まるで壁のように、霧が闇の中に浮かび上がる。

「満月が戦乱の後の故郷を白く照らし出しておる」

なよたけの姫は深い吐息を漏らすと、二人に振り返った。

「わしにはもう、客人をもてなす力はない。つい、流れで同行してもらったが、敵は多いぞ。特に白、お前は戦には不向きじゃ。怪我では済まぬかも知れんぞ。正直なことを言うと、お前が死ねば、幸は全てを、世界すら葬るかもしれん、出来れば避けたい。わしは、これでも、元は鬼の為政者だからな」

幸は真っすぐに、なよたけの姫を見つめた。

「なに言っているのかなあ。なよ姉ちゃんは、もっと妹を信頼するべきだな。困った姉ちゃんだ」

にと幸がなよたけの姫に笑いかけた。

なよたけの姫は不意に大声で笑うと苦しそうに息を吐いた。

「笑わせおる。なんと随分な妹ができたものじゃ」

ふと、なよたけの姫は真面目な顔になると呟いた。

「長く生きてると色々と思ひもかけないことがあるものじゃなあ」

なよたけの姫は気持ちを入れ替えるように、頭を振ると、二人に言った。

「よし。幸、白、ついて来い」

「うひゃあ、軍隊だ」

幸が小さく呟いた。霧から脱出した、三人の目の前に一個中隊はあるだろう、重火器を構えた兵士達はその砲口を三人へと定めていた。

「白。戦車もこっち向いてるぜ」

「幸母さん、喜び過ぎです」

白が緊張を隠せず震える声で答えた。

なよたけの姫を先頭に幸と白がいる。

「あれ、なよ姉さん。こいつら、自衛隊じゃないか。ってことは人間か」

なよたけの姫は、振り返らず、前方を睨みつけたまま呟いた。

「人の支配者層は、己らの保身のため、既に見切りをつけた、国民を護ることにな」

「ふうん、鬼による事件が増えたのはその所為か」

幸がたいして関心なさそうに頷いた。



そして幸は夜空を見上げると、ひとつ、指を鳴らす。呼応するように、小さな星が四つ生まれ、流れ星のように帯を引き、落ちて行く。

幸は視線を戻すと、小さく呟いた。

「まさしく鬼司令官だな」

なよたけの姫に向き合うように、軍服を身につけた鬼が現れた。人の身長も横幅に対しても一、五倍はあるだろう。

「やはり戻って来たか。かぐやのなよたけの姫。どうだ、根こそぎ民を殺されたその感想は」見渡すと、国というよりも、時代劇に出てくるような田舎の風景だ。

「開国を拒絶した報いだな」

鬼があざけるように嗤った。

なよたけの姫は、表情の消えた顔を上げ、目の前の鬼を眺めた。

「貧しいが、楽しく生きて来た。電気と化石燃料と貨幣経済を拒絶する生活は却って寄り添い、お互いを大切に生きることができた」

「貴様らがレアメタルの上で暢気に暮らしていたのが命取りとなった、そういうことだ」

なよたけの姫は、それ以上言葉を発することなく、ゆっくりと両手を肩の高さに広げた。

幸は察すると、白を片手に抱え、一瞬にして後方に退いた。

「下賤の鬼、わしを逃した、あの娘も殺したか」

鬼はにやっと笑うと、振り返る。直属の部下だろう、槍を鬼に手渡した。

鬼がかかげる槍の先に、血に赤く染まった少女の頭が、首から切り離され、突き刺さっていた。

「情に深い貴様のことだ、残しておいてやったよ。受け取れ」

鬼が槍を勢いよく振る。少女の首が飛んだ。

瞬間、幸は現れると、少女の首を抱え、手をその首に溶け込ませた。手を抜き、引っ張り出した黒い塊を戦車に向かって投げる。

爆風と轟音が辺りを震撼し、巨大な戦車を横転させた。

「なよ姉さん、あとはまかした」

幸が姿を消した。

「うおおおっ」

かぐやのなよたけの姫が咆哮が夜のしんとした空気を震わせる。幸は白を抱え、空に浮かんだ。

「本気のなよ姉さん、凄いな」

幸が呟いた。

無数の刃儀が鬼を兵士を切り裂いていく。

なよたけの姫は地面を飛ぶように移動すると、槍を持ったままの鬼を両断した。すべての砲撃を見事に躲し、武器も兵士も鬼も、迷うことなく細切れに切り裂く、次々と肉の破片が辺りを血の色と共に埋めて行く。

「まるで、ミンチ肉のように」

言いかけて、白が口をつぐんだ。自分の言葉が不謹慎に思えたからだ。

「パン粉と混ぜて、ハンバーグにしても、なんか、まずそうだな」

幸は平気な顔をして笑う。

「なよたけさん、こんなに強いのに」

「ん・・・」

「白、目を見開いて、向こうの血に染まってない地面を見てみる。黒い線がいくつもあるだろう」

「あります。焦げたみたいなの」

「さっき落としておいた、監視衛星と軍事衛星。レーザー光を発射して宇宙から人を焼いてしまう。エネルギーの巨大無駄遣いってやつだ。これは人の技術だ、妙なことになったな」

返り血で血まみれになり、なよたけの姫は、一人、茫然と立ち尽くしていた。

幸と白はなよたけの姫の前に降り立つと、幸は抱いていた少女の首をなよたけの姫に手渡した。

「幸。この娘の名前はなんというのだろうか。わしは身を呈してわしを逃してくれたこの娘の名も知らぬ阿呆じゃ」

なよたけの姫は両腕に少女の首を抱くと、くずれるようにひざまづいた。

「痛かったろうに、怖かったろうに。助けてやれずにすまない」

幸は睨むようになよたけの姫を見つめていたが、小さく息を吐くと、思い詰めたように白を見つめた。

「白。母さんが神になって何処かに行ってしまうないように。しっかりとしがみついでいてくれ」

そう言うと、幸はなよたけの姫に優しく声をかけた。

「なよ姉さん。その娘を幸に渡してください」

顔を上げたなよたけの姫の両腕から、少女の首が浮かび上がり、幸は柔らかに少女の首を抱いた。

「幸・・・」

「この娘の魂魄はこの首にまだ残り、なよ姉さんに逃げてくれと叫んでいます。この娘にもう一度、生命を与えましょう」

幸の両腕が白く輝き出した。

白は幸の体が不意に軽くなったような気がした。慌てて、白は強く幸を抱き締め、幸の背中に顔を埋めた。

「母さん、何処にも行かないで」

白が大声で叫ぶ、なよたけの姫が気づいた。

「幸。お前、神か」

はっと、なよたけの姫は状況を理解すると、幸の両脚をしっかりと抱えた。

少女の体が幸の両腕の中で再生され、実体化して行く。

「母さん、母さん、何処にも行かないで。お願い、一緒にいて」

白が涙声で叫ぶ。

光が消え、幸はそのまま、力をなくし、地面に倒れ込む。なよたけの姫が慌てて、その体を支えた。

「なよ姉さん。この娘が目を覚ましたら、名前を尋ねてやってくれ」

幸が疲れた表情で笑う。

娘が幸の両腕の中ですやすやと眠っていた。

幸はしがみついたまま固まってしまった白に言った。

「白。ありがと・・・」

「おおい、母さあん」

黒の声が遠くに聞こえた。

やがて、黒と三毛が走ってやって来た。

「黒姉ちゃん」

白が泣きながら叫んだ。

「大丈夫か、白」

「うん」

黒の後ろで、三毛は茫然と血まみれの地面を見つめた。

「母さん、これは」

「明日はハンバーグだ。美味いぞ」

三毛が大きくひとつ溜息をついて言う。

「だめです。一生、ハンバーグは食べられないかもしれません」

三毛が両手で口を覆った。

「ここがよくわかったな」

幸は笑うと、三毛の背中をさすりながら、辺りを見渡している黒に言った。

「走ってすぐだったよ。先生がぎゅっと白のこと、思って走ったらすぐだよって、教えてくれたんだ」

「そうか。鴨居に結んだ白の髪の毛で道が繋がったのか。帰りはその道を辿ろう」

幸は緩やかに笑みを浮かべると、なよたけの姫に言った。

「なよ姉さん、風呂で洗いっこしよう。姉さんの顔、血糊や涙や鼻水で大変だ」

慌てて、なよたけの姫は袖でござと顔を拭いた。

「ああ、そうしよう。遠慮はしないようにする」

幸はほっと安心して小さく笑うと、黒に言った。

「黒。なよたけ姉さんを背負ってくれ。三毛はその娘を頼むよ。体が馴染むまでまだ時間がかかるだろう」

「幸。この娘はわしが背負おう。そうしたいのだ」

幸はなよたけの姫の言葉に頷くと、ゆっくりと立ち上がった。

「黒、三毛。なよ姉さんが倒れそうになったら支えてくれ。白は先頭、道案内だ」

闇の中、男は一人、月明かりを頼りに台所で水を飲んでいて、家の中は、すっかり寝静まっている。

なよたけの姫まで、普通の女の子のように、大声で騒ぎながら、風呂を遊び場のように、幸達とはしゃぐ、その声が居間からでも聞こえていた、なよたけの姫の女の子っぽい笑い声にあかねが目丸くして驚いていたのを男は思い起こす。

「千年の重荷を降ろしたということか」

ふと影が動いた。なよたけの姫だ。

なよたけの姫は、テーブルを挟み、男の前に座った。顔が影になり、細かな表情が伺えない。

「あ、あのな・・・」

なよたけの姫が言葉を選ぶように言う。

「どうぞ」

男が促した。

「幸が言うのだ。わしは幸の姉だ、だから、お前を・・・、お前を父さんと呼んで欲しいとな」  
思いもしなかったなよたけの姫の言葉に、男は小声で愉快そうに笑った。

「驚きました」

「だ、だめか・・・」

「いいえ、光栄の至りです。こちらこそ、どうぞ、よろしく」

安心したように、なよたけの姫は息を漏らした。

「それなら、彼女はなよたけさんの娘ということでいいですか。なよたけさんの一番の気掛かりは彼女のこれからでしょう」

「もうひとつある」

「亡くなった人達のことですね」

男が呟くように言った。

「わしも、人の心が声に出して言っているようにわかる。だから聞こえるのだ。魂魄はあの地にそのまま残り、いまも悲鳴をあげ続けている。わしはその魂を鎮めてやらねばならん」

男は優しくなよたけの姫を見つめると、心配げに言った。

「なよ。父さんはお前の心と体が心配だよ。とても、疲れているのがわかるからね」

「でも、お父さん。なよは忘れることができないんだもの」

我慢し切れず、なよたけの姫が小さく笑った。

「我ながらつまらぬ小芝居を。緊張感がだいなしじゃ」

なよたけの姫は大きく息を吸い、ゆっくりと吐いた。

「ここはいいな。この家に繋がった異界は、和やかで、わしの気持ちも、落ち着く。なあ、わしは深刻ぶって身を削ろうというのではない。国の責任者としてけじめをつける、ただ、当然のことをするだけじゃ」

足音がした。

幸は少し寝ぼけたふうに、なよたけの姫の隣に座った。

「幸も行くよ。じゃないとなよ姉さん、国に入れないもの」

「そう言えば、国を出る時、なにやら、結界を巡らしておったな」

「レアメタルは新たな戦争を引き起こす元になるから、簡単には入れないようにしたんだ」

そう言いながらも、眠いのだろう、幸がなよたけの姫の肩に体を預ける。

「疲れさせてしまったな。さあ、幸、寝に行こう。起こして悪かったな」

なよたけの姫は幸を支え、ゆっくりと立ち上がった。

「父さんも寝ろ。宵っぱりは体に毒じゃ」

「お休み。もうすぐ寝るよ」

男はなよたけの姫が幸に肩を貸し、寝間に行くのを見送る。

そう言えばと男は黒がはしゃいでいたのを思い出した。

かあさんとなよ姉さんの間に寝るのは、世界で一番安全なところで寝るのと同じだよだとか。

男はふと自分がいなくなった後も、なよたけの姫が居てくれれば安心だと思った。

## 遥の花 月の竹眠るモノ 四話

---

### 異形 月の竹 眠るモノ 四話

かぐやのなよたけの姫、危機に陥るかも

月曜日 18 7月 2011 at 6:49 pm.

男は、夕刻、茶店の窓際の席に座っていた。  
珈琲をテーブルに戻し、行き交う人を眺める。  
街中、まだ、日差しは残り、夕食の材料だろうか、買い物帰りらしい女性が多い。  
男は会計事務所の勤めからの帰り、待ち合わせにと茶店に寄ったのだった。  
幸せすぎて申し訳ない、思わず、男の口から小さく言葉が漏れた。

「よう、久しぶりだな。寺で閉じ込められて以来だ」  
男がゆっくりと顔を上げた。  
「どちら様でしょうか。お人違いではありませんか」  
男が興味無さそうに言う。  
愚円は男の前、斜すに座ると、テーブルに右肘を載せ笑った。（短編小説『異形流堰迷子は天へと落ちていく』四話より）  
「冷たいなあ、昔の仲間によ」  
男は、溜息をつくと静かに言った。  
「あんたと仲間だった記憶はない。だが、仕事を邪魔された記憶ならある」  
男は残った珈琲を飲むと言った。  
「私は待ち合わせでね。ここで人を待っているんだ。邪魔しないでくれるかな」  
「なんだ、儲け話か。なら、俺にも小遣い稼ぎさせてくれよ」  
「いや、娘と待ち合わせだ」  
一瞬、愚円の顔が引きつった。  
「幸とか言ったな」  
「あんたの口から、娘の名が出るのは、なんだか汚されたようでいやだな。まあ、幸は四女で、これから来るのは次女だ」  
愚円はほっと息を漏らしたが、おそろおそると尋ねた。  
「同じばけものか」  
「私の娘達をばけもの呼ばわりするな。みんな、可愛くて優しい女の子だ。さっきもね、思っていたんだ。・・・こんな私が、良い娘たちに恵まれてさ、申し訳ないくらいだってね」  
「あの神殺しの魔術師とも言われた無がこんな冴えないおっさんになってしまうとはな」

男は小さく笑った。

「褒めてくれてありがとう」

男は初めて愚円の姿を直視した。

「仕立ての良いスーツ。こざっぱりとした様子じゃないか。ちょっとしたやり手のビジネスマンだな」

「垢だらけでは女にモテないからな。それに金もある、遊ばないという選択肢を選ぶ理由はないだろう」

「坊主を辞めたのか」

「いや、館長直々の命令だ。人探し、いや、鬼探しだ」

愚円は顔を寄せると、小声で囁いた。

「この辺りでかぐやのなよたけの姫を見たという情報がある。随分と前だがな」

「鬼の女王か。探しているのか」

「賞金が出ている。一生、遊んで暮らせる金額だ。だが、俺はそんな金には関心がない。それだけの金を出そうということ自体に関心がある。考えられないような金が裏で動いているはずだ」

「なるほど、敏腕のビジネスマンだ」

「あんたも一口乗らないか」

「冴えないおっさんだからな、遠慮しておくよ。私はそんなことよりも、今晚の晩御飯の方が関心あるんだ。だしの効いた茄子のつゆびだしが食いたいとかさ」

愚円が哀れむような顔で男を眺めた。

「ここまで落ちてしまうとはな、あの無が」

こんこんと硝子を叩く音がした。なよたけの姫と黒が笑みを浮かべ、手を振っている。男は入り口を指さすと、にっと笑みを返した。

「愚円。手を引け、怪我するだけだ」

いきなりの男の言葉に愚円は男の真意を計りかねた。

「父さん、待たせたな」

「たいして待っていないよ」

男が笑った。

「その男、誰じゃ」

「古い知り合い。とっても悪い奴だから、喋っちゃだめだよ。さあ、帰ろうか。ん、黒がいないな」

「あそこじゃ」

なよたけの姫が指さす入り口、ショーウインドにケーキが売られており、ぼおっと黒が幸せそうに見つめていた。

「アップルパイが欲しいらしい。なあ、父さん、初めての給料は父さんのものを買うつもりじゃ

ったが・・・、アップルパイ買っても良いかのう」

「なよが佳奈さんちでアルバイトしたお金だ、父さんのことよりも自分が買いたいことに使いなさい、ついでに言うと、父さんもアップルパイ、好きだからさ。みんなで食べたなら楽しいな」

「ならば、そうしよう」

にかっとなよたけの姫は笑みを浮かべると、黒のところへと歩きだす。呼吸困難のように口をぱくぱくさせていた愚円がやっと意識を取り戻した。

「俺が館長から探索を仰せつかったのは、かぐやのなよたけの姫の顔を知っているのが俺と館長だけだったからだ。なんで、かぐやのなよたけの姫があんたの娘なんだ」

「うーん、他人の空似かな」

男が気楽そうに答えた。

「多分、お前の情報も、うちの娘を見間違えたんだろう、削除しておいてくれ」

男は明細を持ち、立ち上がるとレジへ向かった。

にこおっと黒が満面の笑みを浮かべる。

店の外、黒はしっかりとアップルパイ、ホールで二つ、箱を抱えていた。

「先生、ありがとう」

「ん、買ったのは、なよだよ」

「なよ姉さん、先生にお礼を言えって。先生の新しい財布がアップルパイになったんだからって」

「そうか、それは、どういたしまして」

男は笑うと、なよたけの姫に言った。

「さすがのなよも黒には甘いなあ」

「性根が腐らん程度には甘やかしてやるわ、一応、こいつはわしの命の恩人じゃからな。それに、こいつが声をかけなんたら、小夜乃も生き返ることはできんかった」

ふっとなよたけの姫は笑みを消した。

男はなよたけの姫が小夜乃を連れ帰った次の朝、小夜乃を抱きかかえ、助けてくれてありがとうと真っすぐに言ったこと、そして、小夜乃に国の責任者として民を守れなかったのを謝ったことを思い出した。

小夜乃はなよたけの姫にしがみついて泣いていた、いつまでも。

「あ、黒。なよ姉さんにアップルパイを買ってもらった」

あさぎの横で、夕食にと茄子を切っていた幸が声を上げた。

「黒はなあ、本当に」

幸は手を止めて、溜息をついた。

「ごめんなさい、母さん。黒姉ちゃん、悪気はないんです」

白が慌てて黒をかばった。

白は棚からお皿を出していたが、手を止めると、そっと幸に言った。



「ここに来るまで、本家では、食べるもの、あまりもらえなくて、黒姉ちゃんが、あたしたちに食べさせようと、いつも・・・」

幸は包丁を離すと、ぎゅっと白を抱き締めた。

「良い姉さんだな」

「うん」

白が堪えるように小さく呟いた。

あさぎが棚からティーカップを出す。

「夕食の後はアップルパイ、紅茶の用意、しておくね」

「あさぎ姉さん、しょうがないから、黒にはちょっと多めに取り分けてやろう」

「うん、しょうがない、しょうがない」

あさぎが楽しそうに笑みを浮かべる。

「あ、でも、そうしたら、黒は白や三毛に、自分の分も食べろっていうかもしれない」

ふと、あさぎが呟いた。

困ったように、白は笑みを浮かべると、首を横に振って言った。

「あさぎ姉さん。それは絶対ないと思う」

くすぐったそうにあさぎが笑った。

幸はもう一度、茄子を切り始めたが、思い出したように言った。

「そういえば、三毛はまだ戻らないのかな」

「小夜乃ちゃんと散歩するって、出たきりだね。あかねちゃんも一緒かな」

あさぎが答えた。

「あさぎ姉さん」

「ん」

「体操をね、小夜乃ちゃんに教えてやってほしいんだ。いいかな」

「うん、教えるよ」

「ね、そのうち、この体操はダイエットと美容の体操ですって売り出そうか。儲かるかもしれない」

「本が百万部突破、DVDもつくらなきゃね」

幸の言葉に、あさぎが笑った。

川上を夕日が沈んで行く。

三人がそれを静かに眺めていた。

並んで座る影、静寂を遮るようにあかねが言った。

「綺麗な色ですね」

「太陽は燃え尽きて死んでしまうけど、朝にはまた甦り、世界を照らす。だから、朝の太陽は生まれたばかりの元気な赤ん坊なんだよ」

小夜乃が小さく呟いた。

「それは」

三毛が小夜乃の言葉を促した。

「かぐやのなよたけの姫様の言葉です」

ふと、三毛は小夜乃の手を握ると呟いた。

「ごめんなさい、とっても怖い人だと思っていたんだ」

小夜乃はそっと笑みを浮かべた。

「とっても怖いけど、とってもとっても優しい人なんです」

くしゅん、なよたけの姫がくしゃみをした。

「なよ姉さん、それは噂くしゃみだよ」

両手にアップルパイの箱を抱え、黒が笑った。辺りは少しずつ、夜の気配を現し、三人は家路へと急ぐ。

「ならば、誰かが、わしを褒めてくれてるのだろう」

黒が楽しそうに笑った。

「きっと、良い人だって知っているんだ」

「さてな。わしはそんなには良い奴ではないからな」

なよたけの姫はふっと顔を曇らせたが、気持ちを切り替えるように笑った。

「黒。お前はわしが恐くないのか」

「怒鳴られたら泣いてしまうかもしれないけど、でも、恐くない。啓子さんも、なよ姉さん、恐くなくなったって言ってた。とっても可愛い女の子だって言ってたよ」

「あやつはなめておるのお。まあ、良い、それもあやつの良いところじゃ」

「なにはともあれ」

なよたけの姫が顔をぐっと上げた。

「かしずかれるより、対等に喋るのは随分と楽しいものじゃな」

「無の野郎。何が娘だ」

ホテルの一室。愚円は女がシャワーを浴びている間、ベッドの上で歯噛みをしていた。

このまま、尻尾巻いて逃げ出せるはずがない、お宝が目の前に転がっているのに、手ぶらで帰れるか。

しかし・・・、流石にあの三人を相手に勝ち目はない。

そういや、なんで、かぐやのなよたけの姫にあんな賞金が付いているんだ、それに、いま、奴の国は結界が張ってあり、誰も入れない、もちろん、鬼の奴らもだ。そもそも、人と鬼の連合軍が、なんで、あんなに田舎の国を攻める必要がある。

このからくりの裏を解いて行く方が、儲けに近いかもしれん。どうせ、あいつら三人に勝てるような奴はいないからな。

出し抜かれる心配はないだろう。

不意に、シャワーの音が止まった。

「母さん。なよ姉さんにアップルパイ買ってもらったよ」

家の前で少しは叱ってやろうかと、黒を待ち構えていた幸だったが、黒のなんの戸惑いのない、その声に半分呆れ、笑みを浮かべた。

「良かったな、黒」

ぐりぐりと拳で黒の頭をなでる。

「もお、母さん、痛いよ」

「ごめん、ごめん。さあ、アップルパイは冷蔵庫だ」

「うん」

黒がぱたぱたと家に駆け込んで行く。

「黒にはかなわないな」

男が笑った。

幸も笑うとなよたけの姫に言った。

「なよ姉さん、お疲れさま。折角の給料がアップルパイになってしまったね」

「給料は余禄じゃ。わしは佳奈のところへ遊びに行っているようなものじゃからな」

「でも、佳奈姉さん、喜んでいたよ。売上が上がったって」

なよたけの姫がにと笑った。

「売り子は面白いのお。国を治めるのと似ておる」

「話はあとあと。さあ、家に入ろう」

男は二人を促すと家に入った。

「あ」

小夜乃は小さく呟くと、よろめきながら、なよたけの姫の元へ走り、その前で正座した。

「お帰りなさいませ、姫様」

「ただいま。しかし、ここではその姫様はやめてくれ。妙に照れるからな」

なよたけの姫は小夜乃の前に座ると、右手を差し出した。

「わしの手を両手でぎゅっと握ってみい」

「は、はい」

ううっと唸りながら小夜乃が両手でなよたけの姫の右手を強く握る。

「よしよし。随分、力が戻ってきたな」

小夜乃は手を離すと、嬉しそうに笑った。

「さて、晩ご飯の用意もできておりそうじゃ。食卓を出すかな」

なよたけの姫が折り畳みのテーブルを廊下から運ぶ、あたふたと小夜乃がそれを手伝った。三毛とあかねがもう一つ、テーブルを出し、並べる。これで九人が座ることができる。

満面の笑顔のまま、黒が折り畳みの椅子を運んで来た、白も折り畳み椅子を両手に運ぶ。

「黒さん、嬉しそう」

「小夜乃ちゃん、晩ご飯の後はアップルパイだよ」

黒は椅子を降ろし、小夜乃を抱き締めると、うふふっと笑う。

「黒姉ちゃん、涎が出てるよ」

白が見とがめて言った。

「黒姉ちゃんは幸母さんの御陽気なところばかり似ています」

白が大袈裟に溜息をついた。白は意識して幸を母さんと呼ばずに幸母さんと呼ぶようにしていた。

黒は笑うと、小夜乃から離れ、椅子を並べる。

「何を言われても怒らないよお。御陽気母さんに似ているって言われても」

黒が鼻歌交じりに答える。

「ジャガイモと茄子と玉葱のお味噌汁です」

三毛が鍋を抱えて台所からやって来た。よいしょっとテーブルに鍋を置く。

「やったー、いっぱい食べるよ」

「黒姉ちゃん、アップルパイを食べるなら、ちょっと、控えめの方がいいよ」

「ええっ、三毛は厳しいなあ。入るところが違うから大丈夫だよ」

「別腹ってやつですね。黒姉ちゃんは本当に胃が二つあるかもしれない。一度、母さんに診てもらったほうがいいよ。でも・・・、太るかもしれないけど、アップルパイは楽しみです」

三毛は笑うと黒に頷いた。

「黒さん、ほどほどですよ。黒さん、少し動きが鈍くなっています」

「は、はいっ」

あかねがおひつを抱え、直立不動になった黒を少し睨んだ。

三毛が不思議そうに二人を見る、あかねがちょっと舌を出して、三毛に笑いかけた。

「よいしょっと」

男が野菜炒めいっぱいの大皿を抱えて持って来た、やっとのことで、テーブルに置く。

「いろんなのが入っておるのお」

なよたけの姫が驚いて覗き込んだ。

「美味しいですよ」

あさぎがお茶の入ったやかんを片手に笑った。

「いま収穫できる野菜はもちろん、ハーブや食べられる草まで入っています。味付けはちょっと中華風です、自家製ベーコンも入っていて旨みは充分ですよ」

「なるほどのお、あさぎの作ってくれるものは旨くていい。早く食べよう」

食卓では必ず黒は真ん中に座る。両方の大皿からおかずを取るためだ。

頂きます、元気よく黒は言う、と本当に嬉しくてたまらないと笑顔で晩ご飯を食べる。

あさぎが黒を見て、幸せそうに笑った。

「黒ちゃんは本当に嬉しそうに食べてくれるね、作りがいがあるよ」

「あさぎ姉さん、とっても美味しいよ」

「ありがと」

黒はにひひと幸のおどけた時とそっくりの笑みを浮かべた。幸はふと、立ち上がると、硝子戸を開け、代わりに網戸を閉める、涼しい風がそっと入ってくる。そして振り返る、楽しいなと小さく呟いた。

深夜、男が部屋の明かりを消そうとした時、襖の向こうからなよたけの姫の声が聞こえた。

「入っても良いか」

「どうぞ」

男が答えると、襖が開き、なよたけの姫が入ってきた。

男は椅子に座ったまま、少し顔を上げ、笑みを浮かべた。

「どうしました、なよ」

なよたけの姫が緊張した面持ちで呟いた。

「わしはここを出て行く」

「夕方の、あの破壊坊主の頭の中、読んだんだね」

男は溜息をつくと、俯いた。

「小夜乃だけは、これからも、ここで暮らさせてもらえないか」

かすかに、なよたけの姫の言葉が震えた。

「小夜乃ちゃんは、なよがないとだめになってしまうよ。それに」

ふっと、男が顔を上げた。

「大事な娘をほうりだすなんてことは、父親として出来ないな」

男は右手で、なよたけの姫の手を力強く握った。

「家族ってなんだろうと思うことがある。ここには、いわゆる血の繋がりという意味での親子は存在しない。でも、ここでは血の繋がりよりも強い、思いの繋がり親子が成り立っている。父さんはなよを娘と認めた。だから、どんな奴からもなよを守るよ」

男はじっと、なよを見つめたが、ふと襖に目をやった。

あたふたと、幸が部屋に飛び込んできた。

「なよ姉ちゃん。幸も戦うよ、だから、ここで一緒に暮らそう」

なよたけの姫が小さく溜息をついた。

「似た者親子じゃなあ」

なよたけの姫のもう片方の手を幸は両手でぎゅっと握ると、嬉しそうに笑った。

「なよ姉ちゃんも、随分と、お人好しだ。だから、似た者親子の似た者姉妹だよ」

「わかった」

なよたけの姫は呆れたように言うと、二人の手を解いた。

皆が寝静まった夜中、なよたけの姫は屋根の上に座り、月を眺めていた。

ゆっくりと雨戸が開く、あさぎがつかかけを履き、外へ出てきた。そして、辺りを見渡し、それから、空を見上げる。

やっと、なよたけの姫に気づいたのだろう、笑みを浮かべると、自分を指さし、そして、なよたけの姫の横を指さした。

なよたけの姫は絹の紐を飛ばし、釣り上げるように、あさぎを持ち上げ、自分の横に座らせた。

「ごめんなさい、なよ姉さんがいないし、雨戸が少し開いていたから気になって」

なよたけの姫は少し笑うとあさぎの頭をなでた。

「ただの月見じゃ、心配するな」

「なよ姉さん、悩みはうまく解決したようですね」

「ん、どうしてわかった」

「なよ姉さん、晩ご飯の時、ふっと暗い顔をしていたのが、今は表情が柔らかいから」

なよたけの姫は困ったように笑みを浮かべた。

「表情に出ておったか。心配かけたのお」

くすぐったそうに、あさぎも笑みを浮かべる。

「父さんに相談した、改めて、わしは、なんて言うかな、自分の居場所を見つけた気がする」

「それはあさぎも同じです」

あさぎはなよたけの姫に腕をからめ、かすかに俯いた。

「助けてもらえなかったら、消えてしまうところでした。今は皆がいてくれて、とても楽しい。もしも、消えていたらと思うと胸がぎゅっと苦しくなります」

「お互い良かったな」

なよたけの姫の言葉にあさぎはそっと頷いた。

なよたけの姫は永く思い出すことのなかった、幼少の頃をふと思い出した。

「そんな時代もあったな」

小さく呟く。あさぎはその声に顔を上げた。

なよたけの姫は笑みを浮かべるとあさぎに言った。

「もう寝よう。夏とはいえ、風邪をひいてしまうぞ」

異形撃 一話

娘3人、学校へ通う。学園物語にする予定はないけれど

日曜日 30 10月 2011 at 11:30 pm.

「あれは」

男が小さく呟いた。

夕刻、中学校から帰る白の姿だ、友人だろう、同じ制服を着た女の子と公園のベンチでお喋りを楽しんでいる。

男は白の世界が少しずつ広がって行くのを感じた。

学校に通わせたのは正解だったかなと思う。

黒が中学三年、三毛は一年、白が二年と一年ずつずらしたのだが、黒と三毛は出席日数を計算し、出来るだけ学校に行かないようしている。同い年の人間が嫌いなようだ。白だけが、医者になるのを目指し、真面目に学校へと通っていたのだった。

男は少し笑みを浮かべると背を向けた。

歩きだし、しばらくして男は白の気配を後ろに感じた。

「お父さん、冷たいですよ。声をかけてくれなきゃ」

白は男の右腕を両腕でだきかかえると、嬉しそうに笑った。

「ごめん、ごめん」

男は笑うと、白の頭を左手で撫でる、嬉しそうに白が笑みを浮かべた。

「白のお友達です」

白は手を離すと、隣にいた女の子を男に紹介した。

「津崎椿さんです」

慌てて、その女の子は男にこんにちはと言い、会釈する。

「白の父です。白をよろしくね」

男は穏やかに笑みを浮かべたが、心と振り返る。

「ケーキ店の前か。白、良いところで声をかけたなあ」

「はい」

白がにっと笑みを浮かべた。

「父兄同伴なら買い食いもいいだろう。ケーキセットでいいかな」

「黒姉ちゃんたちもいいですか」

「もちろん」

男が笑みを浮かべた。

ケーキ店に設えたテーブルに着く。男の前に白、白の横に椿が座った。

「津崎さん、白は学校で楽しくしていますか」

「え、あ、はっ、はい」

男は笑うと、白に言った。

「良い友達が出来たね、白。最初はどうなるかなと不安だったけど。あとは、黒と三毛か」

白が少し困ったように笑みを浮かべる。男は軽く溜息一つをついた。

「まあね、特に黒は頑ななところがある、三毛は黒に影響されているしき。父さんの前では二人とも素直で可愛い女の子なんだけどね」

ふと、男は入り口を見た。はあはあと息を切り、走ってきたのだろう、黒が小夜野を背負って立っていた。後ろには三毛が小夜野が黒の背中から落ちないように支えている。

「お父さん、音速で走ってきたよ」

黒はにっと、幸と同じ笑みを浮かべると、小夜野を背負ったまま、男のもとにやってきた。

「座って、ゆっくりしてくれ。お疲れ様」

三毛が座席を向こうから一つ、取ってきてテーブルに寄せる、黒がそれに小夜野を座らせた。

「なよ姉さんからの伝言です」

「三毛、なよは小夜野のこと、心配してなかったか」

「とっても、心配していた。でも、小夜野ちゃん、一時間なら外に出ていって」

三毛が嬉しそうに笑った。

「なよは過保護だからな」

男が笑みを浮かべた。

目の前の座席に座ろうとする黒を見て、津崎はどぎまぎしていた。

突然、転校してきた美人三姉妹。特にいっこ上の黒と呼ばれる女の子は、端正な顔立ちと伶俐な表情で、私達の憧れの先輩だ。

黒と三毛も椅子に座る、ふと、黒は津崎を見てにっと笑った。

「椿ちゃん、白をありがとうね」

津崎は慌てふためいて、こくこく頷いた。

「こ、こちらこそ、あの、あつと、えつと、白さんと、な、仲良くさせていただいていますっ」

そつと、黒が目元に柔らかな笑みを浮かべると、少し頷いた。

「さて、ケーキを選んでくれ。お喋りばかりだと、お店の人に叱られてしまうぞ」

男は笑うと黒にメニューを手渡した。

「白は何にする」

黒が白に話しかけた。



「白は断然チョコレートケーキです」

「相変わらずだなあ、椿ちゃんはどうする」

津崎は憧れの先輩の笑みにどう答えればと、慌てふためいた。

「あの、えっと、えっと・・・」

返事ができず、津崎が固まってしまった。

「椿ちゃん、大丈夫だよ。深呼吸なさい」

黒の言葉に津崎は大きく深呼吸をする。白も津崎の手をやわらかく握った。

「わ、私もチョコレートケーキでお願いします」

黒がにっと笑った。

「ここのチョコレートケーキは美味しいよ」

黒は小夜野に話しかけた。

「小夜野は何がいい」

「苺のケーキが食べたいです」

「黒と一緒にだ、ケーキはやっぱり苺だよ。三毛は何にする」

「決まってます、チーズケーキです」

うふふと黒が笑った。山羊を飼い始めたのだ、三毛は山羊のミルクでチーズを作るのだと楽しみにしている。

「お父さん、どうする。一番のお勧めは苺のケーキだけど」

「そうだな、お勧めは父さんには甘すぎるかな、ショコラケーキを頼むよ。それと、珈琲で」

「珈琲は母さんに叱られるよ。だから、父さんが母さんに叱られたら黒も一緒に謝ってあげるよ」

「頼りになるなあ、黒は。ありがとう」

男が嬉しそうに笑った。

黒が注文に行く間、ふと、三毛が言った。

「黒姉ちゃん、大人っぽくなった気がする」

「そうだね。お姉ちゃんとして頑張っているんだよ」

三人を中学に入れるにあたって、男は幸と相談し、自分を三人の父親ということにした。

それからだろう、三人は男を先生と呼ぶのを止め、お父さんと呼ぶようになった。

ただ、あかねや啓子も男をお父さんと面白がって呼ぶようになった、そういう意味では男の広い意味でのあだ名と捉えても良いかもしれない、とにかく、男は改めてそう呼ばれることが楽しいことだと感じていた。

「ね、お父さん」

三毛が身を乗り出して男に声をかけた。

「今日はお仕事、早く終わったの。まだ、明るいよ」

「うーん」

男は困ったように笑みを浮かべた。

「実は会社をくびになってね。公園でぼおっとするかな、って時に白に見つかったのさ」  
三毛が目を輝かせた。

「それなら、お父さん、ずっと家に居ることができるの」

「再就職も難しい時代だからな。困ったなあ」

「大丈夫だよ。母さん、喜ぶよ。母さん、この頃、父さんの身体のことを気掛かりで、ぼおっとしたり、泣いたりしてたんだよ」

「そうか・・・、辛い思いさせたんだな」

男は少し俯くと、小さく吐息を漏らした。

「幸と畑仕事するのも楽しいだろうな」

「そうだよ。母さん、とっても喜ぶよ。あさぎ姉さんのお店も順調だよ、心配ないよ。生活できるよ」

「そうだね、楽しそうだ」

「ね、三毛が山羊さんの世話を教えてあげるよ。山羊さんのチーズでチーズケーキを作ろうよ」

「わかった。それじゃ、三毛に教えてもらおう。三毛、よろしくお願いします」

三毛が幸せそうに笑った。

黒は話が終えたのを見計らって、戻ってきた。

「お父さん、頼んできたよ」

「そっか、ありがとう」

黒は椅子に座ると、男にそっと笑みを浮かべた。

「お父さん」

「ん」

「話聞いてたよ。お帰りなさい、お父さん」

男はくすぐったそうに笑うと、ただいまと呟いた。

食事を終わったのを見計らい、男が言った。

「少し薄暗くなったな。父さん、ちょっと、用事があるからね、みんなで津崎さんを家まで送っていきなさい」

「うん、その方がいいと思う。なんだか、どんどん、物騒になるもの」

「そうだな」

男は頷くと小さく呟いた。

「あと、半年でなんとかしなきゃな」

「え・・・」

「ん、なんでもないよ。さあ、暗くならないうちにお帰り」

男は黒達を見送ると、深く溜息をついた。

詳しくはわからないが、鬼との協定で政府は、幾人かの人身御供を提供するよう決めたようだ。もちろん、テレビで報道されるわけではない。裏からの情報だ。連れ去られた人間は、食われるか、慰み物になるか。鬼は人間を主食にしているわけでは決してない、つまりは遊びとデザート代りのようなものだ。

そして、連れ去られた人間は行方不明者として扱われる、何らかの理由で一年間に行方不明になる人間の数は案外多い、それに鬼の分が増えたとしても、さほど、目立たないだろうと政府は考えているらしい。

もちろん、その現場に遭遇すれば、角を生やした巨体がいくつもいるわけだ、騒ぎにならないはずはない。はずはないのだが、そうならないのは、多分、誰もが、この現状を気づきだしたのだろう、だから、直接、自分に被害が及ばない限りは見て見ない振りをするようだ。

それほど、人は高尚ではない。

「ん、幸はケーキ、どれにするかな」

男が顔を上げると、幸が目の前に立っていた。幸は口を閉ざしたまま、自然に口付けをする。

「ふむ。お父さんはショコラケーキだ。幸も同じのにするよ」

幸は笑みを浮かべると、店員にケーキを注文し、隣に座った。

「幸」

「ん」

「悪いことした、ごめんね」

「三毛はおしゃべりだなあ」

「それは幸がとっても好きで、自分が何をすればいいのか、一所懸命考えたのさ」

「良い娘だ」

「一所懸命って良いな。ちょっと眩しい」

「ね、お父さん」

「ん」

「もっと近づいていいかな」

「いいよ、ありがとう」

幸は男の肩に頭を寄せると、両手で男の手を握った。

「お父さんにもっと近づきたいな」

「ありがとう、でも。ぶつかってしまうぞ」

「お父さん、幸はもっとお父さんに近づきたい。服の数ミリの幅でさえ、遠くに感じてしまうんだ」

「なんだか、凄い言葉だな」

「お父さん。幸もね、一所懸命なんだ。お父さん、本当にごめんなさい」

先頭を歩いていた黒が不意に立ち止まった。

囲まれてしまった、充分に気配を探っていたのに。囲まれる前に対応できなかったなんて。相手、強いのか。

黒がすうっと深呼吸をする。

「白、三毛。津崎さんと小夜乃を囲め。鬼に囲まれた」

黒の目の前に黒い影が浮かび上がる。高さ五メートルはあるだろう、その黒い影は次第に実体化し、額に角を生やした鬼の姿になる、戦争映画で見たような戦闘服を着ていた。

「黒姉ちゃん」

三毛が叫んだ。目の端で後ろを覗く。五人を囲むように鬼が円陣を組んでいた。

「黒猫。小夜乃というのはどれだ」

巨大な鬼が地鳴りのような声で黒に問いかけた。

「なんのことだか、わからないな」

鬼は面白そうに五人を見比べていたが、小夜乃を睨むと、にいと笑った。

「猫と人間、簡単な消去法だ」

鬼が号令を掛けた。

「真ん中の白い服の女を連れて行け。後は形も残らぬよう切り刻め」

黒ががっと目を見開いた。

「自在」

黒が叫ぶと、両手に一本ずつ、男の使う、筒が現れた。

それを白と三毛に投げ渡す。

「白、三毛。姉ちゃん、一気に片付ける。少しの間、二人を守れ」

「なんだ、黒猫。腰でも抜かすかと思うたが、どうやら、楽しませてくれそうだな」

正面の巨大な鬼が地響きのような大笑いをする。

「警告する」

黒が声を発した。

「無の眷属、黒。命が惜しければ、すぐさま去れ。惜しくなければ、肉片と果てろ」

不意に鬼は関心を持ったのか、黒を睨みつけた。そして、顔を上げ、睥睨(へいげい)する。

「お前ら、手を出すな。につくき魔術師 無の関係者らしい。一対一で楽しませてもらおう」  
凄みのある笑みを鬼は方頬に浮かべ、黒に言った。

「踏み潰してやろう」

瞬間、黒が間合いを狭めた。飛び上がり、宙返り、鬼の顎を蹴り抜いた。

鬼は微かに安定を崩し、半歩、足を引いたが、さほどの衝撃を与えることは出来なかったらしい。

「首の太さを考えろ」

鬼は笑うと、反撃を開始した。

五メートルもの身長の子動物がどうしてこんなにも動けるのか。容赦ない頭上からの打撃が黒

を襲う。

必死になって黒は打撃を避けるが、何故か避けた方向へ打撃が飛んで来る。

瞬間、鬼が姿勢を落とした、まともに鬼の前蹴りが黒の腹部を蹴り上げ、黒がまるで紙切れのように飛ばされた。

鬼は笑うと、黒に言った。

「要らぬことを言ったな。無の名前がでなければ苦しむことなく死ねたものを」

黒が体を起こし、鬼を睨みつける。

「本当に黒さんは真面目なんだから」

あかねが鬼の右肩に立っていた。

あかねがにいと意地悪に笑みを浮かべる。

「え、あかねちゃん。ま、まさか」

黒が驚いて目を見開いた。

同時に鬼が自分の右肩を驚愕の目で見た。あかねの髪が一瞬、揺れた。

うおおっ、鬼が倒れ呻いた。あかねはすっと着地すると、黒の前に立った。

「黒さん。まさか、の後の言葉、教えて欲しいな」

「はっ、いいえ、あの」

あかねが嬉しくてたまらないと笑みを浮かべた。

「人の困った顔を見るのは大好き。でも、あんまり、黒さんをいじめると幸姉さんに叱られてしまうね」

鬼ののたうちまわるその動きがまるで辺りを地震のように思わせる。

あかねは鬼を振り返ると呆れたように言った。

「体の割に打たれ弱いなあ。根性が足りない、今まで自分が攻撃されるってことが少なかったんだろうな」

「あ、あかねちゃん。いったい」

「たいしたことはしてないよ。なよ姉さんが心配してね、迎えに行くようになって、頼まれて来ただけ。で、ついでに鬼の肩、ちょっと踏み抜いてみた」

黒が茫然としたようにあかねを見つめた。

「黒さん」

あかねが背を向けたまま、言った。

「幸姉さんはこんなもんじゃない、完全に鬼を踏み潰すよ。そして、黒さんはあかねより本当は強い。ただ、実践経験が少ないし、優しすぎる。やるときは徹底的にやる、一厘の憐憫の心、一切、必要無し。倒すんじゃない、潰せ。わかったか、黒さん」

「は、はい」

あかねが一步、踏み出した。

「のたうちまわっている根性無しはあかねが潰します。後の鬼は背の高さも大人程度、黒さん、

頭切り替えて漬して行きなさい。わかりましたか」

「はい、わかりました」

あかねが微かに笑った。

「しっかりね、黒さん」

「ただいま帰りました」

あかねは小夜乃と手をつなぎ、家へ戻った。

奥から、なよたけの姫が割烹着を身につけたまま、足早にやって来た。

「おお、小夜乃は無事か」

なよたけの姫は言う、あかねに頭を下げた。

「すまなかったな、あかね。助かった」

「いいえ、楽しめました」

あかねは笑うと、ふと、居間に炬燵の準備があるのに気づき、我先にと入り込む。

あかねは苦手だった。小夜乃がぎゅっとなよたけの姫にしがみつき、顔をその胸に押し付けている。

怖かったのだろうと思う、それはわかるのだが、人と距離を置かねば、却って落ち着かない自分には、見ていると重苦しくなるのだ、少し羨ましいな、小さくあかねが呟いた。

しばらくして、落ち着いたのか、小夜乃があかねの横に正座する。

「助けてくれてありがとうございます」

「どういたしまして」

あかねは笑みを浮かべると、炬燵の布団を少し上げる。小夜乃が斜め向かいに座った。

「もうすぐ黒さん達も帰って来るよ。あの女の子も送り届けたようだし」

「あかねさんは強いし、いろんなことがわかるんですね」

「そんなに強くはないよ。幸姉さんやお父さんには到底、及ばないし、それに心の強さは小夜乃が上だよ、あかねよりも」

あかねは笑うと、微かに俯いた。

「ただ、いま、ここにこうしているのがとても幸せだし、この幸せを護るためなら、いくらでも頑張ることが出来ると思う。ああ、何言ってんだろう」

あかねは素直に照れ笑いをすると窓の外を眺めた。外も暗くなり、照れ笑いをする自分の顔が映る。

硝子の反射に蜜柑を載せた籠を持ったなよの姿が見える。

なよは小夜乃の隣りに座ると、蜜柑の籠を置いた。

「晩ご飯の用意をあさぎに頼んできた。あかね、蜜柑を食え」

あかねは笑うと、蜜柑をひとつ取った。

「まさか、かぐやのなよたけの姫と炬燵に入って蜜柑を食べるとは想像もしておりませんでした」

「その名を言うな。なよで良い。」

くすぐったそうにあかねは笑みを浮かべ、蜜柑の皮をむく。甘そうな蜜柑だ。

「なよ姉さん。あれは南面の鬼です。高園童子の流れを組む鬼ですね。この国の為政者達は最悪な選択をしました」

なよは黙ったまま、蜜柑をひとつ取る、

「あの時の自衛隊はまだ人間だった」

「いまは、自衛隊の一部に鬼化した自衛官だけを集めた部隊が編成されつつあります」

「神崎の動向は」

「神崎は放逐されました。ただ、彼はいずれ力をためて、反撃に出るでしょう。彼は徹底的に鬼を毛嫌いしていますから」

なよは剥いた蜜柑を半分に割り、その半分を小夜乃に手渡した。

「小夜乃、食べ。美味しいぞ」

なよは嬉しげに小夜乃に笑みを浮かべた。

「なよ姉さんは小夜乃に甘いなあ」

「うな、照れるわ。ただな、あかね。わしは小夜乃にしても、黒にしてもな、それから、世話になっている佳奈もじゃ。普通に暮らせるようにしてやりたい、いま、本当にそう思うのじゃ。

多分、それは、わしがいま幸せなのじゃからであろうな」

あかねはいたずらげに笑みを浮かべると、蜜柑をほおぼった。

「なよ姉さん、可愛いですね」

「千年以上生きて、可愛いと言われるとはな。わしもなめられたものじゃ」

なよがくすぐったそうに笑った。

不意になよが玄関口の方角を睨んだ。

「鬼が攻めてきた」

飛ぶように、なよは玄関口へ移動すると、外を睨んだ。

漆黒の雲、いや、見上げるほどの壁が向こう、こちらへと向かってくる。

その前を白が黒を背中に背負い、三毛がその背中を押し、駆けていた。

「遅い」

なよは呟く、爆発、風があかねを後ろへ追いやった。なよが最高速で飛び出した。一瞬にして、なよは三人を抱きかかえ、絹で縛ると、アスファルトを粉微塵に蹴り、玄関口へ飛び戻った。

「あさぎ」

なよが叫んだ。

なよの緊張した声に、あさぎが慌ててやってくる。小夜野も飛び出してきた。

「晩御飯の用意は後じゃ。鬼が攻めてきた。父さんと幸が戻ってくるまで持ちこたえるぞ」

「はいっ」

あさぎが叫んだ。

「あさぎ、そのまま、座れ。そして、この家を守りたいと強く願え。黒、白、三毛、お前達もじゃ。四人は、父さんと幸の術を学んでいる。この家の障壁と同調できる。小夜野もあさぎ

から、体操を学んだであろう。あれも、術のひとつじゃ。あさぎの隣りで強く願え」

「はい」

しっかりと、小夜野が答えた。

「よし。あかねはわしと来い」

二人は家の外に出ると、漆黒の壁を待ち構えた。

「あと十秒じゃな」

「角のある鬼は大勢がひとつに固まり、巨大化すると聞きましたが」

「やつらは、個であると同時に全体でもある。あかね、わしの背中に入れ、わしが押し返す」

「いやです」

「なにっ」

「それは、あかねが、かっこよくありません」

あかねが漆黒の壁を睨んだ。

「さすがに、なよ姉さんでも、一人では支えきれませんよ」

二人の前に漆黒の巨大な壁が迫る。

すごい圧力だ。陰の威圧が二人を飲み込もうとする。

・・・遅くなったね・・・

声がした。二人が天を見上げる、遙かな壁の上、その遙か上から男が自在片手に急降下、自在が光の筋になり、漆黒の壁を両断した。壁が霧散し、自在片手に男が鋭い眼光を輝かせていた。しかし、すぐに笑みを浮かべると、自在を消した。

「二人ともお疲れ様。ちょっとね、大変でね。帰るのが遅くなってしまった」

「父さん、お帰り・・・」

そう呟いて、なよは腰を抜かしたように地面に座り込んでしまった。

あかねも大きく息を吐き出すと、しゃがみ込んでしまう。

「父さん、遅いですよ」

あかねが息を吐きながら呟く。

「いや、なんというか。申し訳ない。実は幸がね」

不意に驚いたようにあかねが辺りを見渡した。

「お父さん。幸姉さんは」

男が困ったように笑みを浮かべる。

「あのね、間違いなく、背中の女の子が幸だと思うんだけどね。いったい、どうしたのか、父さんにもわからなくてさ」

男は小さな、小学生くらいだろうか、女の子を背負っていた。



異形撃 二話

あかねが背中の子をのぞき込む。すやすや眠っている、小学校二、三年か、ただ、幸の子供の頃は間違いなく、こんな美少女であったに違いないと思う。そう、幸姉さんにそっくりだ。

「どれどれ」

なよは疲れ果てたように呻くと、立ち上がり、男の背中をのぞき込んだ。

「ああ、あ」

と、なよは思わず声に出す、そして、大きく溜息をつく、いきなり、女の子の頭をすこんと右手ではたいた。

「狸寝入りするな、幸」

「ててっ、ごめん、なよ姉さあん」

子供になってしまった幸は照れ笑いのような表情をなよに浮かべた。

「父さん、こやつは間違いなく幸じゃ。邪法を使い、失敗して子供にはなってしまったがな」  
男は少し安心した表情を浮かべた。

「そうか。何処かで幸がはぐれて泣いてやしないかなんてね。まずは、ほっとしたよ」

部屋の中央に椅子を置き、幸を座らせる。

男を除いて全員が幸を困惑しつつ、見つめていた。正面の黒がおずおずと言う。

「えっと、母さん」

語尾が上がった疑問形、三毛よりも幼い女の子が目の前にいて、それが母さんだというのが、根が真面目な黒は、何をどう言えばいいのか、戸惑い、ちょっと涙ぐむ。

「ごめん。母さん、子供になっちゃうって病気に罹ってしまって、ごほげほ」

「んなわけあるか」

なよが思いっきり突っ込む。

「父さんを子宮に入れ、赤ん坊にして延命させようという邪法じゃ。それに失敗して、おのれが若返ってしまったのであろう」

「うん、そう」

幸が微かに俯く。

不意に幸のお腹が蠢きだし、幸乃が外に転がり出た。

幸乃は自分の手や足を見、小さくなっていないのを確認した。

「幸。お前は大神あるお父様になんということを」

幸乃は言いかけて、その時の様子を思い出したのか、顔を真っ赤にし俯いてしまった。

「まっ、その邪法を組んだのはわしじゃ。じゃから、あまり、幸のことは言えんがのう」

なよはどかっと胡座をかくと俯いた。

「わしの古い記憶を読んだのであろう、ならば、わしが失敗してしもうた記憶も読んでおけ」

声をかける間がなく、男は困り顔でその様子を見ていたが、少し場が静かになったのを見計らい、そっと、声をかけた。

「ま、そのくらいにして、晩ご飯にしようか」

じろっとなよが男を睨む。

「まあ、なんていうかな。腹が減っては苛つくばかりでね」

男がおそろおそろ笑みを浮かべた。

なよが大きく息を吐いて、思い切った眼差しで男を見つめた。

「なあ、父さん」

「ん」

「父さんの命はあと半年くらいであろう」

「そんなもんだらうね」

皆が驚いたように男を見つめた。

「お、お父さん、本当に」

黒が驚きのあまり声を出せずに囁いた。

微かに男が頷く。

「やだよ。お父さん、死なないで」

黒が呻くように呟いた。

「なあ、幸も止むに止まれず父さんを延命させようとしたのじゃろう。わしも父さんには生きていて欲しい。わしにとっても、こんなに楽しい日を過ごすことができてるのう、やはり、父さんがいてくれんな」

なよが恥ずかしそうに言う。

男は自分が死んだ後、幸を一人にしたくないと、家族が増えることを喜んでいたが、自分にとっても、それは家族なんだなと実感した。

「幸、おいで」

幸は顔を上げると、男の元に走りより、しがみついた。

「幸、これをあげよう。手を出しなさい」

男の手から、薄い緑の色をした小さな鍵が現れ、幸に手のひらに消えた。

「ここの鍵だ、現と異界を繋ぐものだよ」

幸が顔をあげ、目を見開いた。

「お父さん、死んじゃやだよ」

掠れた声で幸が呻いた。

「一カ月、旅をしたら帰ってくるよ」

男は幸の頭を軽くたたくと、幸せそうに笑みを浮かべた。

「さてと」

男は顔をあげた。

「なよが父さんのいない間は中心になってくれ。ただ、なよのわからないこともあるだろうから、幸乃」

「はい」

慌てて、幸乃が顔をあげた。

「なよをしっかり助けてやってくれ」

「わかりました」

幸乃は落ち着いた声で答えた。

「わしは新参者じゃぞ、それに鬼でもある、いいのか」

「なんの問題もないよ。それから、小夜乃」

「はい」

戸惑うように小夜乃が答えた。

「なよを支えてやってくれ。小夜乃は心が強いからな」

小夜乃が嬉しそうに笑みを浮かべた。

「黒」

「は、はい」

「黒はちょっと真面目過ぎだな。妹たちのことを考えてだろうけど、自分自身がまいてしまおうぞ。もう少し、白や三毛に頼るようにしなさい」

黒がほっとしたように頷いた。

「白は医師になりたいんだろう」

「はい」

「しっかり勉強すること、ただ、自分の安全は自分で守れるようにすること。黒と三毛、いつも三人が意識を繋いでるようにね。これから、難しい時代になるからさ」

「三毛がもっと早くに気づくべきだったこと。それは黒よりは動けないけど、黒より頭の回転は早い、白よりは勉強苦手かもしれないけど、白より動けるということ。そう考えれば自分に何ができるか見えてくるだろう」

「お父さん、そういうことはもっと早くに教えてください」

男がくすぐったそうに笑った。

「あさぎは喫茶店、順調のようだ。たくさんの人達と言葉をかわしなさい。あと、近くへの買い物なら行くことができるだろう、一人ではだめだけれど、誰か、二人以上となら、外に出てもいいよ。じっくりと自分を組み立てていきなさい」

「ありがとう、お父さん」

あさぎがそっと笑った。

「あかねはとっても心配だなあ」

男の言葉に俯いていたあかねが驚いて顔をあげた、自分には声がかからないだろうと思っていたのだ。

男は笑うとあかねに言った。

「鬼の勢力圏が広がりつつある。あかねは独自に潜入調査とかしてるけど、この一週間で二回は死んでいるよ。なよか、幸に、幸はこんなんになってしまったけど、手伝ってもらいなさい。どうやら、幸の能力そのものは変わっていないようだ」

「ありがと、お父さん。助けてくれて」

あかねが驚いて言った。

「どう致しまして」

男は笑うと、幸に言う。

「生きながらえることにするとさ、いろいろ、昔の済ましておかなければならないことがたくさんあってね。父さん、一カ月、一人で旅に出るよ。一カ月後の今日には帰って来るよ」

「ちゃんと、帰って来る」

幸が心配げに問う。

「頑張って帰って来るよ」

「それじゃ、待ってる」

男が幸の頭をなでた。

「なんだか頭、撫でやすくなったなあ」

男が少し哀しげに笑った。

「そうだ、あさぎ」

「はい」

「一カ月後の今日の晩ご飯。ちょっと、贅沢なのがいいな」

「腕によりをかけて作ります」

「楽しみにしてるよ」

男は嬉しそうに笑うと、幸を前に立たせ、その両肩に手をそえた。

幸が懸命に笑みを浮かべた。

男が安心したように笑みを浮かべ、姿を消した。

しばらくして、なよが呟く。

「行ってしもうたか・・・」

なよは幸の元へ行くと、後ろから幸を抱きしめた。

「愛している人といつまでも一緒にいたい。その思いは真実じゃ。なかなか、どうして、難しいことじゃがな」

「なよ姉さんもそうだったの」

「何百年も昔のこと、忘れてしもうたわ。いまが、楽しすぎるからの」

幸がほんの少し、笑みを浮かべ、呟いた。

「幸もとても楽しいんだ。ありがとう、なよ姉さん」

「幸、うちのテレビ、見れないのかな」

朝、あさぎが店から、とたとたと台所に戻ってきた。幸がお煎餅片手にお茶をしていた。

「テレビか……。地デジだっけ、テレビ買い替えか、それとも何か買い足さないと見れなかつ

たと思う」

幸が少し見上げる。幸は子供化したままだった。都合よく甘えられるので、案外、楽しんでいるようだ。

「そっか・・・」

落胆したように、溜息をつく、幸の隣りにあさぎが座った。

「なにか、面白いのやっているの」

「うーん、さっき、お客さんがね。広報で明日、政見放送を必ず見るようにって連絡があったらしくてね」

「そういえば、役所の車が、スピーカーで何か言ってたよね」

たいして興味なさそうに幸が答えた。

「ラジオでも放送するかもしれない、お父さんの部屋に・・・」

いきなり、幸が涙ぐんだ。

「ごめん、ごめん。お父さんのこと思い出させてしまって」

「あさぎ姉さん、ごめんなさい。大丈夫だよ、あと、十日でお父さん、帰ってくるものね」  
幸が大きく深呼吸した。

「おーい、幸ちゃん」

玄関口から、佳奈の声が響いた。

「佳奈さん、どうぞ。こっち、台所だよ」

幸が返事をした。

「幸、いいのか」

いつの間にか、煎餅を食べている、なよが心配げに言った。

「え」

「どう佳奈に説明するつもりじゃ、その姿」

「あ、うわっ。どうしよう」

幸が慌てて、腰を浮かしかけた時、佳奈が刺し身を片手にやって来た。

「お刺し身、いいのに入ったからね。持って来たよ」

「佳奈さん。ありがとうございます」

如才なく、笑みを浮かべ、あさぎが佳奈から刺し身を受け取った。

「なあ、あさぎ。刺し身を肴に、一本、いいかのお」

なよが目を輝かせる。

「小夜乃ちゃんが良いて言えばですね。本当になよ姉さんはお酒が好きなんだから」

「この家の唯一の欠点は酒を嗜むのがおらんということじゃよ。小夜乃にはわしから言っておく、やつはほんに心配症じゃ。なあ、佳奈、少しばかりつきあわんか」

「いいですねえ。最近夜、外には出られないし、まだ、朝ですけど。ちょっとだけ」

あさぎが笑って言った。

「縁側に用意します。佳奈姉さん、ゆっくりしてってください」

「あさぎちゃん、悪いね。そうだ、幸ちゃんは何処行ったんだい。声は聞こえたんだけど」  
ふと、佳奈は俯いている女の子に目をやった。

「おや、綺麗な子だねえ、幸ちゃんの子供の頃はきつとこんな綺麗な女の子だったんだろうね。  
え、まさか、幸ちゃんの子供じゃないよね、似ているけど、計算合わないよね」  
幸はゆっくり顔を上げると、困ったように笑みを浮かべた。

「えっと、幸です。本人です」  
一瞬、目を見開いたが、佳奈は大きく深呼吸をすると、目を瞑って唱えた。

「ここは先生んち、先生ち。何が起こっても不思議じゃない。そういう場所、幸ちゃんが子供  
になっても、あ、そう。って言える場所」  
佳奈はもう一度、深呼吸をすると、やっと目を開けた。

「びっくりさせてごめんなさい」  
幸が申し訳なさそうに言う。佳奈はあははと大声で笑うと、ふうっと息を出す。

「落ち着いた。うん、落ち着いた。なんだよ、幸ちゃん。心臓、止まるかと思ったよ」  
佳奈は幸の頭をぐりぐり撫でると、心配そうに言った。

「元には戻れるのかい」  
「十年くらいかければ戻れると思う」  
佳奈は少し溜息をつくと、幸の前に立った。

「幸ちゃん、ちょっと立って」  
幸が立ち上がると、佳奈がぎゅっと幸を抱きしめた。

「心配かけるねえ、この子は」  
「ごめんなさい」

佳奈は手を離すと、ちょっと笑う。  
「息子二人で、つまらんなあって思っていたけど、娘ができた」

佳奈は笑うと、幸の頭を軽くはたく。  
「服屋の母さんにはそれとなく言うておくよ。それじゃ、なよさん」

「おう」  
二人が連れ立って縁側へ行く。  
「幸、良かったねえ、流してくれて。ほっとしたよ」

あさぎがそっと笑った。  
「いっぱい心配かけちゃったよ」

幸はあさぎにしがみついた。  
「あさぎ姉さんもごめんね」

「どういたしまして」

「なよさん、鬼ってなんなんだい」  
縁側で日本酒を交わしながら、佳奈が尋ねた。そういえばと、なよは今までの経緯を酒の肴にし

やべっていたなと思い出した。

「人の世界と同じように鬼の住む世界がある。その世界に住むもの、言葉を持つ生き物すべてを鬼と呼んでおる。じゃから、昔話に出てくるような、角を生やした鬼もおるし、わしのように角のない可愛い鬼もいるということじゃ」

「なよさんは、可愛いってより、美人、別嬪さんだよ。いやさ、昨日、鬼が店に来たんだ」

「鬼とどうしてわかる」

「角、五センチくらいかねえ額に生やしていたんだ」

ふと、なよは俯いて考え込んだ。

「額に角か・・・」

「若い男と女でさ、このご時世、なんてものつけてんだって、叱ったんだよ。で、男がにたにた笑うもんだからさ、二人の角、摘んで引っ張ってやったのさ」

「本物の角だったわけか」

なよが俯いたまま、呟いた。

「女の方は糊か何かで付いていただけで、簡単に取れたんだけど、男の方は、本当に骨が出っ張ったみたいでさ。あたしのびびった顔見て、大笑いで出て行ったんだ」

「さすがの佳奈もびびったか」

なよは少し笑うと顔を上げた。

「さてのう、どこまで話せば良いかのう」

ぐびつとなよは冷酒をひっかけると、盆に湯飲みを置いた。

「鬼と人間はまったく別の世界の生き物じゃ。ただ、昔話にもあるように、いくらかの接触はあった。ただ、それは例外的なもので大勢にはまったく影響がなかった。ま、お互い、それぞれ別の世界で平和かどうかはともかく生活しておったわけじゃ。ところがこのところ、生物としての人間の力が弱くなった、便利な生活の中で生命力を失いつつある、鬼は好機と考えた。人間の世界を奪えるんじゃないか、領土を広げられるんじゃないかとな。それが、いまの情勢じゃ。もちろん、ことはもっと複雑で鬼がそう思い立った後ろに、あくどい人間がいるとわしは見ておるがな」

「それじゃ、これからは、人間と鬼が共存していくってことですか」

「いや、知性のある種同士は共存できんよ、いずれは弱いほうが、つまりは人間が駆逐される、奴隷になるだろう。それにな、佳奈、角のある鬼は人を喰らう」

店の扉が開く。店に戻ったあさぎの前に老紳士が笑みを浮かべた。

「先生はご在宅かね」

「あの、お父さんは留守です」

老紳士があざけるような笑みを頬に浮かべた。

「ふん、ホム・・・」

「どっからわいてきた、爺さん」

一瞬で、幸はあさぎの前に立ちはだかると、神崎を睨みつけた。

「お前、あのじゃじゃ馬か」

「おうさ、ガキになっても力は変わらねえ。棺おけ、両足突っ込みたくなければ、さっさと消えな」

「なにでそうになったかは知らんが、目上のものに敬意を払うことが出来ん頭にはその体が似合っとなるな」

「目上の自覚あるなら、早く引退して、後進のものに場所譲ってやりな、後が腐ってるぜ」

「神崎さん」

外から戻って来たあかねが溜息交じりに声をかけた。

「相変わらず水と油ですねえ」

「これは鬼紙老のお嬢様ではありませんか。こんな女のいるところに近づいてはなりません、汚れますぞ」

「あの、ここで暮らしていますから」

「なんと、嘆かわしい。私めに力がございましたら、あのような女、梱包して、ごみ捨て置き場にでも送ってやりますものを」

大袈裟に神崎が泣きまねをする。

「あの、そういうのいいですから。ご用件は」

「おおっ、そうでした。ぜひ、先生にお目通り願いたくまかりこしましたところ、あの女が・・・」

「その続きはいいです。先生は旅に出ていらっしゃいます、連絡も取れませんし、いつ、お戻りになるかもわかりませんが、かなり、長い旅になるとのことでした」

神崎はまともに落胆したように肩を落としたが、すぐに気持ちを切り替えたのか、顔を上げた。その様子を見て、あかねが言った。

「白澤さんに相談なさるのは難しいですよ、本家当主より、座敷牢に幽閉されています」

神崎が老獪な笑みを浮かべた。

「それは蛇の道、本家の御坊は金勘定は得手でございますが、術は不案内でございますからな。いくらでも抜け穴がございます」

神崎はあかねに深々と頭を下げた。

「それでは、お嬢様。神崎はこれにて失礼いたします」

「無理なさいませぬように」

「なんとお優しい言葉。何処かのガキに聞かせてやりたいものですな。それでは」

神崎が姿を消す、ほっとあかねは吐息を漏らすと。幸に笑みを浮かべた。

「幸姉さん、あいかわらずだなあ」

幸は、にひひと笑うと、お煎餅一枚取り出して、あかねに差しださした。あかねが顔を寄せ、お煎餅を半分かじる。

「大人の分別が足りないのはしょうがない。幸は子供ですもの」



残った半分を幸は食べると、にっと笑った。

なよは刺し身を一切れ取ると山葵を載せ口に運ぶ、つつ・・・、つんと香る芳香の余韻を楽しむ。

「旨いのお、最高じゃ。佳奈、ありがとう」

「面白い人だね、なよさんは」

「ん」

「嬉しい時は子供みたいに嬉しい顔をする」

「そうかのう、わしは大人の女として、影も色気もあるぞ」

「でも、なよさんは、なにか食べている時は子供ですよ。子供がお菓子をほお張っているのと、同じ顔だ」

なよは楽しそうに笑った。

「わしは一国の主として、小さいながら国を統治していた。楽しいことももちろんあったが、常に重責が肩にあった。いまは、一人の存在として家族や友と語ることができる。それに、悩めば相談することも出来る、ほんにそれがありがたいのだ」

「でも、これから大変な時代が来るかも知れない」

「人が鬼を受け入れるかどうか、それが人のこれからを大きく左右する。特に人の男が大変なことになるであろうな」

なよは、ふと笑みを消すと、両腕を組む。

「どういうことです」

なよは微かに息を漏らす。そして視線を上げた。

「インドのカースト制と同じく、角のある鬼の身分階級は絶対じゃ。純潔の鬼、混じりものの鬼、どれほど混じっているかで変わるのだ」

「まじりもの」

「ああ、親が両方、角のある鬼であるか、片方だけかによって変わって来る。ただ、角のある鬼の女は数がかなり少ない。鬼は領土と共に人の女を欲しておるのだろう」

「なよさん」

「ん」

「その理屈だと、人は最下層になってしまう。でも、あたしはね、鬼の顔色うかがって生きるの嫌だし、自分の子供にも虐げられた辛い思いはさせたくないよ。さて、何をどうすればいいのかな」

佳奈が少し俯き考える。

なよは少し安心したように笑みを浮かべた。

「いらっしゃいませ」

三毛があたふたとコップに水をいれ、テーブルに置いた。近所に住む女性、篠石聖子、常連だ。

いま、お店はあさぎと三毛の二人。三毛は学校を休んでいた。

「おや、三毛ちゃん、学校いいのかい」

「出席日数は足りていますから、大丈夫です」

「困った子だねえ、困った、困った」

くすぐったそうに笑う。

「まっ、三毛ちゃんが居てくれると楽しいんだけどね」

篠石聖子、四十代主婦、週に二回、自宅で小学生に算数と英語を教えている。

三毛は自然に篠石の隣りに座る。

「篠石さんは学校休んだことなかったの」

「そうだねえ。三日くらい、風邪で休んだことがあったかな。学校、楽しかったからね」

「ふうん。三毛はね、家にいる方が楽しいよ。あさぎ姉さんやなよ姉さんや小夜乃ちゃんとお喋りするの、とっても楽しいもの。それに、篠石さんのお喋りも楽しいんだ」

「はは、それはありがとう。そうだ、注文まだだった。いつものウインナー珈琲お願い」

「うん。あさぎ姉さんに言うてくる」

三毛は椅子から降りると、厨房へと走って行った。

篠石は、たまたま、立ち寄ったこの喫茶店が不思議なほど気に入っていた。ああ、疲れたなと思った時、ふっと立ち寄る、防音がしっかりしているのだろう、戸を閉めた途端、外からの音は消え、逃げ込んで来た、そんな気がする。そう、まるでシェルターに逃げ込んで来た、そんな安心感があるのだ。

三毛が笑みを満面に浮かべて戻って来た。両手にケーキの載ったお皿を一皿ずつ持っている。

「篠石さん、ケーキ食べよう、あさぎ姉さんの試作ケーキ」

一センチ幅に切ったブロックケーキを七枚、斜めに寝かせて、これはメイプルシロップだろうか、浸した上に、細くクリームで文字が書いてある。そして、となりに苺が添えてある。

「本格的だねえ、なんて書いてあるのかな。おいしいよって書いてある」

「あさぎ姉さんのケーキだもの、とっても美味しいよ」

あさぎがウインナー珈琲を運んできた。

「いらっしゃいませ、篠石さん」

あさぎを珈琲をケーキの隣りに置くと、三毛のお皿の横にもディーカップを置いた。

「三毛ちゃんは紅茶。アールグレイ」

「ありがとう、あさぎ姉さん」

佳奈が帰った後、あかねは、なよに話しかけていた。

「報告は以上です」

「なんと、誰も止めることは出来なかったか」

なよは悲痛な顔で微かに俯いた。

「この国の男どもはひ弱すぎる。これ程の平和、奇跡であるのにのう」

「なよ姉さん、どうします」

なよは顔を上げると、呟いた。

「この国はこの国の者が育てていかねばならん、と言うて、傍観を決め込めば、先は見えておる。わしは佳奈が嘆くの見とうない」

「なら、ちょっと賑やかなことしよう」

ふわっと幸が現れ、なよに笑みを浮かべた。

「幸、何をする気じゃ」

「ちょっとした遊びさ。そうだ、黒を連れて行こう、いろんなこと、あの子に経験させなきゃ。あかねちゃんもいいかな」

「はい、ついて行きます」

あかねが即答した。

ふと、なよが考え込む。

「幸とあかねと黒か。万が一、ここの護りはどうする。そうそうは攻めては来ぬだろうが」  
幸は髪の毛を一本抜くと、なよの手首に巻き付けた。ずっと、髪の毛がなよの手首に溶け込み消えた。

「これで、なよ姉さんもここを護ることができる。そうだ、なよ姉さん、刀帯儀、あれ教えてくれ。術を教えっこしよう」

「術をか」

「うん、お父さん、言った。幸の足りないのは術の繊細さかなって。あれ、細かいんだろう」

「幸、お前は天才じゃからな。細かいところを飛ばしても、形になる。じゃが、精密に組み立てれば、わしの想像できない刀帯儀ができるかもしれんな。幸は何をわしに教えるつもりじゃ」  
幸はふと考えたが、顔を上げ、なよを瞬きせずに見つめた。

「いまさら、遅いかもだけど、遠見を教えよう」

幸は人差し指を天に向けた。

「人工衛星くらいなら、触れるくらい近くに見ることができる」

「いいな、教えてくれ」

なよがほんの少し、笑みを浮かべた。

小夜野は川のほとりでうずくまっていた。呆然とした表情でいる。自然と涙がこぼれてくる。なよ母さまになんと言おう、声を押し殺し泣く。

ケーキを食べた後、三毛が全速で川面を駆けていた。お父さんならもっと速く水の上を走る、もっと速く、もっと静かに。いったい、どう体を動かしているのだろう、もう少しでわかるような気がするんだ。

泣いている。

三毛は跳ね上がり、川の辺に急停止した。

「小夜野ちゃん、どうしたの」

三毛は小夜野の後ろに立つと、そっと話しかけた。

「なんでも・・・」

なんでもないと言いかけて、小夜野が口を閉ざした。そして、決心したように振り返る。

一瞬、三毛は目を見開いたが、ぐっと息を呑むと、平静を装う。

ぎゅっと目を瞑り、少し俯く小夜野の額には二センチほどの角が一本生えていた。

「小夜野はなよ母さまに嫌われます。ここも出て行かねばなりません」

閉じた両目からつらつらと涙がこぼれる。

三毛は力強く小夜野を抱きしめると頬を寄せた。

「大丈夫、信じて」

小夜野の膝が崩れ、三毛は小夜野を抱きしめたまま、膝をついた。

「幸母さんと呼ぶよ」

小夜野が微かにうなずいた。

三毛が悲鳴を上げる、

「母さぁん」

三毛の叫ぶ声が響いた。

一瞬で幸は三毛の横に現れる、

「どうした、三毛。小夜野ちゃん」

「母さん、小夜野ちゃんを助けて」

三毛が涙を流し叫んだ。

幸は瞬時に事情を把握した。小夜野の前に座ると、角に触れる。確かに額の骨から出ている。

「首から下を再生したとき、人と組成が少し違うと思ったんだけど、こういうことだったのか」

「三毛、ガーゼと消毒薬と紙テープだ」

「はいっ」

三毛が家へと駆ける。

幸がすっと人差し指で角を払う。すとんと角が根元から取れて、幸の手のひらに転がった。

戻ってきた三毛が、小夜野の額を消毒をし、ガーゼを当て、テープで留める。

幸は落ち着いた声で、小夜野に話しかけた。

「小夜野ちゃん、角の生成組織はただのカルシウムだ。爪や髪の毛が伸びれば切るのと同じように、切ればいい。もっとも、骨は硬いからさ、切りにくいけどな」

幸は背を伸ばし、小夜野を抱きしめると、耳元で囁いた。

「なよ姉さんは小夜野の母さんだ。なよ母さんを信じてやってくれ」

幸がそっと笑みを浮かべた。そして、手を離し振り返る。

なよがいたずらげににっと笑った。

「来い、小夜乃」

なよがゆっくりと歩きだす。小夜乃が泳ぐように駆け出した。ぱふっと小夜乃がなよにしがみつく。

「なよ母様、ごめんなさい」

「謝る必要が何処にある、小夜乃はわしの大切な娘じゃ」

しっかりとなよは小夜乃を抱きしめた。

夜半、皆が寝静まった頃、幸はそっと起き出すと、男の部屋に入る、そして、明かりをつけないまま、男のいつも座っていた椅子に腰掛けた。月の明かりが窓から流れ込み、部屋の中を白く照らす。

「お父さん、ちゃんと帰ってくるよね、約束したもの、ね」

幸は呟くと、視線を落とす。

幸は毎晩、皆が寝静まった頃、男の部屋で少しの時間を過ごしていた。

ふと気配を感じ、幸は顔を上げると、袖で涙を拭った。

「いいよ、なよ姉さん」

幸が声をかけると、襖が開き、なよが部屋に入ってきた。なよは手に持っていた掛布を幸の背に被せる、

「風邪をひくぞ」

「ありがと、なよ姉さん」

「昼間はすまなかったな」

「どう致しまして」

幸は笑みを浮かべると、なよをもう一つ、椅子に座らせる。

「いい月じゃな」

窓から覗く月は大きく輝いていた。

「なよ姉さんは月に帰りたと思ったことはないの」

「話してなかったな。わしは反乱を起こして、放逐された身じゃ。時間が経ち過ぎた、縁ある者も、もうおらんじゃろう。昔はともかく、今は眺めるだけで充分じゃな」

「なよ姉さんも変わった人生を送ってきた人だ」

「お互い様じゃ」

なよは呟くと、視線を幸に戻した。

「すまなかったな。小夜乃のこと、あらかじめ伝えてくれて。いきなり角のことを知ったら、わしはうまく言えなかったじゃろう。ほんに助かった」

幸は笑みを浮かべ、そっと俯く。

「幸せを護りたいから。なよ姉さんと小夜野ちゃんがいなくなったら、ここは幸せでなくなってしまうもの」

「ありがたいことじゃよ」

なよはそっと目を瞑り、背中を椅子の背もたれに預けた。

「初めてあった時、幸に恐ろしいほど睨まれたのを思い出す。しかし、まあ、考えてみれば、今の状況、あかねを後継者にしたてようとしておったのが、今では末の妹になっておる。概ね、望んだようになったのかもしれん」

「思い出したよ。なよ姉さん、首の傷は大丈夫」

「あやうく、首を刎ねられるところじゃったな。鬼紙の刀に」

なよは声を殺して笑うと、首をさすった。

「死にはせんが、泣きそうになるほど痛かったのう。帰ってから大変じゃった。痛くても泣き顔

ひとつ見せられん。為政者としてな、無敵を演じ続けるのは大変じゃった」

「一緒に暮らしていく中で、なよ姉さんの顔、随分、優しくなった」

「ああ、少々腑抜けすぎたかもしれん」

なよは声を殺して笑うと、改めて、幸を見つめた。

「すまなかったな、その姿」

「ううん、幸がお父さんにしたことを考えれば、その代償として受け入れなければならないし、結果として、お父さん、生きることを選んでくれた。だから、嬉しいんだ」

ふと、幸は顔を上げ、襖を眺めた。

「いいよ、黒。入っておいで」

幸が声を掛けると、ゆっくりと黒が襖を開け、部屋に入ってきた。

「幸母さん。明日、大丈夫かなあ」

少し心細げに黒が呟く。

「心配で、眠れないのか」

「うん」

「大丈夫だ。案外、上手くいくもんだよ」

黒は小さく吐息を漏らすと、幸の頭をそっと撫でる。

「母さん、三毛よりも小さくなって、妹みたいだもの。なんだかなあ」

黒は椅子に座る幸の手前に正座した。そうすると、視線が重なる。

「母さん、元に戻れないの」

「十年で戻るよ、それまでの辛抱だ」

なよは小さく笑うと、黒に声を掛けた。

「黒。幸がこうなったのはわしのせいでもある。わしも幸を元に戻すことはできんが、お前の気分くらいは変えてやろう」

なよは黒の後ろに立つと、右手のひらを黒の首筋に当てた。

「どうじゃ、温かくなってきたろう」

「とっても暖かい」

「陰から陽への転換じゃ。黒、お前には力がある。明日は思いっきり働け。幸い、幸い、幸い」

なよは手を離すと、軽く黒の肩を払った。

「なよ姉さん、なんだか、楽しい気分になってきた」

「黒。良い夢を見て眠れ」

黒は安心したように笑みを浮かべると、立ち上がった。

「幸母さん、お休み。なよ姉さんもお休みなさい」

黒は入ってきたときと別人のように、朗らかに部屋を出て行った。

「黒は単純だなあ」

溜息混じりに幸が笑った。

「ただの暗示であれだけ元気になれば上等じゃ」

なよは襖に手を掛け振り向いた。

「わしも寝るよ。幸も早く寝ろ」

「うん、もうちょっとしたら寝るよ」

なよはうなずくと部屋を出て行った。幸が壁を見上げる、男と幸が真ん中に写る集合写真だ。

「お父さん、幸を幸せにしてくれてありがとう。これからは幸がお父さんを幸せにしてあげるよ。だって、お父さんが幸せなら、幸はとっても楽しいんだもの」

闇の中、スポットライトが照らす、中肉中背の一人の男。少々、貧相な顔立ちだが、身につけている背広は最高級品だ、彼こそはこの国の現在の首相である。

「国民の皆様、ほぼ、全員がこの番組を視聴してくださっていることでしょう」

首相はポケットからハンカチを取り出すと、額の汗を拭いた。微かにもう片方の手が振るえている。極度の緊張状態に彼はあった。三台のテレビカメラの内、中央のカメラが彼を捉えている。彼は泣いているとも笑っているともつかない複雑な表情を浮かべている。暗闇の中で、姿は見えないが主要な報道メディアが居並んでいた。

首相は喉が渴いたのか、掠れた声でゆっくりとマイクに語りかけた。

「国民の皆様には、あまりにも突然のことで、ご理解いただくのに時間がかかるかも知れません。しかし、いま、これがこの国で起こった真実です」

秘書官の一人が、コップに水を入れ、届けた。首相は、ごくっと思いと飲むと、意を決して声を上げた。

「ただいま、日本は鬼に占領され、植民地と化しました。日本国憲法、民主主義は完全停止いたしました」

一瞬にして、明かりがともり、白い光が煌々と辺りを照らしあげた。晚餐会、沢山のテーブルに贅をこらした料理が並べられ、シャンパングラスを手にした鬼達が百は下らないだろう、お互い笑いあい、乾杯の声を合図にグラスのシャンパンを飲み干した。

新聞社だろうか、カメラのフラッシュが眩く鬼達を照らし上げる。

ゆっくりと中央にいた、二メートルあるだろう、堂々とした鬼が一人、首相の元へ近づくと、その肩に手をやり、声を上げて笑った。

その身長差は、確実に人と鬼の力関係を明示していた。

額に二十センチはあるかという角を二本生やし、牙が少し覗く。身なりは人の背広をそのまま大きく仕立て上げたもので、首から下だけを見れば、背の高い紳士であった。

「日本国民の皆様、私が鬼の本国より遣わされました進駐軍最高責任者、高園童子です。皆様、突然のことに驚かれたのではありませんか」

かなりの美男である。高園童子にとっては、その角も牙も、却って、野生を思わせる逞しさと魅力を示すものとなっていた。テレビに向かう女性の多くが、魅惑されただろう。

「鬼は想像上の生物、昔話の中だけのもの。ほとんどの人たちがそのように思われていたことでしょう。しかし、違います、我々鬼は違う世界に住む人間です。国同士が戦い、領土を広げるように我々はこの国を征服いたしました。幸いにも、彼、この国の首相を始め、政治家、官僚、

経済人の多くの理解により、争うことなく、統治権を禅譲していただいたこと、感謝いたします」

ぽんぽんと高園童子が首相の肩を叩いた。

ぎくっと首相の顔が一瞬、強張ったが、無理に笑みを浮かべると頷いた。

「我々、与党はもちろん、野党の方々も了承いたしましたして・・・」

押し出されるように、与野党の歴々が高園童子と首相の後ろへと立つ。一斉にシャッター音と共にフラッシュが瞬いた。

ばつの悪そうな政治家の、テレビで見慣れた顔が並ぶ。

高園童子は一步前に踏み出すと、マイクを片手に見渡した。

「我々、鬼族は君主制であるため、日本国の民主制を停止いたしました。しかし、考えてみてください、今までの社会が果たして、民主主義と言えたかどうか。そして、こうは考えたことはありませんか。国民を大切に思う一人の王が社会を統治する方が暮らしが良くなるのではと。約束いたしましょう、国民皆様の生活が大きく変わることはありません、単純に税金の納付先が変わるだけのこと、いや、民主主義では不可能であった、多くの無駄を排することで、より、快適な生活を送ることができるようになります。

そういう意味では、我々は皆様を解放させるためにやってきた救世主とも云うことができるのかも知れません」

高園童子は一気にまくし立てると、万遍の笑みを浮かべた。

シャンパンを飲み干し、高園童子は背を向け後ろに戻ると、グラスをテーブルに置いた。それを合図に、鬼達の会食が和やかに始まった。首相をはじめとした政治家達は直立不動のまま、自衛隊の制服組だろう、一人、ファイルを手元に中央へ歩み寄ると、政治家達を無視したまま、中央に陣取った。

「まずは高園童子様、我が国の統治者となられましたこと、自衛隊の総意といたしまして、強く歓迎いたします」

自衛官は高園童子に向き直ると深く一礼した。高園童子が片手を軽く挙げ、鷹揚に頷く。

再び、向き直ると、自衛官はファイルを開き、言葉を発した。

「ここに重大な発表を行います。私達が鯨を食することを食文化とする、それと同様に、鬼の皆様には、私達、人を食する文化があり、統治する上で、これは避けて通れない道であります。しかし、高園童子様の御英断により、私達に危害を加えようとする一部の鬼様を厳罰に処することを快く決定していただきました。ただ、諸般鑑みまして、国民の中から、毎月百人を選び出し、人身御供として、鬼様に提供させていただくことに政府は決定いたしました。これは、鬼様の要求ではなく、私達、人の側からの統治していただく感謝の意味でご提案させていただきましたもので、高園童子様は辞退されましたが、再度の、私達だけの希望を受け入れてくださり、ここにいたる所存にございます」

自衛官は再び、カメラに背を向けると、高園童子に深く一礼をした。

話はできているのだろう、高園童子はゆったりと前に歩み出ると、自衛官の隣りに立つ。

「この大きな理解に感謝し、我々はこの国を慈悲深く統治してまいりますことをお約束いたし



ましよう」

深々とお辞儀をする、それをきっかけに明かりが消える、スポットライトが、戸惑い、惚けたように口を開けた記者達を照らし出す、いや、その中から現れた静々と歩く美少女だ。美しく深い蒼のドレスを身に纏った少女が両手に一杯の花束を抱え、そして、その後ろをまた、一人の美しい女性が歩く。

もう一つのスポットライトが高園童子を照らし出す。

「これはまた、にくい演出ですなあ」

高園童子の声をマイクが拾う。

蒼の少女は高園童子の前にやってくると、典雅にお辞儀をし、花束を高園童子に差し出した。すべての照明が灯され、真昼の明るさになる。高園童子が腰を落とし、花束を受け取ろうとした瞬間、後ろの女性が少女を抱え上げた。

「お父さんを返せ」

少女は叫ぶと、花束を高園童子に思いっきり打ち下ろした。無数の花びらが舞い上がる。

「お母さんを返せ、お兄ちゃんを返せ。人殺し」

二度、三度、打ち振るう少女の顔がテレビに大きく映し出される。類まれな美少女の涙と叫びが画面いっぱい映し出された。その後ろで、政治家達が腰を抜かし、おろおろとよろめきながら逃げ出す。

「なんだあ、このガキは」

牙をむき出しにした高園童子が幸のドレス、その背中を掴み、軽々と持ち上げ、にたあっと笑った。

「奴らの頼みで始めた面白半分の茶番もしまいだ。ほお、なんて、細くて白い、美味そうな首だ、喉元食いちぎって、その血も飲み干してやろう」

高園童子がカメラに向き直った。

「早い話はこうなんだよ。お前ら人間は俺達の食い物なのさ」

どすん、大きな破壊音が響いた。中央のカメラがひしゃげ粉々に粉碎されていた。腕を組み、にっと笑うあかねの姿があった。残った、二つのカメラも、一瞬であかねが打ち砕く。

自在、幸の後ろを歩いていた黒が呟く、その両手に銀の筒が現れた。

幸は掴まれたまま、残った花束を投げ離すと、高園童子の額を手のひらで撫でた。

「鬼さん、男前になったぜ。感謝してくれよ」

幸の右手のひらには高園童子の角が二本、幸は飛び降りると、その角を床に叩きつけ、踏み抜いた。角が粉々になる。

「な、なんだ、こいつは」

高園童子が幸を殴りつける、瞬間、幸はその拳に右手を触れ、回転する、高園童子が逆に投げ飛ばされ、大理石の床に激突した。

「黒、思いっきり動け」

「はい」

大挙して押し寄せる鬼、鬼、鬼。

黒は鬼に向かって飛び出した。

幸は倒れた高園童子の元に走り寄ると、その耳に囁き始めた。

あかねは満足そうに大きく息を吸うと、呟く。

「こういうの、楽しいなあ。最高だ」

「何者だ、高園童子様に失礼を働くとは」

演説をした自衛官があかねに掴みかかった。

あかねは飛び上がり、自衛官の右頬に右手の甲を添えた。無造作ともいえるくらいの柔らかな動きでその手を下に落とす。自衛官が空中で一転し、背中から思いっきり落ちた。

「つまりは食物連鎖、二番目は嫌だ、それだけのこと」

あかねは囁くと、黒の元へ駆け寄った。

依然とは見違える黒の動きだった。次々と鬼が黒の自在になぎ払われていく。いや、黒には自在で相手を打つ、払うという気持ちはまったくなかった。空中の、ちょうどいい場所に自在を置いている、そうすると、勝手に鬼達が倒れていく、そんな気分自在を動かしていく。

「黒さん、良い動きです。見事ですよ」

「あかねちゃん、ありがとう」

あかねはにっと笑うと、青龍刀のような長大な刀を横なぎに振るう鬼、二人が腰を落とす、頭の上を刃がかすめ抜ける、あかねは瞬間、その青龍刀を握る拳を角度を変えて押す、刀を振るう鬼の首がすたとんと落ちた。弾ける鬼の血、辺りは鬼の地で深紅になったが、二人はすばやく避け、一滴の血も付かずにやり過ごした。

「あかねちゃん、ひどいよ」

「何言っているんですか。刀を振るう以上は己が斬られる覚悟はしなければなりません。さて、遊び足りなくはありますが、引き時ですかね」

あかねが平気な顔をして、出入り口を探した。

新たな一行がやってきた。

「あれは、白澤おばあさん」

黒が驚いて叫んだ。

幸は黒の横に現れると笑みを浮かべた。

「良い動きだった、黒。それじゃ、帰ろうか」

「幸母さん、白澤おばあさんが」

「いいよ。手柄は本家に譲るさ。ま、手柄と言い切れるかは、ばあさんと当主の喋りにかかっているけどな。ま、如才なくことをすませるだろう」

三人の姿がふっと消えた。

椿は思いっきり走っていた。

間違いない、あれは黒様だ。凄い綺麗な女の子の後ろにいた、あの涼しげな眼差し、絶対、憧れの黒様だ。

いてもたってもいられず、椿は覚えている白の家へと走った。

あの角を曲がれば、白さんの家だ。

「止まれ」

怒声が響いた。

樁が硬直する、警官の服装をした鬼が立ちほだかっていた。

「立ち入り禁止だ、戻れ」

「え、鬼・・・」

ぎゅっと樁は唇を結んだ。

「なんだ、美味そうな娘だな」

鬼の口元からたらたらと涎がこぼれた。

「少し腹ごしらえでもするか」

ふわっと、樁の頭の上を風が流れた。

「よっ、ごめんよ」

頭の上で、声が聞こえた気がした。

鋭い蹴りが鬼の顔面に突き刺さったのを見た。

倒れた鬼の上に着地する女、啓子だった。

振り返ると、啓子がにっと笑った。

「あんた、幸ちゃんちの知り合いかい」

「は、はい。白さんの同級生です」

「で、テレビを見てやってきたというわけだ」

こくこくと樁が頷く。

「私もだよ。ん、今更、一人で戻るのも危険だな。あんたの家まで送ってあげるよ」

樁が思っきり顔を横に振った。

啓子は困ったように笑う。

「妙な奴ばかりが集まってくるんだなあ。一緒に来るか」

樁は万遍の笑みを浮かべて、

「はいっ」

と答えた。

低級鬼、自我が少ないため、個であると同時に全体でもある。いわば、戦闘にのみ特化した鬼だ

。

二人が角を曲がったとき、うっ・・・、樁が息を飲んだ。

死屍累々、見上げるほどの大きさだったはず、数え切れないほどの鬼が打ち据えられ、切り刻

まれ、倒れていた。地面が見えないほどの数だ。そして、中央に浮かぶのは、なよ。

幾本もの刃帯儀が、ゆらゆらと蠢いていた。

「なよちゃん、お疲れ様」

「なんじゃ、啓子。来るならもっと早く来い。さすれば、お前にも働かせたものを」

「さすがに、これは勘弁してください」

素直に啓子が頭を下げる。なよは、近づくと、椿を見た。

「お前は」

「は、はいっ。あの、津崎椿です。白さんとは、な、仲良くさせていたしまして」

「わしは白の叔母じゃ、なよという。追いつくわけにも行くまい、来い」

「ありがとうございます」

椿はなよの威厳に怯えたが、決して悪い人ではないと感じた。

家に戻ると、白が驚いて椿を見つめた。

「ごめん、来ちゃった」

ばつが悪そうに椿が言いよどむ。

「あ、あの。ようこそ」

自分の友人が家に来るのは始めてである。白はどきまきしていた。緊張を解くようにあさぎが声をかける、

「ケーキと紅茶、用意したよ」

白はほっとすると、椿に微笑んだ。

啓子が辺りを見回して言った。

「ところで、幸ちゃん達は」

なよは視線を少し上げると、三人のいるだろう方向を見つめる。

「なにやら、中華料理店で持ち帰りを注文しておく。半時間ほどで戻るであろう、暢気な奴らじゃ」

なよはあきれたように言うと、ふと気が付いたように袖を匂う。

「血がつかんようにと思うておったが、匂いがあるな。風呂に入る、三毛、湯船に水を入れてくれ。わしは火を起こそう」

「うん、手伝うよ。小夜野ちゃん、手伝って」

「はい」

三毛と小夜野が風呂の用意をと部屋を出る。なよは元気になった小夜野を見て、そっと笑みを浮かべた。

「幸母さん」

「ん」

幸とあかねと黒、迎賓館近くの中華茶房にて、お持ち帰りの料理が出来上がるのを待っていた。かなりの名店である、幸が一度、こういう店の料理を食べてみようと言い出したのだ。

三人、テーブルについて、料理を待つ。

「ここ、お持ち帰りなんて出来ないお店じゃないかなあ」

「受付の人、奥で訊いてくるって、一度、厨房に入りましたものね」

あかねが気楽そうに言った。

「結果として用意するって言うんだからいいんじゃないかな」

黒が不安げに回りを見渡す。客は幸達だけだ。

放送のため、開店休業状態だったのだ。

「仕入れたお肉や野菜を無駄にするのももったいないだろうし、ちょうど良い客じゃないのかな。それに、ほら、カンフー服、中華っぽくていいよな」

幸が笑った。

幸とあかねは黒のカンフー服である、黒だけがベージュの普段着を着ていた。

「あかねちゃんまで」

黒が溜息をつく。

「本当に動きやすいんですよ。街に放たれた鬼もまだ多いですからね、いつでも動けるようにしておかなきゃ。でも、見栄えは、黒さんのドレス姿での立ち回り姿、良かったですよ。特にドレスの裾が少しはだけで、それをぎゅっと押さえた、恥じらう顔。テレビカメラを潰すの、早すぎましたね」

あかねが笑った。

「あかねちゃんはおっさんだよ」

黒が顔を赤らめて言った。

ドアの開く音。一人の女性が店に入って来た。三十代初めくらいの美しい女だ。

遠慮なく、女は幸達のテーブル、空いた椅子に座った。

パンツルック、足の長さが強調されていた。

「あれからどうなった」

幸がにっと笑った。

「鬼は一カ所に集め拘束した。近く、鬼の世界へ強制送還する。放たれた鬼共は、本家が中心になって捕捉、これも強制送還だ」

「殺さないのか、本家はやさしいな。で、道はどうする」

「閉ざす技術がない。当分は見張りを立てる」

「人と鬼の世界とを繋げる道が出来上がったことが、鬼の大量移入を可能にした。これは人の創り出したものだよ」

幸は答えると、コップの水を少し口に含む。

「いろんな考えの奴がいるってことだ」

幸はそう呟くと、口を閉ざした。

「幸。お前、高園童子をどうした」

女が少し詰問口調になる。

「そういえば、幸母さん、倒した鬼の耳元で何か言っていたよね」

「何をしているのかなって、あかねも気になりましたけど」

幸が、子供の姿には不似合いすぎる不気味な笑みを浮かべる。

「悪口を言った」

「悪口くらいで、あんなふうになるか。石のように固まってしまって、植物人間、いや、植物鬼だ」

あかねが深く溜息をついた。幸に狂いそうになる幻覚を見せられたことを思い出したのだ。黒がおずおずという。

「あのね、幸母さん。今更、聞きづらいんだけど・・・」

「なんだ、黒」

「この人、誰だっけ」

横目で申し訳なさそうに、女を見る。

「全ては固有の振動数を持つ、だからね、白澤のばあさんは、姿が変わっても母さんが幸だと認識した。・・・ってことだよ」

くすぐったそうに、幸が笑った。

「こらっ」

すこんと女が黒の頭を叩いた。

「わかってなかったのか、情けない」

「ごめんなさい」

あかねも実はわかっていなかったのだが、ここでそれをいうのは避けようと大人の判断をする。努めて平静を装った。

「黒。白澤九尾猫の本当の姿は、この姿に尻尾を九本生やした姿だ。能力全開すると、こういう姿になる。母さんもこの姿を見るのは以前、戦ったとき以来だよ」

「幸」

白澤が幸を睨む。

「もう一度、戦うか。まだ、勝負はついていなかったからな」

「お父さんに叱られるからやめておく」

幸があっさりと答えたとき、店員達が料理を入れた持ち帰り袋を抱えてやってきた。

三人、料理の袋を抱えて、立ち上がった。

「幸」

白澤が声をかける。

「支払いは本家がしてやる」

「それは口止め料と考えていいのか」

「そういうことだ」

「ありがとう、実は請求書を見てびびったんだ。黒、あかねちゃん、今回の鬼退治、活躍したのは本家だ。鬼に殺されそうになった幸は、本家に助けていただいた。いいね、そういうことで」二人が頷く。

「白澤さん、助けてくれてありがとう」

幸はそういうと、二人をうながし店を出る。

白澤がぱんと手を叩く。慌てて、受け付けがとんで来た。

「酒のメニューを持ってこい」

怒気を孕んだ白澤の声に怯え、慌ててメニューを用意し手渡した。

歯軋りの音が聞こえるようだ。しかし、白澤は大きく吐息を漏らすと、二度三度と大きく息を

する。

「なめやがって。酒でも飲んで帰るさ。今日は貸切だ」

幸は両手に中華持ち帰りの袋を持ったまま、立ち止まった。

「こっちだ」

幸が呟くと細い路地に入る。両側がビルの壁で、辺りに人目はない。

「黒、あかねちゃん。先に帰っていてくれ。母さん、ちょっとさ、用事を済ませて帰るよ」  
一つずつ、黒とあかねに袋を預けると、幸は片手で大きく円を描く、空間が切れ、あさぎの居る店の中が目の前にあった。

「うわ、どうしたの。幸」

幸があさぎに、ちょっといたずらげに笑みを浮かべた。

「あさぎ姉さん、いっぱい荷物なんだ。歩くの面倒だから、空間が繋いじゃった」

「母さん、早く帰ってこなきゃだめだよ」

振り返りながら、黒が心配そうに言った。

「大丈夫。すぐに帰るよ」

「幸姉さん、手伝うことはありますか」

「たいしたことじゃないよ。ただ、家から出ないように。それは絶対だよ」

幸は二人を円の中に送り、空間を閉ざした。

吐息を漏らす。

幸乃が幸の頭を優しく撫でていた。

「ね、幸乃さん」

「ん」

「お父さん、探しに行くの、だめかな」

幸乃は幸の前でしゃがむとそっと笑いかけた。

「それはお父様が望まないことです」

「でも、でも。お父さん、きっと寂しいよ。お腹も減っているよ、寒くて凍えているよ」

幸乃は幸をぎゅっと抱き締める。

「幸の言う通りかもしれない。でも、辛さに耐え我慢しなさい」

幸が小さく呟く。

「ありがとう、幸乃さん」

「どう致しまして」

幸乃はいとおしそうに幸を見つめると、幸の中へと戻って行った。幸が顔を上げ、唇をかむ。

幸は家の前の道路に広がる鬼の切り刻まれた死体が埋め尽くすのを静かに眺めた。

「国もそれどころではないということだろう。国会議事堂の前にでも積んでおいてやるかな」

幸の呟きに呼応するように、埋め尽くされていた鬼の死体が消えて行く。跡形もなく消え去った後、一人の老婆がまっすぐに背を伸ばし、幸を睨んでいた。

片手に薙刀、巫女の姿だ。

幸は柔らかな笑みを浮かべると、歩きだし、老婆の手前、薙刀ぎりぎりの間合いに立つ。

「こんにちは。私はこの家の者ですけど、なにか、御用でしょうか」

「孫を返してもらいに来た」

老婆が汚れたモノを見るような目で幸を睨む。幸は気にするでもなく、家の方角を眺める。

「白の友達が来ているのか。確か椿ちゃんとか言ったな」

幸は老婆に向き直ると興味深そうに笑う。

「津崎椿ちゃんの御祖母様ですか」

老婆が薙刀を右下段に構えた。

「津神流薙刀術、津崎かなめ。猫又に孫をくれてやるわけにはいかん」

幸は興味深そうに笑みを浮かべると、無造作に半歩進んだ。

「対人だけでなく、鬼や魔物とも闘う薙刀術と聞いたことがあります。椿ちゃんはずちの白と随分気が合うようですけど、縁があるのかもしれないね」

一瞬、津崎かなめは大きく一步後退した。これ以上、幸に近づくのは危険と体が反応したのだ。

「確かに白は元は猫かも知れませんが、でも、人の姿に定着し、猫の姿には戻りません。これから普通の人として生きていきますし、私も母としてあの子を良い子に育てて行きます」

幸は笑みを浮かべると、受け入れようとするように、両手を広げる。

「椿ちゃんとは、一緒に御飯を食べた後、責任を持ってお送りします。ですから、構えを解いていただけませんか」

老婆は逆に構えに力を込めた、幸の気配に体が恐怖を覚えたからだ。今まで闘ってきた相手とはまったく異質の畏怖感。

「邪魔くせえな」

小さく、幸が呟いた。

「幸お姉ちゃん、待って。待ってください」

あかねと黒が慌てて飛び出してきた。

「だめだよ、母さん。落ち着いて」

黒が幸の右手を両手でしっかり握った。あかねも老婆との間を割って入る。

「なんだよ、黒。あかねちゃんも」

「白さんの初めての友達のおばあさんですよ。危害を加えてはいけません」

あかねが両手を広げて幸を制した。

「わかっているよ。ただ、・・・とかしたら、楽でいいかなあってさ」

「口ではっきり言えないようなこと、だめだよ」

黒がぎゅっと幸の手を握り締めた。

「黒さんとドアの隙間から覗いていて正解でした。幸お姉ちゃん、あかねの御祖父さんと呼んで



ください」

あかねの言葉に、幸が左手を横に伸ばす。肘から先が消え、何かを掴もうとする造作。手を戻すと白い着物の一端が見え、白袴を身に纏った鬼紙老が現れた。

「なんじゃお前は。あのじゃじゃ馬女の仲間か」

あかねが驚いて鬼紙老を見つめた。

「おじいさま、そのお姿は」

鬼紙老は、あかねの顔を見て、一瞬、顔がほころびかけたが、居住まいを正し言った。

「鬼紙家は鬼を制し、人の世を護ることこそが、その存在意義。わしの時代に国が鬼に乗っ取られたなど、御先祖に申し訳ない。あとは、あかね、頼んだぞ」

「だめです、おじいさま」

あかねは鬼紙老にしがみつくと、その胸に顔を埋めた。

「あかねはおじいさまがいらっしゃらないと嫌です。離れて暮らしていても、あかねは大好きなおじいさまのことを忘れたこと、ありません」

あかねが涙に濡れた顔を上げ、じっと鬼紙老の眼を見つめる。

「あかね、なんと良い孫じゃ。わしは幸せ者じゃ」

ほろほろと感極まり鬼紙老が涙を流した。

「おや。お前は津神流ではないか」

「まさか、この場所に御老がいらっしゃいますとは」

老婆が態度を一変し、深くお辞儀をした。

幸が頃合いを見計らってあかねに声をかけた。

「お二人をお店に連れて行って、あさぎ姉さんにお茶と何か甘いものを出してもらってください」

「ありがとうございます」

一瞬、あかねは振り返ると、いたずらげに舌を少し出す。

一秒にも満たない瞬間、すぐにあかねはかいがいしく鬼紙老に肩を貸し、お店へと歩いていた。

ドアに三人の姿が消えると、深く幸が溜息をついた。

「幸母さん、お疲れさま」

黒がくすぐったそうに笑う。

「あかねちゃん、凄いな」

溜息一つつき、幸が道路に座り込む。隣りに、黒が足を投げ出して座った。

「幸母さんには幸母さんの良いところがあるから、落ち込まないでください」

黒がなんだか楽しそうに笑う。

「別に落ち込んだじゃないよ。いや、こういう気分を落ち込むっていうのかな。なあ、黒」

「ん」

「世の中には長い歴史をこらえてきたいくつもの仕組みというものがある。うまく、その仕組みを利用出来る人間は要領よくこなして行くことが出来る、母さん、そういうの、苦手っていうか、拒絶しているからな、あかねちゃんにそういうこなし方、教わってくれ」

「わかってないなあ、幸母さんは」

黒が幸の頭をそっと撫でる。

「とっても撫でやすい高さになっちゃったね」

黒が笑った。

「黒はね、幸母さんみたいになりたいと思っている。だから、幸母さんの出来ることは黒も出来るようになりたいなあって思う」

幸が顔を上げ、黒の眼を見た。

「そしてね、黒は、幸母さんの出来ないことは、黒も出来なくていいかなあって思っているんだ」

「なんか、認めてくれているようで嬉しいけどさ、そんなこと、言っていると三毛に抜かされてしまうぞ」

「うん」

黒はふと真面目な顔になって幸を見つめた。

「それ、考えた。ただ、黒はね、白や三毛を護りたくて強くなりたいたいと思う、三毛に負けるのが嫌で強くなりたいたいんじゃないんだ」

幸がふっと笑みを浮かべた。

「お父さんが三人の内、黒にだけ、術を教えたのは、黒のそういうところを認めたからかもしれないな。野心があり過ぎると、身につけた術でその身を滅ぼしてしまう」

幸は立ち上がると両手でお尻をはたき、砂を払った。

「なあ、黒」

「はい」

改まって黒は返事をする、幸の横に立つ。幸が少し見上げた。

「破壊者にも勇者にもなる必要はない。この市井の一隅で、地味に、そして、ちょっと楽しく、みんなで助け合って生活して行ければさ、最高だと思わないか」

黒が笑みを浮かべて、言葉を繋いだ。

「あさぎ姉さんの喫茶店、これはなよ姉さんと小夜乃ちゃんが手伝う。幸母さんとあかねちゃんの畑。白がお医者さんになって隣りで開業して、三毛は看護師さん。黒は母さんの畑を手伝うよ」

「そうさ、お父さんは母さんと一緒に畑仕事してな。啓子さん達もちょくちょく遊びにきて、一緒に御飯食ったり。な、楽しいだろうな」

黒が心の底から幸せそうに笑みを浮かべた。

「殴ったり蹴ったり斬ったりするより、ずっと楽しいだろう」

「うん」

黒は満面の笑みを浮かべ、幸を両腕で抱き上げた。

らら、らと歌いながら黒が舞う。

「こら、母さんを抱っこして良いのはお父さんだけだぞ」

「だって、幸母さん、小さくなって可愛いんだよ、喋らなければだけどね」

「それは余計だ」

幸が楽しそうに笑う。

「幸母さん」

「ん」

「黒って名前、とっても気に入っているんだ、娘にしてくれてありがとう」

「急にそんなこと言うなよ。なんか照れる」

「照れてください。これも親孝行だよ」

「黒は以外と甘え坊だな」

「長女は、ほんとはとっても甘えるのが好きなんだよ。お姉さんだから我慢してるけどさ」

がきっ、黒い気配が空気を固形化する。黒がステップを踏んだままの状態に固まってしまった。まだ、明るかったはずの風景が闇になる。なにかとてつもなく重い気配がすべての重量を階級的に重く沈めてしまったようだ。

「幸母さん、これは」

「八割はったり、二割実力。本人は十割実力と考えている勘違い野郎の御登場だ」

幸は黒の腕の中で気楽に笑みを浮かべた。人の可聴域より低い音が響く。音、いや、言葉だ。

黒はその聴覚で、オンナと呼びかけるその音を認識した。

「幸母さん、呼んでる」

「ようだな。さて、選択肢は二つ。戦って勝つか、速効、家に戻って中華を食うか。フカヒレ、二万円、料理した奴、何考えてるんだ、もう拝ませていただきますって値段だな」

「幸母さん」

「ん」

「中華選んでも良いかなあ」

心細げに黒が囁いた。

「奇遇だな、母さんも中華を選びたいんだ。黒」

「はい」

「走れ」

幸が呟いた。

瞬間、家の扉が弾けたように開く。

一足飛びに黒が幸を抱きかかえたまま、飛び込んだ。背中で扉が唸りをあげて閉じる。

「お帰り、幸、黒」

なよがまったくの緊張感無しに声を掛ける。

「もうすぐ、あさぎの味見と分析が済むからな」

「え、分析」

黒が鸚鵡返しに尋ねる。

「あさぎが中華の料理を覚えてみろ。喫茶店で本格中華じゃ。それに晩飯も豪勢になるぞ」

ふぁあっと黒の顔がほころんだ。

「生きてるって幸せだ」

黒の笑顔に、なよが愉快地笑った。

「黒は面白いな」

幸が黒の腕の中で笑った。

「あ、黒様」

声に気づいた椿がやってき、玄関にいる三人を見つけた。

ふいっと黒は表情を沈め、大人びた顔を椿に向けた。

「やあ、椿ちゃん、来てたんだ」

「はい。あ、あの、テレビで。横顔がちょっとだけだったけど、絶対に黒様だって」

黒が静かに笑みを浮かべると、そっと、自分の唇に人差し指を当てる。

「それはね。秘密だよ」

目を輝かせ、椿がこくこくと頷いた。

異形 漣 一話

「しょうがないな、出るか」

深夜、幸は呟くと椅子から立ち上がった。

夕食の後、鬼紙家から遣わされた車に鬼紙老と津崎かなめを載せ、あかねはどうしようかと少し迷ったようだが、万が一のため、一緒に乗り込み送っていくことにした。

三人が帰った後、片づけを手伝い、幸は男の部屋で時間を過ごす。

襖を開ける、廊下を渡り、幸が寝間を覗き込む。啓子が大いびきをかいて眠っていた。

「あやつは蓄膿症の気味があるようじゃのう。小夜野も早めに寝てよかった、奴よりも後に寝ようとするば、到底、眠れそうにないわ」

背後から、なよが気楽に笑った。

「なよ姉さんは寝そびれたわけだ」

振り返ると幸は少し幸せそうに笑った。

「あさぎ姉さんも遅くまで起きていたようだけど」

「あさぎは帳面に中華の分析を書いておったからの。しかし、驚いた、味と見た目から、材料に調味料、料理の仕方、加熱時間まで推理しおった」

「凄い特技だ。あさぎ姉さん、頑張ったんだろうな」

「出来た妹のおかげで、美味しいのが食える、ありがたいのお」

なよが笑うのを、幸は嬉しそうに笑みを浮かべ、よしっと気合を入れた。

「行くのか」

「このままだとゆっくり眠れないから、仕事、済ませてくる」

「わしも行こうか」

「本家絡みの気がするから、幸だけで良いよ。そうだ、凍えているだろうから、お風呂、沸かしなおしてください」

「わかった」

なよは頷くと風呂場に向かった。

家の扉を開け、後ろ手に閉める。

闇の中、玲瓏、突き刺す白月がアスファルトを穿つ。道路を挟んで見えるは漆黒の闇。光すら飲み込み、その正体が知れない。

「用件を聞こう」

幸が闇に向かって呟く。

重低音の振動が微かにずれる、そんな唸りのような音が響いた。音、いや、意味のある音、声だ。

娘に術を授けてもらいたい

闇が少し薄れる。巨大な足、足首から膝までの高さで幸のゆうに二倍はある。その足にしがみつき、身をひそめる少女。

微かに顔をしかめ、幸が呟いた。

「何者だ」

人は我らを鍾馗と呼ぶ

幸は頷くと、しっかりと声を掛けた。

「わかった、教えてやる。一ヵ月後の今夜、この時間に来い。だが、身につけることができるかどうかはその娘次第だ。いいな」

ありがたい、感謝する

幸はその言葉に返事はせず、ぎゅっと少女を睨んだ。

「来い」

少女は意を決したように、一歩前に出ると、空を、自分の父親のだろう、顔を見つめ、しかし、すぐに向き直ると幸の元へとやってきた。幸の持つ気配にだろう、震えている。

幸は氷のように冷え切った少女の手をぎゅっと握ると空に向かって言った。

「鍾馗の長よ。必ず、生きてお前の娘を迎えに来い。これは餞別だ」

幸の握った手が月と同じ白に輝く。それは光の球になり、少女の体を抜け、闇へと駆ける。そして、その闇の中に吸い込まれた。

「仙術系なら、月の光も役に立つさ。去ね」

やがて闇が薄まり、道路、向かいの家が浮かび上がる。

「行ったか」

幸が少女の手を握り、家に戻ると、白が嬉しそうに待ち構えていた。

「幸母さん、これは白のお役目ですよ」

新しい下着と、白の服だろう、そうだ、少女の背は白と同じだ。

「お風呂はなよ姉さんが沸かしなおしていただきました」

幸は白に幾つかの指示を伝えようとしたが考え直した。

「白、この子は1ヶ月の間、うちで修行をする。これから風呂に入れるつもりだけれど、たださ、随分やつれている、栄養状態が悪い。どうすれば良いかな」

白は頷くとしばらく考えていたが、目を輝かして答えた。

「肌の状態や唇の乾き具合から判断して、水分補給。ジュースを作ります」

「そうだな。なら、白。彼女を台所へ連れて行ってくれ。椅子に座らせて栄養のあるジュースを作ってくれるかな」

「はい」

白は頷くと少女の手を握り、台所へと連れて行った。

幸が廊下を一步步いたとき、ふっと、なよが幸の隣りに現れた。

「なよ姉さんの天敵だ」

幸がくすぐったそうに笑った。なよが少し困り顔に笑う。

「刺激があるのも面白い。練習相手になってやるとしよう」

ふいっとなよの姿が消えた。啓子のいびきが収まる周期になったようだ。なよが小夜野の隣りに寝るのを感じた。

幸が台所に入ると、少女はテーブルに着き、白が山羊の牛乳に火をかけていた。

「人肌まで暖めて、バナナジュースを作ります」

「美味しそうだな」

幸は答えると、少女の隣りに座った。

「私は幸。この娘の母親だ。みんな寝ているからさ、紹介は明日の朝にするよ。で、お前の名前は」

少女は幸の問いかけに困ったように俯いた。

幸はたいして気にするふうもなく、軽く吐息をもらすと、白に声をかけた。

「白。この娘に呼び名をつけてくれ」

「名前ですか」

「いや、呼び名だ。呼ぶのに不便だからさ」

白は少し考えていたが、ふっと笑みを浮かべた。

「漣（れん）、さんずい偏のさざなみという漢字です」

「いいな、それ」

幸は頷くと、俯いたままの少女に言った。

「お前のことを漣と呼ぶ。漣という声が聞こえたら、自分のことだと認識してくれ、いいな」

少女は驚いたように幸を見つめていたが、やがて、そっと頷いた。

「できましたよ」

白はマグカップ三個に温かなミルクを注ぎ、テーブルに置いた。

「一緒に飲みましょう」

白は漣の真向かいに座り、ジュースを少し飲む、そして、漣に笑みを浮かべた。ほっとしたように微かな、ほんの小さな笑みを漣は浮かべると、一口、ジュースを飲む。

三日間、一切の食事も水分も摂っていなかった、だからだろう、人肌に温められたジュースが喉を通していくのがわかる。なんだか、緊張が解けて寝てしまいそうだ。

「寝るのは風呂に入って体を洗ってからにしてくれ」

幸が穏やかに言うと、くすぐったそうに笑った。

「白、漣と一緒に風呂に入ってくれるかな。汗や土埃に、涙、流してやらないとな」

「わかりました」

「漣の服は洗っておく。ん、こういう服もいいな、一つ、作るかな」

闇にまぎれる濃い茶色の服、緩めのチャイナドレス、下は幸のカンフーズボンに似ている。改めて、漣を見る、肩より二センチ上で切りそろえた後ろ髪、澄んだ瞳に鼻筋が通っている。

「元々が中国だからかな」

白はふと幸に尋ねた。

「漣さんは中国の人」

「ん、微妙だな。広い意味では人だ。ただ、話が長くなる、それを話し出すと。とにかく、風呂に入って、一晩、ぐっすり寝て、それからの話だよ」

幸は微かに哀しげな笑みを浮かべると、残りのジュースを飲み干した。

白が漣を風呂に入れている間、幸が風呂の洗い場で漣の服を手洗いする。洗濯機もあるのだが、長く使っていない。たらいに洗濯板を斜めに入れ、それで洗う。たらいの下にかさ上げのための台があるので、腰に負担がかかりにくくなっている。

白は右肩で漣を支えるようにして、風呂につかっていた。

「幸母さん、手伝いましょうか」

「いいよ、もうすぐ終わる」

「おおい、幸ちゃん」

脱衣場の向こうで啓子の声がした。

「お風呂場だよ、啓子さん」

幸の返事に啓子が服を着たまま、風呂場の扉を少し開け、中を覗き込む。

「どうしたの」

「なよちゃんにたたき起こされたよお。幸ちゃんになんとかして貰ってこいって」

幸が愉快に笑った。

「啓子さん、いいから、こっちにおいで」

少し涙目になった啓子はそのまま、幸の元にやってくると、しゃがむ、幸は左手をタオルで拭くと、啓子の鼻から額に向かって手を動かす、ずっと、指先が啓子の鼻と額の間に入れ込んだ。

「これだな」

ふっと幸は指先を動かし、手を啓子の額から抜いた。

「以前に顔面に強打を受けた後遺症だ、膿が溜まりやすくなっているんだよ」

「なんだか、息がしやすい。すっきりした」

幸は笑うと、ふと思いつき言った。

「啓子さん。悪いけど、寝る前に、お父さんの部屋に布団を三組敷いてくれないかな」

「いいよ。幸ちゃんの頼みは断れないからさ」

啓子も新しい住人に気づいたが、それには触れず、風呂場を出て、男の部屋に向かった。

「面白い人だ、啓さんは」

「あの、幸母さん」

白が思いつめたように言った。

「どうした、漣は、うん、大丈夫みたいだな。そろそろあがるかな」



「あのね」

「ん」

「白も幸母さんみたいに出来るようになるのかな、練習すれば」

「ああ、啓子さんの顔に手を入れたりってこと」

「う、うん」

「モノの虚実が理解できればそれほど難しくはない。ただ、絶対的な自信がないと大変なことになるから、誰にも教えていない。白、身につけたいのか」

「はい」

「それなら、漣の修行が終わったら特訓してあげるよ」

「がんばります」

「ああ、かなりがんばってくれ」

幸が楽しそうに笑った。

漣は夢を見ていた。目の前の見慣れたはずの屋敷が紅蓮に燃えている、自分の体まで燃えてしまいそうだ。沢山の黒い消し炭が横たわっている、あの一つに母さんがいるのだ、私を逃がしてくれた母さんなのだ。

うわああ・・・、どうしてこんなことに。

やだ、嫌だ、どうして。

「よう、目を覚ましたか」

なよが、目を覚ました漣を見て、にたあっと凄みのある笑みを浮かべた。

「う、うわっ」

漣が唇を震わせ、後ろ手に布団を握り締めた。

「かぐやのなよたけの姫」

食いしばる歯の隙間から漣が呻き声を出した。

「ほお、わしを知っておるか。ほれほれ、固まっておっては逃げられんぞ」  
嬉しくてたまらないとなよが笑った。

漣がよろよろと後ずさりをする、息が荒い。ぼろぼろと涙がこぼれる。

「なんじゃ。そんなことでは戻っても鬼の餌になるだけじゃのう」  
じわりと、なよが漣に向かって手を伸ばす。

「なにやっているんですか、なよ母様」

二人の間に割って入った小夜乃がぎゅっとなよを睨んだ。

白い割烹着を身に纏い、仁王立ちする小夜乃には威厳すらあった。

「いや。まあな、怯えるのが面白ろうてな」

「なよ母様は遊びでも、漣さんにとっては心の傷になるんです」

「すまんすまん、怒るな。謝る」

小夜野の怒る姿すら楽しいと、なよが素直に頭を下げた。

「本当にもう、なよ母様は子供なのですから」

小夜野は大袈裟に溜息をつく、漣に向き直り、腰をおろして正座した。

「幸姉さまから修行に来られたと伺っております。母 かがやのなよたけの姫が失礼致しました。私は娘の小夜野と申します」

「なよたけ姫の娘・・・」

漣が腰を抜かしたまま、呟いた。

「種族はそれぞれ違うけれど、それでも家族なんだ」

幸が漣の着替えを抱え、ふわりと小夜野の横に座ると、気楽に笑った。

「おはよう、漣。顔を洗って着替えてこい。朝ご飯を食ったら、修行だ」

あたふたと漣が着替えを済まし、広間に戻ると、幸たちが組み立て式の食卓を整え、料理を運んでいた。

「漣。向こうの扉を開けたら、椅子がある、運んでくれ。啓子さん、お願いします」

「ほーい」

啓子は抱えていたおひつを食卓の上に置くと、漣に笑いかけた。

「漣ちゃん、おいで」

啓子の声にあたふた頷き、漣が啓子に走り寄った。啓子の後ろを歩く、背の高い綺麗な人だ。

扉を開け、啓子が折りたたみ椅子を出す、漣がそれを浮けとる。

ふっと漣が啓子を見つめた。

「どうしたの。なんか顔に付いているのかな」

「あ、あの。いいえ・・・」

にかっと啓子が笑った。

「ここの連中は個性が強すぎて当てられるかもしれないけど、すぐに慣れるよ。いい人ばかりだからさ」

「あ、ありがとうございます」

背伸びをするように漣が答えた。

漣は昨日までの逃避行が本当にあったことなのか、頭の中で混乱していた。鍾馗の一軍が鬼との戦いに破れ、散り散りに逃れた。異様なほどの鬼の強さに男達は怯えていた。

本来、鍾馗は鬼を制する立場にあるはずなのに、一族一の偉丈夫な父でさえ苦戦し、私をここに預けたのだ、私は役立たずで邪魔になるだけだ。

「漣。しっかりしろよ」

幸が声を掛けた。テーブルにつき、朝ご飯の前で連は惚けたように俯いていた。

「はいっ」

漣が顔を上げると、幸が正面でにっと笑っていた。

「しっかり食っておけよ。藤四郎が一ヶ月で名人になるって言うんだ、修行は厳しいぞ」

「はいっ、頑張ります」

漣が思いっきりご飯を書き込んだ。咽ていないはずなのにぼろぼろと涙が流れる。

幸は呆れたように笑うと、連に話し掛けた。

「親父や一族の心配はするな。幸が漣を預かったのを本家が確認した、本家は勝つ側につくからな、いま、本家当主が鍾馗に接触している。幸の娘達も情報収集に走っている、勢力図が変わって、鬼との戦いは膠着するだろうし、一ヶ月くらいは時間稼ぎできるさ。漣はその間に強くなればいいし、強くしてやるよ」

「幸さん、話がよく見えないんだけど」

ふっと、啓子が口をはさむ。ドンブリ鉢に山盛りのご飯、片手に。

「太るよ、啓子さん。啓子さんも漣ちゃんの練習に付き合ってみる、しっかり痩せるよ」

幸は少し笑うと、微かに俯いた。

「まっ、漣のことは、本人から聞いてくれ。ただ、幸がすることは、連を一ヶ月であかねちゃんや黒並みの強さに育てる」

おおっと啓子が唸った。

「つまりは、鬼の大群を一人で粉碎できるようにするってことか・・・」

「黒はどうかな。技術はあるけど優しいからな」

ふと、幸は呟いたが、顔を上げると、皿にある卵焼きを食べる。

「あさぎ姉さん、卵焼き美味しいよ。ちょっと中華風かな」

あさぎは照れたように笑うと頷いた。

「お父さんが帰ってくるまでに中華をしっかり覚えようと思ってね」

うふふっ、と幸がくすぐったそうに笑った。

「お父さん、喜ぶよ、きっと」

「そうじゃな。あさぎの料理はうまいからのう。ああ、今度はラーメンが食いたいのお、あの時のラーメンは絶品じゃった」

啓子が食べるのをやめ、なよを見た。

「なよちゃん、それって、商店街の中華屋さんのこと」

「ああ、あの時は世話になったな。しかし、こんな生意気な口をきくのなら、啓子の耳たぶの一つも食っておけばよかったな。まさか、ちゃんづけで呼ばれるとは思わなんだわ」

「なよちゃんてさ。知らずに見れば可愛い女の子だよ」

「まじめな顔をして、そのようなことを申すではないわ」

なよが少し顔を赤らめる。

幸が笑った。

「そういうところが可愛いんだよ、なよ姉さん」

「お前達とおると調子が狂うてかなわん。さて、佳奈ところへアルバイトへ行って来る、昨日の今日で客が来るかどうかわからんがな」

「それなら」

あさが声を掛けた。

「なよ姉さん、買い物いいかな」

「いいぞ、何を買ってくる」

「蛸とたこ焼き器なんだけど、幸もいいかな」

あさが幸を見る。料理に関しては、全てあさに任せてある。

「いいと思うよ、幸もたこ焼き好きだし」

にと幸が笑った。

「ひょっとして、あさぎ姉さん、黒に頼まれたの」

「買い物に付き合ってくれて、帰り道、屋台のタコ焼き屋さん、なんだか幸せそうに眺めているから、買ってかえろうかって言ったら、いらない、いらないって慌てたようにね、言うから」ふと啓子が思いついたように答えた。

「黒は気を使っているんじゃないかな。学校に通っていると、細々と必要なものもあるし、負担かけているってさ」

「お父さんも仕事辞めたものね」

幸は呟くと天井をぼおっと眺める。

「テレビもエアコンもない家だけど、それは必要がないからで、それなりに、お金の面でも裕福なつもりなんだけどなあ」

「ねえ、幸」

あさが何か思いついたように顔を上げた。

「幸と二人で、毎晩の家計簿。黒にも手伝ってもらおうか」

なよが面白そうに笑った。

「なるほど。知らないことが不安なら知れば良いだけのこと、幸、そうしたらどうじゃ」

幸も頷くとほっとした顔をした。

「黒には今晚、話をするよ」

幸はれんが食べ終わったのを見届け、立ち上がった。

「思い出したけど、お父さんと屋台でたこ焼きを焼きながら旅をしていたんだ、その時の道具が車屋さんの倉庫にまだ残っているかもしれない」

異形 漣 竹林にて

両腕を組み、鼻歌など口ずさみながら竹林の小径を歩く。

黒と三毛を従え、なよはにかつと嬉しそうに笑みを浮かべた。

「あさぎが作ってくれた弁当に日本酒、言うことないのう」

三毛が辺りをうかがいながら、なよに言った。

「なよ姉さんはお気楽すぎます」

「三毛の生真面目にも困ったもんじゃない。青い空、小春日和の風、沢山の敵、言うことないではないか」

「でも、なよ姉さん」

黒が気配を探ろうと半眼のまま、囁いた。

「かなり強いよ。数え切れないくらいだ」

「惑わされるな、黒」

なよは一升瓶を掲げ、空の青を映す。

「久しぶりの大吟醸じゃ。かあぁっ、腹の中が熱くなるのお」

なよは笑うと、黒に言った。

「人鬼が十一人、それに、この竹林には陰（おん）が漂うておる。陰は人鬼を活性化させるが、それ自体に力はない」

「何千もの鬼がいるように思えるよ」

「この国の呪師のほとんどが理解しておらん。鬼と陰は全くの別物、それが解っておらんから無用に鬼を恐れおる」

「なよ姉さん。でも、この辺りは鬼の気配で充滿している」

「陰は人の恨みや悲しみ、怒りなどの負の念が堆積して、つくも神のように、かりそめの実態を持ちはじめたモノ。その気配は鬼と良く似ておるが、鬼の存在に引き寄せられ集まってきただけのものじゃ。ま、問題があるとすれば、陰の中では、鬼は実力以上の能力を発揮するというところくらいじゃな。なんというたかのおう、そうじゃ、ドーピングという奴じゃな」

黒の問いになよは答えると、ふいと前方を望んだ。車の少し古びた整備工場と隣りに二階建の安普請のアパート。

「あれか。幸の親友がいるのは。ユッキーとか言うたかな」

思い出したのか、三毛が少し笑みを浮かべる。

「ちょっと怒りっぽいけど良い人だよ」

いたずらげになよが笑みを浮かべた。

「それはカルシウムが足りないせいじゃな。三毛、黒。呼ぶまでここで待っておれ。油断はす

るな。奴らはわしらの一挙手一とうそくを注視しておるぞ」

黒が慌てて言った。

「ユッキーをいじめたらだめだよ」

「わかっておるわ。わし流の挨拶をするだけよ」

なよは声を出して笑うと一人歩きだした。

「よう、童（わっぱ）。そんな俯いておったら、鬼に食われるぞ」

事務所入り口にある硝子戸の手前で、なよが声をかける、そして、にたりと凄みのある笑みを浮かべた。

「く、来るな」

事務所の壁に背を預け、くたびれ果てたように座り込んでいたユッキーが顔を上げる。赤く目を腫らした顔のまま、大声で叫んだ。

「来るなあ」

重い拳銃を両手で掴み、なよに銃口を向けた。

「困ったのう、わしは少々天邪鬼でな、来るなといわれると行きとうなる。ちと、お邪魔するかな」

「来るな。来ないでくれよお」

どれほど、涙を流したのだろう、それでも、涸れることなくユッキーの両の眼から涙が流れ、唇が震える。

「仕方ないのう、なら、来いと叫べ。ならば、退散も考えよう」

啞然とした顔でユッキーがなよを見つめる。

そして、小さく呟いた。

「来い・・・」

「ん、何か言うたかな」

ユッキーが叫んだ。

「来い」

なよはにっと笑うと、硝子戸に手をかけた。

「では、お言葉に甘えてお邪魔するかな」

あっさりとなよが事務所に入った。

「な、なんだよ。帰るって言ったろう」

「ふむ。帰っても良かったんじゃが、ま、折角、来てくれというのを断るのも悪いかと思うての」

がくがくと銃口が上下に震える。

「ば、馬鹿にしやがって」

ユッキーが震える口元をそのままに、なよを睨みつけた。

なよが嬉しくてたまらないと声を上げて笑った。

「さあ、どうする。ひょっとしたら、わしはお前を助けに来たかもしれんし、もしかしたら、うまそうじゃ、食ってやろうと来たかもしれんぞ。さあ、どうする」

「撃ってやる、穴だらけにしてやる」

ユッキーが叫んだ。

その声に、なよは得意満面に笑みを浮かべた。

「感情を制し、撃つか、撃たぬか、理性で判断せい」

一歩、なよが足を進めた。ユッキーはなよを睨んだが、ふっと力を抜くと拳銃を落とし、俯いてしまった。

「まだ、空き缶しか撃ったことがないんだ」

すっと、なよは近づくと、力強くユッキーを抱き締め、囁いた。

「心配するな。わしは敵ではないぞ。ただ、意地悪なだけじゃ」

なよは笑うと、同じように壁を背に、ユッキーの隣りに座った。

「他には誰もおらんのか」

「アパートに住んでいた奴らはみんな鬼に食われてしまったし、マス爺さんは故郷に帰っているし、とっつあんは香港で足止め食らっているし」

「とっつあんというのは、お前の父親か」

「ああ」

「裏の世界の住人じゃな。この事務所にだけ結界が張ってある」

ふと、なよは天井、いぬとらの角を眺めた。

「なるほど、暗殺寺の作った結界じゃな。印がしてある」

なよは片手を伸ばすと、ユッキーの肩をしっかりと抱いた。

「鬼が押し寄せて来たら、中から撃っていたら結界も割れてしまう。びびって小便ちびるくらいがちょうど良いわ」

「ちびってなんかいねえ」

「ああ。なら、そういうことにしておこう」

なよはいたずらげに笑みを浮かべた。

はっと気づいたようにユッキーがなよの顔を見つめた。

「あんた、誰なんだ」

「わしか。わしは・・・、おお、そうじゃ。奴らを忘れておった」

なよは正面を向き声をかけた。

「黒、三毛、来い」

言葉が終わらないうちに、二人があたふたと駆けて来た、事務所に入り、ユッキーに笑みを浮かべる。

「ユッキー、久しぶり」

黒が挨拶をすると、隣りで三毛も笑みを浮かべた。

「お久しぶりです、ユッキーさん。昨夜は大変だったようですね」

「ってことは」

驚いて、ユッキーがなよを見つめた。

「わしは奴らの母親の姉、なよと云う。よろしくな。本来なら妹が来るのじゃが、ちと、患っておっての、わしが代わりにやって来たということじゃ」

「あいつ、病気なのか」

心配げになよに尋ねた。なよは重い吐息を一つ漏らすと呟いた。

「峠はとうに越して、元気じゃが、姿形が随分変わってしもうての。めったに外には出おらん」  
なよが沈痛な面持ちでユッキーを見つめる。。

黒が慌てて言った。

「どんな姿になっても、母さんは母さんだよ」

「黒姉ちゃん、その言い方は誤解を招きます、なよ姉さんも面白い方へと話を持って行こうとしているでしょう」

いひひとなよが笑った。

「これも、幸が元気であればこそじゃ」

なよは愉快地にユッキーを見つめた。

「よう、親友が病気で心配したか」

「心配なんかしていねえ」

ユッキーがそっぽを向くのを、面白そうに眺める。

「そうじゃ、ユッキー。父さんが預けた荷物があるじゃろう。いくらか、持ち帰りたいのじゃがな」

ユッキーはふいっと立ち上がると、引き出しから鍵を取り出した。

「工場の裏手に倉庫がある」

「そうか。三毛、鍵を受け取れ」

慌てて、三毛が鍵を両手で受け取った。

「黒、聞いたぞ。お前、あさぎと買い物に出た時、タコ焼きをいらぬと言ったらしいな」

「え。あれは、だって・・・」

黒が俯き、言いよどんだ。

「いらぬことを言いおって。わしがうまいタコ焼きを食いそこねたではないか」

「でも」

珍しく黒が不安げに言葉を返す。

「学校、通わせてもらって、いっぱい、お金を使ってきているし。だから」

なよは立ち上がると、黒をぎゅっと抱き締めた。

「わしも幸もあさぎも働いておる、心配するでないわ」

なよは笑うと事務椅子に座った。

「幸が父さんと旅をしておったのは聞いておろう。その時のタコ焼きの屋台がここにあるらしい。持って帰ってタコ焼き食い放題じゃ」



「いやっほお」

黒が歓声を上げて飛び上がった。

「行くぞ、三毛」

「はいっ」

黒と三毛が飛び出して行くのを、なよが楽しそうに眺める。

「面白い奴らじゃのう。初めて会うたとき、意地悪し過ぎたかのう」

なよは立ち上がると、ユッキーに声をかけた。

「さてと、ユッキー。わしが鬼と戦うのを見ておけ」

「何言ってるんだ。殺されてしまうぞ」

目を見開いてユッキーが叫んだ。

「奴らも戻ってこさせないと大変だ」

目の前になよがない。ユッキーが入り口を見ると、既になよが硝子戸の向こうに立っていた。

慌てて、ユッキーも飛び出す。

「なんて、無茶なんだ」

なよは平然とした顔で竹林の一角を眺めていた。

ユッキーがなよの横に立った時、ふっとなよの表情が視野に入った、なんて・・・

先程までの一升瓶を片手に好き勝手言っていた人間と同一人物なのか。

なんて、哀しげな眼をしているのだろう。

真っすぐに立ち、正面を見つめる、その横顔。

近所のスーパーに買い物に来た程度の質素な服装に、足元は素足につっかけ。それなのに、高貴な気高さを感じる。

「ユッキーはわしを撃たなかったな。それは、裏の人間としては失格じゃが、わしは妹の友人にそんな人間がいることをな、羨ましく思っている。そしてな、わしはそういう奴をちっとは守ってやろうと思う」

前方の風景が不自然に歪んだ。歪みの中から抜け出すように、鬼が一人、二人と現れだし、十一人の鬼が目の前に現れた。武装し迷彩の戦闘服を身に纏った鬼の一群。

「人を辞めて悔いはないか」

静かになよが問うた。

「悔いはない、それどころか歓喜に満ちているさ。鬼の姫よ」

「なるほど、わしのことは承知ででてきたわけか」

なよはつまらなそうに呟くと、その前で、平気でしゃがみ、小さな親指ほどの小石を拾い立ち上がった。

「わしを前にした時は無条件に逃亡せよとは教わらなかったか、ひよっこども」

「そんなことを言う鬼もいたな。俺達、戦闘のプロが鬼になったということを理解できなかったのだろう」

「これからどうするつもりじゃ」

「しばらくはここに身を潜める。機を見てこの国を転覆させてみせるさ」

なよは溜息を漏らすと、初めて、にたあっと笑った。

「がきじゃのう。身のほど知らずのがきにはお仕置きじゃな」

なよは眼の高さに小石を摘まんだまま手を上げると、その手を開いた。小石がふわっと浮かぶ。

「始める。おのれの生命を賭けて戦ってみるがいいぞ」

一瞬で十一人の鬼が扇型に陣を展開した。

中央の鬼の喉が微かに緊張する、号令を掛けようとする、その瞬間、鬼の額に小石が張付いた、その小石が鬼の額を窪ませ、入り込んで行く。

「うわああっ」

鬼が悲鳴を上げた、他の鬼達の意識がその悲鳴に引き寄せられた。

「素人以下じゃな」

なよが舞うように、鬼達の首を刎ねて行く。

ユッキーは、ぼおっと口を開けたまま、目の前の現実を受け入れ切れずにいた。なよが緩やかに舞うように腕を上げ、そして降ろす。そして、鬼達の頭が首の上から落ちて行く、肩の付け根から、脇へと赤い筋が吹き出し、その首が眼を見開き落ちて行く、あっけないほど簡単に落ちて行く。

真ん中の一人を除いて、屍と果ててしまった。

「わしはのう、お前らが憎くて憎くてしょうがないのじゃ」

なよが静かに呟くのと同時に、小石が鬼の額を貫き飛んで行った。どさっと音を立て、最後の鬼が倒れる。

「うわわああっ」

ユッキーが叫んだ。

「お前、なに殺してんだよ、お仕置きじゃなかったのかよ」

なよがにかっと笑った。

「ちと、力みすぎたかのう。ま、こういうこともあるわい」

「あいつら、元は人間だったんじゃないのか」

「そうじゃな、自衛隊の隊員じゃ。鬼神化特殊部隊とかいうらしい。この国のお偉方は人を鬼に変えて、他国に攻め込むための準備をしていたらしいな。計算は狂ったようじゃがの」

「なんてことだよ」

ユッキーが地面に座り込んでしまった。

なよも隣りに座ると、ほっと吐息を漏らした。

「ユッキーは面白い奴じゃな。人として、真っ当な見識の持ち主なのかもしれぬ」

「政見放送からこっち、なにがなんだかわからねえんだ」

ユッキーが呟く。

「じっくり考えろ」

面白そうになよが答えた。そして、ふと思いついたように声を掛ける。

「ユッキー。電話を貸せ、携帯電話じゃ」

仕方なさそうに、ユッキーが携帯電話を差し出す。

「ん、一回百円」

「ほい」

素直になよが百円玉をユッキーの手のひらに載せた。

思わず、えっ・・・と、ユッキーがなよの横顔を見つめた。

「あんた。不思議な奴だな」

「可愛い妹の親友じゃ。ユッキーもわしのことをなよと呼べ」

なよは気にするふうもなく、番号を押す。電話が繋がった。

「ホンケか。わしじゃ、白澤猫に代われ。なんじゃ、お前は頭が悪いのか、この国であやつを猫と呼べるものがどれほどおる、ましてや可愛い女の子の声とあれば決まっておろう。ならば伝える、鬼の回収に来いとな、あん、場所は電波の発信地を読み取れ、所番地までは知らん。十分で、いや、五分で来い、よいな」

なよは電話を終えると、ユッキーに携帯電話を返した。

「あんた。いや、なよさんは何処に電話を掛けたんだ」

「鬼の死体を回収させようと思うてな、国から依頼受けてをいる組織に電話したのじゃ。電話一本で便利じゃのう」

ユッキーはしばらくの間、うーんと俯いて考えていたが、おそろおそろとなよに尋ねた。

「大丈夫なのか、それって」

なよが嬉しそうににんまりと笑った。

「大丈夫なわけなからう」

「だよな・・・」

がくっとユッキーがうなだれる。

「国はのう、出来ればあの放送をなかったことにしたいと願っておる。他の国との通商に障害があるからのう。特にキリスト教圏の国に対して、人間の姿に角が生えているとあらば、それはもう絶対的な拒絶となるであろうな。じゃから、鬼の痕跡は跡形もなく消したい、昔話の中だけに留め置きたいと方針転換をしたというわけじゃ」

「俺達もその痕跡というやつなんだろう」

「もちろんじゃ。ユッキー、どうじゃ、わくわくせんか」

「あんたの頭の中がわからねえ」

「人生とは壁を乗り越え、成長して行くものよ。お、来たぞ」

なよが正面を向いた。

一陣の風が駆け抜けた。一瞬、眼をつぶり、ユッキーがおそろおそろ目を開けた時、大きなパネルトラックが一台、火炎放射器、いや、逆だ、液体窒素で鬼の死体を冷却し凍らせている一群、そして、なよの前には三十路近くに見える女、白澤がしかめ面でなよを睨んでいた。

「あの生意気な口の利き様、やはりお前か。かぐやのなよ竹の姫」

「今更、姫は照れるのう。しかし、なんじゃ、その口の利き方は。わしは国賓、つまりは他国の女王や大統領と同じ扱いぞ。謹め」

「その国は鬼に滅ぼされたと聞く、ならば、今はただの不法入国者だろう。何処に消えたかと思

っていたがこんなところにいたとはな」

「猫はきついこのう。もう少し言葉の選びようがあるうに」

なよが重く溜息をつく。ユッキーが肘でなよをつつく。顔を寄せ、囁いた。

「おい、これって大丈夫なんだろうな。雲行きがあやしいじゃねえか」

「わしは抹殺。ユッキーは脳に細工をされてここしばらくの記憶を削除といったところかのう。いやはや、まいった」

気楽に笑うなよにユッキーが呻いた。

「まいったじゃねえ、この野郎」

噛みつかんばかりになよを睨みつけたが、仕方ないと気持ちを入れ替えると、ユッキーは白澤を見つめた。

「お願いです、お姉さん。なよさまを助けてあげてください」

一転、清らかな風が囁くような声がユッキーの唇からこぼれた。

「お前は・・・」

思ってもいなかった言葉に、白澤は少し身を引き、驚いたようにユッキーを見つめた。

ユッキーが膝を揃え、両手のひらをそっと合わせる。

「私が鬼に襲われるのをなよさまが助けてくださったのです。もしも、なよさまがおられなければ私は鬼に食い尽くされていたことでしょう。お願いです、おねえさま、なよさまをどうぞお助けくださいませ」

瞳を潤ませ、白澤を見つめる。

「いや、お嬢さん。こいつは根っからの悪人なのだ。君を助けたのもただの気まぐれに違いない。奴のことなど、気にしなくていいのだよ」

微かに焦る。同性でも、この儚き清らかさに、思わず頬が火照ってしまう。ユッキーは、その焦る言葉にここぞと、白澤の手を両手で包み、力強く握った。

「私を救い出してくださったなよさまは決して悪いお方ではありません。どうぞ、どうぞ、おねえさま、私の言葉を受け入れてくださいませ」

ユッキーの両の目から、はらはらと涙がこぼれる、その瞳に見つめられ、白澤は動けなくなってしまった。

なよが重々しく、まるで自分自身に語りかけるよう呟いた。

「わかるであろう。わしらは裏の政治の世界で騙し騙され力を得て来たが、その間に、大事なものを随分と失って来てしもうた。その失ったものをこうも見せつけられてしまっはのう、辛くしょうがないわ。せめてな、善い人の振りでもせねば仕方あるまい」

白澤はぎゅっとユッキーの手を握り締めるとゆっくりと手を離し、背を向けた。

そして、大声で叫ぶ。

「回収はすんだか」

「すべて完了致しました」

「よし、撤収するぞ」

白澤は冷凍車の助手席に座ると、なよに言った。

「かぐやのなよ竹の姫。次はないと思えよ」

「ああ、承知した」

ユッキーはなよの隣りで、正座すると、目をつぶり、両の手のひらを重ね、合掌する。そして、そっと頭を垂れた。

白澤は微かに笑みを浮かべると、虚空に印を描く。かき消すように車諸共消えてしまった。

「行ったか」

ユッキーが合掌したまま、囁いた。

「行ったぞ。完全に気配が消えた」

うわああっ、ユッキーは大声を上げると、仰向けに寝転がった。

「疲れた、やってらんねえ」

なよは面白そうにユッキーを眺めた。

「恵まれた才能じゃな。ユッキーに助けてもらうた、ありがとうな」

「自分が助かりたいからただけだ」

ユッキーの言葉に、なよがくすぐったそうに笑った。

「なよさん。あんた、切れるカード、何枚も持っているだろう」

つまらなそうにユッキーが言った。

「妹の親友を危機にさらすわけにも行くまい」

あっさりとなよは認めると立ち上がった。

「奴らのせいで、ちと冷えるのう」

なよは、仰向けに寝転ぶユッキーの横に足を崩して座ると、少し抱き上げ、自分の膝を枕代りに寝かせた。そして、両腕で優しく抱き締める。

「なんだよ」

「寒さしのぎの湯たんぽがわりじゃ、静かにしとれ」

「ガキ扱いしやがって」

正面を向いたまま、ユッキーが呟く。

「子供は体温が高いからのう、ちょうど、いいわい」

なよがそっとユッキーの耳元に顔を寄せ囁いた。

「たまにはゆっくりせい。そんなに角張っておると、体も心もへとへとになってしまうぞ」

「余計なお世話だ」

「お前はとっあんが好きなのか」

「嫌いじゃねえけどな」

「お前が角張っていると相手も角張ってしまう。お前が丸ければ、相手も丸くいられるというものだ」

「だって・・・」

心なしか、ユッキーが言葉弱く反論する。

「ここに住んでいた何人かの男共も鬼に食われてしもうた、角張って、ハリネズミのように他を近づけまいと威嚇する必要は随分と減ったじゃろう。いずれはお主のつつあんも戻って来る、それなりの日常が戻るであろう。良い機会ではないかな」

なよの膝にユッキーが頭を押し付ける。

「どんなに頑張っても男の腕力にかなわねえよ。あんたみたいに強くないんだ」

なよは腕に力を込め、頬をそっと寄せた。

「いくら強くなっても上には上がおるものよ。ここに鬼が現れ始めたのは放送の前後であつたらう。早々に街にでも逃げ出せば、誰も殺されずに済んだであらうし、ユッキーも恐怖に震えずに済んだ。つまりは、鬼に腕力では勝てなくとも、危険を早期に感じ、適切な判断ができれば、生き残れるということじゃ。わかるか」

そっとユッキーが頷いた。

「角張った体と心では逃げることもできんぞ」

囁くように言うと、ユッキーの左手をなよは両手で包み込むように重ねた。

そして手を離すと、ユッキーの左手首に白い絹の帯が巻かれていた。

「それが必要が無くなるまで、ユッキーに付けておいてやろう」

「これは」

「気休めの呪いじゃ」

楽しそうになよは笑うと、軽くユッキーの頭を二度軽く叩く。

「幸い、幸い」

ユッキーは安心したかのように、委ねるように力を抜き、少し笑みを浮かべたが、はっと目を覚まし、飛び上がった。

「黒と三毛。大丈夫か見て来る」

「そういえば、全く顔をださんかったのう」

なよも立ち上がり、二人で工場の裏手に回ると、タコ焼きの屋台に夢中になっている二人がいた。

「黒姉ちゃん、コンロは大丈夫だよ」

屋台の下に潜り込んでいた三毛がはいだす。黒はタコ焼きを焼く鉄板を熱心に磨いていた。

「今晚、使えそうだな」

黒が一心に磨きながら、答えた。

なよは楽しそうに笑うと二人に声をかけた。

「よお。うまいタコ焼きは焼けそうか」

黒がなよの声に気が付いた。

「大丈夫。美味しいのできるよ」

黒が幸せそうに笑みを浮かべた。

「台車つきですから、押して帰りましょう」

三毛も声を弾ませて言った。

「なよ姉さん。黒はね、タコ焼き屋さんをするよ、家の前でね」

「そうか。商売繁盛じゃな」

ユッキーがなよの後ろで驚いて言った。

「お前ら、ずっと屋台の掃除をしていたのかよ」

黒がにっと笑った。

「楽しいよ。こういう掃除ならいくらでもできるよ」

黒の言葉に呆れたようにユッキーが笑った。

「そうじゃ、黒。白を呼べ。わしはとつつあんとやらが帰って来るまで、ここにおろう。白と一緒にならすぐに家に帰れるじゃろう」

黒は頷くと大声で叫んだ。

「おおい。白、おいで」

黒の視線の先、微かに霞が生じ、その中から白が飛び出してきた。

「黒姉ちゃん、来たよ」

あっと白がユッキーに気づいた。

「ユッキー、久しぶり」

白がユッキーに抱き着く。

「元気にしてましたか」

「ああ、元気だ」

いたずらげになよが何か言おうとするのを、慌ててユッキーが制する。

なよは笑うと、白に言った。

「先に三人で屋台を引っ張って帰れ」

「はい」

白は頷くと、屋台の前に立った。その後ろに三毛。黒は後ろから屋台を押す。

なよが厳かな口調で言った。

「ユッキー、油性のマジックを持って来い」

「は・・・、はい」

ユッキーは自分でも不思議なほど、素直に返事をして、作業場の片隅から油性のマジックペンを持って来る。なよは、緩やかにそれを受け取ると、屋台に記号のような絵を描いた。

丸の下に上下に長い楕円形、髪を伸ばすことで、なにやら女の子に見える。

「難しいのお、絵を描くというのは。まっ、気分じゃな」

なよは、マジックペンをユッキーに返すと、白に言った。

「本物はこの絵の百倍は可愛いのがのう、まっ、それでも、わしの依り代じゃ。白、花魁道中の儀を使うことを認める」

「花魁道中の儀 発」

白が緊張気味に叫ぶと、それを合図に三毛と黒が、しゃんしゃんと口々に言う。ゆっくりと進み

出し、三人がとけるように消えた。

「なんでもありだな、あいつら」

ユッキーが呟いた。

「奴らは一人ではさほどではないが、三人よれば、わしでもかなわんかもしれんな」  
なよは笑うと、ユッキーに言った。

「事務所に弁当がある、腹が減ったじゃろう」

「美味しいなあ、これ」

溜息まじりにユッキーが呟く。

「なよさん。これ、本当に美味しいよ」

ユッキーは事務机に置いたお弁当から、卵焼きを食べ、しみじみと言った。

なよは大吟醸片手にコップ酒、はあっと気持ち良さそうに息を吐いた。

「そうじゃろう、三女のあさぎは真剣に料理を作るからのう」

「本当に全部食べていいのか」

「わしはこの大吟醸を全身全霊で味わっておるからな。ん・・・、なんじゃ、とつつあんにも食わしてやりたいと思っておるのか。良い子じゃな」

ユッキーは顔を赤くすると、慌ててかぶりを振った。

「別にそんなんじゃねえよ」

なよはくすぐったそうに笑うと、事務椅子に座り、窓から外を眺めた。

「良い天気、行楽日和じゃなあ。あれは・・・」

なよが少し目を見開き、遠くを見つめる。

「とつつあんというのは、四角張った顔にがたいが良く、これまた、真っ黒の大きな四角張った車に乗っているのかのう」

「ああ、そうだけど」

「恐ろしい形相で車をとばしておる。十五分程度で車の音が聞こえだすぞ」

「ほ、本当か」

「なんじゃ。急に嬉しそうにしおって」

なよは笑うと、酒瓶を置き、ゆらりと立ち上がった。

「ちと、出迎えてやるかな」

なよは事務所の外の出ると、壁にもたれ掛かって両腕を組む。慌てて、ユッキーも隣に立った。

「どうじゃ、ユッキー。お父様、お帰りなさいませとか言うてみんか」

「そ、そんな、恥ずかしいこと言えねえ」

なよは静かに笑みを浮かべる、そして、ユッキーの顔をじっと見つめた。

「わしはユッキーの生い立ちを知らんし、どういう生活をしてきたかも知らん。ただ、わしはユッキーを気に入ったし、そのユッキーが、これ以上、性格が曲がらぬよう生きて行けば良いなあ



と思う。ま、考えておけ」

微かな地鳴りとエンジン音が響きだした。

漆黒の巨体が唸りを上げる。一気に加速し、距離を狭める。

急ブレーキと共に四角い男が飛び出し、銃口をなよに突き付けた。

凄まじい気迫と速さだ。

「とっつあん、待ってくれ。この人が鬼から助けてくれたんだ」

ユッキーが叫んだ。

「女が鬼をだと。何者だ」

なよは凄みのある笑みを浮かべると、低く呟いた。

「十一人の鬼をわしが殺した。その方が分け前が増えるからな。こんな美味そうな子を分けてはもったいないではないか」

瞬間、銃声が二つ、なよの胸から血が吹き出し、崩れるように倒れる。

「うわあああ」

ユッキーが悲鳴を上げ、なよにしがみついた。

「どいている。止めを刺す」

必死になってユッキーがなよにしがみつく。

「なよさん、どうして。どうしてなんだよ」

苦しい息の下、なよが微かに笑みを浮かべた。

「この世界では迷わずに撃つ。それでなければ生き残れんぞ」

「そんな、そんな。やだよ、なよさん。うわあああ」

ユッキーが大声で叫んだ。

「さてと」

なよは呟くと、体を起こした。

「え、えっ。なよさん」

「ユッキー。工場でなにか細長い棒を探して来い。わしがこの程度で死ぬか」

「え、あ。う、うん」

ユッキーが工場へ駆け出した。

呆れたように男がなよを見つめる。なよは顔を上げると、人差し指を男の顔に向け、くっと下を指す。まるで重いものに押し潰されたように男がうずくまった。

「わしを見下ろして良いのは父さんだけじゃ」

なよは座り直すとなにごともなかったように笑った。

「よう、童（わっぱ）。余程、娘が心配だったようじゃのう」

危険がないことを察知したのか、男も体を起こすと胡座をかく。

「もう一度聞く、何者だ」

「お前、賞金稼ぎもやっておろう。ならば、わしの顔、見覚えあろう、この国はわしに十億の賞金を掛けたと聞くぞ」

男はあっと声を漏らした。

「かぐやのなよ竹の姫」

「こんななりをしておるが、一国の女王としての気品に満ちあふれておろう」  
なよが笑った時、ユッキーが細長いマイナスドライバーを持って戻って来た。

「こ、これでいいかな」

「上等じゃ」

なよは受け取ると、指先でくっつくとマイナスドライバーの先を曲げる。そして、胸の銃孔にドライバーを差し込んだ。

「痛っ、たたっ。この程度では死にはせんが人並みに痛くはあるのじゃ。ユッキー、酒を持って来てくれ」

「はっ、消毒だな」

ユッキーは事務所に飛び込むと、酒瓶を持って来た。

なよは受け取ると、がぶ飲みをする。

「酒で洗って消毒するんじゃないのかよ」

「そんなもったいないことができるか、ユッキーは恐ろしいことを言うのう。酒は麻酔の代わりに飲むだけじゃ」

やっとのことで銃弾を取り出すと、なよは酒瓶を置き、改めて男を睨んだ。

「ほんにユッキーのつつあんなは朴念仁じゃのう、可愛い女の子の機知にとんだ冗談を真に受けおって」

「最悪の冗談をじゃねえか」

ユッキーの抗議になよは嬉しそうに笑った。

「さて、つつあんな。わしは魚屋 魚弦で金土とアルバイトをしておる。じゃから、月火とユッキーの家庭教師をしてやろう。勉学はもちろん、立ち居振舞い教養も身につけさせ、そのうち、つつあんなもお父様と呼んでもらえるようになるぞ」

「勝手なこと言うんじゃねえ」

ユッキーが叫ぶのを、なよは左腕をその首に絡ませ、顔を寄せた。

「未来への選択肢を増やしてやろうというのじゃ。学校にも行っておらんじゃろう」

「人の多いところは好かねえんだ」

ユッキーが顔を背けるのを見て、男が口を開いた。

「よろしく頼む」

「なんでだよ、つつあんな」

男はユッキーをぎろっと睨み言った。

「俺には責任がある、それだけだ」

「よし、決まった」

なよは声を上げると、ゆっくりと立ち上がった。

「さて、帰って、幸に傷を治してもらわねばならん」

なよは一步踏み出したが、微かにふらついた。

「血が流れすぎたか、それとも、久振りの天水、ちと、酔ったかのう」

右手の酒瓶を眺める。なよは、酒が残っていないのを見ると、ぐっと酒瓶を持ち上げ、滴も残すまいとラッパのみをした。そして、酒瓶を降ろす。

「ではな」

ゆっくりと歩き出す、数歩してなよの姿が消えた。

呆然とユッキーはなよを見送ったが、慌てて、なよの消えた辺りに走る。

「これって、なんだよ。帰ったってことかよ」

「そういうことだ、俺は車をガレージに入れてくる」

立ち上がると、車の元へ戻っていった。

「うわああっ、勝手な奴らばかりじゃねえかよ」

ユッキー叫び声がこだました。

異形 漣二話

梅林の中央、幸は漣を見上げると、にっと笑った。

「本当に漣の親父が望んでいるのかどうかは知らない。しかし、約定の言葉は交わした。これは、絶対だ。漣、修行を途中で挫折することは許さない、いいな」

緊張した面持ちで漣が頷いた。

「漣、横に立て」

幸は漣を見上げた。

梅林の緑が日差しを青に染める。

心地よい風が流れていた。

「舞を教える。動きの要、全てを内包した舞だ」

ゆっくりと漣の体が動きだした。

「か、勝手に体が動きます」

「漣の神経に干渉している。時間があればじっくりと見取り稽古をしたいところだけど、時間がないからな。体の動くままに動いてみる」

「はい」

しっかりと漣が返事をする。幸は少し嬉しげに笑みを浮かべた。

美しく滑らかな動き、しかし、見るものが見れば、内に含まれた凄まじい攻撃と防御の動きを見いだすことができるだろう。

緩やかに差し出される掌、儚げで頼りなく、今にも押し返されてしまいそうなその掌打も、様々の防御を擦り抜け、相手に達した瞬間、鋼となる。見上げるような鬼をも藻屑と潰してしまう。

「漣、覚えておけ。この舞は波結いという。常に様々に変化し続ける波、その波を結ぶことで、巨大な力を産み出す」

幸は笑みを浮かべると、必死になっている漣の横顔を見た。

良い調子だ。

「花魁道中の儀 着」

家の方角から、白の声が響いた。

「帰ってきたな」

幸が呟くと同時に、三毛が駆けて来た。

「幸母さん、タコ焼きの屋台、引っ張って来たよ」

「そうか。それじゃ、今晚はタコ焼き三昧だな。ユッキーも元気にしてたかな」

「十一人の鬼がいたけど、事務所に結界が施されていて大丈夫だったよ。あ・・・」

「ん、どうした」

「ごめんなさい、鬼のこと忘れてました」

「三毛もタコ焼きの屋台が余程嬉しかったんだな」

幸が柔らかく笑みを浮かべた。そして、遠くを見る。

「鬼の気配はすっかり無くなって、二人であさぎ姉さんの作ったお弁当を食べているよ」

幸は笑うと、同じ背の三毛の頭を撫でた。

「お疲れさま」

三毛がほっとしたように笑みを浮かべた。

「あさぎ姉さあん」

黒が台所へ飛び込んで来た。あさぎは洗い物の手を止めると振り向いた。

「あさぎ姉さん、タコ焼きの元を作ってください」

「いいよ。美味しいの用意してあげる」

黒は幸せそうに笑みを浮かべると、あさぎの横に駆け寄り、洗った皿を布巾で拭いていく。

「タコ焼きの機械があったんだね」

「うん。今晚は美味しいのを焼くよ」

「それは楽しみだ」

あさぎは笑うと、いずらげに言った。

「黒はおすまししているより、笑った方が可愛いよ。椿ちゃんの前でもそうすればいいのに」

「うーん」

黒が困ったように笑みを浮かべた。

「期待を裏切るのって、とっても怖いんだ、鬼よりも怖いよ」

「なら、期待を裏切るのじゃなくて、期待を越えれば。そうだね……。料理と人とは違うよね」

あさぎが微かに溜息をつく。

「あさぎ姉さんの料理はとっても美味しいよ」

「ありがとう」

あさぎがそっと笑みを浮かべた。

「ね、黒。私ね、必死だったんだ」

「あさぎ姉さん、それは最初の時」

あさぎが少し顔を横に振る。

「ここで生活を始めてからだよ」

「どうして」

「私は造りモノで、たまたま、お父さんに拾ってもらって、黒達のついでに家族にしてもらった

だけの生きた人形」

黒はそっと両手であさぎの手を握ると、顔を横に振る。

「だって思っていた。だから、自分がここに居ても良い理由が欲しくて、料理を頑張ったんだ、必要とされたい。ここにいなきゃならない人になりたいって」

「あさぎ姉さん、哀しいこと言わないで」

黒が寂しげにあさぎを見つめた。

「でも、今はね」

あさぎが笑みを浮かべた。

「楽しいから料理を作るし、居ても良いとか悪いとかじゃなくて、家族だから一緒にいるんだって、素直にそう思えるんだ。ね、黒、椿ちゃんも、学校もね、きっと、楽しくなるよ。きつとね」

「うん」

黒は幸せそうに頷いた。

「学校もあまり休まないようにするよ」

あさぎもそっと笑った。

箸を片手にとたとたと小夜乃がやってきた。

「黒さん。あの、なよ母様は」

「小夜乃。なよ姉さん、しばらく帰れないと思う」

黒は洗い物を流しにおくと、小夜乃をそっと抱き締めた。

「幸母さんの友達が一人になっちゃって、その子のお父さんが戻ってくるまで一緒にいてやるって」

少し小夜乃は俯いたが、笑みを浮かべ顔を上げた。

「優しすぎる人ですから、なよ母様は」

黒が手を離すと、小夜乃はテーブルの椅子に座った。

言葉とは裏腹に、小夜乃の瞳に涙が滲んでいた。

「黒さん」

「ん」

黒が小夜乃の隣りに座った。

「小夜乃は外に出ると男の鬼に襲われてしまいます。もし、小夜乃がいま、なよ母さんの所へ行けば、きっと、鬼が集まってきます、だから、なよ母さんやお友達の迷惑になってしまいます」

黒は多分そうなるだろうと思ったが、どう、それに対して答えれば良いかわからず小夜乃をなぐさめることすらできなかった。

「黒さん。黒さんみたいに小夜乃も強くなれ、ばなよ母さんと一緒に外へ行くことができるのでしょうか」

「それは」

黒が口ごもった。今のままでは、小夜乃は外に出ることができない。自由に買い物に行くことすらできないのだ。強くなることで、鬼を退けることができるだろうか。鬼に恐れられるくらい強

くなれば、きっと。でも、それをなよ姉さんは願うだろうか。

「ごめん、小夜乃。黒にはどう答えたらいいかわからないよ」

「八十点。適当なことをほざくより、わからない時はわからないというほうが良い」

幸の声だ、黒が振り向く。幸が流しの前で水筒にお茶を入れていた。

「漣がそろそろ倒れるかも知れない。あさぎ姉さん、バナナあるかな」

「あるよ」

「それじゃ、あさぎ姉さん、バナナジュースを作ってください。小夜乃」

幸が小夜乃に向き直った。

「悩んだ時は、兎に角、前へ進め。間違えたなと気づけば、正直にごめんと叫んで、あたふた逃げ出せば良い」

驚いて、小夜乃は幸を見つめた。

「武術というのはいろんな種類があるんだ、どの武術を身につけているかで、自分が一体何者かを示すことができる、名刺みたいなもんだ。だから、小夜乃、なよ姉さんが帰ってきたら、なよ姉さんに武術も呪術も教えてくれるように頼め。小夜乃はなよ姉さんの娘なんだからな」

小夜乃は立ち上がると、幸に頭を下げた。

「ありがとうございます、幸姉さん」

幸は頷くと、水筒を持って漣の元へと消える。黒は安心してほっと溜息をついた。

「黒さん、心配かけてごめんなさい」

「どう致しまして」

黒がほっとしたように笑った。

「ひゃああつ」

危うく、三毛は漣の蹴りから逃れ、距離を置いた。

確実に避けたと思った蹴りがそのまま向きを変え、三毛を襲ったのだ。最速の蹴りの方向がその速度のままで自由に変化する。

「休憩するかな」

幸が現れるのと同時に漣の動きがゆっくりと止まり、そのまま崩れる。幸は素早く後ろに回ると、背中から抱えるように支え、ゆっくりと漣を座らせた。そして、お茶を少し飲ませる。

そのまま、幸は漣の後ろに座ると、左手を漣の心臓の上、右手をお腹の下へ置く。その手が漣の体に溶け込んだ。

「三毛は漣の両足、白は左手」

幸の言葉に二人はすぐさま反応し、漣の体に触れ、柔らかく摩る。

「黒はタコ焼きの仕込み中か。白、左手が終わったら右手に移りなさい」

「わかりました」

素早く、白が答えた。

「神経は八割、母さんが制していたけど、動いている筋肉も関節も漣のものだからな、随分、過負荷になっている。筋繊維をしっかりと読んで解きなさい」

二人がわき目も振らず集中する。

「漣、意識はあるな」

「はい」

朦朧となりながらも漣が答えた。

「一度は体に通した動きだ。いずれ一人でも動けるようになるし、そうさせるさ」

小夜乃がコップに入ったバナナジュースを手にとってきた。

「幸姉さん」

「ん、ありがとう」

幸は両手を漣の体から出すと、ジュースを受け取り、少しずつ、漣にバナナジュースを飲ませる。白が漣の右腕に移った。

「幸母さん」

「ああ、漣の心臓の動きを整えていたんだ。微細振動を起こすと血液を流せなくなるからな」

「幸母さんは凄いです」

幸は白に笑いかけ言った。

「ありがとう、娘に褒めてもらえるのは単純に嬉しい」

幸は素直に笑うと、そうだと三毛を見た。

「面白い蹴りだっただろう」

三毛が目を見開いた。

「漣ちゃんの蹴りが避ける方向についてきた」

「仕組みはわかるか」

三毛が仕方なさそうに首を横に振った。

「漣ちゃんの足が関節に関係なく曲がったように見えたけど、なんともないし」

三毛が漣の脚を摩りながら言う。

「ベクトルの合成だ。あとは自分で考えなさい、その方が身になるからな」

三毛はしっかり幸を見つめると頷いた。

不意に幸は振り向き、家を見つめた。

「白、あとは任せた」

「はい」

幸は素早く立ち上がると、小夜乃の手を握った。

「行くぞ、小夜乃」

二人の姿が消えた。

「どうしたんだろう、あんな慌てた幸母さん、初めて見た」

白が呟いた。

男の部屋の柱に背を預けたまま、うづくまるなよがいた。

「なよ母様」

小夜乃が叫んだ。



「小夜乃、布団を敷きなさい」

幸の声に弾けるように小夜乃が押し入れから布団を取り出した。

幸は静かになよを布団の上に仰向けに寝かせつけ、枕元に正座すると、右手をなよの胸に溶け込ませた。

指先を探るように蠢かせる。小夜乃が反対側に正座し、唇を震わせ、瞬きもせずになよの胸元を見つめていた。

「硝子球」

幸が呟くと、その左手に透明な球が現れる。人の顔の大きさほどのそれに、右手が何かをつまみ上げるように、黒い不定形の布のようでもあり、黒い油のようにも見えるそれを硝子球に吸い込ませる、見るうちに、硝子球は漆黒の球となり、なよがほっと吐息を漏らした。

「なよ姉さん、大陸系の呪文だ。銃弾に込められていたんだと思う」

「なよ母様、お加減はどうですか」

心配げに小夜乃が囁いた。

「いやはや、面目ない」

照れ隠しになよが微笑んだ。

幸は溜息を漏らすと、小夜乃に言った。

「あさぎ姉さんに氷嚢と氷を頼んでくれ。まだ、熱がある」

「はいっ」

小夜乃は立ち上がると台所へと駆け出した。

「ユッキーのつつあんには何もするなよ。ま、呪文は予想外じゃったが」

なよが笑った。

「ユッキー、良い娘だったでしょ」

幸が少し足を崩して笑った。

「今回はなよ姉さんが悪い」

「それは認める」

「お酒も飲み過ぎです」

「ああ、美味かったのう」

「反省してないね」

「酒を飲まぬ奴にはわかるまいて」

「なよ姉さん」

「ん」

「辛いのは少しだけ分かる、鎮魂の儀に付き合ったんだからさ。でも、辛くても自分を傷つけちゃだめだよ」

幸は呟くと、なよの頬を伝う涙を人差し指で拭った。

小夜乃が氷を入れた氷嚢を、黒が洗面器に水を張って届けにきた。あさぎも心配をして、なよの顔を覗きにきる。

「あさぎも黒もすまん、心配かけた」

なよは横になったまま、声をかけた。

あさぎがほっとしたように、笑みを浮かべる。

「タコ焼きは明日にした方がいいかなあ」

黒の言葉になよが笑った。

「わしは晩御飯まで寝る、黒、起こしに來い。お前の焼くタコ焼きを食わねばな」

黒がほっとしたように笑った。

「わかりやすいやつじゃのう」

なよは少し笑うと体を起こし幸の硝子球に手を伸ばした。小夜野がなよの背中を支える。なよは幸から漆黒の硝子球を受け取ると、両手で掴み、親指に力を込める。

「極性を換えてやろう」

硝子球がゴムのように大きく凹み、捲れ上がるように弾けて、白い硝子球に変わった。

「陸にては鶴と化し、空にては龍と変ぜよ。水にては、そうじゃな、鯨へと変化し、小夜乃を守れ」

なよが息を吹きかける、硝子球が、小鳥、眼も嘴もすべてが真っ白な小鳥に変化した。石英にて作り上げられた小鳥の彫刻のようだ。

「幸、頼む」

なよが幸に小鳥を手渡した。幸は頷くと柔らかく両手で小鳥を持つ。

「黒、母さんが浮かばないように、肩を上から押さえ付けてくれ」

慌てて、黒は幸の後ろに立つと両手で幸の肩を押さえた。

幸が一つの呪文を唱えるわけでもなく、じっと小鳥を見つめる。次第に、小鳥が色付き、薄山吹色の文鳥に変化した。文鳥は頭を傾げ、小夜乃を見つけると、ぱたぱたと飛び立ち、小夜乃の頭に停まった。

「小夜乃。こやつに名前を付けてやれ」

なよはそう言うと、悪戯げに笑みを浮かべた。

白は手を止めると、漣に声をかけた。

「漣ちゃん、何処か痛くありませんか」

「ありがとうございます。却って体が軽くなったみたいです」

白は頷くと、三毛に声をかけた。

「三毛、もういいよ」

「うん」

三毛も手を離すと、やわらかく笑みを浮かべた。

「そうだ、漣さんに」

三毛が白に言った。白は頷くと、漣に言った。

「漣ちゃんのお父さんや一族の人達はホンケに全員匿われています。えっと、ホンケというのは、この国の呪術の組織の一つで、たくさんの呪術者達から畏敬の念を込めて、ホンケと呼ばれています」

「母さんは別だけどね」

三毛が白の言葉に付け加えた。

漣は安心したように小さく笑みを浮かべた。

「ホンケで体制を整えた後、鬼と一戦する予定のようです。ホンケはその後方支援に回るだけでなく、かなり積極的に協力をするようです」

「ありがとうございます」

安心したように漣が笑みを浮かべる。白もつられて笑う。

「あの、白さん、教えていただいていたいいでしょうか」

「えっと、どんなこと」

「幸さんは小さいのに白さん達のお母さんなんですか」

「それは」

白が口を開きかけた瞬間、あかねが白の目の前に現れた。

「白さん、そこまでです」

あかねはそう言うと、漣に向き直った。

「漣さん、問うてはなりません」

あかねが静かに言った。

「もしも、漣さんが一カ月後もここに暮らし、家族となるのならば、全てを知ることに問題はありません。でも、戦列に戻るならば、必要以上のことは知ってはなりません」

「あかねちゃん」

白が咎めた。あかねがかまわずに言葉を続けた。

「幸姉さんの動きを体に通したなら、どんな強い鬼でも赤子の手をひねる気分で打ち倒すことができることがわかるでしょう。この国の支配者達も、鬼も、そんな術を持つこのことを知りたいと考えています。つまりはこのことを知ることは、漣さん自身を危険にさらす可能性を増やすということです」

漣がそっと頷いた。

「白さん。黒さんが呼んでいましたよ、漣さんも一緒にどうぞ」

白はあかねにどう対応すれば良いか考えめぐねていたが、あかねの言葉に漣と家へと向かった。

「三毛さんもどうぞ。タコ焼き、チーズを入れたり、明太子を入れたり、黒さん、楽しんでますよ」

ふいと三毛は興味深そうにあかねを見つめた。

「どうして、あかねちゃんは自分を嫌われるように仕向けようとするの」

「そういうの好きだから。でも、幸姉さんだけには柔順でありたいと思っているのですけどね」

あかねが嬉しそうに笑う。

「白さんは学校生活に一番馴染んでいるから、自我がまっとうに固まりだして、ちょっといじめたりするのが楽しいんです」

「あかねちゃんはとっても良い人だよ、意地悪じゃないよ。鬼からも助けてくれたよ」

三毛の言葉に、あかねは答えず、仰向けに寝転がった。

「晩ごはんまで、あかねはここで寝転がっています。三毛さんは戻ってタコ焼きを試食してきなさいな、美味しそうでしたよ」

三毛はあかねの横に座ると、あかねの右手を両手で包み込むように握った。

「あかねは一人が好きなんです」

「三毛も一人が好き。でも、二人はもっと好きだよ」

いたずらげに三毛が笑った。

「あかねちゃんに三毛の優しさを分けてあげる」

あかねがふっと笑った。

「そういうところ、幸姉さんにそっくりです」

あかねは緊張を解くと、ゆっくりと息を整える。

「まっ、手を握られているのはそれほど不快ではありません。それに、ちょっと気持ちが柔らかくなります」

あかねが目をつぶったまま、かすかに吐息を漏らした。

「黒さんは白さんと三毛さんを護りたいから強くなろうとしています。白さんは強くなるよりも活法を重視しています。三毛さんは、どうして強くなろうとしているのですか」

「急にそんなのわからないよ。ただ、とっても練習が楽しいし、出来なかったことが出来るようになるのととても嬉しいんだ」

あかねはゆっくりと目を開け、三毛に視線を向けた。

「三毛さんはいつか狂います。その時は、あかねが命を懸けてでも、三毛さんを正気に戻してあげましょう」

「三毛は大丈夫だよ、狂ったりしないよ」

「三毛さんは幸姉さんに似過ぎていてのですよ。多分、あかねがここ存在する理由は三毛さんを制するためでしょう。でも、願わくば、狂わないでほしくはあります。あかねもここで暮らすのが楽しいから」

あかねがそっと笑みを浮かべた。

「あかねのこと、嫌いになりましたか」

「ううん、好きだよ」

「良かった」

聞こえない声であかねが呟いた。

台所で蛸を切っているあさぎの横に、幸はやって来ると、あさぎににっと笑いかけた。

「あさぎ姉さん、御煎餅、食べても良い」

「黒ちゃん、もうすぐタコ焼きを焼いてくれるよ」

「大丈夫、両方食べるよ」

幸は戸棚から、洗濯ばさみで綴じた御煎餅の袋を、背伸びして引っ張り出すと、テーブルにつく、足を揺らしながら、煎餅をかじった。

「はい、お茶」

あさが湯飲みにお茶を入れた。

「ありがと。あさぎ姉さん」

にひひと幸がくすぐったように笑った。

幸は見事に漣の指導者としての立場と、幼い子供の、二つを使い分け、楽しんでいた。

「こんにちわ」

玄関口で声がした。

「あの声は恵さんだ。久しぶりだなあ」

恵は台所へ来ると、あさぎに声をかけた。

「あさぎさん。幸さんが大変なことになったって、恵子から聞いたんだけど」

あさぎは困ったように笑みを浮かべると、目の端で幸を見る。

「うわっ、凄い綺麗な女の子」

「こんにちわ。お姉さん」

幸が笑顔を浮かべ恵に挨拶をした。

「こんにちわ」

恵も笑顔で挨拶を返すと、あさぎに言った。

「まるで幸さんを幼くしたような女の子だけど、まさか、お父さんと幸さんの子供じゃないですよね。さすがに計算が合わない」

「当たらずとも遠からずというか・・・」

あさが口を濁す。

「まさか、幸さん」

「恵さん、お久しぶり」

幸が所在無げに笑みを浮かべた。

「幸さん見たら、びっくりするぞって、啓子が言ってたけど、ほんとにびっくりですよ」

恵は幸の横に立つと、まじまじと幸の顔を見つめた。

「それで、いつ戻れるんですか」

「十年も経てば自然に成長するかなって思っている」

恵が興味深そうに幸の眼をじっと見つめた。

「な、なんだよ」

恵は得心したとでも言うようににやりと笑みを浮かべると、幸の隣の椅子に座った。

「幸さんはお父さんに正直であれとたたき込まれています。ですから、嘘を言うと、ほんの少しだけ、眼が泳ぐのですよ」

幸は溜息をつくと、少し笑った。

「術の失敗でこうなったんだ。途中で暴走してね。だから、暴走中の変化を分析出来れば元に戻ることができる、ただ、解析にまだしばらくはかかるし、万が一、戻れなかった時のことを考えて黙っている。あさぎ姉さんも内緒にしてね」

ああぎが嬉しそうに頷いた。

「さて、恵。次は幸の番。何を思い詰めている」

恵は大袈裟に溜息をつく、少し俯く。

「十代前半の肌の張り艶、もったいないけど、大人に戻してくださいってお願いしようと思って来たのですが、幸さんの姿を見て、決意がぐらついています」

「それはごめんなさい」

幸が笑った。

あさぎが二人に気分の安らぐカモミールのハーブティを差し出した。

恵はぺこりとあさぎに頭を下げると、両手でカップを包み込む。

「幸さん」

「ん」

「私には兄がいるのですが、既に結婚をして、家を出ています。実家からは随分遠いのですよ。昨日、母さんが入院しまして、そんなにひどくはないのですが、一カ月は病院を出られない。父さんは料理も掃除も家事全般、母さんに任していた人ですから、何もで来ません。それで、私が実家に戻ることになりました」

「その姿では、お前、誰だになるよね」

「姿は変わったけど、貴方の娘、恵ですよ。ほら、子供の頃のアルバム見ればわかるでしょう」

恵は俯くと、小さく息を吐く。

「わかるわけないか」

恵の言葉に、少し寂しそうに笑みを浮かべると、幸は両手にティーカップ抱くように添え、一口飲む。柔らかい味がする。

「恵さん」

幸が声をかけた。

「まっとうなこれからの考えるなら、幸は恵さんを大人にして送り出す、それは簡単だし、これこそ本来だろうね。でもさ」

幸は恵を見つめると、にっと笑った。

「幸は大人に戻りたいけれど、鍵がかかってしまったようなもので、そうは簡単には戻れない。でも、恵さんを大人にするのはいつでも引き受けるよ。お母さんの入院は大人に戻る良い機会かもしれないけれど、もう少し、ぐずってみるのもありかもしれないな」

「えっ」

ふっと幸は振り返ると襖の向こうに声をかけた。

「あかねちゃん、三毛、おいで」

その声にあかねと三毛がやって来た、ばつが悪そうに。

「盗み聞きしてごめんなさい」

三毛が素直に謝った。

「いいよ。聞かれない方が良い話の後だ」

少し意地悪く幸は笑みを浮かべると、あかねを見つめた。

「あかねちゃん、おいで」

少し脅えながらも、あかねが幸の前に立つ。

幸はあかねを抱き締めると囁いた。

「あかねちゃんは幸の妹だ。今までも、今も、これからも」

ほっとしたようにあかねの表情から緊張が消えた。

幸は笑うと、恵に言った。

「実家にはいつ帰る」

「明日です」

「なら、今晚はここで寝て、明日、あかねちゃんと三毛も一緒に実家へ行ってくれ。あかねちゃん、三毛、良いかな」

「はい、大丈夫です」

あかねが元気に答えた。三毛も頷くとにっこりと笑みを浮かべた。

「術とのりと勢いで、恵さんの居場所を作ってこい」

幸が楽しそうに笑った。

「こんにちは。津崎です」

玄関口からおとないの声。

「あ、椿ちゃんだ」

三毛が玄関口へ振り向いた。

たたと三毛が玄関口へ走っていく。

「黒ちゃん、大丈夫かなあ」

あさぎが笑みを浮かべた。

「津崎さんって」

恵が尋ねた。

「黒ちゃんのファンの子だよ、ね、幸」

「なんでも、津崎ちゃん曰く、黒のファンクラブまで出来ているらしいよ」

「黒ちゃん、そういうの苦手で、津崎さんが来ると緊張してしまうんだけどね」

あさぎが笑みを浮かべた。

「その緊張した姿が大人びて理知的で格好いいらしい」

幸も笑うと、御煎餅を一口かじる。

「どんなだろう、見て来ます」

「あまりからかわないでやってね」

あさぎが念押しをする。

「大丈夫ですよ」

恵が笑った。そして、幸を後ろから抱き締めた。

「幸さん、ありがとう」

「どういたしまして」

恵が裏に回ると、津崎がうっとりとした表情で黒の前に立っていた。黒はというと笑みを顔に張り付けたまま硬直している。

「うわあ、ゆりゆりだ」

恵は呟くと黒に近づき、背中をぱんと叩いた。

「黒さん、焦げますよ」

「あ、恵さん」

慌てて、黒がタコ焼きをくるっと回転させる。恵は笑みを浮かべると、津崎に視線を寄せた。

「初めまして、恵です」

「こ、こんにちは。津崎椿です」

津崎は年下にも見える恵の外見とは裏腹に、落ち着いた様子に緊張し、少し吃ってしまった。

「津崎、どこかで・・・」

恵が呟いた。

「ひょっとして、津崎要のお孫さんかしら」

「はい、お祖母さんです」

少し落ち着いたのか、黒が恵に話しかけた。

「恵さん、知っているの」

「昔、やっていた仕事の関係でね。顔の雰囲気も似ていたし」

「あ、あの。おばあちゃんとお知り合いなんですか」

「まさか。こっちはただの下っ端。津崎要は津崎流薙刀術総帥。雲の上の人、身分が違い過ぎるわ」

恵が気楽そうに笑う。

黒は焼けたタコ焼きのお皿を津崎に手渡し、言った。

「向こうに白もいるから、一緒に食べなさいな」

「はい。黒様」

津崎は三人分のタコ焼きを受け取ると白のところへ走っていく。

黒が大きく溜息をついた。

「ありがとう、恵さん」

「どう致しまして。それより、恵にもタコ焼きを作ってくださいな」

「美味しいの、作るよ」

安心したように黒が笑った。

辺りが薄暗くなる頃、黒はそとなよの寝る部屋の襖を開けた。

小夜乃が枕元に正座していた。

「小夜乃ちゃん、なよ姉さん、どうかなあ」

小夜乃は振り返ると笑みを浮かべた。



「よく眠っておいでです」

黒は小夜乃の隣に来ると、なよを覗き込んだ。

「小夜乃ちゃん」

「え」

「ゆっくりお休みのようでしたから起こしませんでしたって、明日の朝に言ったら、なよ姉さん、怒るだろうね。小夜乃ちゃん、なよ姉さんを起こそうか」

そっと、小夜乃はなよの頬に触れると、耳元で囁きかけた。

「なよ母様、タコ焼きですよ。食べましょう。それとも、明日になさいますか」

なよは目を覚ますと、ゆっくりと体を起こす、慌てて小夜乃が背中に手を添えた。

「食うに決まっておる。黒、巧くなったか、タコ焼きは丸くなっておろうな」

「うん、うまくひっくり返せるようになったよ」

「よし、それは楽しみじゃ」

思いの外、なよは元気に起き上がると、着崩れた寝間を直し、にっと笑った。

「わしは食通じゃからな厳しいぞ。おや、小夜乃、小鳥はどうした」

小夜乃がそっと笑みを浮かべた。

「実朝は何もかもが珍しいらしく、あちらこちらと飛び回っております」

「ん、実朝。実朝と名付けたのか」

小夜乃は頷くと小さく呟いた。

「おいで。実朝」

小鳥が襖の隙間から飛び込んで来た。そして、当たり前のように小夜乃の肩に停まる。

「実朝。こちらは小夜乃のお母様です。ちょっと恐いけれど、とてもお優しい方ですよ」

「恐いは余計じゃ」

なよは笑うと、呆れたように実朝を見る。

「歴史を繙くならば、頼光辺りでも名付けておけばよいものを。ま、小夜乃は争いを好まぬからな、実朝辺りが気も合うて良いかもしれんな」

「なよ姉さん」

黒が声をかけた。

「それはなよ姉さんの知っている人」

「ああ、知っておる、随分、泣かしてやったものじゃ。若くして殺されてしもうたが、生まれて来る時代を間違えたような奴じゃったのう」

ふと、その頃を思い出したのか、なよは静かに目を閉じたが、一呼吸の間もなく、目を開けた。

「感傷より、食い気じゃ。黒、用意をせい」

「はいっ」

黒は飛び上がると、駆けて行く。

「小夜乃」

「はい」

「実朝を大事にせいよ」

小夜乃は幸せそうな笑みを浮かべると、しっかりと頷いた。

異形 漣 三話

漣は驚いて、その光景に見入っていた。

幸が蹲って泣いていた。

「お父さんのお茶碗、割れちゃったよ」

黒さん達から母さんと呼ばれる美少女、こんな綺麗な女の子、見たことがない、それでいて、男っぽい言葉に自信に満ちた眼差し。

父さんよりも遥かに強い、いや、桁が違い過ぎる。

「うるさいわ、静かにせい」

なよは幸の頭をはたくと、呆れ顔で言った。

「わしの気に入りの湯飲み。黒の丼茶碗、店の客用の珈琲カップセット。次々と割ってしまいおって。これだけ割れば、不吉もなんもあるか」

なよは怒鳴ったが、深く溜息をつくと、おろおろと見つめていた黒を手招きした。

「黒。幸を父さんの部屋に連れて行け。これでは手伝いにならん。幸をゆっくり落ち着かせて来い」

「はいっ」

あたふたと黒が幸を抱き上げた。

「ねえ、黒。父さん、帰って来なかったらどうしよう」

「大丈夫だよ、父さんは約束を守ってくれるよ」

黒はにっと笑うと、自身の不安を打ち消そうかとするように足早に男の部屋へと向かった。

ふと、幸乃は現れると、なよに言った。

「幸乃もお父様の部屋へ参りますわ、幸と黒、二人で泣き出すでしょうから」

「そうじゃな、そうしてくれ」

幸乃は頷くと、なよに笑いかけた。

「なよ姉様も肩の力、ほどほどに」

「ああ。幸乃、お前が居てくれて助かる」

「どういたしまして」

幸乃の姿が消える。

「あとは」

なよが漣を見つける。

「漣、わしがじきじきに教えてやってもよいがの、ちと、用事がある。そうじゃ、白。お前が活法を教えよ。それもまた、漣を助けてくれるじゃろう」

白が目を丸くして言った。

「なよ姉様、いいの」

「わしは良いと言った。わしは同じことを二度も言うのは嫌いじゃ」

なよの言葉に白は飛び上がって喜ぶと、本当に嬉しそうに漣に笑いかけた。

「そうじゃ、小夜乃。小夜乃も白に活法を教えてもらえ」

小夜乃は頷くと、そっと白を見つめた。

「小夜乃ちゃん、おいで」

白は笑みを浮かべると、三人で部屋を出て行った。

ほおっと息を漏らすと、なよは部屋の真ん中に胡座をかいて座る。

「朝から大変じゃの。幸は昨晚、日付が変わると同時にそわそわとしだしよる、仕舞いにはまだ帰ってこんど泣きだす。父さんには早く帰って来てもらわんと身がもたんわ」

あさぎは笑うとなよの隣りに座った。

「大丈夫ですよ、もうしばらくの辛抱です」

なよは笑うとあさぎに言った。

「父さんがどんな状態になって帰ってくるかはわからんが、うまいものを用意しておいてくれ」  
あさぎの顔に笑みを返すと、残ったあかねと三毛を見る。

「さて、あかねと三毛は椅子を三脚、表に運べ、玄関と門扉の間じゃ。わしは折り畳みの卓を運ぶ。あさぎ、紅茶の用意じゃ」

玄関と門扉に間、畳二畳ほどの空間にテーブルと椅子を設えると、三人向かい合って座る、テーブルには紅茶のセット。

「あの、お茶をしようということですか」

あかねが不思議そうになよに尋ねた。

「茶はついでじゃ。お前達二人には結界の補強と修復を教えてやる。父さんはおらん、幸はあの始末。ここの結界が弱くなりつつある」

三人はそれぞれテーブルにつき、向かい合った。見上げれば青い空、心地よい風が流れてくる、絶好のお茶日和だ。

「道向こうの電信柱を覗いてみい」

二人は目を凝らすようにじっと見つめたが、やがて気づいた。電信柱の中程が微かに膨らんで見える。

「わかるか、そこだけ、結界が薄くなっておる。じゃから、レンズを通して見るように歪んで見えるわけじゃ」

「結界って目に見えるんですね」

「見える奴にはな。三毛にしてもそうじゃ」

「え」

三毛がなよを見上げた。

「わしがここの娘になった頃は、三毛の眼が猫の眼に見えた。人によって見え方が違うておった

わけじゃ。じゃが、今は、わしにも三毛の眼がすっかり人の目に見える」

「それは」

「三毛、お前が曖昧な存在ではなく、すっかり人になったということよ。しかし、三毛という名はなんとも、猫っぽいな、名前を変えてみるか」

三毛が慌てて言った。

「三毛は三毛だよ。幸お母さんが付けてくれた名前だもの」

「なるほど。その名は宝物じゃな」

なよは笑うと柔らかく三毛の頭を撫でる、三毛が気持ち良さそうに笑みを浮かべた。

「あ、電信柱が」

あかねが声を上げた。歪んでいた電信柱が真っすぐに立っていた。

「結界を張るのも、修復するのも生半可な術者ではかなわん。しかし、この結界は巧く作ってある、ここに居る者の気分に応ずる。楽しい、嬉しいと思えば結界が強くなる。あかね、お前も楽しい気分になってみい」

「急にそんな、無理ですよ」

あかねが戸惑いながら答えた。

「生真面目じゃのう」

なよは笑うと紅茶を一口すする。

「以前、幸と白が二人で旅行をしたらしいのう」

「ええ、白さんの教育方法に悩んで」

なよが引き込むように笑みを浮かべた。

「あかね。幸と二人で旅行すれば楽しいであろうな」

「幸姉さんと二人で」

あかねが呟く。

「そうじゃ、なんとか言ったのう。ネズミの着ぐるみを生きているなどとはざく遊園地。二人して遊べば楽しかろう。ソフトクリームなんぞ食べながら、楽しいぞ」

あかねがぼおっと宙を眺める。

「でも、幸姉さんは人の多いところは苦手ですから」

あかねが呟く。

「北の方に、電気を延いていない宿があるらしいのう。奥座敷、ランプのあかりに差し向かい。二人っきりで美味しいものなどいいぞ。その宿には温泉もあるらしい、二人で湯につかり。どうするぞ、あかね」

いつの間にか、夢心地の表情であかねが眼をつぶっていた。

「幸お姉ちゃん」

あかねが小さく呟いた。

瞬間、三毛が驚いたように外を見つめた。圧迫感、結界がその厚みを増したのだった。

「凄い」

三毛が呟いた。あかねは意識を取り戻すとなよを睨む。

「酷いですよ、なよ姉さん」

「何が酷いのかわからんとう」

いたずらげになよが笑った。

「あかねちゃん、三毛も幸お母さんが好きだよ、一緒だね」

「そ、そうですね」

あかねの慌てた返答に、意地悪くなよが笑った。

「好きと一言で言っても、色々あるがの」

「子供相手に変なこと言わないでください」

慌ててあかねはなよの言葉を遮ると大きく溜息をつく。

「あかねは幸お姉さんのお手伝いが、ちょっとでもできれば、それで幸せなんです」

なよは紅茶を一口啜り、呟いた。

「鬼紙家の孫娘、鬼紙老には溺愛され、うまく立ち回れば、権力も財貨も手中にできるというのにのう」

「起きて半畳、寝て一畳。衣食住も足る、衣は黒さんと白さんのお下がりをお願いして、食はあさぎ姉さんが作ってくださる、充分です。意地悪なお姉様もお一人いらっしゃいますが、まっ、すべてが幸せでは心が腐りますから、少しぐらい、頭を悩ます相手がいるくらいの方が緊張感もあってちょうど良いかも知れませんね」

「言いおるわい」

にかっとう嬉しそうになよが笑った。

「はっきりと言い返す奴がおるのは楽しいのう、わくわくするわい」

三毛が慌てて言った。

「なよ姉さんも喧嘩はだめだよ」

「三毛。喧嘩はせんよ、する理由がない。なんというかな、あかねの減らず口は楽しい。特にわしはな、ここの娘になるまで、わしに逆ろう者など一人もなかった。わしの言うことは、すべて仰せのままに、というやつじゃ。対等に喋ってくれる者がおらんというのは存外寂しいものよ」  
なよは満足げに笑みを浮かべた。

「しかし、あかね。たまには実家の母親にも顔を見せてやれよ。随分、実家には戻ってもらんじやろう」

「弟が生まれたので、あかねはお役御免です。自由の身ですから」

「なんとまあ、頑なじゃのう。幸が元気になれば、あかねにたまには実家に顔を見せるよう進言せよと言っておこう。幸もえらくお節介なところがあるからな、楽しみじゃ」

「それは」

あかねが抗議を仕掛けた瞬間、なよは視線を鋭く道向こうへと向けた。

「三毛。お前のおばあ様がなにやらいらっしゃるぞ」

三毛は驚いて眼を見開くと腰を浮かした。

「何処へ行く」

「幸母さんのところへ」

息ができないかのように、小さく呟く。

「まあ、急くな。ここに居れ。大事なお前のおばあ様ではないか」  
なよが笑う、三毛は覚悟を決めたようにじっと俯いた。

「知尋ちゃん、開けてちょうだい。あの娘、どうかしらね」

白澤の声が門扉の向こうから響いた。

なよは立ち上がると、門扉のこちら側に立った。

驚いて、白澤が声を失った。真ん丸に眼を見開いて、茫然となよを見ていたが、引き絞るように声を上げた。

「かぐやのなよ竹の姫。何故、お前がここに居る」

なよは柔らかに笑みを浮かべると、かぶりを振った。

「長女のなよ子と申します。良く、その方とは間違えられるので困っています」

淑やかに小首を傾げた。

「愚弄する気か。なよ竹の姫」

白澤が間合いを開け、叫んだ。

なよはその表情のまま、両腕を組んだ。

「先日は見逃してくれて助かったぞ、白澤猫。さすがのわしもお前にはかなわんからな」

「何故、お前がいるんだ」

「言うたであろう。長女、つまりは幸の姉になった。わしも良い妹が出来て嬉しいわい」  
可々大笑となよが笑った。

「三毛。何故、報告せん」

白澤が俯いたままの三毛に怒鳴った。縮こまるように三毛が小さくなる。

「おいおい。わしの妹の娘、可愛いわしの姪を怒鳴らないでくれ」

嬉しくて仕方がないとなよが笑った。

白澤が両腕を振り上げる。

「おや、白澤猫。いいのかえ、この結界を破っても」

「何が言いたい」

「簡単なこと。お主ならこの結界を破ることも出来るであろう。しかし、いいかのな。それは、この結界を作り出した者を敵に回すということじゃぞ。つまり、わしの父さんをじゃ」

にたっと笑みを浮かべ、言葉を続けた。

「わしの父さんは、子供の頃、お主に育ててもらった。じゃから、敵とまではならんじゃろうが。幸がのう」

「何が言いたいのだ、はっきり言え」

「幸はこれを機会に本家とは絶縁してくれと言うじゃろうな、わしらのお父さんにな。となると、活躍している本家の精鋭は困るじゃろうな。間違いなく奴らは本家についてくれるかのう、はてさて、難しいことじゃ」

「減らず口め」

なよは白澤をなだめるように言った。

「お主が私淑する本家初代の顔を見、言葉を交わした者も、今はわしとお前の二人だけじゃ。いつか、月でも愛でながら、昔話に酒を交わそうではないか。な、白澤」

なよが寂しげに笑みを浮かべた。

「知りたいのは鍾馗の長の娘のことじゃろう。見事に育ておるよ」

白澤は手を降ろすと、言葉を探すように俯いたが、顔を上げると、大きく息を吸い、そして吐いた。

「出直す」

すっと溶けるように白澤の姿が消えた。

「行ったな」

なよは呟くと、大きく息を吐いた。

「白澤は結界越しでも迫力があるのう。びびった、びびった」

なよは笑うと、椅子に戻った。

そして、俯いたままの三毛を拳でぐいっと押す。にいと笑った。

「わしが白澤の立場なら、こう言っておるじゃろうな。逐一報告せよ、逆らえば、猫に戻してしまうぞ、とな」

ぴくんと三毛の肩が震えた。

「黒はそんなことを言われれば、白澤が言い終わるまでに、走りだして幸に泣きつくじゃろう。白は真面目に頷きはするが、それだけじゃな、次の日には忘れておる。三毛、お前は真面目すぎるからな。多分、逆らえば、黒や白も猫に戻してしまうぞと脅されたな」

三毛が小さく頷いた。

「そんな酷いこと」

あかねが呟いた。

「白澤は別に悪人ではない。本家の隆盛しか考えておらんというだけのことじゃ」

なよは右腕で三毛の肩をしっかりと抱くと囁くように言った。

「言うたであろう。三毛、お前は既に人じゃ、いかな白澤でもお前達三人を猫に戻すなどできんよ」

三毛はなよにしがみつくと、そのまま、なよの胸に顔をうずめた。漏れ聞こえる泣き声。

自然とあかねが三毛の頭を撫でていた。

「怖かったですでしょう、大変だったね」

あかねが呟く。

ほっと息を漏らすと、あかねは椅子に座り直し、門扉を通して外を眺める。

ここは本当にシェルターだと改めて思う。

「結局、白澤さんは何をしに来たのやら」

なよが三毛を両腕で抱き締めたまま、顔を上げる。

「わしは鍾馗の親、つまり、漣の父親を古くから知って居る。娘思いの男じゃ。おおかた、漣をこのまま、ここに住ませたいと言いだし、話が違うと白澤は慌てたのじゃろう」



「漣さんは女の子ですし、戦線に戻したくないのは、父親として不思議はないでしょうに」

「白澤は幸の術を取り込みたい。そのために漣に術を習わせ、それをまた、本家の精鋭に覚えさせようと思っておるのじゃろう。幸の術は、独自に発展させ、随分と特殊なものになっておるからな」

「それはだめです」

あかねが慌てて言った。

「幸姉さんのような術師が他にも現れたら、世界そのものが滅してしまいます」

なよは三毛の背中をやわらかく叩きながら、思案気に俯いた

「幸は世界を制することもできるじゃろう、それをあやつがせぬのは父さんがおり、皆がおるこの生活がもっとも大切じゃからじゃ。そういうしばりのない、幸と同等の力を持つ者が現れれば大変じゃのう。口喧嘩で世界が滅びるぞ」

「幸母さんは大丈夫だよ」

三毛が泣き濡れた瞳のまま、顔を上げた。

「だって三毛の母さんだもの」

なよは満足そうに笑みを浮かべた。

「そうじゃな。そして賢明なるわしの妹でもある」

「あかねのお姉さんでもあります」

あかねも言葉を重ねた。

「まっ・・・」

なよは三毛から両手を離すと、少し冷めた紅茶を一口、含んだ。

「幸の術は、幸以外に教えることは出来ん。その術をいくらかでも使えるようになったとしてもな。仮に、まったく、他のところから幸と同等の力を持つ者が現れたとしても、それはわしらが心配してもせんないことじゃ」

なよは三毛を目の前に立たせると、いたずらげに笑った。

「三毛。お前の肩には世界の命運がかかっておるぞ。何しろ、幸の娘じゃからなあ」

「は、はいっ」

なよは笑うと、三毛の頭を軽くはたく。

「三毛は真面目すぎじゃ。素直に、はいなど言うでないわ」

「三毛さんがなよ姉さんようになってしまっは可愛そうです」

あかねが三毛に言った。

「三毛さん。なよ姉さんは反面教師です。なよ姉さんの言うことは、拗ねない程度に七割、聞き流すのがいいですよ」

あかねは立ち上がると、紅茶のポットに触れる。

「冷めてしまったようです、三毛さん、いいですか」

三毛はあたふた顔くと、ポットを抱えた。

「ありがと。あかねちゃん」

「戻ってこなくて大丈夫ですよ、あさぎ姉さんのお手伝いをしてください」

あかねが笑みを浮かべるのを、こくこく頷き、三毛があさぎの元へと走って行った。

ほっと吐息を漏らすと、あかねはなよを睨んだ。

「なよ姉さんは困った方です」

「仕方あるまい。真面目な奴は面白いからのう」

「度が過ぎると小夜乃さんに言いつけますよ」

「それは勘弁してくれ、あやつは真面目は真面目でも、どの付く真面目じゃ。命を懸けて真面目を通されれば、太刀打ちできんわ」

なよは不思議と嬉しそうに笑みを浮かべると、少し冷めた紅茶を飲み干した。

「あ、あのね。あさぎ姉さん」

「どうしたの」

三毛はそっとあさぎに紅茶のポットを差しだした。三毛はあさぎにポットを持って行ってほしいと言いかけたが、戸惑い、口を閉ざしてしまった。

代わりに行ってほしいけれど、それはだめ。三毛は笑みを浮かべると、あさぎに言った。

「あたっかい紅茶をお願いします。持って行きたいから」

三毛の言葉が終わった瞬間、なよが飛ぶように速く駆け抜けた。あかねがその後ろで叫ぶ。

「梅林練習場、お父さんが落ちて来ます」

あかねも返事を待つことなく駆け抜ける。追うように三毛とあさぎが走った。

まさしく一陣の風、なよは梅林にたどり着くと空を見上げた。青く澄み渡る空の高み、一点をなよが睨みつけた。

「空を飛べるのは幸のみ、ならば仕方ない。刃帯儀」

唸るようになよが呟く。なよが右手から一本の帯を地面に向かって放った。鋭く先端は地面に突き刺さると、長く伸び、なよを空へと押し上げる。速度を上げ、風を切る。

一步、遅れてあかねは梅林にたどり着くと空を見上げた。

点でしか見えないが、背中でなよ姉さんが、落ちて来た父さんを支えているのだろう

刃帯儀が鋼のように地面から伸びている。

「あかねちゃん」

黒が慌ててやって来た。

「幸母さんが消えちゃった」

「上です」

あかねが空を見上げたまま、鋭く答える。

「上って」

「そうだ。花魁道中の儀は何処へでも行けたはず。黒さん、三毛さんに毛布を持って来させなさい」

「は、はい」

黒があかねの鋭さに気圧されて頷いた。

あかねが大声で怒鳴る。

「白さん、来い」

うわ、わわっとたたらを踏んで、白が掛けて来た。三毛も毛布を両手に持ってくる。

「白さん、花魁道中の儀。発動しなさい」

一瞬で状況を把握した白が叫んだ。

「花魁道中の儀 発」

黒と三毛が毛布の前後をしっかりと掴む。

「白さん、黒さん、三毛さん。毛布を御輿と見立て奉れ。かぐやのなよ竹の姫をお迎えに参りなさい」

「しゃん」

黒が叫んだ。

そして、黒と三毛がしゃんしゃんと鈴の音を模し大声で叫ぶ、そして、白の後をついて消えて行く。

「あかねちゃん」

あさぎが転ぶように走って来た。

「どうなっているの」

息も絶え絶えに言う。あかねが空を指さした。

「あの黒い点です。あ、黒さんと三毛さんが掴んだ毛布にお父さん、幸姉さんなよ姉さんが載っています」

「どうして、そんな」

「とにかく落下加速度を減衰させながら降りてこなければなりません」

黒い点が大きく螺旋に巡り出した。

「あさぎ姉さん、みんながここにうまく着地しなければなりません。ここからみんなを呼んでください」

「う、うん。わかった」

あさぎが頷いた時、小夜乃と漣もやって来た。

「小夜乃ちゃん、あさぎ姉さんと、ここからみんなを呼びなさい。漣はあたしと一緒に来い。ありったけの布団をここに運ぶんだ」

あかねが自分をあたしと呼んだ瞬間、鬼気迫る迫力で漣の手を掴むとあかねは家に向かった飛ぶように駆け出した。

あかねと漣、山のように布団を積み上げ、上空を見上げる。あさぎと小夜乃がおおい、おおいと叫ぶ。

白さんがうまく先導している、あかねが布団の山の上に立ち上がった。

完全に速度を押しえ切れてはいない、でも、充分だ。あかねが思いっきり両腕を広げる。

白が完全に速度を落とせずにあかねに飛び込んだ、あかねは白を含み込むように体全体で受け止め、二人、地面に転がる、慌てて、布団を見ると、うまく三人を乗せた毛布が布団の上に載っていた。

もぞもぞと毛布がうごめき、一番下になっていたなよが飛び出した、布団から転げ落ちたが、うまく着地すると同時に、布団を駆け登り毛布の中を見る。

毛布には首から下が血だらけになった男とそれを庇うようにしがみついた幸の姿があった。

微かな歌声、幸だ、これは言祝ぎの歌、呪（まじな）いの歌。

「黒、三毛。このまま、父さんを家に連れて行け」

なよが叫ぶと、慌てて二人は布団の山から毛布を支えたまま降りた。

「小夜乃、漣も毛布を支えろ」

返事をする間もなく、二人が毛布を支えた。

「つまずくなよ。倒れれば、父さんの首から下が・・・」

なよが言いかけてやめた。

「早く行け」

なよの言葉に四人が急いだ。

あかねは白に肩を貸し、立ち上がった。

「白さん、お疲れさま」

「お父さん、大変だよ、血だらけになっていたよ」

「幸姉さんがいるのだから大丈夫です」

あかねは言い切ると、ぎゅっと白を抱き締めた。あかね自身も不安にさいなまされていたが、大丈夫だと言葉を発することで、自分自身を支えていたのだった。

「あかね、白。お前達も行って来い」

なよが二人に声を掛けた。

「父さんの術は無の術。無術と呼ばれておる。呪文を唱えずとも、思念だけで実現させる強い術じゃ。お前達二人も幸を通していくらかは無術を身につけておる。父さんの近くで元気になりますようにと強く念じてやれ」

二人がうなずき駆け出したのを見ると、なよはほっと吐息を漏らして、胡座をかいた。

あさぎがその横にしゃがむ。

「なよ姉さん、大丈夫ですか、随分、疲れているようです」

「ん。ああ、わしも一メートルくらいは浮遊することができるが、あんな高くまで駆け上がったのは初めてじゃ。思い返すと、足がすくむわい」

なよが振り返り布団を見る。

「指図したのはあかねか」

「はい。てきぱきとしてかっこ良かったですよ」

あさぎもほっとしたのか、表情がほころんだ。

「であろうな。本来、あやつは人の上に立って、統治する側の人間じゃ。鬼紙家も、息子ではなく、あかねが継げば、今以上に巨大な勢力になるじゃろう。もっとも、本人は幸の妹としてここに暮らすのが嬉しくて仕方のないようじゃがな」

「あかねちゃんが」

「才能の無駄遣いじゃが、本人が幸せならばそれで良いわ」

なよがゆっくりと立ち上がる、慌てて、あさぎが支えた。

「まだ、一仕事が残っておるが、腹が減った。あさぎ、ちょっと贅沢で旨いもの、用意しておろうな」

「はい。でも、お父さんが」

「わしが食う。父さんは当分、食えんじやろう。食えるようになったら、また、改めて作れ」  
なよが気分を変えるように笑った。

異形漣 四話

血だらけになった男を仰向けに寝かせ、幸は豊饒の歌を囁きながら、その体に両手を入れる、男の体は液体になったかのようにその両手を受け入れていく。

一心不乱になった幸の表情は深く沈み、窓からの月明かりだけが幸の横顔を照らす。

大丈夫だよ、お父さん。

「入っていいか」

襖の向こうからなよが声をかけた。

「どうぞ」

幸が呟くように答える。なよは静かに入ると、後ろ手に襖を閉める。

そのまま、男の椅子に腰掛けると男を見つめた。

「深く眠っているようじゃな」

「うん。今のうちに切れた体をすべて繋ぐよ」

「幸。お前のその手はいったいどうなっておるのか、わしにすらわからんわい」

幸は少し大人びた笑みを目許に浮かべ、しかし、すぐに表情を消すと、その動きに専念した。なよはふと暗がりの中、幸が成長しているのに気が付いた。黒、か、黒よりも少し年上の女の子に幸が成長していた。

「なんともはや、面白い妹じゃ」

なよは呟くと、窓から空を見上げた。少しふっくらした上弦の月。

「姉として、ちいとは手伝うてやろう」

なよが両手を月に向け、搦め捕るように指を動かす。白く輝く糸、月の光は紡ぎ上げられ、一本の糸となって足元を巡っていく。

糸が伸び、幸と男を白く淡く光で包み込んで行く。

「父さん、少し楽そうだ。ありがとう、なよ姉さん」

「わしとて、元は月人。この程度の芸当はできるわい。そう言えば、父さんも月の光を治癒に使うておったな。いくらか月人の血が父さんにも流れているのかもしれないな」

「かもしれないね」

幸が手を休めないまま、答えた。

「本家の先々代につれ去られて来た赤ん坊が父さんだ。出生の秘密を知っている先々代は出生のこと、一つもあかさず亡くなってしまった」

「少しくらい話せば良いのにのう」

「何か理由があったんだらうな。でも、幸にはどうでもいいこと、父さんは父さんだもの」  
なよは穏やかに笑みを浮かべ、立ち上がった。

「皆が心配して、父さんに元気になってくれと祈っておる。代表して、わしが覗きにきたわけじゃ」

「大丈夫と伝えてください」

「承知した」

なよは答えると、襖を開け、入って来た時のように静かに襖を閉めた。

「なよ姉さん、どうだった・・・」

黒が心配げに顔を上げた。黒は沈んで、今にも泣き出しそうになっている。他の者も俯き肩を落としていた。

なよは、黒を心配がらせて楽しもうと思っていたが、その黒の様子に軽口を嚙んだ。

「大丈夫。幸がそう言っておった」

黒は笑みを浮かべると、腰が抜けたように仰向けに倒れてしまった。

「なんじゃ、どうした、黒」

「なんだか、力が抜けて」

仰向けになったまま、涙を流す。笑顔を浮かべたまま、黒が涙を流した。

「良かった」

なよは足先で黒の脇腹を小突くと、呆れたように笑った。

「黒。今晚はゆっくり眠れ、その間の抜けた顔のままな」

なよはあさぎに向き直ると声を掛けた。

「あさぎ。ご飯が残っておったろう、夜食じゃ、おむすびを作ってくれ。腹が減ったわい」

「はい。すぐに作って来ます」

あさぎも安心したのか元気に答えた。白と三毛も元気に立ち上がると、あさぎについて台所へ向かった。黒もばたばたと立ち上がる。

「食べる、黒も夜食食べるよ」

「黒。お前も手伝って来い」

「う、うん」

黒の走って行くのを小夜乃はほっとした笑顔で眺めた。

「なよ母様」

「どうした、小夜乃」

「今の母様は百点満点です」

「生意気言うでないわい」

なよがくすぐったそうに笑った。

「さて。あかね、漣」

「はい」

「徹夜になるぞ。交替で祈れば、幸の助けになるからな」

なよは漣を見て言った。

「漣は知らんじゃろうが、ま、師匠の親じゃ、一緒に祈ってくれ」

「みんな、寝ちゃったよ。なよ姉さんまでぐっすり」

幸は寝ている男の耳元に顔を寄せ、囁いた。

「疲れたんだろうね」

男はまったく反応せず、目を閉ざしたままだった。口元に指先を近づけると、微かに呼吸をしているのがわかる。

「お父さんがいない間、鍾馗の一族のね、女の子を預かったよ」

反応のない男に幸はひたすら言葉を掛け続けていた。

「真っすぐな子だった。術を授けてやって欲しいってねことだった。だからね、教えているよ、もうすぐ黒に近づくとと思う」

そっと幸は男の頬に手を添えた。

「お父さん、幸は元の姿までは戻れなかったけど、多分、お父さんと初めて会った時くらいまでには成長したよ。いままで、せっかく、育ててくれたのにまた小さくなってごめんね。もう一度、幸を育ててね、でも、二回目だもの、幸は前よりしっかりしたよ。自分を見失って泣いたりしないよ」

幸は月明かりの中、男をじっと見つめた。

「お願いします、お父さん。目を覚ましてください」

幸の瞳から大粒の涙がこぼれた。

「もう一度、お父さんの声が聴きたいよ、一緒に笑いたいんだよ、お父さん」

幸が瞬きもせず、男の顔を見つめる。

微かに男の口元が動く。男が小さく幸と呟いた。

「お父さん」

男はゆっくりと目を開くと、幸を見つめて微かに笑みを浮かべた。

「幸、ありがとう」

男は一言発するだけでも体力を大きく消耗してしまうのだろう、目をつぶる、でも、微かに笑みを浮かべた。

幸は男の手を両手でしっかり握った。

「幸の手は小さくて華奢なのに、あったかくて、力強くて、なんだか安心してしまうよ」

男が目を瞑ったまま笑う。

「お父さん。お帰りなさい」

幸は涙で声にならない声をしゃくり上げる。

「ただいま」

男は小さな声でゆっくりと答えた。

白に車椅子を押され、男は漣に稽古をつける幸の姿を眺めていた。

この車椅子は元々佳奈のお祖母さんが使っていたらしい、黒が思い出して借りて来たのだった。

白はうっとりこの現状を受け入れていた、父を看護するために医師となった私、父をひたすら



支えながら、生きて行くことを選んだのだ。ああ、なんて、健気なのであろう。

「なあ、白。父さんね、車椅子は無しでいいよ」

「だめです」

「困ったねえ」

男は少し笑うと、車椅子に背を預けた。

まだ、歩くには充分でないが、どうも、人が背中に居るのは落ち着かない。松葉杖なら歩けるだろう。

「幸母さんから二日間は歩かせてはだめって言われています」

男の考えを察したように白が言う、仕方なさそうに男は笑みを浮かべた。

「厳しい主治医だなあ」

男が帰って来た次の朝のことだった。

漣は無の話の子供の頃から聞かされていた、小さな子供の頃は、いたずらをするとうちに連れ去られてしまうぞとか、頭からむしゃむしゃ食べられてしまうぞと脅されたものだった。だから、いま、こうして車椅子に背を預け、笑みを浮かべている男がその無であることが信じ切れずにいた。

でも、幸師匠の父なら凄い能力者なのかもしれない。

ふと男は漣の視線に気づくと、声を掛けた。

「君が漣だね。昔、鍾馗の国に行ったことがあるよ。ちょうど、君が生まれて、国はお祭り騒ぎだった」

「それじゃ、お父さん。漣ちゃんの本当の名前を知っているんですか」

驚いて、白が男に訊ねた。

「漣じゃないのかい。さんずい偏のさざなみという漢字だ」

驚いて、白が漣を見つめた。

「なよも知っているだろう。当時、なよたけの姫の特使もお祝いに駆けつけていたからね」

漣は戸惑いながら白に打ち明けた。

「始め、術師の方に名前を知られるのが怖くて名乗らなかったのですが」

「術師に本当の名前を知られるのは危険だし。でも、そういうことは」

白が男に振り返った。

「うひゃあ。凄いですよ、お父さん」

「ん、どういうことだ」

「白は初めて漣ちゃんに会った時に、漣という呼び名を思いついたんです。あ、幸母さんも知っていたんですね」

幸は振り返るとにかっと笑った。

「知ってたよ」

「もう、幸母さんってば。早く教えてください」

白が興奮して、漣の手を握り締めた。

「漣ちゃんと白は縁があります。これからも友達です、いいえ、姉妹ですよ」

漣が照れたように笑みを浮かべた。

「これからもよろしく。白さん」

白はとびきり上等の笑顔を浮かべた。

「さて。そろそろ、漣を返してくれ。まだ、修行の途中だ」

「わかりました。お父さん、家に戻りますよ」

白が男の車椅子を押す。

「あ、あのね。お父さん」

幸が男に声をかけた。男が振り返ると、幸がそっと笑みを浮かべた。

「お父さん。二日間は無理しないで幸の言うこと、聴いてね。無理しちゃだよ、ね」

男は頷くと、少しいたずらげに笑った。

「心配してくれてありがとう」

幸は思わず駆け出すと、男を抱き締めた。

「お父さん。帰ってきてくれてありがとう」

幸の声が震えていた。

「幸は柔らかくて、暖かいな」

男がそっと呟いた。

男が家に戻った後も、幸は男を見送っていたが、漣を思い出し、振り返った。

「悪いな、漣。漣が自分の父さんを思い出して悲しくならないようにと、お父さんに甘えるの我慢していたんだけどな。なんだかさ、お父さんでもう頭の中がいっぱいになってしまっさ」

「あ、あの。いいえ。私はまだいっぱい覚えなきゃならないことがありますし。それに、父さんのこと、好きですけど、それほどには」

異形漣 五話

各駅停車の電車、七人がけの椅子の中程に、漣、その両脇を幸とあかねが座った。

約束の日の一日前の朝、三人は本家へと向かっていた。

「幸姉さん。漣さんを返すのは明日なのに、どうして」

「明日じゃ、間に合わないからね」

幸は本家の方角を眺めると、にいっと笑った。

「相変わらずの当主だなあ」

恐縮したように漣が言った。

「幸師匠。こんなにしてまでいただき、申し訳ありません」

幸は気楽に笑うと背もたれに背を預けた。

「本家の不手際だ。幸はこれでも当主の姪だからな」

あかねが不思議そうな顔をした。

「あのおっさん。なにかしでかしたのですか」

「した」

幸は一言言うと、目を瞑った。

「奴に本家の当主は荷が重すぎる。庇って来た白澤も今度ばかりは決心しただろう」

「本家はどうなるのでしょうか」

「大奥には当主の血を継いだ子供が何人かいる。どれかが新しい当主になるだろうな」

駅に着く、三人は降りると、ホームに立ち止まった。

「次を見送って、その次の列車に乗って、二つ先の駅、それを降りて歩けば、本家への道に繋がる」

あかねが列車の時刻表を見る。

「三十分ぐらいです」

幸は頷くと、漣を見つめた。

「漣。たくさんの術師が鬼からこの国を護っていた。大小合わせれば千の組織があるだろう。中でも本家は群を抜いた術師集団だった。そして、もう一つ。数年前に結成された組織がある。政府主導で自衛官と警察官から選ばれ、結成した組織だ。奴らは最新のITと忍術、呪術を使う。こういった組織がこの国を鬼から護ることになっているんだ。でも、この国の政治家や官僚が鬼に籠絡されたこともあり、うまく機能していない」

漣が目を見開いて頷いた。

「どうですか、幸姉さん」

あかねが囁いた。

三人の前には十人の黒服が囲むように並んでいた。

幸は男達に柔らかな笑みを浮かべると、目の前の男に話しかけた。

「おじさま。何か御用事ですか」

「お嬢さん。鍾馗のお姫様に用事があるのです。少し、よろしいかな」

幸は淑やかに首を横に振った。

「私には無事、姫様をお連れする役目がございます。ですから、お連れする以外のこと、一切、受け入れることは出来ません。ごめんなさい、おじさま」

男がにこやかに笑った。

「それは困りましたな。私共も上から、鍾馗のお姫様を保護せよと命を受けておるのですよ」

幸が意を得たと、笑みを浮かべた。

「大丈夫です。私と妹がしっかり姫様を保護しております。鬼にだって、指一本、触れさせはしませんわ」

「はは、しっかりしたお嬢さんだ」

漣が気づいた。幸は術を使っているわけではない、笑顔と言葉だけで、目の前の男を籠絡している。

「おじさま、お名前、なんておっしゃるの」

「おじさんかい。田中、田中啓一郎っていうんだよ」

「た、隊長」

本当に本名を名乗ってしまった男に回りの男達がどよめいた。

「他の方たちは啓一郎様の部下なのですか」

「そうだよ。五木、長尾、斎藤。それから、大西、木村、清水、坂上、村田に、岡田」  
なんの抵抗もなく、男が答えた。

「どうしたんですか。隊長、しっかりしてください」

幸はにいと目を細めると、微かに漣に向かって頷いた。

「隊長、その女は危険です」

ずっと、幸は言葉を荒げた男の目許を見つめ囁いた。

「五木さま、そんな怖い顔、なさらないでくださいな。もしも、失礼があったのなら、謝ります」

「いや、あ、あの、いいえ」

五木が幸の眼差しに、狼狽し口ごもった。

「あ、あの、僕は」

「五木さまは隊長の右腕として、この隊を支えていらっしゃる方、その御苦労、わかりますわ」  
幸の言葉が触手のように、五木の心の中の、弱い部分に纏い付く。

五分も経たないうちに、十人共、まるで催眠術にでも掛ってしまったように、木偶の坊の如く突っ立っていた。

「皆様。これからもこの国を鬼から護ってくださいませね。皆様だけが頼りなのです。たとえ、回りの人達が鬼に与しても、皆様なら、きっと、この国を鬼から護ることができます」

幸が囁きかけると、男達が我勝ちに頷く。

一本目の電車が来る、ドアが開いた。

「おじさま、早くお乗りください。終点までゆっくりしてくださいませね」

十人の男達が何のためらいもなく、電車に乗り込んだ。ドアが閉まり、列車が動き出す。

淑やかに幸は腕を振り、列車を見送った。

「て、ことで。反乱の種を蒔いてみた。なんか、男は単純だな」

幸は気楽に笑うと、漣に言った。

「奴らは自衛隊の特殊部隊だ。ただ、自衛隊の一部は鬼の側に付いている。奴ら自身は知らないようだけれど、付いて行ったら鬼の巣窟直行だ。ま、その方が楽しいけれどな」

「凄いです、幸師匠」

憧れの眼差しで漣が幸を見つめた。

「考えてみたら、笑顔ほど凄い武器はないかもしれないな」

幸は笑うと漣にそう言った。

「さて、漣、あかねちゃん。次の電車を待とうかと思ったけど、方違えすっ飛ばして、本家へ直行だ」

幸は二人の手をしっかりと握ると笑った。

「飛ばすぜ。手を離すなよ」

あかねが屈んで大きく息をついた。隣りで、漣も地面に尻餅をついて足を投げ出していた。

結界もなにもあったものじゃない。空間を強引に繋ぎ、本家まで突入したのだ。

本家の領域は入り口と白鷺城を模した城の間を湖が寝そべり、その城を越えた向こうが町となっていた。着ている服装は洋装だが、町並みは映画に出て来る時代劇の宿場町のようなものだ。これは先々代の考えにより、建物の建築に強い制限を施していたからだ。

三人は堀端の少し陰になって目立たないところに到着した。

「さてと。少し、時間に余裕ができたし、かのかに先に会うかな」

幸が二人を見下ろす。二人は座り込んで肩を揺らし、大きく息をしていた。

「鼻から吸って、口から息を出す。そうすれば、体に酸素が行き渡る」

「ゆ、幸姉さんはどうして平気なんですか」

少し、体が楽になったのか、あかねが尋ねた。

「うーん、お父さんへの愛かな」

「いえ。もう、そう云うの、いいですから」

あかねがぱたぱたと手を振り答えた。

「幸姉さんのお父さん話を聞いていたら、日が暮れます」

「日暮れどころか、徹夜で喋りつづけるよ」

幸は笑うと、辺りを見渡した。

「知り合いのうどん屋さんがあるんだ。そこで休もう」

暖簾をくぐる、テーブル四つに、カウンター席の小さな店だ。幸いにも先客はなく、三人はテーブルについた。

「なんにする」

幸が尋ねた。

「ハイカラ定食。でも、ご飯はきついでしょか」

あかねが言った。

「鬼とこれから戦うことになるからね。お腹減って動けないのは哀しすぎるな」

幸が笑った。

「あ、あの。ここ、本家の城下町ですよ。鬼って」

漣が驚いて幸に言った。幸はにっと笑うと、漣に言った。

「本家の現当主はスカだ。今度は白澤も決心を固めただろう。漣は天ぷら定食、しっかり食え。」

幸はおぼろにするかな」

幸は調理場に向き直ると声をかけた。

「お願いします」

「ごめんなさい、いま、伺います」

奥からの店員の声が響いた。

「ごめんなさい。大将が出前に出ているものですから。うわっ、幸じゃねえか」

その瞬間、店員の右手に自在が現れた。

「くらえ」

店員が両手で自在を構え、幸の喉元に突き立てた。幸は軽々と自在の先を掴むと、にいっと笑みを浮かべた。

「かぬか。線がずれているぜ。精鋭の一人として父さんから、自在を学んだんだらう。父さんに恥をかかさないでくれよ」

「やっぱり、幸姉さんは恨まれていましたか」

あかねが溜息をついた。

「ちょっとした、親友同士の挨拶だよ」

幸は手を離すと、かぬかの後ろに回り、抱き締めた。

「かぬか。体調はどうか。しっぽとか生えてないだらうね」

「さ、触るな」

幸の指先が、かぬかの首筋から背骨を通り、お尻に触れた途端、幸があっと呟いた。

幸はふっと何事もなかったようにテーブルに戻った。

「かぬか。ハイカラ定食に天ぷら定食、おぼろうどんをお願いね」

幸は真顔になって言葉を続けた。

「白澤の血は凄いな」

「白澤様を呼び捨てにするな」

「どうしたのですか」

怪訝そうな顔をして、あかねが尋ねた。

「前に白澤と戦った時、白澤の攻撃を避けたら、それがかぬかに当たって、お腹の辺りで真二つに切れた、白澤は守り神みたいなものだからな、慌てて、治療したんだけど、その時、自分の血を使ったんだ」

「死んだ猫でも生き返らせて、猫又に生まれ変わらせるという」

あかねが言葉を続けた。

「尾てい骨には尻尾の名残がある。一番、変化し易かったのかなあ」

深刻な顔をして、幸が吐息を漏らした。

「な、なんだよ、幸」

「来い、かぬか」

幸の言葉に、恐る恐るかぬかが幸の隣りに立った。幸は無造作に立ち上がると、右手をかぬかの頭の中に入れた。

「脳下垂体が指令を出している。うーん、構成しなおしておくかな」

幸がかぬかの頭の中から手を抜き出した、全く血は付いていないし、傷口もなかった。

「かぬか、視界が変になってふらつくことがあっただろう」

「ああ、あった」

「もう、大丈夫だ。普通に生活ができるよ」

「あ、あの・・・」

「ん」

「ありがとう」

「どう致しまして」

幸がにっと笑う。

「うどん、つくってくるよ」

かぬかが調理場へと戻った。

「白澤は悪い奴じゃないけど、優先順位がはっきりしているからなあ」

「どういうことです」

あかねが尋ねた。

「かぬかは、ほっとけば、大きな猫になってしまうところだった。白澤はお家が大事で、かぬかのことはたいして気に留めてないってことだ。本当のところ、かぬかもそれを察していたんだろうけどな」

「やるせない話ですね」

幸は頷くと、視線を落とし俯いた。

「おや、お客さんかい。いらっしゃい」

外から、威勢の良い声が聞こえた。

「お母さん、お久しぶり」

ついと幸は顔を上げると、声の主に笑みを浮かべた。

「あれ、幸様。ひゃあ、ようこそお越しくございました」

「様は勘弁してくださいよお」

「いやいや。御当主の姪御様に失礼があってはならないよ」

幸は女将に近寄ると、嬉しげに笑みを浮かべた。

「お母さんもお元気そうでなによりです」

小声で漣があかねに尋ねた。

「あの、お母さんって」

「幸姉さんはあの年頃の女性をお母さんと呼んで、甘え込む特技の持ち主です」

「うわあ、なるほど。お母さん、めろめろですね」

漣が納得したと相槌を打つ。

「お母さん、皆さんはお元気」

「亭主はお城に上がって、週に一度しか帰ってこないけれど、息子も娘も面倒臭いくらい元気で生意気だよ」

「もうだめですよ。大事なお子さんをそんなに言っでは」

幸は笑うと、ぎゅっと女の手を両手で握った。

「でも、ご亭主様があまりお帰りにならないのはお可哀想。通いになりますよう、叔父に進言致しましょうか」

「とんでもない」

女がぱたぱたと手を振った。

「亭主なんざ鬱陶しいよ、月に一日でいいくらいさ」

「ま、母さんたら」

幸はいたずらげに笑みを浮かべ、女に抱き着いた。

「母さんは言葉が悪いですよ。でも、幸は母さんの言葉にとっても優しさがあること、わかっています」

自然に女は幸の頭を優しく撫でると、吐息を漏らす。

「なんて良い娘なんだろうね」

「母さんの娘さんほどではありませんけど」

幸はにっと笑う。

「おまたせ」

かぬかが料理を運んで来た。

「ありがとう、かぬか」

幸は存分に笑顔を女に見せると、テーブルに戻った。

そして、女に聞こえよがしに、かぬかに言う。

「それで、かぬか。体の調子が悪いなら」



「え。あ、いや」

いきなりの幸の言葉に、かぬかが戸惑って答えた。

幸は女に振り返ると、哀しそうに言った。

「お母さん。かぬか、最近ね。疲れた様子や苦しそうな顔をしてなかったかなあ」

「そういえば」

女はかぬかが調理場の腰掛けにぽつんと座って、泣いているのを思い出した。声をかけるのが躊躇われるような絶望感が漂っていた。

「そうだ、幸様は腕っ節はからっきしだけど、治療は得意だったね」

幸は力強く頷くと、女をじっと見つめた

「母さん、一カ月くらい、かぬかを幸に預けてください。きっと、元気に治すから」

「わかった。かぬかは白澤様からの預かり人だけど。白澤様には」

「大丈夫」

元気に幸が言った。

「白澤さんと幸はとっても仲良しなもの。幸から言っておきます」

あかねがうどんを啜りながら、思わず吹きかけた。

「うわあー」

あかねが小さく呟く。

「凄いですね、幸師匠。自由自在です」

小声で漣もあかねに囁く。

「勉強になるなあ」

あかねが呟いた。

城門の手前まで来た。

「幸、どうする気だ。おばさん達一般市民は単純にお前のことを当主の姪で人畜無害の美人と捉えているけど、警護の一部やあたしら精鋭はお前のことを最凶戦士だって知っている、白澤様と犬猿の仲だってこともな」

「なんだよ。面と向かって悪態を突き合う。お互い、信頼があればこそだよ」

幸は笑い飛ばすと、出入り門に立つ二人の兵に笑みを浮かべた。

「それじゃ、通りますね」

「待て」

慌てて二人の兵が四人を止めた。

「一切の例外なしに城には誰も入れぬようにとの厳命です。たとえ、姪御様でもお入りなることはできません」

幸はその言葉に驚いたようにうずくまってしまった。

「これは、驚かせて申し訳ありません、しかし、御当主様からの厳命により、何人たりと」

「いいえ。私こそ」

消え入るような声で、幸が囁いた。

「ごめんなさい。少し驚いてしまって」

あかねに助けられるように、幸は立ち上がると、申し訳無さそうに二人の兵を見つめた。横から驚いてかぬかも声を上げた。

「それは白澤様の精鋭も入れないということか」

「はっ。今宵夕刻までは通すことならんと直々のお言葉であります」

「いったい、どうなっているんだ」

かぬかは何か嫌な予感を感じ、辺りを見渡す。

そっと、幸は両手を重ね、兵に向かって合掌すると、泣き濡れた瞳で兵を見つめた。

「どうか、お願いでございます。どうしても、叔父に会わねばならないのです」

「し、しかし」

兵が幸の瞳に動揺し、言葉を詰まらせた。

「う、上の者に問い合わせますゆえ、し、しばしお待ちくだ」

幸がすいっと目を細め呟いた。

「あかねちゃん、三十分だ」

あかねの姿が消えた、その瞬間、二人の兵が白目を向き、膝が崩れ、まさしく落ちた。

「美人の願いは即決だ。逡巡しないでくれよな」

幸は倒れた兵の後ろに立つあかねに笑いかけた。

「な、あかねちゃんもそう思うだろう」

「幸姉さん、まんま、たちの悪い悪役ですよ」

「お前、最悪だな」

かぬかも倒れた二人を引きずって端に寄せる。

「わくわくするなあ」

幸が呟いた。

「それで幸姉さん、これからどうします」

「六階建の城。五階の本丸に十体の鬼が控えている、天守閣に鬼が一体。こいつの号令で動くのだろうな。四階には、津崎と弟子が二人、鬼と戦っている。城の者はほとんどが地下に押し込められている。かぬか、精鋭はどうした」

「私以外は出払っている」

「姑息だなあ、当主は。かぬか、地下にほとんどの奴らは閉じ込められている。鬼は二体だけだ。かぬかとあかねちゃんは地下の鬼を倒して上へ来てくれ。幸と漣は四階の津崎を助ける」

「わかった」

かぬかが頷いた。

「それでは幸姉さん、後程」

あかねも頷くと、二人、城内へと駆け出した。

幸は二人を見送ると、漣に言った。

「漣の初めての戦いだ。気合入れて行け」

「はいっ」

「でも、鬼の血をかぶるなよ」

「え」

「ようやく会えた娘が血だらけとは、漣の親父、泡吹いて気絶するからな」

機嫌良さそうに幸は笑うと城内へと歩き出した。

「お手伝い致します」

瞬間、漣は鬼の両肩に後ろから飛び乗ると、両手で鬼の首をぐいっと天地百八十度回転させた。そして、倒れた鬼の左胸を足裏でぐっと押し込む、くぐもった風船の割れた音ができる。心臓を押し潰したのだ。

間合いを読み、対峙していたはずの鬼の惨状を呆気に見る。津崎流薙刀術総帥津崎の目の前に小さな女の子がいた。はて、何処かで見たことがある。

「とりあえず、鬼を潰していきますね」

向かって来た鬼の両足を右の蹴りで払う。鬼の足が膝からあらぬ方向へ曲がり、ずとんと鬼が落ちた。

「津崎の叔母様、お久しぶりです」

幸がいつの間にか津崎の隣りで笑みを浮かべていた。

「お、お前は」

「娘たちがお孫さんにお世話になっています」

鬼が一体、幸に切りかかって来た、巨大な青竜刀を上段に構える。

「動くな」

振り返り、幸が低く呻いた途端、振り下ろそうとする鬼の動きが硬直した。術で止めたのではない、鬼が幸の言葉に恐怖を覚えたのだ。

「そのまま動くな。息もするな」

幸はそう言うと、津崎に笑いかけた。

「ひょっとして叔父からの伝書か何かでいらっしゃったのですか」

津崎は叔父という言葉に、当主の兄が無であり、幸がその娘であることを思い出した。

「至急の用事、子細は直接とあった」

「なるほど。術師の中でもあなた様が一番の頑固者。叔父はあなた様を最初に亡き者にしようとしたのでしょ」

津崎の弟子だろう、女が薙刀で下段からすくい上げるように鬼の正面を切り裂いた。その隣りで、漣が飛び上がり、鬼の顎に手を添え、頭から鬼を落とす。鬼の頭が粉碎した。

「わしを亡き者にな」

「城の者が地下に押しやられ、鬼が跋扈しております。叔父には本家の当主を引退していただくねばなりませんね。私的には引退などと悠長なことは言わず、裏切り者を切り刻みたいところではありますけれど」

幸がにっとならずらげに笑う。後ろで鬼が一体、倒れた、窒息死だ。念のため、漣が頭を踏み潰す。

「師匠。もうこの階には生きた鬼は居りません」

漣が幸に報告をする。

「うん。良い出来だ」

「ありがとうございます」

漣が戸惑う事なく笑みを浮かべた。微かに幸が眉をひそめる。

「あっ。もしや、鍾馗の姫様ではありませんか」

津崎が驚いて言った。

漣が柔らかな笑みを浮かべた。

「お久しぶりでございます。私の方から御挨拶申し上げねばならなかったのですが、鬼をほふるのに忙しくしておりました」

「虫を殺すのすら躊躇いになる、あのお優しい姫様が」

津崎が声を震わせた。

「鬼の軍団に母は殺され、多くの民も殺されました、残った者たちも国を追いやられ、今は本家に身を寄せる有り様。姫と親しんでくれた者達に対して私は国を再興する役目がございます」

凜とした眼差しで津崎を見つめた。

津崎はあまりにもものどうしようもなさを目を臥せる。

「責任は取るさ」

幸が小さく呟いた。

階下から、歓声が響いた。

すぐにあかねとかぬかがやって来た。

「地下は解放しました」

あかねが幸に報告する。

「ありがと。それじゃ上に行くかな」

「私はここで解放された皆と城の浄化を進めます」

あかねの言葉に幸が頷いた。

「なんと、鬼紙のお嬢様までこのような危険な場所に」

「お久しぶりです。でも、大丈夫ですよ。だって、精鋭のかぬかさんもいらっしゃいますもの。守ってくださいますから」

「なるほど、そなたが白澤の精鋭か」

津崎がかぬかに言った。

「はいっ」

「このお方は鬼紙老のお孫様じゃ、お優しく、間違っても荒事とは無縁のお方じゃ。どんなことがあっても怪我などさせてはならんぞ」

「は、はあ」

かぬかは戸惑ったが、素直に頷いた。

自分の隣りでもう一体の鬼を片手で投げ飛ばし、天井に激突させた女だ、鬼がまるで自分から飛んで行き、天井にぶつかったようにも見える不思議な技だった。

「かぬかさんがいらっしゃれば、あかねは安全です」

あかねが津崎に向かって微笑んだ。

かぬかとあかね、津崎の弟子二人も浄化のためとどまった。

「お前、凄いな」

かぬかがあかねに言った。

「私ですか」

「ああ」

「かぬかさんの方が凄いですよ」

にとあかねが笑みを浮かべた。

「え、あ。そ、そうかなあ」

素直に照れるかぬかに、あかねは微笑んだ。

階下から、急な階段を上り、幸が本丸に頭を出した瞬間、大振りの刀が幸の首を薙ぐ。まさに首を払う寸前、一本の細い線が刃を階下から貫き、その動きを止めていた。

幸が放ったなよの術、刃帯儀だ。

幸が飛び上がり、本丸に着地すると、十体の鬼が幸に向かって睨みつけた。

「睨む前に攻撃する、そうすれば、勝てないまでも、ちっとはましな死に方ができたのになあ」

幸は笑うと、呟いた。

「水の結界 五式全」

壁と天井に薄い水の幕が生じた、天井から水が流れ出し、壁を伝う、その水は壁と床の間で消えて行く。微かな瀬音。

「これで騒いでも上には聞こえない」

漣、津崎も登ってきた。

「さてと、この中で一番偉い奴はどれだ」

幸が鬼に向かって声をかけた。無言で睨みつける鬼達。鬼の囲みから、一步、後ろに一体の鬼がいた。随分と、角が長い。

「ああ、後ろに、脅えて隠れているお前だな。少しばかり、話を聞きたい」

「なんだと。俺は隠れているわけではない」

鬼がむきになって、幸の前にやってきた。

「なに、簡単なことだ。何故、お前達は領土を広げようとする。鍾馗の国を滅ぼし、かぐやのなよ竹の姫の国も滅ぼし、また、この国も侵略しようとしている。どうしてそんなことをしようとするんだ。お前達が侵略行動を起こすようになって、ほぼ五年。酒吞童子の一件より、お互い関わらずの取り決めを何故、反故にした」

考えたこともなかったのだろう、鬼は絶句した。他の鬼達も、その目に微かな戸惑いを見せた。

幸はついつと漣に目をやった。

「この子は鍾馗の娘だ、母親を鬼に殺された。私はこの子に、お前達程度なら瞬時に殺すだけの術と覚悟を与えた。どうする、お前達の返答次第では次の瞬間、血まみれになって横たわることになるぞ」

「わからない。上官の指令に従うのみだ」

「馬鹿野郎。その首から上についているのは頭だろう。ガキじゃあるめえし、その足りねえ頭で考えろ」

幸の一喝に、鬼達が腰を抜かし床にへたり込んでしまった。

「手前の命も、赤の他人の命も、同じ大切なものだ。鬼の国に返してやるから、よく考えろ」  
漣音が濁流の音に変わり、その音に飲み込まれるように鬼が消えた。水音が消えた時、鬼の姿も気配もなかった。

漣が小さく舌打ちをする。

「漣」

幸が低く呟いた。

「は、はい」

「お前はまだまだ未熟だ。命を奪うことを目的とするな。命を奪うことを喜びとするな。それをしっかり頭の中に刻み付けておけ」

漣は幸の言葉に気が付いた。もし、あの鬼達を殺していれば、きっと自分は殺人鬼になっていただろう、命を奪うということ自体が喜びとなっていただろう。

「師匠。申し訳ありません」

鍾馗の長と白澤が共に後ろ手に縛られていた。二人は木組みの牢に入れられ、天守閣、一段高みに当主と鬼が笑みを浮かべ座っていた。

「当主。情けない、鬼と手を握るなど、初代に申し訳ないと思いませぬか」

「怒るな、白澤」

当主が機嫌よく言った。

「流れは鬼の側へと向いておる。この国も、そう遠くない未来、鬼と友好条約を結ぶであろう、いや、あの女が邪魔をせずにおれば、とうに結んでおったのじゃ」

当主は幸の顔を思い出したのか、にくしげな表情を浮かべた。

「あの、わけのわからぬ強さ。一体何者だ、本当にわしの姪なのか。まあ、よいわ。今日中にことを済ませば、すべては後の祭りじゃ」

そして、白澤の隣りに後ろ手に縛られている鍾馗を見て笑った。

「まあ、長よ。そういうことじゃ。明日、娘が帰ってくれば会わせてやろう。一月振り、涙の再会じゃ」

「当主殿」

鬼が愉快に声をかける。

「どうも、当主殿は件の女と相性が悪いようですね。下の階には屈強の兵共がおりますぞ。そのような女子供など気にするにありませぬわ」

鬼が自信満々に笑った。

これ程嬉しいことはないと思いを浮かべた幸が当主の背後にゆらりと現れた。白澤が息を飲んだ。その瞬間、当主の体が浮き、畳三畳は充分、飛ばされ転がる。幸が右の蹴り足をじわりと戻した。津崎が階下から飛び出し、素早く鬼に駆け寄ると、その首に刃を当てた。

「動かば斬る」

津崎が鬼を睨み言い放った。

「父上」

漣が転がるように長へ駆け寄り、座敷牢の門を引き抜き、扉を開けた。

「漣。中には入るな、お前程度なら金縛りにあって動けなくなるぞ。長よ、それに白澤。自力で出てくれ」

幸が満足そうに両腕を組み、笑った。

出て来た白澤に幸は近寄ると言った。

「もういいだろう。血統を残したいのなら、あいつの子供が大奥に何人かいたはずだ、まともなのを一人選んで教育しなせや」

ついと転がったままの当主を見る、気絶したままだ。

「腐っても当主だ。引退させて、蟄居させればいい」

白澤が絞り出すように言った。

「助かった。ありがとう、幸」

白澤の言葉に幸が驚いた。

「なんと返せばいいのかな。ま・・・、どういたしまして」

そして、幸は長に笑いかけた。

「あんたの希望は娘の安全なんだろう。ただ、娘はお前を支えたいと考えている。私は娘の思いを優先させた。それなりに術も心構えも教えたつもりだ」

幸が振り返ると津崎が鬼に猿轡を噛まし、繋がった紐を鬼の足指に結び付け、海老反りの姿に仕上げていた。

幸は鬼に近寄ると、その額に触れる、根元から、すっと角が落ちた。そして、その角を踏み潰す。

「こいつは白澤に任せよう。津崎さん、構わないかい」

「ここは本家だ。本家内のことは白澤さんに任せればいい。わしは何も見なかったし、わしの弟子も何も見なかった」

幸は頷くと、白澤に声をかけた。

「ま、そういうことだ。そうだ、白澤、かぬかを、当分、預かる、いいだろう、な」

「ああ、よろしく頼む」

幸がにっと笑った。

「漣。私を姉と思え。そして困った時は呼べ、助けてやる」  
そのまま、何事もなかったように幸と津崎は天守閣を後にした。

四階に戻ると、たくさんの城人が雑巾や箒を手に掃除をしていた。あかねも柱を雑巾でしっかりと拭きあげていた。

「お帰りなさい、幸姉さん。いかがでしたか」

「無事済んだよ」

「なんと。あかねお嬢様、そんな、雑巾がけなど」

驚いて津崎が言った。

「私はなんのお役にも立てません。せめて、お掃除くらいはさせてくださいな」  
あかねが柔らかに笑みを浮かべる。

「できたお嬢様です、感服致しましたぞ」

かぬかが幸に駆け寄って来た。

「精鋭を呼び戻した。すぐにここにもやってくる」

九人の精鋭、頭ひとつ分は確実に背の高い男女が幸を無視して駆け抜けた。

「あいつら・・・」

かぬかが呟いた。

「愛想された方が気色悪いや。漣と長には護髪を結んである、妙なことはさせないさ。そうだ、かぬか」

「ん」

「白澤とは話をつけた。よろしく頼むということだ。ということで、かぬかは今から幸の弟子。師匠を敬えよ」

「お前が師匠ってか」

かぬかが溜息をついた。

「師匠に似て、性格が悪くなってしまうのか、それが不安だ」

かぬかの言葉に嬉しそうに幸が笑った。

「幸とあかねちゃんは二人でしばらく旅に出るから、かぬか、これから荷物を纏めて、うちに向かってくれ。父さんもいるし、黒たちもいる」

「黒に白に三毛。懐かしいな。それは楽しみだ」

幸とあかねは城を出ると、湖の畔までやって来た。

「幸姉さん、旅って」

不思議そうに幸を見上げた。

「ん」

幸がふふと笑みを浮かべた。

「いまはとっても賑やかで楽しい。でも、なんて云うのかな、父さんが仕事に出掛けて、あかねちゃんと二人で留守番していた頃が、なんだか懐かしい。そう思ったらね、あかねちゃんと二人で旅をするのっていいなあってさ。一週間くらい、うろうろしよう。あかねちゃん、いいかな



」

あかねが思い切って幸の手を握った、自然と幸がその手を握り返す。

「幸姉さん、楽しみです」

あかねが満面の笑みを浮かべた。

異形 蛇足 かぬか びびる

本来、術者は行くことができない、正確には術者がなんとなく避けてしまうよう、難しい術が一带に施されている。避けられるかもしれない面倒ごとは、あらかじめ避けるのが賢明だ。

かぬかは駅の改札を降りて、ほっと吐息を漏らした。幸い、かぬかは無の術を少し教わっているため、結界が見逃してくれたのだろう。幸の手書きの地図を見ながら、ここまでやってきたのだ。しかし、駅からの地図はない。つまりは書いても無駄なのだ、駅前商店街魚弦の佳奈さんに案内してもらうようにとある。

かぬかはほっと息を漏らすと、少しずつ落ちかけた大きなリュックを担ぎ直す。今から登山でもしようかといういで立ちだ、かぬかの財産一式だった。

「らっしゃい、らっしゃい」

威勢のいい声、前掛けに魚弦と書いた佳奈が元気に客を呼び込んでいた。かぬかは少し離れたところで、どう声をかけたものかと考える、魚を覗き込んでいる主婦三人、この人たちが買い物を終えたら、思い切って声をかけてみようか。なんだか、裸電球の灯りのせいだろうか、まるで観客席でお芝居を見ているような気分だ。

しばらく前まで、そう本家を出るまで、殺し殺される世界にいたことが嘘のようだ。

なんだか、肩の力が抜けて楽しい。

ふと、佳奈がかぬかを手まねいた、ちょっと見渡して見る、自分だ。

「かぬかちゃんだろう。おいで」

「は、はい」

かぬかが佳奈の前に立つと、にっと佳奈が笑みを浮かべた。

「幸ちゃんから電話があったよ。奥に座敷があるからさ、荷物降ろしてやすんでりゃいいよ。一時間もしたら、お客さん減るからさ、そしたら。先生んち、一緒に行こう」

「ありがとうございます、えっと」

「あたしは佳奈。幸ちゃんの友達で、姉みたいなもんだ」

「私は白澤かぬかです」

佳奈が満面に笑みを浮かべた。

「しっかりした子だ。幸ちゃんが大事な友達って言うのわかるよ」

奥の座敷に背中荷物を降ろした、ほっと一息漏らす。

かぬかは幸が自分を大事な友達と言ったことに驚いていた。幸は変わった奴だと思う。白澤様の

敵でこの野郎と思うこともある。独善的で我こそ正義と思っているような奴だ、でも。多分、本当は白澤かめかである私は幸が真っ当で良い奴と思いたくないのだ、だから、これは私自身の問題である。案外、幸って良い奴だなあなんて思いたくない、それだけのつまらない意地だ。ただ、どうしてだろう、ちょっと、幸といると楽しくはあるんだ。いつの間にか俯いていた、見上げれば佳奈さんが声を上げてお客さんを呼び込んでいる。なんだか、手伝いたい。そうだ、手伝おう。

「佳奈さん。お手伝いします」

霧の中を歩く、佳奈の手をしっかりと握る。この手だけが頼りだ。結界が施されており、術師には辺り一面が深い霧の世界だ。佳奈が澱みなく歩く、佳奈には霧が見えておらず、普通の住宅街でしかないのだろう。かめかは緊張した面持ちで佳奈の後ろを歩く。

余程の術師でなければ単独では歩けないだろう。

「かめかちゃん、大丈夫かい。ふらついているけど、ちょっと休むかい」

「いいえ、大丈夫ですよ」

かめかが霧の向こうに笑みを浮かべる、真っ白な世界だ。

次第に霧がはれてきた、青い空、日盛りも過ぎた三時頃のやわらかな空だ。

「ほら、あそこだよ」

佳奈が指さす先に、瀟洒な小さな喫茶店があった。

喫茶店の窓に珈琲を飲む男性が見える。名無し先生だとかめかが心の中で叫んだ。

佳奈とかめかが喫茶店に入ると、男が笑みを浮かべた。

「かめかさん、お久しぶり。佳奈さん、ありがとうございます」

男が右手で二人に座るよう促す。

「えっと」

男がカウンターに視線を向けた。

あさぎが笑みを浮かべるとすっと水を二人の前に置いた。

「佳奈さん、何にしますか」

「それじゃ、私は珈琲で」

あさぎはそとかめかを見つめると微笑んだ。

「初めまして。幸の姉、あさぎです、よろしく。かめかさんは何にしますか」

すっとあさぎがメニューを差し出した。

「お勧めはハーブティーのケーキセットですよ」

「え、じゃ。あの、それで」

戸惑うようにかめかが答えた。

「あさぎちゃん、無理やりだねえ」

「だって、お父さんも佳奈さんも珈琲ばかりでつまらないです。せっかく、ハーブティーのブレンドを作ったのに」

「うーん。喫茶店でお茶飲んでもねえ」

あさがくすぐったそうに笑った。

「困った佳奈さんです」

「おい、珈琲を作ってくれ。台所ではインスタントじゃが、こっちならうまい珈琲が飲める」  
カウンターの奥から、なよがやってきた。

「ああ、なよ姉さん。こちらが幸から電話のあったかぬかさんです」

ふっとかぬかがなよの顔を見た、

「ひやあ。か、かぐやのなよ竹の姫」

驚いて、かぬかが腰を浮かす、瞬間、視界が巨大化したなよの瞳で充満した。

「うまそうじゃのう」

瞳の奥から、なよの言葉が響き出す。

「ご、ごめんなさい」

「なにも謝る必要はない。その右腕、所望じゃ。うまそうじゃなあ」

震えて、動けない。威圧されて、体が押し潰されてしまう。

「なにやってんですか、なよ母様」

すぱーんと良い音がして、小夜乃がなよの頭をスリッパで思いっきりはたいた。

「え・・・」

かぬかは目の前で起こったことが理解できなかった。

頭を抱えて、うずくまっているかぐやのなよ竹の姫、その隣りにスリッパを持った少女。

「母がいたずらをしてしまい申し訳ありません」

「母・・・」

かぬかがおうむ返しに答えた。男が少しいたずらげに笑みを浮かべた。

「なよの娘、小夜乃だよ」

「先生、それって」

「うちの次女のなよ、それと娘の小夜乃だ」

なよが頭をさすりながら立ち上がった。

「そういうことじゃ。長ったらしい名前は忘れろ、なよでよい」

ふと、なよが佳奈の持っている袋に目をやった。

「さばとイカのいいのが入って来たからね、持って来たよ」

嬉しそうに佳奈が袋を持ち上げる。

「気が利くのう、佳奈は。よし、炭火でイカを焼いて、焦がし醤油できゅっと。な、いいじゃろ、あさぎ」

あさが呆れたように笑った。

「ほどほどですよ、なよ姉さん」

嬉しそうにうなずき、なよは小夜乃に言った。

「小夜乃。七輪の用意じゃ」

三人が庭へ行き、落ち着いたのか、緊張が抜けて、肩を落としたかぬかの前にあさぎがケーキセットを置く。

「お疲れさま」

あさぎが楽しそうに笑った。そして、そのまま、男の隣り、かぬかの前に座った。

男が紹介する。

「この娘があさぎ、三女だよ」

「よろしくね、かぬかさん」

「白澤かぬかです。よろしく申し上げます」

「白澤さん・・・」

ずっとあさぎが男の顔を見た。

「白澤さん直属の弟子は白澤姓を名乗ることになっているんだよ」

男の言葉にあさぎがそっとうなずく。

綺麗な人だとかぬかは思った。

「かぬかさん、どうぞ、食べて」

「ありがとうございます」

かぬかが笑みを浮かべて頷いた。一口、ケーキを食べてみる、とっても美味しい。

かぬかが幸せそうな笑顔をふわっと浮かべた。

「とっても美味しいです、あさぎさん」

部屋に荷物を置き、広間に立った。

「お父さんは自室で寝るけど、みんなはここで寝ているんですよ」

あさぎがかぬかに説明をした。

「あの、あさぎさん。なよさんも一緒に」

あさぎが戸惑う素振りすら見せず、素直に頷くのを見て、心しか、かぬかは驚いた。元は一国の女王、それが、皆と雑魚寝なんて。

「あ、あのね。なよ姉さんは怖い時もあるんだけど、本当はね。でも、心はとっても思いやりがあって、大人としての分別もちゃんとあるし、えっとね、時々、可愛いなって思える時もあるってね」

慌ててかばうあさぎを見て、かぬかは年上であろうあさぎをなんだか可愛く思った。

「あさぎさんがそうおっしゃるなら、そうなんだと思います」

照れながらもはっきりとかぬかがあさぎに言う、嬉しげにあさぎも頷いた。

かぬかが思い出す。

初めてこの家の主 無に出会ったのは、白澤様に精鋭の一人として無の術を教わりたいと申し出て、認めていただいた次の日だった。

「私は晩の九時には自宅に戻り晩御飯を食べるつもりです。ですから、教えたことは一度で理解

してください。二度も三度も説明しなければならないようでは、時間もかかりますし、なんだか面倒臭くて教えるのが嫌になってしまいます」

男は十人の精鋭を前に言い放った。

「では、皆さん。まずは自然体で立ってください」

かめかが慌てて、足を肩幅に広げ、姿勢を崩さない、ギリギリのところ、肩や上半身の力を抜く。

え・・・、思わずかめかは声を上げそうになった。精鋭九人、驚くようなだらけた姿で立っている、いや、一人はしゃがんですらいる。男性六人、女性四人、女性が互いにお喋りを始めた。

「なるほど。見事な自然体ですね」

男が嬉しそうに笑った。

「あんた。本当に無なのか」

中央の二メートル近くはあるだろうか、がたいの大きい男が言った。

「さあね」

「ああ、なんだと」

「私は自分で無だなんて名乗ったことはないですよ。他人は私のことをそう呼んでいるみたいだけどね。だってさ、無とかさ、気取っているようで気恥ずかしいじゃないか」

男は平気な顔をして笑うと、見上げた。こめかみにひきったような血管を浮かび上がらせた顔が男を見下ろす。

「あれ。ひょっとして、私がお気に召さないとか」

「もっと、凄い奴がやって来ると思っていたのに、そこらに転がっているおっさんがやって来たとはな」

吐き捨てるように言う。他の八人もシラケた目で男を見る。

「それは白澤さんの説明不足だ。後で言うておくよ。中肉中背、最近、ダイエットした方がいいかなと悩んでいるおっさんだつてね」

「あ。あの、皆さん。早く練習を始めましょう」

かめかが思い切って声を上げた。

ふいと男はかめかの後ろに立つと、自然体に立つかめかの背中少し下辺りを軽く叩く。瞬間、かめかの頭の中にきらめきのような衝撃が走った。

「体が真上に浮かぶようだろう、これが本来の立つということだよ。忘れないように十分間、この感覚を味わいなさい」

男は九人に振り返るとにいと笑った。

「その大将を潰して、他の八人を恐怖で稽古をさせるという手もあるんだけどね、でもさ、弱い者いじめをするのもなあ、なんだか、格好悪いからねえ、どうしたものかなあ」

「悩むことはないさ。俺がどれほどあんたが強いのかを判断してやるよ」

巨体がじわりと、男に向かって構えた。

「それは無理だよ。だってね、歩き方を覚えたばかりの小さな子供が武術のね、口はばったいけ

どさ、達人の動きを読めるかい。残念ながら、君に私の動きを判断するような実力は無いよ」

「つまりは俺がガキだと言いたいわけだ」

怒気を含んだ巨体の言葉が終わりきる前に彼の右回し蹴りが男の喉元を貫くように疾走する。

すいと男は上半身を微かに引き、大したことでもないようにその爪先に右手を添えると、ふわりと押し出した。

「うおおおっ」

巨体が軽々と宙に飛び、背中から思いっきり落下した。

「申し訳ないね。受け身くらいしてくれると思ったんだけどね」

巨体は口を開けたまま、白目をむいていた。

男は八人の顔をゆっくり見渡すと、笑みを浮かべて言った。

「次は誰が遊んでくれるのかい。まだ、私は遊び足りないんだけどね」

「みんな。頑張って練習してる」

白澤が気のよい老婦人姿でやって来た。

九人が見事に並んで、真面目に自在を振っていた。

「あら、びっくり。本当に練習しているわ」

男は白澤に気づくと、軽く会釈をした。

「皆さん。真面目な子達で楽をさせてもらっています」

ふっと白澤は歯を食いしばって真面目に自在を振る巨体を眺めた。

「刃向かうと思ったんだけどねえ」

白澤がふと辺りを見渡した。離れたところで、かぬかが一人、自然体から幾分、腰を落とした姿勢で立ち続けていた。

白澤はかぬかに近づくと、かぬかの肩に手を乗せ、ぐっと下向きに力を込める。崩れないかぬかの姿勢に小さく頷いた。

「どうして、かぬかを一緒に練習させてくれないの」

「九人の中に入れば大怪我しますよ。大サービスでこの子には、この基本の後、一時間、補習してあげます」

男はあっさりと答えると、先程とは打って変わって熱心に練習をする精鋭達に近づいた。

一人が自在をすりあげ、相手の上段に構えた自在を打つ。それだけの単純な動きだ。九人が組になり、一人の構えた自在を、次々と八人が打ち下ろして行く。

小柄な女が、自在をすりあげた。男はすっと近づくと、打ち下ろすのに合わせて、女の肩を軽く押す。女の自在が目にもとまらない速さで走り、受け手が自在を持ったまま押し潰され、ひっくり返ってしまった。ひっくりかえったまま、受け手をしていた二メートルはあろうか云う男は今の動きが信じられないかのように呆然としていた。

「術というほどでもない。ちょっとしたコツでね、うまく体が連動すればこれくらいの芸当はで

きるのさ」

男が女に言う。

「今の感触をどうすれば再現できるか考えなさい。自分で、考えて見つければ、それは自分の動きになる。いいね」

「は、はいっ」

興奮覚めやらぬ思いで、女が叫ぶように返事をした。男は倒れた男を片手で引き上げてやると愉快に笑った。

「しっかり受け身の練習をしてくれ。でないと体がもたないよ」

「いまのは」

「私は彼女の肩を少し押して、力や方向のずれを直しただけだよ。それだけでも、随分変わるだろう。私は手取り足取りは教えない。ただ、手順と見本は見せてあげるよ。あとは自分の頭で考えなさい。自分で考えたことしか、身にはつかないんだからね」

巨漢はいきなり男に向かって土下座した。

「失礼の数々、申し訳ありません」

「顔をあげなさい」

恐る恐る上げた顔は涙に泣き濡れていた。

「どんなときでも、どんな相手にも自分の首の後ろを見せるな。これはこの世界の基本だ」

男はふっと笑うと、言葉を継いだ。

「面白い奴だなあ、君は」

男はひとつ息を漏らすと、ぱんと手を叩いた。

「さて、九時だ。帰って飯食って風呂入って、しっかり寝なさい。寝ることで、今日練習したことが脳に刻み込まれる、徹夜で一人練習なんかするなよ。さあ、解散、帰れ、帰れ」

男は九人を追い出すと、かぬかと白澤の前に立った。

「君。名前は」

「か・・・、かぬかです」

「かぬか。そうか、白澤さんの血で蘇ったというのは君か。道理で動きは素人なのに、才能が桁違いにあるというのは白澤さんの血の影響か」

白澤がにんまりと笑った。

「お前の娘がこの子を体二つに斬ったのよ。責任は取ってもらわなくちゃね」

「何、言ってんですか。白澤さんが幸の攻撃を素直に受けてその体、上下の二つになっていれば、この子は何事もなく助かっていたのですよ」

「まっ、なんてことなのでしょうね」

かぬかは冷や汗をかいていた。本家の実力者で当主に次ぐ立場にあり、様々な呪術を繰り出す白澤は畏敬の念と同時に恐怖の対象でもあったのだ。そんな白澤に悪態をつき、それを白澤が嬉しそうに受け止めている。



男はふいっと少し短めの木の杖をかぬかに手渡した。

「君には丁寧に教えよう。それは枇杷の木で作った杖だ。元々は軽くて柔らかい木だけれど、術をかけて折れなくしてある。これが自由に扱えるようになれば、自在を教えよう」

「おおい、かぬかさん」

気づくと、あさぎが心配げにかぬかの顔をのぞき込んでいた。いつの間にか、かぬかは座り込み、ぼおっと庭を眺めたまま、まるどんでいたのだ。

「え、どうして。私」

「敵意がないんですよ、この風景は。だから、厳しい修行をしてきた人は反動で最初はぼおっとしてしまう、幸の受け売りですけど」

いきなり、ドタバタと足音が響いた、息せききって、三毛が学校から、全速力で走って帰ってきたのだ。

「お、お久しぶりです、かぬかさん」

息もたえだえに、しかし、顔を上げて嬉しそうに笑った。

「あ、白澤様の孫だった」

驚いて、かぬかが声を上げた。

「今はここの娘、三毛です」

三毛はかぬかに走り寄ると、ぎゅっとかぬかを抱き締めた。

「かぬかさん。毎晩、御飯を分けてくれたこと覚えています。なのに、急に姿を消してしまっでごめんなさい」

「ううん、残り物をなんでも入れてさ、四人で鍋囲むの楽しかったよ」

小さな子供のように、声を上げて三毛が泣き出した。

「これからは一緒です、一緒ですよ」

三毛が嗚咽しながら、言うのを、あさぎは驚いて、見ていたが、やがて、笑みを浮かべた。

そして、ちょっと思う。鯖を焼くのは明日にして、今日はお鍋にしよう。

異形 月の糸 一話

「幸はお父さんが好き。お父さんは幸が大好き」

男の部屋、事務椅子に座る男の背もたれに手を添え言った。

「あれ、父さん、幸が好きだったかなあ」

「ええっ、お父さん。お父さんは幸が好きだよ、ねえったら」

「ちょっと待ってくれよ、父さん、思い出すからな。父さんは幸が好きだったかな、どうだったかなあ」

「思い出せ、お父さん、思い出せっ」

幸が男の後ろでぴょんぴょん跳ねながら歌う。ふと、男が顔を上げた。

「父さん、優しい人が好きだけど、幸は優しかったかなあ」

「優しい、とっても優しいよ」

「そうだ、父さん、言葉の綺麗な人が好きだけど、幸はどうだったなあ」

「幸はとても言葉遣いが美しゅうございますわ」

男がくすぐったそうに笑った。

「父さん、思い出したよ。父さんは、幸が、大、大、大好きだったよ」

「やったあ」

幸は万遍に笑みを浮かべると、後から男に抱きついた。

「幸も、お父さんが、大、大、大好きです」

「何やっとなるんじゃ、この父娘は」

部屋に入ってきたなよが呆れ顔で言った。にひひと幸は笑うと、なよに言った。

「なよ姉さんもやる」

「わしがか」

ふいと、なよは男に抱きついて、大好きと頬を寄せている自分の姿を思い浮かべた。慌ててばたばたと手を振る。

「勘弁してくれ。わしは、そんなガキではないわ」

「もったいないなあ、なよ姉さんは」

ふと幸は柱時計を見た。

「お父さん。そろそろ、旅に戻るよ、あかねちゃんに叱られちゃう」

男が頷くと、幸は走って出て行った。

「繊細なのか、大胆なのか、見当のつかぬ奴じゃ」

なよの言葉に男は笑うと、なよに椅子を勧めた。

なよが椅子に座ると、男が言った。

「相談があるんだろう、話してごらん」

「あのな。部屋が一つ欲しい」

「無駄に広い家だからね、空いている部屋、好きに使いなさい。そういえば、父さん以外、みんな、一つの部屋で寝ているし、不便なこともあるかもしれないね」

「いや、皆での雑魚寝は楽しい。というかのう、ふと目が覚めて、皆の寝息が聞こえるとほっとするのじゃ」

なよは幸せそうに少し笑うと、男に改めて言った。

「なんというかのう。実は機織りをやってみようかとな」

ふと男はなよがかぐやのなよ竹の姫と呼ばれていた頃、機織りの才に恵まれ、人気を博していたことを思い出した。刃帯儀も元は機織りから生まれた技だ。

「それはいいね。あ、でも道具とか揃えなきゃならないな」

「昔の屋敷の地下にある、先日、幸と確認したばかりじゃ」

「なら、黒達に運んでもらえばいいね。花魁道中の儀で」

「本来、高貴な者を運ぶ術が、すっかり引っ越しのトラックと同じになってしもうたわ」

なよが愉快地に笑った。

かぬかは緊張していた。黒達は学校からまだ戻っていない。ならばと、なよはかぬかを連れて街へ向かったのだった。電車の長座席、隣同士になよと座る。一緒に生活をしてみて、なよへの恐怖心はいくらか薄れたが、いま、政府がかぐやのなよ竹の姫に掛けた懸賞金ほうなぎ登りだ。懸賞金につられて、どんな賞金稼ぎが現れるかしのれない。

なよといえ、OLが上司の命令で書類を届けに向かっていますというような、ありふれた単色のタイトスカートに白い飾り気のないシャツ、捲った袖口の高さが左右で違っている。姿はおしゃれなど気にもしない様子だが、その表情、ちょっとした、手の仕草が、その高貴さを隠しえていない。

「かぬか。どうした、緊張しておるな。もっと、気楽に力を抜け」

「はい。ですが、周りの人達に賞金稼ぎが紛れ込んでいるかもしれないと思うと」

「ならばよい余興じゃ」

なよが微かに笑みを浮かべた。

「残念ながらこの車輦には乗っておらんようじゃの。久方ぶりに機織りをするからな。今の流行を調べに行く。呉服や貴金属、裏の世界に関わる奴もおろう、楽しいぞ」

「なよ姉さんは強い方ですが、好んでそのような場所に行かなくても」

なよが少し意地悪に笑みを浮かべた。

「ま、いろいろあるわい。それにな、何処の誰ともつかぬ奴のために我慢するのは性に合わん。そんな人生はつまらんぞ。とにかく、終点まで行く。そして、繁華街をうろうろするのじゃ、なんといったかのう、ああ、ウィンドウショッピングじゃ」

なよは自分の言葉に得心したようにうなずいた。

列車が停車し、乗降する人、ふと、かぬかの視線が定まった。男性二人と女性の三人組。

微かな違和感、眼が違った。誰でも少なからず眼に表情がある、楽しいだとか哀しい、つまらない、何かに気を取られている、しかし、三人の眼は鏡面のようにその感情を、もちろん、それがあるならばだが、その内に隠していた。ゆらりとかぬかが腰を浮かす。

滑るように男二人が突進する、なよを取り押さえようとしたのだ。腰を落とした男達の顔面をかぬかの利き足が薙ぐ。

ふわりと男達はその蹴りの微かに下を潜り込んだ。瞬間、かぬかは軸足を浮かし、不安定になりながらも振り返る。

座席には穴が開き、男二人の頭が胸まで陥没していた。

なよ姉さん、いない、慌ててかぬかが車内を見渡すと、なよが女の首に腕を絡め、にいいとかぬかに笑い掛けていた。

「席がふさがってしもうた、こっちが三人分空いておる、来い」

かぬかは状況が把握し切れないうま、その女を間に三人で座る、乗客達は無関心を装って、関わりにならぬよう、俯いたり、あらぬ方向を眺めている。

「楽しいのう、道行きが三人になったわ」

「なよ姉さん、危険ですよ」

「寿司でいうところの、わしがとろで、お前がシャリ。こやつはワサビじゃな。とろとシャリの旨みを引き立ててくれるわい。面白い話を聞かせてくれるかもしれんぞ」

なよはにいいと笑みを浮かべると、女の肩に腕を回した。

「のう、智里。今日は一日わし等につきあえ」

「智里って」

「心を読まれぬよう術で心を隠しているようじゃが、わしには効かぬわ。かぬか、智里のうなじに触れてみい」

かぬかがそっと智里のうなじに触れてみる、じっとりと濡れている、汗だ。微かに震えている、緊張しているんだ。

なよが智里の耳元で囁いた。

「わしは古今東西の術を心得ておる。なあ、智里。その面倒臭い術を解除してやろう。瓦解式、第四五三七八式」

なよは笑みを消すと、智里の耳元で囁く。意味不明の唸りだ。微かに漏れ聞こえるなよの声に、かぬかはこれが白澤様の言っていた中間言語による呪文の詠唱だと気づいた。

ふっと、智里の顔に恐怖が現れた。叫び出そうとする口をなよが手でふさいだ。

「どうした、智里。ん」

なよは笑みを浮かべると智里に囁いた。

「なんと、美味そうな首じゃなあ、がぶりと食いちぎりたいのう。そうじゃ、昼飯代りに少しだけ食わせてくれ。な、いいじゃろう」

智里が涙を流しながら首を横に振ろうとする、しかし、なよの両腕に頭をしっかりと固定され、動

けず呻くだけだ。

「喉も渴いたわい、お前の血は何型じゃ、わしはA型が好みなのじゃが。ふむ、そうか、A型か。それは良いのう」

「なよ姉さん。それくらいにしてあげてください」

かぬかがたまらず声を上げた。

「ん、お前はわしを拉致しようとした奴に情けをかけるのか」

「で、でも。なよ姉さん、辛いです」

なよが声を上げて笑った。

「冷徹になりきれぬお人よしじゃな。ま、わしも幸も、お前のそういうところ、存外、気に入っておるがな」

なよがあっさり両手を智里から放した。涙をだくだくだ流しながら、智里が荒く息を繰り返した、目の周りが真っ赤だ。

なよは、にいと笑みを浮かべる、そして言った。

「ま、可愛い・・・、ような気もする妹の言うことじゃ。智里、今日一日つき合え、そうすれば開放してやるわい、多分な」

いつの間にか、終着駅だ。なよは何事もなかったように立ち上がる、ドアが開くと同時に出了。かぬかがすぐに後を追う。驚いたことに、息の荒いまま、膝の震えるまま、智里が後をついて、列車を出た。

男二人を列車に残したまま。

何を考えているのだろうと、かぬかは驚いていた。智里という女、列車から下りずにいれば、プラットホームを反対に走れば逃げることもできるだろうに。なよ姉さんの後、一步、引いて歩いている。少し、腰が引けて、怯えている。そんなに怯えているくせに。

駅を出て、ビジネス街を少し越えたところに老舗のデパートがある。

「よし、百貨店じゃ。入るぞ」

にかっと、なよがかぬかに笑みを浮かべた。

良く分からない、かぬかは呆気にとられていた。貴金属のフロア。手前にこそ、結婚指輪、数十万円の商品が並べられているが、一步、踏み入れば、一千万円が基本の単位になっていて、億などざらだ。ただ、ガラスケースごしに眺めていても、かぬかには入り口の数十万の指輪との金額の違いがまったく理解できなかった。

「かぬか。どれが気に入った、というても、わしは無一文。買ってはやれぬがな」

気楽に言う、なよの顔を見る。なよ姉さんの顔、スーパーで夕飯の材料を買う時と同じだ。

「何がなんだか。どれも同じように見えるし、別世界に来たみたいで」

ふふとなよが笑った。

「値札を見るなよ、値札ではこいつらの面白さはわからん。お前が良いと思えば、お前にとって

それは良いモノなのじゃ」

「は、はあ」

ゆるやかな歩調で店員がやって来た。

「いらっしゃいませ」

にこやかな笑顔で店員が挨拶をする。

「わしらは無一文。眼の保養に來ただけじゃ。勝手に眺めておるから、いんで、金持ちの客を相手せい」

なよがあっさりと答える。一瞬、むっとした表情を店員は浮かべたが、すぐに笑みを浮かべ直すと、猫なで声で言った。

「こちらの商品は一般の方には少しお高いかと・・・」

「高いのう。ちいと、掛け過ぎじゃな。適正価格の三倍はとっておるな」

「は・・・、それは」

店員が強い声を発しかけた瞬間、マネージャが様子に気づき、駆け込んで来た。

「あとは私に対応させていただくから、君は下がっていなさい」

マネージャーの叱責ともとれる言葉に店員はいぶかしく思いながらも、持ち場へと戻る。

「こ、これはかぐやのなよ竹の姫様。店の者が失礼を働き、申し訳ありません」

「かまわんわい。人を怒らせるのはわしの趣味じゃ」

にかっと笑うと、かぬかに声をかけた。

「かぬか、こいつが支配人、比奈垣じゃ。絶対友達になってはならん悪人じゃな」

「悪人って、そんな面と向かって」

「どんなに清らかな値を入れても、演算子が悪ではどうしようもない。こいつはな、善人のような顔をしておるから、余計に始末が悪い、覚えておけよ」

比奈垣が、ぱたぱたと手を振った。

「かぐやのなよ竹の姫様、いつものことながら、お口が悪い。私ほど、清らかな心の持ち主は居りません。このダイヤのように清らかで、透き通ってございます」

右手で指し示す、ティアラには、どれほどあると言えれば良いのだろう、巨大なダイヤを中心に無数のダイヤがそれを囲み、夜の空を巡る星々を髣髴させる。

「ふん、たくさんの怨念が籠っているではないか。剣呑、剣呑」

意味ありげに比奈垣が口端を歪ませ、笑みを浮かべた。

「高値で売れますが、必ず、また、この店に戻って参ります、ただ、同然で。余程、ここが居心地よいようでございます」

「個人が持つようなものではないな」

なよが言い終わると同時に管内放送が流れた。

「お客様に申し上げます」

若い女の緊張した声だ。

「最上階のフロアに爆薬を仕掛けたという通報が」

アナウンスが終わる間もなく、ふいに、なよは両肩を上げ、そして下ろす。首を回し、準備体操

をするように。

「なるほど。で、比奈垣。わしをいくらで売った」

「私どもでは到底姫様を捕獲することは不可能。ですが、結果に限らず通報するだけでもなかなかの小遣い稼ぎとなります。哀しいかな、私も雇われの身でございまして、大きなお金に目がくらんでしまいました」

笑みを浮かべたまま、比奈垣が答えた。

「しもたのう、先に着物を見ておけばよかった、大島紬の良い色があると聞いておったに。ほんに、比奈垣、お前は期待を裏切らぬ男じゃ。しょうがない。では、ぼちぼち、退散するかな」  
なよが比奈垣に背を向けた。慌てて、比奈垣が叫んだ。

「ひ、姫様。私は裏切り者ですぞ、お仕置きを。お願いします、お仕置きを」  
なよがつまらなそうに振り返る。

「お前の趣味につき合うのものう」

「し、しかし、大恩ある姫様を裏切りました、ぜひとも、折檻をお願いいたします」  
なよは、比奈垣の前に立つと、ぐっと睨んだ。

「齒を食いしばれ」

「はいっ」

悲鳴にも似た叫び声で、比奈垣は直立不動に立つと、ぐっと齒を食いしばった、喜色に口元が綻びそうになるのを必死に齒を食いしばる。

なよが軽く比奈垣の頬を触れるかのように叩く。

「これで満足か」

「姫様、殺生でございませう。そんな、生殺しのような」

比奈垣が最後の言葉を言い切る瞬間、なよの拳が空間を駆け、比奈垣の顎を打ち砕いた。まるで、独楽のように比奈垣が空を飛び、展示ケースの硝子を砕き、宝石を散らばせながら墮ちた。

「な、ないすでございませう、姫様・・・」

呟くと同時に比奈垣は失神した、幸せな笑顔のままに。

「さて、智里」

なよの言葉に、気味悪げに比奈垣をのぞき込んでいた智里が飛び上がって顔を上げ、なよの足元にひれ伏した。

「顔を上げろ、話しづらい」

なよの言葉に弾けたように智里が顔を上げる。

「今日一日、苛め倒してから、解放してやろうと思ったが気が変わった。従業員の案内で溢れるように客が逃げていきおる。お前もそれに混ざればよい。追いかけて置いてやるわい」

なよはかぬかに視線を向けるといたずらげににっと笑った。

「これで満足じゃろう、ほんに庶民の妹は面倒臭いわ。少しばかり、こやつ首の骨を折っておけば、それですむものを」

なよの言葉に、かぬかはほっとしていた。うどん屋の店員が妙なことで、白澤様の精鋭になった

のだけれど、人を殺すという行為に抵抗がある、まだ、そのところが割り切れないでいる。

「いつか、その甘さがお前の災厄となるじゃろうが、わしがお前の姉である以上は、あまちゃんの妹を災厄から護ってやるわい」

「あ、あの」

智里が声を上げた。

「ん」

なよが振り向いた。

「かぐやのなよ竹の姫様。私を部下にしてください、お願い致します」

いきなり、智里が床に額をこすりつけた。

「ええっ」

思わず、かぬかが声を上げた。

二話

「いらん、いらん。鬼共に国を滅ぼされ、既に国を再興させる気も失せた。今はただの居候、部下など必要ないわ」

なよの言葉にかぬかも同調した。

「智里さん。なよ姉さんの部下になっても良いことなんて、一つもないよ。こき使われるだけだから」

むっとし、なよがかぬかの頭に拳をゴツんと落とした。

「痛っ、たたっ」

「確かにその通りじゃが、口に出されると腹が立つわい」

なよは額を床に擦り付ける智里に怒鳴った。

「帰れ。出なければ、死体になって帰ることになるぞ」

「良いんじゃないかな。啓子さんが援農集団を作りたいって言ってたし、参加してもらおう、ちょうど良いよ」

幸はかぬかの後ろから両腕を回し、顎をちょこんとかぬかの肩に載せていた。

「うわっ、幸」

「にひひ。かぬか、後ろ取られるなよな」

「なにしに来た」

機嫌最悪のなよが言った。

「大好きななよ姉様のご立腹のご様子、旅先から、慌ててやって来た次第ですよ。面白いなあ」

幸はふわっと智里の前にひざまずくと、清らかな声で智里に話しかけた。

「智里。顔をお上げなさい」

驚いて顔を上げる智里の視線に清らかな笑みを浮かべた幸がいた。

「女神様・・・」

幸は両手で智里の手を取ると、微かに俯き、そして顔を上げると、智里の目を見つめた。



「私はかぐやのなよ竹の姫の妹です。お前は何故、姉様の部下になりたいというのですか」

「高貴さと力強さに心を射貫かれました」

絞り出すように智里が呟いた。

幸は悠然と頷くと、強く智里の手を握り締めた。

「姉様は部下という言葉が好きません、哀しみが蘇り、その心を押さえ込んでしまうのです。

智里、姉様はこれからもたくさんの苦難に対峙せねばなりません、姉様をお願いしますよ」

柔らかな笑顔を浮かべる幸に智里は強く頷いた。

「必ず、必ず、お護り申し上げます」

幸は頷くと、ふわりと浮き上がり、なよの横に浮かぶ。

「あとはよろしく」

「勝手なこと、ほざきおって」

幸は楽しそうに笑うと、かぬかに声をかけた。

「何日かしたらさ、あかねちゃんと旅から帰るよ。いっぱいお土産買ってかえるからな、楽しみに待っていてくれ」

「お、おう」

「幸、地酒を忘れるな」

なよの言葉に頷くと、ふっと幸は姿を消した。

茫然としている智里になよが怒鳴った。

「立て、智里」

「はいっ」

跳ね上がるように智里が立ち上がり、直立不動の姿勢を取る。

「わしはこれから十分間、階上の呉服売り場で着物や帯を眺める。その十分間、ここから上には誰も通すな。十分後、かぬかはこの百貨店を抜け出せ。良いな」

「了解致しました」

智里が元気に答える。

「かぬか。茶店、築地で落ち合うぞ。智里を案内してやれ」

かぬかが頷くのを確認すると、その姿を消した。

智里は視線を外さないようしながら、かぬかに頭を下げた。

「かぬかさま。よろしく願い致します」

「あ、あの。さまは勘弁してください」

焦りながら、かぬかが答えた。智里は頷くと、背中から一振りの刀を抜いた。直刀、刃渡りは四十センチあるかないかだ。

さてと、かぬかが考える、エレベーター、エスカレーター、階段、かぬかは走ると、五機あるエレベーターに駆け寄り、上下全てのボタンを押した。振り返ると、エスカレーターが止まっていた。智里がエスカレーターの横にある緊急停止ボタンを押したのだ。

足音、向かってくる足音、何重もの足音が重なり、地響きのようだ。

階段だ。

智里とかぬかが階段に駆け寄り、見下ろすと、盾をかざした機動隊が横並びに駆け登って来た。

目的は十分間、この階を持ちこたえること、そして、脱出すること。

かぬかは男の言葉を思い出していた。

杖は突けば槍と化す、特に筒はね、両端を刃のように鋭くしたものだ。筒をね、持ったまま、感覚的なことだけど、腕ごと最速で相手に飛ばしなさい、そうすれば必ず少し穴があくからさ、筒と体を繋いで、体当たりするように押し込みなさい。そうすれば大抵のものは貫くことが出来るよ。

「行きます」

かぬかが呟くと同時に階段を飛び降りた。先頭中央の盾だ。筒を打ち出す、盾に当たった瞬間、ほんの一ミリ、先端が盾に入り込んだ気がした。

「うおおおっ」

雄叫びを上げ、かぬかが体ごと盾を打ち抜いた。列が崩れた透き間を智里が走る。一瞬、無防備になった機動隊を反撃する間を与えず、撫でるように切り裂いて行く。致命傷は与えない、深く斬れば刃毀れもあるし、時間もかかる。多を相手にする場合は神経戦だ、大量に血を流させることで、相手に動揺を与えるのだ。

かぬかは智里の動きを見た瞬間、電車での蹴り足を擦り抜けた男たちを思い出した。

なよ姉さんが異様に強いだけで、あの二人もかなりの使い手だ。でも智里さんはあの二人を遥かに越えている。

銃口、かぬかの目の前に黒く穿たれた穴が浮かんだ、催涙弾だ。

無茶だ。

爆音が聞こえた、そう思った瞬間、ふわりとかぬかは銃口の微かに下、潜り込んでいた。白い煙幕と刺激臭だ。

「かぬかさん。十分経ちました」

智里が叫んだ。

かぬかが智里の手をしっかりと握った。

「白澤九尾猫様、お願い申し上げ奉る。我とこの者、いつとき、天翔る力をお与えくださいませ」

ふわっとかぬかの体が浮かんだ。

智里は驚いていた。隣りを歩き、喫茶築地へと案内してくれる女の子、十代後半くらいだろう。

そんな女の子が白澤九尾猫、あの本家の大魔術師の力を借りることができる、それに、あの武器は噂に聞く「筒」だ。無という字を持つ伝説の術師が使っていたと聞く。

「ここですよ」

かぬかの声に、智里は顔を上げた。瀟洒で少し古風な喫茶店だ。先程の百貨店からもそう離れていない。

ドアを開ける、奥の席で、なよが珈琲を飲んでいた。そして、その向かい側と隣りには女の子が四人、おすましして座っている。

口元に珈琲カップを寄せたまま、なよが微かに視線を向ける、視線で頷いた。

すっと四人の女の子が立ち上がり、なよに近い席をかぬかと智里に譲った。

一番年嵩の女の子、黒がにと笑ってかぬかに話しかけた。

「かぬかさん。なよ姉さんのお供、お疲れさまでした」

「どうして、黒達まで」

かぬかがそう言うと、黒は気恥ずかしげに笑みを浮かべた。

「ケーキセットでございます」

すっとウエイトレスが黒の前に紅茶と苺のショートケーキを並べた。

「かぬかさんと智里さんはどのケーキにしますか」

白がかぬかにメニューを手渡した。

「三毛はチーズケーキ。小夜乃ちゃんは黒姉ちゃんと同じ苺のショートケーキです。ちなみに白はチョコレートケーキですけど」

白は目の前に置かれたチョコレートケーキを幸せそうに見つめた。

「そんなわけでケーキにひかれて小夜乃ちゃんを花魁道中の儀で連れて来たんです」

三毛が言うとなよがにかっと笑った。

「本当は小夜乃だけで良かったんじゃがな」

「ごちそう様です。なよ姉様」

白がこくとなよに頭を下げた。

肩に文鳥、額に絆創膏を貼った小夜乃は思い切って立ち上がると、智里に深くお辞儀をした。

「智里さん。母、かぐやのなよ竹の姫をお認めいただきありがとうございます」

「え、あ、あの」

戸惑う智里を興味深く、黒が眺めた。

「娘の小夜乃さんです」

黒が解説をする、

「正確には養女です」

小夜乃が付け加えた。

「養女は余計じゃ。なにせ、わしの頭をスリッパではたく奴じゃ。我が子で無ければ、蹴っ飛ばしておるわい」

「智里。そこの三人は黒、白、三毛。妹の娘じゃ。ま、ガキのままごと遊びのように、家族を名乗りあっておる。お前は従姉妹でいいじゃろうて」

「は、はあ」

智里はこの展開についてこれずにいたが、それでも、なよの力強い笑顔を見たとき、なんだか、不思議にこれから楽しい日々が始まるような気がした。

## 遥の花 月の糸 二話

---

### 異形 月の糸 二話

「お父さん、かんでき、持って来たよ。炭もあるからね」  
黒が七輪と炭を入れた袋を両手に満面の笑みを浮かべていた。

「黒、口元。ほら、涎が出ているぞ」  
男が笑った。慌てて、黒は荷物を降ろすと、袖元で口を拭った。  
恥ずかしそうに黒が笑う。

「面白いな、黒は」  
男も楽しそうに笑うと糸の先に視線を戻した。  
梅林を越えたところにある小川、その辺で男は魚釣りをしていたのだ。

「黒。いっぱい食べろよ、父さん、大きい釣るからな」  
「うん。ピクニックみたいでわくわくするよ」  
男は満足げに笑みを浮かべると、ふいと視線を糸の先に向けた。くくっと浮きが沈む。すいっと併せ、竿を上げる、銀にきらめく魚を釣り上げた。

黒が目を輝かせ、魚を受け取った。  
「大きいよ、三十センチくらいある」  
「皆が来るまで、ちょっと試食しようか」  
「しよう、しよう」  
黒は器用に魚を三枚に降ろし、酢を塗り、塩を振った。七輪に載せると、しばらくして香ばしいにおいがあたりに漂いだした。

「お酢をつけると香ばしくなるって、あさぎ姉さん言った」  
「いいにおいだ。ん」  
ふっと、男は視線を上げた。黒の後、黒も振り返ると、遠く、ぼおとした表情で歩く智里を見つけた。

「おおい、智里さーん、こっち、こっちだよ」  
黒がぴょんぴょん飛び跳ねながら大きく手を振った。  
焦点定まらないままに、智里は立ち止まり、ぼおっと眺めていたが、意識を取り戻すと、足早に駆けてきた。

「申し訳ありません。先生、黒さん」  
「謝る必要は何もないよ。ね、智里さん、具合はいかが」  
心配げに黒が智里の顔を覗き込んだ。

「住まわせていただいて、三日になりますが、時々、足がふわっとなってしまうと、気持ちも良

い気分で、何も考えられなくなってしまいました」

黒が不安そうに男を見つめた。

男は安心させるように笑った。

「一週間もすれば無事に生活できるようになるよ。智里さんはね、二十代半ばだけれど、人が身につけることのできる技量ぎりぎりのところまで格闘術を身につけた、酷い修行でね。その負荷が当たり前になっていたところから、不意に解放されて、感性が戸惑っているんだよ」

智里は不思議に思う、家の裏庭がこんな広大な土地になっていること、そして、この男性は一体何者なのだろう。皆からお父さんと呼ばれる、少しやつれた感じの中年男性、特に特徴も無く、町ですれ違っても、思い出せないほどの。

「智里さん、今日はなよも機織りに専念すると言っている、ゆっくりしたらいいよ」

男は黒に目をやり言った。

「魚が焼けたぞ。智里さんと分けなさい」

黒は嬉しそうに頷くと、半身を皿に載せ、お箸を添えた。

「どうぞ、智里さん」

「あ、ありがとうございます」

男も笑みを浮かべ頷くと、釣りを再開した。

「美味しい」

智里が呟いた。

黒も魚を食べる。にっと幸せそうに笑みを浮かべた。

「智里さん、いっぱい食べてください」

男が苦笑する。

「頑張ってるよ」

三毛と白がそれぞれ長机を頭上、高く掲げ走ってきた。その後を小夜乃が折り畳み椅子を両手に二つ、走って来る。小夜乃も今はすっかり元気になっていた。

「お父さん、ここに机を置くよ」

三毛と白が机を並べる。そして、小夜乃が椅子を組み立て並べた。

「まだ、椅子が要りますわ。黒姉（ねえ）」

白が言った。

「わかった、取ってくる」

黒がすいっと家に向かって駆け出した。白と三毛も後を追った。

「みんな、元気だなあ。小夜乃もすっかり元気になったね」

男が笑みを浮かべた。

小夜乃もそっと笑うと頷いた。

「自由に動けるのは楽しいです」

そして、智里を見つめた。

「智里さん。今日はゆっくりしてください、昨日はなよ母様のお供で大変だったとか」  
慌てて智里が頭を振った。

「お供させていただけるだけで、ありがたいと」

「なよは人望があるからなあ」

男が笑った。

「お父様も人望がありますわ」

小夜乃が真っすぐに言う。

「え、私がかい」

「はい。みんなお父様のこと、大好きですもの」

「そうか。なら、頑張って魚を釣るよ。みんなを飢えさせたら申し訳ないからね」

男は笑うと釣り糸を川面に沈めた。

ふと、智里は餌を付けずに釣り針を沈めるのに気づいた。擬餌のルアーでもない、釣り針だけだ。男がすうっと竿の先を走らせる、つうんと引き上げると魚がかかっていた。

魚の移動を読んで、引っ搔けているのだ。普通のどこにでもいる中年男、としか見えない。でも、考えてみれば、なよ様でさえ、一目を置いている様子。

「あの、お尋ねしてもよろしいでしょうか」

智里は思い切って男に声を掛けた。

「ん、何かな」

川面に糸を垂らしたまま、男が返事をした。

「あの。貴方様は」

「私のことかい」

智里が戸惑いながらも頷いた。

「さて……。ま、この地の元管理者。この子達の父親みたいなものかな」

にと男は小夜乃に笑みを浮かべた。

小夜乃も頷くと、微かに頭を下げお辞儀をする。

「お父様にはお世話になっております」

「いいえ、どう致しまして」

男はかしこまって答えると、くすぐったそうに笑った。

「智里さん」

「はい」

「君がこうして、ここにいるのも何かの縁だ。なよが君を受け入れたのも、君の中に何か思うところがあつたんだろうと思うよ。君の体は無茶な練習で悲鳴をあげている、このままなら、後数年と生きられないだろう。ここで養生をしなさい。体が整えば、何十年か先、老衰で死ぬことができるからさ」

「先生」

かぬかが鍋を両手に走って来る。

「鍋。七輪に置いてもいいですか」

「いいよ。うどんはあつあつが美味しい」

「鍋焼きうどんです」

竿を置き、男が鍋をのぞき込む。

「これはいいね、楽しみだ、うどんはかぬかが打ったのかい」

かぬかが照れたように笑った。

「もともとうどん屋ですから」

ふと、かぬかは真顔になり、男に尋ねた。

「あの。幸はもうすぐ帰って来るのでしょうか」

「そうだね。お昼の準備が終わるころには戻って来ると思うよ」

「そう、ですか」

かぬかの顔に微かな緊張が走った。

男は困ったように笑みを浮かべると、かぬかに言った。

「こちらに背中を向けなさい」

「は、はいっ」

かぬかが男に背を向けた。

男はかぬかの頭に両手をやると、頭の埃を払うように両手を動かす、そして、首、肩、背中を払って行く。

「かぬか。同じように、胸、お腹、腰を両手で払って行きなさい」

かぬかは不思議に思った。手で払って行くにつれて、なんだか、緊張が体から落ちて行く。

「太もも、膝、臍、ふくらはぎ、足首に足の甲まで払うこと」

「はい」

素直にかぬかは体を払って行く、不思議に緊張が解け体が軽くなって行った。

「父さん、古式寿法か。扱える者がまだおったのじゃのう」

なよが自在を担いでいた。その自在には何個もの折り畳み椅子が差してある。

「地味な術は廃れやすいからね」

男はなよに笑いかけた。

「智里にも教えてやってくれ」

なよは自在を降ろすと、素直に頭を下げた。

「なんだか、なよが可愛くなった」

男が笑った。

「わしとて、多少の礼節は心得ておるわい」

照れたようになよは少し頬を赤らめた。

男は笑うと智里にも同じように、払ってやる、急に智里は体が軽くなって、つまずきそうになる、とんとんと足を踏み代える、なんて軽い。体が風船みたいに浮いてしまいそうだ。



「智里、覚えておけ。今のが古式寿法 払いじゃ。いまの状態が己の筋肉と体重の関係じゃ。軽いであろう、それが本来のものじゃ、忘れるなよ」

「はいっ」

智里が直立不動になり、元気に返事をする。

「堅苦しい奴じゃ」

ふと、なよが興味深そうに男を見つめた。

「いつぞやの話で父さんの頭の中には、先代、先々代と、先祖の記憶が残っているとかが、いったい、父さんに頭の中にはどれほどの記憶が残っておる」

男はふっと考え、そして、答えた。

「あるお爺さんが一本の光る竹を切ると、そこから女の赤ん坊が現れたという、父さんの先祖はその様子を見ていた。おおっ、なんと可愛い赤子ぞと呟いたとか」

「あれは戯作者の作り話じゃ。くだらんことを言うでないわい」

なよの照れた言葉に、男が楽しそうに笑った。

あさぎがバスケットを抱えて走って来る。その隣りを黒が特大のおひつを両手に抱えてやってきた。

「おむすび、いっぱい作るよ」

うきうきと黒が叫んだ。

白と三毛もかなくて、炭の入った箱を持ってきた。

「お父さん。幸母さんとあかねちゃん、もうすぐ帰って来るかなあ」

三毛が男を見上げた。

男はすっと家の方角を眺めて言った。

「こっちに向かっているようだよ。もうすぐ帰って来るんじゃないかな」

三毛がほっとしたように微笑んだ。

「三毛は母さんが帰って来て嬉しいか」

三毛が特上の笑みで頷いた。

男は笑うと三毛の頭をなでる。

「みんな、一緒に良いな」

「ただいま、ただいま」

幸は家から飛び出すと、駆け出して来る、背中に大きな風呂敷包み、両手には大きな買い物袋。

「お父さあん」

叫ぶと同時に両手を広げた途端、両手の荷物が宙に浮かんだ。

「酒が」

瞬間、呟いたなよと黒が姿を消した。幸は、ばふっと男に抱き着くと、顔を見上げた。

「ただいま、お父さん」

「お帰り。楽しかったか」

「うん」

幸は笑みを浮かべると、隣りにいる三毛に笑いかけた。

「三毛、いい子にしてたか」

「はい」

素直に三毛が返事する、

「白はどうだ」

「白はいつもいい子ですわ」

当然のように言う白に、幸がくすぐったように声を出して笑った。そして、ようやく、幸は男から手を離すと、小夜乃に声をかけた。

「小夜乃、元気にしていたか」

「はい」

ほっとしたように小夜乃が笑みを浮かべた。

「あさぎ姉さん、ただいま」

「お帰り、幸」

「かぬか。ただいま」

「お、おかえり」

戸惑いながらかぬかが答える。

「お。鍋焼きうどんだ。かぬかが作ってくれたのか」

「あ。ああ」

緊張した面持ちでかぬかが答える。

いたずらげに幸は舌をだすと、智里に目をやった。

「智里さん」

「はい」

緊張した面持ちで智里が返事をした。

「智里さん。ここは智里さんの家だ、そして、私達は智里さんの家族だ。幸は智里さんを家族と認めた。それはどんな状況になっても変わらない」

強い幸の言葉に智里は気持ちが高ぶり声が出ず、ただただ頷いた。

「あれ。なよ姉さんと黒は」

なよと黒は途中、幸の手から離れたいくつもの紙袋を、地面に落ちる寸前、抱きとめたのだった。

なよが袋を前に地面に胡座をかく。

袋を覗き込むと何本もの一升瓶が入っていた。

「これは清酒霞桜ではないか。最上級品じゃ」

にやけたなよが袋から酒瓶を並べ出す。黒はというと、袋にあった箱詰め御饅頭をさっそく取り出し、食べていたのだった。

「黒さん。お行儀が悪いですよ」

遅れて戻って来たあかねが、軽く黒をにらんだ。あかねも幸と同じく、風呂敷袋を背負い、両手にいくつもの紙袋を携えていた。

「え・・・」

初めて黒は自分が御饅頭を食べていることに気づいた。

「思うより早く体が動くこと、武術では大切ですけどね」

「あかねちゃん、ごめんなさい」

黒がしおらしくあかねに言う。くすぐったそうにあかねが笑った。

「背中の風呂敷には御饅頭や色んな特産品、なよ姉さんの酒の肴まで入っています、当分、おやつに不自由しませんよ」

「いやっほう」

黒が喚声をあげた。しかし、あかねが両手に荷物を持ったままなのを見て、慌てて言った。

「あ、持つよ、荷物。えっと、あの、勝手に食べないから」

あかねは笑うと、両手の荷物を黒に手渡した。

「みんな、待ってるよ」

黒が幸せそうに笑みを浮かべた。

あかねがなよに声をかけた。

「お酒は後です、お昼御飯ですよ」

「おおっ、そうじゃったな」

なよは酒瓶を袋に戻すと立ち上がった。

「良い妹たちに恵まれて、わしは果報者じゃ」

「正確には好物の霞桜をまとめ買いして来る良い妹たちにですよね」

あかねがなよの言葉を訂正した。

「あかねの生意気な口ぶりも、いまは可愛くてしかたがないのう」

「それはどうも」

あかねはなよの言葉を流すと、少し先、智里を見つめた。

「あれが智里さんですね。なるほど、面白いことになりそうです」

「幸は面倒ごとが好きじゃからな」

「幸姉さんは男を毛嫌いする分、女性には優しすぎるのですよ。でも、そのおかげであかねも妹にさせていただいたのですから、そんなことを言っはなりませんね」

不思議そうに首をかしげる黒に、あかねはそっと笑みを浮かべた。

異形 月の糸 三話

男は静かに自室で本を読む。その足元で、幸は両手を広げ、仰向けに寝転がっていた。

「お父さんは充電器。幸は充電機。引っ付いていないと幸は充電不足になってしまうのですよ」

「そうだったのかい、初めて知ったよ」

男が気楽そうに笑った。

「旅から帰って来て、なんだか、幸が甘えん坊になった気がする」

「だって」

「どうしたんだい」

「寂しくて泣いてしまって、あかねちゃんに頭をなでてもらって、ああ、お姉さんなのに格好悪いよお」

男は笑うと、幸に言った。

「なら、父さんに甘えるのをやめたらいいんじゃないか」

「ううん、幸は考えました。十二分にお父さんに甘えておくこと、充電するんだよ。お父さんの優しさを充電して貯めておくんだ」

不意に幸がばたばたと足を動かし始めた。

「大変です、足が攣ってしまいました。幸が溺れてしまいますよ」

「それは、大変だ。よし、父さんの手を掴め」

差し出す男の手を幸は両手で掴むと、ほっと息を漏らした。

「お父さんは幸の恩人です。ありがとう」

「どう致しまして。いつでも呼んでくれ、助けに行くよ」

幸はうふふと嬉しそうに笑うと、手を放し、男の足、ふくらはぎを両手で掴んだ。

「随分、筋肉がついて来たよ。前は幸の手首と同じくらいの太さだった」

「白が厳しいからね。リハビリは辛くってこそ効果があるって、歩いたり、階段上がったりさ。結果としてはそれが良かった、白には感謝だな」

幸がとても澄んだ笑みを浮かべた。

「なるほどね。幸はしっかり白のお母さんだ」

幸はやっと体を起こすと、男を見つめた。

「みんな、幸にとって本当の娘だし、こんな幸せな生活ができるのはお父さんのおかげだよ。ありがとう」

「幸の力だよ。父さんはちょっと手助けしただけだよ」

男は笑みを浮かべると、開いたままの本を閉じた。

「時間かな」

なよの声が襖の向こうから響いた。

「幸、はようせい。時間じゃ」

なよは襖をがらっと開け放った。

「はよう準備せい。奴らにも説明せねばならん」

幸は立ち上がると頷いた。

「お父さん。ちょっと用事を済ませてくるよ」

「そっか。父さん、あさぎのお店にいるよ。そうだな、なよ、かぬかは父さんが預かろう」  
ふと、なよは考えたが、頷くと男に言った。

「気を使わせて悪いな」

「どう致しまして」

男が笑みを浮かべた。

梅林の修行場になよと幸。その二人の前に緊張した面持ちの智里が直立不動で立っていた。黒に白に三毛、小夜乃とあかねも三人を囲むように立っていた。

なよと幸も揃うと、幸は智里を見つめ、それから、なよに視線を向けた。

「智里」

なよが智里に声をかけた。

「はいっ」

「お前が所属していた赤炎会に坊主が来て、お前に術を掛けたのを覚えているか」

「能力を超えた力を発揮するという」

智里が赤炎会 総帥の横に立つ僧の姿を思い出した。今となってははるか昔の話のようだ。

「その僧は父さんの知り合いで、この地を壊滅せんと欲しておる。お前がこの地に来る可能性を読み、術を仕掛けたのじゃ」

智里は混乱していた。顔すらはっきり覚えていない。確かに力を与えてやると術を掛けられたのは覚えている。でも、なにか目の前で唱えていただけで。

「白は智里の左足。三毛は右足を押さえなさい」

幸が二人に指図した。

「あ、あの。それって」

白が戸惑いながら言った。

「あと五分で智里は理性を無くし暴れる。なよ姉さんが解呪法を唱える間、動けないように押さえなさいということだ。黒は右腕、あかねちゃんは左腕を押さえること」

「はい」

あかねはすっと智里の背後から寄るとその左腕に自分の体を押し付け、両手で包むように包み込んだ。

「え。あ、あの」

黒が戸惑うのを、すいっと目を細め、あかねが黒に言った。

「右は智里さんの利き腕です。黒さん、気を抜かずしっかりとなさい」

「は、はい」

黒も智里の右腕を体で押さえ込んだ。

「智里さん、ごめんなさい。ちょっとだけ、我慢してください」

黒が戸惑いながら言った。

男はテーブルにつくと窓から外を眺める。昼間のはずなのに、奇妙に薄暗い。

かぬかは男の前に座ると、緊張した面持ちで男を見つめた。

「先生。なにが起こるのでしょうか」

男はゆっくりとかぬかに顔を向けると、そっと笑みを浮かべた。

「鬼が攻めて来るのさ」

「え・・・」

驚いてかぬかは目を凝らし、窓の外を睨んだ。じわりと巨大な影が浮かび上がり、道向こう、二階建の高さは充分にある鬼の姿が浮かび上がった。憤怒にこちらを睨みつけている。

「あと四つ」

男が他人事のように呟く。まるでその言葉に呼応したかのように、あと四体の鬼が現れた。後ろ、二階建の家が鬼の姿に隠れた。

「戦闘術をしっかりと身につけた鬼だ」

「先生、大変ですよ。どうしたら」

男がにっといたずらげに笑みを浮かべた。

「かぬか、頑張れ。応援してるぞ」

「せ、先生」

思わず、かぬかが立ち上がった。

「む、無理ですよ。先生」

「落ち着きなさいな、かぬか」

いつの間にか、かぬかの横に幸乃が座っていた。

「為せば、成るです」

「そ、そんなぁ・・・」

「希代の魔術師 無がここに居ると聞いた、案内願いたい」

重低音の鬼の声が響いた。男とかぬかは、ほおっと下から鬼の顔を見上げていたが、納得したように顔を見合わせた。

「先生。奴ら、先生の顔知らないようです」

「面が割れてないのなら」

男は顔を上げ叫んだ。

「うちにはそういう人はいません。多分、おっしゃっているのはお隣のむ・とうさんだと思います、趣味のマジックをよく子供たちに見せていましたから。ただ、先程、急に引っ越しをなさ

って、今はいらっしゃいません」

男の全く戸惑いのない声に、かぬかが驚いた。

「我らに臆して逃げ出したか」

二人の頭の上で嗤うように、鬼の声が低く響いた。

「先生、それ、ありますか」

ひそひそとかぬかが男に言った。

「面倒臭いじゃないか。それとも、折角の実践の場だ、かぬか、頑張ってみるか」

「用事も終わりましたから、戻りましょう」

即効、かぬかは答えた瞬間、

「何言ってやがる、無よ」

甲高い声が響いた。鬼の足元、じわりと僧形の男が現れた、深く編み笠をし、顔が見えない。

「やあ、愚円。その額はお若い人のお洒落かい」

編み笠を降ろした愚円の額には角が一本、生えていた。

「鬼はいいぞ。力は湧き上る、術の威力も全く違う。寿命も人の二倍だ」

微かに狂気を宿した眼で愚円が嗤った。

「長生きしてもたいしていいことはないぞ。それより、赤炎会の女の子に術をかけたろう」

「ああ。上手く行けばと思ったが、失敗だったようだな、お前がここで戯れ言を騙っているという事は」

「町中で発動すれば大量殺人になっていたぞ」

「いいじゃないか。俺は何も困らないよ」

男は微かに吐息を漏らすと呟いた。

「とりあえず、愚円。君は退場だ」

その瞬間、愚円を硝子球が包み込み、愚円共々飛び去った。

「自力で脱出するころには海の向こうだな」

鬼達が男を注視していた。

「かぬか。これは言い逃れできそうにないな」

かぬかが思い切ったように頷いた。

「頑張ります」

「いいなあ、お父さんと一緒に戦えて」

幸が店の窓に額を押し付けたまま呟いた。

智里の件が済むと同時に幸は店へと走り、男と鬼のやり取りを見つめていたのだった。

「あの位置関係だと、かぬかさんの補佐ということでしょうか」

いつの間にか、あかねも幸の隣りで二人を見つめていた。

「実質、お父さんがかぬかを動かすことになる、でも、それによって、かぬかは強くなるよ」

「いいですねえ、かぬかさん」

あかねが呟いた。

「もう、何処に行ったかと思ったら」  
黒があたふたとやって来た。白も三毛もだ。

「幸お母さん。どうしたんですか」  
白が文句を言いかけた時、鬼と対峙する男とかぬかの姿を見つけた。  
「三人も早く来い。お父さんの戦う姿、滅多に見られないぞ」  
幸が緊張した面持ちで呟いた。

「始まったか」  
なよが小夜乃と智里を両脇に抱え、走ってきた。

「なよ姉さん、これからです」  
視線を二人に向けたまま、幸が答えた。  
なよはほっとして、二人を降ろすと言った。

「二人ともしっかりと見ておけ。滅多に見れるものではないぞ。術師 無の戦いなど」

「見学者も揃ったことだし、そろそろ頑張るかな」  
男は呟くと、かぬかの後ろに立った。

「まずは左」  
すっとかぬかの腰に男の右手が触れる。一瞬で足も動かさず、二人の体が左へ移動した。瞬間、もといた場所を鬼の拳が地面を穿った。

「あわわ、なんですか。今の」  
「足を動かさない歩法だ。身体操作と寿法の合成だよ。本家の術師も江戸時代の始めくらいまでは使えて当たり前だった」

男がすっとかぬかの腰の後ろに触れた。一瞬で、前方に移動する。大振りの剣が空気を切り裂いた。

かぬかが上を向く、牙をむいた五つの鬼の顔が空を埋め尽くしている。しかし、不思議なほど心が落ち着いて恐怖心が現れない。それは、鬼の顔に恐怖が現れたからだ。

つと二人が浮かび上がり、鬼の眼の高さに止まった。鬼が手出しできずにいる。

「かぬか、思い浮かべなさい。自分が鬼と同じ大きさになっている、そして向かい合っているのだと」

「はい・・・」  
かぬかが心を沈め、巨大化した自分の姿を思い浮かべた。

「実体のかぬかは虚像の掌だ。その掌で前の鬼を投げてみなさい」  
「撃つのではなく、崩す」

「そうだ。いま、かぬかの思うように移動できる。やってみなさい」  
かぬかが大きく息を吸った。

「行きます」  
ぐっとかぬかが目の前にいた鬼を睨みつけた。かぬかと鬼の視線が重なる。視線を繋いだまま、鬼の足元に急降下する、鬼の姿勢が微かに前のめりになった瞬間、かなかは翻り、鬼の肩へと一



瞬で飛び上がる、その肩を鬼の踵微かに後ろを目指して全身で押し出した。滑るように鬼が前のめりに落ちた。

かぬかが涙を流しながら、強く息喘いだ。

「ちょうど良い方向と長さだ」

男は頷くと、驚いて退いた四体の鬼に語りかけた。

「確か君は銀髪烈鬼というのじゃなかったかな。なら、君達は鬼王を警護する者達だ。違うかい」

「そうだ」

鬼が重々しく答える。

「多分、さっきの小鬼に上手く言われたんだろう、無を倒すのは貴方方しかいませんとかさ」

鬼が無言で答えた。

「鬼王の警護がこれで甘くなる、小鬼は何か策略があったんじゃないかなあ」

明らかに鬼達の顔に動揺が走った。

「何事にも優先順位がある。早く王の安否を確認するのが本来の君達の役目かもしれないね」

銀髪烈鬼が他の鬼に目配せをする。倒れた鬼も含めて四体の姿が消えた。

「最後に訊ねたい、お前は どうして己自身が戦おうとしない」

男は少し考え、あっさり と答えた。

「だって、弱い者いじめは格好悪いじゃないか」

瞬間、鬼が牙を剥き出しに男を睨んだ、鉛のような鬼の重い気が男を襲う、男は片手でそれを払うと、笑みを浮かべた。

「いつか、君がこの娘に勝てたら、その時は相手をしてあげよう。でも、この娘は強くなるよ君達が束になっても敵わないくらいにね」

鬼の姿が消えた、二人が地面に降り立つ。

「せ、先生」

「ん」

「は、ハードル上げ過ぎです」

緊張が解けたのか、膝から崩れるようにかぬかがしゃがみこむ、地面に尻餅をつきそうになる瞬間、男がかぬかを抱き上げた。

「白澤さんなら、余裕で勝てる相手だよ」

男が楽しそうに笑った。

「いいなあ、かぬか。お姫様だっこ、いいなあ」

幸が額を硝子窓に押し付け、男とかぬかを見つめていたが、はっと気が付くと、硝子窓から離れた。

「黒。お風呂の用意だ」

幸がお風呂の竈へと走った。

男はかぬかを椅子に座らせると、白に言った。

「かぬかの首の後ろ手を当てて暖めて上げなさい、もう片方の手で頭も支えるようにね」

「はい」

白は返事をする、かぬかの後ろに立つ。

「小夜乃と三毛はかぬかの足をさすってやってくれ。あさぎはハーブティ、少し甘めのを用意してくれるかな」

四人は男の指示に素早く従う。男はほっと息を漏らすと、少し離れた椅子に腰掛けた。

なよも男の前に座った。

「鬼の世界でも派閥争いが活発になっているのかな」

「鬼の王もそれなりの歳じゃ、賑やかにもなろうて」

「なよの元亭主殿も、それだけ歳をとったんだね。あ、痛ったた」

ぎゅっとなよが男の頬をつねっていた。

「つまらぬことを言うでないわい」

なよは手を戻すと、呆れた顔をして、溜息をついた。

「要らぬことを父さんは知っておるのう。ま、今の奴のことなど、わしの知ったことではない。奴が権勢に溺れてしもうたのが、この成り行きのおおもとじゃ。わしとしては、民を殺された恨みは簡単には消えぬ。鬼の王がどうなろうと知らぬわい」

男は右手を伸ばすと、そっとなよの頭をなでた。

「なよに幸いがもたらされますように」

男はそっと笑みを浮かべると、小夜乃に声をかけた。

「小夜乃。かぬかと智里を連れて、なよとお風呂に入りなさい。沸いたようだ」

小夜乃は頷くとかぬかを立たせ、肩で支える、慌てて、智里も反対から支えた。

「なよ母様。お風呂、いただきますよう」

なよは、くっと顔を上げると、振り返った。

「ゆっくり風呂に入るとしよう」

男が見送る、白と三毛が男の前に座った。

「お父さん、どうしたらいいんでしょう」

深刻な顔をして、白が男に訊ねた。

「それは難しい質問だ。だってね」

言いかけて、男は言うのをやめた。

あさぎの注いでくれたハーブティを一口、飲み、白の眼をじっと見つめる。

「今まで通りの日常を送ること、それが大事だよ。そしてね、そのためにはどうすればいいのか。自分の持っている札、これから持つだろう札を考えて道筋を見いだして進むこと。学校や商店街、白を向かえてくれる場所は増えたと思う、白なりの道筋を考えてみなさい」

白は吸い込むように男の眼を大きく見つめ、そしてしっかりと頷いた。

「さあ、白もお風呂に入りなさい。まだ、ちょっと肩が固まっているぞ」

男が片手で白の肩を払う、ほっと白は笑みを浮かべると、立ち上がった。

「お父さんも一緒に入っていいですよ」

「はは。それは勘弁してくれ、父さん、恥ずかしがり屋だからね。最後、お風呂を洗いながら入るよ」

白を見送ると待っていたように三毛が男の前に座った。

「千客万来だなあ」

「あ、あのね、お父さん」

「どうしたんだい、三毛」

「三毛も強くなりたいんです」

三毛がじっと男の眼を見つめた。

「実践経験は少ないけど、三毛は強いよ」

「でも、あんな大きな鬼となんて、どう戦えばいいかわからないです」

男は眼を閉ざすと、微かに俯く。

そのまま、呟いた。

「多分、幸は娘が鬼と戦うのを避けたいんだろうな、鬼と出くわしても大丈夫なように、その場を逃げるような方向で教えているようだ」

男は眼を開くと三毛に言った。

「黒はね、妹二人を守りたいから強くなりたいと言った。白は、強くなるのはもう充分だと思っているようだ、三毛は何故、強くなりたいのかな」

「それは・・・、強くなるのが楽しいから」

三毛が困ったように答えた。

「人はね、自分が何かを得たら、それを他人に評価して欲しいと思う、基本的な欲求だ。それが、ごくたわいないものならいいんだけど、そうじゃない場合は大変なことになる。新しい力を手にいれたり、武器を手に入れると、使いたくなる。こんなに凄いんだよってね。そして、次はそれを所有する正当性を妄想し始める。三毛、それは良く覚えておきなさい」

「ごめんなさい」

三毛がぎゅっと目を瞑って俯いた。

男は深く溜息をつく、柔らかな笑みを浮かべた。

「三毛、立ちなさい」

「は、はい」

慌てて、三毛が立ち上がった。

「幸の教えたなみゆい。舞にも似た動きだけれど、幸の使う武術の要諦が詰まっている。前半の途中、自然体から、両手を前に出して、右足を半歩出す一連の動きがあるだろう。それを、その広いところでやってみなさい」

言われた通りに三毛が動く。ほんの一分ほどの、とても滑らかで、一切の角を廃した舞だ。

「相当、練習しているんだな。しっかりと整っているよ」

「ありがとう、お父さん」

「どういたしまして。次はね、上半身の動きと下半身の動き、ちょっとだけずらしなさい。上半身をほんの少しだけ、先にする」

三毛は頷くと、もう一度、同じ動作を繰り返そうとしたが、すぐに足を滑らせ、尻餅をついてしまった。

「それが本来の浮脚だ。アイススケートってのは、氷とエッジの間に解けた水があるんだけどね。つまりは浮いているからこそ、あれだけ速く移動できるんだ。今の三毛は初めてスケート靴を履いた子供だね」

尻餅をついたまま、三毛はぼおっと男の言葉を聞いていたが、はっと気が付くと、男の顔を見つめた。

「お父さん」

「ま、ほどほどに頑張れ」

「うん。お父さん、ありがとう」

「どういたしまして。三毛も風呂に入って来なさい」

三毛も頷くと白の後を追った。

男がふっと吐息を漏らす。

「当分は頑張っ生きて生きるか」

男が呟いて、顔を上げると、あかねが笑みを浮かべて男の前に座っていた。

「三毛さんのことは、あかねが引き受けます。命にかけても、我を見失った三毛さんを引きずり戻します」

「まっ、そうならないことをまずは期待するよ。必ずそうなるわけじゃないからね。そうだ、あかねちゃん、さっきの、ちょっとは勉強になったかい」

「勉強になりました、自分より巨大なものとの戦い方が分かりました。空を移動する術も見ることができましたし、あとはできるように練習するだけです」

「あかねちゃんなら、すぐに出来るようになるだろう」

男は笑うと少し冷めたハーブティを少し口に含む。

「ところで、お父さん」

「ん」

男が顔を上げた。

「あかねのお願いも聴いてください」

「どんなお願いかな」

「お父さんはあかねちゃんと呼んでくれますけど、ちゃんを無しにして、あかねって呼んでください」

男が思い出すように言った。

「最初、うちに来た時、あかねちゃんと呼んで、それ以来だったね。いいよ、それじゃ、あかね」

「はい。あはは、家族になった気がします」

「言葉は難しいなあ。ただ、あかねのお父さんやお母さんのことをないがしろにしちゃだめだよ」

ふと、あかねは眉を曇らせ俯いた。

「私は父や母にとっても酷いことをしました。私は娘失格なのです。たとえ、笑顔を浮かべてくれていても、本心は恐怖を抱いている、私が両親をそんなふうにしてしまったのですから、自業自得です。幸い、弟が生まれ、いま、妹が母のお腹の中です。私がない方がいいんです」

「多分、両親は苦しんでいるだろう、素直に娘を抱き締めることができない自分自身にね」

「なら、苦しまないように離れてあげるのも親孝行です。鬼紙家にはたまに御祖父様の顔を見に行きますし、現当主の護衛役もすることがあります。御祖父様がいらしてくださる間は鬼紙家にも参りますが」

あかねは一層に俯くと、拳をぎゅっと握った。

「あかね。左手を出しなさい」

あかねが不安げに顔を上げ、左手をそっと差し出した。男は右手で握手をすると、左手で、あかねの手を包み込む。

「一つの拳よりも、手を二つ、繋いだ方が暖かいだろう」

「はいっ」

あかねが目を輝かせた。

「あかねにはたくさんの家族がいる。それをいつも心に留めなさい」

男は振り返ると、カウンターの裏にしゃがみこんで隠れているあさぎに声をかけた。

「あさぎ。出ておいで」

「えっと、いいでしょうか」

あさぎが恐る恐る顔を出した。

「話が深刻になって、ちょっと居ずらくて」

男がくすぐったそうに笑った。

「あさぎもあかねの手をぎゅってね、握ってくれ」

あさぎは柔らかな笑みを浮かべ、差し出されたあかねの手をしっかりと握った。

「あかね。これからいっぱい、お喋りをしよう」

「あさぎ姉さん、ありがとう」

あかねは手を離すと、じっと自分の手を見つめた。

「あかねは発見しました」

「何を発見したの」

あさぎがあかねの隣りに座り、訊ねた。

「あかねは案外単純で、とっても幸せなんだって」

あさぎはあかねに体を寄せると、ぎゅっと抱き締めた。

「ありがとう、あかね」

あさぎが呟いた。

男は笑うと、あさぎに言った。

「あさぎは、何か、悩み事はないかい」

あさぎは顔を上げると、男に笑みを浮かべた。

「ありましたけど、いまはなくなりました」

笑顔であさぎが答えた。

なよとかぬかが風呂から上がったらしく、あさぎとあかねも風呂へ入りに行った。

男はほっと息を漏らすと、少し冷めたハーブティを一口飲む。

「幸乃。血の繋がった家族じゃない、思いの繋がった家族は、たまに手を繋がらないとならないのかも知れないね」

ゆらりと幸乃は男の体から出ると、隣りに座った。

「お前様。幸乃とも握手です」

にっと笑って、男が幸乃と右手で握手をした。

「幸乃、ありがとう」

「ありがとうとは」

「父さんの横にこうして居てくれることへの感謝、ということかな」

幸乃の頬が朱に染まった。

「まあ。お前様は、ほんに女たらしですわ」

男は笑みを浮かべると、手を離し、目を瞑った。

「泣いたり、笑ったり、怒ったり、色んな声が聞こえる、とっても賑やかで楽しいんだよ」

「怒るのは主になよですけど」

幸乃が笑みを浮かべた。

「確かにそうだ、なよはカルシウムが足りないのかなあ」

男はいたずらげにそう呟くと、目を開け、ハーブティを飲み干した。

「あさぎのハーブティも美味しい、これはあさぎの才能だな」

異形 月の糸 あかね

異形 月の糸 あかね

「お給料、三桁ですよ。あなた、頑張ってくださいね。壮介のために」  
恵美子が万遍の笑みを浮かべて言う。

「いや、お前。そうはいうけど、親父の家ってのはさ」  
言い終えるすべもなく、妻の笑みが光の速さですべてを飲み込んでいく、俺は押しつぶされ、息が出来ず、喉を詰まらせ、自分の呻き声で目を覚ます。毎朝、こんな夢を見るのだ。そして、少し人間不信になる。

啓介は、布団から、体を起こした。二十畳の日本間。羽毛布団が心地よい。障子は純白、朝の明かりを淡く呼び込み、この部屋全体ををやわらかく照らしだしている。山一つを覆うように造られた邸宅だ。遠くに山鳩の声、近くに囀るのは雀の声か。

「叔父様。お目覚めなさいましたか」  
少しあどけない、しかし、芯のしっかりした声が襖の向こうから聞こえた。

「ありがとう、起きたところだよ」  
ゆっくりと襖が開き、入ってきたのはあかねだった。

「叔父様、着替えでございます。もうすぐ、朝餉の用意が出来ますから、どうぞ、顔を洗って居間にお越しくださいませ」  
笑顔で、あかねが言った。

「世話をかけて申し訳ないね」  
あかねはかぶりを振ると、悪戯げに笑みを浮かべて答えた。

「鬼神家現当主の叔父様でございます。どうぞ、ふんぞり返って偉そうにしてくださいませ」  
「柄じゃないよ。まさか、僕に順番が回ってくるとは思わなかったんだから」

啓介は、小さく溜息を漏らし、少し肩を落とす。そして、あかねに顔をそむけ、障子の向こう、朝の空を思い浮かべた。

「今日は良い天気のようなね」  
「はい。鬼退治には絶好の日和です」  
「ほんと、そうだ」

啓介が戸惑うように小さく呟いた。  
「叔父様。ご心配なく、お供も居ります」

「お供って」

それには答えず、あかねはにいと唇の両端を引くように笑みを浮かべると、顔を隠すように頷いた。

まさしく城だ。啓介は着替え終え、廊下を歩いていた。廊下と言っても、小さな車くらいなら走れるのじゃないか。雨戸が開け放たれ、硝子戸から朝日が差し込む。朝の光に、少し気持ちが落ち着く。立ち止まり、啓介は窓から外を眺めてみた。一つの山を覆うように作られた城、いや、鬼紙家の邸宅だ。見下ろせば、溪谷が見える、谷が深すぎて、底までは光は届かない、そうだ、あの闇の中では光を嫌うモノ達が、今も蠢いているのだろうか。

ふと啓介は子供の頃を思い出した。鬼紙家は八百年続く旧家であり、その血統を絶やさぬため、意識的に男子を産み育てる。つまりは長男が不慮の事故や病気で亡くなっても、家が存続するためだ。ただ、啓介は七番目であり、加えて、正妻の子ではなかったため、この本邸には子供の頃に二度来たことがあるだけだ。

しかし、と思う。まさか長男が鬼にとり憑かれて兄達を殺してしまうとは。

「こんちわ。・・・あ、いえ、おはようございます」

振り返れば、少女。絵に描いたような令嬢だ、黒のジャージと少し日に焼けているのを除けば、午後の昼下がりにテラスで紅茶を飲むに相応しい、美少女。

「やあ、おはよう。君は」

「初めまして、黒です。あかねちゃんに呼んでいただきました」

にとっ楽しげに浮かべる少女。笑みを浮かべると深窓の令嬢から、一瞬にして近所のお姉ちゃんのような朗らかな笑顔になる。向き合う者を自然と笑み浮かべさせる、そんな笑顔だ。

「ええっと、黒さんか。あかねの友達だね、叔父さんはね」

「現当主でしょう、御老よりも偉い人だ」

「偉くはないよ。偉そうな顔をするのが仕事なだけさ」

啓介は不思議に思う。何故、こんな返事をしたのだろうか。中学、いや、高校生くらいの女の子に。どうしてだか、不思議に安心するのだ。ほっと啓介は吐息を漏らすと、黒に笑いかけた。

「ありがとう」

「ありがとうって」

「はは、どうしてだろうね。自然にありがとうって言ってしまった」

「それじゃ、黒も言います。叔父さん、ありがとう」

黒もにとっ笑顔を浮かべると、啓介を促した。

「朝御飯ですよ。大金持ちの朝御飯です。楽しみ」

時代劇に出てくる武家屋敷のように、居間に箱膳が並べられ、上座に啓介と御老が正座する。

「おはようございます」

頭を下げ、啓介が御老に挨拶をする。御老は鷹揚にうなずくと、顔を上げた。



「だめです、おじい様」

末席に座るあかねが柳眉を曇らせ、御老に言葉を掛けた。

「おじい様。おはようには、おはようで返すのが礼儀です」

「ふん。あの女と住むから、お前はそのような生意気な女になるのだ、困ったものよ」

むっとした顔をしながらも、御老は啓介に顔を向けると、おはようという。

啓介が本邸に来てから、一週間になる、毎度の朝の行事だ。

初めは御老がぼけたのかと思ったのだが、なるほどと合点がいった。東京本社勤務から出張という形で、初めて本邸に一ヶ月間住む込む。東京本社とは鬼紙家の財産管理会社だ。しかし、実際は広範な、つまり、合法違法問わず情報収集と操作をその主な職務としている。一ヶ月この屋敷に住むにあたって、集めた情報の何処かに御老が孫のあかねに特に目を掛けているとあったが、それは正確ではなかった。

溺愛している、つまりは孫のあかねと話をしたいがためだけに、この朝の行事は続けられているのだ。

しかし、考えてみればそれも仕方がない。

あかねは利発で美しい女の子だ。それに、まるで心を読むかのように、その対応は見事だ。場を読み、過不足なく対応する。情報にはその他にも、あかねは優れた格闘技の持ち主であるとあったが、それは訂正しなければならないだろう、あの華奢な腕では、おひつを両手で運ぶのすら。あれは・・・。

あかねは両手でおひつを抱え、黒の後に置いた。

「黒さん、おひつは後ろに置いておきます。お変わり自由です、調理のものに言いましたから、おかずも三人分、用意しますよ」

黒はあかねに向き直るとあかねの手をしっかりと両手で握った。

「ありがとう、呼んでくれて。あかねちゃん、大好き」

「もう、黒さんは。御飯を前にすると子供になるんだから」

「だって、このアジの干物もとっても良い仕事だよ。お味噌汁の出しは昆布、それも羅臼昆布と利尻昆布をぴったりの按配にしてくだしがとってもある。とっても、贅沢だよ」

柔らかな笑みを浮かべる二人に啓介は何かほっとした気分を抱いた。本邸へ来てからの、居こごちの悪さ、得体の知れない気配のようなものが、この黒という名の女の子の笑顔ですっきりと払われた気がする。

ふと、啓介は黒の隣に誰かが居るような気がした。考えてみれば、黒の隣が不自然に一人分、空いている。啓介は目を凝らして、その空間を見つめみてた、誰か居る。誰か居るようなのだが、どうも妙だ、見えてこない。

「これは失礼いたしました」

空間から小さく声が流れた。

やがて、黒の隣に、これは、ベトナムのアオザイだろうか、薄茶色の民族衣装を身に纏った少女が現れた。漆黒の黒髪を肩の辺りでぱつぱつと切った、一重の涼しい瞳をした女の子だ。

「普段から陰形を心がけております故、ご不審の念を抱かせてしまいました、申し訳ありません

」

ついと、少女は啓介を見つめると、微かに頭を下げた。

「あ、いや。いいんだ、そういうのも慣れたよ」

黒があわてて、啓介に言った。

「漣ちゃんはとっても良い子なんです。ちょっと人見知りなだけで」

御老が珍しく、黒の言葉を継いだ。

「啓介」

「はい」

「本来ならば、漣様が上座に座らなければならん、鍾馗の姫様だからな。その隣は黒、ホンケ白澤の孫じゃ」

御老の言葉に啓介は目を丸くした。

鍾馗と言え、鬼にその領土を征服され、難民となっていたが、その後、ホンケの力添えにより、鬼との連戦に勝利し続け、ほぼ、もとの領地を取り戻しつつあるという、それを考えるなら、黒さんと姫君の仲がよいのも不思議ではない。あかねはこの二人とも友人なのだろうか、情報にはなかったことだ。

ふと、啓介はあかねの姿が消えていることに気がついた。

ああ、姉さんか。

長女、礼子夫婦がやってくると、あかねは姿を消すのだ。

「おはようございます」

鬼紙家長女、礼子が大きいお腹を抱えるようにやってきた。その後を赤ん坊を抱いた夫がやってくる。二人は黒の向かいに座ると、礼子が黒に話しかけた。

「お久しぶり。先生はお元気」

「はい、元気です。今頃は母さんと畑仕事をしていると思います。あの・・・、お腹は」

「もう、予定日まで一ヶ月もないの、大変」

黒は如才なく笑みを浮かべると、礼子に言った。

「男の子、それとも女の子ですか」

「えへへ。女の子、上の子が男の子でしょう。男の子はつまらないわ。女の子だったら、一緒にお買い物もできるようになるだろうし、楽しみ」

どう返事をすればいいのかわからず、黒は曖昧に笑みを浮かべたまま、頷いた。

礼子の夫、一郎が改まった顔をし、啓介に言った。

「当主、おはようございます」

「おはよう」

「今日は鬼退治でございます。本来、この行事は当主の儀礼的なもので、鬼に見立てた者を刀で斬るまねをするだけのものなのですが、今回に限り、実際の鬼を」

「大丈夫ですわ、啓介さん」

夫の言葉を遮り、意地悪く、礼子が笑った。

「鬼紙家の当主として啓介さんが後れをとることなどありえません。それに黒さんもついていらっしやいますものね」

いつのまにかご飯を頬張っていた黒は、声を出せずうなずき、お茶を飲む。

「任せてください、頑張ります」

あきれた顔をして、礼子は黒を見つめたが、ほっと溜息をつくと、いただきましようと言ひ、お箸を持つ、いただきますの言葉もなしに食事が始まった。

鬼神排儀式と称される行事が鬼紙家にはある。本邸にある能舞台で開催される。荒れ狂う鬼を当主が刀で成敗していく動きを舞に仕立てたものであり、年に一度、この季節に行われる。ただ、実際に鬼がこの国に明らかな影響を与え、国民の多くが鬼の存在を認めたいま、このように様式上の鬼退治で良いのか、それが礼子により発せられ、当主が実際に鬼と戦うということになったのだ。

たぶんに礼子の現当主への嫌がらせである、下位の者が当主に収まったことが余程腹に据えかねたのだろう。ただ、礼子なりの計算では、この提案は御老によって却下され、それが現当主啓介に対して礼子自身の立場を強いものとし、いずれは自分の息子に当主を禅譲させようという考えがあったのだろう、御老の承諾に、礼子が俯き唇を噛むのを啓介は見ていた。

啓介自身も当主であることへの強い思いはなかった、だから、代わってくれと礼子がうまく言ってくれさえすれば、すぐにでも降りて逃げ帰りたくあるのだ。中堅の商社に経理で勤める会社員がいきなり、鬼だの術師だのわけのわからない連中の中に放り込まれたのだ、逃げ出して何処に不思議があるというのだ。

啓介は少し息をもらして顔を上げた。嬉しそうに御飯を頬張る黒という女の子、隣に居るはずの目を凝らさないと見えてこない引きこもり系の女の子、この二人を共に鬼退治をせよということなのか。桃太郎に倣うのなら、お供は三人。まさか、あかねが供についてくれるというのか。この人選、御老はいったい何を考えているのだろう。

個々食べ終え、席を立つ。やがて、喉に食事が通らない啓介と、丼茶碗になみなみとお茶を入れがふがふ飲む黒、多分、隣には姫様もいるのだろう。

ふと、黒は漣の膳を見た。

「漣ちゃん、食べていないの」

「はい、私は自分の作ったものしかいただかないことにしています。ごめんなさい、早くに言えば、黒さんに食べていただけたのに、冷めてしまいました」

「毒とか入ってないよ」

「ええ、そう思います。ですが、いま、私が死にますと、折角の進撃が止まってしまいます。そのため、例外なく他人が作ったものはいただかないことにしているのです」

「ね、漣ちゃん、用事が終わったら時間あるかなあ」

「と、言いますと」

「うちでいっぱい御飯を食べよう。うちなら大丈夫だよ」

ふと、俯き、漣は考えたが、笑みを浮かべると頷いた。

「ありがとうございます、楽しみです。ですから、どうぞ、私の分も食べてくださいな」  
黒はくすぐったそうに笑みを浮かべると、小さく、ごめんなさいと呟いた。

黒は漣の分も食べると、満足そうにお腹をぼんぼんと叩いた。

「まあ、黒さん。行儀が悪いですよ」

膳を片づけるのを手伝っていたあかねが笑った。

鬼紙家本邸にはおよそ百人の人間が居る。御老を筆頭に鬼紙家本家、その下には分家である鬼神十家から選ばれた者達がそれぞれ、食事の用意をする賄い方、屋敷の維持管理をする繕い方、鬼や妖を研究する計り方、鬼紙私兵、なお、鬼紙私兵は平時は森方として、植林をはじめ、農耕を主としている。

あかねは改まった表情で啓介の前に正座をすると、微かにお辞儀をする。

「今日の鬼神排儀式には、この三人がお供いたします」

あかねの振る舞いに啓介は息を飲んだ。可愛くてよく気をつく賢い姪、それだけではない触れるだけで斬られてしまいそうな鋭さ、鋭い刀が喉元に突きつけられた、そんな緊張感を味わう。

「そ、そうか・・・、よろしく」

「三人とも、希代の魔術師 無の弟子でございます。一人ででも鬼の軍隊を打破できる力量を持っております、どうぞ、ご安心くださいませ。なお」

啓介が息を飲んだ。

「このこと、東京本社にお伝えになりますと、速やかに叔父様を殺すこととなります、奥様や壮介様の悲しむ顔を見たくございません。何卒、お忘れなきようお願いいたします」

あかねはゆっくりと頭を下げると、ふっと顔を上げた。

「と、いうことで、叔父様。お出かけのご準備をどうぞ」

今までの笑顔であかねは啓介を促すと、鬼紙私兵女方が二人、あかね両脇に正座し、啓介にお辞儀をする。

あかねは三人を見送ると、黒と漣に向き直った。

「さて、黒さん、漣さん、御準備の方は宜しいですか」

漣は微かに視線をあかねに向け囁いた。

「私にとって、鬼との戦いは日常の一つでしかありません。今回は姉弟子であるあかねさんからのお声をいただき参上した次第です。お声をいただいた瞬間から準備は出来ております」

「黒も。黒もご飯食べたから大丈夫、いっぱい、動くよ」

あかねは安心したように笑みを浮かべ立ち上がった。

「あかねは着替えがあります。お二人とも、玄関先にどうぞ。車を回しておきます」

玄関と言っても、鬼紙家のそれは、神社の拝殿のようにも見える。左右を狛犬が屋敷に背を向けた形で今にも飛びかからんとしている。

黒は興味深そうに狛犬の口を覗き込んでいたが、車の音に振り返った。

「変な車だ。とっても変」

黒が楽しそうに笑った。車から降りてきた運転手に黒は笑いかけた。

「変、とっても変な車。とっても胴長」

降りてきた運転手は困ったように額に手をやったが、諦めたように笑う。

「リムジンって言うんだ。変な車じゃないぞ」

「でも、胴長。背の低いバスみたい」

黒はリムジンに近寄ると窓を覗き込んだ。

「真っ黒だ」

ふと、運転手は真面目な顔になって、黒の背中越しに話しかけた。

「お前。強いのか、御当主様をお守りすることが出来るのか」

黒い車窓に運転手の真剣な顔が写る。

黒がそのままの姿で呟く。

「黒は強いよ、とっても強い。でも」

黒は振り返ると運転手に言った。

「おじさん程じゃないけどね」

運転手がたまらず大笑いした。

「こいつは参った。何処でそういう台詞を覚えるんだ、この頃のガキは」

黒は柔らかな笑みを浮かべると、運転手に尋ねた。

「ガキじゃないよ、黒だよ。ね、鬼紙家は、現当主派と礼子派に分かれている。圧倒的に礼子派のようだけど、おじさんはどちら派」

黒の言葉に運転手は驚いた。言葉の内容もそうだが、静かに語りかける言葉に先ほどまでのはいしゃいだ子供っぽさは微塵もなく、柔らかな物腰と笑み、どれほどの修羅場をくぐれば、そんな表情を浮かべることができる。

「俺はどちら派でもねえ。俺は鬼紙私兵、鬼紙家存続が唯一の大事だ」

ふいと黒が視線を運転手の隣にやった。

「合格です、平次さん」

いつの間にか、あかねが運転手の隣に佇んでいた。あかねは黒のカンフー一服で運転手を見上げる。

「これは、あかねお嬢様」

あかねは淑やかな笑みを浮かべると、少し、恥ずかしげに俯いた。

「平次さんに運転をお願いしたのは正解でした。よろしく申し上げますよ、平次さん」

あかねは平次の右手をとると、しっかりと両手で包みこんだ。

「ま、まかせてください」

平次が緊張して叫ぶように答えた。

「何、緊張してんだ。この国の男は性的異常者が多いと聞いたが、さしずめ、お前はロリコンとかいう輩だな」

「なんだと、黒」

「ち、違うよ。黒じゃないよ。もお、漣ちゃんったら」

慌てて、黒は両手をぱたぱた振ると、視線を隣に移した。ゆっくりと、平次の目に、女の子の姿が浮かび上がってくる。

「なんだ、見えてなかったのか。修行が足りないな」

黒は溜息をつく、漣に言った。

「漣ちゃん、性格が変わった」

「いいえ、師匠から男は危険な存在だから、やられる前にやれ、と教えていただいています」

「ああ、母さんか。母さん、極端なものなあ」

黒は溜息をつくと俯いた。

はっと平次はあかねの姿に気づき、声を上げた。

「まさか、あかねお嬢様がお供をされるのですか」

「はい、そのつもりですけど」

きょんとした顔であかねが平次を見上げた。

「だ、だめです。情報では既に部隊は鬼の巣窟になっていると聞きますぞ。そんなところにあかねお嬢様をお連れすることなどできません。こいつらならばともかく」

横目で平次は黒と漣を睨んだ。

「平次。聴いてください」

あかねは哀しげな笑みを浮かべ、平次の目をじっと見つめた。

「御当主はまったくの素人。半年前までは普通の会社員。到底、鬼と戦うことなどできようはずはなく、こうやって助っ人をお願いいたしました。全て他家の者が助けたとあっては、鬼紙家の体面にも関わります」

あかねは瞳を潤ませ、強く平次を見つめた。

「こんな私でも鬼に立ち向かい、叔父様に助けていただいたと話をすれば、叔父様の体面、ひいては鬼紙家の体面を守ることが出来ます」

「ならば私がお供に参ります」

「それはだめです」

あかねはふっといたずらげに笑みを浮かべると、手を伸ばし、平次の鼻の頭を捻った。

「新婚三ヶ月さんにそんなことはさせられませんわ」

「なるほど、勉強になります」

二人を見ていた、漣が小さく呟いた。

「ん、どうしたの」

漣が黒を見上げた。

「あの、黒さん。漣は美人でしょうか」

「え。あ、うん。美人だと思うよ」

「ですか。なら、使えますね」

漣が一人うなずいた。

「あの、それって・・・」

黒が戸惑ったように漣に言った。

「黒さん。幸師匠の鋼鉄の正面突破力。なよ姉さんの蟻のはいである隙もない全包围力、これにあかねさんの王水のごとくの人心浸透力が加われば怖いものなしですよ。勉強になります」

「いや、あのね」

黒は漣の隣で溜息をついた。ああ、純真な子供が大人の影響で汚れていくよお。

「なんだか、賑やかだね」

当主が着替え終え、やってきた。あかねは笑みを浮かべると、当主の前に立ち、ネクタイを整える。

「女の子が三人寄れば喧しいものですわ」

平次は戸惑っていた。当主達四人を陸上自衛隊第三基地一キロ手前で下ろし、あかねの指示通りにやってきたのが、この喫茶店の前だ。車を止め、運転席から辺りを見渡す。住宅地、何処にでもある普通の住宅地だ。

女の子が運転席の窓をこんこんと叩く。

「こんにちは。平次さんですね」

平次は用心深くドアを開け、車から出た。窓を開けるだけでは、かえって攻撃も防御もやりづらい。

「君は」

三毛は笑顔を浮かべ、平次を見上げた。

「三毛といいます。えっと、鬼紙家の人ですよ」

平次は視線を外さず、微かに頷いた。この世界、例え相手が子供でも油断は出来ない。

「昨日の晩、黒姉ちゃんがお邪魔したと思いますが、妹の三毛と申します」

「そうか、黒さんの妹か」

平次は少しほっとしたように息を吐くと、笑顔を浮かべた。

「俺は平次。鬼紙家の兵隊、鬼紙私兵だ。あかねお嬢さんからこちらに赴くように言われてな、やってきた」

「あかねちゃんから、連絡はいただいています。あ、車、通行の邪魔になりますよね。ちょっと片付けておきます。そうだ、出しておかなきゃならない荷物、ありますか」

「特にはないが、どこかに駐車場があるのか」

「はい」

三毛は頷くと、家に向かって声をかけた。

「幸母さん、力を貸してくださいあい」

よし、っと三毛は頷くと、車に向き直った。

「無術は呪を唱えません、ひたすら意念を用いるのみ」

三毛が小さく呟き、車を見つめる、微かに唇を震わせ、意念を補強する。色があせるように車が消えた。

三毛はほっとしたように肩の力を抜くと、平次に言った。

「さあ、中へどうぞ」

平次は慌てて、車のあった辺りを手で探る。

「あ、大丈夫ですよ、壊していません。違う場所に移しただけですから」

あたふたと言いつくす三毛を見て、なんだか、平次は笑ってしまった。驚きのあまり、感情が制御できなくなったのか、どう言えばいいのかわからない。そうだ、平たく言えば、こいつは参った、そういう気分だ。

「三毛さんは凄いんだな」

「いいえ。母さんの力を借りただけで、三毛だけでは無理ですよ」

三毛は笑みを浮かべると、喫茶店へと平次を案内した。

喫茶店は一枚板のテーブルが中央、その周りに椅子が置かれており、カウンター席もある。カウンター席には女が一人、四十代くらいだろうか、ケーキセットを前に店員と談笑している。もう一人、テーブル席に窓を背にして男が一人、珈琲を飲んでいる。

平次がテーブル席に着くと同時に、店員がやってきた。

「あさぎと申します。平次さんですね、あかねちゃんから聞いています」

平次はあさぎを見て、胸が高鳴る思いがした、綺麗な人だ。

「は、はい。あかねお嬢様からこちらで、ま、待つようにと」

美人に緊張してどもってしまう自分がふがない。

あさぎは、ついつとメニューを取り出すと、平次に見せる。

「一番のお勧めは、ハーブティとケーキセットですけど、男の方には甘いものはどうかな」

「いっ、いえ。自分、甘いものは好物です」

あさぎは笑みを浮かべると頷いてカウンターへと戻る。平次は肩を下ろして、深く息を漏らした。ほんの少しだけ結婚したことを後悔、いや、後悔などしていない。

「平次さん、どうしたの」

三毛が怪訝そうにたずねた。

「いや、なんでもないよ。それより、この喫茶店は鬼紙家と何か関係があるのか」

「んと、わかりません。でも、鬼紙のおじいちゃん、時々、来てくれますよ」

「鬼紙のおじいちゃん」

「あ、ごめんなさい。鬼紙老がちゃんとした呼び名ですよ」

「いや、いいんだ」

平次はいつもの苦虫を噛み潰したような御老の顔と、おじいちゃんという言葉が上手く重ならなかった。ここでは愛想の良いじいさんをしているのか。



「なんじゃ、居ったのか」

三毛は眉間にしわを寄せると、鬼紙老の口真似をし、手を差し出す。

「食え。なんとかというケーキだ」

三毛は平次に笑いかけた。

「こんな感じです」

「よう、恵美子さん。どうした、機嫌良さそうじゃな」

なよはカウンターに座る常連の恵美子に声をかけた。

「なよさん。ありがとうございます、子供が勉強面白ってね、言っているのよ。なよさんのおかげよ」

「家庭教師という程でもない、ちと、勉強のやり方を教えてただけじゃ」

なよは恵美子の隣に座ると言った。

「知らぬことを知るの楽しい、それだけのことじゃな。子供はたまに背中を押してやらねばならん。気が向いたら、また教えに行つてやる」

ふと、なよが平次に気づいた。

面白そうに笑みを浮かべると、平次の隣に座った。

「三毛。こやつがあかねの言っていた男か」

「そうだよ。平次さん、これから一週間、修行するんだよ」

「よくもまあ、幸が承諾したのう」

「あかねちゃんが、涙目でお姉ちゃんお願いって言ったら、だいたい通るもの」

「はは、確かにそうじゃな」

愉快になよは笑うと、平次を見てにたっと笑った。

「あの、なんのことか、わからないんだが。俺はここで時間をつぶして、連絡あり次第、迎えに行く予定なんだがな」

「その予定は無しじゃ。電車とバスと歩きで帰りおるわい」

平次は理解できず、天井を睨んだが、三毛が腕の裾をくっくっと引っ張るのに気づき、三毛に顔を向けた。

「あかねちゃんから頼まれました。平次さんに一週間、武術と呪術を教えてほしい。基礎はできているからって。鬼紙家の、現当主をしっかりと守ってくれる信頼置ける人が欲しい、平次さんなら信頼できるからって」

一瞬で平次は顔を赤くすると、大声で異議を叫ぼうとした、その瞬間、なよが平次の顎をかんと掌で打ち上げた。

「痛てて」

なよが嬉しそうに笑い、言った。

「上品な店じゃ、大声を出すでないわい」

「俺は鬼紙私兵の」

「なにが鬼紙じゃ。鬼紙など、まだまだひよっこ。随分と、わしも、鬼紙の始祖をいじめてやったが、思い出すと懐かしいのう」

驚いて平次はなよの顔を見つめた。一瞬で青ざめる。そして、小さく呟いた。

「まさか、かぐやのなよ竹の姫」

「いまはこの家の次女なよじゃ。よろしくな」

現当主啓介と三人は隊内の執務室に通された。

基地の中だ。来客用のソファに啓介が座る。ソファの後ろに三人が立つ。後ろはドアだ。

啓介の前には分隊長と補佐が座る。分隊長は小柄ででっぴりと太った姿、反して、補佐は実務上がりか、胸板の分厚い男だ。

ついと黒は制服を着た男の後ろに並ぶ五人に目をやった。五人の額、あれは角だ。

元は人間だろう、鬼神化兵計画のここは実験場だ。

黒は微かに息を吐く。

鬼神化兵、人間の一部分と鬼の共同開発によって実現化された技術だ。鬼の遺伝子をウイルスによって人間の体に組み込み、人間の細胞を鬼の細胞に近似させる。筋力の強化と寿命もおよそ人間の二倍にはなる。ただ、問題は脳も鬼の特徴を備えるため、感情の起伏が激しくなることと、そして、人間を見下すようになる、そのため、指示系統の混乱が生じやすいなど、運用の問題があった、でも。黒は目の前の五人が適切に組織に従属しているのを見て取った。多分、脳が変化しないような方法を見つけたのだろうと思う。

啓介は腹に力を入れ、ぐっと分隊長を見つめた。

「鬼紙家当主 鬼紙啓介です。今回は当主就任の挨拶と視察のため、伺いました」

「これは恐縮ですな。鬼紙家御当主、直々のお越しとは」

余裕の笑顔で分隊長が答えた。啓介は分隊長が名刺を出し名乗るか、と、間を置いたが、その様子はなく、それではと、言葉を繋いだ。

「実は、貴隊に鬼が存在するという情報を得て、確認のため、伺った次第です」

分隊長は大声で笑うと、ソファの背もたれに背中を預けた。

「参りましたな。そのようなデマを真に受けられましては」

「こちらに鬼は存在しないと、そういうことですか」

分隊長は大きく頷くと、身を乗り出した。

「おとぎ話、想像上の生物とされていた鬼が実在していた、これはもう否定しきれないでしょうな。我々は国民の生命財産を護るため、その鬼とも戦う所存であります」

そう言いきり、笑うと、振り返り、角を生やした兵を順に見た。啓介もそれにならい、五人の兵を見る。

「おわかりいただけましたかな」

万遍の笑みを分隊長が浮かべた。

「鬼紙老にもよろしくお伝えください。さて、これで、よろしいかな」

不意に補佐が顔を上げ、呟くように低い声で啓介に言った。

「ここは、素人と女子供の来る場所ではない。早々にお引き取り願おう」

啓介は大きく息を吸い、吐き出した。

「鬼紙家も随分となめられたものですな。およそ、八百年、鬼の研究を通じて、この国を鬼から護ってきた、その鬼紙家を、たかが自衛隊如きが、見せびらかすようにずらりと並べた鬼を前にして帰れとは」

微かに足が震える。啓介はおもいきり体に力を込め、震えを押さえる。

補佐がつまらないものを見るように啓介を眺めた。

「鬼紙家当主殿、雉も鳴かずばという言葉をご存じかな」

啓介の背中、あふれるように汗が吹き出した。

ついとあかねは啓介の隣に座ると、啓介に笑みを浮かべた。

「叔父様、立派です。叔父様を鬼紙家当主として尊敬いたします」

あかねは補佐に向き直ると笑顔のまま、話しかけた。

「鬼紙家の歴史から計れば、現政権もあんなら戦争屋もぼっとでの素人。素人くんだり、わかったような顔をして鬼に関わるんじゃないかねえ。そういうことです」

目の前の補佐のこめかみがどくどくと、ひきつった。

「面白いなあ」

あかねは顔を上げると、五人の鬼神兵をじんわりと眺めた。

「やあ、兄さん達、鬼になって気分は最高かい。人間やめなきゃよかったかなあとか悔いはしないかなあ」

あかねの挑発に、鬼の足が微かに前方に擦り出され、睨みつける、臨戦状態だ。

補佐が低く呟いた。

「自ら、帰りの扉を閉ざされましたな。障害物排除せよ」

ソファの背に足をかけ、鬼神兵が飛び出した。

瞬間、あかねはふわりと浮かび上がると、独楽のように鬼の首を蹴る、首がちぎれ頭だけが飛んだ、黒はすばやく啓介の体を後ろから抱え、背後に飛び退いた。銃を用意していなかったのだろう、分厚いタガーがあかねの首をなぎ払う、それを緩やかに避けると、あかねは目にもとまらぬ速さで、鬼の剣拵む拳に両手を添え押し出す。すとんと鬼の頭が落ちた。

あわてて、三体の鬼があかねから間合いを置いた。啓介はあかねの豹変ぶりに足が震え、黒が後ろから支えていなければ、立ち続けることも出来なかったろう。

「間合いに意味はない」

あかねは呟くと微かに姿勢を落とした、瞬間、あかねの姿が消える。目が追えない、一人は顔面を壁へと踏みつぶされ、もう一人は胴体が半分にちぎれ、大音響とともに、最後の鬼は頭を床に押しつぶされていた。

あかねは埃を払うように両手を打つと、じわりと右足を上げ、補佐の胸を足で押し出す。額にあかねの足跡を残したまま、気絶した補佐がソファを転げ落ちた。

ゆっくりと足を戻すと、分隊長に向かって、にたあつとあかねは笑いかけた。

「少し、身のあるお話をしましょう。邪魔もいなくなりましたことですし」

あかねはがくがくと震える分隊長の前に立つとじわりと前かがみになってその顔を睨みつけた。

「おい、聴いているのかよ。拝聴してくださっているのかって訊いてるんだ」

「は、はい。き、聴いております」

あかねはソファに座ると分隊長に言った。

「この分隊は鬼に征服されつつあったところを、鬼紙家の尽力で、鬼と戦う力を得、全ての鬼を退治した。そういのでいいんじゃないか」

「え・・・」

「物わりの悪いおっさんだな。そうすりゃ、八方うまく収まるじゃねえか」

「は、はい。その通りです」

あかねは分隊長の胸ぐらを右手で掴むと片手でぐいっと持ち上げた。

「お前、わかってんのか。二十代、三十代、これからの連中を己の欲で鬼にしちまったんだぞ。奴らにも家族があったんだ。妻や子供、これからを約束した恋人がいたかも知れねえ。みんな、反古にしちまったんだ。鬼の計略にまんまとはまった年寄りの欲でな」

あかねは分隊長の顔をテーブルに擦りつけた。

ふっとあかねは柔らかな笑みを浮かべると、立ち上がり、黒と漣に振り返った。

「分隊長さんもご理解いただけたようです。お二人で鬼退治をお願いいたします」

漣が小さく手を挙げた。

「質問があります」

「はい、どうぞ」

「かなりの数、鬼の気配がする。ただ、鬼のようでもあり、人間のようでもある、そんな気配もあります。どう対処すれば良いでしょうか」

一瞬、あかねは後ろを向くと、分隊長の頭を殴りかけたが、歯ぎしりをしつつ、気持ちを落ち着かせ、深呼吸をする。そして、二人に向き直った。

あかねは嬉しそうに笑みをたたえると言い切った。

「人が鬼に変わるなどあり得ませんし、あってはならないことです。人は人として、人の世界に住み、鬼は鬼として鬼の世界に住めば良いだけのこと、きっと、それは人に擬態しようとする鬼に違いありません。迷うことなく退治してください」

漣がうなずき言った。

「了解した」

ゆっくりとドアを開け、外にでる。慌てて黒も漣のあとを追った。

二人、通路を歩く。

ふと漣が黒に言った。

「あかね先輩も漣も、居場所は師匠のところだけなのです。父は実は気弱な人です、立場上、強くは見せておりますが、漣を恐れています。漣は、この戦争が終わりましたら、師匠の元に参ります。黒さんの可愛い妹になります。どうぞ、お願いですから受け入れてください」

黒はととても柔らかな笑みを浮かべると、漣の手を握って歩く。

「約束。一緒にご飯を食べよう、一緒に働こう、一緒に笑って、一緒に泣こう、一緒に暮らそう。一緒にこうして歩こう」

ぎゅっと黒は握る手に力を込めた。

「漣ちゃんが妹になってくれて嬉しい」

漣はほっとしたように小さく笑みを浮かべたが、改めて表情を引き締めた。

「気がかりがなくなりました」

漣が走る。通路の向こう、幾つもの銃口が向けられていた。迷彩を纏った鬼達だ。

鼓膜をつんざく銃声が通路を充満する。漣が無数の銃弾をすり抜ける、音の数倍の速さだ。その風圧に鬼達の体が浮いた。

黒は自在で流れ弾を払い、壁を蹴る。セメントの壁に大穴が開いた、その向こうは中庭だ。黒は通路を飛び出し、通路と平行に走る。通路を抜けた向こうにある建物、そこに鬼の気配が集中していた。

壁が微塵に破裂する、漣が通路から飛び出した。

「漣ちゃん、鬼は」

「既に血肉の塊です」

こともなげに漣が答えた。

黒は思う、鬼ってなんなんだろう、人とどう違うのか。小夜乃ちゃんは角のある鬼だけれど、とても優しくて面倒見の良い女の子だ。角が伸びてくると幸母さんに切ってもらって、絆創膏を貼っている。洗面所でそっと絆創膏をはがして、伸びていないか、心配そうに鏡を覗くのを見たことがある。まだまだ、子供なのだ。

一際大きな建物、あれが研究棟だ。微かにうなるような機械音。嫌な予感がする。

「二人とも元気だなあ」

幸は呟くと窓から二人の姿を眺めた。視界の向こう、異質の形をした円柱形の建造物、あれが鬼神化計画にて、人を鬼に変える研究施設だ。黒と漣が向かっている。

「幸お姉ちゃん」

驚いたようにあかねが声をかけた。幸は振り返ると、いたずらげに笑みを浮かべた。

「いきなり顔を出してごめん。二人の護り髪が反応してさ、やって来た」

あたふたとあかねは幸のそばによると、幸の指先の示す方向を見つめた。

「ロボット・・・」

あかねが呟いた。

「映画とかである、パワードスーツって奴だ。かなりの速さと力がある、人なら勢いに振り回されて気絶してしまうだろう、鬼の男は脳が筋肉でできているからな」

幸は笑うと部屋の中を眺めた。

「既に宴の後か」

いきなり分隊長が立ち上がると大声で笑った。

「形勢逆転だな、超強化型パワードスーツXZ?3型、すぐに先程の奴らを殺して、ここに来るぞ

。内部絶対零度のアクチュエーター採用、抵抗0が生み出す高速は」

幸は笑みを浮かべると、分隊長に言った。

「うるさい。お前、気絶」

ばたっと、分隊長が白目を剥いて、まさしく落ちた。

あかねが興奮して、幸の服の袖を引っ張った。

「パワードスーツ、三体ですよ、2対3ですよ」

「あかねちゃん、行きたいの」

「はい」

新しいおもちゃを目にした子供のようにあかねが元気よく返事した。

「それじゃ、幸は当主とお喋りしているよ」

あかねは笑みを浮かべると、

姿を消した。

さて、と幸は呟くと、倒れた死体を避けて歩き、鬼紙家当主啓介の前に座った。

「初めまして。幸と申します」

啓介は困惑しどう答えたものかと、次の言葉を思い浮かべられずにいた。

いきなり現れた美少女。あかねと同じか、それとも少し年下。あまりにもこの風景とそぐわない

。

「えっと、君も強いのかな・・・」

我ながら、なんて間の抜けたことを言ってしまったんだろう、啓介は頭を抱えた。幸はくすぐったそうに笑うと、啓介を興味深そうに見つめた。

「嗜み程度ですわ。ご安心ください」

幸はそう答えると、部屋を見渡す。壁を染め上げる血の色が黒ずみ始めている。

「鬼紙当主様、不遜なこととは存じますが、少し、込み入ったお話をさせていただいてよろしいでしょうか」

「ど、どうぞ」

幸は頷くと、緩やかに話し出した。

「御当主はあかねちゃんがいなければ、本邸に来てから、五回、死んでいます。二回は毒殺、三回は車中にて、運転手が暴漢となり襲う、すべてあかねちゃんがそうならないように、御当主を護っています」

「これは、御褒美ですよ」

鬼が長刀を振り降ろした。反転しつつ、ふわりとあかねが浮かび上がり、パワードスーツにくるまれた、鬼のこめかみを蹴る。その蹴りを擦り上げた長刀の腹で鬼が制した。

「攻撃を防御してくれるなんて、最高です」

パワードスーツは鬼よりも二周りほど大きい、鬼の姿は、胸から上だけが外に現れている。

「あかねちゃん、この人達、強いよ。どうしよう」

黒の言葉に鬼の攻撃をすり抜けながら、あかねが声を上げた。

「黒さん、実力の六割しか出ていませんよ。しっかりなさい」

あかねは一瞬の間を読み、鬼の刀の根元を両掌で挟み込んだ。超音波寸前の甲高い音が響き、根本で刀が折れる。あかねはそのまま刀を振り上げると、鬼の足の甲に深々と突き刺した。

「一体ずつ、潰していきますよ。黒さん、漣ちゃんに加勢して、まずは一つ、潰しなさい」

「はいっ」

あかねの剣幕にの黒は直立して返事をする漣に向かって走った。

漣は攻撃しきれずにいた。三メートルはあるだろうか、長刀を振り回す、子供のような鬼の剣技だが、ヘリコプターのプロペラの如くの勢いに臆していたのだった。

走りながら黒が叫んだ。

「音と先端の速さに惑わされないで。それほど速くはないよ」

鬼が振り向いた瞬間、黒は姿勢を地面すれすれまで落とし、片手地面に両足で鬼の膝横を蹴り抜いた。鬼の体が泳ぐ。瞬間、漣が一点集中、自在、鬼の首を貫いた。白煙、抜いた自在の跡から、液体窒素が吹き出し、鬼がそのままの姿で凍り付いた。

黒が振り返ると、あかねは倒した鬼の上に立ち、研究棟を睨んでいた。もう一体は、と黒が素早く目で探す。

凍り付いた右腕が転がっていた。少し離れたところには首、胴体も三つになって、斜めに転がっていた。

あかねちゃんは幸母さんの初めての弟子で、必要以上に教えて過ぎてしまったかなと母さん、笑っていたことがある。

「黒さん、漣ちゃん。一体だけですけど、かなり強い鬼がいます。多分、原種の鬼でしょう」  
研究棟を睨みつけたままのあかねの両手に二本の自在が現れた。いや、半分の長さだ。

「幸姉さんなら、素手で大量殺戮も出来ますが、あかねはまだまだその域に至っていませんので、久しぶりに武器を使います」

原種の鬼、黒があかねの言葉を繰り返した。

齢九百年と噂される鬼王と角のある鬼の女との間に生まれた鬼を原種の鬼と呼ぶ、純血種の鬼の上位に位置する強い能力を持った鬼。

黒もたくさんの鬼を見てきたが原種の鬼に対するのは初めてだ。

一瞬、体が反応した。黒は漣をだき抱え跳んだ。

漣の居た場所が黒く焦げ、異臭を放っていた。

研究棟に幾つもの煌めきが見える。

「無粋な」

あかねが研究棟を睨み呟いた。

「あかねちゃん、一度、退却しよう」

黒が叫んだ。

「レーザー励起には時間がかかります。照準が定まり、レーザーが射出されるまでに移動すれば特に問題はありません」

「でも、数が多いよ」

空中で硝子の割れる音がした。

「あれは」

漣が呟いた。

硝子球が割れ、細かな破片がいくつもいくつも重なり、研究棟と三人の間を壁になり渦巻く。発射されたレーザーが擦り硝子を通して眺める花火のように、乱反射され消えていく。

「お姉ちゃん」

あかねが呟いた。

硝子の壁がそのまま研究棟へと移動していく。そして、研究棟の表面を削り取り、消えた。

ほっと吐息を漏らすと、あかねが呟いた。

「それでは参りましょうか」

幸は啓介に振り向くと、笑いかけた。

「あかねちゃん達、楽しんでますわ」

状況が読めず、啓介は曖昧な笑顔を浮かべるしかなかった。

「話は戻りますが」

啓介が言った。

「姉が狂いだしている」と

「はい。正妻の子である自分が女であるというだけで当主になれない、そのことで、不満や被害妄想に駆られています。正気に戻すには礼子の子を当主とし、後見役を礼子にする。啓介さんは東京本社の代表取締役専念し、礼子の息子が元服すると同時に退職する。かなりの給料と退職金は用意されるでしょうし、それでいいのではと。もちろん、啓介さんが鬼紙家当主として頑張っていくという決意ならそれで結構ですけど」

幸のすべてを見透かすような柔らかな眼差しに、これとは啓介は理解した。分水嶺、返答如何によって、これからの人生が完全に変わる、啓介の手が汗ばんだ。

意地を、虚勢を張るか、それとも・・・、啓介は大きく溜息をついた。

こういうことは正直に言う方がいい。

「つい先程までなら、幸さん、君の言葉に渡りに船と従っていたに違いない」

啓介が思いきって顔を上げ、幸を見つめた。

「と、申しますと」

「困ったことに、あかねからね、鬼紙家当主として尊敬するなんてね、言われてしまったんだよ。だから、結果として、幸さんのいう形になるかもしれないけれど、それを前提にすることは、私には出来ないんだ」



表情を変えぬまま、幸が呟いた。

「男という存在にはあきれますわ」

幸は笑うと、肩の力を抜いて吐息を漏らした。

「せっかく、あかねちゃんの仕事を減らそうと思いましたが」

幸は立ち上がると、窓辺により、研究棟を眺めた。三人は既に研究棟に乗り込んだようだ。

幸は啓介に向き直ると、窓に腰掛けた。

「せっかくの鬼退治。桃太郎がお喋りに興じているだけでは面白くありません。御当主、原種の鬼を見に行きましょうか」

啓介は深呼吸をし、唇を噛みしめると、立ち上がった。

ふと、幸は思いついたように、窓の棧に立つと、左手を前に出し、その手が消えた。

「わっ、うわっ。な、なんですか。幸母さん」

服の襟を幸の左手に掴まれた三毛が現れた。

キャベツを抱えたままの三毛が啞然として周りを見回した。

「な、なんですか、これ。血だらけですよ」

幸は三毛の前に立つと笑みを浮かべた。

「いい機会だ。原種の鬼を見ておけ」

研究棟地下、体育館ほどの広さ、煌々と灯りがともり、燕尾服にステッキとシルクハット、但し、その背は三メートルはあるだろう、鬼が宙に浮いた安楽椅子に腰掛けていた。

幸と三毛と啓介の三人は壁を抜けるように現れた。

三人の位置は、ちょうど鬼の背後になる。

「あれが原種の鬼」

三毛が呟いた。

その声に鬼が背を向けたまま嘲るように言った。

「鼠が三匹、迷い込んだようですな」

幸がここぞと鬼の態度にわめいた。

「どこぞの遊園地のかぶりモノじゃあるめいし、こんな可愛い女の子が鼠なわけねえだろう。こちらら、立派な人間様の御一行だ」

鬼の座る椅子がふわりと回り、鬼が正面を向く。

「これは元気なお嬢さんですな」

額に長い角を二本生やし、顔は赤ら顔。余裕があるのだろう、薄笑いを浮かべている。

幸が唇を歪め笑う。

「高間宮王子。お前は鬼王の器じゃないな」

「なんだと」

一瞬で鬼の顔が憤怒に赤く染まった。

三毛は気づいた。いま、幸母さんが勝った。戦いは既に始まっていたのだ。鬼の感情がぶれ、もう力を十分に発揮することは出来ない。

「鬼王もそう長くはない、お前は他の原種の鬼を出し抜くため、人の科学技術を得ようとした、その時点で鬼王失格なんだよ」

「お前、何者だ」

鬼の怒声に怯むことなく、幸が言い放つ。

「直近の部下に裏切られるような沸点の低さと、その上、人望の無さではしょうがねえな」

幸の狂言とはったりが効を奏した。鬼の両手が怒りに震える。

幸母さんのはたりに、いま、鬼の頭の中では裏切り者の部下を思い当てようと必死だ。

風切る音。

あかねが鬼の首を自在で切りつけた。

鬼がするりと避けた。

瞬間、黒と漣が凧ぐ。三人の刃と化した自在を、鬼は慌てるふうもなく、避けていく。

幸が悔しそうに額に手をやる。

「うひゃあ、奇襲でも全然、かなわねえ。ま、いい。これも勉強だ。三毛、行ってこい」

「はいっ」

三毛はキャベツを横にいた啓介に手渡すと、飛び出した。

「御当主、うちで穫れたキャベツだ。帰ったら食ってくれ。千切りにして大蒜醤油で食えば最高だ」

幸はそう言うで見上げた。

全く格が違う。四人の動きが逆に遅く見える。

「ただの筋肉馬鹿じゃねえってことか」

「これはピンチってことかなあ」

啓介が思わず呟いた。

ふいと幸は見上げると、啓介に笑みを浮かべ言った。

「大丈夫ですわ。だって、私が居りますもの」

「なら、安心だ」

啓介が笑みを浮かべた。

「面白いおっさんだな。あかねちゃんが肩入れするわけだ」

幸は四人に声をかけた。

「撤退だ、戻ってこい」

幸の言葉が終わるよりも早く三毛は戻ってくると幸にしがみついた、怖かったのだろう、肩が震えている。黒とあかねも漣の手を引き戻ってきた。

三人とも激しく息をし、床に座り込んでしまった。

「黒、びびったか」

涙目で黒が頷いた。

「あかねに漣もお疲れさま」

幸は軽く三毛の肩を叩くと、前に出、鬼から五人を守るように立ちはだかった。

「おや、心地よい風が吹いていたのですが、止まってしまいましたな」

鬼が平気な顔をして言う。

「こら、赤鬼。とっとと鬼の世界に帰れ。ここは人の世界だ」

「なにを今更」

鬼はやっと幸に向き直ると笑いかけた。

「それは降参ということでしょうかな」

幸は一瞥をくれると、大声で鬼に言った。

「およそ千三百年前、人と鬼との約定により、お互い不可侵が成立したはず。その約定を違えるは許されない。ここは人の世界、直ちに鬼の世界に帰れ」

「ほほう、古い話をご存じですな。しかし、ここの責任者、なんと言いましたかな、小太りの男ですが、この棟を私に譲渡すると申しましたぞ、ならば、この棟は鬼の世界の飛び地のようなもの、つまり、そちらが不法侵入者ということですよ。確か、進入者は如何様にされても不服は出せないと約定にありましたな」

幸はにいいと唇を歪め笑う。

「残念だったな、ここは民主主義の国だ。どこぞのえらいさんが仰る言葉より、民意の方が優先されるんだよ。この場で民意はあたしだ。ここは人の世界、だから、とっとと帰れと言うんだ」

「無茶なお方だ」

鬼の方が幸の言葉にあきれを。一体、これほどの自信が何処から出てくるのか。鬼は不思議に思った。

幸はふっと肩の力を抜くと、優しく言う。

「なら、ゲームをしよう。それで決着を決めるのはどうだ」

「ゲーム、ほう、どんなゲームですかな」

幸はふと俯いたが、顔を上げると鬼に言った。

「サッカーをしよう。あたしが向こうの壁中央に蹴る、それをあんたが止めるって寸法だ」

「ふむ、しかし、ボールがありませんな」

幸が不思議なものを見るように言った。

「いや、あるだろう。あんたの首の上、すんとんと落としてやるから、それをボールにしよう、中身、詰まってなさそうだから、よく弾むぜ」

鬼は一瞬、幸の言葉が理解できなかった。

「原種の鬼ってのは、生命力が強いらしいな。首切ってもしばらくなら生きていて、繋げば元通りになるってじゃないか。首のないお前さんがうろうろする、こりゃ見物だな」

鬼の顔が一気に充血した。

椅子から飛び降りると、幸の前に仁王立ちになる。。

「生意気な小娘が。先程からの無礼。どうしても私を怒らせたいようだな」

吠える鬼の怒声が床を震わせた。

「いや、怒るかどうかはあんた次第。つまりは己の器量ってもんがどれほどのもんか、ちいっと見せてもらったわけだ、まっ、図体の割にはちんけな奴だってことだな」

平気な顔をして幸は笑うと、ふわりと右手に自在を取り出した。

鬼を睨みつけたまま、幸が声を上げる。

「三毛、俯くな、顔を上げろ。黒、いつまでも泣いてるんじゃない。あかね、しっかり見ている。漣、お前は修行のやり直しだ、もう一度、鍛えてやる」

はっとあかねが顔を上げると倅に駆け寄った。そして、二人の動きがよく見えるよう、少し離れ、正座する。

慌てて三人もあかねの隣に正座した。

「この小娘達は何をしている」

赤鬼、高間宮王子があかね達を睨んだ。

すいっと幸が自在を中程に持ち、自然体に構える。

「決まってるだろう。師匠の動きを一瞬たりとも見落とすまいと殊勝な弟子達だ。既にあの子達にお前への恐怖はない。さて、あんたには敬意を示してやろう、高間宮王子。遠慮するな、そのステッキは趣味人気取りの仕込み刀だ、気兼ねなく抜いてくれ」

赤鬼、高間宮王子は左手にステッキを持つと、こいぐちを切る。

間合いは、単純に背の高さから考えれば、高間宮王子の間合い、幸には遠すぎる。

ゆっくり幸は自在を頭の上にかざした。

「あたしの頭の上、この棒にそいつをおもいっきり打ちおろしてくれ」

「どういう意味だ」

「察しの悪い奴だな」

幸はにたっと笑うと言葉を続けた。

「約定に違反した高間宮王子をあたしは半死半生、ぼこぼこにしてやるつもりだ。ただ、どうせなら、死にものぐるいでかかってきてくれる方がこの子達の修行にはいい、あたしがどれほどのものか、まずは、単純な力比べをしようってことだよ」

高間宮王子の顔色が赤色、幸の言葉に深紅に変わった。

「我が打ちおろさば、その姿、微塵となるぞ」

「しっかり、停めてやるさ。びびったんなら、袈裟でも、横に尻ぎ払ってもいい、斬ると見せて、蹴るのもありだ、もっとも、そのときは、あんたは高間宮王子って原種の鬼から、ただの、赤鬼一号に格下げだがな」

気楽に幸が笑った。

一瞬、高間宮王子の体が大きく広がった、広がった筋肉が降り上げ、直刀を激しく打ち降ろす、しかし、音がしない。

幸の自在と高間宮王子の直刀は確実にぶつかっている。じわりと力が引き込まれ、体全体が吸い込まれる感触に、高間宮王子は慌てて、退くと、幸との間合いを取る。

あかねは二つの棒の交差する瞬間を睨んでいた。あれこそ、力の含みと流しだ、あかねは理解した。高度な身体操作で相手の打撃を無力化する動きだ。

「あたしがどれほど使えるか、合点がいったかい。それじゃ始めるかな。黒、三毛、あかね、漣

、ついてこい」

四人は素早く立ち上がると、幸の後ろに控える。幸はすたすたと歩くと、高間宮王子の右太股を自在で打つ。呻き声と共に高間宮王子が後ろに退いた。幸の上段が高間宮王子の太股の高さになる。

そのまま、幸は追うと、左の太股を打つ、たまらず、高間宮王子は膝をついた。

黒がその動きを目を見張って驚いた。

幸母さんは普通に歩いている、打つ速さもそれほどじゃない。どうして、あの鬼は打たれるままだにしているんだろう。

幸はふわりと浮き上がると、自在を後ろ手に持ち、膝をついた高間宮王子の横面を打ち据えた。勢いに体ごと飛んだ。朦朧とした意識の中で、高間宮王子はいったい何が起きているのか、理解しようとしたが、自身の膝辺りの背しかない女になぶられているこの状況がどうしても理解できなかった。

起こりがないんだ、黒が気づいた。母さんの動きに滞りがない、起こりもなく、鬼は動きが読めないんだ、そういえば、鬼が母さんを探すように視線を巡らせている。

母さん、目の前にいるのに。

「落ち着け、高間宮王子」

倒れたままの、鬼の前で、幸が声をかけた。

「少し待ってやろう。倒れている奴を打てば、まるでいじめだ。教育にも悪いからな」

幸は自在を消すと、四人に向き直った。

「漣、久しぶりだ。元気にしてたか」

幸は柔らかに笑みを浮かべると、漣に尋ねた。

「はいっ、元気です」

ふっと、幸は漣の頬に触れる。

「無理しなくていいよ。当分、うちで暮らせ。長にはあたしから言っておく、どうしても手が必要というなら」

幸が黒と三毛を見た。

二人ともうなずく。

「ちょっと、泣き虫だけど、なんとかなるよ」

いきなり漣は幸にしがみつくと、幸の胸に顔を埋めた。

幸は笑顔を浮かべると、漣を抱きしめた。

「あかねは当分、鬼紙家か」

幸の後ろであかねが頷いた。ふと、あかねは当主を思いだした、慌てて辺りを見回す。あっけにとられた顔で、啓介は元いた場所、キャベツを抱いたまま、正座していた。

あかねは駆け寄ると、啓介に言った。

「叔父様、早くこちらへ」

「いや、それがね」

啓介が困りきって答えた。

「腰から下が浮いたような感じでね」

完全に啓介は腰を抜かしていた。

「失礼をお許してください」

あかねは言うど、啓介を後ろから抱え上げ、走る。

途中、高間宮王子の倒れている、その横を通り、一瞥をくれたが、気にする風もなく駆け抜けた。

高間宮王子はあかねのそれを見、怒りに震えた。自意識の高い高間宮王子にとって、それは幸に殴られる以上の侮蔑だったろう。

叫んだ。

「金角、銀角、右角、左角。来い」

声に呼応するように、黒い霧が天井からゆらゆらと降り立ち、形が定まって行く。やがて、高間宮王子の頭一つ分は上背のある赤鬼が四体、現れた。

振り向き、幸は新たな鬼を見つけると、驚いた表情で叫んだ。

「右角様、どうして」

幸は一瞬、しまったという表情で両手で口を隠した。

驚いて、高間宮王子は幸と呼び出した右角を見比べていたが、はっと気づくと、叫んだ。

「金角、銀角。右角を取り押さえろ」

一瞬、金角と銀角は戸惑ったが、右角を二人で取り押さえる。一番、戸惑い途方に暮れたのは右角だろう、呆然と開いた口がそれを物語っている。高間宮王子はなんとか起きあがると、一人、呟いた。

「まさか、右角が裏切っていたとは」

三毛は思う、幸母さんのはったりの続きで、一人の鬼の未来が潰えました、南無。多分、幸母さん、心の中では笑っていると思う。ただ、これで、四体がうまく連携することはなくなったのは事実。

「ごめんなさい、右角様」

しおらしく、しかし、聞こえよがしに幸が言う。

元気を取り戻した高間宮王子が左角に命じた。

「その女を殺せ」

左角が幸の前に立つ。

幸は顔を真上に向け、左角の顔を眺めた。

「無駄にでけえな」

幸が呟く。この地下のホール、かなり天井は高いが、それでも、少し飛び跳ねれば、頭をぶつけるかもしれない。額に角一本の赤鬼だ。

幸は右のつま先を軽く上げ、地面をとんと打つ。ふわりと浮かび上がり、左角と同じ目の高さになる。そして、静かに言った。

「お前さんの上司はあたしを殺せと言う。命令通り、あたしを殺すのかい」

「それが命令とあらば」

静かに左角が答えた。

「ここは人の世界。古の約定により、あたしは高間宮王子を打ち据えた。義はこちらにある。それでもあたしを殺すのか」

微かに左角の眼が泳いだ。

「左角。十年ほど前までは、鬼の世界も平和だった。それが、鬼王の力が弱まると同時に、原種の鬼達が跋扈しだし、お互いが次の鬼王になろうと争いだした」

師匠の騙りが始まった。漣が息を飲んだ。相手の記憶を読みながら、同時に状況判断、有利に対象を操る特殊操法。師匠は効率よく鬼の中に反乱分子を創りだそうとしているんだ。

「階級制も緩み、いくらかは自由なりだした社会が、原種の鬼の台頭によって、随分、息苦しくなったろう、原種の鬼同士が反目しあい、争いが増えた。階級社会が一気に復活した。そうになると、上が戦争を始めれば、下は追従するしかないわな」

幸が目を見開き、左角を見つめる、左角は、まるで、その目に吸い込まれていくように感じた。足が不安定になり、寄って立っていたはずの何かが、まるで幻のように思えてくる。

「お前には子供がいるだろう。高間宮王子の供で、なかなか、家族に会えない。そんな、お前が久しぶりに息子に会ったとき、お前、どう思った、子供の、その変貌ぶりだ」

「お、俺は・・・」

左角が言い淀む、左角が言葉にしたくないこと、言葉にすればそれを直視しなければならなくなる。

左角の足が微かに震えるのに漣が気づいた。

高間宮王子が怒鳴った。

「何をしている、早く奴を殺せ」

漣にはわかっていた、既にあの左角という鬼には幸師匠の声以外、何も聞こえないことを。

あ、折れた、あかねが心の中で呟いた。左角が膝を曲げ、正座すると、幸に頭を下げたのだ。ここからでは、幸姉さんの顔は見えないけれど、慈愛に満ちた笑みを浮かべているのだとあかねは思う。幸は地面に降り立つと、左角をそのままに、黒達の元に戻ってきた。

「な。男なんてちょろいもんだろう」

にと笑うと幸が小さく呟いた。

「母さんってば」

黒が呆れたように呟く。

漣が幸に走り寄った。

「幸師匠」

「漣」

雪は漣をしっかりと抱きしめ、耳元で囁いた。

「漣、全ての存在が幸せな世界は論理的に成り立たない、世界が加速度的に膨張しない限りはな

。ただ、誰もが少しずつの不満を持ちながらも生きていく、そんな世界は可能だ。お前は母を殺した鬼を八つ裂きにしたいかもしれない、でも、それはお前自身の心を八つ裂きにしていくことでもあるのだよ」

幸は瞬きせず、漣を見つめ、もう一度、漣を大切に抱きしめた。

漣の頬が火照り、足に力が入らない。

「幸師匠のお考えのままに」

喘ぐように漣が呟く。

漣の力が抜けよろけそうになるのを、黒と三毛が走り寄って、漣を支えた。

幸は二人に漣を預けると、ようやく体を起こし、立ち上がりかけた高間宮王子の前に立った。

「よう、面白いことになったな」

幸は見上げると、高間宮王子の顔を見て笑った。

「お前、何をした」

「ん、ちょっとお話ただけさ」

幸はふわりと浮かび上がると、高間宮王子の目の前に浮かんだ。

「高間宮王子。お前、私の命令を聞け」

「なんだと。そんな女子供の言うことを、原種の鬼たる」

ぐいっと幸が自在の先端を高間宮王子の頬に押しつけた。

「な、何をやる」

押されたまま、呻いた。

幸は呆れたように息を漏らすと言った。

「わかってんだろう、あたしに勝てないってことがさ。だから、この棒を振り払うこともせず、状況に甘んじているわけだ。面倒くさいな、男ってのはよ」

「お、おのれ。小娘が」

歯ぎしりをするのだが、手が出せない。

高間宮王子は心の奥底から蠢きはいあがってこようとする感情、この恐怖という感情に初めて遇し、すぐにでもこの場から逃げ出したいと思っていた。しかし、その自身の感情を認め、逃げ出すことは原種の鬼として出来ようことではなかったのだ。

「お前は俺に何をせよと言うのだ」

高間宮王子が微かに俯き言った。

凄い、母さん、三毛が息を飲んだ。あの鬼を手懐けてしまった。あんな強い鬼を。三毛は黒に声をかけようとして黒のジャージの裾をちょっと引っ張る。漣を支えながら黒も頷いた。

「幸母さん、どうするんだろう」

「多分、漣ちゃんがうちで暮らせるように展開させるんだと思う」

黒が囁いた。そして、あかねを見る。あかねも頷くと、幸に視線を戻した。

「まずはあたしの前に並べ」

そして、幸は振り返ると金角に言った。



「右角を離してやれ、首がしまって白目向いているぜ」

幸が笑った。

「左角も来い」

幸の言葉に左角は駆け出す。五体の鬼が幸を前にし、神妙に正座した。

「高間宮王子、お前は鬼王の器じゃない。お前はたくさんの鬼の信頼を集め、治世を行うというより、体制に対する反逆者、歌舞伎者だ。わかるか、高間宮王子」

「歌舞伎者・・・」

高間宮王子が言葉を繰り返した。

幸はすいっと視線を巡らせると言った。

「一族と共に鬼王から独立せよ。そして鍾馗と連携せよ」

驚きのあまり、五人の鬼は口を開け放ち、呆然とお互いの顔を見合わせた。

「出来るはずがない」

高間宮王子が叫んだ。

「鬼王と、その近衛兵が怖いか。多くの鬼を敵に回すことに疎みあがっちゃったか」

幸が静かに言った。

「お前の領地は一部、鍾馗の国と接している。鍾馗の長と不可侵条約を結べ。鍾馗も戦で人口が減った。うまく交流すれば、お前の領地も今よりは豊かになり、誰もが少しずつの幸せを得ることが出来るだろう」

高間宮王子が俯き、ぐっと拳を握った。不安げに金角達が高間宮王子を横目で伺う。

黒があかねに囁いた。

「あかねちゃん、これって」

あかねは黒の横に寄ると呟いた。

「これは歴史的イベントです。鍾馗と鬼は数千年、争ってきました。それが一部とはいえ、和解するかもしれない瞬間です。大変な歴史的転換ですよ」

あかねが高間宮王子を見つめた。

高間宮王子が顔を上げ、はっきりと言った。

「わかった。鬼王から独立しよう。そして、鍾馗との交流も努力しよう」

幸はふっと笑みを浮かべると、小さく頷いた。

「高間宮王子、お前を認めてやろう。ならば、二つ、餞別をやる」

ふわっと幸の手のひらに硝子球が浮かんだ。

「まずは結界だ。お前の領地を結界で包んでやる。中から外へは出られるが、外から中には入ることが出来ない。門は鍾馗の領地側に一つ用意してやろう」

すいっと硝子球が消えた。

「さて、もう一つは鍾馗のことだ、これは長を呼び出せば早いな」

すっと幸が右手を横に伸ばす、その手が消えた。

「図体がでけえから重いな」

幸が勢いをつけて、右手を引き戻す。ぶわっと鍾馗の長がたたらを踏んで現れた。長には天井が低く、前かがみで、長が辺りを見回す。

「何処だ、ここは」

鬼が呆然とした表情で鍾馗に見入っていた。

「やあ、久しぶりだな、長」

声に長が振り返る、幸の姿を見つけた途端、怯むように体を後ろに引いた。

「なんだよ、可愛い女の子相手にさ。落ち込むじゃねえか」

幸が嬉しそうに笑った。

「お前は どうして」

「御足労痛み入る。なに、たいした用事じゃない。原種の鬼 高間宮王子が鬼王から独立した。長よ、不可侵の条約を結べ。高間宮王子には話を通してある」

高間宮王子も左角も、いまの状況をどう判断すればよいか理解できなかった。鬼王とも比肩するという、鍾馗の長を呪も唱えず力づくで呼び出し、いきなり命令をする。これは現実のことなのか、それとも長い夢なのか。

あかねは息を呑んだ。目の前で大変なことが起こっている。歴史的転換だ。

「これは、人の出る幕じゃないねえ」

呆然と口を開けたまま、啓介が言った。あかねはすっかり啓介の存在を忘れていたが、そんなそぶりは見せず、啓介の言葉に頷いた。

「叔父様、僥倖です。人の身でこの場に居合わせるのは」

啓介が頷き、見上げる。

一つの場所に鬼と鍾馗が争うこともなく、お互いを眺めている。共に次の言葉が整理つかないのだろうと啓介は思う。

それにしてもと思う。この幸という、あかねよりも少し年かきの女の子はいったい何物だ。無という希代の魔術師がいるという、あかねがその弟子なら、この女の子が無なのか。無についての情報は極端に少ないが、男性だったはずだ。なら、この女の子は無の娘と云うことか。しかし、たとえ、この子が無の娘としたにしても、遙かに人の域を越えている。

無とて人であるなら、その域は限れる。術も使わず鍾馗の長を呼び出すには、遙かに格が上でなければならない、人より上位の存在であるという鍾馗を呼び出すということは、この女の子は人ではないのか。

「叔父様」

あかねが啓介の上着の裾をそっと引く。俯いて考え込んでいた啓介が顔を上げたとき、信じられない光景が目の前に広がっていた。

鍾馗が片手、高間宮王子が両手で握手をしていた。

「叔父様、人は出遅れました」

「ああ、だね。でも、良いんじゃないかな。人は混乱をもたらすよ」

あかねは目を見開き、啓介の目を見つめたが、ふっと笑みを浮かべると、小さくうなずいた。

幸は長を送り返し、高間宮王子に言った。

「対等な条約だ、物怖じするなよ。正式な締結には私も行く、邪魔が入らないようにな」  
幸は笑みを浮かべると、言葉を続けた。

「善き心を育てよ」

高間宮王子一同、まるで幸の部下になったかのように深々と頭を下げる。幸は王子一同を送り返すと、ゆっくりと着地した。

「幸母さん、凄いです」

幸がにっと笑った。

「お父さん以外の男は単純だ、ま、これで、漣もうちで暮らし易くなる」

「それだけのために」

黒が驚いて言葉をついだ。

「ああ、そうだ、それだけだ」

幸がはっきりと言い切った。

ふっと幸は啓介を見つけ言った。

「二日後に条約締結だ、鬼紙家も一枚かんどけ」

「それは人を牽制するためですか」

啓介が言った。

「察しが良いな。ただ、人のお偉方を敵に回すかもしれない、臆したのならかまわないぜ」

「貴方を敵に回すより、ずっと素敵だと思います」

啓介は本心からそう言った。

「案外、あんたは当主に向いているかもな」

幸はそう答えると、気持ちを切り替えるように大きく深呼吸する。

そして、少し緊張した面持ちで唇を横に引く。しかし、ふっと力を抜くと、頬に両手を添えて口角を上げ、極上の笑みを浮かべた。

まるでドアを開けるように、空間がドアの形に穿たれ、目の前には、畑を背にした、なよが幸を睨みつけていた。

「わあ、なよ姉ちゃん、大好き」

ぱふっとなよに抱き着くと、幸はなよの胸に顔を埋めた。

「なよ姉ちゃんはおひさまの匂いがするよ」

ふっと幸は笑みを浮かべたまま、顔を上げた。

「だめかな」

「知らぬうちに抜け出しおって。わしの性分は知っておろう。許すと思うか」

なよは引きつった笑みを浮かべた。

「頑張って収穫します」

幸は素早く答えると、畑と駆け出した。ふと、なよは黒達が呆然とその有り様を眺めているのに気が付いた。

「ぼおっとするでないわ、もうすぐ運送業者がやって来おる、それまでに収穫を済ませねばなら

んぞ」

「はいっ」

あたふたと黒と三毛が畑へと走る、

「おや、漣ではないか、ちょうど良い、お前も手伝え」

「頑張ります」

あたふたと漣も畑へと走った。

「なんじゃ、あかね。そのおっさんは」

あかねも少し緊張しつつ、答える。

「あかねの叔父様です」

「ん、となると鬼紙家の当主か。なるほど、よう見れば、三代目とよう似ておる。初代と二代目までは野獣のような奴じゃったが、三代目はひ弱でう。ま、鬼紙家の当主ならばこちら側の人じゃ。遠慮なく、収穫を手伝うてよいぞ」

「叔父様。なよ姉様の気が変わらぬ内にどうぞ」

訳の分からないまま、啓介もあかねの後を追った。

なよは切り取られた空間を覗き込み、地下の様子を眺めた。

「なるほど、高間宮か。あいつは阿呆じゃからな、扱い易いわい」

なよは撫でるようにして空間を綴じる、目の前には、いつものように裏庭に面した洗濯物が翻っていた。

「なよ母さま。後で、皆さんに謝ってください」

小夜乃がキャベツを幾つも抱え、なよに言った。

「小夜乃は厳しいのう」

頭を抱えるように、でも、何処か嬉しそうになよが答えた。

「なにやら、デパートなるものと、約束してフェアだとかいうものをするというから、このように慌しくなるのです。これでは、商店街に買いに来てくださるお客様の分がなくなります」

「悪い、悪い。今回だけじゃ、勘弁してくれ」

なよは、小夜乃の抱えていたキャベツを下から抱えあげた。

「ああ、忙しい、忙しい」

逃げるようになよが行く。

「もう。なよ母さまったら」

小夜乃が仕方なさげに呟いた。

(後半、面倒くさくなり、随分と端折ってしまいました。後日、文章を付け加えるかもしれません 2014.06.10)

## 遥の花月の糸 四話

---

### 異形月の糸 四話

「あのね。お父さん、いいかなあ」

夜、襖の向こうで黒の小さな声がした。

男は椅子に座ったまま、視線を襖の向こう、黒、白、三毛の姿を捉えていた。

「どうぞ、お入り」

男が声をかけると、三人が俯き入って来た。

「どうしたんだ、暗いなあ」

突っ立ったままの、三人に笑いかけた。

「布団の上に、お座り。いいから」

男が促すと、おとなしく、三人、布団の上に正座をする。

「何か悩み事かな」

我慢しきれなくなったのか、俯いたまま、黒がぼろぼろと涙をこぼす。

男は椅子から離れると、三人の前に座った。

「なんだか、大問題のようだな。よし、父さんが解決してやるぞ。だからね、何があったのか話  
しなさい」

それでも、黒はしばらくの間、声に出せず俯いていた。

「黒は、役立たずです」

消え入るような声で、黒が言う。

男は静かに黒を眺め、その頬に右手を添えた。

「父さんも幸もね。黒が役に立つかどうかなんてね、考えていない。ただ、自分達の娘が幸せに  
楽しく生きていきますようにってね、願っている。まずは、それを忘れないでくれ」

男はそっと手を戻すと、笑いかけた。

「昨日、たくさんの鬼と戦ったらしいね、最後には高間宮の原種の鬼まで出て来たそうじゃな  
いか、大変だったな」

「お父さん、あのね」

黒が顔を上げ、思い切ったように男を見つめた。

「黒は一体も鬼を殺せませんでした。漣ちゃんはいっぱい鬼を殺すことができたのに、黒は殺す  
のが恐くて、気絶させるのが精一杯で役に立たなかったんです」

「戦いの中で、技術的には、殺すよりも、無傷で気絶させるのが方が難しいんだけどな」

男は立ち上がると、椅子に座り直した。

「それで黒はどうしたいんだ」

黒は顔を上げ、男の目を見つめた。

「鬼を殺せるようになりたい。ためらわずに殺せるように」

男は天井を眺め、しばらく考えたが、黒を見つめると、静かに言った。

「それはだめ。だって、自分の可愛い娘が、鬼であろうとさ、命を奪うのをね、求めることなんかできないよ」

困ったなあ、男は呟くと、ほお杖をつき、うーんと唸る。

ふと、男は黒をじっと見つめると、優しくささやいた。

「ひょっとして、鬼は悪い奴って、黒は考えていないかい、白や三毛は、鬼をどう思っている」三人とも驚いて、目を見開いた。男が何を言おうとするのか、全く想像できなかったのだ。

男が呟くように語りだす。

「歴史の話をして。今から、一千年と少し、昔のことだ、人と鬼との百年戦争があった。すべての史書からその存在は抹殺されている、それほどの忌むべき戦争だった。なよは、月からやってきた戦争の調停者だ。なよを中心とした人と鬼の有志により、戦争は終わったのだけれど、お互いの恨みや怒りはそう簡単には消えない。そこで、人と鬼の不可侵の条約が結ばれたんだ。人と鬼は一切関わらず、その存在を互いのお伽話の中に封じ込めたわけだ」

男は三毛に笑みを浮かべた。

「三毛は桃太郎のお伽話を知っているだろう」

「は、はい」

戸惑いながら、三毛が答えた。

「鬼の世界でのお伽話にも、桃太郎というお伽話がある。悪い人間を退治するってね。つまりは悪い人間がいると同様、悪い鬼がいて、そういうのがこちら側に干渉し、人の前に現れる。つまり、黒も白も三毛も、ある特定の鬼しか見ていないから、鬼全体が悪と誤ってしまうわけだ」

「でも、鬼は、角のある鬼は」

白が反論しようとして、はっと気が付いた。

「小夜乃は角のある鬼だけど、白の大切な家族だろう」

白は小夜乃の笑顔を思い出した。白姉様と笑顔を浮かべる、とても大切な妹だ。

「小夜乃は、なよが無茶を言ったり、怒ったりすると、身を呈してなよを勇めようとする。それは母親のなよがとっても大切に、なよがみんなに嫌われてしまわないように願っているからだろうね」

ごく少ない機会だが、小夜乃を連れ、町に出ることがある、三毛は思う。少し、不安げにぎゅっと手を繋ぐ小夜乃、その手が不安を伝えている。でも、にっと笑みを浮かべるのだ、そして言う、三毛姉様、ありがとうって。

男は言葉を続けた。

「一千年以上の時を経て、人と鬼を分け隔てる仕組みが機能しなくなったし、それに乗じて、暗躍する人も鬼も増えた。出会わない方が幸せなこともあるのだけれどね」

男は柔らかな笑みを浮かべると、順に三人を見つめた。

「戦うって言ってもさ、戦い方は無数にあって、直接的に相手に危害を加える戦い方は、その一

つにしか過ぎないってことを忘れないでくれよ」

男は黒の頭に右掌を載せ言う。

「黒が幸せでありますように」

同じように白と三毛にも祝の言葉を言う。

「お父さん、ありがとう」

黒がほっとしたように言った。男は笑うと言葉を続けた。

「鬼も婚姻により子を成す。金角には息子が一人、銀角は一男一女、右角は娘が一人、左角は息子が一人。子供をもつ親でもあるということだ」

三人は納得した、一面からしか、世界を見ていなかったことに。

「さて。お悩み相談は終了でいいかい。父さん、眠いよ」

男を残し、黒と白と三毛は、しっかりとお辞儀をし部屋を出る。

声が出せないほど、価値観の変化に興奮していたからだった。

男はふっと力を抜くと、壁に背中を預けた。

「散々、人も鬼も殺してきて、こんなことを言うなんて、茶番もいいところだな。幸乃、父さん、なんだか、三人に申し訳ないよ」

始めからいたように幸乃は男の隣りに、壁に背を預け現れる、そして、男の頭に手を載せる。

「幸い、幸い」

幸乃がそっと笑みを浮かべた。

「幸と幸乃は、常におまえ様を肯定しております。お忘れなさいませぬよう」

「十分休憩」

そう智里は、冷たく平次に言い残すと、なよの元へと戻る。梅林での早朝の習練に平次はぐったりしていた。

「お疲れさん、赤光の殺し屋と言われた智里さんだ、さすがに良い動きをするなあ」

気楽そうに啓子は平次に笑いかけた。

「あんた、誰だ」

平次は啓子の気配に全く気づかなかったのだった。いつから隣りにいたんだ。

「二十分くらいは二人の格闘を見ていたよ、ここで。しかし、平次さん、手加減してもらえてよかった、よかった」

気楽そうな啓子の言葉に、悪態の一つも返したかったが、平次は黙り込む。ここの奴らは、己と強さの質が違い過ぎる。

「あんたら、なんで、そんなに強いんだ」

「いやいや、あたしはそんな強くない」

ぱたぱたと啓子は手を振った。

「あたしは並です。ああ、あたし、啓子。名前、名乗ってなかったよね」

「俺は・・・、ああ、知っているんだっとな」

啓子は面白そうに笑った。

「鬼紙平次。あかねちゃんの策にまんまと引っ掛かった、優しくて生真面目な兄さんだ」

「策なんて言うな。あかねお嬢様は御当主の守り人に俺をお選びになった、そして、俺はあかねお嬢様のご期待に答えるよう努力する、それだけのことだ」

女で苦勞する口だなと、啓子は思ったがおくびにも出さず、笑みを浮かべた。

「あかねちゃんの目は確かだと思うし、しっかり励んでください、では」

鍬を携え、啓子は平次を後にした。

ぱたぱたと白と小夜乃が駆け寄ってきた。白は丸めた銀色のマットを抱えている。

「平次さん、おはようございます」

白が声をかける、平次は軽くうなずくと言った。

「おはよう。白と小夜乃だったかな」

「はいっ」

元気に二人は返事をする、平次の足元にマットを広げた。

「次の練習のために、平次さんの体を整えます。仰向けに寝てください」

白はそそくさと、平次を仰向けに寝かせつける、そして、マッサージを始めた。

「小夜乃ちゃんは平次さんの首回りをお願い」

「わかりました」

平次にはいま何が起きているのか、理解できなかった。白の手が肩に触れたと思った途端、仰向けに転がっていた。ここの女達は一体、何者なんだ。まるで、俺は木偶の坊だ。

ほぼ、年齢と同じだけの年数を修行に費やしてきたはずだ、命を賭した戦いを繰り返した、なのに、なんだ、この無力感は。

「なに、ガキが深刻な顔をしておる、見事に似合わんぞ」

なよがにいいと笑い、平次の顔をのぞき込んでいた。

一瞬、頭で考えるより早く体が動こうとする、体が動かない。

「だめですよ、平次さん。施術中です」

気楽に白が笑った。

「お前はまな板の鯉と同じじゃ、じっとしとれ」

どうとでもなれと、平次はぎゅっと眼を瞑った。

「緊張はだめですよ、力を抜いてください」

白が声をかける。なよが笑った。

「緊張するななどと、白は難題を言いおるな。間抜け面を拝みたいが、畑に啓子が来ておる。ちと、邪魔しに行くかな」

啓子かというと、鍬で畑の畝たてをしていた。崩れた畝を修正する作業だ。

「熱心じゃな、啓子」



「やあ、なよちゃん」

「なにが、なよちゃんじゃ。調子の狂う奴じゃな。人の姿でわし程、長生きしている奴はそうそうおらんぞ」

なよは落ち着いた笑みを浮かべ、ふわりと空中から鍬を取り出すと、啓子の反対側を作業しだした。

ほおと、啓子が声を上げた。

「いつも、思うんだけど、どうやっているの、空中から簡単に物を取り出すの。父さんや幸ちゃんも簡単に棚から取り出すようにするけれど」

「たいしたことはないわい。昔の術師なら大抵の者が使うておった。旅するに便利じゃからな。もつとも、ここで使えるのは他にはあかねくらいか。黒も使えんようじゃしな。いや、黒は妹達が危機に陥った時は使いおるのう」

ふと、なよがいたずらげに笑みを浮かべた。

「それより、お前、平次に会ったであろう。鬼紙にはひどい目にあつたお前じゃ。意趣返しに、稽古と称して苛めてはどうじゃ」

なよの言葉に啓子が笑った。

「なよちゃんは悪いこと言うなあ。大学出て、入った会社が実は鬼紙家の財産管理会社、洗脳されて、有象無象の戦闘員、全身タイツに仮面被って。子供向けのテレビドラマかってなもんだけど、まっ、幸ちゃんに出会えたので、ちゃら、ううん、おつりが返ってくるよ」

啓子は手を止めると、ふっと家の方を眺めた。

「結婚は出来なくなったけどね」

「なんじゃ。農家に入入りして、引く手あまたであろうに」

「うちの嫁に来てくれ。言われるけどね、幸ちゃんを思うと、どんな男も頼りなくてガキに見えてしまう。どんな、いい男を前にしても、尊敬出来ないっていうのかなあ」

「それは重症じゃな。どんな医者でも治せんわい」

なよが呆れて笑い出す、啓子も少し恥ずかしそうに笑った。

「戸惑うな。術で蹴り足は折れないようにしているはずだ。気合入れて、蹴り出せ」

智里が小声だが鋭く声を発した。

智里が右手を前に差し出し、平次がそれを蹴り上げる。あまりにも単純、簡単なことのはずだ、なのに。

まるで鋼鉄の塊を蹴ったような感触だ、足に術をかけていなければ確実にこの足が折れていただろう。

たかが手の平、それも女の小さな手だ。それがどうして鋼鉄の塊を蹴るような衝撃が返ってくるんだ。

最初は自由に組み手をしていたのが、単純な単式練習になる。これでは習い始めのガキではないか。

その様子を見ていた白が思いついたように黒と三毛を呼んだ。

「黒姉ちゃん、三毛」

三毛がエプロンをしたまま駆けてくる、かぬかにうどんの打ち方を教わっていたのだ、黒も御煎餅をくわえながら、

「また、黒姉ちゃん、つまみ食いして」

白が睨むのを恥ずかしそうに黒が笑った。

「黒姉ちゃん、三毛。平次さんを動かします」

白が声をかけると、二人も平次の後ろに回った。

「智里さん。自由組み手をお願いします、平次さんを三人で動かしますから」

白の声に、智里は瞬時に状況を理解し、正面から平次の顔面を右拳、打ち込んだ。同時に黒が平次の左手を掴み、その手を智里の腕に添える、白が平次の右腰を蹴り、左半身に開かせる、三毛が平次の腰を両手で前方に押し出した。黒が平次の左手の平を智里の肘、肩へと流し、智里の顎の下へ、三毛が平次の右太ももを両手で掴み、右足を智里の背中側に引っ張る、白は飛び上がると、平次の両肩を上から落とし、姿勢を落とす。上反りになった智里の横、三毛は浮かび上がると、平次の右手を逆手に持ち、智里の胸の間、急所に肘を落とす。

当たる瞬間、智里は腰の力を抜き姿勢を落とそうとしたが、平次の右足に当たり、落とせない。

三毛は瞬間、手を引き戻す。三人がぱっと平次から離れた。

「平次さん。経験です、一度、速い動きを経験すれば、上達が早まります」

白が言うと、黒がずっと平次の背後に立ち、右肩を押す、三毛が姿勢が崩れないように、平次の腰を支える。

なんて、練習だ。智里はひたすら防戦に回りながら三人の連携に驚いていた。

茫然と小夜乃はその様子を見つめていたが、はっと気づくと智里の後ろに回った。

「智里さん。がんばれ」

三毛の帰りが遅いとかぬかもやって来た。小夜乃が懸命に智里を応援しているのを見て、とにかく判官びいきのかぬかも、小夜乃の横に立って叫んだ。

「しっかり、智里さん」

智里は驚いていた、自分が声援されている。

こんなことは初めてだ。常に影の存在で戦う姿を見られることもなく、修行時代、いままでの師匠達からも罵声しか浴びたことがなかった。欠点を挙げつられ、否定されることしかなかったのに。

「面白いことをやっておるな」

小夜乃の声を聞きつけ、やってきたなよと啓子は二人の様子を興味深そうに眺める。

「智里が見るからに劣勢じゃのう」

「そりゃ、そうですよ」

多分、平次がいなければ、そく3人は智里を制していただろうなと啓子は思うが、それをいうと

平次がかわいそうだなとも思う。言わぬが情けというやつか。

不意になよが啓子の腰、後ろに手をやった。

「啓子。お前も参加してこい」

ぐわっと啓子の体が浮いた。なよが右手だけで、啓子を智里に向けて投げ飛ばしたのだ。

高さ三メートルは充分、足から着地した瞬間、前転、空中で受け身を取り、勢いを抑えようと、啓子は智里の後ろに潜込んだ。低い姿勢から、智里の両肩の中央に右の掌を添える。

すいっと啓子が右掌を右の肩に流す、スイッチを押されたように、智里の右手が伸びる、平次は流しきれず、両手で智里の 掌打を搦め捕ろうとする、まるで蛇だ。

智里の腕がまるで蛇のように平次の防御を擦り抜ける、すいっと啓子が智里の左肩を右に押す。弾かれた、平次の腕の中で、何かが爆発した、素早く黒が平次を後ろに引き、間合いを開ける。

「今のって」

知里が呟いた。

「虚実の掌打。虚から実に変化することで、全方位に衝撃を与える」

啓子は簡単に解説すると、言葉が続けた。

「次は蹴りでやってみよう」

開いた間合いに、智里の左の蹴りが走った。

「若い人は元気だ」

男がなよの横で呆れたように言う。

「二人とも強くなるぞ」

なよが男に言った。

「まあ、平次君には一週間しかないからさ。でも、そろそろかな」

男の言葉になよが頷いた。

「双方やめい。そこまでじゃ」

なよの言葉に二人と四人、瞬時に固まった。

「黒白三毛、平次の筋肉を解せ。特に白、血流を調整じゃ」

なよは言うのと、知里に歩み寄った。

「知里、勉強になったか」

「は、はい」

「よし」

なよは小夜乃に向き直った。

「知里の筋肉を解せ。それから、かぬか。お前は風呂をわかして来い」

「わかりました」

かぬかが家へ向かって走る。小夜乃が知里を座らせるのを確認した後、なよはにっと啓子に笑いかけた。

「啓子。いつの間にやら、随分、強くなったではないか」

「え・・・」

微かに啓子の顔が引きつる。

「何をびびっておる、単純に褒めただけじゃ」

呆れたようになよが笑った。

「えへへ。頑張りました」

「虚実は刃帯儀の基本じゃ。ついでに教えてやろう」

「いいの。これからは、なよ師匠と呼ばせていただきます」

啓子が目を輝かせた。

「いらぬわ。今まで通りで・・・、いや、ふむ。普通になよ姉さんと呼べ。そうじゃ、啓子は知里に虚実を教える。いずれは知里にも刃帯儀を教えるつもりじゃが、基礎の基礎から教えるのは面倒じゃ。わかったな」

ふっとなよが家の方を見る。

「風呂が沸きだしたようじゃ。啓子、知里をおぶって風呂にほうり込んで来い。小夜乃も行け」

「わかりました、なよ姉さん」

啓子は元気に返事をする、軽々と知里を背負った。

「啓子さんは嘘つきですよ」

小さく、知里は呟くと恨めしげに睨む。

「ええっ、そんなことないよ」

「啓子さん、自分は農業要員で格闘技なんて全然、っておっしゃってました」

啓子が楽しそうに笑った。

「ごめん、確かにそう言った。だってさ、面倒臭いもの」

啓子は正直に言うと、ごめん、ごめんと言葉を重ねた。

三人を見送り、なよは平次の顔を覗き込んだ。

「少しは息が整ってきたようじゃな。父さんも絶妙なところで止めおるのう」

既に、男は姿を消していた。

「あの啓子という女」

平次が呟いた。

「俺にも自分は並だと言っていた」

愉快になよが笑った。

「それは本当じゃ、ここでは並の腕前じゃ」

幸はあさぎの隣りに立つと、見上げてにっと笑った。

喫茶店、モーニングの客が帰り、ほっと一息つく時間。

「あさぎ姉さん、お疲れさま」

「幸こそ、手伝ってくれてありがとう」

幸は少し恥ずかしげに微笑むとカウンター、目の前の客に笑いかけた。

「まだ、お客さんが一人残ってんだけどね。しっかり終わった感で喋られるのはなあ」

佳奈がちょっと拗ねたように言う。

「しょうがないよ。佳奈さんは身内だからさ、手伝ってくれてもいいくらいだよ」

「接客は魚屋で勘弁してよ、たまには私も客でいたいんだから」

幸は笑うと、佳奈の隣りに腰掛けた。

「どうしたの、佳奈姉さん、落ち込んでる」

佳奈は俯き溜息を漏らすと、呟くように言った。

「私、おばあちゃんになるかもしれない」

「えっと、それは」

幸がそっと笑みを浮かべた。

「健君が十八歳、恵美ちゃんが十六歳だったよね。どっち」

俯いた佳奈が呟いた。

「恵美が妊娠していた」

「ということは」

幸が言葉をつないだ。

「相手の男から、慰謝料ふんだくった上で、殴りつけてボコボコにして、簀巻きにしてどぶ川にほうり込めばいいんだよね」

幸は椅子から降りると、にっと笑った。

「女の敵は許さない」

慌てて、佳奈が手を振った。

「いや、あの、そこまでは」

「馬鹿者」

なよが裏口から店に飛び込んでくると、幸の頭をはたいた。

「ものには加減というものがあるわ。それに、佳奈、幸の極端な男嫌いは知っておろうに。こやつに相談すればどうなるか考えろ」

「だって、なよ姉さん」

拗ねるように言う幸をなよがぎゅっと抱き締めた。

「その男に母親が居れば、お前を憎み続けるじゃろう、それが恨みの連鎖になる。たとえ、居らずとも、お前の行為による禍根はあちらにもこちらにも穿たれることを忘れるな」

なよは力を緩め、幸に言った。

「カウンターを見てみい」

あさぎがカウンターの向こうで震えながらしゃがみこんでいた。

「あさぎ姉さん」

幸が呟いた。

「姉をびびらせるのではないわい」

なよは振り返ると、あさぎに声をかけた。

「いつまで、狼狽えておる、顔を出せ、あさぎ」

「は、はいっ」

あさぎは立ち上がると、はにかみながら幸に言った。

「頼りない姉でごめんね」

幸が大きくかぶりを振り、小さくごめんなさいと呟いた。

なよは大きく息を吐き出すと、カウンターに腰掛けた。

「片手間に、鬼と鍾馗の条約を締結させたと思えば、この有り様、釣り合いが悪いのう。ま、それも、幸、お前の個性じゃ」

なよは笑みを浮かべると言った。

「あとはわしに任せろ。父さんに泣きついてこい」

なよが幸の背中を押す、唇を噛んで幸は、自分が泣き出すまでに男にしがみつきたいと走った。

なよは小さく吐息を漏らし言った。

「さて。恵美はどうしたいと考えておる、いや、佳奈、何故、恵美が妊娠していると気づいた。

恵美が言うたのか、それとも頭の中、覗いたのか」

幸は川で釣りをしている男の背中にしがみついた。男はすっと顔を上げる、それと同時に二人を水の結界が包み込んだ。

「どうしたんだ。泣いてさ」

「幸は悪い娘です」

「ん、幸は善い娘じゃなかったのかい」

「だって・・・」

男は少し笑うと、竿を横に置き、幸に振り返った。

「なるほど、あさぎを恐がらせてしまったか」

男は人差し指で幸の涙を拭った。

## 遙の花 月の糸 蛇足 佳奈のこと

---

異形 月の糸 蛇足 佳奈のこと

異形 月の糸 蛇足 佳奈のこと

佳奈はカウンターの椅子に腰をかけると、小さく吐息を漏らした。

「どうしたの、佳奈姉さん」

幸は隣に座ると、心配そうに佳奈の顔を覗き込んだ。

「幸に話してご覧、悩みを共有するだけでも、ちょっとくらいほっとするよ」

幸がやわらかな笑みを浮かべた。

佳奈は大きく溜息をつく、顔を上げた。

「15の娘に赤ちゃんが出来て、たくさん言いたいこともあるけれど、それは主に不平不満だけれど、良くはないけど、まっ、いい、堪える、我慢する。もう、気持ちいっぱいだけども、堪える。そう思っていたのに、今度は兄貴の隆志が、彼女を連れてきたんだよ。生まれて初めての彼女を」

「ふうん、良かったんじゃない、隆志君って、目立たないし、地味だし、ぼおっとしているし、彼女ができるなんてお祝いしなきゃならないくらいだよ」

佳奈はより大きな溜息をつくと言った。

「一応、あんなんでも一人息子なんで、言葉には気をつけてください」

幸はいたずらけに笑うと、ごめんなさいと付け加えた。

「つまりは、可愛い息子を何処の馬の骨ともわからん女に盗られて、佳奈姉さんはいらいらしているわけだ」

やっと、佳奈は幸に向かい合うと、ぽつりと言った。

「あんなんじゃ、一生独身かと思っていたから、彼女の一人も出来て、ちょっと安心したんだけど、その、彼女がさ」

「なるほど、彼女さんの心を読んだってこと」

幸の言葉に、佳奈が頷いた。

「個人情報を守りろってなもんだけどさ。でも、気になるよ、凄い美人さんでさ、なんでこんな子がうちの隆志と付き合うんだ、もっと良いのがいるだろうにって思うよ」

幸がそっと微笑んだ。

「幸はお父さん以外の男は滅ばいいくらいに思っているからさ、隆志君は佳奈姉さんの子供って認識しかないんだ。ただ、佳奈姉さん自身が隆志君をもっと認めてあげる方がいいとは思うよ」

」

「ありがとう、幸ちゃん」

「気が晴れたって顔じゃないなあ。で、彼女さんは何を考えて隆志君と付き合っているの」  
初めて、佳奈は幸の目をじっと見つめ言った。

「壁みたいなものが間にあって何も読めなかった。そして」

佳奈が言いよどんだ。しかし、思い切ったように言葉を続けた。

「ぎろって睨まれた」

幸が新しいおもちゃを手に入れた子供のように、笑顔を浮かべた。

「それは、一度会って、じっくりとお話してみたいなあ。心を読まれないように障壁を作る技術は、きちっと、そのように訓練しなきゃならないんだ。何処で教わったんだろう」

ふと、幸は慌てたように居間の方角を見つめた。

「ごめん、佳奈姉さん。急用だ、ちょっと行ってくる。なよ姉さんに来てくれるように頼むから

」

幸が佳奈の返事を待つ間もなく、奥に駆け込んだ、途中、段差に躓きそうになる、かなり慌てた様子だ。

「えっと、幸ちゃん」

「幸は急用じゃ」

なよが奥からにたにたと笑いながらやってきた。

カウンター越しに佳奈の前に立つ。

本当は男が箒で居間の掃き掃除を始めたのを察して、慌てて、ちりとりを片手に参じたという、幸が嬉々として、ちりとり片手に男の掃除を手伝っている様子を、なよもまさか、正直に言うわけにもいかず、つい、顔が笑ってしまったのだった。

「ま、命に別状のある話ではない。さて、内容は把握しておる、その彼女とやらに、わしも会うてみたいが、どうすれは会える」

「あ、あの。もうすぐ、ここに来ることになっていて」

「なんと、重畳。手回しの良いことじゃ」

ふと、なよが店の向こうを俯瞰するように眺めた。

「二人歩いて来おる、角を曲がった」

なよが目を見開き、嬉しそうにうなった。

「面白いことになるぞ。さてな、黒達は珍しく学校。小夜乃には灰汁が強すぎる。智里には荷が重い、これも経験か。ならば、今後、ホンケを支えることになるやもしれん、かぬかにも見せてやらねばなるまいな。智里、かぬか、来い」

なよが呟いた。

間を置いて、二人がなよの元に駆けつけた。

「なよ様、参りました」

智里が呟いた。



「智里、かぬか。気配を消せ、魚が餌をつついておるぞ」

喜色万遍、なよはカウンターに陣取っていた。

佳奈以外の客は返し、あさぎも奥へと避難させる。店には、テーブルの椅子に座る佳奈と、佳奈をはさむように座る智里とかぬか。

「隆志、隣の娘を紹介せい。まさか、俺の彼女などとは言わぬじゃろうな」

隆志がはにかむような戸惑うような、笑顔で視線を隣に移す。

隆志にとって、なよは家庭教師でもある、自分が大学には入れたのも、素直に認めたくはないが、なよのおかげだと思っている。

真面目な顔をして隆志が答えた。

「利藤さん、利藤夕子さん、俺の彼女です」

「なんとな、お前に彼女か」

なよは芝居じみた大袈裟な様子で驚くと、呵呵と笑った。

「ガキじゃ、ガキじゃと思うっておったのに、いつの間にやら、彼女を連れてくるような男になっておったとはな、成長したものじゃなあ」

なよは隣の利藤に目をやると言った。

「何処が気に入ったかはしらんが、わしはこいつの叔母のような者じゃ。ちと、こいつは面白みに欠けてはおるが、人の出来としては良いほうじゃ。仲良くしてやってくれ」

利藤夕子と紹介された女は、無表情のまま、なよを微かに見上げた。

「まさか、かぐやのなよ竹の姫がいるとは思ひもしなかった」

ついと、なよが視線を智里に向けた。智里は一瞬にして、隆志の背後に立つと首の付け根に手を触れる、かくっと隆志が意識を失い、智里は軽々と引き上げると、隆志を抱えたまま、家の奥へと駆け込んだ。すいっと、かぬかが、佳奈をかばうように立ち上がる。

「困った奴じゃのう、甥っ子が傷つくではないか。自分が道案内に使われただけなどと知れば」

「町全体に広範囲の術がかけてあるのは知っていた。術を使う者には、街が霧に深く覆われ、一寸先も見えない」

利藤は答えると、振り返り、佳奈に言った。

「ご子息に危害を加えるつもりはなかった、ただ、心を傷つけたことは申し訳ないと思う」

表情を変えぬまま、利藤が佳奈に頭を下げた。

智里が店に戻ってきた、ちりとりを片手に幸が智里の後ろを歩く、智里はまったく、いや、気づいたのはなよだけだ。幸は利藤の背中に腕を溶け込ませると、なにやら小さな機械を取り出し、カウンターの上に置く、そのまま、佳奈の手をとると、奥へと戻った。

なよは、興味深そうに3センチほどの小さな機械をつまみ上げると、じっくり覗きこんだ。

「神経の途中で、情報を伝送するようになっておる」

利藤が振り返り、なよが興味深そうに機械を見ているに気づき、驚きに目を見開いた。

「なるほど、お前の見たもの、聴いたことが、そのまま、中継されるということか。少し、言うてくれれば、紅の一つも引いたものを。気が利かぬのう」

なよが、親指と人差し指で、その機械を押しつぶす。

にかっとなよが笑った。

「耶蘇教の天使よ。神に地上へと蹴落とされ、政府の雑用係に転職したか」

「お前に語る必要はない」

天使が呟いた。智里が動く、天使の後頭部に鋭い蹴りをまさしく突き刺す、微かに天使が首を振った、弾かれ、智里が天井に激突する、寸前、かぬかが飛び上がり、智里を抱きしめ着地した。

「智里、かぬかよ。まあ、一年待て。さすれば対等に戦えるくらいの力をつけてやろう。こやつは、天使の中でも、神が他宗教の者達を邪悪として制するための、剣を携えた武装天使じゃ、剣呑、剣呑」

なよは楽しそうに笑った後、天使の目を静かに眺めた。

「お前はなるほど強そうじゃが、わしの敵ではない。ただ、まさしくこの国の政府がわし等を滅しようとして送り込んだのが、お前じゃ。お前の記憶にそうある」

一瞬、天使がうろたえた。

「わしに記憶領域の障壁は意味無いぞ、お前の頭の中なんぞ、硝子張りじゃ。しかしのう、わしはお前より強いし、わしより強い者がこの家にはおる。役不足のお前をなんで送りこんだのじゃろうな」

「役不足かどうか、お前のその眼で判断すればいい」

天使は一步、退くと呪いを唱える。

「天使が呪文を唱えるか」

なよが笑う。そのなよの前に突き立てるように刃の先端が空中から突出した、剣の幅が二メートルはある、突き刺すだけで、なよの体がまっ二つになるような大振りだ。

しかし、その剣は微動だにしない。天使の呪いに力が入る。

ほんの一センチ幅の刃帯儀がその剣先を押し返していたのだった。

「わざわざ、呪いを唱えてその程度とはのう、神の軍勢もたいしたことないのう。うん、そうか、軍勢か」

なよが天井を見上げた。

「見つけた。対鬼用に構成した政府の呪術集団が押し寄せてくるわい、なるほど、呪術者はこの町には入れん、お前は奴らの道案内役か」

なよは振り返ると奥に声をかけた。

「幸、来い」

「はい、はあい」

男と掃除が出来て機嫌の良い幸が顔を出した。

「幸、奴らに観光をさせてやれ」

「何処がいい」

「折角じゃ。人が多くて賑やかなところが良いのう」

「それじゃ、ニューヨーク、ブロードウェイに送るよ。大評判の催し物になるかもしれない」

「これはテレビが楽しみじゃのう、そうしてくれ」

幸は頷くと、何事も無かったように家の中へと戻った。

なよは、停止したままの剣の先端を摘むとぐっと力を入れる。そして、剣を押し戻し、剣そのものを消し去ってしまった。

「敵を騙すにはまず味方からというが、本来の説明もされず、鉄砲玉のようにここにやってきて、拳句の果ての醜態。なにやら、哀しいのう、もらい泣きしてしまうわい」

呵呵となよが大笑いをする。

「いや、すまん。せめて涙の一つも流してやろうと思ったが、つい笑ってしもうた」

天使は呆然とし、力が抜けたように、床にしゃがみこんでしまった。

「あ、あの。天使さん、うまくいかないときもありますよ、あまり、落ち込まないで」

あたふたとかぬかが天使に言った。ぎっと天使はかぬかを睨みつける、その頬に涙が一筋流れた。

「おいおい、かぬか。天使様は耶蘇教の神様の御使いぞ、わし等、下々のものがそのような口を利けば失礼に当たるぞ」

嬉しくてたまらないと、なよの言葉尻が、笑いを堪えるように震えた。

「うわああん」

大声で天使が泣き出した。ぼろぼろに涙を流し嗚咽する。

ふっとなよは寂しそうな表情を浮かべたが、すぐにその表情を消すと、カウンターを出て、大泣きしている天使の後ろに立つ。右手で天使の背中に触れ、すいっと左右に手を払う。ぶわっと天使の羽根が左右に広がった。店の幅いっぱいでありそうな、しかし、それは純白の羽根ではなく、灰色に斑になっていた。

「聞け、かぬか、知里。天使は神が自分の手足の代わりにと創りだした生命じゃ。お前達も思うじゃろう。自分の手足が自我を持ち、泣いたり、笑ったりしだしたら、異様に思うであろうし、なんとか自我を消そうとするであろう。神も同じじゃ、純粹無垢、己に従うだけの存在が自我に目覚めれば、その天使を潰し、漂白して、それを材料に新しい天使を創る。しかし、どうしようもない者は地上に放逐する。落ちた天使はそのまま消えてしまうか、墮天使、悪魔という存在になる、神は同時に成敗する対象を作りだすわけじゃ、マッチポンプというやつじゃな。こやつは戦闘の前線で強い自我を生み出したのじゃろう。神がわずらわしく思うくらいいな。よし、かぬか、わしの矢立てを持ってきてくれ」

かぬかは茫然とした表情でなよの話聞いていたが、急いでなよの矢立てを取りに走る。

「知里よ。お前はわしの手足ではない。小夜乃同様、大切なわしの娘じゃ。わしはそう思うておる、そのこと、忘れるなよ」

なよの言葉に智里は胸が一杯になり、声を発することも出来ず、ただただ頷いた。

戻ってきたかぬかがなよに矢立を渡す。なよは受け取ると、嗚咽している天使の羽に文字を書く。

「なよ姉さん、これってなんて」

「わしの名前をラテン語で書いただけじゃ。こやつに手を出すということは、わしと一戦交えることを覚悟せよということじゃな」

いたずらげになよが笑った。

「泣くな」

なよが天使の頭を軽く叩く。天使が肩を震わせながらも、ぐっと口を閉ざした。

なよは天使の前に立つと、そのまま正座し天使の目をひたと見つめた。

「お前が、地上に落とされてからの、様々の災厄、悲しみ、絶望、迫害、忘れろとは言わん、ただ、それに引きずられるな、溺れるな。大望があるなら、ここでわしの妹として生きろ。しっかりと望みが叶えられるだけの力をつけてやるわい。わかったか」

天使が唇を嚙締め、しっかりと頷いた。

いつの間にか、幸がカウンターにいた。

「夕子お姉ちゃん。なよ姉さんの妹、幸です。よろしく」

にと幸が笑みを浮かべる。天使が泣きぬれた瞳のまま、そっと笑みを浮かべた。

幸も笑みを返す、しかし、ふと、奥に視線をやった。

「おっと……。目を覚ましたみたいだよ」

隆志が、ばたばたと奥から店に駆け込んできた。

「夕子さん」

なよと天使は隣り合ってテーブルの椅子に座っていた。

「なよ先生にいじめられなかった」

「なんという言い草じゃ。お前、わしに感謝の言葉はなしか」

隆志はうっかり口走ってしまったことに慌てながら、心の中ででもでもと呟く。

「気を失ってしもうたお前が居らぬ間、彼女が帰ってしまわぬよう、場を取り持っておったというに、感謝もせんとおるとは、つまらん生徒を持ってしもうたものじゃ」

なよが特大の溜息をつく。

「ご、ごめんなさい」

「まあ、良いわい。しかし、一度、病院で精密検査を受けておけ、そうそう、倒れてはいかんぞ」

にかっつと、いたずらが成功した子供のような笑みをなよが浮かべた。

天使が、いや、夕子になよに囁く。テーブルになよが指で文字を書く。夕子が頷いた。

「ありがとう、隆志君。素敵なお店を紹介してくれて」

夕子は隆志の名前すら覚えていなかったのだが、如才なく微笑んだ。

「あのさ、幸ちゃん」

台所のテーブルに避難した佳奈は幸に声をかけた。

「夕子さん、隆志と付き合ってくれるかなあ」

佳奈の言葉に幸は驚いた。

「夕子さんって天使だよ、人間じゃないんだよ」

「それは、わかっているけどさあ」

あさが佳奈の前に珈琲を置く。

「ありがと、あさぎちゃん」

「どういたしまして」

佳奈があさぎの入れた珈琲を少しすすする。

「冷静に考えて、隆志と付き合ってくれる女の子なんて、もう現れないと思う」

「それを母親が言っちゃだめだよ」

幸が困ったように笑みを浮かべた。

「夕子さんには大望がある、神に落とされた天使達の生活する場を作りたいと思っているんだ。

いまはそのことで頭がいっぱいみただよ」

幸の言葉に、向かいに座っていた小夜乃が顔を上げた。

「もしも、なよ母さまさえ良いとおっしゃるのなら」

「それは、夕さんとこれから暮らしていく中で、なよ姉さんが決めればいいのかもしれないね」

幸は小夜乃の思いついたことをすぐに理解し答えた。結界を張り巡らしたかぐやのなよ竹の姫の領地、それを天使に提供しようということだった。

「まっ、佳奈姉さん。夕さんはここで一緒に暮らすからさ、あとは隆志君の頑張り次第だ」  
にと、幸が笑った。

遥の花 藍の天蓋 一話

秋野菜の種を蒔く季節だ、見上げれば、視線が空が突き抜ける、このまま、目を凝らせば、瞬く星ですら見えるかもしれない。

ふと、夕子は手を止めると、空を見上げた。夏の終わりの季節、秋野菜を育てるための準備に畑を耕す。

ここへ来て三日が経つ。戦うつもりでやって来たのが、今はここの家族の一人として、畑を耕している自分がある。

慣れない作業でくたくただ、でも、不思議と楽しい、それに自分を受け入れてくれた御恩を返すためにも、頑張らなきゃと思うのだ。

台所のテーブルに幸となよがいた。二人して隣同士に座り、お茶をいただく。

「どうするな、幸」

「幸としては、やさしいお姉さんが増えて嬉しい。なよ姉さんが二人みたいにならなくてよかった。かなりきついもの。幸、泣いちゃう」

「何をぬかすか」

なよは溜息をつくと、軽く幸の頭を叩いた。

幸は笑うと、なよの湯飲みにお茶を注いだ。

「この国の政府はわしだけでなく、皆を標的にしたかもしれんぞ」

「その程度のこと、たいしたことじゃない。いつも通りの生活を続ける。それだけのことだよ」  
幸は椅子の背もたれに体を預けると目をつぶった。

「お父さんの持っている記憶が幸にもある、千年以上昔、人は鬼からの独立を目指して、鬼との百年戦争が始まった。それまでこの国の人達は鬼の支配下にあったわけだ。ほぼ、完全な独立を果たした、それから、およそ、江戸時代の終わり、明治の始め辺りまで、その独立が続いた。でも、それ以降は、主の変更はあっても、ほぼ傀儡政権だ、幸は必要とあれば、主の首も傀儡の首もすたとんと落とすよ」

「恐ろしい奴じゃのう、お前は」

呆れたようになよが答えた。

「人の世界にそれほど興味はない、この国を潰せば、幸が治世をしなければならなくなる、それは願い下げ、つまりはあちらから関わって来なければいいだけの話だ」

幸は目を開けると、寂しげに笑みを浮かべた。

「そんなことよりも、智里さん、小夜乃ちゃんと笑っていたね。初めて見たよ、智里さんの笑うのを」

なよは小さく吐息を漏らすと言った。

「智里も少しずつ心が柔らかくなって来ておる。今日は啓子と援農じゃ、あやつも啓子とも話すようになったわい。善きことじゃ」

幸はそっと笑みを浮かべると、立ち上がった。

「そろそろ夕子姉さん、限界だ。小夜乃と白に頼んでくる」

日差しの中、夕子は麦藁帽子を被ってはいたが、それでも体が熱をおびて、頭に熱が集中していくのがわかる、でも、もう少しだけと、鍬をふるった。

「おおい、夕子姉さん」

声に夕子が顔を上げると、白と小夜乃が大きく手を振っていた。

「いま、行きます」

二人は畑の向こうから駆けてくる。白はいつもの銀色のマット、小夜乃は大きめの日傘を抱えていた。

二人は夕子の前まで来ると、畦にマットを敷く。そして、ふわっと白は夕子を後ろから抱きかかえると、マットに足を投げ出し座らせた。小夜乃が日傘を広げ、夕子に影を作る。

ほんの数秒の出来事だ。

「あ、あの、えっと」

「夕子姉さん、無理し過ぎですよ」

白が笑った。

「夕子姉さん、これを」

小夜乃が水筒からお茶を汲むと、コップを夕子に手渡した。

「あ、ありがとうございます」

そっとコップに口を付ける、少し甘いお茶。

「美味しい」

小夜乃が嬉しそうに笑った。

「ステビア、甘いハーブのお茶です」

「お父さん」

幸は男の部屋の前に立つと小さく呟く。そして、そっと襖を開けた。

「どうした、幸。なんだか、お悩み中だな」

椅子に座ったままの男は安心させるように笑みを浮かべた。幸は男に駆け寄ると男にしがみついた。怯えたように幸の体が震える。そっと、男が幸の頭を撫でた。

「人を簡単に殺すことが出来ると言いました」

「なるほど、自分の言葉に怯えたか」

「術師集団を送り込もうとしてきた人たちを許せなくて」

男は幸の頭を軽く叩くと、幸を目の前に立たせた。

「本来、お互い、不干渉がいいのだけれどね。ところが、ここが、この国の支配者層にとっては

、目の上のたんこぶになってきた、好き勝手が出来なくなって、ここの存在がわずらわしくなってきたんだろう」

「楽しく暮らしているだけなのに」

幸が思いつめたように囁いた。

「ま、そのことは父さんに任せなさい。幸はこの異界の管理者だ。みんなの幸せをゆっくりと考えなさい。争うことなく静かに暮らせば良いと思うよ」

「ありがとう、お父さん」

泣き濡れた瞳のまま、幸は微笑んだ。

「幸。白と小夜乃が困っているようだ。天使の体はちょっと違うからな」

「うん、行ってくる」

幸は頷くと部屋を出た。

ちょろいな・・・、ふと幸の言葉が唇から漏れる。

「あっ」

廊下の向こう、なよが目を見開き、幸を見つめていた。

「なよ姉さん。ちょっと、夕子さんのところ、行ってくるよ」

幸がなよの隣りをすり抜けた。

「まで、幸」

なよが声をあげた。びくんと幸が固まる。

「父さんの能力は、いくら体力を取り戻しつつあるというても、全盛期の半分、いや、三分の一やもしれん。わかっておるのか」

幸が振り返り、にっと笑った。

「かまわないよ。だって、お父さん、男だもの」

幸が背を向け、外へと向かった。

ずかずかとなよは男の部屋に入ると、椅子に座ったままの男を睨みつけた。

「いやあ、三分の一は言いすぎだよ、まいったなあ」

男が気楽に笑った。

「幸が父さんから離れてしまったこと、受け入れるのか」

「いずれはそうなると思っていたし、そうなる方がいいよ。ま、突然だったから驚きはしたけどね」

男は椅子の背もたれに背中を預け、目を瞑る、平次君や当主殿が居て、幸も随分いらいらしていたからなあ、その時の様子を思い出して、笑いそうになる。

「自分が死ぬことで、幸が狂って、世界を滅ぼすということは避けることができた、それだけでよしとするよ」

男は目を開けると、なよに笑いかけた。

「父さんはお手軽に世界を守った勇者ということでいいんじゃないかな」

「父さん、辛くはないのか」



なよが男を睨みつける。

「いい年こいたおっさんが哀しいとか、辛いとかいうのは、みっともないだけだよ」  
男は気分を変えるように、深呼吸をした。

「二、三日留守をするから、後はよろしく頼むよ」

そして、男が呟いた。

「幸乃、父さんから出なさい。幸乃には留守番を頼むよ」

瞬間、男の胸から仰向けに幸乃の上半身が現れた。

「嫌です、例え幸がどのように考えても、幸乃はお前さまの妻です」  
幸乃が感情を露わに叫んだ。

「夫婦は一心同体、幸乃は何処までもお供いたします」  
幸乃は一途にしがみつくと、男の体に潜り込んでしまった。

「守るものが出来たから、励みになるかな」

男はなよに目をやると、少し恥ずかしそうに笑った。

「なよ。何も今生の別れを言うわけじゃない、帰ったらゆっくりするよ」  
立ち上がりかけた男をなよが引き止めた。

「待て、わしが護髪をしてやる」

なよは男の前に正座をすると、くっと見上げた。

「父さんの右腕は幸の作った義手、左手には幸の護髪が入っておる。ならば、わしは父さんの右足に護髪をしてやろう」

なよが髪を一本抜き、男の右足に結ぶ。

「初めて見たよ」

「何を見た」

「上からなよのつむじを見下ろした。三つある」

「つむじくらい、帰ってきたらいつでも見せてやるわい」

見上げたなよの瞳が濡れていた。

なよは辺りを見渡した、

「よし、あかねが帰ってきおった。あかね、来い」

風が突き抜けた、と感じた瞬間、開いた襖に手を掛け、あかねが息を弾ませていた。

「力関係上、仕方なくは走って来ますけどね、用事がある時は」  
あかねが顔を上げ、絶句した。なよ姉さんが泣いている。

「急ぎじゃ、父さんの左足にお前の護髪をしてくれ」

あかねは素早く男の前に正座すると、後で留めていた髪を解し、髪を一本、男の左足に結んだ。

「詳しい事情は知りません。ただ、お父さんは御自分が思われる以上に必要な人で」  
くっと、あかねが男を見上げた。

「あかねにとっても、とても大切な人です」

男は笑みを浮かべるとそっと指先であかねの頬に触れた。

「ありがとう。とっても嬉しいよ」

男は手を戻すと、よしと呟いて立ち上がった。

「それじゃ、出かけてくるよ」

「さて、父さん。一つ聞かせてくれ」

なよの声が震えた。

「どうしたんだい」

なよが深呼吸をし、きっと男を見つめた。

「父さん、本当は己の出自をわかっているのであろう。しばらく前に、思い出した。父さんはホンケの初代にそっくりじゃ」

男は襖に手をかけたが、ふと、手を戻し、背を向けたまま言った。

「幸にも伝えていない記憶だよ。先々代が初代の細胞から作り出した赤ん坊が父さんだ。ま、誰にも言わないでくれ、特に白澤さんには秘密だぞ。子供の頃かな、白澤さんに初代ってどんな人だったって聞いたことがあるんだ。映画俳優のプロマイド、少女のような表情で、このお方にそっくりってね。白澤さんの乙女心を傷つけたら大変だ」

男はくすぐったそうに笑うと部屋を出た。

慌てて、あかねが部屋を飛び出す。男の姿は既になかった。

「なよ姉さん。これは、いったいどういうことですか」

「わし自身がこの状況を戸惑うておる」

なよはそう呟くと俯いた。

三毛は山羊小屋の中で男と同じ、やわらかな笑みを浮かべた。数日の間、男と山羊小屋を作っていたのだ。十畳は充分ある、天井も高くて普通に歩くことも出来る。

そして、三毛は男と一緒に山羊小屋を作ったのが嬉しくて、なんだか誇らしくて、つい笑ってしまうのだ。のこぎりで板をまっすぐに切ることも出来るようになったし、金槌で釘をまっすぐ打つようできるようになった。お父さんと一緒に山羊小屋を作ったからだ。単純なことだけど、なんだか、とっても嬉しい。なにより、お父さんと一緒に一つのものを作ったということが嬉しくて仕方がないのだ。

「おーい、三毛」

黒が扉を開け、小屋に入って来た。

「黒姉ちゃん」

「晩御飯の用意をしよう」

しかし、黒は三毛の隣にすっと座ると、柔らかに笑みを浮かべた。

「いいの、できたね」

「うん」

三毛がとびきりの笑顔で頷いた。

黒は小屋を二人が作っている時、手伝おうとしたのだが、男と作業をする三毛の楽しそうな顔を見て、遠慮したのだ。末っ子でもあり、三毛は何かにつけて、遠慮する。それが習慣になってしまっているのだろう、だから、父さんと生き生きと笑顔で作業をする三毛の邪魔をしたくなかったのだ。

「あのね。黒姉ちゃん、三毛はここにいるととっても楽しい。じっとしていても楽しいんだ」

「ここは三毛の宝物だな」

黒の言葉に、そっと三毛は頷いた。

二人が家に戻ると皆が、いつものように晩御飯の用意をしている。黒と三毛も椅子やテーブルを運ぶのを手伝い始めたが、ふと気になって黒は白にたずねた。

「お父さんは」

「わからない、誰も知らないみたい」

困惑したように白が尋ねた。

「幸母さんも知らないの」

黒の問いに、白が頷いた。三毛が気づいた。

「あれ、なよ姉さんも」

小夜乃がお皿を両手に頷いた。

「なよ母さまは用事があるとのことでホンケに伺いました」

天使の夕子姉さんが増えた以外、いつもの風景。でも、何か違うと三毛は確信した。

あかねは六十絡みの男の背後に立つと、男の喉に軽く短刀の先を当てる。

深夜、とある政治家の寝室だ。

「な、何者だ」

無言であかねは短刀を持つ手に力を加える。つうっと男の喉仏から、赤い血が流れた。

「質問は認めません。なお、警備の者はおりませんし、警備会社から警備員も来ることはありません。貴方は、一人きりです」

「ま、待ってくれ。俺は何も悪いことなどしていない」

あかねの手にくっと力が入る。

「助けて、助けてくれ」

「何も悪いことはしていないなんて、笑えない冗談」

あかねは政治家の耳元に口を寄せ、囁いた。

「お尋ねします。とある男から呪術集団の最近の行動について、抑制するよう依頼がありましたか」

あかねの言葉を聞いた途端、足の力が抜けたように、じゃがみこんでしまった。

「俺じゃない、俺じゃないんだ。俺はそんな大それたことを」

すっとあかねが政治家の頭に手を載せる。

政治家が気を失いつんのめるように倒れた。

お父さん、仕事が早い。なかなか、追いつけない。

あかねが唇を噛んだ。

幸お姉ちゃんがお父さんを嫌うようになったのは、私のせいだ。平次を住ませたことで、おかしくなったんだ。幸お姉ちゃん、男の存在だけで、くたくたになってた。それが・・・、お父さん、ごめんなさい。

深夜、黒は男の部屋、灯りも点けず、いつも男が座っていた椅子に座る、窓からの白い月明かりが陰しい表情を浮かべた黒の横顔を映していた。

「おおい、黒。眠れないのか」

幸が襖の向こうで黒に声を掛けた。そっと、襖を開けた幸に黒は視線を向けると静かに言った。

「幸母さん、教えて欲しいことがあります」

黒は椅子に座ったまま、幸に向き直ると、両膝をそろえた。

そして、幸の目をじっと見据えた。

「幸母さん、お父さんがいません。晩御飯の時に幸母さんはお父さんが何処に行ったかわからないと言いました。でも、それはおかしいです。幸母さんがわからないはずがありません。ひょっとして、幸母さんが意図的にお父さんは追いやったのではありませんか」

静かな黒の眼差しに幸は戸惑いながらも答えた。

「ほら、呪術士集団がここを襲おうとしてさ、今後、そういうことが起こらないように父さんに頼んで」

ゆっくりと黒が立ち上がった。

「それはこの国を影から動かしているモノ達と戦うことになるかもしれない。今のお父さんには厳しい。それは、黒よりも幸母さんの方が分かっているのではありませんか」

「いや、だって。父さん、男だし。男は、あの」

言い繕うとする幸にそっと、黒が笑みを浮かべた。

「幸母さん。もう遅いので寝ます、お休みなさい」

黒はすっと幸の横を擦り抜けると、寝間に向かった。

次の日の朝、黒と白と三毛の三人は姿を消していた。

「よお、白澤。ちと、用事があって来たぞ」

ホンケ、城内、二の丸に居た白澤に、後ろからなよが声を掛けた。白澤の隣には、多分、小学生くらいの年齢だろう、上質な着物を着つけてもらった男の子が、不思議そうになよを見ていた。

「警備のものをどうした」

白澤が叫んだ。

「わけを話したらどうぞと言うてくれた。教育が行き届いておるのう」

「そんなわけがあるか」

なよは愉快に笑うと、ふと、気づいたように男の子を見た。

「新しい御当主様か」

白澤が気持ちを落ち着かせ答えた。

「まだ、教育中だ。いずれ、ホンケを統べる方となる」

「叔母さんはどなた」

男の子が尋ねた。

ひくっとなよの頬が引きつった。

「叔母さんのはのう、お前の父親の兄の、その娘。つまりはお前の従姉じゃ」

なよはやわらかな笑みを浮かべ、男の子に近づくと、ぎゅっと頬をつねった。

「従姉弟同士じゃ。わしのことは、なよお姉さんと呼んでくれ」

白澤があわてて、なよの手を払いのけると、男の子を後ろに庇った。

「妙なトラウマを御当主に与えるな」

下の階から次々と警備の者達が駆け上がって来た。手に手に薙刀、刺股等、武器を携えている。

「御当主、お怪我はありませんか」

先頭に陣取った警護長が叫んだ。

白澤は疲れたように首を振ると、警護長に言った。

「慌てるでない。御当主は大丈夫だ」

白澤はなよに目をやり言った。

「かぐやのなよ竹の姫。何用で参ったのだ」

「本家の敷地内に家を所望する。なに、贅沢は言わん。あばら家で良い、それなりにこちらで普請はする。ただ、そうじゃのう、城から離れている方が気楽じゃな」

「さては、あの女に追い出されでもしたか」

「いや、仲の良い姉妹じゃ、邪推せんでくれ。ま、なんというかな。ちと、別荘というところかのう」

白澤はなよの意図が全く判らなかったが、ここで男との接点を残しておく方が賢明と考えた。

「西の向こう、山の麓に朽ち掛けた屋敷がある、それをやろう。部屋で月見もできるぞ」

なよは笑うと、それで良いと頷いた。

「さて。次はと」

なよが呟いた時。

「なよ姉さん」

黒の音が警護隊の向こうから聞こえた。黒と白と三毛、跳ぶように駆けてくる。

息を切らせながら、三人がなよの前に飛び出して来た。

「ひどいですわ」

白が息せきながらなよに言った。

「私達だって」

白澤が白を睨んだ。

「白。いったい、何があった」

うわっと白が黒の背中に隠れた。

黒は怯えながらも首を左右に振る。三毛はというと、なよの後ろに隠れていた。

なよは面白そうに声を上げて笑うと、白澤に言った。

「わしの可愛い妹たちに、白澤よ。あんまり睨まないでくれ」

さてと、なよは呟くと辺りを見渡した。

さすがに無と呼ばれた父さんじゃ、遠見でも、姿を見せん、護髪は父さんが危険にさらされんと発動せんが

離れていると駆けつけるに時間がかかる、まずはあかねと合流するか

「黒白三毛。花魁道中の儀、あかねと合流するぞ」

「はいっ」

三人が大声で返事をした。

「それでは白澤。これで失礼する。見習い御当主殿。お前は痛みを失ってしもうておる。それでは人の上に立つことはできんぞ。ま、これからはわしがしっかりいじめてやるから安心せい」

黒が大声でしゃんと叫んだ。白に三毛、次々と叫ぶ、それにつれ、四人の姿が薄れ消えた。

「警護長」

白澤が声を上げた。

「はっ」

「城に残る精鋭をここに呼び寄せよ」

「今すぐに」

警護長が緊張した面持ちで返答した。

あさまだき、朝日が昇る前の沈黙の時間、高級住宅街を男は歩いていた。個人宅の壁が百メートル、二百メートル、そんな邸宅が立ち並ぶ住宅街だ。

徹夜は堪えるなあ、男は呟くと、とある屋敷の堀の途中、立ち止まった。ふわりと男は飛び上がると、堀の向こうへ消えた。

小夜乃は昨晚のなよの言葉を思い起こしていた。

ここを出て行くことになるかも知れないと。

幸母さんがお父さんを嫌いになった。お父さんという歯止めがなくなれば、幸母さんの暴走が始まるかもしれない、もしも、生まれれば誰も止めることはできない。

そうなる前に。

小夜乃は自分ができることは何か。それを考える、この楽しい生活をこれからも続けたいと願う

、そのために自分のできる精一杯のことをしなきゃならない、そう思うのだ。

塀の中では人だかりがしていた。男がその後ろで中を覗き込む。最前列の十人が消音器付きの銃を二人に突き付けた。流れ弾に当たらぬよう、慌てて、人だかりが変形する。

男と女、ホンケの精鋭が銃を突き付けられていたのだ。

「この程度の障害を抜け切れないなんて、修行のやり直しだなあ」

男は呟くと、最後尾の男に尋ねた。

「彼らは何者だい」

声を掛けられた男はなんの警戒もなく答えた。

「それをこれからお教えいただくというんだ、忍び込んだはいいが、警戒態勢随一の屋敷だ、すぐにあぶり出してやったわけさ」

自慢げに言う、

「親方様はいないようだね」

「この頃は朝帰りだ。帰ってこられるまでに白状させないとこっちが危ない」

「親方様は優しい方だと聞いているよ」

「昔はそうだったんだが。ん、あんた、誰だ」

「私かい。君達の敵だよ」

男は笑みを浮かべると、すっと右手を最後尾の男の額に手をそえた。かくんと膝がくずれ重力のままに倒れる。

男は人込みをかき分け、精鋭二人の前にやって来た。背中に銃口を向けた形だが、男は気にする様子もなかった。

「久しぶりだな。ちゃんと修行はつづけているかい」

「先生・・・」

女の方が呟いた。

「ついでだ、助けてあげるよ」

男はなんの気負いもなく言うと、銃口に向き直った。

「何者だ、お前は」

銃を向けた中央の男が叫んだ。

男はそれに答えるように笑みを浮かべた。

「敵」

一言呟いた途端、男の姿が消えた。大声で叫んだ男が仰向けに倒れる。次々とドミノを倒すように男達が倒れて行く、血を流すこともなく、気絶して行くのだ。

二人の精鋭は思い出した、男が真面目に動いた時は、その動きが速すぎて、全く目で追えなかったことを。

「ま、こんなところだ」

二人が慌てて振り返った。男が後ろで笑っていた。

「あ、ありがとうございます」

二人が言うと、男は一瞬、照れたように俯く、感謝されるのは得意ではない。

「君達は何しにこの屋敷に忍び込んだのかな」

「それは、白澤様から、この屋敷の主を探れと」

女がなんの躊躇いもなく答える。精鋭の男も頷いた。

「人ではなくなったかも知れないとのことですが」

男は精鋭達を完全に掌握していた。

男は呪術集団の指揮者が鬼であるかもしれないと思う。なら、呪術集団が襲ってくるのも頷ける。

「一度、会ってみるかな。朝帰りというなら、もうすぐ帰って来るだろう」

かすかなエンジン音、太陽が昇る前の薄い紫色の時間。塀に設えた車用の自動門扉が横に開いて行く、黒塗りのリムジンがゆるやかに屋敷の中を進む。程中、不意に車が停まり、ドアが開いた。

羽織り袴の老人が一人、その後ろを運転手が付き従う。男はその二人を静かに眺めていたが、微かに眉をひそめた。

「二体はきついかな」

男は呟くと、精鋭二人に言った。

「二人とも原種の鬼だ。君達は私が戦っている隙に逃げなさい」

二人の顔色が青ざめた。

「先生」

「以前ならさ、どうということなかったんだけど、私も弱くなってしまってね。隙を見て二人とも逃げろよ」

男は呟くと、数歩、足を進める。

そして、お互いが立ち止まった。

男が言う。

「鬼王の末っ子 荒獏王子と瓜神王子。原種の鬼で唯一、その名に神を持つ鬼だったかな」

老人が両目を細めるようにして笑った。

「何者かね。人にしては、やけに鬼のことに詳しいじゃないか」

「この主を食った上で人に化けたということか。原種の鬼は誇り高いと聞くけれど、例外もあるんだね」

「何者かと尋ねておる」

いらついたように老人が言った。

「老人が荒獏王子、運転手が瓜神王子。格上の瓜神が運転手役ということは、荒漠よ。あんた、瓜神の手のひらでダンスをする役だな。うまく煽てられ、瓜神の手のひらで気分よく踊っている訳だ」

「何者かと尋ねているのだ」



男がにいっと笑った。

「瓜神を見てごらん。余裕でにやけているよ」

顔を引きつらせ、老人が後ろを振り返った瞬間、男の姿が消えた。男は老人、荒獏王子の頭上急降下、自在を両手に王子の脳天を、瞬間、男の右腕が消えた。幸の作った義手が消えたのだ。

男は姿勢を変えると自在を左足で踏み込んだ。荒獏王子が文字どおり真二つになる、しかし、力んだ左足の動きが遅れた。瓜神王子が抜き払った剣が男の左足を太ももから切り落とした。男は自在で地面を打ち、勢いで後ろに跳びはね、間合いを開けた。

男は右足で着地すると、左を力む。左の太ももから吹き出した血の流れが止まる。

「その武器。お前が無だな」

瓜神王子が剣を構えたまま言った。

男が笑みを浮かべ言う。

「鬼王には上がつかえて、なれそうにもない。なら、単純な荒獏王子を隠れみのに、人の世に君臨してやろう。おおかた、そんなところじゃないかい」

「ああ、その通りだ。人は欲の塊だ。面白いほど餌になびく」

ゆっくりと瓜神王子が剣を振りかざす。

「無を倒したとあれば随分と箔が付く、ありがたいことだ」

「いや、私を倒すのは無理だよ。だって、私の娘たちは強いからさ」

男が言い終えた瞬間、刃帯儀が飛ぶ、瓜神王子の腕を足を首に巻き付き捕らえて行く。

「すまん、遅くなった」

なよがいきなり男の隣に現れた。瓜神王子が空中に張り付けになる。

「久いな、瓜神。お得意のつまらぬ策を弄しておったか」

「お前はかぐやのなよ竹の姫、どうしてここに」

「父親の危機に子が助けに来る、さほど、不思議ではあるまい」

なよが男に振り返る。男の様子になよは息を飲んだ。

「黒、白、三毛、あかね」

なよが大声で怒鳴る、瞬間、四人が瓜神王子の間合いに現れた。一瞬で四人が瓜神王子を粉微塵に切り裂いた。四人は着地すると緊張が解けて、座り込みそうになったが、男の様子に驚いて駆けつけた。

「お父さん」

黒が叫んだ。

右腕がなくなり、左足も太ももから断ち切られた男の姿を見たのだ。

「格好悪いとこ見せてしまったなあ」

男は照れたように笑うと、自在を器用に使い、歩く、そして、自分の左足を、よっと声だし、左腕で抱きかかえた。

ぼっと炎を放ち、左足が燃える。そして、灰になり消えた。冷たい、氷のような炎だった。

「あとは白澤さんに片付けてもらうかな」

黒が男にしがみつくと、そして左から男を支えた。

「無理しないで」

黒が思い詰めたように男に言った。

白も三毛もあかねも男に寄り添い、心配そうに男を見上げた。

「心配掛けてごめん」

男は素直に言うと、力が抜けたように地面に座り込んだ。

なよが刃帯儀に使う絹の端切れを白に渡した。

「それで父さんの足を止血せい」

白が慌てて、絹で男の足、その切り口を包む。

なよは振り返ると、精鋭二人を手まねいた。あたふたと二人がなよのもとにやって来る。

「白澤に連絡しておけ。原種の鬼。荒獺と瓜神、二体、古の約定により抹殺したとな」

ふっと男は二人を見上げると笑った。

「優喜君、綾さん、うちの娘たちは強いだらう。私はこんなんだから、もう君たちに教えることはできないけれど、うちの娘たちに教わって、もうちょっと強くなりなさい」

男は楽しそうに笑みを浮かべ、目を閉じた。

「お父さん」

三毛が叫んだ。黒も白も慌てて、男の顔を覗く。

「気絶中じゃ。そのうち目を覚ますわい」

なよの言葉にあかねもほっと息を吐く、あかねだけが、三人の後ろで正座していたのだ。

「あかね。いらぬことを考えるな」

なよはあかねに言うと、自在を二本取り出し、絹で担架を作る。

「三毛、たまにはお前が先頭を行け、黒は後ろ。あかねと白は横から支えろ」

なよの指図に四人は男を急拵えの担架に寝かせる。

精鋭、二人がなよに報告した。

「あと五分で白澤様一行がこちらに参ります」

その報告に、ぎろっとなよが睨みつけた。

「お前達は白澤の部下じゃから、白澤に向けて、様付けするのは不思議ではない。しかし、他家の者に言う時には白澤一行と言え。様をつけるな」

二人はなよに目に竦み上がり、唯々うなずいた。

「も、申し訳ありません」

青い顔をしながら答える。なよはにかつと笑った。

「とはいえ、白澤には別荘をもらった。なにやら、西の外れ、部屋で月見のできる屋敷とっておったが、お前達、案内できるか」

「は、はい。もちろん」

「ならば、道案内をせい。あとは別荘をわしにくれた御白澤様に任せておけばよいわ」

なよに言葉に白が慌てた。

「なよ姉さん。家には帰らないの」

「大事な娘たちの気持ちを奪った男を、幸が許すと思うか」

三毛が泣きそうになって言った。

「それじゃ、お父さんと暮らせなくなるよ」

なよはその言葉に少し俯いたが、顔を上げ言った。

「小夜乃がなんとかするじゃろう」

小夜乃は機のある部屋で正座をし、目をつぶっていた。小夜乃はなよが機を織る、その音を聴くのが好きだった。

小夜乃は自分が角の鬼であることを知った夜、男にこのまま、ここにいさせて欲しいと願い出た時のことを思い出していた。

「小夜乃がいなくなると、みんな、寂しいし、叔父さんも泣いてしまうかも知れない。小夜乃、何処に行ったんだろうって、みんな、ご飯も食べずに探して回るだろう。だから、小夜乃、ここに居てください。小夜乃、君は自分で思っている以上に大切な人なんだよ」

男はいたずらげに笑った。

「ありがとう、ございます」

「それに叔父さんは幸で手一杯だ」

「え」

「幸は国を潰してしまうだけの力を持っている、叔父さんは幸にそんなことをさせないようにしなきゃならない。なよもね、それだけの力は持っている。さすがに、叔父さんも二人は無理だ。なよは小夜乃に任せるよ」

「はい、頑張ります」

小夜乃が元気に答えた。男が楽しそうに笑った。

今がその時だと思う。小夜乃は閉じていた目を開けた。そして、立ち上がると襖を開けた。

小夜乃は台所のテーブルでお茶を飲んでいる幸を見つけ、テーブルを挟んで幸の前に座った。

「どうしたの、小夜乃。そんな難しい顔をしてさ」

幸は湯飲みをテーブルに置き、笑った。

「幸母さん、お尋ねしたいことがあります」

「ん」

「お父さんを何処にやりましたか」

「お父さんをお願いしたんだ。ここに攻め込もうとした呪術者達が二度と来ないようにして欲しいって」

幸がたいしたことでもないというように、あっさりと答える。

「それはとても危険なことです。お父さんは力が弱くなっています、なよ母さんからそう教えて

いただきました。もし、お父さんが敵にやられたらどうするんですか」

幸はたいしたことではないと笑みを浮かべた。

「敵は未知数だ、厳しいかもしれないな。でも、お父さんは男だし」

小夜乃は幸を睨みつけると、テーブルを両手で激しく叩いた。

「どうしてなんですか。お父さんはみんなを大切に思ってくれています。中でも幸母さんをとっても大切に思っていてくれます。そんな、お父さんにどうしてそんなことが言えるんですか」

小夜乃は思わず、立ち上がると、ぎゅっと幸を瞬きもせず見つめる。

「な、なんだよ」

幸は小夜乃の激高に思わず言葉を詰まらせた。

「だ、だって、お父さんは男だ。男はとっても悪い存在なんだ、邪悪なんだ。だから、いなくなった方がいいんだよ」

幸の言葉に、ぎゅっと小夜乃は幸の目をまっすぐ見つめる。

「そ、そんな、見据えるなよ」

幸が少し身を引き眩く。

小夜乃が強く幸の両手を握った。

「幸母さん。男とか女とか関係ありません。お父さんはお父さんです。お父さんなんですよ」ふっと力が抜け、幸はテーブルに俯せてしまった。

「お父さんの右腕を斬ってしまった時、二度とこんなことはしないようにって誓ったのに」幸が力無く呟いた。

「こら、精鋭。御殿医を引っ張って来い。足の治療をさせるぞ」

「はいっ」

なよの言葉に精鋭の優喜が駆け出した。

西の屋敷、といっても、誰も住まなくなっていて十年以上は経つだろう。広い屋敷だが、壁は崩れ、屋根の崩落した箇所も多い。

「なよ姉さん、大丈夫かな、ここ」

黒が心配げになよを見た。

なよが屋敷の端から、端まで眺める。

「配膳所回りがましのようじゃ。右端じゃ、営繕できるか見て来い」

黒がなよの言葉に駆け出した。

「そこの精鋭、来い」

綾が慌てて走ってくる、なよの自走式刃帯儀、かぐやの竹の姫は文人であり、政治家であると聞いていた、とんでもない話だ、白澤様ともひけをとらない技術と絶対的な自信を持っている。

「布団一組と、しばらくここで暮らすに必要な生活必需品を買い集めて来い」

なよは分厚い財布を綾に手渡した。

「私が」

驚いて綾が顔を上げた。

「私でよろしいのでしょうか」

「お前ではならん理由がない」

あっさりなよは答えると、三毛を呼んだ。

「三毛。白は父さんの看病。お前は荷物運びじゃ」

「お父さん、大丈夫かなあ」

心配そうに三毛がなよを見つめる。

「大丈夫、心配するでないわ」

にかっとなよが笑った。元気づけられるように、三毛は安心の吐息を漏らすと、綾と買い出しに向かった。

黒が戻ってきた。

「大丈夫、壁も柱もしっかりしているよ」

なよが黒の言葉にうなずいた。

優喜も医者を背負い走ってきた。

「うわっ。かぐやの」

思わず御殿医が叫んだ。

「わしの父さんが大怪我じゃ。しっかり治療せよ。もしも」

言いかけて、なよが凄みのある笑みを浮かべた。

黒とあかねが男の乗った担架を持ち上げた。

綾は戸惑っていた。

隣りを歩く三毛、沈んだ顔で歩く。

「あの、三毛さん」

綾の声に三毛は笑みを浮かべた。

「ごめんなさい、考え事をしていました」

「財布、私が持っていていいのでしょうか」

「え、いいですよ。なよ姉さんが綾さんを認めたのですから。えっと、お布団は後にしましょう、かさ張りますから。まずはお鍋とか炊事道具かな」

三毛がそっと笑みを浮かべた。

ホンケ、それは一つの呪術集団であると同時に白鷺城を模した城を中心にした城下町であり、およそ一万人が生活する都市でもある。呪術者はその内、千人、もちろん、その頂点には当主と白澤がいる。

綾と三毛は城の西側にある市にいた。

城の西側の通りに商業施設が並ぶ。城の方針により、鉄骨やセメントの利用を極端に制限されていることもあり、全ての商店が木造平屋から、高くても三階に留まっていた。行き交う買い物客も多い、自動車は許されず、大きくても大八車だが、誰もがごく簡単な呪術なら使うこともでき

、思うほどの不自由はない。

「うひゃ、にぎやかですよ、綾さん」

人波を書き分け、三毛が綾を見上げた。

綾がはにかむように笑みを浮かべた。

なんて可愛い妹だろう。

綾は素直にそう思う。先生の娘、特に三姉妹の連携攻撃、先程の鬼を斬る滑らかさは相当な使い手だ。でも、少し見上げて、えへへと笑う女の子。可愛くて、御人形のように、ぎゅっと抱き締めそうになる、何考えてんだ、私。

「どうしましたか、綾さん」

「え、あの。なんでもありません」

「それじゃ、まず、箒ですとか掃除道具から買いましょう」

あちらこちらの店を覗き、二人が買い物をする。掃除道具の他、鍋や炊事道具、布団は綾が纏めたものを背中に背負った。

三毛は箒を担ぎ、それに鍋だとかを差す。

「綾さん。あんまり、おしゃれじゃないですね」

お互いの姿に二人は顔を合わせて笑った。

綾を先頭に西の屋敷へと帰る、たくさんの人だ。

すれ違う人達、ふっと綾の小さな鞆に誰かの手が入る、財布が抜き取られた瞬間、三毛はふっと手の力を抜き、箒を手放す、姿勢を落とし、その財布を掴むと、ぐっと捻った。一秒にも満たない瞬間、財布を片手に三毛は箒を背負い、何もなかったように歩く。

財布の両側面には薄いチタンの金属板が入っている、すった女がその手首を押さえた。あまりの速さに関節が対応できなかったのだ。

「綾さん、財布を落としましたよ」

三毛が綾に声をかけた。

振り向き、綾が焦る。

「ありがとう。怒られるところだった」

焦りながら、綾が鞆に財布を入れ直す。

「大丈夫ですよ、なよ姉さんはそういうのはあまり怒りません。それに、その財布、呪いの財布ですから。すぐになよ姉さんの元に戻ってきます」

えっと綾が驚いた瞬間、後ろから手拭で誰かが口を塞いだ。同じように三毛も口を塞がれる、クロクフォルムだと気づく。三毛には耐性があったが、逆らわずに目を瞑った。

二人が運ばれて行ったのは、荒れ果てた神社の境内だ。

無造作に三毛は立ち上がると辺りを見渡す。男が八人、女が三人。全員が驚いて、三毛を見つめた。三毛は手首に包帯を巻いた女に目をやった。

「お父さんならこう言います。お金が欲しいのならば、まっとうに働きなさいと。あなた、これ

を機会に足を洗いませんか」

呆気に取られたように女は口を明けたまま、三毛を凝視した。綾が首を振りながら、やっと目を覚ました。綾が素早く回りを見渡す。

十一人、五人までなら、なんとか闘える。十一人は無理だけれど、時間くらいは稼げるか。

ずっと三毛が綾の肩に手を置いた。

「なんだか、知らねえけど、分厚い財布を置いて、少しばかり殴られてくれれば解放してやるぜ」

一番がたいのいい男が言い放った。

「財布は姉からの預かり物ですから渡すことはできません。貴方達こそ怪我をしないうちに去りなさい」

三毛が毅然とした姿で言う。

何処の社会でも荒くれた人間は居る。特に白澤は城内のことと、当主の世話に関心が集中し、城外のことにはあまり関心を持たないため、こういう荒々しい派がいくつか存在する。

三毛の言葉に男達が大笑いをした。

「あんまり鼻つつらがでかいと後で泣きを見ることになるぜ」

三毛は大笑いする男達の肩越しに、背を向けている男の姿を見つけた。

「そこの黒い背広の人。貴方は彼らの用心棒ですね。彼らとは全く気配が違います。技量も彼らとはかなり違うようですね」

ゆっくりと男が振り返る。右腕のない、隻腕の男だ。

すいっと三毛が目を細めた。

「面白そうな女だな」

隻腕の男が呟く。

「初めまして」

三毛が答えた。

「その片腕と黒い服と、なにより、その気配。叔父さん、お父さんを、無をご存じですね」

不意に隻腕の男が目を見開いた。

「お前、無の娘か」

「以前、無断でいらっしゃった方ですね。まだ、この世界から足を洗っていらっしゃらなかったのですか」

隻腕の男は前に出ると、左腕で刀を抜いた。

「先生。いや、俺達、そこまでは」

慌てて、がたいのいい男が叫んだ。さすがに刃傷沙汰になると、城からの追求を免れられない。

三毛も真っすぐ立つ。およそ五メートル、間合いはお互い届いていない。

三毛は左足を大きく引き、極端に平たい半身をとる。そして、姿勢を大きく下げた。

隻腕の男が気づいた。姿勢を下げることで、三毛の間合いが伸び、既に自分が三毛の間合いに入ってしまったことを。

綾も感じていた、いま、この時点で三毛が勝ったことを。隻腕の男は唸り声を上げたが、思うように動けない。三毛は既に闘う気でいた。お父さんの名を貶めた奴を許すわけにはいかない。ぎゅっと男を睨みつける。

誰も動けない。三毛の気配に脅えたのだ。

「あんた。何してるのよお」

いきなり女が飛び込んできた。隻腕の男にしがみつく。

「もう、危ないことはしないって約束してくれたじゃないの」

膝を崩し、男の腰に両手でしがみつく。

「どけ、邪魔だ」

「いいえ。離さない、離すもんか。こんな刀は捨てて、一緒になってくれるって言ったろう」女が叫び、涙ながらに男を責める。

ふっと、三毛は腰を上げると、降ろした荷物を持ち上げた。

「帰りましょう」

三毛は笑みを浮かべると、綾を促した。

「はっ、はいっ」

綾は緊張に吃りながらも立ち上がると、立ち去る三毛の後を追った。

緊張が抜けたように、隻腕の男は大きく息をついた、そして、力が抜けたように、地面にしりもちをつく。女が大声で泣きながら男を強く抱き締めた。

「泣くな。二度と刀は持たない」

男があきらめたように言った。

「約束ですよ、叔父さん」

黒が笑みを浮かべ、二人の横にしゃがんでいた。

「誰だ、お前」

「さっきの子の姉です」

黒があっさりと答えた。

「このお方があたしにあんたが危ないって教えてくださったんだよお」

女が何度も黒に頭を下げる。

「無事に済んで良かったですね」

女に言うと、黒は隻腕の男を軽く睨んだ。

「おかみさんのお腹には新しい命があります。その子を片親にするような愚かなことは謹みなさい」

驚いて、男が女を見つめた。

黒は立ち上がると、がたいのいい男の前に立った。

男達はあっけにとられ、茫然と立ちすくんでいた。

「貴方達。もしも、私や妹に不満があるならば、西に朽ちかけた屋敷、西の幽霊屋敷と呼ばれているらしいですね。当分、その屋敷にいますから来なさい。少しばかりこわい目に合わせてあげましょう」



にいいと黒が目を細めた。男が地面にしゃがんだ、腰を抜かしたのだ。かまわず、黒は包帯を手首に巻いた女の前に立った。

「ご、ごめんなさい。二度と、二度とスリはしません」

黒は答えずに包帯の巻かれた手首を両手で包み込む。

そして、手を放すと、女に笑みを浮かべた。

「痛みはありますか」

驚いて、女は自分の手首を見た。完全に痛みが消えていた。

「それでは」

黒が呟く、ふっと黒の姿が消えた。

心配そうにあかねと白は御殿医の治療を見つめていた。包帯を巻き直し、医師がほっとしたように軽く息を吐く。

「一週間は安静。動いてはならんぞ」

男は少し笑った。

「善処致します」

「他人事のように言うでないわ。で、白澤殿にはここに千尋がいるのを言うなということだな」

「面倒臭いので、できるだけ、その方向でお願いします」

「強く問われれば言うぞ、わしも命は惜しい」

男は、横になったままうなずく。

「ま、新当主の教育で白澤さんも忙しいでしょう」

男は呟くと、体を起こそうとした。

「言うそばから、何をしている。静かに横になっていなさい。血も減っているのに、輸血ができない体とは」

医師が困り切ったように言う。

白は正座をすると、枕代りに、両膝に男の頭をそっと載せる。

「お父さん。もうすぐ三毛が布団を一式用意して来ますから、それまで、じっとしててください」

「後で薬を取りに来るように」

医師が立ち上がったのを見て、優喜が素早く、医師の履物を用意し、外へと送り出した。

「なよはどうしたのかな」

あかねが男に寄り、答えた。

「なよ姉さんは竈が一つ使えるようだからと、倒れた柱ですとかを、薪代りに集めています。あかねも手伝って来ます」

立ち上がりかけたあかねを、男が呼び止めた。

「待ちなさい、あかね」

「はい」

あかねは男の横に正座し、少しうつむく。

「あかねが自分を責めていること。心を読まなくてもわかるよ。あかね、聴きなさい」

「はい」

あかねが力無く、呟く。

「二つのこと、これはね、関係は無い。あえて言うなら、間が悪くて、関係あるように見えるだけのことだよ。そして、幸が男全体を恨むのは仕方がないんだ、父さんだけさ、別扱いにしてくれていたけれど、本当は、そういうの、とても不安定で、幸も頑張ったと思う。右腕の時から、随分経つからね」

男はあかねに笑ってみせた。

「お互い、親離れ、子離れする時期が来ていたんだろう。今回、父さんはさ、娘に頼まれて、ちょっと良いかっこしようとして、失敗して、他の娘たちに心配を掛けてしまった、格好悪い父親なんだよ」

男は左手であかねの手を握ると、笑った。

「格好悪い父さんでごめんね」

あかねは両手で包み込むように男の手を取ると、ぎゅっと自分の額に押し当てた。

「うわあ、ごめんなさい、お父さん、ごめんなさい」

堰を切ったようにあかねの感情が溢れた。

普段のあかねからは全く想像できないほど、泣きわめくその姿に、男は右手であかねの頭をなでてやろうとしたが、改めて、その腕がないことに気づかされた。

黒は両手に紙袋を持って戻って来たが、その様子に靴を脱ぐのも忘れ、男に駆け寄った。

「大丈夫。まだ、父さん、死んでないよ」

男が静かに言う。ほっとして、黒は腰が抜けたように床に座り込んでしまった。

「黒姉、靴を脱いでください」

白も気を落ち着かせると、黒に言った。

黒も両手の荷物を降ろし、ほっとした表情を見せると、靴を脱ぎ、土間の上がり間口に置いた。

やっと、あかねは泣き止むと、なよ姉さんの手伝いを

してきますと呟き、部屋を出た。

しばらくして、三毛と綾が戻って来た。

「ただいま。いっぱい、買ったよ」

三毛がこの場の空気を変えるかのように、元気に言った。

## 遥の花 藍の天蓋 二話

---

### 遥の花 藍の天蓋 二話

優喜は驚いてその様子を見つめていた。

かぐやのなよ竹の姫、元は一国の女王であり、優れた政治家でもある。見た目は二十代半ばくらいにしか見えないが、一千年以上の齢であるという。

その女王が普段着に、手ぬぐいでマスクをしている。そして、大きな木づちを軽々と片手で操り、半分朽ちた土壁を潰しているのだ。組み込まれた竹を燃料にするという。

先程までは、朽ちた柱を短く揃えて切り、二つあるおくどさんの一つが無傷だと、頭を突っ込んで埃や炭を取り除いていた。

ふっと、なよが優喜を睨んだ。

「こら、わっば。図体の大きいのが、ぼおっと突っ立っているのではないわ、目障りじゃ。小さくしゃがんで泥遊びでもしておけ」

「申し訳ありません。手伝います」

慌てて、優喜が叫んだ。

「ならば、ほれ」

なよは大きな木づちの杵側を軽々と掴むと、柄の橋を優喜に向けた。緊張した面持ちで優喜が柄を掴む、なよが手を離れた瞬間、木づち本来の重さに、優喜は前のめりになりながらも、両手で掴み直した。

ふふんとなよは笑みを浮かべた。

「お前はわしの父さんの生徒であろう、父さんに恥をかかせるでないぞ」

なよは優喜に近づくと、腰から下はとんとんと足で蹴り、腰から上は手で軽く叩いた。

「木づちを落ち上げてみる」

なよの言葉に木づちを、まるで紙一枚の重さしかない、驚いて、優喜は振り上げた木づちの先を見つめた。

「術と呼ぶほどのものではない。ちょっとしたこつじゃ。じんわりと、姿勢を確かめろ」

優喜は不思議なほどすっきりとした気分で、そうだ、息が体全身を行き渡る気がする。

「精鋭は二十人いると聞く、お前は中でどれほど強い」

なよがにかっと笑った。

「俺は・・・、三番目」

優喜が考え言う。

「ならば、お前、二番目と本気で十回戦えば、何度、勝つことができる」

優喜は頭の中で相手の顔を思い浮かべる、そして、その拳の速さを測る、

「三回です」

「ばかもん」

なよがすこんと優喜の頭をはたいた。

「な、なんですか」

優喜が思わず木づちを落とした。

「そういう時は、十回戦うことはできません、一度目で、どちらかが相手を殺しますから、と答えるんじゃ」

なよが愉快に笑った。

「ま、しばらくは父さんの世話を手伝ってもらわねばならん。指折り数える腑抜けの方が安心かもしれんのか。ところで、お前の名は」

優喜は不思議に思う、さんざん、子供扱いされ、頭を叩かれる、それでも、いやな気がしなくて、これが、多くの民衆をひきつけたかぐやのなよ竹の姫の魅力なのかもしれない。

「俺、優喜と云います」

「なんと書く」

「優喜、優しく喜ぶと書きます」

「なんとまあ、愛情の深い名じゃ。その名に恥ずかしくないようにせいよ」

かかっとなよが笑った。

あかねが走り込んでくる、がばっとなよに抱きついた。なよがわかっていたかのように、あかねの頭をなでる。

「少しは気持ちは晴れたか」

あかねはうなずくと、小さく呟いた。

「お父さんはとっても優しい」

俯くあかねの言葉に、なよはそっとうなずいた。

「ただいま」

三毛が両手背中に荷物を背負っている、綾も背中に布団を背負っていた。

男は仰向けに寝ていたが、白に助けられ体を起こした。三毛があたふたと荷物を降ろし、男の前に座った。

「大丈夫、お父さん」

「父さんは元気だよ。心配かけてしまったな」

男の言葉に呆れたように白が言った。

「お医者様は一週間、絶対安静とおっしゃいましたわ。お父さん、自覚してください」

「あはは、白に叱られた」

嬉しそうに、男が笑った。

綾が背中の布団を降ろし、男の横に敷いた。

「お父さんの血は変わっていて、輸血ができないと、お医者様はおっしゃっていましたが」

白が心配そうに男に言った。

「母さんはお父さんに血を半分分けていただいたと言っていました。お母さんの血なら輸血できる

のでは」

男は少し笑みを浮かべるような、そんな柔らかな表情をした。

「父さん、こんなだけどさ。自意識過剰なのかな、娘たちにはね、かっこいいって思われたいのさ」

白が溜息をつく。

「それなら、一週間、絶対安静ですからね」

男は照れたように笑みを浮かべると、うなずいた。

夕刻までに、八畳ほどの板の間と、それに連なる小さな土間が、なんとか、生活できる空間となった。

なよはふっと男を見やると、かすかにうなずく。

「そろそろかのう」

「気を使わせてしまうね」

男はなよの言葉に答えた。

「さあ、帰るぞ」

なよが皆に声をかけた。

「ええっ、泊まる、泊まるよ」

黒が驚いて声を上げた。

「そうだよ。三毛もここで暮らします」

男は家の方角を眺めた。

「そう言ってくれるのは嬉しいけど、家がね」

男が呟いた。

「家が危機じゃ。幸の力が弱って、小夜乃とあさぎが結界を支えておる。早く戻らんと、白澤の精鋭に入り込まれてしまうからな」

にいったとなよが優喜に笑いかけた。おどおど、優喜が俯く。完全に優喜はなよに飲み込まれていた。

「ま、ということだよ。家をお願いします」

男が三毛に笑いかけた。

白が顔を上げた。

「交替ならいいですか。ずっと家に帰ってでは、お父さんのことが気になってなりませんもの」

男がうなずいた。

「一人だけ残ってくれるかな」

男の言葉になよがあかねを見る。

「ならば、あかね、お前が残れ」

あかねが頷くのを確認すると、なよが黒達三人に合図をする。

「それでは、父さん。わしは来ぬが、元気にしておれよ」

「ありがとう、幸を頼むよ」

「ほんに甘い父親じゃのう」

男は笑うと楽しそうに微笑んだ。

「しゃん」

黒が叫んだ、それをきっかけに白と三毛も声を上げる。花魁道中の儀、どのような結界も距離も関係なく移動する。四人の姿がふっと消えた。

部屋の中程に囲炉裏がある、三毛が持ち運びのできる簡単な囲炉裏を柱や瓦を砕いたもので作り出したのだ。いま、真ん中で薪火が燃えている。

男は囲炉裏の向かいに座るあかねに言った。

「ちょっとした別荘気分だ」

「お父さんは気楽すぎます」

「なんだか、白にもあかねにも叱られて。子供が成長するのは楽しい」

男がいたずらげに笑った。

「優喜君、綾さんも囲炉裏においで。少し、肌寒くなってきた」

四人が囲炉裏を囲む。

あかねが五徳を用意し、鍋をかける、味噌汁だ。

「優喜君は随分、なよに押さえ込まれてしまったみたいだな。精鋭でも一番の乱暴者だったの  
にね」

慌てて、優喜は首を振った。

「もう散々です。自信の塊が歩いているみたいですよ」

「あれで、繊細なところもあるんだけどね」

そう言いながら、男も頷く。

そういえばと、男が綾を見た。

「白澤さんのところに戻らなくてもいいのかい」

「優喜と私は先生付きとなりました。寝袋一式も用意しています」

綾が少し、嬉しそうに言う。

「ただ」

不安げに綾が言葉をつないだ。

「この屋敷は有名な西の幽霊屋敷と呼ばれているので、なんだか」

「ふうん」

男はふっと、部屋の片隅丑寅を見つめる。

「そ、そういうのはやめてください、先生」

怯えて、綾が声を発した。

「なんだ、綾さんは幽霊とかだめなのかい」

「いえ、本当にここは、探検に来た子供が一人、意識を失って目が覚めないという」

「精鋭ともあろう綾さんがそれでは困るなあ」

男は燃えている薪を一本取ると、振って、火を消す。煙が立ちのぼった。あかねは男から薪を受

け取ると、立ち上がる。

「綾さん、あかねと一緒にいきなさい」

男の言葉に従い、綾もあかねと部屋の丑寅に立つ。あかねがゆるりと薪を動かす。次第に煙が形を作り出した。大きな球体にいくつもの模様が浮かぶ、模様、いや、大きく口を開けた顔だ、いくつもの顔に埋め尽くされている。

「呪詛を喚いています。かなり古いものです」

あかねが男に言った。

「ここは西ノ宮の屋敷と呼ばれていてね、百年以上前、白澤さんに蟄居させられ、全員打ち首になっている。その人たちの恨みだけが残ったんだろうね。浄化してくれるかな」

あかねは頷くと、燠火で球体を撫でて行く。いくつもの顔が、ほっとしたように口を閉ざし消えて行く。

いくつもの顔が消えた後、球体の中に、半透明の少年が膝を抱え、眠っていた。

「綾さん、その子は生き霊だ、硝子球に入れなさい」

男の言葉に、綾は硝子球を取り出すと、少年の体に硝子球を添える。すると、少年の体が薄れて行き、硝子球が白く濁った。

優喜が思い出した。

「あれは油問屋 田仲屋の子供です、植物人間になってしまったと聞いています」

男は少し頷くと、優喜と綾に言った。

「二人でその子を返して来てくれるかな。その子のお臍の上に、硝子球を置けばいいよ、生き霊が本体に戻る、そうすれば意識も戻るからさ」

驚きながらも二人は頷くと、田仲屋に向かって走った。

男はひとつ、息をすると、あかねに笑いかけた。

「ここは専制君主制だ。本家当主は王様みたいなもの、なんだか、息苦しいな」

「みんな、白澤さんが怖いのですね」

「それもあるし、人は、その日、普通に食べることができれば、あまり不満は持たない。あまりね」

男は吐息を漏らすと、呟いた。

「父さんとあかねだけだよ。幸乃、出て来なさい」

いきなり、幸乃は男の体から飛び出すと、男の目の前に正座し、額を床に擦り付けた。

「申し訳ありません、おまえ様。すべては幸乃のせいです。幸乃がしっかりと幸の変化を見定めておけば」

言葉の最後が、涙と嗚咽で途切れる。

「顔を上げてくれ、幸乃」

男がはじめて狼狽えた。

ザウルスで書いた分をあとで入れること

「お父さんは大変です」

あかねが少し笑みを浮かべる。男はほんの少し頷き、囲炉裏の赤い炭を見つめた。

「でもね。みんなが居てくれるというのは、とっても嬉しくてね、というのはさ、幸の父親になって、あかねも幸の妹になってくれて、黒達は幸の娘だ。一人だった父さんがね、いまは大家族の一人だ。足や腕を無くしてもね、それ以上に幸せなんだよ」

男は少し恥ずかしそうに笑った。瞬きもせず、あかねが男の目を見つめた。

なんか、照れるねと聞こえない声で男は呟く。

あかねがにっと笑みを浮かべた。

ふっと男が斜めを見る。

「たくさんのお人が御到来か」

男が呟いた。

「優喜と綾は甘過ぎます、追い払えばよいのに。あかねが追い返してきます」

あかねが立ち上がるのを見て、男が笑った。

「二ついいかな」

「なにでしょうか」

「祝いの品々に魚の一夜干しがある、炭火の遠火で焼いたら美味しそうだ。みんなでいただきます」

「お父さんは困った人です」

あきれたようにあかねが答える。

「それで、お父さん、もう一つは」

「ま、子供が意識を取り戻したことを単純に喜んでいる人達だ。怪我をさせないようにね」

あかねが男の言葉に頷いた。

「善処いたします」

あかねがこの廃屋の門に、仁王立ちで、行列を迎える、先頭は二つの籠、その後を祝いの品々を載せた大八車が続く。その数、およそ、数十を連ねていた。

「床が抜けるではありませんか」

あかねが小さく呟いた。

あかねの姿を見つけたのだろう、籠から優喜と綾が飛び出してきた。慌てて、二人が駆け寄るのを見あげ、あかねが呟いた。

「籠でご帰還とはなかなか、と言葉を続けたくはありますが、まあ、いいです。我慢します」

申しわけありませんと二人が頭を下げる、あかねは二人を手で制すると、先頭を歩く男に声をかけた。

「何か御用でしょうか」



先頭の男がにこやかに答えた。

「私どもは田仲屋の者にございます。今夜、精鋭のお二人様よりお話をお聞きいたしまして、こちらの先生が田仲屋嫡子をお救いいただきましたこと、まずは御礼の品々を御用意致しました」あかねは見上げると、ふうんと頷いた。

「くれるのですか」

「はい、もちろんでございます」

男の張り付いた笑顔を見無視し、あかねは列の横を歩き出す。中程の大八車に寄ると、すいっと干物を指差し、大八車を引いていた男に笑みを浮かべた。

「干物、いただいてもよろしいですか」

あかね、極上の笑みである、あかねは指図する人間より、実際に汗をかいて働く人を敬う、差し出された干物を抱え、柔らかにお辞儀する、差し出した男の方が恐縮して、頭を深く垂れる。次にあかねはいくつもの樽酒を見つけた。

「お酒、いいですか」

あかねの笑みに、男はどきまぎしながら、頷いた。

あかねは小さな樽をよいしょと受け取ると、にこっと笑顔を浮かべた。

あかねは愛想を一通り振りまくと、先頭に戻ってきた。

そして、優喜と綾の隣にいた店の男に声を掛けた。

「これで充分です。美味しくいただきます。ありがとうございました」

言葉は丁寧だが、気のない言葉だ。

「あ、いえ、すべてお渡しするよう

あかねは軽く樽酒と干物を優喜に手渡す。

「このようなあばら屋住まい、このようにたくさんいただいても、雨ざらしにして、腐らしてしまうだけです。これで充分」

そっけなく返事を返すあかねに、慌てて、店の者が頭を下げた。

「どうぞ、すべてお受け取りくださいませ。嫡子をお探ししていただいたお礼が一夜干しと樽酒一つでしたでは、私が主に叱られます」

つまらなそうに見上げると、とんとつま先で地面打つ、ふわりとあかねが宙に浮き、男を正面から見据えた。

うっと男が息をのんだ。宙に浮くだけでも高位の術師であるのに、ましてや、一切の呪文も唱えていない。恐ろしい、これはまるでお城の白澤様を前にしているようではないか。

「良いことを思いつきました。田仲屋は明日、臨時休業、跡継ぎ様がお目覚めになられたのです、朝から晩までお祭り騒ぎ、お得意さまや

取引先はもちろん、近所の方達、店の者も盛大に酒さかなを振る舞われるのがよろしい。荷物はそれにお使いなさい」

「そそれは。私の一存では、そのような大層なことは決められませんので、まずは旦那様に」

ふっとあかねは右手の親指と人差し指で男の鼻を摘んだ。

くっと捻る。

あわわっ、男が慌てて顔を後ろに引いた。

「鬼紙家とは、田仲屋は古いつきあいのはず。そうではなかったですか」

「あ、はあ、もちろん」

男が涙声で答えた。

にいいとあかねが笑みを浮かべた。

「私は鬼紙家の孫娘、あかねです。明日はお爺様と田仲屋さんのお祭りに伺うことにさせていただきますわ。ついでに旧家の人達も呼びましょう、とても賑やかなお祭りになるでしょう、とっても楽しみ」

男が震え、尻餅をついた。

「鬼紙老の御孫様」

ふっとあかねが倒れた男の耳元に口を寄せた。

「虎の威を借る、可愛い子狐です、こーん」

あわわわと倒れた男が言葉にならない声を出す。

「優喜さん」

「は、はい」

「白澤にも田仲屋の祭りのこと、伝えなさい。あかねが是非ご一緒にお祭りを楽しみましょうと言っていたと」

優喜は頷くと、干物と樽酒を綾に手渡し掛けだした。

不意にあかねは万辺の笑みを浮かべ、後ろの列に両手でおもいっきり手を振った。

「みなさん。お仕事お疲れさまです。でも、食べ切れません、飲み切れません、明日は田仲屋さんは一日中、お祭りをされるとのこと。みなさんで、大いにこのお荷物、食べてください、お酒も飲んでください」

あかねの声の抑揚に微妙な変化があった。隣にいた綾も気づいていなかったが、寿歌の抑揚を言葉に加えることで、扇動したのだ。

うおおっという歓声が響いた。あかねと綾は番頭を駕籠に放り込む。そして、あかねが手拍子を打つ。小気味良い拍子が響く、あかねが歌いだした、本家の祭り歌だ。同じく歌い出すもの、おどけて踊りだすもの、列が一気に賑やかになる。

「さあさあ、みなさま、明日はお祭り、お帰りになったらさっそく祭りの準備ですよ」

あかねの掛け声に、一行が踊り歌いながら帰っていく。

あかねはにこやかに手を振った。

そして、低く呟いた。

「寿歌、恐いな」

部屋に戻ると、綾が男に干物を手渡した。

「綾さん、これは美味しそうだ、ありがとう。そうだ、お酒はなよ用かい」

あかねが針金を曲げ、大ざっぱに網を作った。

「樽酒を返したなんて知れたら、おおめだまですよ」

あかねが笑った。

「あかねは気が利くなあ。それに言祝ぎ歌も一つが充分使いこなせれば、他も使えるようになるだろう。いい歌を聴かせてもらったよ」

あかねが頬を赤らめた。

「歌は、ちょっと恥ずかしいです」

「あかねさん、とっても綺麗で可愛かったです」

綾が目を見張って言った。

素直にあかねは照れ笑いを浮かべる。男も楽しそうに笑った。

「ただ、可哀想なのは優喜君だね。今頃、白澤さんに難しい顔をされているだろう」

男が遠火に焼く魚の焼け具合を覗く。

「大丈夫ですよ。さすがに白澤さんも面と向かっては怒れないでしょうから」

あかねが平気な顔をして答えた。

「あの、なにがどういうことで」

綾の言葉にあかねが答えた。

「ホンケの豪商 田仲屋の跡取りが意識不明になった。何処で何時に意識不明になったかわかっている、救い出すのはとても簡単なこと。なぜ、放置されていたのか。つまりは一定の術師以上は犯人がわかってたわけですよ、犯人が白澤さんだったって」

遥の花 藍の天蓋 蛇足 神の剣

すいっと男は剣先を躲すと、幸の背中に回り込んだ。

「なんていうかな、父さんは悪人だ、誰に殺されても仕方ないかなと思っている。だから、知らない奴に殺されるよりもさ、幸に殺される方がいいかなと思っていたんだけどね、でも、ここが崩壊してしまうことは避けたいと思うんだよ」

駆けてくる足音、三毛が息をきらしながらやって来た、幸はすっと刀を消すと姿を消した。

「お帰りなさい、お父さん」

満面の笑みで三毛が言った。

「やあ、三毛。元気にしていたか」

「はい」

三毛が大きく頷いた。

「二週間ぶりだなあ、帰って来たのは。そうだ、三毛。羊小屋を見せてくれないか」

三毛は照れながらも笑みを浮かべると、男の手を引っ張った。

八畳ほどの小屋だ。壁は板張り、二方向に窓があり、思ったよりも明るい。男は三毛とこの小屋を造っている際中に、ここを出て、鬼と戦うことになったのだった。

二頭の子羊が小屋の外で草を食んでいる。

部屋の片隅に小さな机と椅子がある。

「ここは三毛の秘密基地だな」

三毛は照れたように笑うと、机の上にあった帳面を男に差し出した。

表書きに、観察記録とある。

男がページを繰る。天気、気温、湿度、山羊の体温、食事量、事細かに書き込んであった。

「山羊愛に溢れているなあ」

男が楽しげに笑った。

「お父さん」

三毛が真剣な顔をして、男を見つめた。

「幸母さんからお父さんを守るよ、必ず」

男はくすぐったそうに笑うと、三毛の頭を軽く叩いた。

「だめな親だ、娘にこんな心配をかけるなんてな」

男は溜息を漏らすと、窓から外を眺めた。畑の向こう、梅林が続く。

「そうだ。夕子さんとはまだ話をしてなかったな。川で釣りをしているようだ。ちょっと行ってくるよ」

歩きだした男のために、三毛が急いで扉を開けた。外では仲良く二匹の山羊が草を食んでいた。

三毛も男の横を歩く、そっと男の腰の上に手を添える。杖を足代わりに器用に歩く男を見て、三毛が涙ぐむけれど、それを隠すようにして言った。

「夕子さん、とてもいい人だよ」

「そりゃ、そうだ。なんて言ったって天使だからね」

「お父さん。夕子さんの羽根を見た」

「まだだよ。でも、なよが言ってたよ、なよが自分の名前を羽根に書いたとか」

「ひどいよ。羽根の色が白くなってきて、余計に文字が目立つようになったんだから」

三毛が嬉しそうに笑った。

「でも、夕子さんはそれを喜んでいるんだろう」

「うん」

三毛が元気に頷いた。

「なよは他人を引き付ける魅力を持っている。だから、夕子さんも羽根の名前が誇らしい、そう思うんだろうな。知里さんなんか、なよに心酔しているものな」

「なよ姉さんは、怒ったら、とっても怖いけど、だからこそ、とっても優しい人なんだなって思う」

男は少し驚いて、三毛を見た。

「三毛もちょっと見ない間に、しっかりしたなあ」

三毛が恥ずかしそうに笑った。

「お父さんに褒めてもらえるのが、一番嬉しいです」

川辺に行くと、夕子が土手で釣りをしていた。土手から一メートルほど下のたっぷりとした水の流れに糸を垂れている。

「夕子さん、釣果はどうか」

男の声に驚いて夕子が振り返った。

「あ、あの。ひょっとしてお父さんさんですか」

夕子の声に男が頷いた。

夕子は慌てて竿を置くと、男に駆け寄った。

「初めまして。ここで生活させていただいています。夕子です。本名は」

男は笑みを浮かべて首を振った。

「だめだよ、夕子さん。この世界、どんな相手にも本名を教えてはね」

ふと、男は夕子の耳に視線をやった。

「唐突だけどね、左の耳に付けたピアス、くれないかな」

「こ、こんなものでよければ、どうぞ」

慌てて、夕子はピアスを差し出し、男に手渡した。

「本当にいいのかな、これって神の剣だろう」

初めて、夕子は唇を引き締め、男に言った。

「神には私から三行半です」

男は愉快に笑った。

「面白い人だな、夕子さんは」

不思議そうに三毛がピアスを覗き込んだ。

「お父さん、これが剣なの」

「そうだよ」

ふわりとピアスを放り投げる。虚空から剣の先端、といってもゆうに数メートルの幅はあるだろう、天に向かって浮かび上がった。

「神が悪を征するため、一部の天使に授けたのがこの剣。折角だから、抜いてみよう」

男が微かに左手を振る、それに呼応するかのよう、剣がその全体像を出現させた。二十、いや三十メートルはあるだろうか、巨人の持つような剣が浮かび上がった。

驚いて、夕子は男を見つめた。剣全体をあんなにも簡単に取り出してしまうなんて、まるで、それは

「あ、あの。お父さんさんは神様ですか」

真顔で夕子は男に訊ねた。

「いや、普通の人だよ」

男はなんでもないことのように答えた。

風、一瞬で、なよが男の横に立ち、剣を睨んでいた。

「すまぬ、父さん、ぬかった」

なよが呟いた。

「呪を解除して、属性を空虚へと変えてくれるかな」

男がなよにだけ聞こえるように小声で言った。

なよが不思議な音で唸り出す、そして、次第にそれは美しい響きに変わった。意味は解らない、でも、体をゆだねたくなるような、やわらかな音だ。

三毛はこれが解呪法だと気づいた。見上げると、剣の色が白く変わり、なんとなくだが、ふわふわに柔らかくなったように見える。

男が言った。

「自在のね、三分の二くらいの長さでいいかな」

なよが歌いながら微かに頷く。白いそれは収束してゆき、自在、もしくは筒と呼ぶ武器に変わった。

「自分で創らずにすむのは、楽でいいなあ」

男は笑うと、左手を伸し、掴んだ。

「重さも釣り合いも丁度良いよ」

なよはほっと息を漏らすと、啞然と見上げていた三毛に言った。

「三毛。いいところにおったのう、いまのは、わしの解呪法でもかなり高度のものじゃ。能く学べよ」

三毛はうまく声が出せずに、ひたすらこくこくと頷くのが精一杯だった。

「夕子さん。これをあげよう、剣の代わりだ」

ふっと夕子は自在を受け取ったが、慌てて男に尋ねた。

「あの、私なんかにはいいのでしょうか」

「いいよ。使い方は幸か黒、それにここにいる三毛に教えてもらいなさい」

「お父さん。三毛が教えてもいいの」

「いいよ。三毛も随分うまくなった」

なよが男の裾を軽く引いた。

「父さんは許すのか。剣の呪が幸を変調させたのだぞ」

男にしか聞こえないほどの声でなよが囁いた。

男は笑みを浮かべると、夕子の頭に手をやった。

「夕子さんがこれからも幸せでありますように」

男の言葉に夕子がとても柔らかな笑みを浮かべた。そして、ほっとしたようになよが息を漏らす。

「夕子さんは被害者だよ。許すも許さないもないよ」

男がなよに小さく呟いた。

「先生。お帰りなさい」

遠くからかぬかの声が聞こえた。

前掛けをしたかぬかが走って来た。美味しいうどんを提供する喫茶店として、一部で評判となっているのだ。一瞬、かぬかが驚いて立ち止まった。しかし、すぐに男に駆け寄り声をあげた。

「先生、足がありません」

かぬかは自分でも間の抜けたことを叫んでしまったと悔いた。男はそんなかぬかを楽しそうに眺めた。

「かぬかもすっかり修行しないと、こんなふうになってしまうぞ」

男がいたずらげに笑った。

「笑ってる場合じゃないですよ、先生」

「まあ、確かにそうなんだけどね。でも、生きているだけで幸いかな。さすがに首を落とされたり、胴体を半分にされたら生きてはいられないし」

男はかぬかの反応を楽しむように笑った。

「ありがとう、かぬか」

男の笑顔に、かぬかが気恥ずかしそうに俯きはにかんだ。

ふと、男は家の方角に視線をやった。

「三毛。力を貸してくれ」

「はいっ」

三毛が素早く男に寄り添った瞬間、二人の姿が消えた。

なよが視線を家に向けた。

「これは一大事じゃ」

台所の椅子に座った幸の太ももから血が流れる。両手で包丁の柄を握り締め、幸が自分の太ももを突き立てていた、男が、包丁の背を掴み、押し上げようとするが、幸の両手の力に押され込む。三毛が幸の左腕を掴んで引き戻そうとしていた。

「ごめんなさい、お父さん、ごめんなさい。幸も足を切ります」  
幸が泣き叫ぶ。

「力を抜きなさい」

男が幸に叫んだ。幸が激しく首を横に振る。

「黒、白、あかね」

男が三人の名を呼ぶ。ぶわっとテーブルの上に三人が現れた。強引に男が呼び込んだのだ。

「黒は幸の右手を引っ張りなさい、あかねは幸の後ろから肩を引く。白は包丁が抜けたら治療」  
男の指示に素早く対応した。

「お父さん、幸母さんの力が強過ぎます」  
三毛が叫んだ。

幸の拳が微動だにしない。

「幸、力を抜きなさい」

「ごめんなさい。幸はとても悪い娘です」  
嗚咽しながら、幸が呻く。

飛び込んできたなよが抱きかかえた小夜乃をテーブルの上に放り投げる。

「あわあっ」

小夜乃が慌てながらも幸の前に着地した。

「父さん、小夜乃じゃ」

男がなよの言わんとすることを把握した。

「小夜乃。寿歌、二十四節気七十二候 雨水 草木萌動」

男の言葉に小夜乃が反応した。

小夜乃はひとつ大きく呼吸をすると、幸の拳に両手を添え、笑みを浮かべた。

「ゆらゆら、凍えた雨粒も日差しを豊かに浴びて参ります。暖かな雨は大地を温め、命に新しい季節が来たことを教えてくれるのです。ゆらゆらゆらり、風は揺れ」

眩くように小夜乃が歌いだした。

三毛が思い出した。寿歌、古の術。音律そのものが力を及ぼす、ほとんど絶えてしまったと言われてた難しい術だ。

微かに幸の包丁を握り締める拳が緩んだ。

「あさぎ。立ちなさい、幸の包丁を取り上げなさい」

あさぎは、幸が自分の膝に包丁を突き立てたのに怯えて、流し台の足元にしゃがみ込んでしまっていた。あさぎは弾けるように立ち上がり、幸の手から包丁を取り上げ、流し台に仕舞い込んだ



。あふれる血を抑えこむように白が幸の傷口を両手で塞ぐ、白の両手が幸の膝に溶け込んだ。白が傷口を凝視する。白の指先が繊細に動き出す。

緊張が解けたのだろう、小夜乃の肩の力が抜ける、なよが素早く小夜乃を抱き上げた。

男はそっと笑みを浮かべ、小夜乃に言った。

「ありがとう、小夜乃。助かったよ」

「お父さんに教わった歌をうたっただけです」

小夜乃は少し顔を赤らめたが、にっと笑みを浮かべた。

男は笑を返すと、幸を抱きしめた。そして、ゆっくりと手を離すと、囁いた。

「いま少し、休みなさい」

幸の力が抜け、微かな寝息を立てる。

「黒。幸を寝かせつけてくれるかな」

黒と白が頷くと、二人して幸を抱え台所を出る、なよはほっと息を吐くと、椅子に座った。

「幸はどれくらいで元に戻る」

なよの言葉に男は少し首を傾げたが、考え込むように呟いた。

「二週間。余裕を考えて、三週間というところかな」

男の言葉になよが頷いた。

「幸乃、いいかな」

男の言葉に、ふわりとその背中から、幸乃が浮かび上がった。そして、男の横に立つと、男に囁いた。

「ほんにお前さまは幸に甘過ぎます」

「しょうがない、可愛いな娘だからさ」

男がいたずらげに笑みを浮かべた。

「ありがとう、お前様」

幸乃は仕方なさそうに笑みを浮かべると、幸の元に向かった。

「あさぎも椅子に座りなさい」

「ごめんなさい、お父さん。逃げてしまっ」

「あさぎは精一杯頑張ったよ」

男の言葉になよが笑った。

「幸のあの剣幕じゃ。怪我せなんだだけでもよかったわい」

漣にかぬかに夕子が部屋に戻ってきた。

「おおっ、そうじゃ、待っておれと言うて、そのままじゃったのう」

なよが三人の姿を見て、思い出した。

「それで、なよ姉さん、何があったんですか」

かぬかが尋ねた。なよは、神の剣の話を除いて、すべてを語った。

「先生。戻って来てくれますよね」

なよの話に、かぬかが心配そうに呟いた。

「帰ってくるよ。かぬかのうどんをくわなきゃね」

男は笑みを浮かべると、器用に椅子から立ち上がった。ふと、なよが思いついたように言った。

「あかね。父さんのお供について行け。いろいろ、片手片足では不便じゃ」

「はい。行きます」

あかねが即答した。

「いいよ。見た目の印象より、案外、普通に動けるからさ」

あかねが大きくかぶりを振った。

「一人、杖をついて歩いて行くお父さんを、それじゃぁと見送ろうことなどできません。恥をかかせないでください」

なよが楽しそうに笑った。

「父さんの負けじゃ。そうじゃ、漣も一緒に行け」

「え。漣もですか」

少し、不満げに漣が答えた。漣としては、幸の方が気掛かりだったのだ。

「白澤が妙なちょっかいをかけぬよう、二人して父さんを守ってくれ」

あかねが鬼紙老の孫娘、漣は鍾馗の姫。白澤も二人が居れば、思うように男にかかわれないだろうと、なよは考えたのだった。

男の三歩先を漣が歩く、あかねは男の右を歩く。

「なんだか、護衛されているみたいだ」

「お父さんは無理をし過ぎです」

列車を降り、プラットホームを歩く、人の通りは少ない。

「漣。そこのベンチに座りましょう」

あかねの言葉に、ホームのベンチ横に漣が立った、男がベンチの中程に座り、両端に漣とあかねが浅く腰をかける。

「幸姉さんの包丁を握る手を引き戻すために、お父さんはあかねと黒さんと白さんと呼び寄せました。今のお父さんの体力や精神力では無茶です」

あかねの言葉に、男が微かにうなずいた。

「疲れがどっと来てるよ。最初から小夜乃に寿歌をうたってもらえば良かったなあ」

男が気楽そうに笑った。漣が興味深そうに言った。

「先程からの寿歌というのは何ですか」

男は漣を見ると、微かに笑みを浮かべた。

「寿歌。もしくは言祝ぎ歌と呼ばれている七十二の歌だよ」

男は前を向くと呟いた。

「音にはね、力がある。例えば、歌。歌はね、聴く人の気持ちを楽しくもすれば、悲しくもする。寿歌は、音という振動の組み合わせで人の心を操る術だ。いや、うまく使えるようになれば、人だけでなく、植物の成長を早めたりさ、命すら自由に操ることができる。ただ、とても難しい

術で、小夜乃はよく頑張ったなあと思うよ」

ふと、男は漣に向き直り言った。

「身体の調子が悪い時には小夜乃に歌ってもらいなさい。もともと、寿歌はそのためのものだ」漣が頷く。この幸師匠のお父さんは不思議な人だと思う。掴みどころのない狡猾さと、純真さを合わせ持っているようだ。漣が男の顔を間近でじっと見つめた。

「お父さんはどうして寿歌を知っていたり、とても、強かったりするのですか」

男は少し目を伏せ考えると、再び、漣を見て笑った。

「教わったことを教わったままにしているのはだめ。それを手掛かりに本質を探り出すこと。そうすれば、教わった以上のことが出来るようになる。深く深く考えるんだよ」

男は笑みを浮かべ、軽く漣の頭を叩く。

「漣。幸に数学と物理を教え込まれただろう」

漣は顔をあげると、男をじっと見つめた。

「はい」

「あれは、考え方を学ぶためのものだよ、しっかりね」

漣がそっと笑みを浮かべた。

「幸師匠はお父さんは女たらしだと言いました。いま、本当にそうだなあと思いました」

「ええっ、ひどいなあ」

男は嬉しそうに笑みを浮かべ、前を向く。あかねが呟いた。

「適当に相手をしておきましょうか」

「いや。せっかくだ、ちょっと、お喋りするよ」

線路の上、唸り上げ、砂塵が舞う。音が次第に消え、薄茶色の風が消えた時、一人の男がプラットホームの白線の上に立っていた。薄茶色のマントを身に纏い、ああ、これは西部劇のガンマンかぶれだと、男は楽しそうに見つめた。

目深に被った帽子を人差し指で微かに持ち上げる。腰の拳銃が鈍く光った。しかし、顔はまだ、十代後半くらいの幼さを残している。

「無に会わせてもらいたい」

男は澀みなく答えた。

「それは無理というものだよ」

ガンマンがぎろっと睨んだ。

「お前達が無の関係者だということはわかっている。死にたくなければ答えることだな」

「私は多分、無を一番よく知る人間だ、彼を裏切ることはさ、出来ないよ」

男が笑みを浮かべ言った。

「隣の女はお前の娘か」

「ああ、大切な娘たちだよ」

「その娘らの命とどちらが大切だ」

ガンマンが絵にかいたようににやりと笑う。

「あまりにも分かりやす過ぎます」

あかねが呟いた。

「相手するのが哀しいですよ」

漣も相槌を打つ。

「純粋培養、何処かでとち狂った典型だな。銀の銃弾を装填したりボルバー、銀は勿体ないなあ、高いのに」

いきなり、あかねは立ち上がると、男の前に立ちはだかった。

「お父さんを連れて逃げなさい」

「だめだよ。お姉ちゃんを見捨てて逃げるなんてできない」

漣が叫んだ。

きつとあかねがガンマンを睨みつけた。

「撃ちたいなら私を撃ちなさい」

あかねの眼差しにガンマンが狼狽えた。

自分より、少し年下のまさしく美少女が俺を睨みつけている、口をぎゅっと引き締め、瞬きもせずに、俺を睨む。

ガンマンは圧倒されたように、一步後退りした。

しょうがないなあと男は呟くと、杖を頼りによろよろと立ち上がる、そしてあかねの前に立った。

「お前達には、長い人生がある。父さんはね、娘達のためなら、たとえ殺されても、悔いはないよ」

男が杖を頼りによろよろとガンマンに歩み寄る。

漣が駆け寄り男の手を両手で掴んだ。

「やだよ、お父さん」

漣の泣き叫ぶ声に、ガンマンが後退りしながら、しどろもどろに言った。

「や、その。そういう深刻なのじゃなくて。あ、あのさ」

男がふいっと横を向き、柱の影で成り行きを見ていた、顧客先へでも行くのだろうか、ごく普通のサラリーマンの隣りへと歩く。

「どうだい。楽しんでもらえたかな」

サラリーマンが観念したように頭を下げた。

「一人前気取りの愚かな息子だ、覚悟が足りなさ過ぎる。鬼に勝てないはずだ」

「なるほど、君の息子かい」

「一切の欲を退け、法術師として、厳しく育てたつもりだったんだが、たまたま観た映画にのめり込んであのざまだ」

「純粋に育て過ぎて、免役がなかったという奴だな」

男が楽しそうに笑った。

目をやると、漣とあかねが倒れたガンマンをがしがしと踏み付けていた。

「なんというか、子育てというのは難しい。普段は善い娘達なんだけどね」

男は溜息をつくと言った。

「楽しい余興だった」

男が去ろうとするのを、呼び止める。

「あれに、あなたの術を教えてやってくれないか」

男は怪訝そうに振り返った。

「いいのかい、君」

「鬼と五分で闘えるようにしてやりたいんだ」

「鬼と五分ねえ。そうだな、これから、三週間、ホンケの精鋭に術を教え直す。そのついでに預かるるか、童子級の鬼くらいなら、充分、闘えるようにようにしてやるよ、あとはあれの頑張り次第だ」

男は一步戻ると尋ねた。

「いま、この国の上はどうなっているんだ」

微かに俯いたが、ゆっくりと顔を上げると、重い口を開いた。

「鬼派、米派、独立派の三派に別れている。平安の初め辺りまで、この国は鬼に支配されていた、その後、鬼と決別出来たが、またぞろ、江戸時代、次はポルトガルやオランダとの貿易を初めに、江戸から明治のきっかけにもなった黒船来港から太平洋戦争の終結とともに実質、この国は欧米の植民地となったと言ってもいいだろう。鬼は欧米の植民地に甘んじるくらいなら、この国の統治権をよこせという、それに米派が米国を後ろ盾に異議を唱えた。政治の世界も術師の世界もこの三派に別れて、三つ巴の様相だ」

「で、君は独立派だな。ついでに言うと、三つ巴と言っても、独立派の分はかなり悪いとみた」

「そうだ、だからこそ、力が必要だ。この混乱に乗じて、真の独立をもたらしたいのだ」

「そうか」

男が小さく呟いた。

「三週間の教授に値する情報をいただいた。私は世捨て人だから、どれにも組みはしないけれど、せっかくだ、しっかり、教えてやるよ」

男は話は終わったとでもいうように、場を離れ、三人の元に戻ってきた。

「二人とも乱暴だなあ。彼、ぼろ雑巾になったしまったじゃないか」

男が気楽に笑った。

「お父さんに銃口を向けるなどと、万死に値します。それでも、お父さんのお話は、こちらで聴いておりましたので、殺す手前で終わっています」

あかねがつま先でぐったりしたガンマンをつついた。

「息子が心配で父親が物陰から様子を覗いているなんて、子離れできていない証左ですよ」

漣が呆れたように言葉を繋いだ。

「それは耳が痛い。うちも可愛い娘ばかりだから、なかなか、子離れできないよ、困った、困った」

漣が唇をとがらせた。

「お父さんはいいんです。特別に許します」

「思いで繋がる家族は親離れや子離れすると、家族でなくなってしまうのですよ」  
幸せそうにあかねは囁くと、つま先を仰向けに倒れたガンマンの背中に差し込んだ。ぐっと蹴り上げる、宙に浮かんだガンマンを倒れないよう漣が背中を押し上げた。

「意識はあるようだね」

男の言葉にガンマンが目を開けた。

「この娘達は強いだらう。無の弟子だからね」

「無の弟子」

ガンマンが言葉を繰り返した。

「片手片足の父親を守るためにね、修行してくれたのさ」

男は適当なことを澁みなく言うと、ガンマンに笑いかけた。

「鬼に勝ちたいんだらう。これから三週間、この娘達が君に鬼に勝つための術を教え込む。ま、頑張ってくれ」

「鬼に勝てるのか」

ガンマンが目を輝かせた。

「そうだな、茨木童子とかさ、童子級なら勝てるようにしてくれるよ。後は君の頑張り次第だらうな」

「俺、やる。やります」

ガンマンが目を輝かせた。

「そうか、頑張れ」

男が愉快に笑った。

遥の花 藍の天蓋 蛇足 白受難

驚いた、あのすかした親父が無だったなんて。

ガンマンと徒名か定着してしまったのだが、本名、和弥は西の幽霊屋敷の表に置かれた縁台に一人座り、頭を抱えていた。

かなりのイケメンを予想していたんだろう、それがこんなおっさんだったなんて、申し訳なくってさ、そう言って、気楽に笑う無を前に、俺は茫然としてしまった。

確かに優喜が先生、先生と呼んでいたが、まさか、あのおっさんが無だなんて、思いもしなかった。

いや、思いたくなかったのかもしれない。神狩りの二つ名を持つ男。まさしく神と真っ向戦うことのできる唯一の男、そう聞かされ育ってきた。右手にサイコガンを持った男、そんなアニメじゃないけれど、それがくたびれた中年のおっさんだったなんて、そりゃないよ。俺の子供の頃の憧れを返せってんだ。

「どうしたんだ、ガンマン。さすがにへたばったかい」

優喜が和弥を見つけ、隣りに座った。

ふと、和弥が呟いた。

「なあ、優喜。あのおっさん、本当に強いのか」

「俺よか、遥かに強いぞ」

「いや、そうじゃなくて。神狩りと言われたほどに、ってことだよ」

優喜は、うーんと唸って顔を上げた。

「それは知らない、俺は神様と知り合いじゃないからな。ただ、白澤様は先生のこと、びびってる。俺はそう思う」

「白澤様って、ホンケを統べるという、あの白澤様か。体術や妖術はもちろん、数百年は生きてるって」

優喜は頷くと、目を瞑って俯いた。

「先生がどれほど強いかわからない、ただ、あかねさんや漣さんの異常な程の強さは分かるだろう」

和弥が息を飲んだ。

「ああ」

「この二人よりも遥かに強いのが先生の四女 幸、さんだ。そして、その幸さんも先生には絶対服従だ」

優喜はゆっくりと目を開けると、空を見上げた。青い空に真っ白な雲が一つ、二つと浮かんで

いた。

「もう四年になる。狐の面を付けた軍隊がホンケを 攻め込んだことがあるんだ。白澤様はすぐに察知し、町の間をすべて北の山に非難させ、俺達兵隊を引き連れ、結界の前で待ち構えた。奴らは重火器を備え、最新の設備を持った軍隊だった。白澤様の結界も、対魔術塗装を施された戦車が打ち破って行くんだ。もうだめだって思った時、白澤様の隣りに現れたのが、幸だった。幸が自在片手に軍隊に向かって突っ込んだ。自在が戦車を切っちゃうんだよ。豆腐みたいに切ってしまうと、中も血だらけだ。戦車三十台、ロケットランチャーを傾げた歩兵もいた、多分、三千人は居た、幸が縦横無尽に駆け回るたびに、血に真っ赤に染まった戦車が細切れになるんだ、歩兵たちも、首をちょん切られて、胴を斜め二つにされて、俺、思わず、持ち場を離れて飛び出してしまったんだ、その時、一瞬、遠く離れた幸と目が合った、そして、確かに俺の耳元で聞こえたんだ」

「お前の頭も斬り落としてやろうか」

「うわあぁっ」

優喜は縁台から飛び出すと、地面にはいつくばり蹲ってしまった。

あかねが邪悪の塊のような笑みを浮かべていた。

「男のお喋りはみっともないですよ」

優喜は荒い息を吐き、涙ながらに振り返った。

「あかねさん」

「声、似ていたでしょう」

あかねがいたずらが成功した子供のように笑った。

「その話は地震による災害ということになっています、たとえ、弟弟子であろうと、軽々しくいいなさんな」

「申し訳ありません」

優喜が頭を下げた。

「さて、ここからが大変だったのです。優喜はどうせ気絶して見ていなかったでしょうけど」

「は、話すんですか」

「だって、こういう話って、言いたいじゃないですか」

あかねが縁台に座った。

「狐面の軍隊は、人である自衛隊員を鬼に変えてしまうという鬼神化計画の端緒であったのですが、それはおいといて、まだ、その時点では、ホンケの町は無事被災することなく済んでいたのです。それが、なぜ、町の三分の一ががれきと化すことになり、地震ということになったのか。それは幸お姉ちゃんと白澤さんの口論から始まった二人の喧嘩、それが町の三分の一を破壊する大喧嘩になったからなのです」

一息ついたところに、漣が屋敷から駆け出してきた。

そして、あかねの前に立つと、自分の唇にそっと人差し指を触れる。

「お父さんからの伝言です。お喋りはその辺で勘弁してください、って」

うっとあかねは息を飲むと、気もそぞろに立ち上がった。



「さて。ガンマンも修行を初めて二週間、それなりに強くなったということで、息抜きのためにピクニックに出掛けます、綾さんがお弁当を作ってくれています」

「いや、あの、話の続きは」

戸惑いながら和弥が尋ねた。

ぎっとあかねは和弥を睨みつけると、話を続けた。

「目的地が鬼の国にあるので、ちょっぴり、いざこざもあるかもしれませんが、それについては、ガンマンに頑張ってもらうこととして、楽しいピクニックにしましょう」

駆けてくる足音。

「あかねちゃん」

白とかぬかが駆けてきた。

あかねがほっとしたように笑みを浮かべた。白はぎゅっとあかねを抱き締めると、嬉しそうに笑った。

「元気だった」

「あかねはいつも元気ですよ」

「ちょっと日に焼けたみたい」

あかねの笑みに白は頷くと、今度は漣をぎゅっと抱き締める。

かぬかは背中中の荷物を降ろすと優喜に声を掛けた。

「お久しぶりです、優喜さん。精鋭の皆さんも元気ですか」

「綾と二人で先生付きになったからさ。他の奴らとは会っていないんだ。まっ、滅多なことはないと思うよ」

かぬかは頷くと、和弥に目をやった。

「こちらが噂のガンマンさんですか」

「噂ってなんだよ」

かぬかはそっと両手を合わせ、お辞儀をする。

「なんと申せばよいのやら。御愁傷様です」

かぬかがくすぐったそうに笑った。

「あ、あのなあ」

「初めまして」

白がふっと和弥の前に立った。

「あかねの姉白です。そして、こちらがかぬかです。今日はピクニックと聞いてやってきました。和弥さんでしたよね、今日はよろしくお願ひしますね」

和弥はどきっとした。なんて、綺麗で優しそうな人なんだ、和弥は、ここに来てからというもの、かなりの女性不信に陥っていたが、それもあり、白がまるで救いの女神のように見えたのだ。

「あ、あの。初めまして。お、お父様にはお世話になってます。えっと、妹さんにも」

「世話のしがいに欠けますけどね」

あかねが憎まれ口をたたき、白はそれを笑みで流すと、かぬかに目をやった。

「お父さんに挨拶に参りましょう」

白とかぬかが屋敷に入って行った。

「や、やあ。あかねさん」

「どうしたんですか、急に笑って。気色の悪い」

「あの、白さんも強いのかなあ」

「白姉さんは、争い事が苦手です。でも、活法に秀でていますから、マッサージでもしてもらったらいいです。疲れなんかすぐになくなりますから」

あかねはそう言い残すと、漣を連れて屋敷に戻った。

「さて。俺達も準備するか」

優喜が立ち上がると、慌てて和弥が声を掛けた。

「白さんって、彼氏いるのかな」

「は……。ガンマン、何言ってるんだ」

「いや、あのな」

和弥が頬を赤らめ俯いた。

何純情やってんだと優喜は言いかけたが、あかねに漣、美人ではあるが、きつい女達に辟易としていたところに、白の八方美人だ。ま、しゃあないかなと思う。

「白さんたちの母親はすげえ男嫌い、先生以外の男は滅亡すりゃいいと思っている人だ。彼氏なんてできたら、次の瞬間、抹殺だよ。ガンマン、相手が悪いぜ」

「でも、恋愛は自由だ、それに誠意を持ってお願いすれば」

優喜は和弥がかなりの思い込み野郎だということを思い出した。重症にならない内に諦めさせておくほうがいいかもしれない。

優喜は気持ちを改め、しっかりと、和弥を見つめた。

「白さんは白澤様の孫娘だ」

「それって、猫又ってことか。いや、でも、先生の娘って」

「先生の四女 幸さんが白さんを自分の娘にするって、白澤様から奪い取ってしまった。先生はその代償に俺達精鋭に術を教えてくれることになったんだ。ガンマンもさ、二週間、先生に術を教わって思っただろう。それまでの修行が子供だましみたいなものだったってさ。それだけ、先生の術には価値がある。そういう意味では白さんに俺達は感謝しているが、同時にどれほど白さんが素敵な女性になろうとも、俺達は白さんに手を出さない。俺達は既に代償として術を授かっているんだから」

「それは、あんたら精鋭の言い分だ。もう、俺の愛に歯止めは効かねえ。それに、俺は猫派だ、猫だろうと猫又だろうと愛しきってみせるさ」

ガンマンがそう言い切った瞬間、すっと刃がガンマンの喉に触れた。

「それ、本気なの」

黒が姿勢を落とし、ガンマンの真正面から、刀の刃をガンマンの喉に向けていた。

「うわあ、わっわっ」

ガンマンが驚いて尻餅を付いてしまった。

「うーん、信念が足りない、不合格。残念でした」

黒が面白そうに笑った。

「どうしたんですか、黒さん」

黒は刀を宙にしまうと、優喜に笑い掛けた。

「お久しぶり、元気そうですね。ピクニック、お弁当と来たら、黒も参加します。外で食べるお弁当が楽しみ」

黒が食い気だけでやってきたこと、優喜は納得した、黒さんの食い気は恐ろしい。

「あんた、誰だ」

尻餅を付いたまま、ガンマンが黒に吼えた。

「白の姉だよ、よろしく」

黒はあっさり答えると、優喜に向き直った。

「お父さん、会って来ます。それじゃ、後で」

黒が屋敷へ駆け込んで行った。

ガンマンは大きく息を吐き、立ち上がった。

「深窓の令嬢が黒のジャージ姿で、やってきた」

優喜は大きく溜息を付くと、ガンマンに言った。

「ここでの恋愛はやめておけ。あかねさんは鬼紙家の御令嬢、漣さんは鍾馗の姫君、黒さんと白さんは白澤様の孫様。とんでもないのばかりだ。命がいくつあっても足りないさ。その上」

優喜はなよの名前を上げかけたが、自分自身その名を出すことが恐ろしく、名前を言うのをやめた。なよまでやってきたら、かなわない。

遙の花 藍の天蓋 蛇足 遊歩風無

「千尋。お前ほど酷い男はおりません」

囲炉裏の向こう側、白澤が怒鳴った。

西の幽霊屋敷、男の前には白澤と現当主の少年が座っていた。

「ひどいなあ、乳母ではあるけれど、私は白澤さんを母親とも思い、敬っておりますのに」  
男が気楽な調子で答えた。

「なら、どうして、私だけを制するような結界を屋敷に敷くのです」

「それは単純に面倒臭いことになるのが嫌なものですから」

「本当にお前という子は」

白澤は次の言葉が見つからず、男の隣に畏まって正座している優喜と綾を睨んだ。

「お前達も連絡もよこさず、一体何をしていたのです」

「申し訳ありません」

優喜と綾が額を床に擦り付け、白澤に頭を下げる。

「それは仕方がない」

男が楽しそうに笑った。

「報告しようにも、私は、食っては寝て、食っては寝る、それだけの男です。まさか、晩ご飯に何を食ったかばかり、書くわけにもいかないでしょう」

男はすいっと現当主を見つめると、居住まいを正した。

「当主殿。初めてお目にかかります。うちの娘がお世話になっております」  
ふっと少年は目を輝かせた。

「なよ先生はとても素敵な方です。たくさんのことを教えてくださいます」  
まったく表情のなかった少年の瞳に笑みが浮かんだ。

「ほんに、なよたけの姫も何を考えているのか」

不平そうに白澤が言う。

「なよはあれで、単純に子供好きなのですよ。善い娘です」

「とにかく」

白澤が声をあげた。

「こんなあばら家はやめて、お前は城にきなさい。良い部屋をあてがいます」

「それはお断りしますよ。お城なんて、私の柄ではありません、息苦しいだけです」

白澤はぐっと男を睨みつけたが、やがて、吐息を漏らすと呟いた。

「素直な良い子であったのに、こんなふうになんて扱われてしまうとは」

「年月は人を変えてしまうものなのですねえ。いやはや」

他人事のように、男が呟く。

ばしっと白澤は床を片手で叩くと、立ち上がった。

「とにかく、結界を敷くのは許しません。よろしいですね」

男は笑みを浮かべると頷いた。白澤が踵を返し、部屋を出る。当主も軽く男に会釈をすると、白澤の後を追いついて、屋敷を去って行った。

優喜は緊張が解けたのか、正座した姿のまま、うつ伏せに倒れ込んでしまった。

「大丈夫かい。優喜君」

「申し訳ありません」

慌てて、立ち上がろうとする優喜の頭を、男が左手で軽く叩いた。

「堅苦しいことはなしでいいよ。綾さんは大丈夫かい」

綾が呟く。

「腰が、抜けてます」

男が楽しそうに笑った。

「困った弟子だなあ。睨まれただけですくみあがってしまうなんてさ」

「申し訳ありません」

優喜は起き上がると、男に向かってみずまいを正した。

「ま、しょうがない。あの人にとって、私達は犬とか、牛とか豚とか、そういうもんだからさ」

男は気楽に言うと、囲炉裏の薪を足す。

「それは」

綾が呟いた。

「綾さんの目の前に可愛い子犬が現れればさ、抱き締めたいとか、撫でたいとか、そんなことを思うだろう。そして同時に、すき焼きでね、牛肉、霜降りが美味しいなとも思うだろう。綾さんと子犬や牛との関係が、そのまま、白澤さんと綾さんの関係でもあるのさ」

男は柔らかに綾を見つめた。

「それは白澤さんと当主との関係も同じだ、当主も白澤さんにとっては、ホンケ存続の道具ではない。なよは、子供が大人の犠牲になることを、とことん嫌う、だから、当主にちょっかいをかけているんだろう」

優喜が目を泳がせる。

「話が見えません」

「白澤さんは私の頭の中を、当主に移植しようとしている、そうすれば、ホンケはこの先、数十年は安泰だ。そのために当主は痛みも感じなければ、感情もほとんど無い、移植に係わる拒絶反応を最小限に抑えるためだろう。そんな子供を用意したんだ。なよはそれを見抜いたんだろうな」

「まさか、白澤様がそんな酷いことをなさるはずが」

綾が声を上げた。

男はくすぐったそうに笑みを浮かべた。

「白澤さんにとっては、酷いことでもなんでもないんだよ。綾さん、動物が可哀想だから、豚肉

も牛肉も食べないのかい、食べるだろう。白澤さんにとってはそれと同じなのさ。ちょっと、可哀想だけれどしょうがない、ホンケのためだもの。その程度のことなんだよ」

男は小さく吐息を漏らすと、部屋を見渡した。

「ここの元住人だってそうさ」

男は気持ちを切り替えるように頭を振ると、ゆっくりと立ち上がった。

「頭を撫でられるくらいはなんとか我慢できるけど、食われるのはなんだかね」

優喜もなんとか立ち上がると、綾の元へ行き、背中を支えて、立ち上がらせた。ふっと、優喜が綾に笑みを浮かべた。

男が驚いて言った。

「世の中のこと、ほとんど知っているつもりだったんだけどね、まだまだ、こんな近くで知らないこともあったんだな。自分の鈍感さが嘆かわしい」

優喜が思い詰めたように男に言った。

「俺達、ホンケを離れます」

「それはホンケを敵に回すということだよ。間違いなく殺されるぞ」

「白澤様は精鋭同士の婚姻はお認めになりません、戦力が落ちてしまいますから」

「ま、育児休暇を申請されたら困るからねえ」

男は呆れ声で言うと、綾を見つめた。

「綾さんもそれでいいのかい」

綾がくっつと唇を引き締め頷いた。

「女性は強いなあ」

男の言葉が終わると同時に部屋の壁が、轟音と共にふっとんだ。なよが飛び込んで来たのだ。

「年頃の娘が乱暴だなあ。当主殿と会えたかい、それとも、すれ違いかな」

「少しばかり頬をつねってやったわい。それより、白澤が精鋭を引き連れやってくるぞ」

「夜まで待てないということだろうな。なよ、二人を連れて家に戻っていてくれ」

なよが二人を睨んだ。

「やっと結婚する決心がついたか。優喜は頼りないが性根は腐っておらん」

「なよは知っていたのかい。二人がそういう仲だということを」

呆れた声でなよが答えた。

「父さんは気づかなかったのか。わしは初めて見た時に気づいたぞ」

「実はついさっき、気づいた。本当は二人を気絶させて逃げるつもりだったんだけどね、そういうことなら、ホンケを離れるのもありかなと思ったわけだ」

男がにっと笑った。

瞬間、部屋の床、壁が血みどろになる。

そして、切り刻まれた優喜と綾の死体が転がっていた。

「中々の幻覚だろう」

男の言葉に優喜が震えながら頷いた。

「さすがじゃな。わしでさえ、ちと、びびるわい」

「白澤さん達が来たら、これを見せた後、炎でこの屋敷を燃やすことにするよ」  
なよが興味深そうに、部屋を見渡す、綾は既に失心していた。

「なかなかじゃ。それで、父さんも帰ってくるか」

「幸が苦しむだろう。もう少し様子を見るよ」

本家を逃げだし、数日後、男は夜の砂浜に一人いた。とくに、行く宛もなく、旅をする。

男の面前、二、三歩歩けば届くほどの、転ぶように女が横切り駆けていく、逃げているのだ、後ろから十数人の男たちが女を捕らえようと追いかける。

「お若い人は元気だねえ」

男はゆっくり立ち上がると、尻の砂を手で払った。

女が先頭の男に組み伏された。必死になって振り解こうという女の両腕を馬乗りになった図体の大きな男が細腕を折るかのように強く掴む。

「勇二、助けて」

女が叫んだ。

女を囲む男たちが笑った。

「どうして・・・、勇二」

女の視線の先には勇二という女の恋人がにやついた笑いを顔に張り付けていた。

「初めまして、勇二君。君もさ、鬼の仲間になっちゃだめだよ」

男は気楽に言うと、振り返り女にのしかかっている男の背中、仙骨と呼ばれる背骨の一つをこんと自在で軽く突く。

どさっと下半身が落ちた、まさしく、のしかかっていた男の下半身だけが重力に応じて、砂浜に落下した。

「うおおっ」

痛みに悲鳴を上げる。

「自分自身の痛みはわかるんだねえ」

男は呟くと、周りの男たちを見渡した。

「女性に乱暴しようなんて、だめだよ」

「何者だ、お前」

「ん、見ればわかるだろう、ただの浮浪者さ」

男は見渡すと額に角を一本生やした鬼を睨んだ。

「なるほど、勇二というのが、生贄を用意する選別者、で、君に彼女を逃えようとしたってことか」

鬼が口を閉ざし、男を睨みつけた。

「この国のお偉い方々は、鬼におもねるために、国民のいくらかを鬼に差し出す契約をしたの

は知っている。でもね、そんなことは知ったことではないのだよ、だって、この国は民主主義の国だからね

。偉いさんの勝手な約束なんか、知ったことじゃないのさ」

男はいたずらげに笑った。

「貴様、人の分際で我らに抗うと言うのか」

鬼が低く呟いた。

男が嬉しそうに笑った。

「その我らというのは、ここにいる子分たちのことを指しているのかな。それとも、鬼全体を指しているのかい。どちらでも、結果は同じだけどね」

「この野郎」

一人が男に殴りかかった。男は中段に自在を構える。殴りかかる男の腹に自在の先端が消えた。すんと拳を振りあげたまま落ちる。

「無邪気だね。倒してくれといわんばかりだよ」

男が呆れたように言った。

ふわりと男が浮かぶ、月の光に自在が鈍く光る。男が舞うように片足のまま動く。寸分の隔たりもない独楽がゆるゆると回るように男が短く長く周期を変化させ動く。周りを囲んでいた者たちが鬼を除いて打ち倒されていた。

「幸のなみゆいという動きは片足にはちょうどいいな」

男は呟くと鬼の真正面に立つ、そして、少し見上げた。

「君も知ってはいるだろう、人と鬼は一切関わらず、古い人と鬼の約定だ。鬼が人の世界に入れば、そして、人が鬼の世界に入れば、たとえ殺されても、それぞれ、それを受け入れるってことだ。私は優しい人間だからさ、君を鬼の国に送り返してやってもいいんだけど、君はどうしてもらいたい」

「誇り高い鬼族が蛮人の提案を受け入れると思うか、愚か者め」

「原種の鬼の教育に毒されているねえ。でもさ、私的にはその方が面倒くさくなくていいかな」

男は笑みを浮かべ頷いた。

鬼が目をすいっと細める、鬼を包む空気がざわりと唸った。

男がにいっと、口元に笑みを浮かべた。

「やる気になったようだね。でも、ちょっと遅かった。君の首から下、既に固まってしまって動かないからさ。試しに右の人差し指、動かしてみな、固まっているだろう」

鬼が指を動かそうとした、しかし、動かない、鉛で固められたように動かない。

「何をした」

鬼が呻いた。

男が笑う。

「ただの暗示だよ。君がその暗示に掛かったのは、君の本心が私を恐れたからだ。試しに私を殴



ろうとしてごらん」

鬼が歯を食いしばり、腕を上げようとする、しかし、全く手が上がらない。

「こんな人間に俺は恐れているというのか、否、そんなはずはない」

顔を歪ませ、鬼は腕を上げようとする。

「素直じゃないねえ」

男は楽しそうに笑うと、鬼を見上げる。

「鬼の身分は、角で決まるらしいね。角が一本か、それとも二本か。長いか短い、太いかそれとも細いか。でも、本人の資質と角の因果関係はないはずだよ。だってさ、角って、ただのカルシウムだよ」

男はすっと手を伸ばすと、根本から角を切り取り鬼に見せた。

「な、断面が灰色がかった白色だろう」

鬼が息を詰まらせた。

「お、俺の、俺の角が」

鬼が狼狽し情けない声を出した。

「ああ、ごめん、ごめん、切っちゃった、糊で付くかなあ」

男は角を鬼の足下に置いた。

「頑張って暗示をほどけよ、難しいけれど。角が何処かに行ってしまううちにね」

男は用事が済んだと、女に振り返った。

「彼らは気絶しているだけだからね、早く逃げなさい」

「あ、あの」

女が立ち上がろうとするのだが、立てずにいた。

男は自在を砂浜に突き刺すと、左手を差し出す。女がその手に捕まると、男がふわっと引き上げた。すとんと女が立ち上がった。

「ま、腰が抜けても仕方がないね。さ、お嬢さん、手を離してくれ、私は杖がないと歩けないんだ」

慌てて女は手を放すと、ごめんなさいと頭を下げた。

男は頷くと、杖を持つ。

「どうする、送っていこうか」

男が尋ねた。女が男の身なりを見て、慌てて首を横に振った。

「だ、大丈夫です」

「そうかい、なら、急いで帰りなさい」

「本当にありがとうございました」

ふと、思い出したように男が言った。

「多分、君の太股辺りに青い印が付いていると思う。それは、鬼を呼ぶ印だ。帰ったら、すぐにお風呂で洗い落としなさい。石鹸とたわしで、はれ上がるほど強く擦ること。そうすれば取れるよ」

男は軽く手を振ると背を向け歩きだした。

男が去っていく。女は恐る恐る辺りを見回す。倒れて白目を剥いた男たち、直立不動の鬼。女は自分の選択が間違っていたと後悔した。

「あ、あの」

女が叫んだ。そして泳ぐように、男に向かって駆けだした。男は振り返ると、荒く息をして、女が男のシャツの裾をしっかりと握っていた。

「ごめんなさい。あの、あの、送ってください。夜道が恐くて一人で歩けないんです」

「そうかい、なら、送って行こう」

男があっさりと答える、砂浜から道路に出た。

「横を歩いてくれるかい。君が後ろだと、どっち行けばいいかわからないからさ」

慌てて、女は男の横を歩いた。

「遠いのかい」

「十分くらい歩けば」

「なら、歩いていくかな」

男は答えると女に合わせて歩く。既に深夜になっていた、灯りは電信柱からの街灯くらいのものであった。

途中、住宅街に入り、何度か角を曲がる。

「君。何か喋った方がいいかい」

「え」

「お喋りしながらの方が君の不安が紛れるかと思ったんだ」

「ありがとうございます」

女が小さく頷いた。

「うーん、しかし、難しいな。失恋直後の女性に語りかけるのは。何を言っても傷つけてしまいそうだ」

女がぐすぐすったように小さく笑った。女は自分でも驚いた。男の一言で、なんだか、背中が軽くなったような、ほっとした気分になったのだ。

「私には娘がたくさんいてね、上は多分君くらいの歳だ。そうだ、三女が喫茶店をやっていてね、料理がびっくりするくらい美味しい」

「何がお得意なんですか」

不思議と、女は恐怖を忘れ、男に尋ねた。

「なんでも、美味しい。でも、特に言うなら、中華かな。一品が万とするような高級店にも負けていない、と思うんだ、もっとも、そんな高級店には行ったことないけどさ」

女が幸せそうに笑った。

「次女は怒りっぽい。いつも、怒鳴られているよ。本当は優しい娘なんだけどなあ、そうだ、酒が過ぎるんだな。アル中にならなければいいんだけどね。君は飲むのかい」

「私は、少しだけ」

「そうか。でも、ほどほどにするんだよ。酒を飲み過ぎると脳が萎縮して小さくなってしまおうぞ。ま、これは、偏見かな」

女はもしも自分に父親がいたなら、こんなふうに歩きながら喋っているのかなと思う。就職することで、やっと叔父叔母夫婦から逃げ出すことができたのに、こんな。

「ん、どうした」

「え」

「いや、急に表情が暗くなったからさ」

「いいえ、大丈夫です」

「そうかい。どんなに落ち込んでいても、真ん中の娘ならね、私は簡単に元気にさせることができるんだけどなあ」

「どうするんですか」

「簡単なんだ。一緒にラーメン食うだろ、それから、ケーキを食べに行く。そうすれば、どんな深刻な顔をしていても元気になってくれるんだ」

女は顔をほころばせた。とても楽しそうな家族だと思う。

「家族っていいですね」

「そうだね、私が善人の振りができるのも、家族がいればこそだ」

男が呟くように言葉を繋いだ。

「ここが私の住んでいるアパートです」

男が見上げた。蓄四十年はゆうにたつだろう、二階建ての古びたアパートだ。

「あの、お茶でも」

女が思いきって言う。

「ありがたいけれど、娘に叱られてしまうよ、良識が足りないってね」

男は笑うと軽く手を振る。

「一つだけ、仕事を済ませてから消えるよ」

男は女の後ろを眺める。

「おーい、そこの二人。出てきてくれるかな」

女が驚いて振り返った。

ゆらりと闇が蠢いた。

男が女を背に隠す。

軍服を身につけた鬼と着物を纏った老人が現れた。

鬼が呟く。

「何者だ、お前」

低く這うような声だ。

「鬼神化計画で鬼になった自衛隊さんだね。私のことはお隣りさんに訊いてくれ」

すいと男が老人に笑いかけた。

老人が一步退いた。

「何故、あんたが」

「私の娘と同じ歳頃の女の子が、目の前で鬼に食われようとしているんだよ。知らない振りにはできないよ」

男は気楽に言うと、老人を睨んだ。

「以前、術師達が集まって政府に多くの術を授けた。自衛隊や警察に術を教え、鬼と対抗しようとしたわけだ、馬鹿としかいいようがないな。政府の方針が変わった途端、このざまだよ」

「あの時は」

老人が言い淀んだ。

「師匠や先人に申し訳ないかぎりだよ。あんたの師匠も草場の陰で泣いているんじゃないかな」

男はそういうと、ふっと笑みを浮かべた。

「ま、いいさ。それより、君。召還術師だろう、強そうなの一つくれないかな。それで見逃すよ」

老人が鬼を見上げた。

「わしは帰らせてもらうよ」

「俺の指揮から抜けるというのか、抜けるというなら、いま、ここで貴様を殺すぞ」

「無を相手に」

老人が言いかけた瞬間、鬼が銃を抜いた。男が鬼を頭から垂直に自在で切り落とす。鬼の体が左右真二つに割れて地面に落ちた。

「容赦ないな」

老人が後ずさりながら呟いた。

「これも人助け」

いたずらな子供のように男が笑みを浮かべた。

老人は驚くほどの機敏さで、二階アパートの屋根へと飛んだ。

老人が朗々と呪を唱える。男の前の風景が揺れた。

「神獣白虎をやる。これで見逃してくれ」

老人の姿が消えた。

男の目の前には虎を遙かに大きくした白い虎が唸りを上げていた。男の体を一口で飲み込めるほどだ。

男が睨む、白虎が口を閉ざし、前足を折る、そして、地面に腹ばいになってしまった。尾もしまい込んでしまっている。男の目に怯えたのだ。

「私の言葉がわかるかい、わかるなら頷いてくれ」

白虎が男の言葉通りに頷いた。男は杖を離し、手を伸ばすと、白虎の額に触れる。ぬえの体が感電したように震えた。

「術を伝えた。君の声帯は人の言葉を話すのに適していないけれど、口元の空気を君の意志で振動させることが出来るようになったはずだ。何か喋ってみてごらん」

男の言葉に呆然と女は男と白虎を見つめていた。

鬼が真っ二つになって、おじいさんが空を飛んで、巨大なライオン、ううん、白い虎が出てきて、なんだか、ファンタジーの世界になってしまった……。

女は転がっている杖を拾い上げて、男に差し出した。

「ありがとう」

男は笑みを浮かべると、杖を受け取った。

「あの、いったい、何がどうしたのか、わからなくて」

「なんていうかな。君が思う以上に世界は面白く出来ているってことだ。それより、このアパートは動物禁止かい」

「あの、えっと。一階の大家さんが猫を飼っているんで、猫だけは良くて」

「そうか、なら、子猫になってもらうかな」

男は白虎に向き直った。

「化身も出来るようになったはずだ。そうだな、子猫、虎猫になってくれ」

白虎が見る間に小さくなり、あどけない子猫に変わってしまった。

「これで良いのか」

女の足下で子猫が喋る。

「上等だよ」

男は笑いながら言うと、女に子猫を抱き上げるように促した。

恐る恐る女が両手を差し出す。ちょこんと子猫が女の両手に載った。

「可愛い、とっても可愛いです」

女は子猫を抱きしめると、いままでのことを忘れたかのように微笑んだ。

「名前を付けてくれるかな」

「名前。名前ですか」

女はしばらく考えていたが、やがて決心したのか、じっと子猫を見つめた。

「竜之介、竜之介にします」

「なるほど、虎に竜か、面白い名前だ。なら、竜之介、この娘を守ってくれ」

「承知した」

子猫が喋る。女が微笑んだ。不思議と友達ができたように嬉しかったのだ。

男が改めた表情になり、女に言った。

「この国のお偉方は鬼に屈した。そして、生け贄を差し出すことを鬼に約束した、君はその生け贄に選ばれたんだよ」

「私が」

「そう。君は両親がいないようだね。それにあまり人付き合いも得意ではなさそう。生け贄には若い女を差し出さなきゃならないのだけれど、親や友人が多いと拉致だなんだとうるさい。だから、国は君を選んだんだ。この竜之介

はそんな勢力から君を守ってくれるだろう。あとは任せて、私は行くことにするよ」

「あの、あの、私」

女は胸がいっぱいになって言葉を続けることが出来なかった。

「また、おじさんに会いたいです」

「私が生きていれば、会うこともあるかもしれないけれど。多分、私の娘達は相当にお節介だ

から、娘達の方が来るかもしれないな」

男が少し笑って首を傾げた。ずっと、男の姿が消えた。

「え、おじさん。おじさん」

女が叫んだ。

「無は行ってしまったよ」

子猫が女の肩で呟いた。

「希代の魔術師 無。妙な縁が出来た。いずれまた、会うこともあるだろう。ところで、お前の名前は」

「私、えみです。笑うと書きます」

落胆した声で女が答えた。

子猫が、女の頬をそっと舐める。

「泣くな、笑。俺が守ってやる。生きていれば、また、会えるさ」

不意にトラックのエンジン音が響いた。

宅配に使われるような、確かに運送の看板が書かれている。

男が三人、飛び出してきた。その内、二人が素早く鬼の死体を梱包し、荷台に放り込む。

「あんた、何者だ」

運転していた男が笑を睨みつけた。

「あ、あの、私は」

笑が言い淀んだ。

すいっと、竜之介は笑の肩から離れ、男達の目の前に浮かんだ。

「文句があるなら言え。その後でじっくり食ってやる」

子猫が呟く。

鬼を回収した男が駆け寄ってきた。

「やはり、先生の斬り口だ。脳天からばっさり見事な斬り口だ」

子猫が最初の一人を見つめた。

「無を先生と呼ぶとは、お前達、ホンケの精鋭とかほざいている奴らだな」

「ほざくはよけいだ、俺たちは鬼の死体回収に来た。それと、目撃者の口封じにな」

緊張を押さえ込み答える。

「この娘を助けたのは無だ。そして、俺にこの娘を護るように命じた」

男達三人が向き合い、小声で話す、しかし、すぐに子猫に向き直った。

「先生に会うことがあれば伝えてくれ。二人を助け出してくれてありがとうと言っていたとな。

もっとも、白澤様はかんかんだが」

三人は素早くきびすを返すと、車に乗り込む、急発進、車が通りへと消えていった。

笑が大きく息を吐いた。

「竜之介君、緊張したよ。息が出来なかった」

子猫が振り向いた。

「あの程度の奴らなら一飲みだ」

空を歩くようにして子猫は笑の肩に戻ると言った。

「風呂だ。鬼の印を消せ」

「うん、そうする」

アパートの二階へと駆けだした。

遥の花 藍の天蓋 蛇足 御茶会

「竜之介君、今晚、何にする」

笑が肩に載った子猫の竜之介に言った。

笑の耳元で竜之介の声が聞こえた。

「笑の喰いたいものを選べばいい、俺は居候だ、気にするな」

珍しく仕事を早く終え、笑は竜之介を肩に載せたまま、近所のスーパーマーケットへ来たのだ。竜之介は一日、笑の肩に載り、ぬいぐるみの振りをしている。もちろん、それによって笑は肩に載せた人形と会話する痛い女になってしまったと回りから見られているが、笑もそれは承知だ。ただ、笑は恥ずかしいという気持ちよりも、家族が出来た、そんな嬉しさや充実感の方が大きく、今の状況を積極的に楽しんでいるのだ。

不意に竜之介がくんと鼻を鳴らした。

「なんだ、香ばしい良い匂いがするぞ」

「たこ焼きだよ。さっき、スーパーの入り口に屋台のたこ焼き屋さんが来てたよ。竜之介君、たこ焼き食べる」

「あ。うう、いや、俺は居候だ、気にするな」

あきらかに竜之介は笑の肩で、そわそわと落ち着きをなくしていた。よぼど、たこ焼きが気になるらしい。

笑はスーパーマーケットの入り口まで戻ると、屋台のたこ焼き屋の前に並んだ。

スーパーに来たときは、まだ、屋台は準備中だったのに、たこ焼きの匂いにつられてだろうか、既に十人ほどの客が待っていた。やがて、笑の番になる。

「竜之介君。何個食べる」

「いや、俺は」

竜之介が微かに俯いた。

笑は笑顔を浮かべると屋台の店員に言った。

「十個入り、一つ、お願いします」

店員は笑の仕草に戸惑うことなく、笑の言葉を繰り返して、焼きたてのたこ焼きを経木の舟に詰めていく、手慣れた手つきだ。

「はい、お待たせ。五百円です」

「ありがとう」

笑は支払いを済ませると、近くにあったベンチに座った。

「竜之介君、一つだけ、つまみ食いしよう」

笑はたこ焼きを袋から取り出すと、長めの楊枝だ、一つ差した。竜之介はふわりと笑の膝に載



ると、両手を拝むようにして楊枝を短く持ち、たこ焼きを自分の口元に持ってくる。後ろ足を伸ばしてぺたんと座る格好はティベアのようなのだ。

器用に息を吹きかけ、少し冷ましてかぶっと一口食べる。

幸せこの上ない笑顔を竜之介が浮かべた。

「ありがとう、笑。このたこ焼きは今まで喰った中で一番美味しい」

笑も嬉しそうに笑うと、視線を上げ、屋台を見る。

「黒猫亭って書いてあるよ。また、見つけたら買おうね」

買い物を終え、笑は自宅へと急ぐ。あの時から、三週間は経つだろう、それでも恐怖は消えない、竜之介がいるからこそ、明るく振る舞えるのだ。

「止まれ、笑」

竜之介が囁いた。

住宅街、夕刻、西日が眩しくて、その顔までは、はっきりしない、数十メートル先、二つの人影を見る。

家が立ち並ぶこの通りには他に人影もない。

「笑。どうやら俺の初仕事だ」

ふわりと竜之介は浮かび上がると白虎の姿に戻り、笑の前に出る。

どうしてだろう、笑は二つの影の内の一つが笑ったような気がした。

影の一つが片膝に立ち、細長い棒を掲げる、一際眩しく光りだす、もう一つの影が刀を引き抜いたのだ。

「来るぞ」

竜之介の声が終わる瞬間、赤色の煌めきが走った。瞬間だ、一気に数十メートルの距離が縮まった。竜之介が刀を持つ手元に噛みつこうとした瞬間、ふわりと刃が後ろに下がる、影が右手を弛ませ、刃が竜之介とすれ違う、

「逃げろ、笑」

竜之介が叫んだ途端、黒が笑と刃の間、刃を防ぐように、自在を突き立てた。刃が自在の寸前で停止した。

「なよ姉さんは十回に一回は勢いを消し切れません」

にと黒が笑った。

「今のは、九回の口じゃ」

ふんと、なよは笑うと、やってきた智里の持つ鞆に刀を納めた。

なよは振り返ると啞然としている白虎を見て、にやりと笑った。

「さすが、神の名を持つ霊獣 白虎様じゃ。ただの虎と違って、間抜け面がよく出ておる、顔の神経と筋肉が発達しておるのじゃな」

「お前。かぐやのなよ竹の姫だな」

竜之介が唸った。

「ほお、それなりに格のある白虎じゃな、わしの名を知るとは」

「鬼の女王が何故こんなところにいる」

「なるほど、ここ数年のことは知らぬようじゃな。わしの民は角のある鬼に全滅された、一人を除いてな。で、ま、色々あり、今は無の娘 次女のなよじゃ。よろしくな」

黒も隣に尻餅をついたままの笑に笑いかけた。

「無の四女 幸の娘 黒です。よろしく」

「こ、こちらこそ」

笑は戸惑いながらも答えた。黒は笑みを浮かべ頷いた。

「やっと、昨晚、お父さんが戻って来てくれまして、旅の話にお二人のこともあって、どんな風が遠くから覗いてみようということだったのですが。驚かしてごめんなさい」

「黒、謝るとは何事じゃ。まるで、わしが悪いことをしたようではないか」

にかっつと、なよは笑うと手を上にのばして、竜之介の鼻を叩いた。

「可愛い子猫に戻れ。道が狭うてかなわん」

竜之介はむすっとした顔をしたが、素直に子猫の姿に戻ると、笑の肩に戻る。

「笑。あっちの女はかぐやのなよ竹の姫。見た目は若い女だが、竹取り物語、あれにでてくる姫のなれの果て。千年以上生きている女だ。油断するな」

「なんと、口の悪い白虎様じゃ」

なよは嬉しくてたまらないと、竜之介の頭を軽くはたくと、すいっと笑の両目を見つめた。

「名はなんという」

なよの言葉に笑が緊張する。

「笑うと書いて、笑といいます」

笑の心臓が高鳴った。

「ほお、若いのに随分苦勞をしてきたようじゃのう。苦勞をしても、心は腐っておらぬようじゃ。わしはなよという。わしの後ろ、刀を持つは娘の智里。お前の横におるのが黒じゃ。よろしくな」

なよの言葉にうまく返事ができず、ただただ、笑は頷いた。

なよは視線を竜之介に向けると笑いかけた。

「ここ数年を知らぬとは、お前、どこぞの召還術士に取り込まれておったようじゃな。さても、まあ、よい姫様に巡り会えたものじゃのう」

不意になよは龍之介の首を摘み上げた。

「さて、わしはこいつに剣術の基礎を教える。お前たちは晩飯の用意じゃ、もう一度、スーパーに行ってこい」

智里が驚いて言った。

「剣術をですか、手を使うことが出来ないのに」

「こいつは父さんから術を受けておる。声を発すると同時に、念で剣を振るうことができれば、

面白い使い手になるぞ」

なよはにかっと笑うと、ふっとその姿を消した。

「あの、展開についていくことができません」

呆然と成り行きを目の当たりにしていた笑が戸惑うように言った、

「えっと」

黒が困ったように答えた。

「笑さんちにお邪魔して、みんなで晩御飯を食べましょう、準備ができるまでの間、龍之介さんをお預かりして鍛えてあげるということになります」

黒が大きく溜息をついた。

智里が笑に頭を下げた。

「ごめんなさい、ああいう母なもので」

三人、両手いっぱい荷物を持ち、笑のアパートに戻ってきた。

笑が右手の荷物を降ろし、鍵を開ける。

「どうぞ、お入りください。ちらかってますけど」

黒は少し驚いた。

八畳一間、入り口の右手には備え付けの小さな炊事道具に古びたコンロ。左手奥にはスーツケースと大きめの鞆、両方とも半開きになっていて、ああと黒が気づいた。鞆を棚と、もの入れ代わりに使っているんだ。その向こう、寝袋と毛布が一枚。毛布は小さく折り畳んである、多分、これは竜之介のベッド代わりだろう。他には何も無い。

黒は単純にそれがかっこいいと思う。

「私も好印象です」

智里は呟くと、笑のあとについて部屋に入る。黒も従った。

白虎に戻った竜之介の目前には、なよに刃を向けた刀がまるで構えるように浮かんでいた。

「少々、刀がぶれておるな。しかし、最初でここまで出できればよしとするかな」

なよは笑うと、半歩踏み込む。竜之介の間合いに入った。

「わしを半分にするつもりで来い」

竜之介は混乱していた。かぐやのなよ竹の姫、優れた政治家であり文人であると聞いていた。とんでもない、全力で刀で斬りつけるのを、鼻歌まじりに避けながら、気づけば俺の鼻先で笑っている。どう動いているんだ。

「少しは学習したようじゃな。無鉄砲に飛び込んでこんというのは」

すいとなよは白虎に寄ると、その鼻を軽くはたいた。

「ま、刀を自在に使うための道筋くらいは見えた筈じゃ、お姫様を護りたければ修練せよ」

竜之介は猫の姿に戻ると、なよを見上げて言った。

「かぐやのなよ竹の姫。術を教えてくれてありがとう」

「どうしましてと言いたいところじゃが、気色悪いのう、いきなり、素直になりおって」

「俺は笑を護れなかった、あれが敵なら笑は殺されていた」

「笑がまっ二つになっておったな」

なよは竜之介の首筋を掴むと持ち上げた。

「そろそろ、晩飯の用意も出来たじゃろ。缶ビールを買って帰るぞ」

なよが子供のようににかっと笑った。

スーツケースを横にして、小さなホットプレートを載せる。

「大丈夫、安定しています」

智里がホットプレートを少し揺らして確認する。

「たこ焼きがもんじゃ焼きになっちゃった」

黒が嬉しそうに笑った。

「お店のものなのに、ごめんなさい」

笑が黒に謝った。

店を早めに切り上げたので、これはなよのわがままだが、結局、用意していたたこ焼きの材料が残ってしまったのだ。

「なよ姉さんには逆らえないし。笑さん、もんじゃ焼きも美味しいと思うよ、チーズやたらこ、美味しいの、作るよ」

笑が嬉しそうに笑顔を浮かべた。

ふと、黒が笑の瞳をずっと見つめた。

「白虎と人、それでも家族なんだね」

笑がしっかりと頷いた。

「うちと一緒だ」

黒が振り返って、智里に笑いかけた。

ドアが開いた、なよが帰ってきたのだ、両手にスーパーの袋、中身はすべて缶ビールだ。

竜之介も飛び込んでくると、笑の膝に載った。

「お帰り、竜之介君」

ほっとしたように笑が笑った。

「なんじゃ、もんじゃ焼きか。がきのおやつではないか。ま、ビールには合うがな」

なよはどさっと缶ビールの袋を床に置き、ホットプレートの前に陣取った。

「笑は飲めるのか」

「え、あ、あの。少しは」

「なら、相手せい。黒は高校生、智里は外では飲みよらん」

くったくなく、なよは笑うと、袋から無造作に缶ビールを取り出し、笑に手渡した。

「なんもない部屋じゃのう。貧乏なのか、笑は」

うっと黒が息を詰ませた。黒と智里、関心はあったが、常識として尋ねるべきでないと思って

いたことをなよがあっさり言葉にしたのだ。

「えっと、あの。お金持ちじゃないですけど、普通に働いていて、生活にはとくに問題はなくて、あまり、あの、荷物は軽い方がいいかなあって思うだけで」

戸惑う笑になよが笑った。

「なるほど、変わった奴じゃ。父さんが自分の姿を笑に見せたわけじゃ」

「それは」

黒がもんじゃを焼きながら、なよに尋ねた。

「ん、父さんが幸に追い出されて家出していた間じゃ、生け贄とされた十人の女を助けたが、己の姿を見せたのは笑だけじゃ。言い換えれば、姿を見せてもかまわん、まったくの部外者ではないということじゃろう」

なよの言葉に笑は唇を噛みしめ俯いた。そして、戸惑うように言う。

「私は四季合わせ方、です」

「なるほど、ちと、よく顔を見せい」

なよは身を乗り出すと、笑の顔をじっと見つめた。

「四季合わせ方は三家ある、三つの草、一の草は伊倉家、二の草は仁木家、三の草は佐倉家。佐倉笑、これがお前の名じゃろう。およそ、二百年前の佐倉家の女主によく似ておる」

なよは姿勢を戻すと、小さなコテでさっそくもんじゃ焼きを食べ始めた。

「うん、うまいぞ、黒。さ、皆も食え」

啞然と黒はなよを見つめた。

「ええっ、なよ姉さん。四季合わせ方って何なんですか。話が途中ですよ」

「四季は季節の四季にあらず、色を四季と呼び換えたもの。ま、染め物屋さんじゃ」

笑が顔を上げた。

「呪術師の服や持ち物を染めることで、その方の能力を一割ほどですが、上げるのが仕事です」  
笑がほっと吐息を漏らした。

「黒よ。わしの十二単を覚えておろう。随分と、あの当時はお前等三姉妹を虐めてやったからのう」

「覚えてる、いまはなよ姉さんが優しい人だってわかっているけど、その時は、本当に怖かった」

黒が微笑んだ。

「ふん、まあな。あの十二単も佐倉の家が染めたものじゃ。それぞれの色に染める草木土、それらが持つ、人の能力を増幅させる成分を、肌や呼気から少しずつ吸収するわけじゃ。もっとも、わしは色に頼らずとも強いがな」

なよはぐびぐびと缶ビールをあおると、大きく息を吐き、幸せ満点の顔で笑った。

「ビールの最初の一杯は至玉じゃのう」

一気に半分になった缶ビールを下に置くと、なよは笑に言った。

「佐倉家は三草の中でも、厳格に一子相伝を繰り返してきた家柄じゃ。今でも三の草でなければならんという術師も多かろう、そんな名家のお嬢様が一人で貧乏暮らしとはどういうことじゃな

」

「あの、ビール。いいでしょうか」

笑の言葉になよは笑うと頷いた。笑が先ほどの缶ビールを開け、ごくっと一口飲み干した。

「中学生の頃です。父と母が術師たちの争いに巻き込まれて殺されました。私は父の弟である叔父夫婦に引き取られました、三草の秘伝書と一緒に」

「それは知らなかったな、その頃、わしの国はほぼ完全に鎖国をしておったからのう」

なよは微かに目を伏せた。惨殺されていった国民のことを思い浮かべたのだろう。

「叔父夫婦は佐倉の後継者になりたいと願っていたのですが、一子相伝です。叔父夫婦は後継者になりたい、私はこんな世界から逃げ出したい、ですから学校を卒業して、一年前、就職とともに、佐倉家から離れ、秘伝書も叔父に手渡したのですよ」

笑は両手で缶ビールを握りしめた。

「なるほど、詰めが甘かったということか。ん、智里、黒、食わんか。わしが全部食うてしまおうぞ」

「詰めが甘いとは」

思い切って智里がなよに尋ねた。

「秘伝書が二冊あるということじゃ。一つは叔父の手元に。もう一つは笑の頭の中ということじゃな。秘伝書の中身を知っておるものがおるといのは、気色の悪いものじゃろうて。一子相伝が前提である、それ自体が価値となる、そこに秘伝書の中身を熟知している者が他におるなど、とんでもないことじゃろうな」

なよは、存外、笑が生け贄に選ばれたことと、叔父夫婦とには関係があるかもしれんと思う。

「大丈夫だ、俺がどんな奴からも笑を護ってやる」

いきなり竜之介は声を上げると、笑の肩に飛び乗った。

「俺はもっと強くなる」

ぎろっとなよが竜之介を睨んだ。

「馬鹿者」

なよが怒鳴った。

「竜之介、お前の目的は笑を護ることじゃ、強くなることではない」

竜之介は一瞬怯んだが、吠えたてた。

「強くならなきゃ、笑を護れない」

いつの間にか、黒がもんじゃ焼きをすべて食べていた。

「ごめんなさい、食べちゃった。まだまだ、焼くから、笑さんも智里さんも竜之介君も食べてね」

ついと、黒がもんじゃ焼きの具をホットプレートに流し込んだ。

「ほんにお前は幸に似てきたのう」

黒がくすぐったそうに笑った。

「竜之介君」

黒が小エビや天かすを入れながら言う。

「つまりはね、竜之介君が強くなることと笑さんを護るっていうのは、ある時点までは同じ方向を向いているんだけど、途中からね、方向がずれてしまって、竜之介君が強くなることと笑さんを護ることが同じじゃなくなってしまうって、なよ姉さんは言いたいんだけど、なよ姉さんは人を怒らせるのが好きだから、相手が怒るような順番で喋るんだよ、そういうの、慣れてね」  
なよが呆れたように言った。

「黒よ。お前はわしの母親か、つまらんことを」

えへへと黒は笑うと言葉を続けた。

「さっき、なよ姉さんが襲って来たとき、竜之介君は笑さんを連れて素早く逃げるのが正解だったと思う。戦いになれば笑さんは足手まといになる、それに機先も取られているから、余程、相手が弱くないと勝てないよ。だから、相手が強いかわからないときは、相手が強いと仮定して動かなきゃだめ。とすれば、逃げるのが最適解になる。ましてやね、この部屋はお父さんの結界が施されている、敵は入れないよ。つまりはこの部屋にまでさえね、逃げ込めば、じっくりとどうすればいいのか、お茶を飲みながら考えることもできるんだよ」

竜之介は瞬きもせず黒を見つめていた。

「わかった、俺の考えが足りなかったよ。ありがとう、黒先生」

感動した面もちで竜之介が言った。

「どういたしまして。でも、今のは、なよ姉さんが言おうとしたことを、普通の順番で喋っただけなんだけどね」

「黒先生ときたか。竜之介、わしにも先生と言うて、敬い讃えよ」

なよの言葉に竜之介はぶいっと顔を背け、笑の膝の上に戻り丸くなってしまった。

竜之介の振る舞いになよは声を出して大笑いした。

なよは食べ終えたあと、笑の寝袋を枕代わりに一眠りと寝転がった。

黒は気にすることもなく、後かたづけを続けた。

智里は困ったように横目でなよを覗いたが、すまなさそうに笑に頭を下げる、笑が慌てて顔を横に振った。

「暢気な姫様だな」

竜之介が悪態をつく。

「あの、もう少ししたら帰りますから」

智里が戸惑うように言った。

片づけを終えて、黒も笑の隣に座る。

「この部屋の結界はね、中にいる人が楽しかったり幸せだと思えるほど強くなる、随分、しっかりとしたよ」

黒が気楽そうに笑った。

「笑さんが極端に荷物を少なくしているのは、いつでも逃げ出せるようにするためでしょう、

多分、叔父さんたちから」

驚いて笑が黒を見つめた。

「あまり、人の事情に深入りするのはいくつかかもしれないけれどね」

黒の言葉に智里が言った。

「もしも、そうなら、相談してください。きっと、その方がいいです」

「あ、あの」

笑が言葉に詰まった。

「口伝じゃろう」

なよが目を開けて、いたずらげに笑った。

なよは寝転がったまま、肘を枕に笑を見上げた。

「二百年前、わしの十二単を佐倉に作らせたときじゃ。納品の時にな、工程に関わったすべての職人を呼んだ。そしてな、一人一人、どんな作業をしたかを問うて、ねぎらった後に、少し多めの金子を与えてやった」

「なよ姉さんがそんな良いことを」

「なんじゃ、黒。その物言いは。ま、もつとも、それは十二単に妙な仕掛けを作っておらんか、一人一人心を読んでいったわけじゃが、その時、佐倉家の口伝を知った。一割どころではない、二倍も三倍も、着た人間の能力を上げてしまう色の組み合わせがあるということをや」

なよは起きあがると、あぐらをかいた。

「詳しくはしらん。じゃが、能力を倍増する代償に極端に寿命が減ると聞いておる」

「子供が一週間で老人になります」

強く拳を握った。

「口伝としたのは、万が一にも流出をさせてはならないということ、そして、偶然に作ってしまわないようにと警戒したからです」

笑が唇をかんだ。

なよは笑を瞬きせずに見つめた。

「お前の叔父は、口伝を知ればそれを作るような奴なのか」

なよの言葉に躊躇いながらも笑は頷いた。なよは微かに吐息を漏らした。

「一の草が、世界と戦うこの国のため、軍の依頼に基づき、色を組んだ。それによって、兵士の能力は上がったが、連合国軍にはかなわなかった。ほんの七十年ほど昔の戦争話じゃ。しかし、人を鬼に変え、その上で口伝による色を組めば兵士の能力は極端に上がるじゃろう。それが笑の叔父殿の考えであろうな」

「叔父は必ず理由を付けて、色を組みます」

笑の言葉に、なよは竜之介を睨み、にやっと笑う。

「よう、竜之介。びびったか、このお姫様を手に入れようとするのは、叔父だけではなさそうじゃぞ。この国の上の方は三竦み状態、米派、鬼派、独立派がしのぎを削っておる。どれもがお前のお姫様を狙ってくるぞ」

まっすぐ、竜之介がなよを見つめ返した。



「笑を護ることになったのは、無の命令だ。俺は無が恐ろしくて、その命に従った。愛想いい顔の奥から吹き出してくる気配がたまらなく恐ろしかった。だけど、俺が笑を護り続けようと思うのは、単純に笑が気に入ったからだ」

ふふんとなよがにやついた。

「まさか、のろけ話を聞くとはのう」

なよは、最後に残った缶ビールを袋から取り出すと、ぐびぐびと飲み干した。

「笑。冷蔵庫を買え、ビールが冷えておらんわい」

とんと空き缶を置くと、改まった様子でなよが竜之介に言った。

「もしも、お前が役立たずの能なしで、笑を奪われたのなら、わしは口伝が公になるよりはと、笑をまっふたつに切り捨てるかもしれん。そのこと、しっかりと覚えておけよ」

ゆっくりと立ち上がると、なよは首を回し、大きく深呼吸をした。

「さて、帰るぞ」

なよが、あっさりとドアを開け、外に出た。

「お騒がせしました、それでは」

智里が、刀と、ビールの空き缶でいっぱいになった袋を抱えて後を追った。

黒も荷物を風呂敷に纏めると、ぐいっと背負う。

「笑さん、また、遊びに来てもいい」

不意に笑は正座をすると、黒の目を見つめた。

「あの、黒さん」

笑の言葉に、立ち上がりかけた黒は風呂敷を背負ったまま座った。

「黒さん。私は姫様ではありません、護られるだけでは辛いです」

「それで」

黒が呟いた。

「私も戦います」

笑がじっと黒の目を見据えて言った。

「黒さん、私に戦い方を教えてください」

「どうして、辛い。護られて」

「それは」

笑が言いよどんだ。

黒はそっと笑みを浮かべると言った。

「護られるだけでは、竜之介君に対して自分が卑怯だと、そう思うならそれは間違いだし、それでも、卑怯だと言うのなら、卑怯でいいと思う。戦い方を教えるということは、武術や呪術を教わるということ、ときにね、その戦いは関係のないたくさんの人を巻き込むことがある、自分自身だって危険になる。笑さんはわかっているんじゃないかな、だって、お父さんやお母さんが殺されたのでしょ」

黒が言葉を重ねた。

「ぶつかり合うだけが戦い方じゃないし、なにより、笑さんは自分自身を護ることが、記憶を守

ることが大切なんだと思う。だから、笑さんを危険にすることになるから、戦い方を教えることはできないよ」

黒は笑の手をぎゅっと握った。

「危ないと思ったら逃げる。いまのやり方が正解だと思う。でも、逃げるのに疲れたら、うちにおいで。なよ姉さんはあんなだけど、長女の幸乃姉さんはしっかりしているし、三女のあさぎ姉さんはとっても可愛いんだ」

「あんなで悪かったのう」

ぎゅっと、なよが黒の頬をつねった。

「痛ったたっ」

「遅いと戻って来たら、なにやら、偉そうなことを言うておるわい。こら、笑」

黒が笑みを浮かべたまま、頬をさすった。

「はいっ」

笑が飛び上がるように返事をした。

「お前、物事の是非をしっかりと睨んで考えろ。感情でうろうろするでないわい。それと、黒」

「はい」

「お前は笑が足手まといにならぬよう、危険の避け方、逃げ足の早さを教えろ。それくらいなら良いじゃろう」

「うん、そうする」

黒が頷いた。

「笑さん、竜之介君、それじゃね。明日、また」

ぱたんとドアが閉まる。

大きく一息ついて、笑が言った。

「いっばい、びっくりしたねえ、竜之介君」